
第三巻

十年[illegible][illegible][illegible]版

[illegible]葉全集

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

尾崎紅葉著

紅葉全集

十千萬堂藏版



明治二十七年の紅葉山人

紅葉全集 卷之參

目次

目次（二）

目次終



三人妻

前編

(一) 錢の富士

あるやうで無いもの金錢とて、天下の人寐言にまで言うて欲しからざるはなし、信に此金錢の獲難きことの不思議は、鐵を吸ふには奇妙、磁石といふ神通力あるに、是は又何したものと、金時計買ふ人の後に過難に立てる納豆賣の獨語尤也。此物羨みの男とて、母の胎内を苞入にて滾出し、臍の緒に絲を牽きしにもあらざるべく、二十四五の頃

には随分百兩包の顏も見て、其重寶なる味をも知りけらし。羨まるゝ男とて身内に金脈のあるにはあらず、由來を聞けば孰か額の汗の滴れて、粒々金色の御光を放つにあらざるべき。

失ひ易しと思ふ方の金錢は、皆獲難しと念ふ人の手に落ちて、あるやうで無いものとは謂ひながら、在る所には又腐るほど在るもの哉、今此日本に葛城餘五郎といふ名を知らざるものなし。これの持てる資産を、盡く一錢銅貨に換へて聯ぬる時は、恐るべし日本國を五卷半捲きて、其餘れる分を積重ねて見れば、富士山の高さの六層倍、と要らざる事を統計家の傳へ侍る。

これが一人の寶なり。惟へば裏借屋の奥に家内五人暮し、夕方になれば文久四つ殘る日を、一年中の安樂日として、朝は芋の尾を粥に啜り、午餉は大方拔にして、晩が南京米の雜炊といへる輩の、天から授けられたる配當を、優勝劣敗の理にやられて、かゝる人の弗箱に吸取られ、旨く

した男は神か國王かの如く振舞ふに、下根弱肉の大勢動物館の山犬ほども食うた例無くて世を送るなりけり。

萬國何方にも無慾の人といふは無ければ、金錢の置場に當惑して、竹箒に懸け、箕に入れて、之を大道に捨つるもの丶あるべきやうはなきに、何處いかなる所に餘五郎はさほどの蔓を見出して儲けたるぞ、手を三つ鳴せば忽然として千圓札の降來る奇術を得たるものならむ、と餘りの訝しさに素生を糺せば、加州金澤在談義所といふ村に、鳴るは瀧の、水、日は照れども絕えず陰のごとく微き土百姓の次男に生れけるが、天性の利發土なぶりを憂き事に思ひ、十七の年國元を逐電して江戸にさまよひ、一二年は便る方なさに乞食の眞似もして、それからの出世の小口、湯屋の木拾に成りて、人の中なる溝鼠、之もおもしろからず。頓て蕎麥屋の擔夫に入込みて、暫く働きける中に、始めて眼孔の木眼ならぬ人に見出されぬ。それは大原富五郎とて流聲の鑛山師なり。

餘五郎其時二十四なりしが、機敏鬼神の再生、と大富も舌を卷きて手足の如く頼めば、餘五郎も此奴骨ありと服して勤めける程に、立身衆に越えて、一年の間に世智賢きものばかり聚めたる二三十人の上席にすわり、大原組の一番々頭餘五郎の下に樣の字を附けられ、會ふものゝ頭は先方から下りぬ。其中には四五年前には、附くな／＼と袂を振りし旦那樣もあるべし。

餘五郎二十八の年、大富一生に唯一度の見込違ひより、見事に身代を叩き、借財忽ち山のごとく、之に心挫けて勇しき了簡の失せけるを、芥子の膽と餘五郎心に可頼しからず、言を盡して勵せども肯かず。此蹉跌病の源となりて、間も無く大富は亡くなりけり。

其後は餘五郎鑛山に限らず、どかりと儲かるほどの事には、先鞭に首を入れて逸す事なかりしに、折々の些細の損は、一度の大儲に埋合せて、次第に仕出しける上、明治維新の擾亂に紛れ、爲たい三昧の旨い事して、

一網に五六萬の利益は、其折わづか十五兩で買置きたる地面の、泰平になりてから暴に二千圓になりけるなど、さる類の多かりき。

明治の世となりて萬事に歐羅巴を寫す氣運に伴れ、舶來の儲口潮のごとく、滔々と寄せ來るを此時と、世間は成らぬ事に念へる三千里の荒海を押渡り、日本にては一錢に十個するほどのものを、珍しがる毛唐人に五弗十弗に賣りて、又其國の下らぬ物を買集め、持還りて都人の心を動かし、之にても亦算盤の外の利益、唯奪つたも同じ樣なる手易さに、金錢が金錢を招ぶとは此事なり。

それより類異れる商社を四つまで立てゝ、股肱の才物に預け、其外拔目なく八方に手を擴げて、四天王に麾を取らせ、自家は風流無慾の顏して、都外の閑靜なる處に、華族かと人にいはるゝ居宅を構へ、其四邊の地面は、目の及ぶ限り我垣の内にして、庭に追剝の出でしとも噂されけるなり。

利の事は一切手代委せにして、我は有金を我が一代に費ふべき工夫に屈托してゐる事と誰も想ひけるに、此身代になりても更に滿足する事なく、箸の上下にも錢儲に肝膽を碎き、之はと思ふ計畫浮べば、酒盃を投捨てゝ馬車を急がせ、腹心の手代に計を含め、唯二三日の内に、人間一匹二代は懷手しても樂に暮しのなるほどの商ひすれば、如何樣尤と、世間は餘五郎が大抵の贅澤に驚かず、東京間近の名所々々には葛城が別宅の瓦屋根を見ざる事なし。

ある夜の醉紛れに、泉水の月を觀めて、此景色の好さ、我は未だ須磨の秋といふものを知らず、人の話に詐なくば、いつぞは見たいものといへば、御相伴に畏りたる男、此御庭先より鐵道を布き、風呂場、料理場、お寢間、お座敷附の汽車を造らせ、お浴衣のまゝづいと御出は如何。餘人は知らず御前の力なれば、譯も無い事といひしは、追從なれども其ほどの金力は確にある身分にて、其もをかしからぬにあらぬど、今といふ

ても今の間には合ひ難し。早い所は須磨の寫眞を買はせ、此月の前にて見たらば、興は薄かるべきも亦變りて巧い分別ではあるまいかと笑ひぬ。かの男聞きて、あの心懸にては此身代當分は傾き難しと陰言いひしとぞ。其昔蕎麥屋の擔夫せし折は、容貌何處か狸のごとく、人は狸餘と言囃して、此行末を思ひ懸くるものは無かりしが、今は二頭立の馬車を軋らせ、獵虎の皮の膝懸、白鶴の羽織の敷物に、悠然として薫らす葉巻の灰の、風に飛ぶ一片が何錢といふ身にならば、狸のやうなる御顏も可笑氣無くなりて、顋髯、八字髭、尚又縮れたる頭髮までが威儀の飾となりて、那は葛城といはるれば、知らぬ人も畏しがりて、いかさま尋常ならぬ面魂と皆見送りぬ。同車は束髮の白襟紋服の女なり。年の頃四十約なるが、瘦乾びたる容貌の中に、剛どしたる處と凄じき氣色のあるは、柳の大木の秋に遇ひて、葉を振ひたらむ風情なり。而も下司なる處ありて、奥樣の胴に遣手の首などすげかへたらば、かくやと想はれぬ。此女麻子とて

餘五郎の妻なり。おぼろ氣に昔を知れるものゝ語るを聞きしに、湯島天神の境内に、其頃名代なりし矢場女のよし。

今は燒消して灸の痕のみなるが、始は左の腕に蜘蛛の肉繡ありて、蜘蛛のお重と異名とりし手練ものゝ、網にかゝる男は羽翼縛になりて血を吸はれざるはなかりけり。今の葛城大盡、その頃の狸の餘五郎、尻切半纏に馬のやうなる臑を露して、逢はで戻ればと通ひけるに、嚙みさしの小楊枝も吐懸けまじき素寒貧に先方から熱くなりて、行くたびごとに小使を拈り、上に引張るものから下帶までも仕送りぬ。

漂母の一飯立身の種となりて、今も餘五郎に捨てられず、奥樣と崇められて協はざる望も無く、千兩役者の三四人も内に呼びて、地聲で世事いはるゝやうになりては、世の中もをかしからずと、悟りすまして浮きたる事を愼み、無法の華美を好まず、人に昔を知られぬやうに、夫の名を潰さぬやうにと殊勝の志を起して、何處までも生れからの奥樣に振舞ひ、

萬般を大樣にして、情を深く下を愍めば、誰もころりとやられて、此奧樣なくては葛城の家は闇夜に月、光る目玉も怕がられず、出入の男女生神のごとく敬ひ奉るなりけり。

（二）天邊の樂

衣食住は人の心を苦めて、此中一つの不足も煩ひの種となりて、三者具足の願ばかりに、大方の不性者も否々ながら手足を動かし、少し勉なるは身を粉に碎くぞかし。頓て此三者の足れるといふにあらでも、纔に餘裕のつく頃よりは、又外の慾出でゝ、骨休といふ事を念出し、無理なる工面も云て折々は命の洗濯。世の男心の天邊の樂、女色の外にあらざるごとし。連添ふ女天邊の苦勞も、亦我男の浮氣なるべし。

熟々惟るに、建國の初には民尙武の氣に富み、刀槍を野邊の白茅ほどに思ひ做し、生首を見ること西瓜のごとく、女までが人の血汐を唇に塗りて化粧せしほどのあらくれたる國も、數百年の間に驚くべく進化して、髯ある奴が白粉傅けて妾に氣を揉み、華車なる事の穿鑿を第一にして、千萬の遊戲に精を竭し、骨を休め氣を養ふ事のみを考へ、今世界に開化

せるといふ國々の有樣を見るに、どうやら大きなる玩具箱のごとし。その代りには太古より數百段貴くなりて、勤むる所は乾度勤めて、錢儲もおろかならず、おのれの分は立てゝの後の酒落なれば、之を嗤ふものはあらざれど、可成は此性根にて祖先建國の始末をおもひ、黒木の柱、木葉衣、泉に飲み、獸を屠りて、神の則に順ふの無爲を忘れざらば、一段と好かるべきに、さうは行かぬ理のありてや、萬國何方も開化の國の贅澤、言語に盡し難く、我邦の人々曾て夢にも見ざる事多し。

一人の身の上も一國に異らず。壯年刻苦の善根より、美果纍々と實りて、衣食住に事缺かず、裏には土藏二十戸前、日本橋から眺めたやうな景色、他の物と見てさへ胸の清くほど快き氣持なるを、悉皆貴下の物と耳端に囁く聲して、之ばかりにても十分なるに、まだ外に鑛山幾箇、地面何百箇所、繁昌なる商社を數持ちて、招かざるに來る金利ばかりが月々何萬圓。出來も出來たる長者の心には、おのづから乞食の昔忘れて、分相應

の榮曜は我からせずとも世間が許さず。爲て見るほど面白くなりて、金でなるほどの歡樂の數々、一順仕盡して見れば、兎角自由の利くは無理なる處ありて、興の薄きが本意無く、金力ではどうもならぬやうな遊はあるまいか、と鬚を撚りて、麻子の横顏に新橋の酒の氣を吹懸くれば、打笑ひて、何事も苦き中のおもしろさ。湯島に在し頃、正月三日の雪の夜に、此方は地廻六七人に打擊かれ、命も危かりし中へ蜘蛛のお重が飛込み、私の大事の男をと泰平樂をならべし時、見物の中より狸の助六と聲懸けられしやうな面白き事、此後またとはあるまじといへば、餘五郎額を撫でゝ、過去りし昔はいふな／＼と寢床へ遁入りぬ。

山瀨といふ手代は聞ゆる粹者、之に思はくを話せば、當時柳橋に柳屋の才藏といふものあり。姿色萬人に秀でゝ心慧く、諸藝に堪能にして、應待の上手此上無し。年齡は二十四の由なれども、打見は二十歳を越えず。之を雛段の上に置くならば、誰も（者）とは思ふまじき上品さ。水を向

けて口を開かせなば、いやはや辯舌滔々として前なる河も逆に流るべし。此女を聘んでのおもしろさ、肉も骨も有つたものにあらず、大佛樣も溶けて流れて柳屋の貨の泉、晝夜を舍てぬ座敷のせはしさ。美人品切れの當節柄、客はいづれも餓鬼のごとく、目色を變へて影隨ひ、我手に入れむと、金錢を吝まず、名を惜まず、顏を潰し、命を捨てゝ懸れど、木像の普賢菩薩か、繪にかける小野の小町よりも、口頭の甘いだけ面憎く言ふ事聞かず。何の某といふ待合の女將軍も麾を投げて、此子帶留の金具に珊瑚の瓢簞を附けたる間は、とても轉ばじと酒落たりな。

まことに浮氣ならぬ深間ありて、さる會社の卑き所を勤むる、菊住何とやらいふ男に情立て、古風の誓文お前一人の中と聞き及ぶ。人の噂に違はず、此女の手剛さ、我等も見事に彈かれたる一人なれど、委細を申さば色男の名折、概畧はかくの通り。左にも右にも一鞍御試みあるべし。先は金轡にては行かぬ代物、近頃御徒然の折から變りたる御慰みと語る。

葛城大盡勇み立ちて、これより直に案內せよと急かれ、用ある身なれど何も主命と是非なく、荒氣の大將一戰に仕損じて、同席に恥掻くも辛し、手際を見るもをかしかるべし、と後に尽きて立出づれば、白拍子などへ通はむに馬車は勿體臭くて風流ならず、綱引で中有を飛すと爲べし。

(二) 沈香亭

萬端山瀨が取計らひ、大盡は白檀の床柱に靠れて、大樣に頤髯搔撫づる指の金剛石、座敷の前後十二疊を照らすを、番の婢が噪ぎて一同に注進すれば、板前の傳吉まで飛出して後學の爲、と隙見する人數隣座敷の襖の陰に山を成し、偸めども足音人聲の聞ゆるを、何かあるかと大盡に咎められて、御前に侍へる婢挨拶に困り、唯今彼方に參りし役者の歸る所と紛らせば、其方も見て來いとの仰せになほ困りぬ。

一時間ばかり待てども才藏は見えず。長いの、と大盡酒の旨うなさゝうな顏色。今一度見て參れの御意なき內、婢は心得て、他のお座敷を貰うて參るやう申遣はしましたれば、少々暇取れまする理、おつつけ見えませうほどに、暫く御辛抱遊ばしまし。なほ迎を遣はしましよ、と銚子を持ちて立ちけるが、頓て還りて、やうやう只今見えました。

强い勿體の待たせた罰には、座にも着かせず一嘲弄して、其舌戰の模樣を御前の御肴に、と山瀬は酒に舌を濕して待つ所へ、才藏晝間からの無理酒に傷みて、歩行ふら〳〵と次第なき態度。海棠したゝか雨を帶びて、春色今を闌なる姿、沈香亭の圖を歌麿が書いたらばこんなものなるべし。袖を牽かれて拂ひし人のありとは心着かず、二人を一樣に初對面の時誼して、風俗一日に位あるべき御方と、三指懸りに挨拶するを、山瀬は心に可笑く、才藏が面を擧ぐるを候ひ、其方は見忘れんも、此方は恨ありて忘られぬ御方へと盃させば、これは〳〵忘れては濟まざる御方を、此通りの體裁、何事も酒の上と御堪忍遊ばさるべしを發端に座敷浮出して、馴染無き大盡も頗る與に入りて、てんと堪らず、良十二時近くなれども歸るとは御意遊ばされず、折々目顏にての合圖、山瀬は確に其事と合點はしたれど、迚も成らぬ談と知れば、左右なくは打つて出です。打つて出づれば取つて投げらるゝは目に見えても、賴まれた因果には否もいへ

す。さらぬ氣色して冗談口を吐きてありけるが、折を見合せ下座敷へ呼出せば、山瀨樣雛樣への御傳言か。柳橋中に知らぬものなき戀中を、罪深くも隱立して、薄闇い處へ我を招込までも、天下晴れてかう〳〵と立派に傳言を頼んだがようござんす、とはや一義を言出させぬ仕掛なり。山瀨もさるもの、こんな古手には少しも騷がず。山瀨といふ男自分の戀に人を頼むは大嫌ひ。さればいつぞやも其ゆゑにこそ振られたれ。座敷にござるは此方の主人といへば、其で承知の理の葛城餘五郎。格別冗い事をいはずとも、此方に用とは知れきつた譯、と半分聞きて其だけはと早立ちかゝる、引留めて、下に居やれと、何處かの三味線を合方にして染々口說けば、立聞く女もあらば其が第一靡くべき上手に、才藏も持餘して、逋るゝ路なく、申すは家暮なれど、男には一切肌觸れぬ心願ありてと、爲やう事なさに秘したき事を匂はすれば、其も知らぬにあらねど、心からの浮氣にあらぬ、勤めの餘義なさに其人も定めてゆるさるべし。

今まで轉ばぬを看板に賣出したる名の、唯一夜にて折れむことを口惜く思はゞ、其回復のなるほどの事は、乾虔山瀬が命に懸けてもすべし、と第一金第二金第三金第四金の奥の手で行けど、喉も鳴らさず。冥加に餘る御志は嬉しけれど、私に彼人あるを御存じなれば猶の事、貴下にも覺のある御身にて、他の戀ならば壞しても苦しからぬやうなお言は、近頃粹にも似合はぬお心意氣。一言唯といへば今の間に德の行く話、私とて慾を知らぬではなけれど、其に背中向けて思ふ人に心中立てるが、ちと當世に向かぬかは知らねど、張とやら意氣地とやら、那樣眞似して何になると、若い了簡を嗤うて下さんすな。對手は流聲の葛城樣、紅襟の慾氣少い子達でも、此方から强賣する氣になるほどのお方を、醉興らしう振るといふも、申す通りの譯なれば、何卒お心に障られず、御前よしなに貴下から、と酒を醒ましての言譯に、此上はとて鷄を殺るやうな手暴もならず、請賃無しで澤山聞され、用も足りずに此まゝ手を退く器量の

惡さ、と山瀬は苦笑して立上りぬ。
取り殘されたる葛城大盡婢の酌に寂しき小飲して、相談の暇取るは事の難かしきか、但は聞ゆる悍強を山瀬が乘鎮めに懸れる故か、と然までは退屈もせず、半分は樂みにして待ちけるに、裏階子より足音して山瀬はぬつと入來り、案の如くといふ冒頭に力落して、不成かと顏を差寄せれば、とても〱と首を掉りて、不肖の力には及ばず。此次には自身に御出馬ありて、一攻攻めて御覽あるべし。今宵は兎も角も此儘御歸りと勸むれば、大盡梓弓の張つめたる弦斷れて、くるりと撚れて復りたるやうに味に氣が拔けながら未練殘りて、才藏はいかゞせし。唯今參りまするといへば、然かと落着拂ひて、更に御腰は動かず、今一目御覽じたき風情なり。
山瀬は羽織の紐を結び懸け、はや御歸あるべし。此處でまた酒にしては、此方も照れゝば女も照れ、殊の外場合の宜しからぬものなり。女の急に、

參らぬも、其邊を計らうての事なれば、此處はいざ〳〵御立と急かれて、大盡いよ〳〵本意なく、さればとて一騎殘りても功名の成難きを見極め、しぶ〳〵歸支度する所へ、素知らぬ顏して才藏出來り、小取廻しに大盡の後より外套着せ懸け、帽子手袋を持ちて、離れがたなきやうに跡追ひまはし、近日に是非、今夜は飲過にて失禮のみ、と今方振つた顏もせぬ挨拶。愛嬌灑るゝばかりの目元を大盡屹と視て、近日口說に來るぞ、と戯れの中に執念あるやうな言いへば、彈器仕掛の胴懸して屹度お待ち申しまする、と之は眞實の中に噓あるやうな口上を、憎しと山瀨が側から、胴懸よりは此方の心が彈器仕掛、好具合に出來た藝妓めと肩をたゝけば、才藏も一言なくて、とんと山瀨を式臺へ突落しぬ。

茶屋の女房始め七八人の婢ども見送りに居並びたるが、此體に噪くを木の頭、御客樣車に乘移れば、綱引提灯を振立てゝ、がら〳〵と引出す後に、御機嫌ようの聲々も鎭りて、門の燈火の幽なるを、車小橋を渡る時。

大盡廻に眺め遣りて、思なほ殘る顏に川風吹きて、醉心涼しくなるまゝ交睫むと思ひける間に、我門近き道端の小石に車搖れて目は覺めけり。後を見れば續く車無し、如何せしと車夫に問へば、明朝用事あれば此所にて御別れ申すと申上げよとて、途中より出られましたと言ふ。

（四）火上の氷

大盡臥戸に入る頃酒醒際にて、水二三盃に胸濤き、腫氣は洗ふごとく減れば、才藏の姿心に浮びて此儘に捨難く、幾度の反側に思案しかへて、手に入るゝ工夫せしに、屈めし足を思はず踏伸し、扨あるわ。之を山瀨に聞かせなば、それぞ上策と雀躍すべき。とかく韓信は彼の事、此謀を授けて働かさば、万に一つも仕損じはあるまじ、と獨り悅に入りて、安心からやう〳〵腫氣さし、枕頭に喚ぶ聲に驚されて、何ぞと半眼に四邊を眗せば、窓掛の紅色に日影麗々と、軒なる音呼の羽搏手に取る如く、何時と大欠すれば、姒畏りて、十一時でござりまする。唯今山瀨様が見えられました。お風呂が沸きましたれば直にお召し遊ばしまし。

さてと一風呂浴びて表座敷に出れば、山瀨は睡さうにもなき顏色にて、今朝二件許用足して參りたりとは、有難き心懸に對して、言ふも可愧し

き次第なれど、昨夜は寝ずに妙計を案じたり。就いては又一働頼まねばならぬといへば、山瀬は呵々と高笑して、二度有る事は三度有る例。また失敗でござるかな。昨夜は随分死物狂になりて力めたる苦戰の模樣、御笑草までに御聽き下されたし。なるほど其を肴に一杯と、妼を呼びて用意申付くれば、大盡日頃の大短氣、何事も速くなうては御不機嫌に懲りたる家内が技倆の凄さ、左慈が松江の鱸魚を鉢から釣上げたほどゝ、始めての客は誰も驚入る酒肴の支度、珍膳五十人前も咄嗟の中に調ふは此家一の名物なりとや。美しき妼二人膳を運びて、一人は御酌に控へ、一人は通ひを勤めぬ。用あらば呼ぶべしと大盡人拂ひして、扨山瀬どうであつた。

聽きて興あるやう嘘も少々は加味して、下座敷の薄闇に才子佳人を說くの條を逐一辯ずれば、大盡膝の進むを覺えず。そんな事と知りせば立聽してくれたものをと切に無念がりて、其につけても才藏といふ女は謂は

うやうなき怪物哉。我從來千百度も女に出會うて、嘗て不覺を取りしといふ事無し。これ我威光か、金力か知らねど、兎に角目指せし女の自由にならざるは、主ある女か、人の娘か、是は然もあるべき理なれども、賣物ならば男嫌ひであれ、振自慢であれ、葛城餘五郎と名乘りかけてぐつと睨めば、ばたり〳〵と將棊倒しにして、花柳の街を行くこと、鐵の草鞋穿きて草原を驅廻るが如し。いかな粹でも、通でも、濡事師でも、我と聞く時は、黄金無垢の業平が來たわ、堪らぬ、と帶引緊めて逝ぐるほどの男なるに、小敵と侮りて此度の不覺。これ一代の名折なり。

されども此強がりは表向にて、內實あれほど心に稱へる女は、今に一人もあらず。一昨年京都めぐりせしに、彼地はいかさま美婦多く、いづれを見ても絹灑の肌、鴨河上水の寒晒、玉の如しとは蓋し彼等をいふなるべし。その藝子といふ奴、美の美天人の妹分かと想ふほどのにても、金次第にて踏んでも蹴ても可い事に定りたれば、餘り正札過ぎては、勸工

場の買物同然にて趣無く、かくては天人でも菩薩でも心意氣が知れて、移香もどうやら錢の臭がするやうにて、嬉しからぬと念ひし所爲か、どれ見ても護讀製の女人形、腹を押せばぴいと啼くだけの器械にて、色が白うて目鼻立ばらりとして、姿と聲が優しいだけの沙汰にて、外に何もあるにあらず。

其とは事異りて江戸の女の好さ。しげ〳〵顏を視れば、面道具の揃うて、繪に畫きたしと思ふはなく、目の好きは鼻ひしやげ、眉が好ければ口狀しをらしからず。干潟の髮際あれば亂杭の齒行あり。第一色の黑さは我見ても氣の毒なるに、肌理の疎きことは柚の皮を張りたるごとく、鼻翼の邊面皰の跡の脂に埋れて黑きなど、故障あらざる顏とてはなけれど、出額は出額にて可愛く、垂眼は垂眼なりに愛嬌ありて、萬更捨てたもののあらざるは、心意氣に名物の旨い處があればなり。

かの才藏といふ奴、氣合に一節ありて容顏も凡ならず。見るほどの男の

思ひ惱むべき骨格。柳橋の藝者でござる、と日本中引廻しても鼻の出らぬ女なり。かほどの珍品を名も知れぬ痩男の玩弄に爲せ置かむは、言効無さの限りといふべし。かくいふ餘五郎が土藏には、世界に又と無き寶の數は在りながら、此品一箇缺けて寝覺の心懸りとなりては、不自由せぬ爲の此富も所爲無き事なり、と箸を逆手に膳を拍ちて、執心面色に見はれたり。

山瀬もこれほどの奮み方に驚きて、さほどの御志ならば、高の知れたる猫一匹如何にともなるべし。まづ其妙計を御聞かせあれと言へば、大盡聲を潛め、頗る反間苦肉の謀なるが、足下の馴妓に雛助と云ふものあるよし、と眞顔に出られて山瀬は頭を掻き、馴妓といふにはあらねど、ちとばかり。些ばかりにては計大いに妙ならず。遠慮無くいはれよ。其女に大事を頼みて氣遣あらざるほどの御中か、と念をおされて挨拶に當惑せしが、まづ此方の考量にては、いかなる大事か知らねども、大方の事

は引請け申すべきかと答ふれば、なほ種々に念を推して、山瀬が言葉の中に、聢と深き中に相違なき處を見屆けたる上にて、譎計の段々を語り出せば、一々聞きてなるほどの頷き、或は首尾好く參るか知らねど、格別新手にもあらざれば、十全の上策とは申し難し。相手は金氣無き奴なれば、此方を片附けむに何の事はなかるべきも、本尊の女が那の代物ゆゑ、と頻に首を捻れど、大盡は遒れ爲濟まし顔にて、才藏いかなる情知といへども、一方には男に退かれ、一方には金と義理とに逼られて、厚き氷も火上に解くべし。古來より此手にて行かぬ女無しと、獨斷にして勇立ち、手函の中より軍用金攫出して、當坐の入費、之持つて早く〳〵、大盡の計どうやら妙ならず思へど、いかに成行くか我も面白さに、然らばと請込みて直樣車を飛し、柳橋なる雛助方に來て見れば、昨夜の徹夜、酒と疲勞に虐まれ、朝湯に入りければ身は綿のごとくなりて、小座敷に火燵して正體なく寢入りたるを、旦那樣の御入來と母親の驅込みて、抱

起せども現にて又手枕に仆るゝを、持餘して此始末といへば、構ふな構ふなと山瀬は其座敷に入りて、やう／＼目を覺まさすれば、夢ではないか、珍しやと、嬉々手水つかひに行きしが、頓て着更へて入來り、火燵に蹲る男の帽子を引取り、半座を分けたるやうに寄添ひて、此頃の遠々しさを怨じかくれば、まづ此方から言ひたき事あり、と葛城が才藏に執心の次第を語りて、此念は何ありとも霽らさではおかじとの決心にて、此方結ぶの神に賴まれたるが、爰に一つの詭計ありて、其には其方を味方に附けたさに來れる男なり。

詭計といふは究竟菊住との中を裂きて、金と義理との板挿みにせむとの殺生なるが、かの中を裂かむは容易のことにあらざれど、一人腕ある妓を見立て、萬事を明して宜しく之に含め、やいの／＼で菊住へ持懸け、それから大熱々に上せて見せて、嘲楊枝で酷い顏して暮せるほど男に仕送らせる寸方。此金は葛城の手許より仕拂ふべし。

菊仕今も才藏の情には預れど、あの氣性の女なれば金には緣無く、不自由勝は知れたる事なり。其虛に直入り、陽に實意を見せて金錢で隙なく裏打せば、男心の動き易く、鼻に着きたる才藏を捨てゝ、新出來の重寶なるに乘換ふる氣になるは目に見えたり。其時才藏の事なれば、心に男の不實を恨むとも、女々敷事はよも爲じ。面當の意地を張りて、男めに草履取らせて此仕返せむ事を念ふべし。所を大盡横鎗に仕留めむ手管、甘く行けばお慰みなり。

扨此狂言の立お山には、菊仕の色になる奴なるが、相應の心當りは無いかと問はれて、雛助は進まぬ顏色。あるには誂向の女あれど、此狂言は殺生過ぎたれば、外に最少し手柔かなる思附のありさうなもの。いふは可笑けれど、何處の誰が貴方と何屋にて睦しさうに話して居たなど丶聞く時は、杰やくりと知りながら胸穩からず、顏見ると悔しくなるは惚れた中の情なるを、いかに御主人の願なればとて、其樣な酷たらしい事は

せぬものでござんす。別けて佛性のこの雛助、話を聞いたばかりでも癪が起る。今にも才藏樣に會うて此事を注進して、喜ぶ顏が見たいといへば、山瀨は冷笑ひ、言ふな〳〵。子まである身の山瀨を墮落して、我女房には罪とも殺生とも思はぬか。これしきの事が酷たらしうては、鱈汁も食へぬ理。隨分牛も豚も參る口から、志をらしい言を承はるものかな。其方も聞き齧りに、錢に驚きて、氣味の惡い聟が二百文ばかりと笑ひ草になる玉なり。一度や二度は人の男をも横取して、腕があるといはれし覺えの身に、これほどの事は朝飯前と見て取つての囑なり。首尾好くゆけば褒美の品でも現金でも望み次第。且は我の手柄にもなる事なれば、義理と思つてやつてくれ、と洒落らしからぬ樣子に女もやう〳〵納得して、肝心の立者に誂向とは誰と聞けば、此地に人の知れる升屋の小〆、菊住には疾からホの字、此女ならば身錢を切りても働くべし。

（五）心配筋

葛城大盡は何も知らぬ顔にて才藏を揚詰に、あつさりと飮みて可厭な默色もせず。山瀨に口說かせし事は一時の酒興と見せければ、かうした座敷の勤めよく、第一爲になる客筋と才藏も疎ならず過なせば、いよ〳〵御意に召して御側を離さず、願はざる品々まで纏頭の多さ、今晩はと十年來何萬人といふ客に會ひしに、これほどの旦那はなかりけり。但憂きことは、此座敷に囚はれの身は、菊住に逢瀨の儘ならず、二つ好き事は無きもの、と酒の中にも思出して、逢はむとならば何時でも首尾はなるべき自墮落の家業でありながら、苦界とは此處ぞ、と胸の有耶無耶は絕えざるに、一夜大盡話の中に、不圖熱海の湯治の事を言ひ出して、此頃の間を幸ひに四五日遊びに、明日から行て見る氣は無いかとあるに、湯治場は轉ばぬ藝者の作れられ所、うるさき事を言はれて可厭なる思し

て、御機嫌を損ふが極と見えてあれど、並ならぬ贔屓の旦那とおもへば、これほどの樂さは無いやうに勇みて、是非にお供を願へば、大盡至極の滿足。翌朝供二人に才藏を加へ、四人の同勢新橋の停車場に入れば、見る物無さに倦飽める待合の人々、これはと目の覺めたる心地して、瞬きもせで眺め入りけるとよ。

此湯治二週間餘、其間に計畧圖に中りて、小〆はもとが菊住に岡惚の下地あれば、頼まれてする事ながら頼みても爲てみたき役目、と先此方から熱くなりて謂ふにいはれぬ仕向に、菊住も才藏は才藏として小〆は小〆。彼も飽いたではなけれど此も捨て難く、傳聞く昔唐琴屋に丹次郎といふものありけり、と頤を撫でゝ之をさへ悦びけるに、氣味惡きほど仕送らるゝ金員は、我月給の二倍と計算して見れば、どうやら女で食へる氣になり、此帶まで買うてくれた小〆を麁末にしては、冥利に竭きむことを畏れて大事がるほど、女は上の空になりて世間を構はぬ大浮れ。誰

るが面白しと菊住がどうのかうのと、座敷にて客が噂すれば、もう逢ひたくて耐らず、卒に腹痛み出して歸るなどの惡業高じて、今は家業も餘所に菊住との陰遊びにのみ念入り、あれほどの贅澤して、よくも兵糧の續く事を人の怪みけり。

小〆の分別には、一月にても二月にても才藏が彼の人の所有になるまでは、弗函に靠れたる氣の高を括りて、此方から思入れ夢中になりて男の心を蕩かし、才藏との中を遠ざくるほど手柄になる事と思へば、少時の間でも好いた男と好きな眞似して遊ぶだけが德、と度胸を据ゑ、浮氣するに金主ある事一世一代の法樂と、夜も晝もなくして思ふまゝに浮るゝ面白さ。かういふ事ならば明日が日死なうとも遺憾なし、と互ひに打込みて、どうもかうも成らぬ始末に、誰も手を着けかねて、沖の舟火事を見るやうに、あれよ〳〵と呆れて見物する人の噂となりて、今にも才藏の歸來らば、三日續きの新聞種、珍事持上るは定なれど、那の利口もの

の才藏なれば、思ひも寄らぬ手を出して二人は泡を噴くべし。女も男も餘りの義理知らず、不便なは何も知らぬ才藏、といづれも此戀を心に憎めり。

才藏と大中善の金太郎といふ女見るに見兼ねて、この概略を躙り書の文して熱海へ知らせければ、讀むに一々虚のごとく、飛んでも歸りたさの胸躍り、卒に母の病氣と申立てゝ、獨り先に立たむことを願へば、明日は倶にとあるに其夜は寐ずに明けて、一日がゝりの道中、身を搒らるゝほどの可悶さに、氣はいら〳〵と浮かぬ顏を、大盡横目に見遣りて、その事と心可笑しき外面を裝りて、あの達者なる母親の急病とは、いかさま頼み難きは老の身なり。隨分油斷なく看病せよ。二三日中には我も見舞に行かむ、と迷惑がる言をわざといへば、才藏は身を横に胸をおさへて、癪氣と物いはず。やう〳〵夜に入りて新橋に着きたる時の嬉しさ。大盡を振放して心も空に車を走らせ、内へは寄らず金太郎の門に入れば、

今お歸りか。待兼ねた〳〵、と驅出づる金太郎は、座敷衣脫ぎかけて帶せぬ褄を摑み、足首に扱帶を懸けて引きずりながら、才藏の手を執つて奥の間に伴ひ、樣子は文にて知らせました通り、何ともかとも謂ふやうなき始末。腹が立つて〳〵と胸を摩れば、才藏は頭巾に亂れし髮の毛の頰にかゝるを拂ひて、夢やら何やら眞とは今に思はれぬ文の樣子。餘りの事に吃驚して氣が脫けたやうなといへば、噓も實も要らぬ、此處でくど〳〵話さうより確實な所を見せう、と支度するを何處へといへど、何も言はずにと獨合點して慌忙しく連出し、(磯馴)の奥に今夜もお定例の對坐、と聞くに胸轟き、足早に小路二つばかり過ぎて、地理屈竟なる裏町の新道に、九尺の千本格子、磨硝子の軒燈籠の御待合に入りて、客を待つものと帳場に挨拶して奥をと望めば、一間は塞りたりといふこそ例の穴、と其座敷を一間置きたる隣房を見立て、酒は餘所に耳引立てゝ樣子を窺へば、話聲幽かに物の音無く、忍びの首尾に紛れなき氣勢。誰と

も知るよしあらねば、那かと才藏の囁くを、金太郎は目授に應へて、前を庭なる障子を細目に啓くれば、此處と續の廊下を折廻したる行當りの軒に、數竿の竹に蔭になりて、徹闇き鐵燈籠の懸れるは手水場なり。出て來らばと目を放たで待ちけるに、繋絲織の羽織着たる男、此方に氣を置きつゝ野鼠々々と現はれて行くを透し見れば、帶から小袖まで我贈りしとは異れる風俗。これ皆小〆が仕着を悅びて、我見よがしに着飾れる菊住なり。滌ぎし手を拭ひ、空を仰ぎて、帶の間より取出でたる時計は、燈籠の火影に耀めく金側に、才藏も驚きて、小〆といふ女が然ほどの內證にてはあらざる理。さりとて菊住はあれほどの品を持つべき力はあらず。左に右小〆が旦那筋から奪取りたるを物したるなどにやあらん。今更飽かれた義理にはあるまじき我を棄てゝ、慾に目が眩れ、小〆に見換へたる腹の陋さ。見下げ果てた男め、と此から其面へ唾吐懸けたき心を鎮め、神妙にしてなほ窺へば、男と入替りに、何やら言捨てゝ出でた

るは、紛れも無き升屋の小〆なり。男よりは一倍醉うて亂したる態度。裾れほら〳〵と腰帶緩みて、あぶなき足元長襦袢を踏へがちに、椽の曲角なる段を辷りて、淺ましくも小氣味よき轉倒ざま。見るに可笑さを忍びて、いかにすらむと見てあれば、此物音に菊住の走出で丶抱き起すを、見る人のあらじとや、女は甘えて、行けぬゆゑ負ぶ〳〵と舌怠い聲を出せば、其をも畏りて背を向くれば、どさりと肥肉を載せられて、華車男は蛙のごとく潰れ、片手は柱に縋りつ丶、せり出しのやうに持上げ、ひよろ〳〵と歩めど風にも仆るべき腰状。腹も立つやら愛相も盡きるやら、此馬鹿もの、人に憊ちぬか、と障子をどさ〳〵才藏の打鳴せば、此音に驚きて、遁入らむと、慌て丶躓けば、椽も拔けむばかりに轟かして、澤庵壓に僵れてけり。

(六)　天の邪鬼

菊住の小〆に乘換へたるは慾に極れり。彼女と我とを較ぶるに數段の相違はあるものを。當時柳橋といへば藝者は才藏といふ人こそあれ、小〆といふものはあらじ。品の高下を一々いうて見ば、容色は凌雲閣の百美人に我は二番の女、藝にかけては憚りながら宇治の名取、これだけにても座敷は勤まるべき腕を持てるに、彼は淸元の地とはいへど、搔廻してお茶を濁し、得手は大方甚句なるべし。第一座持拙くして大客にうろつき、小勢に照れ、但空騷に騷ぐを藝にして其外を知らず。調子外れて、品格といふものなき、旅藝者の骨格と誰やらの穿たれき。とかういふにも及ばず、其位は客種を見て知るゝぞかし。

卑しき言分なれど、我は十年來嘗て土器色の紅裏に肌觸れし事無く、小紋の置直しを引張りしこと無く、新しく染むる時は薄色にして、後を濃

くして、二度の勤の襲ねを身に着けしこともあらず。此等は圓助應來の雪見藝者の苦し紛れの內證なり。些細の事なれど、雀の羽色は鶯に似るべくもあらず、鷹は穗を啄まざる理にして、彼等と一樣にはならぬ柳屋の才藏樣は、心から外貌まで自然と柳橋藝妓に出來たる正銘物。かゝる御方を色に持つこそ、男と生れたるものゝ此上無き冥加と三拜して、寐るにも此方へ足を向けず、我尊像を掛地にして、朝夕御酒に玉子酒、供物には鰻鱺の蒲燒を供へ、逢はぬ日も在ますがごとく事ふべきに、本戀といふ事を知らぬ男め、我を日本に幾人も散亂にある女か何ぞのやうに想ひ、鯛くひつけたる口に鰯の鮫の摘喰して旨がる天の邪鬼、冥利を知らぬ奴に才藏さまの難有味を知らせて遣るべし。腸櫓に手足附けたやうなものに未練を殘し、取るに足らざる伪藝者を對手にして、外に男でも無いやうに騷ぎ立つるは、大人氣無きのみか、恥辱の上塗。あれしきの男に棄てられ、あれしきの女に奪られたと念へば腹も立てど、牛は牛侶、

似合しき取組なり。あの男一匹戀に渇えたる乞食女に與れたと念はゞ、善く功徳したりと心清しく、更に遺恨も未練も殘らず。但悔しきは、藝者の中の藝者と人にいはるゝ才藏が鑑違ひして、あのやうなる無能漢に熱せて、よしなき情立て、滌槽の下の骨を見よと突放されしを、思ふほどにも無かりし女、と世間の胡笑にならむは、鉛の熱湯飲まさるゝより一倍の辛さ。其とても今となりて他を恨むべきにあらず、身の不束ゆゑと諦むる外はなけれど、衆に負ける嫌ひの氣性には、我爲るほどの事は皆是と念ふ意地に、假にも不束と我を制むる事の無念さ。今までの情を捨て、義理を缺き、我を癡にしたる菊住の返す〱も憎さは、骨が舍利になるまでも思ひ知らせでは措かじ。

と思ひ定めて、金太郎の手前焦慮を見せて肚を洞察されむは淺まし、と隱せど有繫苛立つを酒に紛らし、彼外にまだ餘所行の情夫が二個ある、と平氣の顔で洒落のめせば、金太郎は獨り齒痒がりて、あれは不斷の色

か知らねど、どうする了簡か、捨てゝ置いては顔が立つまじ。外の座敷に人の無きこそ幸ひなれ、二人して彼房へ飛込み、小〆の髻を取りて引まはし、泣顔を撲りつけて、詫證文の代りには、地黒を隠す厚化粧の頬に、こいつ助平と筆太に記し、三日が間其面にて座敷へ出させるやうに屹と談じ、男はこれから家へ伴還り、散々膏を搾りて一間へ押籠め、三日の間断食させてから、七日が間箱屋につかうて放してやりたし。畜生男めと切歯をするを、才藏は徐かに制して、畜生と思うたら腹の立つことはあるまじ。其樣な仂ない事して、いよ／＼衆に嗤はれな。外に思はくもあれば、何も知らぬ顔して胸を摩り、此場は温しく濟して、近い内になるほどゝ言はるゝ事して見せう。十郎の臺辭ならねど、じつと辛抱しやいのと立花屋の假聲。金大郎もこの暢氣に呆れて力を落し、いかなる仕返しの思はくか知らねど、餘りといへば張合なきお前の腑効なさ。長年兄弟同樣のお前の恥は私の恥。お前が構はぬとならば強つてとは言

はぬほどに、私には私だけの一存あれば、必ず構うて下さるな、と立たむとする袂を捉へ、顔を背けて涙を飲み、關係なき他人でさへ、それほどに思ふものを、虫の無きにもあらぬ我身が無念でなからうか。お前の腹の癒ゆるほどの仕返しは、屹として見せうほどに、此場は私に任せて、これから何處ぞへ行て一口、飲んだらば氣も霽れやう。

(七) 濡事師

才藏になほ心殘れるや測り難けれども、十が十まで菊住は手に入れたり、と小〆より雛助への報告を、山瀨が取次きて大盡まで言上すれば、妙くも爲たりとて、この褒美には寶石入の純金の指環を小〆へ遣はされ、此後こそ容易ならざる危所にして、才藏といふ强敵を敵手に持てば、聊かも油斷はなるべからず。必ず曠るまいぞの聲がゝりに、小〆は双手に鼻脂を引きて、(礒馴)の奥に才藏が此方の始終を見たりと知るほど、花が咲きかけたと勇み立ち、いつかは出會ふ所が曠の勝負、目に物見せうと心待ちに待ちかけて、先方の女に躁らせ、枝ある角を出させむには、菊住を片時も我側を離さゞるが何よりと、はや喧嘩買ふ氣になりて、此時を大事、と出所ある金錢に絲目を付けず、散るまゝに散らして、色と慾との二重繩に、男の體をぐる〳〵卷にすれば、才藏の歸りたりと聞くに、

菊住も素が飽きて棄てたる譯ならねば、逢ひたさも逢ひたし、かの待合にて見られし浮氣から、悋氣の口說もして見たさに、隙を候ひ脫出して、才藏の格子に聲も懸けたしとは思へど、小〆の切なる心にも絆され、且は常浸りに引着けられて、身は網中の魚とは嬉くもあり、心は二つ身は一つ、と屈托顏を小〆に咎められ、それほど才藏樣が戀しくば、三十分ばかり此體を貸して進ぜますれば、逢うて積る話して、私の惡口を多度いうてござんせ。さりとて一人手放して遣りはせぬ。此方の帶に私の扱帶を結着け、彼所の格子の外から持つて居て、攫はれぬやうに番をする。其でも可くば行てござんせ。さあ〳〵と帶際取つて小突かれて、手暴な事をしまいぞ、我一人の體ではないものを、と事古りたる言草は、柔かき手でとんと一つ撲かれたさの下地。色男に成りすまして、どうもならぬと女の膝を枕に、夕飯の酒の醉にうと〳〵となれば、小〆は枕を爲替へさせ、小搔卷打懸けて樣子を窺ふに、鼾の聲微かに聞えて搖れども覺

めず。此間に一風呂、と番は母親に頼みて横町の伊香保へ走る。

菊住はふと目覺めて四邊を見れば、次の間には下女が坐睡の鼾、母親は何地へ行きけむ見えざるに、小〆さへ在らざるは折好し。竊と起上りて衣類は其儘に、有合ふ袢引懸け、障子襖の開閉靜に、忍足して戸口まで出でたるに、我下駄の見えざれば、小〆の吾妻下駄を突懸け、格子を啓くる音に、奥より母親驅來れば、飛ぶがごとく遁れて才藏方へ闇を辿り行けば、前面より來る提灯に覺えの紋所、やう〳〵近くを火影に見れば、才藏が座敷への途なり。聲を懸けむとせしが、おのづから心怯れて息を呑めば、女は心着かで箱屋と談しつゝ行くに摩違ひながら、我見よがしに女の顔を見込めば、才藏も菊住よと屹と一目見しのみにて、其儘背後向けて行くを、箱屋が其と識りて耳語せし體なりしが、又とは振向きもせず、前のごとく談し行く。

菊住は惘然と後影を見送りて呆れたる口状。一目顔を見るならば、菊住

樣と飛着き、座敷は斷りて直さま啣へこまれの道行、と想ひの外とも其の又外とも、謂はうやうなき大不出來に、才藏にはあらざりしか、我は又菊住にてはあらざるか。才藏と菊住との中は、かういふ約束ではない理なるに、今の樣子は、小〆に心通はするを腹立つの餘り、一鐵の氣性より我を見限りたるか。それこそ一大事、こゝが思案と拱手して、四辻をぶら／＼と往きつ還りつ、なるほど一旦は腹も立つべき撮喰の浮氣は重々我に罪あれど、かゝる社會には幾多もあり内の事とて、粹は寛大に見て、さまでに何を念ふべき。一時の出來心にして、胸づくしの一つも捉れば、其にてさらりと事の濟むべきに、合點の行かぬ仕打をしたものかな。讀めたわ。才藏ほどの女なれば、自家を高くし、假令餘所外にどれほどの浮氣するとも、石と玉との差別はおのづから辨きて、遂には我に復ると見込み、わざと難面く爲かくる中に敵の心を捻返す、これぞ色道四十八手に在りと聞く、風折といふ奥の手よな。面白し／＼。

小〆は湯に入れども心急かれて、常は二人前の湯錢出して、留桶の湯の二十四五杯も用ひ、七道具を取擴げて、手足の指を二十分に琢く念入は今宵の事にあらず。烏の行水ほどにざつと濟まして、足袋穿く間も可悶く、歸途に迎への婢に出會へば、菊住樣が何方へかお出掛けになりました、と聞くよりはつ、と一散に驅出し、石に躓き小指を傷めて、其には換へられぬ大事と、趁跛引き〳〵還れば、母親はうろ〳〵娘を見るに面目なき顏色。小〆は眼色を變へて呼吸暴かに。菊住樣が出掛けたとは、誰が許して、と顫聲になりて睨めつくれば、母親は火鉢の側に窘みて、誰も許しはせねど、何時の間にやらと皆まで言はせず。其爲の番しながら又持病の坐睡か。あれほど堅く賴みしに、さりとは言効無い、と足摩して無念がる氣色の尋常ならず可恐さに、母親は茶棚の陰に首を差入れ心には仕妙法と念じても、なほ恐怖さの息まざるに、お宗旨の南無妙法蓮華經を念ずる間に、小〆は手拭包を紙門に打着け、簞笥より頭巾取出

し、恐入りたる母親を尻目にかけて、倉皇と出でゝ行く。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

先方が其手ならば、心得たり、色男の賢なるはこの柳流しに懸けてくれむ。これから才藏の留守へ押入り、例の細の上に陣取りて歸來を待ち、おやと謂はせる、こいつ妙、と獨り頷きつゝ下向になりて行けば、曲角の出遇がしらに、此方はと女の聲して袂を捉られぬ。

誰かと見れば、追手に來たる小〆なり。百年目！　飛んだ處で捕まりの一言なしと思へど、ぬけ〳〵として、どうしたといへば、どうしたとは此方からいふ詞。此寒さに夜行は體の害、近頃は惡い感冒が行るさうな、と男の手をむづと捉りて、四の五のいはせず引きずり行く一念の力の強さ。脈が止りて指が痺れる。免せ、放せ、と色男の苦しむを物の數ともせず、瘦腕を左の小腋に引抱き、遁げる氣色も見えたらば、嚙着きても放すまじき身構へに、男も詮無く牽れゆく狀の見苦しさ。夜を幸ひと頭

掻き〱、元來し道を返せば、遭ふ士女は皆立止りて見送るに閉口し、必ず遁げはせぬほどに此を放して、手を繫ぐにて堪忍してくれと只管懇めば、物はいはで脈所をぐつと緊められ、其も御聞屆は無いとの御意か、あゝ是非も無い。見たい人は御覽あれ。抑是は柳橋での濡事師、菊住といふは某事、と嘲し物になりて歸れば、出し抜きし母親は傲然として婢までが取合はぬ家内中の不興にまじ〱として、手近に睡れる猫の頭を撫づれば、畜生までが嫌ひて臺所へ立つ。

寒い〱と奥の間へ飛込めば、小〆は格子に鎖して入來り、火の無き火燵を婢に罵り、わざと菊住に背後向けて、續けのみの煙草四五服、壁に煙の墨畫の龍を吐懸けて物思はしき顏を、菊住は手枕に轉げて横から瞻れば、眞白き額顬の邊に癇癪筋うね〱と地圖の河の流るゝに、御心解かむと起きかへりて、一服くれぬかといへば、見向きもせで、持つたる煙管を菊住の目前へ投出しぬ。大人しく其を拾ひて、吸付けてもらひた

いと、小〆の胸前へ差付くれば、それは人違ひ、と後は鼻が物言ふフヽン。

（八）いつも端麗

總じて婦女は物に動じ易く、喜怒哀樂の情急にして、箸が轉けても笑へば、髮が毀れても泣くに出來て、男も及ばぬほど剛い所ある代りは、また弱い所ありて、其急所を行けば何の手も無く猿の一打、ころりと參ると常々菊住の廣言。それは才藏などゝ口說して經驗のあるより、女は誰もさういふものと侮りたるが憎し。此小〆は其手で行かぬ氣性もの、意地のある處を見せて其口を窘ませむ、と樣々に仕懸けて來るを皆撥付けて、此通りと力んで見れど少しも臆せず。成程これでこそ白金と人にいはるゝ才藏を溶したる腕の好さ、と我を張りし小〆もへた〳〵となりて、結極はどうやら此方から詫びてかゝらねばならぬやうな巧い所爲に、ぼんと遣られて中直りの小酒盛。夜更けぬれば好みの肴核も無し、蠅帳の小蓋物二つ三つ取出し、炙海苔鷄子に事を足して、雜物を火燵の上に推

列べ、嬉しがらせ、戯言、怨言の相擲して、いつよりも酒の旨さに飲過ぎ、喋過ぎて朝寐の種とはなりぬ。

火の出るほど憤りても、水を注くればかくの通り、と菊住は此手際に小〆の腹を識りて、餘熱の冷むるにも及ばず、隙を見次第またも才藏へ押懸け、御釋迦が團子捏ねたる此手にて、彼をも難無く丸め、而るが上に、如何ともして双方を談じ、以後は此男を共和誓夫となして、迭ひに妬まず怨まず、君子のごとく讓りあひて、途中に夜が明けたりといへる古への貞女に愧ぢざる二人を、此男め果報にも兩の手に桃と櫻や梅見にも雪見舟にも鼎足の偕樂。二人の髪毛夢中に卷上り、藷蕷と鰻鱺のごとくなりて戯るべし。あら樂しさの浮世やな、と事業に成就ほどの悦に入りて、折あれかしと待てども、其後は用心嚴しく、眞に幽囚の身に異らず。極樂に牢もあらば悋やらむと想はれて、人の羨むほどにもなくて其身に切なかりき。

數ふれば明後日にて四週間、役所へ病氣屆の期限切るゝなり、此上の追願は、醫者と長官の印なくては協はじと詐れば、小〆は心元なく念へど、此事の虛にあらざれば、出るなとは言はねど好ましからず。然りとて代人にて事の辨ずべきにあらねば、いよ／＼明日は出懸けるといふ前夜、睡いといふを寐かさず、襟を正し危坐して煙管を笏に把り、先度の手際を念へば、いかほど確をいうても明日の危さ、此身は泥船に乘せらるゝ狸なるべし。才藏樣に未練の段か、心の大在りは、誰が何といはうと此目で睨んで識つてゐる、と半分は廻氣から放す空銃なれど、覘は外れず其に相違なけれど、菊住の耳には皮厚のいるほど聽かされる、いつもの談義と半睡に聞流し、之で濟むかとおもへば、本文は其からにて、先私がこれほどまでに實を竭すを、何とも思うてはくれぬといふ事を口說き、中座には此間の脫出して逢ひに行きし事に就きて、その夜言遺せし所見及び愚痴を陳述し、明日行くは可けれども、役所の用は假托にて、內證

は例の處へではあるまいか、それが苦勞で〳〵ならぬ。知る通の病身なれば、かならず〳〵氣を揉まして下さるな。いつその事死んで執着いて彼世へ連行き、此苦勞をなくなしたい、と眞心の溢れてや、涙は襦袢の袖に初時雨ほどの濕。わつと泣かれては興が覺める、これ位の所が心細げに哀が見えて可笑い、と泣く心は酌まず、狂言に見てゐらるゝとも知らず、胸に在るほどのこと大方は言盡して、菊住樣忘れて下さるなと詞切るれば、十分膽に徹へてどうも耐らぬ顔色にて、一々尤なる言分。武士ならば金打、誓紙書く世なら血判して、此胸を見する處なれど、見せやうにも見せられぬ胸の中、誠を明す便は語なれど、何をいうても我言は皆疑はるゝ今なれば、悶ふるほどに思うても詮無い話。止どうするか目を開きて能く我仕打を見るべし。一度の氣紛に脫出したとて、其を根に持ち、毎日の愚痴責は、仕置が重過ぎていかい迷惑。何事もおほせの通り仕れば、向後はちと拷問をゆるめられ、寛大の御沙汰に預らば有難

き仕合といへば、屹と此後を愼め、と膝にふつゝり紫の入墨、齒痕を戀の極印と近松は洒落たりけり。

白縮緬の頸卷から縞羅紗の外套まで、ぞつくり小〆仕着の身皮を飾りて、今日は長官の邸へと、巧く詐りて家は出たれど、附けらるゝ車夫は小〆が恩顧の六といふ奴、この犬に嗅がれては何事も露顯すべし。さりとて金轡にては迚も行くまじければ、途にて還すは拙し、役所まで挽かせて、馬を捲く手の裏門から直迯を吃はせむ、と其通り仕了せて柳橋へ取つて回し、才藏の格子先に佇めば、半玉の頓子が木綿布子のどろつきたるに寐衣帶して、白粉の斑に殘れる頸首を突出し、袖の下に何やら忍ばせて出で來にけるが、菊仕を見るより、呀といひ捨てゝ奧へ驅入る。之を機會に格子を入れば、光といふ婢走出でゝ、今日は少々加減惡ければ、お目に懸ることはお斷り申しまする、と此間まで前垂の一つも遣れば、ちやほや吐せし奴が不知不識しき詞を、菊仕は鼻頭に遇ひて、病氣と聞き

たればわざ〳〵見舞に來れるものを、他人がましき言いふな、と推して行かむとすれば立塞がり、お通し申すなとは主人からの吩咐。今日はお歸り下さいと空嘯く。此奴小才なと菊住は怫然として、おのれの知つた事ではない、と拂ひ退けて通らむとすれば、成りませぬと袂を捉つて引戻し、お歸りなさいと菊住の胸を撞けば、此匹婦と頰桁一つ撲られて、這畜生、と昔取りける鍬柄の田舍力に突飛ばせば、菊住はよろ〳〵と土間に墮され、おのれと起上らむとするを、はたと障子を立切り、中より無圖と抑へて、歸れ〳〵と喚かれ、此上はと菊住も了簡して立出しが、さりとは餘りなる才藏の爲方、と隣の露地を入りて柳屋の裏窻の下に立寄れば、あのやうに手暴な事はせぬもの、と才藏の聲聞ゆるは、流石に心には我を可愛と思ふなるべし。窻の障子をほと〳〵と指頭に音づれ、難面き人の心かな。一目は逢ひたまへ、話したき事あるに、と小聲に言入るれば、家内は遽に鎭るなりけり。

菊住は切りに憤れて、答のなきは不得心か。逢うてやると唯一言いうてくれ。これ〱と忙しく障子を敲けば、中より才藏の聲にて、何處のお方か知らねど、用がござんすなら表からお出なされまし。此處は裏口、豆腐買ふ窻でござんす。逢ひたいとおほせらるゝ貴方は、今表に見えられたお方ならば、お出は御無用に願ひまする。お客樣ならば茶屋からでも待合からでも、口を懸けてお招き下されまし。此處は藝者の家にて、高貴のお方の御足を入れさせらるゝやうな處ではござりませぬ。それとも切て私に、逢ひたいとの思召ならば、茶屋から立派にお招き下されまし。お座敷とならば藝者は呼ばれてお酌を致しまするが商賣なれば、お客樣は乞食でも穢多でも、人非人でも義理知らずでも、薄情ものでも、畜生でも、其には厭ひなくお對手を致しましよ。お話とやらがあるならば、何なりとも承はりましよ。人の裏口からこそ〱と物言ふは、錢貰か、紙屑買か、空瓶買。そんな眞似をなされては御人體に拘る事。但し

はお門違ひか、升屋の小〆樣のお宅ならば、此から東へ三つ先の横町、此は柳屋の才藏といふ未練のない藝者の住居。用無き門にうろ／＼して巡査樣に咎められぬ内、早く此處をお出でなされまし、と散々に辱しめられ、向ふ近き長屋の人の覗くに耐りかね、足早に表に出でゝ、腹立紛れとは言ひながら、此雜言男の辛抱なるべきにあらず。第一我を錢貰か紙屑買かとは言過ぎたり、乞食でも穢多でもとは何ぞ。

座敷ならば逢ふといふからは、例のから口を掛け、存分に言草いうて此仕返をせでは、今宵が寐られぬ、腹が立つ、と馴染の待合に飛入れば、女房罷出でゝ、此頃のきついお見限りは、世界を變へて新出來と巣籠の御愉快ゆゑとかや。餘り然うなされたものでもござりますまい。旦那のやうに女緣とやらのあらつしやる殿方は、彼方からも此方からもやいのやいので、愚痴や怨言に慣れきつて、おのづと萬に心強く、私どものやうなものゝ、怨言などは、蠅が甜めたほどにも思召すまい、其が善いので

ございますのさ。
聒しき女房の喃々を懊惱がりて、(左も右も)に後を抑へ、我と言はずに
才藏を呼べとあれば、不審立てつゝ畏りて退りぬ。
彼奴來らばどうしてくれうと思案する内に、待て〳〵と大いに感ずる所ありて、いかにも我を散々に詈りけれど、此惡口の元を糺せば、我浮氣を恨む餘の鬱憤を霽さむ爲なり。我浮氣を恨むといふは、畢竟我を身に替へていとしく思へばなるに、我過を棚に上げて、他を恨むは大きな了簡違ひ、是は此方から慍りかへす所にあらず。兩の手に桃と櫻の艶福を享けむには、此處等が辛抱大事の脈所なり。言うて見れば此方よりも、才藏の胸の中は幾許ぞや。長年世話せし男の恩を忘れて、心を外へ移したるは、泥を塗りし顏をなほ踏付けの仕打、と男ならば出刃を揮舞はして、其命を貰はむ、と阿修羅王とやらが暴れまはるほどの始末にも及ぶべきを、才藏なればこそ常談にて事は濟したれ。何も言はぬ、全く以て

菊住の不了簡なれば、才藏が此處に見え次第、桃井若狹介に遇うて、何事も御唯々で直もの詫びなば、いかに氣丈の女でも、好いた男の一言は、十言に向ふ嬉しさに、どうするものか、角も根から脫けて、火燄も忽ち消えぬべし。

此處で此方から強き言をいはゞ、先も意地になりて強き言を言募り、トゞ女房の仲裁から相睨で別れ、其より全く脈あがりて、此戀は死物なるべし。死なしてなるものか、大事の／＼、それ御入來と見えた。女房へ御挨拶の御聲、いつも初音の心地こそすれ、と手爐の傍に待受けの褥を正して、來たらば矢庭に叩頭の十もする氣で、待兼山の杜宇、雲間を出づる御姿、見るより聲を懸けて、いつも端麗々々。先此へといへば、才藏は入口に左やんと坐りて初見のやうなる挨拶。是は有難し、此方の思ふほどにも無く、疾より御心解けての御常談か。堅い／＼、いつものやうに直と此へ來て、一搯願ひたきものと片膝突出せば、餘所に見て、今日

の寒さはと話無氣に呟きぬ。
菊仕怺へかねて飛蒐り、好うも先には恥を掻かせしよな。と執る手を拂ひ、屹となりて、恥掻かされし覺はあれど、掻かせし事は覺えませぬ。此方のやうな人非人の畜生には、物言うたとて解るまじければ、言はぬことに極めたれど、來られた義理ではなき家へ、のめ〳〵と面出して逢ひに來たとは、小〆に言付けられて、わざ〳〵縁切に來られたか。但しは自惚から此才藏に未練ありと見て、丸めに失せたか、愚なこと！縁は此方から疾に斷つた。未練は疾に捨てゝのけた。最早此方に逢ふ用なければども、座敷でならば逢うてやるといひしは、あれほど散々に苛みければ、愧ぢて又逢はむとは思ふまじとの了簡なりしに、さりとは馬鹿正直のお方もあるものかな。逢ふもなか〳〵汚らはしや。來るではなけれど、かくまでにして逢はむといふは、久米平内といふ士我貌を石に刻み、不善事せし罪滅の爲に（ふみつけ）よとの心に同じく、不實不義理を

後悔して、何とでも叱つてくれとのしをらしき了簡から、呼びに來せしと思うたれば、可厭ながらも逢ひに來たは、今敵同士とはいふもの丶、廿日昔の淺からざりし馴染効ゆゑと有難く思ふべし。今更女々しく抒べずとも、此方の胸に聞かば皆知る丶事と何も言はねど、此方は見下げ果てたる根性かな。思へば思ふほど胸逼り、悔し涙の一滴に、千萬無量の怨言も愚言もありぞと見よ。此仕返には菊住樣、十日と經たぬ中に此才藏が……………否々其を言うたなら又未練が出て、小〆樣の捨てらる丶が不便ゆゑ、此處ではいはねど、噂に聞きて樣子が知れなば、女で食ふ氣が女で食はれ、今日を食ひかぬる身とならむ折、薦着てなりと遠慮無く尋ねてござんせ。損じ札の四五束は、面桶へ投げて進せましよ。この恥知らずの野良猫めと擲倒して、轉けかゝる菊住の横面を、三味線逆手にしたゝか撲てば、棹は半より折れて胴は摧けぬ。おのれ！無禮な、と立たせも遣らず、才藏は襖を蹴開き、飛ぶがごとく遁行

くを、遁さじと追懸くれば、女房に抱留められて、放せ〳〵と悶ふる間に、はや才藏は格子を出て、顳顬の邊に血入染む男の顔を見やりて、張臂に袖を拂ひて悠々と立去りけり。

（九）風の柳 上

其力神の如しとて、何人か拜金宗といふ敎を立てぬ。信に世間金に勝つべきものはあらじと覺えたり。元帥は是なる葛城の謀思ひのまゝに行はれて、才藏が動かぬ心の根の菊住も小〆が持物になりぬれば、鳥立つ迹へ彈丸を放すものなく、誰に情立つる的のあらざるのみか、浮氣男へ面當の小氣味好き事もがな、と其のみ一念に思ひつめたる鼻頭へ、かうある事と攘臂して待ちに待ちたる葛城が、身請せう！何處なりとも好むまゝの處に、意氣にでも立派にでも、望み次第の普請して、圍うて置くがどうじや、と思ふ樣腹を空せてから鰻飯を見せるやうな持つて行き方。此中に毒がありても、食はでは措かれぬ仕儀に逐迫められたる身に幾許か歡びて、然ぞやお憎みの今までの剛情は、何として私風情が何方をも嫌ひしにあらず。譯を申せば、一夜二夜の假枕は其座の浮氣から、今日

ありて明日忘らるゝ仇波の、幾度寄するにも誘はれざりしは、此身の行末を思へばなり。願ふは誠あるお方を見立て、倶白髪の末懸けて替るまじき契をこそ、さもなくてはとの心の誓を識れる御方無くて、百人が百人浮きたる情を言寄るを、風に柳の障らず待ひかねて、中には竹の雪の強く刎ねしもあり。白金といはるゝ女にても、情の道を知らぬにあらねば、確に誠ある御方と見次第、置手拭して火吹竹持つとも苦しからざる了簡なるに、生憎今までさる御方には遭遇はで、唯金持てる人、一中節の上手なる人、能なくて首ばかり奇麗なる人、心は臻らずして装飾のみ意氣なる人、餘所の藝者はどのやうに念ふか知らねど、才藏の氣には合はぬ人ばかり。

此社會を泥水といへば、誰か濁に染まぬはなく、譬へば巷渠の中なる花の如く、取上げられてから鼻摘まれむことの口惜さに、我は深山の初櫻、知られで果てなば果てよかし。もし誠に愛でゝ家土產に手折らむ人もあ

らば、露に濡色の淸きところを觀めたまへ、と心に待てる効ありて、今更言ふは異なものなれど、御前の御贔屓に預りてより、これぞ誠あり、情深き御方と見たれど、一目二目にてはお心の底の知りがたさに、或時は御意を悟き、又は難面遇し、散々火水に鍛へて今日此頃、御前の亦無き可賴しき御志が知れましてからは、彼方より捨てると仰せられても、此私から離れませぬ。

此上は今までの我はがましき面憎さも、申す通りの志ゆゑと恕されて、末々永くお見捨なく、お目懸けられて下さらば、住居は何方の裏長屋にても、月顯はに雨泄る軒にても何か厭ふべき。渝らぬお心を便りに、此社會の苦艱を逃れ、一人の御機嫌を取兼ねて、朝夕に叱られたき願を、可憐とも哀とも思召して幾久敷、と挨拶改りてはや素人氣を見すれば、菊葛城大盡疾に此肚裏を見透し、我計の圖に中りたりとはいふものゝ、住に寢返り打たれたるが悔しさに、我を瑤輿への踏臺にして、男の面を

張らむとの底巧を、舌の動くまゝに陰蔽して、言うたもの哉、言うたもの哉。樂屋を見た目には何事も可笑からず。揶揄の才藏と名にし負ふ白金も、今は指頭で捻切るゝ哀さ。これ窮鳥の懷に入る類。垂天の翼を歛めて鳴聲の悲しげなる、山瀬に見せて氣味好がらせたき此態は！

我に野心のあらざらむには、此時大口開きて呵々と笑ひ、持古しの秋の扇に用なし、と袂を攘うてついと歸る所なれど、容色の好いがどれほどの德になるか知れぬもの、誠で候の末長くで候のと、百圓出せば米國では學士が買へるさうな、柳橋では色男の株を賣附け、何も存じたる不佞に、馬を指して鹿といふを、一杯吃された顏で毒もいはず、一々嬉しい相好で聽きゐる我を我の可笑ければ、汝も然ぞや汝の馬鹿らしく、腹で舌出すは迭ひの事。こんな緣が唐にもあろか。末覺束なき中なれど、日にても我庭の花にせば、後は散るとも實を持つとも、其は時候の都合次第。先其までは白痴になりても、男の意地を貫きたれば、費ひし金も

死なで愛でたし、と思ふを色にも見せず、それは忝き芳志、いよ〳〵得心とならば、萬事は明日にしても、早速ながらお才、訂盟の盃。此方の人、お酌。

此名馬を手に入れて御感斜ならず、山瀬を招きて此鼻を見よと拳を聯ぎし喜悦の眦流るゝが如し。之を拜見させらるゝ身は挨拶に困じて、御樂の儀と申上ぐるの外なし。此上の依賴は根引の始末、萬事の談判、粹なる足下を煩はさむ。近日事納まらむ上は、古けれども褒美は望次第。足下が之をと目懸けたる品は、此方能く識れり。二の土藏の中なる寶の一品は、何なりとも撰取勝手たるべしと奮みたる言に、過分なる御褒美にて恐入りまする。されば此よりと暇乞すれば、雛助小〆の二人へ好きな物買うてやれと紙幣の二束、提革包の重るほど捻込み、山瀬は柳橋へ行きて之を配當すれば、いづれも目を細め、唇頭に締なくなりて、天蓼木に燻されたる猫のごとく、骨まで柔かにして才藏の果報を羨みけり。

それより才藏方へ廻りて萬端を談じ、支度金として金千圓。之は借財の穴埋。養母を別宅させる當分の雜用、足溜ひの式といふにはあらねど、一通爲る事は爲ねばならず。何のかのと雜費を見積りたるなり。月々の扶持を金百圓と定めて、妾宅の經濟は之にて辨じ、榮曜は腕次第たる心し。

普請の落成までは深川の別莊に假住ひとして、明日にも此處を引拂ふべしとの御意を傳ふれば、何も承知して二三日中にはと言へば、御前の特に申せとありしは、努々華美なる立振舞がましき事は爲まじきとなり。これ外聞を第一とする御了簡なれば、可成穩便にすべし。其も畏みて秘々用意すれど、誰彼聞知りて聒しき沙汰になりぬ。

かゝる目出度事に夜逋同樣の仕打もなるまじく、まして此處に金看板の顏と、華美は根が好きなる才藏の氣には、世間に義理を缺くほど此の穩便を切ながり、公の秘密にして相應の花を後に咲かせ、菊住も指を啣へ

て見よがしにして深川へ移りぬ。通子之を悲み、酒も美からず。座敷も寂しき秋の柳橋、といひあへるを聞く毎に、菊住は胸に犇々徹へて、はや後悔の臍を噛まむとすれど、及ばざるを憤れておもしろからぬ心を賺し、なほ熱は高きやうに小〆と狂ふは、それ見た事かと世間の嘲の心苦しさ、と二つには今才藏に未練ある顔せば、敵無き戰に勝誇りたる小〆が我弱みに乘り、可厭なものなら切れたが勝しなど〻遣られては、それこそ身上の一大事、と只管媚を爲りて、癪もおしまし、頭痛も揉みましよ、お出懸けにはお履物も直しましよ、と謂はぬばかりの仕向を、女は優しき心と歡びて、此樣子にては此中おまへ百までに見えて、人に金貰ひ、好いた男を手に入れ、女は大〆と秘密を知れるもの〻洒落けり。大盡此頃欣々として何事も手に附かざる氣色。とかく深川へのみ駕を回して寵愛限りなく、住居は何處が望みとあれば、閑にても寂しき所は可厭との言、女には尤なる了簡。さりながら寂しからぬ所は熱鬧にて、我

通ふに都合よからず。双方の註文に適りたる地は無きかと思案すれば、才藏は向島が意氣にて住みて見たけれど、口元は可笑からず。奥の方は狐が出るとやら、中程は白鬚の近所こそ、人家もあり田圃もありて、風流なれど寂しからず。春は梅見、花見、夏は納涼、秋は草花、冬は雪と、四季の人出ありて浮世にも遠からず。此處に餘り廣からずして風雅なる一構、萬花車に仕立てゝ秩然と住ひたきよし。

家造の誂を言ふまゝに聞けば、どうやら春水の中本にありさうな畫樣。軒に葱が釣りたくはないかと茶を言へば、泉水に石の反橋架けて錦魚が飼ひたいといふ。さらば龜井戸の天神樣に、茶店の株を買うてやろと拈れば、貴方を獄の番と笑ふ。昔はそれにも劣りし餘五郎、と大盡獨り可笑かりき。

此深川は假の住居と思へばや心落着かず。早く向島に普請して、二階の窓から朝櫻が手水つかひながら見たいと願へば、彼所と極るからは普請

は瞬く間、今月中には出來して、來月は四月よな。朝櫻でも夕櫻でも思ふまゝに見せう。其よりは外に見たきもののあるべし。同じ花物の中にてと鋩を出せば、かつらの花が見たいとは、取つて附けたやうな嬉しがらせと、鼻で笑うて、然うでもあるまい。

（十）風の柳　下

四月の十日といふ日、花も此頃咲初めて、百鳥の聲長閑なる日和、今日ぞと向島の新宅に移轉すれば、大盡の指圖なるべけれども何者の才覺か、勝手には諸道具不足無く整ひて、懸けわたしたる擂木、山葵おろし、庖丁、味噌漉、いづれか新ならざるはなき心地快さ。

十疊の座敷には天鵞絨氈を布きつめて、那の額の變な字は何といふ意と聞けば、那は篆書といふ文字にて、此家の名なり。語の意は土手の花にも勝れる花の香る處、と大盡は嬉しがらせぬ。床の軸、置物、挿花にも心を竭して、違棚の飾物まで一々名ある寶ぞかし。二枚折の花鳥の金屛風は、特に才藏の目に留りて、切りに觀むるを椽に伴出し、此庭を見てくれと大盡の自慢尤なる風景。轉がしてある石一つに、何十圓といふがあれども女には解らず、同じくは反橋に錦魚が御意に入りたらむもの

を。

椽傳ひに居間に入れば、唐木の長火鉢、糸錦の裀、銀の常喜世留まで備はりて、手近なる螺鈿の棚には、茶器一式を飾附け、紫檀の重簞笥、時代蒔繪の小簞笥、伊太利製の玉細工の手匣など、此中には何を入るゝかと想はるゝ調度のみ。戸棚には座敷道具の品々、見渡して遺したるものも見えず。

旋て二階の二間、茶室、隱座敷、湯殿まで、連れられて巡覽りけるに、唯驚かるゝばかりにて何と言分も無く、萬般十二分に整ひたり。就中寐間の結構は言語に絶えたる贅を盡して、名も知らぬ異國錦の帳を懸けたる、才藏は一目見るより愕然として、見ぬ昔大名高家の御殿もかくやと膽を冷せり。

はや御酒の支度と立騷ぐは、廿歳ばかりの水仕女、素性は山ならで物馴れたる江戸風。擧止優しくて働きぶりも鈍からず、今までさるお屋舖に

御奉公申せしと見ゆる態あり。小間使は十六七なる女郎の小奇麗にして愛嬌あるは、淺草邊の砂糖屋の娘にて、行儀見習といふ名にて、嫁入までに自力にて衣類拵ふる下心なり。

此外に用心の爲とて、五十餘の老人を附けたり。此老漢の風を見るに、武骨一遍の間に自から威ありて、下賤の相にあらず。律義なる進退、角なる言辭、士氣質を其儘に、昔は土佐藩にて四十俵取りし男とや。今食ふほどの藝無くて、葛城の手代藤井某を同藩の因に便りけるを、かゝる老漢丁度入用の穴へ推擧されて、今度此家の用心番に、日給五圓にて抱へられけり。名を大谷傳內といふ。劍術上手のよし、下手ではなさゝうな名なり。表面は右の名目なれど、內實才藏の浮氣目附を役に、扶持下さるゝ大盡を譜代の主君とも思ひなして、隨分忠勤を抽づべき心得、今日才藏の顏を見るより、美色は淫婦の相、と最早間夫ある心構へにて、聊かも油斷せず。夜に入れば枕頭に寸延の一刀を引着けて盜人の用心、

いかな深夜にも人の氣勢すれば、必ずえへん〳〵といふ用意に、婢ども用事に行くことを怖れず。種々の重寶これで五圓は廉きものなり。

此日一日は閑なる小酒盛して、大盡おもしろく醉を催し、此味外には無き事と樂みぬ。まことや後に柱前に酒、懷中の金は無盡藏にして、女は希物の艶婦。苦といふものは爪の垢ほども無くて心まかせの娯樂、鑄懸松でなくても之を見ば、大方の人は稼ぐが可厭になりさうなものなり。才藏とても、心を通はせし男と切れて、思の外なる髯に根引かれたは口惜けれど、今日の心持は萬更にもあらず。今となりて見れば、大盡の心切卒に身に浸みて、義理から捨て難き氣にもなれば、おのづから待遇にも情籠りて、どうやら無理根引の花とは格別の處ありと見るほど、無性に御感に入りて、當分此へ毎日の御入來、御目附大谷傳内、これはと眉を顰むるなりけり。

(十二) 金と女

爰に澀田川の沿岸に一町四方の別業を構へて、外見も内證も樂大盡の紳商住めり。日本の雪村素六と歐羅巴にも知られたる男なり。これも生れながらの分限にあらず。信州の山中に敗鰯を誕生日だけ二尾祝うて、三百六十四日生臭き噯も出さず、米の飯は命危き病人ならでは味知らぬ深林に、穴居ならぬ申譯の茅屋をぽつ立て、五月雪消えて櫻寒く、松の焚火に面燻ぼりて獸のやうなる人のみ。商を嘗くといふことも知らず、髮は棕櫚の毛と同じ物に思ひて、世中の樂は麓の五郎兵衛が宿で賣る赤馬を、茶碗で五杯呷るを此上なしと心得たる山男の伜には、鳶が鷹か、鷄が鳳を生みたる才物。ふと思ひ起ちて山中を飛出し、流れ〱て江戸に來にける頃、上野に戰爭起りて、途に金裝の太刀が遺てゝあれど、拾ひ手の無きより思ひつきて、官軍の兵糧方に雇はれ、膽の太さは命知らず

と言はれて、亂軍の中をのさ〳〵と寄席の人混を行くがごとく、敵が敗走すれば分捕心のまゝ、龍宮の下男が庭掃除しながら珊瑚枝を拾ふもかくやあらむ、と石瓦のごとく落散れる財寶を手まかせに撚込み、味方が負けてどろ〳〵と遁出せば、後の雁になりて遺ちたるを拾ひ、いつも亂世であれかしと願ふ程仕事して、戰の息みたる頃には、はや江戸の町に一人前なる商人の懷中になりぬ。

其より追々仕出して、後には諸官省の用達を勤め、隨分其筋の旦那衆に氣を着け、二重底の菓子折、下に黃金煎餅の贈物、下戸も上戸も之に否をいふものなく、雪村々々と贔屓にして、外では千圓で請負ふものを顯然二百圓高いと知りても、我腹の痛むにあらねば、雪村に申付けて儲けさすれば、其一割は我へ來るとの心算。萬更自分に官金を盜む事もならねば、人手を藉りて體よく好事して、髭を撚りて淸き顏にて濟せり。ぬからぬ雪村はいつも此輩を玉に使ひて、莫大の利益は、白紙を刻みて紙

幣に用ふことのなる株を持てるに異らず。十年といふ間に日本の資産家に成上りて、今は世間も紳商と呼び、新聞も氏の字を付くるぞかし。

此男商機に敏しといへども、十九世紀には馬鹿の數減りて、誰も儲くることを忘れざれば、地道に品物を摑みて幾分といふ口銭の商賣にては、藝者一つ揚ぐることもならぬ大佛、巨い攫利を望まば、幻術にて不思議をせねば行かぬことを悟りて、金と女色を道具に用ひ始め、不自由せる奴は金で抑へ、それで行かぬ向は、女色で鈍らせけるに、凡そ四海に此二重の網を斷るほどの魚なく、面白く我手に入りて、死活自在の力は、此光るものと白いものとに止めたり。いでや種々此仕懸を人の陷るやうに工夫し、一策を案じて、向島は花無き時の田舍、自から往來に人目の遠ければ、と我別荘を爲になる筋の高貴の御方の遊塲となし、いつにても御暇の節は御宅も同樣に御越あるやうにと、それ／＼へ吹聽し、酌人、給仕の名目にて十餘人の艶婦を抱置き、御客來とあれば花の如く衣飾ら

せて座敷に列べ、雪村は何彼の指圖を言立に御免を蒙りて席を外し、此女どもに東道を勤めさせ、男氣は客一人、女護島に吹着けられて、此に歸化せむことを願はざる男もなし。此中にてお目に留れる女ありと見れば、いづれも控へて其者をお手水に附かせ、無用の者濫りに入るべからずの小座敷へ案內して御機嫌を取るなり。

身分ある方々は茶屋・待合へ出入ることを憚り、陰遊びの場所無きに弱らせられけるに、此所は少しも遠慮のいらぬ一人の別莊、隣に誰の飮むにあらねば、裸躍しても其場ぎりの醉紛れ、女どもが轉げて笑ふだけに事濟み、而も萃めたる艷婦にいづれ可厭なる形は無く、不自由知らぬ壺中の天地、と一度見えしお方の一度ぎりにて思切るはなく、雪村が御用勤むる旦那衆は、此館を又無き處に悅ぶなりけり。

一貴顯の優れて雪村を最屓せらるゝ方より、來土曜日は某の誕辰なれば、心ばかりの祝ひの莚を開かむに、夕刻より參れとの御使。有難くお承申

して、扨邊に取揃へたる御祝儀の獻上物には、百事如意を織出したる一陣一卷、白熊の敷皮一枚、これは特に愛でたき品なり。長六尺の油畫一面、少女水浴の圖にて、伊太利畵聖の摹寫なる裸體畫なり。此外當日席上の飾菓子に、有平細工の蓬萊の島、岨なる瀧には葡萄酒の絕えず流るゝやうに仕懸けたり。此入費合計千何百圓か知られず。目覺しき事と内見せるものゝ肝を潰せり。然れども此千幾百圓の近き内には一位進みて戻ることを念へば、何萬圓掛けても損のゆかぬ商法なり。

時刻に伺候して品々を御覽に入れけるに、御機嫌麗しく、此の蓬萊の菓子は家内一同の目を驚かし、軈て手昇にして席に持出づれば、一座之を悅ばざるものなく、大人は實にも老いたる小兒なりけり。

招待せる客は十餘名にて、無官のものは雪村素六と葛城餘五郞とのみ其他はいづれも、昔ならば同席かなふまじき方々なれど、兩人を見識られて、友達のごとく物おほせらるゝ御顏ばかりなれば、それ〳〵御挨拶

申上げて席に着けば隣は葛城餘五郎。久しく懸違うて會はざりしが、變りたる事もなきかと問はれて、話は數あれど、此席にては憚無く身勝手の物語もならず。いづれも着座しておのおの顏で飲んではゐられぬ身なれば、委しくは寛りと後にて、と各自座を立ちて、まづ主の君に壽杯を獻じ、それより兩側に別れて御流を戴いて廻りぬ。

新柳二橋に一粒撰を絹漉にしたる藝者ども、帶も大鼓に改まりたる白襟紋附、絹足袋の摺足、目八分に通ひ、給仕は三指にて嚴かなる事謂ふべくもあらず、知らずば馬骨の錦衣たるとは見えざる閑雅。半玉は皆一樣の束髮、友禪染の振の袂を飜して、花間に鶯の木傳ふ風情なり。

やがて醉の回りかけて話聲も高くなる頃、此中に最も浮氣の君抱辛しかねて、これは餘り堅うが酒が染みぬ。いづれも騷がれてはどうぞ、と口を切れば、對坐の兩の小鬢禿げて、頤髯に鹽の混れる御方、いつも柔か

なれば、今宵は慰みの爲四角張りて、左樣然らばで飲むはどうじや、と仰せらるゝ口の下から、酌せる女の手を取りて、此間は我を盛潰して迯げをつたな、おのれと怨じかけたまふ。先の御方硝子盃を置きて、髭の濡るゝ麥酒の雫を拭かせたまひつゝ、我等は武家育ち、席の暖まらぬ間に飯食ふ修行せし身なれば、之が辛抱ならぬにはあらねど、日常放縱に身を持てる女輩が、然ぞやと不便でならぬゆゑといへば、此座の姉株なる藝者末席より、御聲のせし方を顧みて、此方は恐多き申分ながら、四五歳の砌より小笠原流に躾けられし身なれば、御心配は御無用に遊ばされまし。此方が一同勝手と挨拶すれば、哄然滿座の大笑となりて崩れ出ゑ、亂軍の中の功名、我勝に馴染を生擒にして御側に引付け、なほ迯げむとするは褄を膝に敷きて放されず。各自好敵に亘合ひて、酒戰今を酣と見えたりけり。

葛城の上席におはする方は頻に座中を見廻し、今日は柳橋の才藏が見え

、ぬが、如何せしぞ、と御前の女に尋ぬるを、餘五郎心に可笑く、御前御杯をと紛らせば、尋ねられたる女は鼻の心で笑ふやうな顏して、才藏は落籍まして、御前へよろしくと申しましたといへば、落籍たかと稀有なる眼色。腑に落しかねたる樣子にて、何者に落籍されしぞ、と思はくのあるやらむ、根問ゑたまふ。女は餘五郎の顏を見遣りて、上州とやらの大盡根引して、今は淺草邊に居りまするとやら、其後まだ會ひませぬゆゑ、委しき事は存じませぬと申上ぐれば、好き藝者であつたと述懷めかしくおほせられぬ。此時ぐつと膝を搯らるゝに驚きて振向けば、素六が聲を潛めて、聞けば到頭お手に入れたさうな。其顛末がちと承りたい。度しても顯はるゝ哉、知られては裹むも罪深し、と憂身を窶せし始終より、今は白鬚の邊に匿ふまでを語れば、那の女を手に入るゝほどの濡事師とは知らざりけり。此頃に睦しき所を拜見といへば、易いこと、一六三八は出張日なれば近日御入を待つ。とは嘘にて、四九、二七、五十る

會日なるべし。春雨しよぼ〳〵と昨夜より降續け、十時までも恥搔道具片附かぬ日和を候ひ、推參可申き心得と笑へば、雨の朝に限らず、當分はまづ其仕合。成らば夕方より御出にて御一泊も苦しからず、と其上を行かれ、素六は舌を捲きて、當るべからずと額を撫で〻默りけり。

餘五郎杯を差して、他の事より足下こそ、近頃向島に美形を萃められ、貴顯への御馳走此上無く、いづれも御意に稱ひて、世界に無い圖との噂耳に入りぬ。下賤の某には候へども、其道には志篤きに免じ、三千歳の壽を保つてふ仙桃を味はせたまへ。某の君の特に心を懸けたまふ如きは、比類希なる媚骨のよしにて、甘露口中に滿ちて齒牙三日香しとやら。さほどの名樹御手に入りたる果報、身を省みて羨ましき限なり。いかで近日内見を許されまじきやと言へば、少しく思附きて始めたるに、案外圖に中りて御覺愛でたく。心を得たる取計ひと至極の上首尾。いづれも貢色の臭味無きものゝみを聚めたれば、何や彼や間の拔けたる處多く、左

右痒き處へ手が達かざるを、蜜柑も酸味あればこそ、甘きが望ならば砂糖といふものあり、と彼通がりの君の御詞。何にしても思召に協ひたるが此方の仕合。此頃に御間もあらば、手栽の野花御覽に入れたく、香は無けれどお目にとまりたるもあらば、一枝なりとも二枝なりとも隨意に手折らるべし。身は花守の曲もなし、蝶にも如かざる次第、と舐めた顏もせずして語る。

二人のひそ〳〵話聞えざれど、隣の君、此席にて俗なるかな儲話、妓前に米價を說くなかれ。飲め〳〵と各々杯を突附けられ、話はそれなりに飲出し、滿座の浮れ立つを、兩人席末に拱手して、荒磯の巖の如く、一向落着きたる顏にて身を硬うして見物する風情無さ、酌に來る藝者にお氣毒樣といはるゝほどの氣毒、歸途は新橋と思へども、もはや遲しと呟き合ふ中に漸くお立ちといふ聲囂しく、茹でざる章魚ほどぐにやり〳〵と　左右の女に扶けられて歸るもあれば、斷頭臺上月如霜と、亡友が絕

命詞を舞ふ手頭半玉の日を拂うて、堪忍せいと遁ぐるもあり。思はくの女を曳きて、わざと暗きを行くあり。それ〴〵の歸姿、似たるは覺束なき行歩のみ。

波のごとく押出せし跡には、藝者二三人と半玉ばかり遺されて一處に凝まり、杯盤狼藉として電燈の光白く、窓の外に樹抄を渡る風の音の聞えぬ。主人の殿の見えざるを聞けば、はや臥床に入られたるよし。あれほどの藝者をいかゞしたると尋ねけるに、御關係の方々何と言うても肯かれず、無理に手を取り馬車詰にして、今宵のお土産にお持歸り。我等は酉市の賣殘、と沽むかなの氣色も見ゆるに不便を覺えて、此女どもを相手に半時ばかり酌交し、又の日と玄關に立出で、御者を呼べば寢惚聲にて驅來る。おの〳〵馬車に乗りて別際に、餘五郎素六を呼びて、近日是非といへば、此方よりもといふ間に鞭の音して、門外の大路を左右に。

（十二）雪盡し

大盡才藏を我物にして三月餘になりぬ。何百人に騷がれて、柳橋の春色一人の身に繫りける女を、神にも指をさゝせず獨り占めて、金の力とはいひながら、有難く大事に懸くるならむ、と他の思はくとは格別にて、此頃少し鼻につきて、内の瓜核も古し、豐頰をば、那はと目に入るやうになりけり。さりとて才藏が可厭にはあらず、不用の品ならば讓つてくれぬかといふ人には、未だ〳〵首を掉るべし。無くては不足に思はるれど、在りて格別の珍重にもあらぬ折から、雪村の別業に不思議の代物ありと聞くより、はや浮心になりて、其をといふ念熾にして已まざれば、近き内に素六を尋ねむことをのみ樂みけり。男心と秋の空とて、女は同音に男を卑して、おのればかりを操の堅きやうにいへど、歐羅巴の諺には、女心と冬日和といへり。これにて女にも氣[illegible]はありと知れて、男

女を論せず、隣家の冷飯は好きものと見えたり。就中金持てる輩は、おのづから心驕りて、道ならぬ慾を起し、わざと仇なる戀を求めて、陋しき樂を貪るなり。金無く閒のあらぬ人は、不善を念ふを得ずして、あるほどの慾は米に奪はれ、月に半日講釋場に行きて樂めり。金無きは不自由の目に見えたるを、枉げて清貧を甘んぜよとは、其身の德の闕けざらむ爲の用心なりかし。

衆には御前と敬はれて、上流社會に籍を置けば所謂紳士なり。紳士といふは金持といふことにはあらず、諸人の手本となるべき人を指せる名義なれど、今は金ありて美しき衣服着れば、誰もかく呼ぶ慣習。余五郎も理窟は無き錦きたる木拾にて、そんな事は糸瓜の皮とも思はず、我拵へた貨にて好きな眞似するに、故障言うて來る所はない筈の了簡にて、其處がどうも金持の面白さ。死身になりて人の稼ぐも、我儘の利かぬ世間を我儘を爲たさの望ばかり。錢無しどもの要らざる理窟を言はうより、

出來ることなら我等が眞似の半分もして見よと、昨日の一儲に四萬圓は少い分、未だ今月中に吽と入る口が三つばかりと豫算濟して、これから一保養と雪村の別莊へ馬車を驅れば、主人は二三日見えぬといふを電話にて呼寄せ、今日は我をも貴顯待遇にして馳走して給はるまいかと賴めば、貴殿はいつも〳〵壯なるかな。我は今年四十八、貴殿よりは纔三歲の兄なれど、全く女氣を絕ちて、子の事ばかり心に懸るに、さりとは凄い血氣と警むれば、乾びた言いうて我を誑かす氣の狸老爺、皺延しの樂筋の種は皆揚りて、此耳底にあるものを、我と共に百歲までも生きて浮かれむと言ひはせで、胴慾な了簡と言入るれば、然らば御同然に今が盛よ、と早速の承引。

行けば一々不思議の間を案內して、表座敷に席を設けて、早く用意といへば、茶を運ぶ女は十七八、御守殿粧にして、黑縮緬の小袖に向島の雪景色の袖模樣、帶の織出しは白茶地に色紙短冊を亂して、雪の秀歌名句

を書いたり。いかさま、向島雪村家の侍女、あれの名を都鳥といひはせぬか、隅へは置かれぬ美形なり、誰の持物と問へば、隠れもなき好人、某の君の御意入。いかなる望手ありとも我の外には、とまでの御聲懸り有りて、君の御扶持にも預る程のものなりといふ。我も今日は貴顕なるに、始めての顔にて手土産無くては稱ふまじ、と家内の人數を糺して二百圓出せば、貴顕の方々は這麼事餘りせぬものと素六は笑ふなりけり。

膳の出づるを合圖に、廊下の足音長く續きて、出るわ〳〵。同勢十二人今日を曠と着飾りて、座敷の口に花壇を見るごとく居列びて、一齊に額づき、又更に唯今の御禮を申して餘五郎の前に畏り、其の中に最も年長けたるが二十二三の女、御酌と居去寄る。餘五郎盃を擧げてづゝと向せば、いづれも染色は異れど、裾模樣は雪盡しにて、此女ばかりは更けたりとて、雪の若菜を袘模樣にしたり。或は雪の松、雪の梅、雪輪、雪笹、

雪月花、之はどれも解けるの謎にはあらで、雪村に因ませたる物數寄と覺ゆれど、見るに消ゆるばかりの思するに、緣無きにしもあらずと餘五郎目を細くして悅べり。

唯今お酌申せしは、お聞及びのもの、名を角とはいへど豐頰を怪まれな、と洒落に紛らして其と知らすれば、成程々々と言はれて、さつと顏を赧め、少し退りて俯きぬ。其可憐廿歲越えたる女とは見えず。此眞似ばかりは故として成らぬ事、と餘五郎一廉目利して、先お近附の證に一杯とあれば、おづ〳〵戴きて、酌する子に目授すれば、心得て雨滴ほど滴しぬ。返杯は餘五郎盈々と受けて、一同へ杯上げたけれど、迷惑なる人もあるべし。此方とても一々の返杯に預るは面倒なり。何事も手取早きが當世なれば、大きなる物にて一度に受けたし、皆も惣懸りにて一度に酌したまへ。之にて受けむ、と有合ふ銀の杯洗の水を捨てゝ、差出せば、素六手を拍ち、見事なる御手元拜見と、箸をおきて見物す。女どもは興

がりて、二本の銚子を交代に持ちて十二人酌すれば、酒は器の中に浪打ちて、見るから小氣味好し。

此酒は十二人の酌なれば十二口に飲むべし、一口毎に下物無うては可笑からず。これも一同交る〳〵に箸取りて、我髭髯を推分けて口に投込まれよといへば、之はついに聞かざる葛城殿の一藝、所望々々の聲の下、それ飲むぞとがつぷりやれば、十五になる靜といふ子が、玉の如き手に燒肴を一口挾み、葎の中なる古井戸に、慌々墮して慌てゝ箸を退く。後の下物の用意は好きかと飲めば、十六になる宮といふが、振袖を左の手に抱きて、蕾のやうなる我口を開きながら生薑を入れぬ。

呼吸をも繼せず十二人下物を挾めば、約束通り一滴も殘さず飲乾して、墮せるやうに杯洗投出し、これが昔に在りしと聞く、鶯飲か、ほうとばかりに大息を吐きたりけり。

大量にもあらざれば、此三合ばかりに醉を發し、折しも糸の音がせでは

索麪に辛子無きに似たり。此酒を骨まで泌ませるには、是よく〱と撥取る手振に、餘五郎左利なれば、我知らず右の手の上れる態の可笑さに、女ども取外して一度に哄と笑ひ、之も愛嬌になりて面白き方と囁かれけり。

三絃彈けと素六の指圖に、少女二人立ちて二挺持來れは、お秋お蔦とて顏も好けれど、藝は又其上を行く二人が謳出したる吾妻節にて、墨田川に寄せたる新唄を彈けば、殘る十人妙音を絞りて魂も蕩けよと謳ふ。此節幽雅にして艶あり。文句卑からずして濃に情籠れり。鬼のやうなる武骨も此節でやらるれば、忽ち筋弛みて骨頽れ、四角の膝もおのづから解れ、轉輾りて嬉しがる希代の媚藥なり。況んや餘五郎、酒に性無き腸を此一曲に掻挘られ、之を引導に往生の遂げたやな。身は崩れて死ぬとも厭はじ、今一曲、あれ其聲の好さ、此節が耐らぬ。最一度今一遍と無性に所望して、聽きつゝいつか假往生の鼾を立つれば、此處は廣間の寒さ

に風や引かむ、小座敷へと雙六の餅に、十二人懸りて、土塊に落花の粘きたる如く、大の男を手舁にして奥へつれゆき、紗綾の蒲團に緞子の夜衣、錦の房付枕、寢覺の觀には枕頭にお角を附けたり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

いかい馳走になりて近頃の快樂。我が遊びたさばかりに遑無き身の主人を呼寄せ、無理を願ひて然ぞや迷惑に思はるべし。最早歸らむと立上るを、お角は少時と呼鈴を鳴せば、先に酌に出たりし少女の一人が、徐かに紙門を開けて入口に手を支へぬ。

御前はと問へば、先刻日本橋より急の御使にて歸らせられしが、御客樣御目覺の上は此由を申上げ、ゆる〳〵お遊びあるやうにとて、次間に御酒の支度も出來てをりまする。其を此へと言付け、葛城に今一獻といへば、否にもあらず、餘り長坐は嫌はれの基と、呟きつゝ座に着けば、杯盤出でゝまた酒になりけり。

廣間の賑はしき酒事とは趣を異にして、獻酬閑に、戯言も身に浸みて興深し。半日ばかり一人にて附添へば、お角も解けて、三指の中に心易き處の自から見ゆるは、葛城が腰据うる氣にもなりたる美味なるべし。夕暮より飮始めて十時過ぐるまで杯を收めず。夜も更けぬれば今宵は泊りたまへと切りに勸むれど、二三日の中には此處を出でゝ、本宅へは道遠し。久しく打絶えたるお才の顏をも見ばや、と白鬚へ行きて戸を叩けば、玄關に寢たる傳內、應と答へて小窓より手燭を差出し。殿樣の御出と喚けば、家內騷がしく人々蹶起きて、お才は寢衣の上に被風着て、出迎ふる姿の寒げなり。

馬車は還して內に入り、奥の小座敷に通りて、湯は無きか、茶が欲しといへば、お才は躬ら火を吹きて、冷えかゝりし湯を暖めつゝ、近頃弟と御出のあらざるは、外に増花といふも古けれど。其に外ならぬ御樂筋の今宵もお歸りがけか。いそがしきお身にも此後は一週間に一度はお顏を

見せたまへ。我物に爲たから可いわと捨置き給はゞ、黴が生へて如何もならぬやうになるべし。此頃顏のひり／＼するは、其所爲か知らぬと頰を撫づれば、餘五郎呵々と笑ひて、餅も黴が生へてから格別味の出るものなれば、其方をも其の意にて、旨くしてから十分食ふ氣なれば、捨置かるゝとは思ふべからず。皹裂が入りては所爲無ければ、大事にして風に當らぬやう、大きなる袋に入りて戸棚の天井に釣られて時節を待つべし、と鼻涕もひりかけぬ言分。其口の憎さと流眄にかけて何も言はず、但恨を呑むやうなる態を見せぬ。

煎初の茶に舌鼓して、急須に二三杯流しこみ、醉うた／＼と寢床に辷入りて、翌日の十時頃に目覺むれば、はや馬車は迎へに來りて、手代頭の林田より、出社あるべき旨の書面枕頭に在れば、今日は久しぶりにて暢りと飮まむと思ひしにと、どうやら雪村の別莊で言ひたさうな言を此處の間に合すれば、お才はお門違と打笑みて、さほどの御志もあらば、今

日御用濟の上、昨夜のやうに寄道せずに御出下さらば、一時が二時までもお待ち申しまする。但し然までに黴が生へませぬがといへば、餘五郎髭を撫でゝ、是非來て見せう。

（十三）佩刀の鏽

餘五郎はお角の情に絆されて、二日經ちての今日、慾に奪はれし心の、間になれば色に忘られず。向島の戀しけれど、雪村の迷惑を思へば、押懸けて酒飲ませ給へとは鐵面皮の至なり。さればとて月に一二度の首尾にては、此熱を冷乄難し。好き工夫もがなと案ぜしが、假令彼は賣物ならざるにもせよ、素六も金錢は身が冷ゆる大毒藥と怖るゝ質にもあらざれば、損のゆかぬやうに持懸けて口說かば、事は易からむ、と雪村の商店を京橋に訪へば、今朝一寸見えまして直に他出致乄ました、と二十四五の風俗生意氣なる若手代語調尾揚に應へぬ。何方へか、行先を知らせたまへと言へば、知れかねますると面倒なる顏色。若き女が物を問へば、無用の心切を盡して、男子或は年寄には不愛相なる、此年齡の常なり。女は弱きもの、誰も扶くる志はありたきものなれど、一層弱き年寄を黠

くする事更に理なし。我主人を尋ぬる人に不禮なる、いよ〳〵奇怪なる了簡なり。恁る不心得の奴世間に多し。二度買つた女郎に頼まれて、理無く心中する輩は此仲間より見立てらるゝぞ。這麼男には目も懸けず、佐分利氏に會ひたしと言放てば、店に居合せたる四人の若手代、揃うて氣に吃はぬ顔して、一人が澁々立上り、御姓名はと尋ぬれば、葛城餘五郎と名乘る聲に、いづれも吃驚して卒に立騒ぎ、百眼よりも手早く笑顔をつくり、揉手の音を立てゝ世辭いふこと限りなし。始に取次ぎし男氣輕に階子を駈昇れば、支配人佐分利數馬急足に下來りて、葛城を見るより腰卑く、まづ此へと應接所に案内して、茶よ煙草火よと躁ぐ。

格別の用事にはあらざれど、ちと御面談申度事ありて態々參りたるに、御不在とは遺憾なり。御出懸先を承はりたくてと言へば、今日は桃谷伯爵方へ伺ふ由申遺せし。歸りの程は分りかぬるとあれば、此上尋ぬべき事も無く、執務の妨碍せる段を詫びて立出でけるが、桃谷へ追行きて會

ふほどの用にあらず、さりとて此儘歸るも鈍し。白髯へと命ずれば、駿足飛ぶ如く軈て長堤にかゝり、雪村の別莊を過ぎむとする時、門内の新樹綠深く、兩三聲の啼鳥我を呼ぶかと心變りて、今日は閒なる女どもが午睡の夢を驚かし、寢亂髮を笑うてやらむ、と馬を駐めて門に入れば、奥を蔽せる網代垣の二曲折れて玄關の正面に出づれば、馬車一輛石階の脇に控へて、馬も見えざれば御者も馬丁も影無く、裏の流に飲ふならむ。今まで梶の上に鳴ける蟬の人の足音に驚き、垣の外なる合歡木の幹に飛びて徐に鳴音を續けぬ。

近づきて馬車を見れば、丸に釘貫は桃谷伯爵の紋なり。扨は彼を引込みたるか、素六の肚裏も讀めて、これは特に遠慮すべき客なり、内へ入らむは心無き業なれど、雪村に一目此處にても會ひたく思へど、我在るを知らすべき因無きに困じて佇むを、何處にてや認めけむ、給仕の女一人驅來りて、ようこその御入來といふを、お客樣には內々にて、殿樣へ通

じてくれよといへば、呑込みて入りけり。

奥よりの足音、疊ざはり靜にして男とも想はれず、と耳を欹て、窓下の薔薇の花を見入りたるに、御前樣と聲懸けられ、見れば、素六も粹かな。一目に肉の動くも其理、實は之に用あるお角なり。小座敷へと竊に言ふは有難し。されども今日のお客はと半もいはせず、知れぬやうにしてと、手を取らぬばかりに引上げ、此前轉寢の間へ案内して、今日はようこそと、素六の指圖か知らねど、我を待兼ねたる所爲。かうされる理は無きにと首を捻れど、腑に落ちざることなり。

今日は少し話ありて來れるが、彼方に客のあるに我へは構ひたまふな。座敷に此方一人無くては、十五夜に雨降るも同じかるべし。早く行て拜ませよといへば、我の行くまでお合手せよと申付けられたれば、お邪魔ながらそれまで御辛抱遊ばせましと、羞らひつゝやう〳〵言出でたらむやうなり。

實は主人には會はでも可けれど、と持たせかけむとすれば、此方も左樣存じてと素六のぬつと現はれたるに、餘五郎度を失ひて、爲やう事なしに笑へば、實は此方には用無しとや、其は餘り現金と申すものなり。わざ〳〵御挨拶に罷出でたる素六の顏を立てゝ、何なりとも一言仰せらるべしと言へば、細語には隨分噓もいうて、嬉しがらせるも方便といふをお角が聞咎め、多度御方便を有難うぞんじまする、と不意の挾擊を餘五郎物ともせず、方便ならぬ實を言うて見れば、双方に用ありて參りたるものなり。まづ御主人の方を纏むるまで、其方は次にて待つべしといへば、畏りてお角は座敷を出でぬ。

扨改りて用といふほどの事にあらず。さるを今朝は社を尋ねて、此處までも逐懸け來たる某を、それでも葛城餘五郎かと嗤はれな。

玉の巵二重底の念入、色には脆き男の、ふとせし事より浮身を窶して、今更面目も無き仕合、と冒頭のみにては話の筋が分らず。手短く其後を

といへば、先日の御馳走より病付きて、日夜貴君の忘れ難く、家は外になりて魂更に据らざれど、此處は何をいふにも浮世の外なる別莊、思ふまゝに訪來む自由の利かざるより、心はいとゞ亂れて、此髭面も戀ゆゑにや、人の瘦せたるといふに、我ながら羞かしくも可笑し。用とは此處にて、いつにても此方勝手次第に此門の通行なりて、唯一日の首尾をも心まかせにしたき願、聞屆けられなば此上の望も無し。但し本筋の客來ある節は、遠慮すべきは勿論なれど、かく道ならぬ事を申出づるも、切無き心の餘と、枉げて御免しあるべしといへば、素六も然るもの、餘人ならば唯とは言ふまじき所なれど、此男の富は平民の帝ともいひつべく、こればかりの事を枷に此方からも無理の利くべき末を見込みて、猶豫の氣色も見せず、事も無げに打笑ひて、扨々承はりて驚き入りたる御執心、聞えし柳橋の強者お才の方をお手に入れられたるも御尤と、今やう／＼思ひ中れり。

此家は御存じの組織に出來たるものなれば、本筋の客無き折は、暑中の火燵も同じく、誰用ゐる者もあらざれば、有無をいはず御望に應ずべし、但願くは此處へ出入らるゝ事を努々人に語りたまふな。もし過りて客筋の耳にも入らば、遂には珠履の跡に苔蒸す始末にも成行かむ。それだに御含み下さらば毎日の御出も苦しからず。彼者一人にて事も足らざらむには、十二人片端から御佩刀の鏽ともしたまふべし。何も厭ふところにあらず、と世に快き挨拶。さりとは恐入りたる御大氣。眠の覺めたる心地して、今になほ胸裏の清しさ。さらば御言葉に甘えて、毎日も罷越すまじけれど、隨分懊惱く御門を出入るべし。之は御客來中お邪魔申して、然も無體なる願事も愜へば長座は御迷惑、と別を告ぐれば、今日は御閒の身ならば此處にお預けなさるべし。彼者は彼方に顏出さでも一向差支なければ、奧の小座敷にて餘所を憚りつゝ、涼しき物にて一盃飮まれて、一睡なさるゝ內には、片蔭も出來て御歸に次手よし。此を濟ませ次

第白鬚への思召か、日中の風は川岸にて此處に勝れる處なし。雫の滴るやうな月を葉越に眺めて蛙を聞くは、御別邸が無類なり。日沒まで此處にて寛りとしたまへ。中座は御免と立ちけり。

餘五郎望外の首尾を悦びて、素六奴緣無き我頬を牡丹餅打にして、唯は措くまじ。旋てどれほどの事を强るにか有らむ、と北窻の前に足踏伸べて、何の花の匂か、持て來る風を枕に、木葉を炙る日の色を眺めて、やゝ睡氣催けるに、お角は水淺黃の絽に衣更へ、眞白き膚は袖に透きて寒泉玉を浸し、一目見るより午熱は風に霧の散るごとく、此座敷邊に涼しくなりぬる想して、今日はまた格別の姿、江戶に名所の角田川には、これほどの女無くてはと、はや戯れかゝれば、手にせる蘆柄團扇にはたはたと鼻頭を扇がれ、息の止るほど嬉しきにぞありける。

此日を飮暮して、晩凉水の如く、これから人の杯を憶ふ時、身の措所無き蚊の聲に、惜き別れの夏の夜は、鴉より憎きものありと言捨に立上れ

ば、庭の闇ければ御見送り申すべし。灯持て來るまで此處に待ちたまへと行かむとするお角の袂を捉へ、いらぬ事すな。闇が仕合の粹なる天に對ゑて恐多し。醉うたぞ、僵るゝぞ、肩かせ、とお角に縋りて戸外に出づれば、葉末の露に面を拂はるゝ具合がどうも謂へまい、と故と恐がる木下闇に曳込めば、お角は聲を揚げて、其樹は毛蟲の巣といふ間に、ころりと餘五郎の肩に墮ちたるものを、之かと威す氣で摘みたる手觸に、はつと投捨てゝ、居た／＼と駈出せば、お角の蒼くなりて叫ぶ聲に、内庭に螢逐ひたる七八人の女ども、何事かと前後を爭ひて此處に聚り、毛蟲と聞くより身を縮めて浮足になる處へ、餘五郎捻りたる紙を撮みて、此中に大きなのがと持來れば、わつといふ聲四方に散じて遁廻るを、面白がりて逐懸くれば、涙を出して泣くもあり、石を手にして身構ふるもあり、少時響動めきけるに、何時やら皆影を匿して見えずなりにけり。餘五郎獨り大笑ひして、遁げをつたわと四面を眴し、そろり／＼と垣の

曲りへかゝれば、待受けたる六七人一度に聲を揚げて躍出づるに、咄嗟と驚くを見て、復讐と喚びて再び遁散る。殘れる一人の笑聲は、お角かといへば、唯とは有難し。有繫に實はありけり、と手を執りて門外に出づれば、御者は車の戸を開けて控へたり。

世中にこれほど割に合はぬ、冴えぬ役はあるまじく覺えぬ。主人が彼所へといへば、雨にも雪にも面を露して、へい／＼と馬の脊を鞭撻き、仔細らしく手綱掻繰りて、道なる人を叱るばかりが役德なるべし。むかし晏子の御者の揚々たりしは、參朝の途中の顏色にてやありけむ。其をさへ女房は氣性ものにて、間拔なる此方の人、と蹄の泥の鼻下に潑ねたる面を哈ひしとかや。葛城が御者の嚊は何者か知らねど、此態を見せたらば何とか言はむ。旦那は奥にて艷婦を對手に數々の娛樂、醉うて寢て覺めて醉うて、正午から今まで凡七時間、此間門外にて卷莨の四五函も吃し、砂に塗れ、日に照らされ、馬の嚔語を聞けども可笑からず、鬣の勘

定もして見て尚可笑からず、日のある中は馬の蠅を逐ひ、夜に入れば蚊に苛まれ、人は閑なるほど苦しき事なしといふに、さりとは御者馬丁の退屈は幾許ぞや。之をも忍ぶべくむば、歸りて隣の寶をも數ふべし。されども閑なるは、なまなか忙がしくて錢にならぬよりは勝し、と當人たちはさほど苦にもせず、時間長く待たさるゝ時は、車の内にて花合せといふ事をして慰みぬ。此根生でこそ御者も勤まれ、世には眞影流の達人にて、樫の棒挈げて犬殺になれるもあり。

（十四）　煎餅屋の娘

約束はこれより白髭へ行くべきなれど、此所にて樂は足りたるに、風は涼しくとも月は佳くとも、蚊に食はるゝが可恐し、と馬を南頭に立直して、日本橋なる家に歸りぬ。

翌日は遁れ難き用事ありて、夜に入りても忙しく、十時過る頃やう／＼我軀にはなりけれども、おのが家にもあらぬ月下門を敲かむは、寮守を始め其外の女共の手前、主顔なる振舞の迷惑を念はざるは心無し。素六も聞かば面白からざるべし、と今夜は內に寐る事に定めて、麻子の酌にて久しぶりの寐酒を飲めば、此婆もはや心まで凋びて、若き時とは格別の相違なり。

家事向の雜談一通り濟めば、金儲ける話、儉約の話、養生して長命せよの話。全く女房氣になりて、酒の席には置かれぬ代物に變り果てたるに

醉うて腕の割声出して、木遣節唄ふ元氣は無きかと嘲れば、男は死ぬまでも其氣合にてよし。女は世帯持ちてからは、紙に澁を引きたるやうに、外見はよろしからでも、物の用に立ちて、丈夫向なるを最上とするものなり。夫の酒の對手して、葛籠の後なる三味線取出し、今は行らぬ流行唄を齒拔聲して唸るを面白き了簡にては、九尺二間の家内にても治まることにはあらず。五厘が菜漬買ふ世帯にては、米を淅ぎ消炭を摑み、下帶も洗へば便所の掃除まで、手一つにするが役目なれば、某所小町とか福助娘とか言囃されし娘にても、半歳とは經たぬ間に世帯寂びて、時雨るゝ庭の菊のやうに見る影はなくなるぞかし。又は官員の奥方、大家の內儀、米薪に屈托無くても、分に應じたる苦勞といふはあるものにて、身代よろしければ其だけに氣を役ふことの劇しき譯は、自身戰せざる大將の、器量人に優れざれば勤まらぬに同じ。

此心配苦勞の爲には、牛乳を飲み、肉を食べ、湯は何十度と定め、住所

は山の手、と醫者の指圖通りにしても何にかなるべき、肉おちて色の惡くならぬまでも、血氣自然と衰へて、容貌の醜うなるは免れ難し。男は然りとも知らず、女房と疊は新しきがよしなど、と言ふ口の歪まざるを有難しとも思はず、內の嚊の昔に變れる姿に愛相盡して、餘所の女に狂ひ散らし、我女房の衣類を盜出して不義を樂むもあり。お岩の芝居を見るに、伊右衞門といふ奴女房が煩ひ惱める床の、蚊帳を引剝ぎて質入する處あり。世間の亭主の非義非道なること、大小はあれども此鬼の心意氣に露違ふ所なし。之を思へば、凡そ人の女房は給金無しの炊妾といふものゝ如し、給金くれても此樣にされては、誰か腹立ちて逐出ざるものあるべき。さるを女房は愚痴も大聲には言はれぬ事になりて、天下にありとあらゆる滿らぬものゝ惣本家なりけり。

恁く夫に飽かれ疎まるゝ因を何かと念へば、姿の醜く、容の淺ましくなれるが爲なり。之をまた何ゆゑにかといへば、世帶の苦勞するに外なら

ずして、此苦勞は道樂にする事にあらず、家を懷ひ夫を懷へばなり。その女房の有難き事は思はず、面の皮が茶色になりたるばかりを大恩に換へて、疎むといふ事畜生もすまじき無道なり。身貧にして朝暮の烟も颺げかぬる家に犬ありて、之に敎へられ、垣の根方を掘りて莫大なる金銀財寶を一鍬に獲む人あらば、此男は犬を何とかせむ。緞子の裀に載せて三度に牛の精食を食はせ、斃れたらば骨を葬り、皮を祭り、守神にも崇めて、其家の續かむ限りは祭祀を怠らざるべし。

人の女房の其家に功ある事、金錢財寶の形こそ無けれ、其にも劣らざる重寶になりて、畜生の出來ぬ事を能く爲る人を、犬よりも酷たらしく取扱ふは、更に謂無きことなり。さればにや、女は罪深きものにて、前生の報に因りて、かくは生出でたるぞ、と說敎にもいはるゝ身の因果を嘲ちつゝも、女房となれば家を治むるが役とて、其だけは爲ずにも置かれねば、身を愼み心を堅くして、世帶の監督を勤むるぞかし。

此大役を持つ身の、放縦にして埒の開くべきや。なるほど我を人の昔はと問ふものあらば、憚らず湯島天神の矢場女、異名を蜘蛛のお重と名乘るべし。されども楊弓の的の覘ひ方はと尋ねむものには、今は日本の葛城餘五郎が妻麻子と坐を正して、無禮の擧動あらば目通りを退げさすべし。さる身分の御方が褻らはしき猫の皮を膝に上げ、賣女に等しき色言葉に戯むるべきや。藝者が欲しくば新橋、柳橋、御馴染のある方より召乄たまふべし。

此方は器量萬夫に優れ、素手より此身代に仕上げしほどの御方なれば、尋常の男のすなる道樂を爲たまふを、惡しゝと咎めまするにはあらず。親より預りたる金にあらねば、一代に皆無に乄たまふも御意次第、其も亦善。されば此方の今の行ひに非を打つにもあらねば、さら／＼愚痴をいふにもあらず。但一言の、割青出して木遣節唱ふ元氣は無きかとおほせられし、元氣がちと癪に障りて、それよりは數百層倍の元氣あればこ

そ、此家の女房が勤まるといふ事に、お心の着かざるにや。物の陰なる花は人の見てくれぬが口惜さに、よしなき事を申して、定めて御酒の不美かるべしと笑へば、又叱らるゝか知らねど、女房がいつまでも年寄らぬものならば、藝者買ふ世話もあるまい。さりとは仰せの如く今夜の酒の不美、飲むほど醒むるが不思議なり。

山神の靈驗はどれほどか知らねど、これなれば內に臀も据らぬ筈。人間四十を越してからは、血氣日々に衰行くばかり、此時滋潤回春劑を投せざれば命保ち難し。皺の數の一筋も殖さぬやうにせむとには、唇頭一片の紅、淡粧白粉の臭にあらざれば、外に何か奇効を奏すべき。不老不死の薬といふも是なりけりと、昨夜の長談議我へ言ふにはあらずといへりと言質を取りて、今朝も早く飛出し、四ケ所の商社を巡りて、商の模樣を監るに、今年は近年に無き好景氣、仕事は皆上り坂のとん〳〵拍子。一年は袖手して遊びても、冥理には盡きまじき利あり、と直樣雪村の別

莊へおつ飛しけり。

逢ふ度毎にお角の風情に澤が出、心意氣は耐らぬほど面白く、どうやら本物の樣に見えて、附燒刄とも想はしからざる處あり。之では捨てゝ置かれぬ氣になりて、餘五郎の心はいとゞ闇になりぬ。

夏の日長けて風湘簾を弄し、疊に實梅の影重く、花稀なる蘭の床に仍香る小座敷に端居して、物思はしげに團扇の柄を嚙むお角の姿を熟く見入れば、身内よりとろ〳〵と脂出でゝ、此儘に肉も蕩けて、骨ばかりの餘五郎になるかと、氣も心も消々になりぬ。之を花に喩へたらば、日影を眩く、少し面を背けたる紅梅のごとし。お角とは下作なる名を呼びたるもの哉、紅梅といふ名にせよ、と商人も有繫雅の心を動かせり。

可厭がるものを無理に紅梅にして、名附親が引手物取らすべし、と檜垣を金蒔繪にして、紅梅の花には小粒の珊瑚、幹の蘚苔にはエメラルドを鏤めたる差櫛を造らせ、嬉しさうなる顏を見るが樂さに、行度毎の手

土産の中には、お角の心に染まぬもあれど、高金を吝まざる品のみなれば、どれにしても可厭なるは無く、身のまはりの一切悉く餘五郎の心を籠めたる物ばかりなれば、之を着飾りて他の席へ出づるに、野中に一本の牡丹咲きたらむごとく、お角ばかりが優れて目立てば、客は眉を顰めて、彼はと我馴染を棄てゝ此女の名を多く呼ぶことになりぬ。

其實お角より媚目美き女二人あれども、木綿着て立並ぶ時の外は、身に着く諸道具の立派なるに、五割方お角に風情添ひて、人は此中第一の艶婦と見紛ふなり。之を聞く餘五郎の喜悦は、いよ〱發奮の基となりて、思ふまゝに金を費して、愚なる親の我娘を祭禮の舞踏に出すほどの張になりて、我見る目よりは人に譽めらるゝを樂むほど餘五郎の惑溺強く、日本一と賣れたる男の肩衣外して、迷へば賢愚も無差別なり。なるほど在五中將は忍ぶ闇夜の垣の崩れより、犬踞ゐて通ひたまひしに、御存じの烏帽子狩衣姿にて、脱げさうなる靴を召されし御狀は朝臣なれども、

茨に面を搔かれ、脊中に泥を粘けさせられし御心意氣のほどは、どんどろ坂の芋右衞門が頬冠の鼻唄に唐蜀黍の茂みを押分けて、入る月を惜むも同じ理なり。唯譯も無く埒も無く性根を亂して、慕はるゝ身は髯男も憎からぬにや、外に又思はくありての事か、それは朋輩も識らず、誰の目にも着くは、お角が此頃の樣子、浮く時は留度も無く浮かれ、沈む時は病あるがごとく沈みて、一念此の男に打込みたる氣色を見遁すものはなかりき。

此事いつか素六の耳に入りけれども、聞かぬ顏にて何とも言はざりき。唯女ばかり十餘人の姦しさ、お角の仕合を妬む餘り、部屋々々にて陰言は更なり、折に觸れては酒の席にて、客の前をも憚らず、謎のやうに此事實を微見かせば、唯彼聞知りて、對手の誰かは知らねど、事實は一々證跡ありと、お角を捉へて譃るもあり。何の事か知らで、聞きしまゝに紅梅と呼びて、水破拔たる氣の御方もありけり。

餘五郎が迷へるほどの熱度にてはあらざれど、お角も此髭を憎からず思染めける氣色にて、訪來る日を樂みに、會へば半日話放さず、歸してからは朋輩に譃らるゝを結句嬉き樣子なり。

今宵も餘五郎を還して、千話の名殘は仍耳に留まり、思はず獨り笑まるゝ顔を木間の月に掩して、蚊帳に涼しさの入るまで開けたる窓に靠れつゝ、其身の行末を慮ふるに、此處にいつまで抱へられて、僅の衣服出來たりとて、何にか成るべき。女の身の賣るべき花は色のみなるに、年老けて肌理疎うなれば、搆ふもの無さに、今は彼等がと卑むる男に、賴むやうに乞て添うてもらひ、一生味噌漉挈げて芥溜の傍に老果つるは口惜しからずや。

親は築地に其日暮しの鹽煎餅屋。活計の苦しさに我に色を賣らせ、月十圓の給金にて此家に住込ませ、其内七圓を家の扶助に、兩親も此頃は檻褸を下げず、折々は魚類も食べらるゝほどになりたるが、我十七の年よ

りはや色を賣らする下心にて、妾の口を望みけるが、いづれも相談にならぬ安妾の申込のみなりけるに、我容色を惜みて滅多に賣らず。後の出世の端緒ともなるべき高家の對手をこそ願へ、一月限にて鼬の道の旦那取るは、可厭な事と更に取合はざりしに、此年の春此方の話を聞きて、家内中の望む所、と早速上りて奉公えて見れば、中に入りし男の言に違はず、御殿がゝりの家内の模樣。御給仕する御客樣は、新聞にて御名を聞くよりは、拜謁なるまじき雲の上なる歴々の御目通に出でゝ、角よ角よと親しく御言を下したまはる冥加なさ。おのれも煎餅屋の娘の顏はせず、尊き御方に、酒の席とはいひながら勿體なき言を申懸け、其をも御心に障へられで、御情を懸けらるゝ仕合は、親どもは固より己にも夢のやうにて、譯が分らぬほど出世したる身になれば、又此上が考へられて、出世といへば、出世といふやうなものゝ、御酒のお對手なれば取も直さず藝者なり。御意は悟がれず御枕の塵を拂ふ身は、女郎に異ることなし。

誰と一人に定まりたる妾ならば、其にて身も落着き、行末も心易けれど、今の有樣にては何時暇の出やうも測られず。よし又暇が出ぬと云ても、三十四十まで主持ちては、風引きて藥一つ飲むにも、茶椀を戴かねばならぬは愁し。

さればとて此處を出でゝ身を定めむにも、裙模樣の紋服着て綿帽子冠りて見すればとて、出處は知れたる煎餅屋のお孃樣を、奥樣といはせる器量人は婿にはならじ。左右は此處に馴染める人もあらば、身を任せて末々の事を計らむもの、と忘るゝ間は無かりけるに、いかなる神の引合せか、誂へに寸分違はぬ葛城樣。大畫の名は日本國中に鳴渡り、妾百人持ちても差支無き身分ぞかし。

此人に頼までは、と初めての契りの夕より念はざりしにはあらねど、我を一時の玩好か何ぞや、心の知れざる人にむざと云たる事言出して、慾深と底を見られなば、憎からぬ思も忽ち消えて、其場から疎まるゝは知

れたる事なり。焼繼したる茶椀の打付けても、其處からは割れぬまでの日が經たでは、滅多なる事は言はれじ、と氣を撓めて待ちたるは今日此頃なり。十に九まで否とは言ふまじ。泣付きても身脱してもらはねば、又と恁る時節はあらじと、横になりてから、餘五郎口説の文作を種々に工夫したりけり。

（十五）砂糖餅

餘五郎嚮に素六を談じて、毎日にても來て遊ぶことを允されければ、我持物のごとく遠慮無しに舞込みて、彌が上に、酒食の雜用まで心配に及ばれては、なか／＼來難うなりて、折角の御志が嬉しからず、と受取らぬといふを無理に取らせて、門番庭男にまで行亙りたる心附して、女等へは手土產とて、折々現金を握らすれば、誰か餘五郎の頻繁見ゆるを厭ふものなく、盛夏の氷水ほど喜ばるゝに自から肩身廣く、馬車を玄關まで横附にして、車輪の軋る音を聞けば、ありたけの女ども何を捨てゝも走出で、綺羅花のごとく居並びて迎ふるまで、氣障がられぬ人にはなりけり。

此上は心措かれず、我も本筋の客のやうなる顏して、隨分精出して通ひぬ。今日はわざと夕暮より來て、ゆるりと宿る氣か、馬車を還せしは上

首尾、とお角は心に喜びて、醉のまはらぬ前に、眞面目にてお願ありと言出せば、こは改りたる言かな。我等が中に遠慮は無き約束、とは誰もいふ句なれども、多くは外して逃ぐる輩の言草なり。屹度聞いて下さるか、と先づ念を推すも例なり。まだ入用の此首だけは遣られぬが、其外の事は聽くにして承はるべし、と膝に手を置けば、お角は忸怩したる風情、之を見せて、二三分は男の心を鈍らせ、軈て言出すかと見れば、(あの)といふ辭を斷々に三つ四つ續けて、屹度聞いて下さるかと衝と寄添へば、正せし膝は斜に傾きて、冗いこと、と美しき横顏眺めて玉の緒の搖ぐ時、此奉公のいかにも愁ければ、身儘になりて始終御側に居たき願、と舌を操りて甘えたる音を出せば、餘五郎打笑みて、我には聊かも異存なけれど、雪村が放すまじければ、今といはず、時節を待てと言へば、悲しき眉して答無く、身を背けて燈火の陰に向ひ、紅梅の刺繡したる手巾を兩手に拈りて歔欷る忍音を、餘五郎聞咎めて、肩越にお角の顏を覗

き、泣くかと怪みつゝ、[illegible]かにしたるぞと拗ねたるを撚向けむとすれば、あつと手巾を顔に當てゝ、泣くとは心弱き女かな。其顧慮へずとは言はざるぞ。雲村が抱へて其方は主ある身ならずや。我何程の金銀を積まぬとも、此處に無うてはならぬ女、放さじといへば其までなり。されども、其方が一通の奉公人ならば、親の大病と言立てゝも、暇乞ふ便はあれど、給金出す上に、年季の中はいかなる事ありとも還さじとの約定にて、三年縛りの手宛まで受けしからは、買はれたる體なり。それとても雲村が慾徳ずくにて、其方の色を賣るばかりの心ならむには、些細の金にて埓は明くべけれど、さにはあらざる此家の呼物。向島の春に人の出づるも櫻あればなり。尚又雲村は八方へ目を配り。今も油斷なく艶なる面を索めて、拂底を喞てる最中なるに、其方を手放さむことは思も寄らじ。此の理窟が分らぬか、長く待てとは言はず。其間辛抱せよと宥むれども、わざと頑是無く不肯しく、いとゞ涙に咽べば。餘五郎はお角が持てる手

巾を奪ひて、いつまで泣くと窘むれば、袂に換へて泣顔掩せり。此上は言ふこともなく、雨に惱める姿を下物にして二三盃手酌で飮むを、お角は銜と身を起して銚子を取上げ、又彼方向きて俯しになりけり。

酒は取られる。お酌には泣かれる、希有なる晩、と呢話をしかけ顏に呟けば、お角は聲を曇らせ、取られるも泣かれるも皆あなたの不實から、旦那樣が放すか、放さぬかは、お話を遊ばされての上ならでは、善も惡も知れぬものを、始めから放さぬに獨斷して、逃げたまふ御了簡よな。さりとは思違へて、今更爲方無き深陷。恁る不實の人が忘られぬとは、よく〳〵因果の上の因果よと泣伏せば、樣子ありげなる言の聞捨になり難し、仔細を尋ぬれば、御胤を宿したる證據はと、或程合點行く物を見せぬ。

見るべきものを二月見ずといふに驗はなけれども、乳頭の稍黒うなりたるに爭ひかねて、此上は雪村も承引すべし、明日にも談じて見むと言へ

ば、お角はやう〳〵涙を歛めて、お心には進まぬながら、是非無くといふやうなる御口氣、それにては少しも嬉しからず。愁ひに此家を出てから捨てられむより、捨てらるゝものならば今の内、此場で捨てたというて下さるが情ぞとあれば、餘五郎眼に笑を浮べて、所望とあらば隨分捨てゝも苦しからずといふ顏を。お角はつれ〳〵と打目戍り、軈て又泣聲になりて、所望とは誰が申しました。あなたは喃と不意に取附かれて、轉けかゝるを床柱に支へられ、何の彼のと擧足取りて、喧嘩仕懸の強談は其意を得ず。胸には在餘るほど實も情も籠れる男なれど、色の道には未だ修行足らず、性來口不調法にして、人の悦ぶこと言ふ術を知らざれば、かの虱とかいはれて口で殺す事は不得手ゆゑに、心にも無くて氣に障る言いふも折々なれど、面を見ても知れかし、この蒙茸〳〵の髭髯で、男傾城のやうな口上がいはれうか。言多きは品少し、見たよりは食うて味のある餘五郎。色に持つては德用の代物なり。今夜の所は涙も出さず、

愚痴もいはず、いつものやうに睦しう飲むべし。明日は談して見て、肯かねと雪村が意地張るならば、我も意地になりて身脱さすべし。天へ升りて口を攫むといふにもあらず、高が女一人の出入に何程の事のあるべき。馬車に載せてつうと伴還り、一枝もらうたと後から聲懸けて濟む事なり、と手に取るごとく言うて除けぬ。

餘人ならば如何あらむ、葛城餘五郎なれば其程のこと譯はあるまじと念へば、お角も心落着き、冷えたる燗を更へて、おのれも前祝と常よりは過して、亂るゝほど男は面白く、つひに覺えぬ今夜、と餘五郎も杯の數を重ねて、夜の更くるまで樂みけり。

此男流石に非凡なる膽ありて、醉うても勤むる所は勤むる了簡、確として動かされず。これほど打込みたる女の側に、窮無き樂を捨てゝ、今朝は大事の用あることを忘れず。迎の馬車に飛乘りて出社を急ぎ、社長室の風通好き椅子に睡たき顏もせず、支配人重役等に應對して、千里前の

金鍔を坐ながら手攫にするやうなる籌策を、宿酔の頭腦から苦も無く割出して、心閑に一本の葉卷を薫らし、一碗の珈琲を啜りて直に立出で、雪村の商社を訪へば、折よく居合せたるを、晝飯にとて引出し、我車に乘せて冷しき奥二階に誘ひ、首からお角の事を言出せば、推慮に違はず、彼は呼物なれば、今は手放ちがたしと言ふ。

其は此方にても承知にて、恁く押附がましく願ふには仔細のある事なり、と妊娠して早二月にもなれば、長くは彼所にも置き難きに、今は其ぞと人の知らざるを幸ひ、宿許へ下ぐる分にて此方へ賜はらずや、其代には御迷惑にはならぬやうに計らふべしとは、金轡を食ませむとの意なり。素六聞終りて、最早脹れたるか。砂糖餅と女子は脹るゝものに極りたれど、色を賣る身には大きな瘤なり。勿論彼所には置き難けれども、贅物も退けば舊の體に復り、年寄らぬ間は幾度の用にも立つべきものなれば。下されぬかと除五郎の問へば、折角の御頼なれども、代りのあるまでは

進せ難し、と思の外見事なる拒絶に、女々しく強ふるは餘五郎にあらず。然らば此事は水に流して、今まで通りに出入らせたまへ。慾には限無く、我儘ばかり願うて申譯なし、とおとなしき言分に、御挨拶痛入りたり。別業へ御入來の儀は構ひなけれど、毎々女輩へ御心着は以後御無用になされたし、と堅き挨拶の中に食事も濟めば、素六は二時に來客ある由を言立て、近日を契りて歸去を急ぎけり。

(十六) 南無三寶

素六が此女を放さゞるに所以あり。かの別莊に抱へたる女の十餘人、歴々の御方に仕ふる身なれば、夜は眞綿に顏を裹み、櫝入にして仕舞ふやうに見せたれど、撲いて血を出させる外は、何を爲うとも疵のつく物品にあらざれば、素六は好きな眞似して、いづれか御多分に洩せるは無かりけり。さる事と知られなば、此箸取らるゝ方もあるまじけれど、嫌ひにはあらざる彼老爺の事なれば、と疑ひつゝも其ぞと確に見ぬ事淨く、舌鼓を打ちて喜ばれぬ。玉の器に盛れる八珍も、座敷にて見れば咽の鳴るを、料理する所を窺はゞ、食ふ氣には成られぬも同じ理なり。

世を憂しと捨つる人はあれども、米の飯に飽きたるものを見ず。何歲になりても女は可厭ならぬ人の心を和げ、死後の執着なからむ爲、寺の本堂の天井にも女の姿を書くを思へば、忘られぬ物と見えて、客のある夜

は素六も醉うて此處に泊り、閑の日は折々遊びに來り、銀の鑷にて白髮を拔かせ、柔かき手熨に皺を延して、一人々々對手にして試みけるに、お照とて十八になれるが心性初々しく、百人が百人見て可厭といはぬ容貌。美しくして物靜なるは、魂のある人形のごとく、道具で謂はゞ時代蒔繪の文匣なるべし。素六も此を見立てゝ濃厚と粧らせ、名を聞かれたらば何姫と言へと謂はぬばかりに仕立てたれば、われながら側へ寄るは勿體なく覺ゆるばかり綺麗なるところを賞翫して、茶一碗持て來るも、お照ならでは氣が濟まざりしが、餘五郎お角を手に入れて、倶浮れの面白さうなる模樣を、餘所ながら見るに不圖心變りて、一夜の酌に此女を招きて戲れけるに、主人の威光ばかりにもあらず、曩に二三度の馴染もあれば、難なく御意に從ひて、其夜より枯るゝも同じ野邊の草、とお照は朋輩に此怨を語れり。

今となりて素六は憖く結構なる物を、むざと人に貸したる疎忽を後悔し

て、我庭なる柿を猿に喰はれてゐまふ意氣地無さ、と賊を見て繩綯ひかくる思案の最中、いつも彼奴めは一手先の捷く、與れと大きく出られて、ちと遣られぬ譯ある事は隱し、今度ばかりは一番先を越す覺悟にて、體好く斷りけるに可厭な顏もせずして退込みしは、先方にも苦肉の計畧ありと見えたり。敗を取らば大きな野呂松、と鞭聲頻りに馬車を飛して、向島の別莊へと急がせたり。

疾風の砂を捲くがごとく淺草並木まで來にける時、後より御者の名を呼ぶ聲に馬を駐めて、素六は窓より差覗けば、二人に綱曳かせたる腕車をひた〳〵と寄せて、帽子を取りて一禮するは重手代の笹川なり。彼件はいかに運びたるぞ、と尋ぬる聲の下、至極の上首尾に就き、御面談申さでは克はざる事ありて、これまで御蹤を追ひました。此處は往還にて長く車を停め難し。委細は途上申上ぐべければ、直樣御歸あるべしと馬車に乘遷れば、車は南を指して走りけり。笹川より始終の樣子を聞き

けば、豫ての計畫首尾好く運び、三人の競爭者を排倒して、請負は我手に落札せり。是といふも主任の某姓が一方ならざる盡力にて、此報酬は吽としてもらふぞと仰せられし由を語れば、素六は頷きて、是皆向島の酒の效能、今に始めぬ事なれど、彼別莊は實に我家の金穴なり。そこで我を召さるゝか。いかにも急の仕事なれば、其の樣に頼みたく、外に是非とも面談したき義もあれば、歸り次第社長を遣はせとの御意といへば、之より直に伺ふべし、と明日から着手する手筈を授けて、笹川を途中に下し、素六は麹町なる某姓の自宅を訪れけり。

葛城餘五郎は見事に斥られて、外に爲む術もあらざれば、係る時には鐵血政畧で行くが一の手、と卽座に思付きて一散に向島へ飛し、お角に會うて素六の承引かざる趣を語れば、いかにも胸には思中る事あれども、途方に昏れたる顏して、此上は何として下さる。我も意地になりて身儘にしてやるとの御言は忘れませぬ。反古にはしたまふなと言はれて、反

古にせまいとて今日來た男の寸方を聴け、と何やら呻けば、御志のほどは嬉しけれど、さうしては貴方の御迷惑、また二つには恩ある主に餘りの不義理なれば、それぱかりは、とは心弱し、我迷惑にも其方の不義理にも、ならぬやうなる肚ありて爲る事なり。手後れになりては事難し、急げ〳〵と促き立つれば、お角は部屋に驅入りて、秘藏の諸品を身に着け、嵩張る物に思遺りて捨て難けれど、持出づることの克はざるを口惜がり、まだ外に忘れたるものもや、と小簞笥抽出し、手文匣開放して攪旋せども、事の急なるに心惑ひて、日頃大事の品も思出されず、指環を犇と穿めたる兩手を膝の上に置き、簞笥の前にしやんと坐りて投首せる處へ餘五郎忍來りて、愚なる慾を乾し、見苦しき跡を見られて嗤はれな一品といへども今身に着けたるものゝ外は持出すべからず。取散らしたるものを舊の如く形附け、座敷の亂れざるやう始末すべし。女郎の驅落とは違ふぞ、と窘められて卒に慾を離れ、舊の座敷に復りて四邊の樣子

を候へば、葛城の來る日は女ども皆粹を通して、呼ばねば出て來るもの無く、表座敷にて遊ぶもあり、部屋にて午睡するもあり、此座敷はいつも閑なるものに極めて、半日人聲せずとも見に來るもの無ければ、お角は玄關に忍び出でゝ、餘五郎の馬車に乘れば、心得たる御者馬丁は高話をしつゝ、空車を曳還るがごとく擬して門を通れば、お角は蔽膝を冠りて身を伏せたるを、人無き車と門番は一目見て直に坐睡りぬ。續きて餘五郎も立出で、待たせたる處より同乘して、曩に才藏の腰懸にせし。深川の別莊へ連込みけり。

素六は用果てゝ夜に入りたれども、心急かれて明日を待たれず、向島に來て見れば、取締のお八代といふ女目色を變へて、先刻よりお角の姿見えず、宿へも人を出したるところと聞きて、南無三寶、葛城は見えざりしかと尋ぬれば、なるほど四時頃お入來にて、ついぞ無き御歸の早さを怪しくは存じましたれど、お伴れなされし樣子も無しと治郎助(門番)の

中立に、何時何處より驅出せしやら、一向合點が參りませぬ。取締は私の役目、何とも申上げやうがござりませぬ。草を分け、瓦をおこしても、探し出さではと面目無き顏色。素六は騷がず、宿を尋ねたりとて居る心き樣なし。在所は大方知れたれば、と聞くよりお八代は膝を進めて、御前はお角の在所を御存じとや、それは何處と二度呆るゝ。

お角の部屋を見しかとの訊問に、一應調べしが格別變りたること無く、着のみ着のまゝにて出ましたる樣子。夜にもあらぬ眞晝中の事なれば、正門より出でしならば、治郎助の見付けざる筈はあるまじきに、葛城樣の空馬車の出でし外には、何も見ずと申すからは、裏の垣を踰えて待つ舟などのありて、川を遁げしか。對手は葛城樣の外はあらざるやうに想はるれど、彼方がと七分まで信せざるは迂濶なり。葛城が拐出せしに極りたれば、今に及びて騷ぐとも效無し。霎時此儘に捨置け、と心の鬱勃は色に見せざる落着顏に、お八代は三度呆れて、深き仔細のある事なら

む、と我が落度にもならず、お小言を戴かざるを僥倖にして部屋に退りぬ。

今日並木より引還さずば、今度も後手になる事は無かりしに、わづか四五時間の差から、腹立たしや奪取られて、我は馬鹿な面になりけるよ。一度彼の手に落ちしからは、物が物だけに取戻さむは面倒なるべし。握りては容易に放す男にあらず、一時の洒落にして嘘から實を出す氣は知れたれば、家暮らしき懸合もならず、さりとて持主の素六が指を啣へて、この儘見てゐる譯には行かず。普通の雇人ならば左も右も、情を懸けし女なれば、男の一分に關る事なり。何としてか取還すべき、と獨り思案に暮れて飲む酒も醉には成らず。好き手段を考へて考着かざるほど、餘五郎が無作法過ぎたる爲方に腹立ち、群來る蚊に癇癪發して、女どもを皆喚び、風口ばかり開けて前後を取巻かせ、手毎に團扇を持ちて扇がせけるに、風あたり強くして盃の酒は溢れ、煙草の火も持たぬに、これで

はならぬと三人ばかりにして徐に扇がせつゝ、本木の花のお照の酌に小しは醉も出て、此頃上達したる義太夫を聞かせむ、酒屋でも寺小屋でも好きなものを望むべし。お八代に太棹を持來いと言遣れば、入違ひに小女の入來りて、葛城樣より御手紙と文筥を差出す。披き見れば醉筆と覺しき字體にて、角事妊娠中は此方にて世話したく、當分預り置く旨を洒落まじりに認めたり。

案に違はず餘五郎が伴れたりけり。其肚も此方の思はく通り、何處までも洒落にして、結極は洒落流れの眞面目にしてのけむと謂ふが手と見えたり。硯を持てとあれば、給仕の一人が蒔繪の硯箱持來りて墨磨れば、返書も亂筆御免の醉中に、よろしく賴む趣を亦洒落交りに走らかし、文箱に納めて、之を使のものへ渡し、何處より來たるか、先方を尋ねよと吩咐の通りを訊せば、使の男日本橋よりと答へて歸りけり。

素六聞きて、日本橋とは虛僞にて深川なるべし。由無き事を蔽せしもの

かな。我が逐懸けて訪ぬる事と懸念せるか、素六も一匹の男なり、取返せばとて餘五郎の爲しやうなる陋き手段は爲まじきに、さりとは馬鹿念入れて可笑や。

翌日腹心の某姓を深川へ差向けしに、餘五郎不在にてお角に會ひければ、まづ當人の了簡を聞くに、向島を遁げたるは全く葛城の度鐵なれども、世話云てくれと頼みしは自家にて、雪村方の奉公に不服などのあるにはあらねど、行末を案じて見れば、いつまで彼處に在るべきにあらず。單身の落着きたさに脱出せし罪は輕からねど、御謝罪は二三日中に餘五郎より人を以てすべしとの事なれば、其上にて御話合ひ下さるべく、旦那樣には重々濟まぬ譯なれども、御迷惑は懸けざるやう取計らはむと申せば、私もそれを頼にいたして、會はれぬ筈の貴方にもお目に懸りますると膽の据りたる口上を、歸りて其儘語れば、素六一度は憎き言分と腹立てけれども、慾に轉びて餘五郎に身を委さむ意の女を、骨折りて取戻し

た所で面白からねば、此處は大腹中を見せて餘五郎に氣毒がらせ、後に旨い事する餌に用ふが割方、と商人は何するにも算盤を離さず。大方の男色慾には大事の命をも要らぬ氣になる所を、素六が錢勘定にしたる手際は、一代にあれほどの身上拵へる男の考量は格別のもの、と後に聞きし衆の語合ひけり。

四日過ぎて、葛城より彼始末に就きて談したしとて、四天王の一人なる赤澤藤馬といふもの來りぬ。世才六分に學識四分の化合物にて、英國にても才子と言はれしケムブリッジ大學の法學士なり。神妙に今も官に在らば、秘書官ともあるべき身なるに、小手の利過から仕損せし事ありて職を免せられ、才無くても馬鹿律義の奴が安泰のお役所勤は、釣堀で魚捕ると同じ事にて可笑からず、とそれより術を韜みて世を玩び、何するにもあらで色酒に興じ、新橋の藝妓六十餘人の英語の綽號を附けて行らせしは此男なり。

名を售らむための奇行世に聞えて、野に遺賢ありと葛城に識られ、今重用ゐらるゝ、幕賓なるが、高が女一人の出入に係る人を役ふべきにはあらねど、餘五郎の名代として故と事を重々しく爲、勗めて素六が感情を害せざらむが爲なるべし。

いかなる筋かと赤澤の演ぶる所を聞けば、彼女を餘五郎が妾に爲たく、就いてはお角の身の代金千圓にて枉げて讓られたし、と謂ふが大體なれど、之を赤澤の辯舌にて、玉を轉すごとく、何處を捉へて擊込む所も無く、聽くもの迷はされて夢中に唯といはせる上手、千圓が物を一萬圓にも賣附くるは、此舌頭の運用ばかりなり。

素六は一言もいはず、大樣に時々打笑み、打頷き、言ふだけの事を一通り言はせて、彼女は金錢には換へ難き大事の品なれども、葛城殿が我不承知をも肯入れず、竊に連出せしまで御執心なるものを、戻せとは心無きに似たり。又身の代とありては十千萬圓にても不足なればゝ、何も申さ

ずに彼女は進上致すべし。隨分末長う娚がりて遣はさるゝやう仰せられ下さるべし。明日にも深川へ向けて彼が荷物を屆け遣はさむ、と奇麗なる挨拶は花叢に蛇ありと氣味惡く、赤澤は辭を盡して、此方よりも志なれば、申出でたる金額は受納あるやうに、と說けども乞へども更に肯かず。さては後の祟怖るべしとは思ひけれども、其は其時の事にして、彼女を戻せと強く出られむよりは、當座なりとも形の附きたるを役目の仕合にて、然らば仰せの趣を主人に傳へ、再び御面會を願ふ事もあるべしとて歸れり。

素六は翌日お角の荷物を深川へ送りて、此女の事はふつと思ひ捨てゝけり。それより二日經て、葛城方より右の禮として貽り來したるは、水神浪に半身を現して、兩手に怪魚を擎ぐる大理石の像なり。總高七尺餘、今も向島の庭なる泉水の中に立てるを、人戯れに呼びて身替秘藏といふとぞ。

（十七）尺八の稽古

差當りてお角を圍ふべき家無し。とても新しく普請するものなれば、其方が望む處に建つべしと言へば、苦しからずば此處に置きたまへ。外に望む所もあらずとは、變りたる所好かな。表の垣も古び、庭も手を入れざれば思ふまゝに荒れて、座敷の壁も痛く黒み、光るものは椽ばかり。向も惡くはなけれど、構造の宜しからぬにや、いつも雨の日のごとく其處等の薄闇きは、半日居ても氣の閉づる家を、何處に見處ありてかと尋ぬれば、女心を哈ひたまふな。私出生は深川にて、此町盡頭に十餘年住みける頃、此家は江澤といへる金貸の住居にて、お鈴とて私に二歳上の美しき娘あり。長唄の師匠の同じかりければ、いつしか中好くなりて、數ある朋輩の中に我ばかりは、友にしても好きものと、親御にも慈しまれ、日毎に御對手に呼れて遊びしは此次の間なりき。

我家は貧にして、六疊四疊二間の棟割長屋、二階は物置に掛けたる猿梯子の、踏めばひし〳〵と音する茅屋に比ぶれば、此家を御殿ほどに思ひて、食事には菜の數々、菓子は戸棚に山の如く、同じ人間に生れながらお鈴樣の仕合は可羨さの餘り、我も一度は恁る家に住みて、正月着るやうな衣服を寢衣にして、此半分の榮曜して見たしと浸々思ひしが、其娘が十四の春父御の病死とゝもに身代分散して、母御もお鈴樣も夜遁同樣に行方知れずなりて、今に何の音信も聞かず。此家の造作變りたる所多けれども、見覺の面影はなほ殘りて、庭の佇舊時に變らず、子供に復れる心地して、漫に其頃の懷かし。初一念の屆きたると思へば、住荒れたる此家こそ、我には玉の臺なり。傷みたる所に手入れして、此處に住まはせたまへと言ふ。

さる由緒ある古蹟ならば、何樣其望も理なり。十分修復して見苦からぬやうにして取らすべしとて、日ならず註文通に手入して見れば、舊が舊

の普請なれば、葛城の妾宅と人に知られて、愧かしからず幽しき構になりぬ。

お角といふ名は賤しとて紅梅と呼換へ、かの銀公が唐衣、きては寐る夜の重りて、秋の半ともなりぬるに、其後は更に腹の脹るゝ氣色も見えず。乳頭の色も其儘にて張れる樣子は無く、身體も常に復りて、妊娠にてはあらざりけり。お角は之を悲みて、餘五郎の顔見る度に返らぬ愚痴をいうて、可厭がられぬ日は呵らるゝなりけり。

一月餘此女にのみ心を奪はれて、白鬚のお才が事はふつと忘れたるを憶出して、まづお角も我物に極れば、これから死ぬまではお膝に手を載せて、おとなしう我を待つものを、今日に限りたるやうに顔見に行かでも、首尾は心のまゝと安心して、無沙汰したるお才を尋ね、口説をしかけられて困らせられて遊ばむも、氣が變りて一興なるべし。多忙に久しく遇はざりしが、まだ老女にもならぬかと入れば、お蔭樣にて老女にはなり

ませぬが、干物になりました。それにつけても御前の若々しさ、深川邊にて近頃人魚の揚りたる由、大方それを召上られし所爲なるべし、と酒落に寄せて心ありげの言樣。扨は露顯か。こゝまで電話の通ずる筈無ければ、邪推の偶中かも知れず、と何食はぬ顏して居れば、段々と鋩を露し、ちく／＼と痛めらるゝを、それでも知らぬ顏してゐれば、隨分精しく秘密を陳べ立つるに驚きて、其まで奈何してと問へど、笑うて言はず。散々に弄られし上、以來深川へ二度行かば、此方へも二度といふ約束にて事濟み、もし此規則を破るに於ては、百圓の罰金。其も善。まだ外に、今までの無沙汰の償罪として、此間願ひし煙莨に金煙管を添へて。其も善。

お才に會うて見れば、此道は本場仕込の柳橋の尤物、紅梅のお角が何程好うても、地女の及ばぬ處あり、と又もや御意が變りて、此方も萬更ならぬ御前の氣色。取留めるは此時の待遇一つと、此上は無く好くすれば、

其夜は御輿坐りて機嫌麗しく、白鬚の道を二度とは忘れぬ枝折を心に立てられて、必ず二三日内には來る氣にて歸りぬ。

深川へ行けば又其氣になりて、紅梅の初々しき裏に無量の情ありて、媚を作らぬに媚あり、故とならぬ所爲に謂はれぬ婉しき所ありて、是亦三日とは見ずにゐられぬ煩惱の種は、此處にも彼處にも、心は二つ身は一つ、色に間なき馬の足、車上江南の夢は月下山東に覺めて、孰を捨てず通ひけるに、麻子は之を識れども悋氣せず、お才は妬かず、紅梅は怨まず、女三人寄りて姦しからぬも、間の隔たればなるべし。

餘五郎深川にて飲む時は、折々お才の噂を始めて、此間は恁あつた、那してくれた所は此方には無い圖。那でどうも忘れられぬと、さほどにも無かりし事に柄をすげて、向島に限るやうにいへば、迚も比較にはならぬ生家暮の私と、顏を背けて拗ねる中の可愛さ。地女は此處が有難くてならぬ、と此の手をお才に懸けて見れば、牛の頸皮を撫でたほども利か

ず、張合の抜けた悔しさに、痕跡も無い事作りて、凡そ女といふ女の中の飛切無類大極上々といふは紅梅なり。第一容色は花にも月にも喩へがたく、美女にして貞女、柔和にして情深く、義理堅くして實意あり。琴碁書畫の四藝に通じて、香花茶の三道を辨へ、歌も詠めば針も利く。諸禮は小笠原にて踊舞は西川なりとかや。

實に色には飽きたる葛城餘五郎が、少しばかり陷りて一寸苦勞せしも理とは思はずや。其方などもちと肖かるやう、お寢衣の古いのでも戴いておくべしと手強く出れば、お才は物々しやと冷笑ひ、惚話といふものは男が男に聞かせ、女は女同士語合うて、搯りもし奢りもして可笑きものなるに、然りとはよく／＼吐塲無き下水泥臭い事を聞されまする。さほどに有仰らるゝは一目見てくれの謎らしき陰自慢。折角の御志を無に致すも如何なれば、お目見えを願ふべし。彼方より輕々しく御入來のあらぬとならば、私から出向きましても苦しからず。御都合次第にてこれか

ら伺ひましても、私には差支はござりませぬ、と當の外れた言をいはれて、餘五郎は首を掉り、其方などがお目通りを願ふ事、寔に以て恐多し。退れ〳〵、分を知らざる女め、と大束に極付くれば、それほどまでに言はれて、推しても拜みたき御方にはあらず。されども之は常談にて、田圃を庭の此の田舍に住みて、友無き徒然を慰めかねたる身に好き對手なれば、識る顏になりて往來し、心も合はゞ末々の力となりもなられもすべければ、近き内に引合せたまへ。小本にもあるやうに同胞同樣睦しうして、彼方の琴に私の三味線、御前も今から尺八の稽古して、三曲でも合せて遊ばゞ、このやうな樂はあるまじ、と遉藝者の風流を願へば、餘五郎大笑して、三曲の仲間入は免してもらひ、二曲を飮みながら聞くことにして、近日日を極めて會はすべしとて、此事を紅梅に話せば、會ふは可けれども、勤せし人は慎くて、第一私のやうなものはお才さまの對手にならぬ意氣地無し、と懼ばぬものを推して勸むるほどの事にもあら

ねば、其儘暫し沙汰止になりぬ。

（十八）　談義所の譽物

この霜月十二日は餘五郎が亡母の十三年忌にあたれば、立還りて法事を營むべし、と父餘兵衞より見苦しき代筆の書狀來にけり。

餘兵衞は今年八十五の、年は取りてもゑやんと來いの巖疊造、渡守の頓兵衞を生で見るやうな態ありて、元氣衰へず、足腰達者にて、今の若い奴等はと口癖にいふほどありて、死神と組んで負けまじき面魂。銅色の頭顱に古りたる銀の髮を糞束にして、今も餘五郎が產れし茅屋の、傾ける柱に凭れて雨日も坐睡せず、手慣の鍬を掴みて、斃るゝまでは土なぶりを廢めぬ氣なれば、日本一の金持の伜も賴にはせず。十七の年家出して二十年が間行方知れず、長々苦勞懸けし不孝の餓鬼は、婆とも相談して勘當ものにゑてのけたれば、今は緣無き他人なるに、引取られて世話さるゝ所以無しと。餘五郎が立身せし曉より、幾度か詫を入れて、花の

都の樂隱居にせむといへど、大きなる藥罐頭を掉りて肯入れざれば、餘五郎も是非無く、何も御心任せ、其地にござられて安樂に暮したまへ。地面を買うて立派に普請し、田地を欲しきほど扶持に附け申すべしといへば、それをも承引かず。今まで稼ぎつけたる身が卒に樂になれば壽命が縮まる。肥も利過ぎては畠物の毒になる理窟。我もまだ死ぬ氣にはならぬと我張れども、餘五郎の身にしては捨置かれず。兩親を捨てゝ二十年苦勞せしは、我一人ばかりが樂になりたき願にあらず、親の喜ぶ顏の見たさもあるに、さりとは七千萬圓といふ寶も持腐なり。我は馬車にて乘廻し、親に襤褸下げさせては寢覺の心懸り、と手甲摩りて說けども頼めども志太く肯かず。此上の手段に盡きて、餘兵衛が神ほどに崇むる村長の合川杢之助を以て段々と說得させ、月拾圓の扶持受くる事を納得して、是だけあれば袖手で食へるものを、藁元結の白髮頭、昔に變らぬ氣をば餘五郎の持餘しけるぞかし。

今は鬼籍の母も常に之を憂き事に思ひて、孝行なる倅の志に免じ、偏屈は好加減にして樂隱居になれ、と勸めても〳〵心を折らざる夫に添ふ女房なれば、獨り絹の袖無も着かねて、因果の人と愚痴を絶えせず、東京の繁華も見ず仕舞にて草葉の陰に入りぬ。その年回なれば麻子をも同道して、總勢七人の供廻は金澤十間町に旅籠を取らせ、其中纔三人を具して談義所村に乘込みたり。かく小體に、衣服も金澤にて稍麁末なるに衣更へたるは、いかに我物の金錢なりとて、素性をいへば土百姓の倅の分として、大名の眞似事は天罰を知らざる鈍漢、と衣て還りし錦が親父の癪に障り、散々に呵られし事のありけるに懲りて、御機嫌を損なはざらむ爲の孝行なり。

されども談義所の譽物、日本一の奴が見えたと、まづ金澤から騒ぎ立ちて、此村は沸くがごとき景氣なり。畦道の細きに百姓ども並木のごとく立續きて、髭が長い、指が光る、と聲高に囁き散らし、麻子のショール

に驚き、供の挈げたる鞄に魂消、あれが噂に高き葛城餘五郎、向山の老爺が倅の出世姿を見るにつけて、東京には大路に紙幣が撒いてあるやうに想ひて、邊に駈落の玄たさうな面が彼地此地に目を側てけり。待ちかねたる餘兵衞は二町ばかりも出迎へ、影を見るより兩手を舉げて野良聲を振立て、ひよこ〳〵と駈來りて、やれ嫁も來てくれたかと殊の外の歡喜。此方衆が來るとて、四五日前に大掃除して疊をも仕替へたれば、見違ふるほど奇麗になつた、と伴れられて行けば、我家の物置より不潔なる茅家を、夫婦よりは供の者が驚けり。是も新しく玄たる手細工の佛檀に、山茶花を無雜作なる大束に手向け、線香の灰ぽと〳〵と四邊に散りて、燈明冥く陰々として過去帳の面を照せり。夫婦は靈前に美々しく供物を飾り、交る〳〵燒香して懇に回向してけり。

餘五郎殿歸らしつたか、と門口に頬冠取りて入り來るは、作介といふ百

姓。年輩は大方餘五郎に同じく、手織木綿の新しき布子に紺小倉の帶して、千草染の股引尻褰、のつそりとして律義さうな面貌、太き眉毛を下げて黄なる馬齒露はに笑ひかけ、閾の外に立ちて連に小腰屈むるを、餘五郎見るより氣輕に飛出し、新家の作介殿か、よう尋ねて下された。此方の好きな土産を多度持て來た、上ら玄やれ、誰も遠慮するものは無い。之は私の家來たち、奥に居るは嬶じや、と手を取りて引上ぐれば、着飾れる麻子の姿に怯ぢて割膝に跽り、佛前の供物をまじり／＼と眺めて一言もいはず、松の木のやうなる手を揉みて、餘五郎の顔見ては可懐げに打笑みぬ。

此男は餘五郎が無二の幼友達にて、此地を駈落する時は涙で別れ、路用の補にもと、虎子にせし二朱と五百に、手造の草鞋二足を餞別に與れし情を忘れず、年に三四度づゝ便の次手には金錢を送り、五人口豐なる田地まで買うて宛行ひければ、親父の代よりも仕出したる新家の作介とて、

今は人にも壓されぬ顔。

四邊に知らぬ人の居て話も難かるべし。明日の法事の濟み次第、金澤の宿へ同道して、飲みながら寛りと語らむとの餘五郎が斟酌に領き、明日又寺にて會ふべしと、遁るがごとく匆々に歸りけり。

其夜の逮夜を勤め、明くれば檀那寺にて法事を營み、村中一統へ見事なる配物して、まだ二三日は逗留の意にて一先金澤へ引取り、餘五郎は毎日機嫌伺に談義所村へ通へり。

一

作介尋來て、一間へ唯二人寛ぎて四方山の昔話。いつか女の噂になりて、此方は今は日本一の物持とて、何に不足といふは無き身にも、以前は我等と同格なる水呑の小倅、毎日青物背負うて行きし近江町の菱屋の娘に此方は惚れて、手を一度握つたら死でも段無い、と我顔見る度に口説かれしが、今では那しきの女は飯焚にも役うてゐやうと笑れて、横手を拍ち、いかにも〳〵、忘れもせぬ菱屋のお峰が事。我も十八の生心に思染

めしが、及ばぬ戀と陰ながら惚れたばかりで、どうも成らず仕舞は口惜かりき。あの女今は何處にと問へば、同じ町なる柏屋に嫁入り、見る影は無く婆になりけり。娘で今も若くてゐるならば、捨てゝは置くまじきにと笑へば、此方は覺無きか知らねど、あの同胞の最季に、お艶といふ娘ありて、今年は二十三四なるが、お峰が其の頃に立勝りたる姿とて、金澤一といふ名代の女、菱屋は疾に潰れて、姉とも中違ひ、亭主持たずに琴の指南して暮せるが、お峰の面影ありて一段美しき標致と聞くより、餘五郎好心を起して、遙々來たる此地の馳走は其に如くものなし、向山の餘五郎の氣になりて、三十年の舊時可懷し。志の日も過ぎて精進も解けたれば、遠慮無く賞翫せうぞ。其女見たし、と宿の亭主を呼びて、好樣に計へとあれば、心易く請合ひ、自身お艶の宅へ出向きて、葛城樣の琴の御所望なれば、直樣御入來下さるやうにと言入るれば、お艶は餘五郎を覺えて、青菜擔ぎて我が家に出入せし男の前に、頭下げて藝を賣ら

むは可愧しき事なり、と支差あるよし言立てゝ斷れば、亭主は此奴高く賣る氣と合點して、御禮の所は尋常の十層倍でも、此方の望次第になる事なれば、と方角違を言へば、なほ〳〵承引かず。譯の解らぬ女、と悄悄立還りて、恁の通を申せば、之を持て行き、隨分丁寧に賴んで見よと、十圓札を投出され、貰はぬ身の亭主が推戴き、强情は張つて見やうもの、お艶どの巧々やられた。差支がござりまして、と仔細らしい先方の顔が、之を見せて最一度拜みたい。

(十九) 苔の花

水引かけて金十圓と書せる包を、亭主は恭しく取出して、客商賣の慣れたる辯口、あゝ言へばかう言ふ言草の種は盡きせず、否といはれぬまでに說き付けられ、無口のお艶は迷惑して、心の不承知を口には出しかねて遲ふ樣子を、亭主は此の包の魔藥が廻りかけたる所と惡く見て取り、左も右もと無理に推付けて歸らむとすれば、お艶は慌てゝ、金包を隻手に亭主の袂を捉へ、之はお持歸り下されましと衝着くる、其手を推除けて、私もかやうに二度までお迎に參りたるもの、這麼顏でもお立て下され。お願ひ申しますると振拂うて外へ驅出で、格子の外より、何分お賴み申しまする。先刻よりのお待兼なれば、可成お早くと、談は着いたものに云て行きけり。

お艶は亭主の走行く後影を見送りて、十圓が百圓でも此心を動かすこと

にはあらぬを、よし無き物を遺されたり。あれまでに言はるゝ人の志を反古にせむは氣毒なれど、氣毒には換へられぬ仔細を後にて話さば、謝罪の種ともなるべし。暫時も留むべき物ならず、と彼の金子を袱紗に包みて、聢と下女に届けさすれば、亭主は可難き顔して不審霽れず、この金高にて不足の筈無し。彼の女今こそ藝人なれ、根性は卑しからぬ菱屋の秘藏娘に育てられし、心正しく氣の善き天禀なるに、對手を見込みて懸直するなどの惡巧のあるべしとも想はれず。さりとて如何なる用のあるか知らねど、家業を外にして係る儲口を見遁すといふは無き事なり。何ぞ深き樣子のある事ならむ。今宵が繰合せられずば、明日というて見るべし、と又々出向けば下女が取次ぎ、唯今ほどお他出になりましたといふ。

居留主かと樣子を見るに、然にもあらず、出先を訊ぬれば存じませぬとは、又來らるゝを面倒と、何處へか竄げたるか、此上は是非なく立歸り

て、葛城に始終の樣子を語り、明日にても參るやう計ひ申すべしといへば、苦しからずとあるに亭主は帳場に歸りて、女房に今日の始末を聞かせ、どういふものであらうといへば、女は女同士、明日は私が一つ行て見ませう、と如在內儀は心得顏に胸を拊き、出懸けぬ前の朝飯頃を覘うて訪ぬれば、お艷は會ふが氣毒の三度目、口籠がちの分疏を內儀は打消して、昨日はお差支にて御入來の無かりしを、お客樣の不本意に思召され、今日はとて昨夜から樂みにしてござらるゝ譯なれば、今日こそはお午前からお出で下されまし、と彼の金包の度々の取遣に揉めたるを熨し、水引の弱りたるを鹽梅して、お艷の前に差置けば、今日も差支と嘘らしき口上もいひかね、さればとて外に斷るべき術無さに、後にてと念ひし內證の思はくを明かせば、なるほどゝ謂ふ氣色も見せず、其は時節にて運は人の力の及ばぬ事。舊時は談義所の土百姓でも、器量ありて今大名暮しの葛城樣、舊の緣を蔓にして、金貸せとでもいふならば可愧かるべ

し。お前樣は琴の御指南、お客に呼ばれて藝を賣らるゝに仔細は無い筈私等の家業にては、素性得知れぬ通りがゝりの旅人がお客にて、二十錢のお茶代でも、金摺の請取持つてお禮に出ますれど、身分を謂はうなら、隨分私等より卑き衆もあるに、頭を下げて大事に取扱ふは、何も商賣にて是非無き事は誰にもあるものを、お前樣が葛城樣の前にて琴を彈かれたとて、恥知らずと哂ふものはござりませぬ。其身の廻合せにて、帽子縫ふ人もあれば、草鞋つくるも家業なり。お前樣も菱屋樣お世盛の事をお考へなされたならば、失禮ながら今の御家業は遊ばされぬ道理。誰を對手になされても藝を賣るに二つはござりませぬ。此を善う御了簡遊ばしまし、と一息に爽なることぞかし。

有仰る通り藝を賣るに二樣はなけれど、努々餘五郎を憚づるにあらず、我と我心に愧づるより上なる恥はあらじ、素より慾を知らぬ私にもあらねば、此樣なお座敷は願うても勤めたきは山々なるに、再三のお迎まで

受けながら、お斷り申すといふも、昔氣質の馬鹿律義には、無理ならぬことゝ見免したまへ。御繁多中を度々御出下さるゝ御深切を無にして、魚膠無き御挨拶いたしたき心はあらねど、と詞弱けれど確なる覺悟を、內儀は手に合はぬと諦めながら、仍ほ未練に動かして見れば嚴なる苔の花と、いよ〳〵見捨てゝ、さまでに有仰るものを强ひてお勸め申しまするも心無き業なれば、と金包を引込ませる時の極り惡さ。倉卒に帶の間に撚込みて、可厭な目してお艶を見て見ぬ風。來た時とは半分ほど畧したる挨拶して歸るなり。

亭主は女房の顏を見るより、どうじやと馳出づれば、苦々しげに首を掉りて、外貌に據らぬ剛情者、話說を聞いて見れば餘り利口でもないさうな。今藝に身を助けらるゝ境界に陷ちながら、店の天井裏に燕が巢をくひ、臺所に飯の番木が鳴る家の孃樣の氣位にて、食はずに居ても駄味噌揚げて澄したいか、と閾を跨ぎながら其方を眺めて腹の立ちたる眼色。

道理々々といふ所なれど、話を聞かねば何とも言はれぬ。お艶様は何と言うた。這麼事を、と憎さの餘りに、針程の事を千枚通し程に話せば、流石亭主は小癪な匹婦といふかと想ひの外、鷹は死すとも穗を啄まず、流石はな、と賞めたが女房の氣に入らず、いつまで色氣のあることやら、流石はな、と氣障に鸚鵡返して衝と奥へ入らむとすれば、亭主は聞えよがしに、流石はお艶様だ、噫鷹は死すとも穗を啄まず、鵫は死すとも角折らず、と惡い地口に女房怫然として立戻り、物は言はで慨い顏を見すれば、亭主は笑ひながら兎脱けて階子を駈上り、葛城の部屋へ行かむとして、客あることを思出し、從者まで此由を通ずれば、お待兼の御樣子なるにと眉を顰めて、左も右も其趣を申上ぐべし、と餘五郎を小蔭に呼出し、しか〳〵と亭主の口上を告ぐれば、唯々と頷きて、座に復りぬ。客といふは此の金澤に根生の資産家にて、縣會議員のばり〳〵馬場文平といへば、御所落雁ほど他國に識られたる顏なり。

餘五郎思附きて話を變へ、私武骨に似合ず琴が大の所好なるが、此處に誰か上手を彈くもの、旅中の徒然を慰めたくと上品に出れば、文平眞に受けて、宅の娘どもの指南を頼むに艶といふ女あり。お聞及びもあらむかなれど、藝よりは數段立勝りたる標致好、之を招きてお聽にと言はむよりは御覧に入るべきか。但し負名の堅氣なれば、琴の外の御所望は請合ひかねまする、と亭主を呼寄せ、お艶に一寸參れと人を遣れと吩咐くれば、頭を搔き、ちと譯ありて宅へは參らぬも知れませねば、恐入りますれど旦那樣がお召の證に、お名刺を戴きて持參仕りたしと言へば、半切に四五行認めて渡すを、店の男に持たせやれば、鼠半切に薄墨の一筆は、十圓紙幣よりお艶には利の好きこと譯あり。

今日の身と成りたるは總て馬場が情にて、此人の爲には次第によりて、命も捨てねばならぬ恩誼あれば、客といふは餘五郎と知り、あれまでに屹と斷りし夫婦の手前も面目無し、と行かぬ先からはや上氣して、胸の

轟く迄弱き心に、其の愁さをも堪へしむる此一札には、餘五郎が拜金宗の功力も及ばざるなり。私の恥辱はこの義理に易へ難く、太縞の古小袖脱捨てゝ、白綾の襟に小紋縮緬の三枚襲、齢に合せて鐵納戸は澀み過ぎたり。三線の師匠ならば島田の旬の二十四を、いつも天神に結ひて、定る夫無くて色を賣らじとの心には、自から白粉も薄く、或時は素顔に口臙脂のみ。唐繻子の丸帯して、此盛を故と老に見するを我も有繋に悲しきか、帯揚は藤紫の手綱染に、有るか有らぬかに小櫻を散らし、多く見えぬ處に僅の華美をして心を慰むるなり。

（二十）御恩がへし

義理ある馬場の一言に意地の張を弛めて、顏曝す事に覺悟はしたれど、入りかねたるは江口屋（旅宿）の門なり。亭主を三度返し、四度目の女房にまで恥辱搔せ、飽くまで拒絶いひし舌根の乾かぬに、のめ〳〵と此方から出て行く不面目は、忍ぶに忍ばれぬ愁さ、行かぬ前の今から心に痞へ、來ずともといふ顏して女房の冷笑ふも目に見えて、自から脚の窘むやうに覺ゆるなりけり。さりとて行かで事の濟むべきにあらねばと、ややう格子を出合頭に、宿屋の男お迎に參じました、御琴は私がと擔出して、促かるゝまゝに行けば、程無く江口屋の店に懸りぬ。

折から人の見えざるに稍心落着き、男に座敷を問へば、二階の奥。それへと急ぎ階子を昇らむとすれば、夫婦奥より駈出で、これはといふに悚然としたれど、袋の鼠竄るゝ路無く、今朝ほどはと、まづ女房に挨拶す

れば、想の外なる機嫌にて、喋々しく世辭いふ側より、亭主は無上に嬉しがり、ようこそを五つ六つも言うて、お二階へと夫婦揃うて愛相好き待遇に、難所一つ越えたりと思へば、二階の奥に聞ゆる笑語の聲、之に胸は又塞るぞかし。

夫婦は左右より颯と紙門を開けば、お艶は褄を取りて小腰を屈め、額の見ゆるほどに俯きて立てば、お艶かと呼ぶは馬場の聲、と少しく顏擧げて見るとは無しに、目に入る餘五郎の面影に、覺えの無きは理なり、其の頃お艶は生れざりき。座敷に入りて、上客なれば、まづ餘五郎へ慇懃なる禮をすれば、頸の骨を動かすばかりなるが膽に徹へ、乞食になりて親の墓參したらむよりも情無かりしに、彼方へお酌をと馬場の指圖に、銚子を取りて進寄れば、猪口出しながら瞳を据ゑて、孔のあくほど顏を視られて、無禮なる男と悔しく、お艶は少しく面を背けつ。

戲言いひかけむと念へども、お艶の威容ありて禮を亂さゞるに、餘五郎

も打込むべき虚無く、文平も座を取持たむと思はざるにはあらねど、お艶の氣質を識れば、むざと云たる言もいひかねて、女一枚入りても座敷は浮かず。これではならぬと女房琴を持出し、好所に据ゑてお艶に目授すれば、會釋云て座を立つ時、文平餘五郎に好みを問へば、何にてもと言ふ、然らばと八千代獅子。

餘五郎琴が所好とは眞赤なる噓にて、彈出すより欠を催し、聽いてやらねばならぬ邊には薄睡くなりて、竊責の難澁。文平も同斷かと樣子を見れば、好とも言はざりし此方が大分の好らしく、折々妙な指して膝の上を彈くに驚き、亭主はと見れば、此奴はちと睡たき顏色、難澁の仲間と可笑く、女房は口を半開にして、筋の弛むほど氣の入りたる樣子なり。餘五郎が所好といふを馬場は眞に受け、八千代獅子の終るを待ちて、今一曲いかゞ。上手の音調は格別身に浸みて、凡そ凡手の二倍こたへたり。後は酒々、お艶とやら一盞思ひざしを受けてくりやれ、と無雜作に差す

を恭しく戴き、返すに清めて懐紙取出して丁寧に拭ふなり。
これでは氣が迫りて可笑からず。我を貴人と田舎女の神妙に敬ひ畏るゝならむ。扨は此方から亂れて手本を出さば、彼の氣も和ぎて、陰氣なる大道具を片附け、小取廻しにて意氣なる三筋を持出さむ、と醉に紛らして戯言の口を切れば、文平も蕩然と玄たる目してお艶を見遣り、其方は五年前も今も變らぬ姿、と少し色を含める言葉に、堅うても女は作らぬ中に愛嬌ある日頃に異りて今日の素氣無さ。敷石に團栗の落ちたるやうに、生眞面目なる挨拶ばかりして撥付くるを、餘五郎は覺らず、言へば言ふほど色氣を持たせたる言ばかりに、藝者を玩ぶ氣かと心に怫然とせしが、文平が主の如く扱ふものに、無禮ありては彼方の迷惑になる事。明日は途で遇うて顏を背けむとも、此席にては機嫌好く對手するが馬場への義理なれば、何も彼方に盡す事と思はゞ腹も立たじ、とやう〳〵思飜しても、餘五郎の高慢なる顏を見れば、我家の閾を頭も得上げず跨ぎ

し男の分として、惡運一時の榮利に驕り、我より外に人も無げなる擧動と胸に据ゑかねて、人の見ぬ間にはお艶の眼は自と餘五郎が額を睨むなりけり。睨めらるゝ者は好もしげにお艶の姿をつく／＼眺めて、いかさま姉なるお峯どのに生寫。目元などは特に同じ鑄型に出來たり。彼人今は如何に暮さるゝぞ、と姉の話說より緒を引出し、文平をワキに使ひてお艶の身上を聽糺し、いかなる心にて今に夫も定めず、可惜花の盛を深山陰れにして、何日をや人に契らむとすらむ。葉櫻になりては葛餅に添ふばかりなるを、さりとは心得難き了簡かな、と見しは我等の僻目にて、其實深く言換せたる人ありて、障る事ありて、少時遠かれるなどの意氣筋もあるにやと尋ぬれば、お艶は思設けぬ顏して、神懸けて然る事無く、固より身の形附を願はざるにはあらねど、不仕合にして緣遠く、又心に稱ふ方も無くて、うか／＼と今に獨身の、習覺えたる琴の糸より細き烟の活計となれるに、緣を急がぬ心にもなりてと語れば、餘五郎僞醉を醒

して眞面目に復り、我顏は知るまじけれど話には聞かる丶ならむ、餘五郎出生は此談義所にて、十七八の折には品物引擔ぎて、此方の舊時の家へ日每卸賣に行きしものなり。我等一家は、半は親御のお蔭にて粥をも啜りしことを憶へば、此方には親讓りの恩ある理なり。差出がましけれども此方を世話して、行末確なる身にして進せなば、彼世の御兩親もいかばかりか喜ばれて、我にも其ぞ好き報恩の料となるべき。

男にても獨身といへば、親の必の安まらぬものなるに、まして人に從ふを道とする女の、いつまでも緣無くて覺束なき世渡は、亡き親御へ苦勞を懸くる、之をも不孝といふべし。

心に稱ふ方のあらぬゆゑといふからは、一生不緣にて果さむ了簡にはあらざるべし。什麼と問へば、懷舊の情に胸逼れるお艶は、頓に答も得爲ざるを、幾度か什麼々々と問はれて、此有樣にて生涯を送らむ意にあらず、緣もあらばと半聽きて、然もあるべし。嫁入は女一生の大事なれば、

親類内などへ泊りに行くやうに心得、倦きたればお暇、と手輕に出入のなる事と思ふべからず。友白髮まで苦樂を一つにする人なれば、隨分見立てゝ添ふが肝心なり。されども身を思ふ餘り、彼此と選過ぎて縁を遠くし、其間に齡長け、花嫁ながら女房の姿となりて、賣損ふもの世間に往々あり。謂はゞ此方も其類ならずや。思はしき男無しとて、高の知れたる金澤内にての不足、井中の鮒が文句言ふと同じ事なり。此邊の士女は金澤を日本の都のやうに思うて、此土地に無きものは天下にも無きことゝ考ふれど、錦繪で見ても知るべし、東京の繁華は常に祭禮のごとく、大道の齒磨賣も髭を生して高帽子冠る所ぞかし。

されば一器量あるものは、皆立身の地と全國より聚りて、田舍に在れば丹頂の鶴ほどの人物も蝙蝠のごとく、夕暮ならでは飛んで行かれぬほど、立派なる男の揃へる割には、美しき女子の拂底なる所なれば、此方などが行て見よ、蟻の路に砂糖を置くほど騒がれて、大勢奪合ふ始末、身體

は二つありても足らざるべし。
馬場殿然は思さずや、と證人欲しげに文平を見返れば、先方も極らぬ中からの仲人口とは思へど、いかにも〳〵、と毒にも藥にもならぬ挨拶して、讀みかねたる餘五郎が心を訝りぬ。
律義なるお艶は他を疑はず、亡親の恩を忘れず、我身の爲に盡さむとの實意を、便少き心に深く歡び、また金澤一の姿を大都會に輝かさむことを想へば、埋れたる壁の世に出づる心地して、漫に仇なる了簡も浮立つなり。
餘五郎はお艶の聽惚るゝ氣色を見て、我物になるも今一息、と魂の搖ぐやうな巧言を多度聞かせ、架空と見せぬ爲に(親御への御恩報じ)を臺にすれば、愚ならぬ女子も迷の闇を探足に深入して、やゝ返す路に遠かりけり。

（廿一）心嬉しき顏

適宜に談話は輟めて銚子を更へ、馬場殿はまだ一向に醉が回らぬ御樣子。少し行らせたまへと餘五郎前に立ちて飲出し、此人數にては奪まぬ、御免を蒙りて、枯木も山の賑ひに、次のもの皆來て飲めとあれば、陸續と七人座敷に込入り、いづれも成る口ばかり揃うて、小氣味よく猪口の飛ぶに、面の見好げなる婢二人呼揚げ、忙しき酌に手は動けども、心の働かぬお艶の屈托顏、間あれば熟と考へ、呼れて慌忙しく銚子持つを、餘五郎は其と睨みて、肚の裏にて笑ひぬ。うか／＼飲みて最早燈を點すか、文平は蠟燭の火穗に驚き、お暇と立たむとして腰のふらつくを、曳とな、醉ひました、といかさま大醉の眼色。分厚の舌を出して唇を舐ずり、囈語のやうなる語氣に明日を契りて立出づれば、足はXに捻れて踏處を定めず、緩める帶の間より金時計辷落ちて振子の如く、お危いと宿の夫

婦に扶けられて無難に梯子を下りけり。お艶は店口まで見送りて、時刻を見れば七時を過ぎたり。座敷に還りて暇乞すれば、餘五郎は杯盤狼藉の中に、名を惜む敗將のごとく獨り踏留りて、床柱の前に戰疲れたる風情なりしが、まだ話すことありと落着きて、何ほど歸らむと言へど取合はず。夕飯の相伴せよ。急ぐは待たるゝ身か、然もなくばまだ宵なるに、と手を鳴せば女房來りて、彼方へと無理にお艶を捉へて奧まりたる小座敷へ伴れけり。いかなる事にならむかと苦勞せしに、異條無き夕飯の相伴。二人の席を間近に設け、着飾らせたる宿の小娘を給仕に附けたり。お艶は其娘に物言ひかけて切りに手持無沙汰を紛はせど、箸を取りてからは、見られ勝なる顏の向所無く、始終俯きて物は口に入れども、胸塞りて喉を通らず、冬の夕にも汗かきて、二十四の處女理は無しに男を懼れぬ。

餘五郎狼の志ありて、態く無理留はしたれど、酒の席にての言を懷ふに、

其と同一口頭からは、酔うた面しても言はれぬ筈の望を、今宵の事にあらずと一旦は諦めけるが、また勃々となりて、抑慾る事に直談は興覚めて家暮の至り、宜しく亭主を頼みて金銭に口説かせ、可厭な事もいはねばならぬ魂膽は陰にして、錦は表を見るがよし。我等より上手に口利く奴は圓きもの、と葛城流の奥の手を出さむとせしが、別間には山神のまゝますに心を置き、婆の耳に入らば、また尻切半天の舊時を擔出して聴聞させらるべし。愍ひに小細工して事を敗らむより、今日の手際にて知れたる文平に聲を懸けさせ、其時は泣いても笑うても俎の魚、尾鰭をふるも今の間と放して還しけり。

翌日文平を招き、酒間の雑談に紛してお艶を妾にと言出し、此方の力にて從はせむことは覺束なし。こゝは貴下より御聲を懸けさせたまはゞ、必ず否は言ふまじと見込みて、無躾ながら慾る事も頼入る。何歳になりても此道は格別、よしなに察したまへ、と聞きて文平打笑ひ、扨こそ昨

日の御樣子が讀めた。緣無き女に彼此と御親切のお言は、合點ゆかぬ事と思ひしに、かういふ御心底にてありつるか。

かねても申せし如く、叩かば鏗然といふべき堅氣なれば、これまで幾度か思を懸けし人のありけるを、皆撥ねて得心せざりき。堅いには折紙附の女なれば、我から言うたとて事の纏らむは請合ひ難けれど、餘人ならぬ貴下の事なれば、肯かぬとも限られず、まこと御望とあらば隨分談じて見るべし。お艶事は娘が師匠の緣より出入を始めけるが、氣立の良しきものと見るほど便無き身の可憐さに、及ばずながら我等の世話するを力に思ひ、主とも賴まるゝ心に案じらるゝは彼が身の行末。いつまで琴の師匠にてあるべき、女は蔦の如く、恃むところ無くては克はざるに、と人事ながら苦勞せる折から、御不便を加へられむとは、願うても無き仕合なれど、他の思ふやうにも無くて、碎けぬ心には如何念ふやらむ。左も右も彼の了簡を聽きて御挨拶申すべし、と骨折りさうな口氣、これ

で半分は成就した態。もし此男が不字に念うたら、飛立つほどに當人が得心しても、談は破れて了ふべし。縣會に出ては、愚にもつかぬ事を說がましう喋る男なれど、猫には勝なる處ありて、何かの端には役に立つが不思議、との肚とは大きな差違、辭を卑くして只管頼めば、文平ぐつと呑込み、日本の紳商天下の葛城倹五郎に頼まれたが膽に徹へて嬉しく、二つにはお艶の出世と歡び、歸りて之を內君に計れば、妾といふ名目がお艶の氣には入るまじと思案せしが、其處等に有觸れたる圍者とは品異りて、格は舊時でいふお部屋樣にも劣るまじき資產家の嬖妾。嫌ふと言ふは酷い不了簡。否といふたら、恁云ふものと能う會得させて、此奉公はさせたが彼子の爲。神妙に勤めなば末の吉のは知れてある事、このやうな世話をしてやりてこそ効はあれ、と夫婦同意の上、まづ妻よりお艶の心を聽くことになりて、迎を遣れば不取敢來りて、奥樣の居間へ伺ひぬ。

お師匠樣がと可懷げに纏る二人の娘の子を、母は彼方へと遠ざけて、用ありげに呼びましたれど格別の事にもあらず。ふと思ひつきまして聽きたきはと、明しては言はねども、良緣のあるやうに言紛らして、いつまでも獨身にてあらむよりは、相應の緣あり次第嫁くが道。と此筋を懇に言聞かせ、そはれ此方も思ふところ、似合しき方もあらば、何分といふを待ちて、此樣なのはと言はむ下心を見て、昨日も江口屋には葛城樣が其事を仰せられて、東京へ出よ、力になりて世話してやらむ、と御親切のお言に、其氣にもなりて、昨夜から思案し通しにて、未だ何れにも心定まらず。今宵は此方へ上りまして、御指圖次第に了簡せむとの心得なりしに、幸ひの御招にて、貴方からの御話も私から伺ひたきも、いづれ異らぬ緣談とは、此談の纏りまする瑞相にてや、と心嬉しき顔色なり。

二十四まで緣無く、此上はと諦めて、一生男持たず、氣散じに暮さむとまで、一時は固く念ひ込みけるも、寡居は不自由といふ理窟が知れて、

夫婦といふ事人の身にせずば濟まぬ契と心着く廉々ありて、稍動き初めたる心に、餘五郎が報恩に世話すべしと言ひしが、焚えむとする火に風の一吹誘ひたるごとく、忽ち勢ひて、我手馴の琴も、唯一筋の絃と音は寂しく、彼此合うてぞ、人の心も和ぐ音色の出づるを思ふにつけて、夫婦の樂みも此の理、と味な事まで悟の種となりて、從來男持たぬ身の氣散じと思ひける、この氣散じは、酒飲まぬ人の醉うて苦まぬを下戸の德とせるやうに、飲む氣になりてからは、醉ふといふが好ましさに、酒々と言ふぞと心着きて、夫に仕ふる苦勞の裏には、謂はれぬ樂みのある事と卒に悶々となりて、八分までは餘五郎を賴に如何ともなる氣に、殘る二分をば分別に餘せしに、此處からも緣談を仕懸けられて即座に迷の雲晴れ、高砂の浦に旭日千歲の松を照す心地して、何道にも身は緣付くに極めて、文平の妻の言を待てば、そのやうな氣になられたは我等夫婦も喜ばしく、扨此方の思はくも葛城樣のお話も同一には、篤と心底を聽い

てくれよとの御頼ゆゑ、いかやうに思はるゝか、尋ねて見ましたまでの事なるが、どうやら得心の御樣子にて安堵しました。そこで別に一つ話といふは、これも葛城樣のお世話にて、此方が望みとあらば出世の道ありて、先方樣は東京に二人とは無き御身分にて、お名は日本國中に弘り、身代は葛城樣の直下に附くといへば、四五千萬圓の大身代。家來眷屬は百人に餘り、商賣は重手代に委せて御自分は樂隱居。四十にしてお子樣無きを憂きことに思はれ、此跡式のやみ〳〵人手に渡るも口惜ければ、と幾人かお妾を抱へられても其効無く、お一人出來たる女のお子さまは、御病身ゆゑ御相續覺束なく、今一人素性正しく、賤しき業などせざりし女を、と八方を尋ねらるゝに、あれば容顏が御氣に入らず、曠き東京にも是はと思はしき女無くて、捂かしがらるゝを葛城樣の憶出されて、艶なればと文平へお話のありけるを、私に了簡を聞いて見よとの吩咐。是は何と思はるゝぞ、勸むるではなけれども、と言ひつゝ勸むる口上。そ

の家の榮華の樣を見るごとく言立て、妾たちの暮向を語るを聞けば、桂を薪にすといふまでにはあらねど、文にも綴らば、玉を炊ぐとも書くべき贅澤。男にても月五十圓取るは可難しき世に、百圓の扶持といふにぞ驚かれぬる。

お艶は妾と聞くより、那樣ものにと、文平の妻が冗言盡すを煩く、噫、人は貧にはなるまじきもの、心正しく行清くても、穢れをる事を聞かさるゝぞかし。さりとて貶しめむとの意にはあらで、我身の出世とおもへば恁る事をも勸めたまふなるべけれど、日頃の氣質を御存じにてありながら、貧ゆゑには人は盜みも爲かねまじく思召さるゝが恨めし、と口數多き女ならばいふべきを、溫、玉の如きお艶の何に就けても可憐う、語和かに有難き由を述べて、折角のお心添なれど、たとひ味噌漉挈げましても眞面目なが性に合へばとて、諾ふ氣色の見えざるに、母ともいふべき齢して、さりとは無分別を勸めけるを、今更お艶の手前可愧さに、文平

の妻はいかにも感じ入りたる顏して、若いに似合はぬ殊勝なる了簡方、女は誰もさる心懸にてありたし。私ぢやとて元より好ましからず思うたれど、葛城樣の御頼に餘義無く言うて見たものゝ、内心には否と言はるゝを願うてゐました、と話の切目に夕餉の膳出して娘等を呼寄せ、食後の茶には氣の張らぬ雜談に興じて、軈て還しぬ。

奥の間に樣子如何と待ちかねたる文平に云々と語れば、然もあるべしと思設けたれど、今に始めぬ堅い女と當惑して、その調子にては我から言うたとて、色好い返事はすまじきに、夫婦して執冗く勸めなば、慾に頼まれてする事などゝ想はれむも心苦し。此上は何も言はぬ事に極めて、在りし次第を餘五郎に挨拶すれば、格別失望せる體も見えずして、ちと殺生なれど悋して、と別に一策を含ませ、跡に一人轟を留めおくべし。彼は事に馴れたる男なれば、萬事談合して首尾好く計ひたまへとて、禮とは言はで文平方へ貽りたるは、娘二人へ友禪縮緬、厚板の帶地、いづ

れも對なり。內儀へは白縮緬一疋、文平へハヾナの太卷五箱、十疊敷の天鵞絨氈一卷、外に四季の花鳥盡しの屏風一双、和亭へ註文中なれば、歸京の上送ることに約して、逗留七日目の朝餘五郎の一行は金澤を引拂ひけり。文平夫婦は彼の贈品の義理もありて等閑に爲がたく、轟を我宿に引取りて、家內心を竭して慇懃に待せり。

妾では、大臣がと言うても否といふお艷の心を奪ひかねたるに、何處までも報恩を根に持ち、餘五郎が媒妁する分にして、馬場夫婦の百方に賺しければ、お艷は日來二無く恃む人の計ひを疑はず、何分にも宜しくと任せて後は、唯わく〱となりて何事も夢心地の中に、善は急げと出京を促かれて、近火に遭うたほど慌忙しく世帶を疊み、知己の暇乞も倉卒に、何が何やら理解らずに故鄉を離れ、新橋に着きても仍窮なりき。

(廿二) 瑠璃の梁

差當りてお艶を置くべき家のあらざれば、穢ろしくとも暫時これにて長途の疲勞を慰めたまへ、と轟は我居宅の二階に請じ、女房に內意を含めて、疎畧にすべからずと屹と言渡せば、はて冗いわいな。近火の折玄關へ名札一枚投込んで來れば、知らぬものにても翌日尋ねて、一圓づゝ禮するといふ、大氣な御家風は外に類無き御前の、いとしがらるゝ御方を預るとは、借用證文取りたるも同じ事。又御當人も直に位が定りなば、此間中はきつうお世話になりました、と馬車に禮物積んで來らるゝも見えてある、と戸棚の隅に陰せる撲滿に、銀貨泉の如く一夜に噴溢るゝ夢かとばかりの歡喜。慾ほど深切なるもの無く、大事の〱お主のごとく、冊き、召使のごとく立廻りて、隅々まで心を着けて世話すれば、お艶は迷惑して、今更手土產一つ持て來ざりしを悔むなりけり。

轟はお對手を女房に委せて、不取敢葛城へ歸京の顏出しすれば、首尾はと訊ねらるゝ。何も上首尾にて、拙宅に御休息。旅中御變りも無う、尤も長途の事ゆゑ、汽車の中にて血道發り、それも直に御快く、明日は淺草見物の案内せよなどゝ、家内におほせらるゝ御元氣なり。されども左右故鄕可懷しく、右も左も見識らぬものばかりに心細き御樣子の傷はしさ、一日も早くお心落着くやう、御不便を被けられたらばと言へば、餘五郎も嬉しき顏にて、促くな、其處に忽はあらねど、其方の許にいつまで預けても置きがたし。假になりとも急に一軒宛行うて、彼の世帶を極めてから寛緩取懸るべし。鳥は既に我が懷に入りたり、と顋鬚搔撫づれば、煙草好は忙しき中にて一寸一服といふが例なれど、此道は些と違ひますると不減口を吐けば、それほど意地穢でもないわと呵られぬ。轟重ねて、彼の御方お馴染無くて獨り寢しがらせたまへば、明日にもお顏を見せて遣さるべしといふ。然らば夕刻より。お待ち申上げまする と

歸りて、此趣をお艶に告れば、然やうでござりますかと深く氣にも留めずして、仍女房の東京咄に耳を傾くるなり。

聞いて見るほど、都に住む人は樂き生涯を送ることゝ一筋に思込むは、銀座通の町並、歌舞伎座へ行く女の風俗を見てのみの了簡なり。語るものも故國自慢から聞苦きことは露ほども言はず、御濠の松に縊死あり、區役所の前に捨子の揭示あり、裏町横町の露地を入れば、罪無うして配所のごとき棟割長屋、こゝらには隣の庖丁借りて吭突く大晦日の儚さを識らねば、これほど好き處は無き土地に、我も住む身となるが嬉しく、何處を見せうといはるゝ繁華の名所を見物するが樂しく、耳目の慾のみ先に立ちて幼き心にはなりぬ。

浦島が子は龍の都に遊び、歸りて七世の孫に逢ひけり。此の男女房もありけむを、我ばかり面白さに、食はすことも忘れて、何百年の流連とは古今例無しの大浮れ、阿房の鑑となりしも、瑠璃の梁、珊瑚の柱に目の

眩れしに外ならず。

出入の髮結は天神の名人、此東京に三人とは無き上手なれば、と前夜より女房の吹聽にて結はせけるに、お艶の髮は艶ありて漆のごとく、癖無く濃くして、長きことは座りて疊に曳くを、髮結は下梳の櫛を停めて、世辭ならず譽めちぎり、誰樣のお姫樣に此半分も上げましたらば、見事なる島田が出來やうものを、結髮には勿體なきお髮、と骨折りたる出來榮は無類上々、下品ならず野暮ならず、容色も之が爲に一段上りたるに、薄化粧して又二三段上げたり。三ケ日は我女房にも惚るゝ人心、一結髮、二化粧、三衣裳、美女の此三道具を揃へたるは、男の目の大毒ぞかし。物を言はれては興覺むる加州訛。あの不調法なる語氣にても口說は出來ることか、と陰にて女房の獨り笑止がりけり。二階にては午少し過ぐる頃身仕舞了ひて、華車なる銀煙管に霞立つ長閑さに引更へ、樓下の混雜は、年始にも見えられぬ御前の御入。料理も此の近所のはお口に合はず、

と色々氣を採みて、遠路を厭はぬ仕出し。酒は猶更と、葛城が飲料の銘を覺えて其品を取寄せ、御感に預らば一家の面目、と夫婦心を竭して待ちけるに、三時頃より雪氣の空闇く、寒さ身に染みて足の爪先痺れ、頭元のぞく／＼に婢は呵られつゝ、隱して手拭を襦袢の衿に挾み、小桶の外に兩手の皸に息吹懸くる折から、霙落ちて一間前は見えぬ大降になりぬ。

今頃は出懸けらるゝ時刻なるに、さりとは惡いものが降出した、と夫婦額を皺めて、折角の設けも無駄になる事かと呟きしが、徒歩で來らるゝお身ならねば、霙も雪も馬車の中へは降らじ、と思翻して置火燵の用意を急ぎぬ。

お艶は手爐に大内を燻らせ、心閑に床の花を眺めてゐたりけるに、外方遽に噪しく、人の來れる氣勢と下行けば、餘五郎は毛皮の雨衣に包まりて、古狸の立てるがごとし。例の鏽びて太き聲して、えらい降でと女房

に挨拶しつゝ、轟に案内させて來るに出會へば、椽に坐らむとするを、此處では御挨拶が出來ねば、まづ二階へといふに、お艶も座に着きて、千萬禮を述ぶれば、及ばずながら何處までも引受けて御心配はさせじ、と立派なる口上濟みて、馬場夫婦の音信を尋ね、旅中の可笑き事どもを轟に物語らせ、二人笑ひの種にして、程無く膳出づれば灯を入れて、小歌の霙の音の合方靜に飲始め、醉うても仇口を愼み、轟にも其意を得させて、詭計の端をも氣取らせぬ仕向。他が此席を覗きても、女は藝者にあらず、妾にあらず、情婦にあらず、疑ふらくは是……………………途に何者か知れざるべし。折々出づる常談にも色めけることなく、いづれも席を正して獻酬に會釋多く、これでは女を置いて飲む効は無き親類の盃も同樣にて、一向可笑からぬ酒ぶりなり。

十時過に盃を收め、食後に少しく雜談ありけるが、此間お艶は苦しげなる呼吸にて、玉山未だ頽れざれども、桃花の露重き風情あり。氣毒な目

に遭はせました。近日別荘にてお茶を進せむ折には、今宵の返報に此方甘味責になるべし。酔過ぎてお話すべき用事も色々忘れたれば、是非近きに、と歸るを見送りて、攀づるがごとく階子を昇りしが、遂に得堪へず、長襦袢のまゝ臥戸に辷り入れば、枕頭に女房は氷嚢を括り、蕁は丸藥を探し、匜持て來るは下女の役。酔醒の水を汲置きて行きしまでは窃心に覺ありて、其後は知らず。

（廿三）夜半の嵐

客の歸りて間無く、剝啄と門戶叩く音すれば、樓下に獨り居合せたる轟は、徐に立上りて戶を啓れば、今方歸りし餘五郎が又來れるなり。轟は聲を低めて、痛く醉はせられたれば、唯今御介抱最中。程無くお寐らるゝまで奧にて御休息あるべし、と設けの席に導く。此には彼の置火燵を移して酒の用意も出來たり。まづお一盞と酌して、樣子を見屆けて參らむとて出で行きけるが、少時ありて階子を下來る二三人の足音して、僅三四盃よりは上られぬにと女房が聲も聞え、二階を早く形付けよと言捨てゝ、轟は又座敷に來り、最早お寐られました、と聞くより餘五郎火燵より伸出して、何かと厄介になりたり。此度の一件、前半は馬場の働にて、後半は全く其方の手柄ぞ、褒美は後日沙汰すべし。此後ともお艶の始末に就きては、萬端其方を煩はさむとあれば、臻らぬ身にはござれども御

用にも立たば難有かるべし、と額を疊に摩付けぬ。襖の外まで女房合圖に來れば、轟はいざと餘五郎を昇口まで案內して、媒妁は此處等が宵の口と還す。寢間は奥の六疊と忍寄れば、女房の粹か、身を入れらるゝほど襖の端を開けたり。枕頭なる有明の燈火幽にお艶の寐姿を見せたるに、冬の夜ながら醉うて熱ければや、胸の半まで夜衣の外に顯して、疊へ投出したる腕は玉のごとし。

* * * * * * *

誰か人の忍び入りたると夢心地に覺えて、酒氣の失せたる時目覺むれば男あり。心も消ゆるばかり駭きて蹶起くれば、お艶と呼びて向けたる顏に又吃驚、心跳り、呼吸急しく、憤然として夢を疑ひ、眞を呆るゝなりけり。

欺かれしか、淺ましくも褻されしか。猥藉なる餘五郎め、非道なり、無

禮なり。口惜や、腹立たしや、と顔色變りて身を顫はせ、男を瞋むる眼中より點々と涙を流せば、餘五郎は思の外なる氣色に驚きて、こは宥むる外に手無し、と虛言も交せて我切無き思を語り、迚も心に從はじと見て、詐りしも憎しとて爲し事ならねば、今宵の狼藉は幾重にも此方の過失、と詫びても肯かで泣入るを、なほ言を盡して、行末まで捨てまじき心を明かせど、肯かざるか、泣續くる。餘五郎は切りに口說く、お艶は直泣に泣く、此間に空白みて、戶隙より外の色射入り、鐘も鳴り鷄の聲も聞ゆる頃、お艶はやう／＼涙を斂めたれど、憤怒は未だ釋くべくもあらず、衝と次間に入りて、闇がりの隅に打俯しけり。

撫牛のごとく取遺されたる餘五郎は、彼の樣子を候ひけるが、徐に立ちて、次間に泣俯すお艶の後より、曉の寒さに風や引かむと抱起せば、腋に懸けられし手を可忌げに振解き、冷えわたれる身を石のごとく硬めて、袖に面を掩ひつゝ、壁に向ひて其の獨を守り居たり。

餘五郎は搔卷持來りて着せかけ、あれまでに實を語りけれど、心はなほ融けずして難面も泣いてくれるは、さまでに憎き餘五郎か。將た我情が可厭しきかと寄添へば、脇腹を臂頭に衝かれて、酷き爲方を恨みもせず、人の親の子の忤るを賺す氣になりて、十言いへども一言の應だに無きは、弦の斷れたる弓を彎くに似て、此くらゐ拍子拔して張合無き事はあらぬに、倦まず撓まず、口の酸うなるまで諄々と、女の心碎けぬべき言の有丈を口說きぬ。

お艷は只管男の狼藉を憤り、悔しさ胸に餘りて氣も狂はしく、世に容れられざる大罪をも犯せるごとく、人は知らず天地は知らでも、身に添ふ神は思ふことをさへ辱しめたまふに、此罪のみは懺悔にも滅せず、終身德の疵になりて、其瘢永く墓上の石にも留まるべきを、愧ぢつ、懼れつ、悔いつ、陋みつ、胸の紛亂に、目も眩み耳も鳴ひて、他の言を分解くべくもあらず。かゝる折にぞ涙ばかりは礙げられで限無く流れける。

餘五郎も幾と持餘して、四壁に浸入る霜に嚔の後の胴顫ひ、脱捨てたりし褻を引纏ひて、お艶の傍に氣色を覗てありしが、此女思ふに勝れる節婦なり。美色を烙鐵に傷けもせで、二十四まで春を護りて指もさゝせざりしは、實にもと今思ひ中りて、さりとは情無くも不便なる事してけり。此罪を贖はむには、お才お角などのごとく閨の伽ばかりの玩弄物にせず、隨分眞心を竭して終身の友と爲て得さすべし。衿に紅色のなくなる齡して、少女のごとく泣入る心中を推量れば、有繫に我も面目無くて、慾に任せて恁る惡戲することの不良の行なるを今ぞ悟れる。

彼は身も世もあられぬやうに悲めど、定まれる夫ある身を傷けしにはあらず。女子はいづれ男を持つに極れば、妻といひ妾といひ、名目は違へど、妻も妾なれば妾も妻なり。五十圓とる官員樣の奥樣とならむよりは、五千萬圓の紳商のお部屋樣と崇めらるゝことの仕合を、今の間に心着くべし。まして一度にても我が自由になりし上は、濡れぬ前こそ露をも厭

へ、慤なるからは、と誰も爲る覺悟して、得心するは知れたれど、今は何といふとも肚裏へは入るまじと、故と當惑せる顏して、其の樣に泣れては今更面目無く、夜明けて合はすべき顏なければ、之より一先歸るべし。重ねて逢ふまでに篤と分別えたまへ、と下りて見れば家内ハはや起きて、臺所には味噌汁の臭高く、障子の硝子越に覗けば、庭の立木白々と垣の根方に霜柱立てり。轟出で來て、昨夜は如何とまづ尋ねぬ。これ媒妁の古き式のよし。餘五郎苦笑して、弱つたと顏を撫でゝ溜息吐けば、事成らざりしかと轟大氣遣にて仔細を問へば、如何樣弱るべき段々を聞かせられ、一々眉を顰めて、なるほど〳〵と受流すばかり、唯不思議に呆れて言ふべき語も無かりけり。あの樣子にては二三日何も食はで、鬱鬱と物思ふなどの事あらむも圖られねば、さる慮を與へざるやう、わつと浮せて氣の紛るゝやうに娯まするが肝要なり。大義ながら此の役目は其方夫婦に賴みたり、と懷中より大きなる紙幣を摑出して、保養の入費

と渡せば、女房も罷出でゝ乾と御受をいたしぬ。

（廿四）火澤睽

八時にもなりぬるに、お艶は未だ起きざるにや、下來らざれば、汲置きし手水の湯は大方水になりぬ。女房は竊と昇りて雨戸一枚啓くれば、奥に物音して、軈て帯引結むる音のする〳〵と聞ゆるに、二枚目の雨戸を引寄せつゝ、お攪眠ましたかと聲を懸くれば、寢過ましてといふ聲音の曇れるは、女房も合點ゆきたるべし。釜や〳〵と婢を呼べば、箒拂子を持ちて直に昇來り、手提く寢道具片附けて掃除を始むるなり。

お艶は昨夜辱しめられし身の、面上に其由の書かれたらむごとく怯ぢ怖れつゝ、人無き闇に忍ぶべし、明るき日影、家内のものゝ見る目に面眩く、身を竦めてこそ〳〵と盥嗽に下りぬ。血色勝れず、瞼赤く腫れて、涙痕の濕へるに、鬢毛の少しく亂れかゝりたる、自から愁表れて憐深く、今朝の餘五郎の言に思合せて、さすがに男の手暴を憎む心も出でゝ、女

同士の情には、どのやうにも慰めて氣の莞結を解かせたし、と我は機嫌好くして調子輕に食事を薦むれば、今朝は物も欲しからずと辭むを、上げましたくてわざ／＼調へたる皿の物、せめては一箸と強ひつけて、今朝茶屋より人の來りて、歌舞伎座の見頃なりといへば、幕開は十一時、早う御支度をなされまし。好い處を取らせて置きました。否と有仰りましても肯く事ではござりませぬ。お約束ではござりませぬかと嗾り立つれば、憂き事餘る身は病めるも同じく、氣の沈みて懶げなる生返事を、女房は煎詰むる氣にて、義理と思うて一幕御覽じませ、お否ならばお歸りあそばさるゝまでと退かぬ言に、やう／＼向ふ鏡の我顏は、鈍くも褻されし不淨の皮、と愛相盡きて腹立ちて、眉刷毛投着けて、昨夜を憶出つる無念の涙を滴せば、折角の化粧も體無になりけるぞかし。

是ゆゑに由無き者に思を懸けられ、辱しめもされし顏を仍粧るは、まだ禍を招く氣かとおのれを窘めて、無散に洗ひ去りし顏は更に美しく、何

處までも迷はするに出來たる女と、餘五郎の見ば晒ふなるべし。
歌舞伎座も想ひしほどにはなくて、目は假せども狂言は身に浸みず。見物の花と見ゆる藝者の總見物、錦に玉を韞みて、粒の揃ひたるは新橋、と女房の敎へけり。男を客にして媚かしき藝を賣るだに、燐枝商ひよりは可愧しき賤業と思はるゝに、聞けば多くは無藝にして、手枕に世渡る賣淫とは、誰にも知られたる身上を、愧ふ氣色のあらざるのみか、藝者がどれほどか尊きものゝやうに、人も無げに座中に幅して、これ見よがしの顏色。さりとは淺ましき了簡、と他の事は謂はれず、我身とても其には違はぬ男の玩弄物になりぬ。
比べて見やうなれば、藝者の色を賣るに優るとも劣るまじき、賤むべきは我にして、愧づべきは此の身なりと、心に責めらるゝ切なさに堪へかねて、舞臺も餘所に俯きがちなるを、女房はそれと識れども、手を着けかねて氣ばかり揉みぬ。お艶は病者のごとく、女房は看病人のごとく、

互に胸を痛むるのみ、何の保養にもならで、一向つまらぬ顏にて還りけり。

此分にてはいかなる保養を勸むるとも、憂さの紛るゝことにはあらじ。端的に割碎いて、飲込ませるが効能もあらむか、と夫婦談合の智惠を搾りて、晝は遊山に連行き、夜はまた說得する事に定めけり。

夫婦交る〲言を盡して、葛城の人物の賴もしく、飽きて棄つるやうの薄情ならぬ證據を數へ立てゝ、一口に妾といへばいふものゝ、妾にも品ありて、玩弄物ばかりなるもあれば、世嗣を儲けむ爲の浮氣ならぬもあり。奥樣には男の御子といふもの無く、孃樣はあれども、御病身なれば行末賴みにはならずとて、奥樣も御得心にて、これまでに二人もお妾を置かれたれど、仕合惡う、いづれにもお胤は宿らず。おひ〱血氣の衰へゆかるゝお身なれば、今の內ぞと躁らるゝ折から、お目に留りたるは此方樣。金澤の江口屋にて奥樣も陰ながら御樣子を知られて、あれなれ

ばど御夫婦のお心に稱ひ、馬場樣もそれはと淺からず歡ばれながら、此方樣の物堅き御氣性を知れば、打明けて恁とはおほせられざりけれど、倶々に勸めて此方へ遣はされしは、其思召ありての事なり。日頃此方樣を子のやうにお世話なされし馬場樣御夫婦さへ、御身の爲を思はれての取計なれば、必ず惡かるべき筈無きに、よく〳〵御分別遊ばさるべし。名義は妾といふものゝ、葛城樣を一生一人の夫と守りて貞節を盡されなば、女の道に何處か背きたる處あるべき。人の女房にて二十三四にて夫に死別れ、便る方なければ可厭でも再緣せずば身は立ち難くて、浮氣ならで兩夫に見ゆるは世間も許す例なり。

それと比べて之を如何に思召さるゝや。萬一の事ありて葛城樣の先立たるゝとも、一生安樂に暮さるゝやうに爲置かむとあるからは、末は捨てられて、どうの恁のといふ氣遣無く、第一氣樂なるは、普請は望みのまゝの結構なる家に住みて、月々百圓のお手當にて、二週間に一度ほども

葛城様の見えらるゝ外は、主無き獨天下にて、お世嗣の出來た曉には、其上又どのやうなる御身分にならるゝ事か、考へても御覽なさるべし。承はれば、葛城様は此方様のお宅へ、お出入の卑き御身分なりし由。さるものに傅かむは、と耻辱に思召さるゝは一理あるやうなれど、古の豪傑乃至は今廟堂にあらせらるゝ顯官方も多くは下賤に生れ、男は裸百貫とて器量次第のものにて、氏系圖を彼此いふは、才能無き零落ものゝ負惜なり。我祖は天日嗣の御末にて其中頃は左にも右にも、とさる學者の詠れたる歌の通り、先祖は誰も同一なる我々の華族となり穢多と下り、富人となり乞食と落つるも、皆人々の腕次第なれば、人は生れにて貴からざるは、黄金も金剛石も、足に踏るゝ土中より出でゝ、恐多くも帝の冠にもなるぞかし。餘は女房の番にて、女はまた女の腑に落つるやう、理窟を放れて事を凡近に取り、義を勘定に發して、腭の關鍵の痛くなるまで諭しにけり。

白刄を頸に好て丶、從へと脅かすとも、命を取らむとても靡くまじきお艶なれど、先の一夜の首尾は、猛虎に射たる一箭よりも身の弱りとなりて、心も鈍り、醉はせて忍ばれし我には微塵も浮きし心はあらざれど、褻されし後の所爲無さは、紙に墨を塗りたるも同じ事。其痕を滅さむには、紙を引裂き捨てむ外に術無く、身を殺すにあらざれば、此汚點の去るべきにあらず、命あらむ限りは褻れたる身なり。初一念を悛めず、妾を嫌ひて他人に添はゞ、男二人持つ理にて、これも懲づべし。左右は墨塗られたる紙を墨に染むべきか。それも口惜し。

是非の分別紛々として我心に持餘し、馬場の許へ文して相談すれば、夫婦二通の返事、葛城の世話になれと倶々に勸めぬ。なほ定めかねて易を見てもらはむと言出しければ、中らぬも八卦と、凶と出られむことを恐れて、夫婦口を極めて、疊算も同じ理窟、由無き惑ひの種、と斥しても肯ざれば、女房附添ひて、小石川に前有といふ翁神通の上手と聞きて、

之に便りて吉凶を問へば、火澤睽の上九の變に遇へり。これ始は人を疑ひて讐敵のごとく忌厭ひけるに、其人は更に害心無くて、却て我に親みを求むる象なり。寇するに匪ず、婚媾せむとす、往いて雨に逢はゞ則ち吉ならむ。されば此方にも疑念を霽して和合するを吉とすとは、どうやら女房が先廻りして誂へしやうなる判斷、と吉過ぎても心快からず。猶樣々に案じ煩らへども、六分までは此方の物、と竊に葛城へ樣子を通すれば、其夕餘五郎來りて無理に說伏せ、轟夫婦の前にて强制の盃事ありけり。

三人妻 後編

（一）櫻茶屋

春も四月になりて櫻咲きぬ。人の心も陰を出でゝ陽に浮けば、醉ひもせぬに面白く、歡を爲す能幾時ぞと、不用の財持てる身の撒きたうなる日和、凡そ人の無分別發すは此候なり。

葛城大盡念懸けたる女は盡く手に入れて、今は金儲の外に慾無く、こればかりも氣が竭きて、何をか娯樂と、變りたる事を考ふれど、抑娯樂といふは物事不自由の中なる少しばかりの自由にて、さる大名方の染々近侍に御意遊されけるは、予は一年ほど家來をして見たいと。此ぞ御尤の正中なりける。世間の待受けて樂にする正月も、一向可笑からず過して、天地も若やぐ花の時節に、錢勘定ばかりしてゐる所爲か、朧月が大きな

銀貨に見えて、酒も身に浸みぬと、種々に保養の工夫すれど、格別の智惠も出ぬに困じ、お麻を捉へて、何と春らしき趣向は無きかと、洒落半分に尋ねけるが事の起因となりて、先頃手に入れたる音羽の別莊は、庭廣く櫻夥しく、希なる名本も數ある由にて、此一週間を好時節と聞きぬ。花見して御秘藏の三人を招き、主は同一の三人にも顏を會させ、妾はまた娛しがらせたまふ美しきを拜みたければと、味な註文を、それ可笑かろ。たゞ花見にても興無し、一趣向して慰まむ、と餘五郎乘氣になりて、彼か此かと案じもし、談合もして、横手を拍つほどの事は浮まず。ちと古けれど葭簀張の茶店を出させ、賣物は銘々の工夫にして、一家のものゝ百人も寄せ、花薰り、人の出盛る中を、姉樣冠に目鬘して、鰑の煮附、慈姑の團子、横食立飲、思ふまゝに浮かれて見ばや。花も長うはあらねば、急げと餘五郎がいつもの短氣。招かれたる客は此催を樂み、明日にても苦しからずと頸を延す中に、茶番氣ある輩は我劣らじと、思ひ〳〵

に目論むなりけり。

趣向は面々隱して、蓋を開けて、わつと言はするが花なれば、構へて我にも知らすべからず、と三人へ大盡の註文。當日の大役味噌を付けては耻のみにあらず、御機嫌を損じてはと、いづれも半狂亂になりて騷ぐに、お艶ばかりは自若として貪着せざる樣子を、匕を投げたるぞや、と懸る事は古今江戸ッ子に限りて、加賀國の住人には難題なるべし、と人の氣の毒がりけり。お才は柳橋の喜佐太夫といふ頓才卽智の男藝者を軍師に賴めば、扇を颯と開きて、腰の邊をはた〳〵と打扇ぎ、隨分御心安かるべし。諸事は不肖の方寸に罷在りと承引けて、日夜懈無く計を運らせば、お角の方にも油斷せず、趣向獨の胸に餘り、手近なる附人の長澤を相手にせむにも、餘五郎が此奴たしかと見立てゝ附け置くほどの親仁なれば、仁義忠信の講釋は善くするものゝ、洒落を四つ地口二つの外は、其筋の心懸あらざる唐邊僕、膝にも劣れる相談相手と、更に候補者を求めけるに、

出入の小間物屋の親仁、昔の放蕩の遺物は、歯脱ながらの美音、清元に千兩注込みしを今の自慢にして、其頃は隨分惡い洒落もせしといふを後見に頼めば、そんな事ならば身錢を切りても、一向苦しからぬ好物。二つ返事で請合ひ、家業は餘所にお角の家に入浸りて、息子が提灯さげて夜迎に來たりしを、呵飛ばして之に夢中なり。

當日の來客は總勢百三十餘名、此中四十人は餘五郎が格別の懇意にて、外は總て我商廛の重役と聞えぬ。

音羽の別莊は、五日の間に藪の中なる小草も迹なく、花の木下は箒目清く、土香りて、處々に茅葺、貝殼屋根、葭簀張、黑木造、姿をかへたる十軒の茶店建ちて、護國寺の鐘啼鳥閑に今日は暮れぬ。

曙の空曇りて如何と氣遣ひしに、風少し出で丶、麗なる日和を定めぬ。

音羽なる笑靑莊の門には、翠柳の綠濃に、二十餘間の流水露地、垣の外なる密竹に暗く、此に心を籠めて幽情の體に造り、奥庭の木戸を入れば、

華美さに目覺むる一面の櫻林、何千本の枝頭花重く、人は雲の中を行くがごとし、西の隅に一拱もあるべき普賢櫻の下に錦の幕を張りて、伶人袖を聯ねて妙なる音を立つれば、門を入るもの多時は此處を去らず。休憩の床几を幾處か木間に据ゑて、各十一二なる女童の眉目麗しきを擢りて茶の給仕に附け、少しく距りたる物蔭の小屋に、煮茶點心を司どるものあり。ほの〲と茶煙を落花の風に颺げたる、いと心憎し。

花見る衆を見るに、いづれか容の可厭なるは無し。今日の爲に衣裳を新に調へたるも多く、綺羅の巷とは是なるべし、唯見る十餘人の女郎の一群一樣に紺の日傘をさしかけ、銀地の扇を鬢邊に翳して、淡紅天鵞絨緒の雪駄ちやら〲と、美なる面を揃へて、嬌媚かしきこと限無し。此時樂の音の一際清みたるも不思議なり。

或は黑の紋服袴裝の五七人、美男揃ひにて來るもあれば、母を勧り、子の手を牽き、妻を伴れたる殊勝なるもあり。衣香、帽影、簪の光、黃金

鎖、マニラの烟、薔薇の風、女の顔は白く。男の髭は黒く、往來織るが如く、笑語の聲の中を、反古染の袖無羽織に淺黃頭巾打冠りて、白酒や白酒を賣行くは、第四商塵の番頭清水某、これは御趣向と褒るものには、格別の大茶碗にて振舞ひ、向鉢卷にて難波鮓と箱擔げ行くは第二商店の會計、老妓の島田ほどの韄包を行遭ふ童女ごとに一つ宛くれて通りぬ。チャリネの道化師樣に裝束ぎたる男、首筋にその數二百許色々の風船球を結ひつけて、西洋唱歌を謳ひつゝ、道化女に裝りたる侶にヴィオリンを彈かせ、拍子をかしく舞ひながら絲を斷れば、寶珠の玉の天上のごとく、小氣球天に滿ちて、之も興になりけり。此外に種々の思附人笑せとなりて、いづれも花は餘所に、此上はお妾樣は何處におはします、と足は皆掛茶屋に向きて急ぐ折から、木陰より白鳥片手に銜と走出でたる女房あり。手織縞と見せたる京御召の小袖に、紋縮緬の赤前垂、淺黃縮緬の平絎を片襷〆して、横櫛露に置手拭〆たるは、茶見世の嬶が酒買ひに

ゆくと見せて、水際の立ちたる美人、彼は誰と吃驚せぬもの無し。跡を追けよと口には出さねど、其心に違ひ無き一群、燕尾服着て目尻の垂れたる男が、先達になりて花の雲間に分入れば、池の畔の鏡花亭の主、煮染の品々を砂鉢に盛りて、外見を不味々々しく、念の入りたる生稲が庖丁。酌に付けたる小女郎の馴れたる擧止は其の筈、一粒撰に云たる柳橋の半玉ぞかし。

三間の出店にも各客滿ちて、主婦は八方を駈持に、面白半分の仇口きゝて、應對の上手と姿の意氣なるに、識らぬものも此の女こそ才藏と目を着けぬ。築山の麓なる四間の掛茶屋は、本宅の小間使、出入の者の娘の受持にて、茶辨當を預るなり。

玆に一際目立ちて見えたるは、木間の廣き處を擇びて、五間四方に白と淺黄の段々の縮緬幕を打回して、燃立つばかりの花氈を鋪塡め、洋服着たる客の爲には緋天鵞絨張の椅子を備へたり。給仕の女十人、白衿に紫

の矢飛白の振袖、鶸茶の變裏、淡紅緞子の帶を立やの字に、鬱金縮緬の扱を長く結び下げたり。絹足袋、紅緒の草履、高島田にお輕簪、一樣に靚粧を凝せる面を揃へて、人に思はくの好惡はあれど、色好き姿を恁も能うぞ聚めける。いづれの大名衆の櫻狩か、と昔を今に忍ばれて、格別の趣向奥床しき觀なり、と持囃しつゝ、此處は紅梅の受持と聞けば、察する所、自身は姫君の扮裝にて、彼几帳の蔭に小陰れ、今に現はれて驚かされむ、と士女目を皿にして四邊隈無く探せども、さるべき影も無し。まことは此小姓粧の中に姿を窶し、女將門の孰れを其と見紛らせむ巧は、飛切りて獨り無類の艶顏に露るゝも是非なし。

二十二三と聞きしに、十八九の中に立交ひて、あながち年長にも見えざる凄さ。威ありて猛からず、愛嬌ありて嫵かず、温乎と玄たる風俗自から御守殿の美い處を備へて、之が地かとも想はるゝ品の好さに、あの御酌にて戴かれるとは、今年一年中の冥加と、新橋邊に嫌はれぬ男どもゝ、

見識を失して此幕の中へ込入る。垣間見る女等は品評して、人立山の如し。

此處に飲み彼處に喰ひ、禮も糸瓜も忘れかゝる頃、今一人お艶の店の知れぬを衆人噪出して尋ねけるに、築山の陰に花の氣少く、水石の形勢をかしき處あり。四方植込に隱れたる庭の奥に茶寮古びて、新しき枝折戸を見付け、此處ぞと入れば、竹の奥に碁聲ありて、花も酒も浮世は煩き顔して、五七人の客を友に、心閑に茶筅を拈りて、颯々の釜の松風に耳を清ます女はお艶なり。玉川式の面影を寫して、茶を賣る心の風流、此胸中有難しとおもふものは僅少にして、惡寂に寂びすましたる此體と見るより、飛だ目に遭ふべしと、心得無き輩は恐怖をなして、門より覗きて逃歸るもの多し。

お艶はさる窮屈の主意にあらで、酒の濶には妙なる趣向の心算違ハ今は葛城夫婦を待つの外無しと思ひけるに、おひ／＼女客の入來て、茶

杓の手許忙しく、折角の志も通りたるを喜びけるが、女の此處に入込むと聞知りたる若紳士輩、餘所ながら憧れたる令嬢の跡を慕ひて、聚るのも寡からず。後には椽に腰掛けて、片手飲の横千家などゝいふ無法流義も顯れ、濃いのを最一杯と、夜店の甘醴飲む氣の醉漢あり。これで醒めた、又改めてと腰の瓢を取出し、一組始むれば、三組四組となりて、此庭も散々に騒がされけり。

餘五郎夫婦は目立たぬ装して、まづお才の煮賣店から巡覽り、紅梅の幕の內、お艶の茶事、いづれも氣に稱ひ、諸客の遠慮無き浮かれ樣に滿足して、夕暮人の散るを待ち、今に月も出づべし、更に夜櫻を肴に內曲の酒盛、と寮の二階に席を設けて、お才、紅梅、お艶の顏を揃へ、夫婦を上座に相識の盃を回らせり。

横櫛の意氣、御守殿の品、茶人の寂、庭の櫻を併せて四絕の色、お麻は女ながらも此中にゐて、掃溜の側に立つ心地にはあらず、成る口におの

づから過して、春の夜のおもしろや、花の露に醉を醒まさむと、五人連立ちて庭に出づれば、夜色朦朧として風寒からず、月を踏み花を分けて、もう二十年若くば鬼事して遊ぶべき夜頃、茲に一人婆が庭にて七百金の春の宵、と餘五郎が皮肉を言へば、其髯ゆゑに四百圓とお麻の嗤ひぬ。今宵は此に雜魚寢、と二階の十疊の間に床をとらせ、いづれも然ぞや疲れたるべし。はや寢まむと口には言へど、月のおもしろさに餘五郎欄の傍を離れかねて、酒に痒き頭を紅梅に掻かせ、お艶茶を持て來いと大欠して、此觀を見捨てゝ寢るも惜ければ、お才何か意氣な音〆を聽かせよ、今日奥方へ謁見の驗に、銘々藝盡と望みけるに、三味線も琴もこゝに用意無ければとて事寢みけり。餘五郎はなほ寢惜みて、何か爲ねば氣の濟まぬ顏して、霎時髭を拈りけるが、軈て手鞄の底より黑髹蒔繪の小匣を取出し、中なる物を覆くれば、拇指の半分ほどなる花骨牌なり。お麻は昔からの好物、當時は上流にも行はれて、賭博は西洋にて皇族方も公に

遊ばされ、仙人も碁を打ち、殿樣も將碁をさして咎めざる世中に、花鳥の牌の獨り卑き理はあらじ、と歴々の奥には繪合といふ陰名つけて、三人寄りて物閑なる席は此遊びと直に人の合點するほどの流行に唆かされて、覺えある手を一寸出したる一度が、二度三度、毎度餘五郎が仲間の一夜千圓の勝負の場にも現るゝ上手なり。お才は下手の横好、待合の奥に徹夜の鼻孔を黔くして、取られて腹は立てど、忘られぬ面白みと膝を進めて身構へけり。紅梅は雪村の別莊にありし頃、折節は朋輩と慰みける事あれど、金錢の沙汰にはあらず、言問團子の賭にて、修行えたる腕前の覺束なきを斷れど、何も洒落と勸められて、枯木も山の賑しと席に着けば、お艷も此へとお麻の言に、不調法にて一向心得ませねば、私はこれにて拜見をと、外貌には田舍もの丶不束を慙ぢて、心には身分ある士女のかゝる遊爲ることを驚けり。

さらばと、お艷は除けものにして四人の勝負、餘五郎夫婦は負けたらば

金にて拂ふべし。二人は裸躍と聞くより、紅梅は怯氣立ちて、心底から否を言ひ出せば、いづれも面白がりて聞入れず。種々の難題いひかけて、撒かぬ前から雨桐の絶體に、紅梅も爲やう事無しの覺悟して始めけるが、半途よりお才の大敗續きて、苛立つほど散々に敗れ、吟味はお麻、裸躍はお才と囃立てられ、其だけは御勘辨をと直過りに過れば、紅梅が謂に否といひし時何と言ひしぞ。罰金と云て即金五十圓出さば免さむと、其方が立てたる憲法を自身破るべき謂無し。目前に五十圓並ぶることが克はずば、脫げ〳〵、躍らぬかと夫婦に迫られて、是非無さは御殿場のお三輪と、しぶ〳〵帶解捨てゝ、何を躍りしやら、お艶は顏を背けて見ざるなりけり。

（二）口説の種

今日の花見を相識に、此後は心易く折々出入るべしとのお麻の言を、三人ともに有難くお承して、互ひに朋輩の誼を思ひ、末々までも睦しう渝らじと、挨拶美しう別れぬ。

歸來の馬車の中にてお麻の言ひけるは、那の三人には大抵の男は殺さるべし。女の目より見て難をいはゞ、言ふべき廉の無きにはあらねど、紅梅は温乎と爲て内慧く、閨中に手ありて情も相應に深かるべし。お才は俠に爲て張強く、男に我儘なる所弄ぶに面白かるべし。お艶は無垢なる生娘、唯優しく爲て實あるを取柄とす。銘々の役割をいへば、お才は酒の酌、紅梅は床の口説、お艶は茶漬の給仕と、二人して哄と笑ひて、一番の御意に入りは誰と尋ぬれば、餘五郎暫時は物言はで、纔て頰の邊に笑を含み、されば、お才は確ならざる處ありて物足らず。お艶は底に幽

婉と云たる處ありながら素氣無し。紅梅こそと聞きて、然もあるべし。昔ならばお家騒動の曲者とてお麻は笑ひけり。紅梅は人先にお麻の機嫌伺ひに行きて、例の三指にて侍女の御前樣に冊くがごとく、寵を恃む心は無くて、憐を求むる色をのみ見せければ、如在なき女と思ひつゝ、憎むべき樣無ければ、來る度毎にお麻も可厭な顏せず、後には有繫に不便も加はりて、折節には餘五郎にも噂して譽むるまでになりぬ。

されども用無き身の餘りに頻繁の出入は、眞を露はさるゝ基と、大方御機嫌伺ひの日を定めて、月に二度よりは行かず。二度は缺かさず神妙なる處を見せて、可愛きものになるべく努めければ、去るものは疎く、來るものには親まるゝ人情の脆さは、蜘蛛のお重も異ること無し。日頃は我慢強く、人のいふ言は聞かぬ女も、昨日出來し袷の見立にも首から紅梅の助言を聽き云ぞかし。

お才お艶も二月に一度ほどは尋ぬれど、紅梅に比べて無沙汰勝の間には

おのづから隔意ありて、待遇は親類客のごとく、紅梅に粗相あれば無遠慮に小言いふなど、萬の仕向內の人に同じく、外を伴れあるけば姨にも見ゆめり。

お艶には意地から思を繫け、お才は浮氣から靡かせ、紅梅には餘五郎も心の底から惚れたる氣味あり。地女なれど天性備はる男殺し、格別巧みて言出づるにもあらぬ辭に情を含みて、何處に一つ媚かぬ處も無く、とても拵へものゝ黄色が及ぶことにはあらず、樹に咲ける花と絹絲細工の剪綵花とのごとし。男も玆に執着して、一際憎からぬ思あるに、尙お麻の陰ながら譽むるが力を添へて、いとゞ可愛きものになれば、深川の道の外はおのづと忘られぬ。

もとが菊仕への意地から、然した譯のお才の心には、微塵も餘五郎に好いたる處あらねば、思はれてから嬉しくもなければ、疎まれたとて苦勞にもならず。何分とも宜敷やうに先樣次第と構へて、之が御意に召さ

す。飽れて棄てられたらば棄てられた時、最一度左褄も可笑かるべし。色も慾も離れたる身に。一月は扨置き、半年お出が無くても仔細無けれど、飼はれては鼠を捕るが猫の務、鼬の道を切りたる旦那殿を、戀しさうな顔もせずに、怨言の一句も言うてやらずば、月百圓といふ扶持の手前も冥理惡く、惚れましたといふよりは、怨言いふを男は悦ぶものと、知りながら悦ばさぬも罪深し。近頃久しう髯殿の見えられぬは、疊も青い内のお艶いぢめに精が出られるのか、若又風など引かれてか、北の方にも久しうお目通りをせねば、其をも兼ねて殿樣の安否聞かんと、本宅を訪ねける日は餘五郎留守にて、奥の別室に遠音幽しく、お麻を正座に紅梅が琴を調べてゐたりしが、お才の入來るを横目に見て、手をも停めず悠々と一段閑ひて、それからの挨拶が昂然として言寡く、横柄なる物の言樣、音羽の花見の時とは人が違うたか、と想ふほどの見識になりぬ。今は朋輩なれど、此間までは雪村の私窩子に、卑くさるゝ我にあらず、

と氣嵩なるお才は胸に蓄ゑかねて、口に唾の溜るほど言ひたかりしを、お麻に遠慮ありて辛抱すれば、小癪に障る仕打いよ〳〵目に餘りて、此上に勘辨の爲樣もあらず。長座せば事を起さむと、立際に紅梅を睨めつけて、ちとお遊びにお出なされまし。

今日の樣子にては、紅梅め疾よりお麻に擦込みて、朋輩の我等には附合うてもらはずとも、困らぬ心の驕から、虎の威をかりそめにも高飛車に出て、他を目下に見くさる憎さ。世に胡麻磨の種は盡きず、何處にもあ る奴ながら、側で見てゐて此位可厭なるは無し。緣も恨も無いものにしても、這麼奴には折があらば謂々いうてやらでは寐心の好からぬ氣に、我慢のならぬ今日の狀態。彼等風情に臂を張られて、すつこんで歔欷かく女子にあらず。松の間の判官ではなけれど、飛着いて唯一擊、と躍る胸を撫りて事無く濟せしは、苦勞せし身にも似合はず、場所を辨へぬ爲方、と他の思はくも可惡しさに、了簡のならぬ所を了簡して、還りしほ

ど恨は重なると知れかし。近き内に此返報は屹度する。其時泣くなと折を待ちしが、出會ふことも無くて久しく過ぎけり。此頃聞けば餘五郎は紅梅の許へのみ足繁く、お艶も我も日蔭になりて、萌るも同じ草なるに、さりとは枯れゆく身の意氣地無さ。此方からは望までも、男から慕うて來るほどの勢でなくては、妾といはるゝ顏の潰るゝ道理。取るゝ男は惜からねど、之を鼻に懸けて增長する紅梅の小面が憎ければ、何がなして思ふ樣腹立たせ、喧嘩して此徒然を慰めむと、見事ならぬ筆に文認めて、餘五郎の打絶えたるを辭媚かしく散々に怨みて、末には紅梅が見ては惡い言を多度書散し、御前樣と上書して、わざと深川なる紅梅方へ持せけるに、折から餘五郎の居合さゞれば、確に預り置く由をいひて、何處よりと問ひけるを、使の男はお才が誂への通り、此方の名を裹みて、胡散臭き言を遺し、文函を置きて歸りければ、一つ口說の種が出來たと、紅梅は竊に紐の封を解きて披き見るに、手跡は誰とも覺あらねど、紛ひ無

き女子の文は、何處あたりの浮氣、と心面白く讀下せば、格別變りたることも無き怨言盡し。合點のゆかぬは、末におのれを譏りたる文句、樣子を知れるものならでは、書けぬ筈の事まで書いたり。此よりもなほ可訝しきは、文を屆くるに處もあるべきに、商賣敵の妾の方へ持するは、盜人に金錢預くるも同じく、かゝる淺薄なることは兒輩も爲まじきに、色でもせうといふものゝ、さりとは底の知れぬ不用心、と爰に考へつきて、此方の樣子知れることを思ひ合すれば、我を弄ばむとて誰かの惡作劇か。御方來らば何事も解るべし、と舊の如く封して預りぬ。

次日餘五郎に始末を語りて文凾を見せけるに、手をも觸れずして熟々と視めたりしが、軈て憶出したる氣色にて、忙しく中なる文を取出し、五六行讀みて呵々と笑へり。末を見るほどなほ笑ひ、投出して又笑ひ、馬鹿めがと庭を見向きて、笑は眼中に名殘を留めたり。何方からのお文やら大分麗しい御機嫌、と紅梅は知らぬ顏して搜を入るれば、閑なる餘り

にお才めが馬鹿をするわ。讀んで見よといはれて、始めての顔して一通り讀み、何意趣ありて此樣な私の惡口を。書るゝ覺はある筈と流眄に掛けられて、紅梅は面羞げに俯きつゝ、文函の總を撚りて、三度に一度はお才樣へもお越ありて。お艶樣をも訪ねておあげなさりませ。かく絕々に乞たまふは、皆私が左や右いうてお引留め申すか、何ぞのやうに思はれまするも愁ければ、此後は隨分お二人をもお娓がり、又私をも忘れたまはぬやう。女は心狹く愚痴なるものなれば、此文は根も無き戲れとは思へども、遂には此樣な譯にもなるべし。三人姉妹と睦しうするも、また讐敵の間になるも、御前お一人の爲され方ばかり。這麼言をいうて明日は知れぬ秋風の我身や。

(三) 三尺餘の長文

紅梅は此文を送り越せしお才の肚を見透して、手出しせば他の坪に陷る譯なり。遠くへ退いて笑うてゐたらば、業を沸して踠く處を見物するも好い復讐、と餘所を風の吹く顔して取合はざりき。

お才は紅梅の返事あらむ、と待てど暮せど沙汰無ければ、案に相違してぬるい事ではゆかぬ女子、あれほどの言をいはれて、痒さうにもせぬ根性はいよ〳〵憎し。賣りし喧嘩は買はれず、器量を下げられたる腹癒に、是はどうだと焦心になりて、筆を走らせし三尺餘の長文、いひたいほどの雜言を書散して、先日は御手製の胡麻汁、結構なる御加減に思はず戴き過ぎて、今日までも胸惡くと、無遠慮に水破拔きて又送りけるに、紅梅は恁ある筈と驚く氣色も無く、披き見て餘りの手強さには呆れぬ。有繋に譽めらるゝに腹は立たず、心に覺ある事を散々に辱めたる文言の、畜

生呼はりえたる處もあるに、心は焚立つばかり、身顫ひして憤りけるが二度までも係る事するお才は、我と刺違へて死ぬほどの覺悟なるべし狂人の敵手になるは大人氣無し、捨置きて構はず、苛ちて何百本の文を寄越すとも、見ずに濟さば腹も立たじ。敗けた風して後から攻むる分別あり、と其文は小皺もつけず、封のまゝに仕舞ひ置きぬ。

今度こそはと待ちけるに、幾日經てども例のごとく返事無ければ、腰拔めとお才も愛相盡して、此上は面と向うて思ふ樣言うてやるべし。書けぬ手に骨折り損と呟きて、其後文通は思ひ止りてけり。

紅梅はお麻の許へ駈着けて、悔しい事がござりまするど、帶の間より彼の文を取出し、之をと涙ながらに差置けば、お麻は心得ぬ體に驚きつゝ取り上げて讀下す二三行にまづ呆れ、熟と見るほど、他事ながら腹立ちて、これまでにお才の毒言吐くは、いかなる恨ありてか、と段々樣子を訊ぬれば、露ばかりも然る覺は無けれど、事の起因は、と最初の文の樣

略を語りて、嫉妬からかく怨まるゝやうに微見かせば、お麻は一々領きて、何と言はれても然る無法ものは對手にせぬが善し。此方に思ふ仔細もあれば、悔しからうが勘辨して、何事も我に委せよ、と底に賴ある言を聽きて、紅梅はやう／＼目を拭ひ、勘辨せよとの仰無くとも、場數を踏みたるお才樣の片腕にも足らぬ意氣地無しの私なれば、手出しもならで泣くばかり。おやさしき御前までも遂にはお才樣の上手なる口車に乘せられ、罪無き身に難付けられて、捨てらるゝまでも物は言はれぬ腑效無い私を、奥樣の不便に思召されて、其の樣に仰せられて下さりまするを力に、何事をも辛抱いたしまする。このやうな不束な私なれど、行末ともにお見捨無きやう、其ばかりを賴の心細さ。何分ともに宜しう願ひ上げまする、と艶なる聲を曇らせて、凋るゝほどなほ美しき姿には、女の心も消えぬべし。

(四) 歌舞伎座

近頃閑の身にお才は無事に苦しむ餘、新唄の作して三味線持つて見ても格別冴えもせず。うろ覺えの茶事を最少しと、師匠を呼びて稽古を始めしが、旨くもあらぬ水泡にも飽きたれば、挿花をと思ひ立ちて習ひけるに、氣の向かぬではなけれど閑雅過ぎて。之ばかりにては適興にならず、錢ありて爲す事無き樂の身の今となりて見れば、質置きて旨いもの喰せし柳橋の古巣も折々は憶出さるゝなり。

歌舞伎座の夜芝居、團十郎の高慢なる勤王論が呼物になりて、開場以來の大入と、かゝる事まで八重葎の中へ知るゝは新聞の德なり。團洲の藝は女子に面白からねど、通がりは解る顏して、次手に三好屋をも好いといはねば、可慚き事に思ふ雌酢豆腐も多し。お才はこれぞといふ贔負も無く、誰の芝居もおもしろき目を久しう慰めず。長く見ねば見たくもあ

らぬまゝに過ぎけるが、此頃のつれ〴〵に不圖憶ひ出して、一日涼しき日にと思ひ立ちぬ。

啞ならねば話相手無くては興薄の、好侶伴もがなと覓むるに、柳橋の朋輩には心の合うたる女あれど、此群に立交ることを夙て餘五郎に戒められたれば、誰彼と謂うより、閑なる體は我と同じきお艶を誘はゞや。溫順ばかりにて別に旨味は無き女なれど、心に毒を有たぬが何よりと、左も右も附合ふ氣になりて、花見の後は一度も會はぬ無沙汰見舞にして尋ぬれば、寂しく便無き身に殊外歡びて、見物のことは快く諾ひぬ。

正午の開場は二時になりて、風通しよき鶉も暑さ蒸すばかりの大入。人熅に眩暈して、弱き女は血道をおこし、何も吭に入らで纔に果物氷水に凌ぐ。土間棧敷に扇扇團の搖くこと、不忍池に風吹遍る風情あり。

此の人數の中に、見事の綺羅飾れる女は多けれど、美麗なる容顏は寡きものなり。土間の六に木綿縮の浴衣きたる唐人髷の娘、粧らねど美し。

此外にお才お艶ほどの面を見ざるに、華族方かとも想るゝ衣裳の臻、持物に應じて疎かならず、茶屋の待遇も虚のやうに恭しければ、瓦に交る玉は人目を牽きて、舞臺の役者までがそゝるにぞありける。

眞向の高土間に、黒絽の羽織、柳條數寄屋の古單衣、鼠色なる白縮緬の兵子帶に、金色の角繋の鎖を卷着けて、銀時計の金の龍頭ばかり見せかけたる男、水牛製の双眼鏡の筒口を、始終二人の方に差向けて、執心の事なりき。身分をおもふに、書生の風ありて書生ならざる處あり。多分は下宿の奧二階を二間借りて住ふあたりの官吏と覺し。肺病ありげに華車なる美男子、手などの白く纖く軟かきこと十八九の娘のごとし。鼻下に八字の薄髭ありて、前齒の端に黄金を貼けたり、格別嬌めける樣子は無けれど、何處やらに我は色男といひたき風ありて、女子さへ見れば殺したがる了簡、恐るべき人のやうに見えたり。

幕間に二人の立つを見るより、男は衝と身を起し、疾足に跡を慕ひて茶

屋を見屆け、軈て物案じ顏にて還りけるが、眼色も尋常ならず、心の落着かぬ輕躁に、火の着かぬ卷莨を啣へて、人無き鶉も可懷しく待つに程なく、どろ〳〵と雪颪の音凄く聞ゆる頃、二人は紺の中形の浴衣に衣更へて、見るから涼しげに打扮ち、茶屋の女房を始め五六人の男女に送られて入來りぬ。彼男は幕の開きかゝるにも關はず、また升を飛出して、假花道の口より鶉の樣子を窺ひて、霎時佇むを制せられ、階子を昇りて三階の運動場に、銘酒賣る店の椅子に腰掛け、欲しくも無き葡萄酒を一盃取りて。卷紙硯箱を借り、四邊に人の在らぬを幸ひに、假名にて細く認め、引結びて手の中に藏るゝほどの文にして袂に入れ、此幕は見ぬ氣にて悠々酒を飮み、後は氷ラムネ、胸の淸くはずの水も痞へて、半分にして立ちぬ。場所へは還らず、柝の音の餘所に聞きて、例の如く思ある方を望み、折々は舞臺を覗きて、此幕の長さを待遠なる顏色。

彼の鶉に何尋ねに來にけるか、年輩にして篤實さうなる茶屋男の、禿げ

たる頭顱西日を承けて光るを見付け、途に歸來を待受けて呼止むれば、御用で、と解しかねたる樣子。小蔭に招きて、まづ五十錢の銀貨を掴ますれば、いよ〳〵理の解らぬ顏して、受取りながら禮は言はず、男の顏と銀貨とを可訝げに見較べぬ。男は小聲にて、今其方が行きし鶉の東樓の女に、人知れず此文を、伴の者にも曉られぬやうに、と袂なる用意の結び文を渡せば、老漢いよ〳〵以て合點ゆかず。あれは葛城樣の、と皆まで言はせず、それを其方に聞かうか。相識なれど伴の女に知られては、都合好からぬ仔細ありて、後所へ顏は出されず、文にて呼出し、茶屋にて一寸會ひたき用あり。少しも懸念に及ばず、此の取次頼むといへば、胡散臭い文とは思ひながら、先方も承知の事ならば、骨折賃の出る仕事と、やう〳〵祝儀の禮を述べて、唯今直にと行懸くるを呼び、必ず他に曉られぬやう、外へ呼出してから頼むと囁けば、其邊に忽は無い顏で驅行くを、見えぬ處に身を忍ばせて、首尾は什麼と胸穩からず伺ふに、老

漢は難無くお才を呼出し、頼まれし始末を語りて彼の文を出せば、容易に請取らず。內證にて慿る物を贈らるゝ覺無ければ、早々其人に戻すべし。名も書かず、譯ありげなる可厭らしき文、と目尻に掛けてついと內に入りけり。老漢は疎忽なる事して面目を失ひ、飛んだ目に遭ひました、と文を男に打付くるやうにして、半助の貰ひ德にして迯行く。

賴の綱は切れても、なほ未練ある女の方を眺めて、去りもやらぬ間に幕になりぬ。見物一度に立ちて、便所の路の混雜は忍ぶ便、首尾を見て素戻りの文を何卒握らせむ下心の男、思ふ鶉の後に立寄れば、折から茶屋の迎來りて、今客の出でむとする氣色なり。彼男今更心怯れて身を退けば、其處は風の路と隣に涼む男に除され、進むに進まれず退歩して土瓶を蹴仆し、小言吃ひながら又進む時、眞先に出づるお才と端無く面を合せけるに、吃驚せし女は忽ち然あらぬ方を見向き、草履つっかけて戸外に出でぬ。

取逃して殘念なる男、氣の拔けたる顏して伸上り、つく／＼後影を見送るところを人に撞當られ、其心とも無く帶を探れば、今の奴にか、大事の時計を掏られて、洋銀の鏈子半程より斷れてぶらりと垂れたり。此男には無二の質草なるべきを、然しては惜さうな顏もせず、斷られたる鏈子を指頭の玩弄にして、何やら思案するも、女の事らしう見えけり。

これほどに思へども、一向他へは通せぬ樣子。出來さうも無き事を男は根で負す氣か、なほ其の邊を彷徨して歸るを待てば、やがて入來るお才は男の顏を見て、先のごとく驚く氣色は無く、召使の團扇の風に背後を吹かせ、霎時涼みて、婢どもを三階へ遊びにやりたる迹は、お艶と二人ゆるりと坐りて、更紗の筒より紫檀羅宇の金煙管を取出し、紙切に火皿を拭きて外へ捨つれば、男は四邊を眴し、足下に履みつけて二三間引擦りゆき、拾上げて人無き處に披き見れば、明日の午前十時頃淺草なる母の隱宅へ行きて待てとの文言、末に番地書あり。鼻紙に人目を忍ぶ禿筆

の走書、神妙に書いても上手にはあらぬ手の、いとゞ不見事なる蚯蚓様。男の身に取りては定家卿の色紙よりも尊く、喜悦膽に徹へて持つ手も自から戰くなり。

さりとは思ひ懸けぬ吉報に、讀違へではあるまいかと、躍る心を鎭めて、一字づゝ拾讀に讀みかへせど、其に相違無きに安堵して、肌の守と保存したきは山々なれど、もしもの事ありてはと引裂き、咬み丸めて窗の外へ遠く投げて、久しく空けし我塲所に還れど、餘りの嬉しさに狂言はいよ〳〵身に染みず。遙に前面の鶉を眺めて、あれほどの女が己の、と小指を握緊めて、獨り笑まるゝ顏を俯け、時計は奪られても九圓六十錢の代物、鰕で鯨を噫釣つたる哉。

（五）燒木杭

死なば此處の土、戀しきは故鄕、淺草花川戸の町を少しく引込みたる處に、目の藥になるほどは庭木もありて、造作も念入り、小體に外見好き家を買受け、奢らず吝らず中位の樂世帶、お才が母は左團扇の夕凉、暑氣拂ひの銘酒二三杯の醉も醒めて、蒲席の手觸露に冷つき、岐阜提灯の火の寂しうなりたるに心着きて、此の戸を鎖めよと婢の坐睡るを喚び奥の間の蚊張へ入らむとして、格子戸の開く音に立戻れば、取次も待たで入來る客を、誰と簀戸の陰より覗けば、もうお寢みと聲懸けて、座敷へ通るはお才なり。

いつ見ても腹は立たぬ子の顏に、珍しきお客と手づから緣の凉しき處に草蒲團敷きて、今頃一人何處のお歸りと尋ぬれば、お才は振返りて、玄關の開きに控ふる侍婢を呼入れ、今日は歌舞伎座へ苦みに行て半病人に

なりたる仕合。夏は放縱にして我家に凉むに勝る保養無しと言へば、其は私達の言うて可い事なれど、幾歳になりても飽かぬものは、芝居に米の飯と母親は笑へり。

お才は話したき事ありと母を二階へ伴れて、今日歌舞伎座にて菊住に會ひし始末を語れば、焚木杭にと年寄は苦勞さうな顔して、關り合はぬが身の爲と、先も聞かずして意見の冒頭。關り合ふではなけれど、以前に變る姿のやつ〳〵しさを見るにつけて、涙脆き心から不便を催し、聞けば女房持ちて此頃は子もあるよし。今は身を堅くして某會社の會計の下役を勤め、昔の借金に艱苦殘りて、と世帶染みたる泣言を聽され、少しばかり惠む氣になりて、明日の午前十時頃此家に訪ねて來るやうに言うたれば、來らば二階に待せて、內の婢の前をも可然に取繕ひたまへ。我も侍婢に氣取られぬやうにすべし。此事人に知られては面白からずと賴めば、母は容易に得心せず。不便と思うて金錢を惠むも、私から謂へば

要らぬ情なれど、それほどに思ふものを强ひては止めず。但會はでき濟むべき事を、と半分聽きてお才は怫然と立たる顏色。不承知ならば此家は假るまじ。會はむとおもはゞ會ふ處は許多も外にありといはれて、氣の弱き母はお才の機嫌を損せじと、良からぬ事とは思ひながら、どうありても會はむとならば、外へ行くには及ばず、此二階を貸すの借りるのとて、其方の家も同前なれば、遠慮も何もある事ならねど、もし會うたらば舊時の訓染だけに、縒が戻りてひよんな事などありては、主ある身の御前樣へ義理が濟むまじ。愚ならぬ其方なれば、そのやうなる了簡はあるまじけれど、賢きものも格別の此道と、大方お才の心を識りても、强く言れぬ佛性に、賴むやうに立て言へど聞入無く、あれほどの譯ありて切れたる男に、未練ある女にもあらねば、其心遣には及ばぬ事。又とは言はず一度切、此後は外にて會ふとも言交すまじき了簡なれば、と立派なる口上はいへど、知れた噓と母親は獨り氣を揉みて。一度では濟ま

ぬ腐縁の發端なるべしと思へど。可厭な顏せば慍らるゝが怖さに、快く待つて居ると言ふも切無し。

山鳥のおろの鏡や、のつぺりと生れたるより當事も無き不了簡を起して、女で食ふ氣の男、古今其跡を絕たず、眉毛を剃りつけて黃な聲する息子、一町內に二人宛は必ず居るものなり。近所の娘どもに騷がるゝが嬉しさ、職人なれば職を疎かにし、商人なれば算盤を餘所にし、書生は學問を名のみ、飯食ふ道は忘れて、扮す事を專とし、親父が亡い後は何とする分別ぞや。世間の淫行後家を目的に、男妾にて身を立てむとに心得、不屈の極度といふべし。姿を賣る心は女も可慙しきに、男と生れながら然りとは情無き根性。生け置きて效無き穀潰しの遊民ども、慈悲に命は赦して北海道へ移住させ、せめては國益の一端にして取らせむ、と力みかへる男の顏見れば、理せめて可笑かりき。

三年立てば子供も三歲になるに、色男の隊長菊住專三行年三十にして志

未だ立たず。旨いもの食うて、美衣被て、美しき女に仕遂られて、緋鹿子の寢衣帶して暮したいが一生の願。世界萬國に白髮の濡事師は無きことを識らず、一週間に一度宛理髮して、髭鬚は隔三日に剃ることを忘れず。扮すが故に二十五六の優姿を、張儀が妻に見よといひける舌ほどに恃みて、眼中男無く顋撫のぐい澄し、器量自慢が因となりて、才藏に切れてから小〆を物せる最中、吾妻といふ待合の女主を引懸け、下谷にはお茶羅といふ婆藝者を購めて、二ケ所の浮氣三軒の驅持、近頃色に忙しき軀と喜びしに、小〆は此事を嗅付け、男旱はせぬものを、蹈みつけられては寐て居る犬も起きて噬むに、憚りながら柳橋の藝者樣、と臂にして寄せつけぬ間に、客色が出來て菊住は他人にされぬ。お茶羅の方もいつか不維になりて、今も熱の冷めぬは吾妻の女房のみ、是一人にては食ひ足らず、其處等に出沒して餌を漁れど、此の地には貢れたる人喰鬼、異名を戻橋とつけられて、誰も關るものはあらずなりけり。

暴し盡して此土地を思切り、吾妻だけを大事に守りて、數寄屋町に巣を變へ、二三人對手にしても思はしからぬより、方針を轉じて素人の後家仆を始め、惑すには藝者より易けれど、錢廻思ふに任せず、脂の減る割に財布の肥えざるを可悶く、左右は其道の女と思へど、昔に異りて今は兵糧の續かざるに是非無く、偷盜するやうな色事に氣が塞りて、華美なることは彼に限る柳橋の待合遊。浮名に世間曠れて面白きを憶ふにつけて、藝といひ、容色といひ、腕といひ、心意氣といひ、耐らぬほど好かりし升やの才藏こそ、いまに忘られぬ女を、その折は如何なる氣紛から、牛を豚に乘換へて小〆如きに關りしやら、我身で我身が分らぬ不了簡を悔みても、今は及ばぬ高嶺の花、葛城餘五郎の嬖妾と崇められ、東京の名所に風流なる構して、此上の願無き榮華の身の上、那が舊時は泣かすも笑はすも、我心の儘なりし女と思ふほど、玉を見損じて石にて沽りし不念さ。それのみ心に繋りて、一生に那時ほどの果報は、亦と無い事に

諦めても、諦められぬ愚痴から、遺物に殘る圓髷姿の寫眞を取出し、折々折の自適にして、遠かるほど未練は勝るなりけり。料らざる歌舞伎座の再會は、菊住の艶福未だ尽きざるなり。女といふもゝ脆さは、三味線の胴の割るゝほど撲ちし面も、有繋に憎からぬ舊時の馴染。此文は髯の口直しに爲てくれる志か、忝なさと嬉しさとに一夜の明くるを待詫び、五時半の朝湯に念入れて磨き、母親へ愛相の手土產挈げて、約束の刻限前に花川戸の隱宅を訪れぬ。此蟲につかれては、始終は陸な事ではあるまいと、母の內心は顏見るも面白からねど、杖と恃む大事の娘の言ふことなれば、餘所々々しき待遇もなり難く、不取敢二階に通して、進まぬながら客普通に遇しけり。されども今日の始末、他に知られては事難し。婢には憖ひ鼻藥くれるよりも、邪魔拂ひに一日の暇遣る昨夜からの約束なれば、用は匆々にして出せし後、菊住の履物日傘帽子まで藏して、客無き體に裝へたるは、お才の侍婢を憚りてなり。

奔走の使、勝手の用向には、裏隣に賃仕事する女房を頼み、自身は菊住の對手に出でゝ、二つ三つ雜談する間に時刻となれば、お才はいつもの仲といふ婢を伴れて來りぬ。

直に二階へは案内せず、下座敷に茶煙草盆を持出し、此處で緩々と談すやうなる様子に見せて、夕景ならでは歸らぬを、何處で待つも同じなれば、吾妻座でも見物して、好き頃に戻れ、と若干か紙に拈りて與ふれば、切りに辭退するを呵るやうにして、母も言を添へて取せければ、有難く戴きて得々出て行くを見澄し、お才は小聲に、來たかえと問へば、母は頷きて、先之から二階にと快くは答へながら、お才の顏を心あり氣に見遣りて、何ぞ間違の無いやうに、と詞短く急所を衝けば、大丈夫さと安請合して行きかくるを、又何か言はむとすれば、可厭な顏されて辭塞り、言はぬも可笑く、氣を着けなよといへば、此家の様子は急過ぎてと笑ひながら昇りぬ。何するやら知れぬ二階の對坐。要らぬ世話焼くとて、又

惱らるゝは知れたれど、捨てゝ措れぬ大事の場所なれば、應待に出る由して張番するならば、ひょんな間違もあるまじ、と階子の口まで行きて、否々此家で間違は無くとも、逢はむとおもへば外に幾多も逢ふ處はあると、お才の言ひしは威しにもあらで、首尾する宿は何處にもあるものを、邪魔入れて惱らるゝ分は構はねど、其効無くば惱られ損なり。左右は劇場で會うたが毒なれど、復らぬ事は是非無し。母子の仕合も轉寢の夢の間、お才の身の破滅も近けり。其とは知れど、思ひこみては是が非でも、徹さねば肯かぬ氣性に異見も無益な。さればとて目に見えたる不爲を心着けぬも慈し、と母親は獨り物思の大息吐きて、此上の願は、陸でなしの男め、早く歸れと、用意したる酒も出さぬ先から、奥の間の隅に箒立てたる心中の哀なるに引易へて、二階には私語の忍音聲無きまで閑に、唖壷打つ音のみぞ折々聞えける。菊住の服裝劇場にて見しに異ること無く、此外には持たぬ一張羅と覺し。

有るものなれば衣更へて來べき今日なるに、然りとは哀にも落ちたる身の果を、己も憚る氣色見えて、我持物にせし折の才藏とは、今姿から肚まで改まりて、おのづから神々しく威を備へたるに呑れ、斑竹骨の扇子を捻くりて、着端無さの他人がましき挨拶振。お才は心に可笑しく、茸茸と髭髯無き男は、度胸も無いやうに想はれて、打解くる薬は酒と、支度を急がせ、積る話ゝゆる〳〵。先一口と猪口を差せば、お酌では恐多い。はて繼子根性なと笑うて、獻酬漸く繁く、少く醉が廻れば遠慮の隔もとれて、お才は母の浴衣に衣更へ、専三は双肌脱ぎて麻繻絆に涼みながら、相互に別れてからの物語になりけり。

近頃は誰を情婦。いつまで柳橋でもあるまい、最早河岸を變へても好い頃、何邊を暴してか、受賃無しで辛抱せうと言れて、専三は故と眞顔になり、氣も無い事。一二歳も年取ればおのづから分別も出で、質なる了簡起りて、染色の流行も知らず、米の相場に雨を氣遣ひ、箱奴に投げて

やるほどの紙幣があれば、薪の幾把買へるといふ勘定立つる心になりて、あれから二月目に小〆に斷れられ、其後は會社の勤務、薄給も腕だけと諦め、見じめにも神妙に暮して、茶屋の酒飲んだら、三度の愉快は覺束無き金額に、一月を送るも切なけれど、人を怨むべきにもあらず、是皆誰やらの罰と萎れかへれば、お才は打笑みて、罪を作りし報の可恐しさ、色男の末は皆然去たものに極れり。女の執念は蛇よりも深ければ、忘れても色事は愼みたまへ。此のお才の怨念ばかりにても、好き往生はむづかしき軀なり、と思ありげに男の顔を視れば、目に入る小鬢の創。其はと訊ねれば、之も罰なれど三味線の胴にて撲れ、男の面を割られながら、手出しのならぬも此方の過失と喞つ。お才は膝を擦寄せ、創の痕を篤と視て、彼時にかと驚けば、外に此樣にされて唯舍くほど惚れた女も無ければ、毆ちし覺のある人が毆ち去なるべし。此創こそ菊住が一代の色事の遺物。此の舊時に今一度なりて見たらば、また隻眼潰されても更に惜

からず、と思遏りたる繰言、お才の耳には哀も一入に聞ゆめり。

弗つり色事は止めたと言ひながら、以前に變らぬ口頭の好さ。其調子では發心といふも虚にて、法衣着たる狼のまだ〳〵油斷はならず、と男の口端を彈きて座に還れば、菊住はいよ〳〵眞面目になりて、言ひたくば如何とも言ふべし。思うたとて主ある女を何とすべき。其に換ふべき女も無ければ、色戀も可厭になりて、何時までも若くてあらぬ行末を考へ、稼ぐといふことに目の覺めたる男が、あの折の不實は幾重にも勘辨して、此後は便無き此身を兄弟同樣にといひたけれど、襟に着くやうに想はるゝも可慚し。單の知己にて、末長く附合ひ給へ。と言ふもどうやら押付がましく、此樣な無能漢は知人に持つも恥辱とあらば、何事も二年前の夢、と涙を零さぬばかりに掻口説くを。お才は打消して、二歳ばかり年取りて、それでは愚痴になり過ぎる。そのやうな了簡なら、際疾い首尾にて會ひはせぬ。昨日劇場で見た時から影の薄いほど衰へたる妻と思

ひしに、心から見すぼらしい、今の若さにどうする氣ぞ。大道の易者が着るやうな、そんな羽織は螢籠にでもして、しやんとした風體を爲たが可い、と帶の間より五十圓男の前へ投出せば、えゝと驚く顏を横目に見て、最一度舊時の菊住になる氣は無いかえ。

男は風に躍る紙幣の鎭に煙管を置きて、こんなに戴いてはと、わざと僻らしく頭を下げ、恩を以て讐を復さるゝ心苦さ。なか〳〵此樣にさるゝ義理にはあらねど、折角の厚意なれば有難く納めまする、と紙幣を取上げて戴けば、えゝ見ともない、那樣眞似は止にしやんせ。女なぞに物貰うたら、嬉しい顏はせぬ方が、男らしうて見好いもの。さあ〳〵酒々、醉うて言ひたい事が多度ある。今の返事も聞きたいと言へば、久しぶりなる旨い事の板挿みに、菊住はわくつく胸を推鎭めて、今は竈の煙に燻び、堅氣一圖の男を弄ぶとは酷い殺生。よし無き嬉しがらせも眞に受けて、承知したら何とする。酒の肴には酷い座興、と日頃を思へば、もつ

と剛い筈の女が、今日に限りて、然りとは娘過ぎた解けやうも可疑しきに、恁う先づ言つて見たものなり。

お才は可笑がりて、そんな文句は小本仕入の素人殺し。彼此有仰る事ならば、強つて御迷惑を願ふは御氣毒樣見たやうなれば、いつそお頼み申しますまいかと、手強く出られて、否々どう仕りの、實は此方より願ふところなれど、以前に變る其方の身の上、大事の主があるものを、惡い事えては義理が濟まず。第二には知れ易き事の旦那の耳に入らば、其方の身に關る事と、爲を思へば言うたのを、惡く聞れては迷惑と、お才が會うて以來の殊勝さ。その御意見は阿母から懊惱いほど聞されて、又改めて承はるにも及ばず。旦那に濟まぬ事も、露はれたらば御秡箱になる事も、何も彼も知らぬではなけれど、其曉には其樣に、いかにとも成るべき考量もあれば、聞いた風な事は言はぬが可い。唯々委細畏りて、何事も御意には背くまじき菊住、煮るなりとも炙くなりとも、宜しきやう

にと、お才の方を見遣れば、少しく笑を含みて閑に煙草燻らし、片言も無い處に情ありて、どうも耐らぬ美しさに、專三の目は自から繊うなりぬ。

樓下には母親の氣を揉むこと大方ならず、二時間餘の長話、と七八度も柱時計へ駈着けて、好加減に支て措かぬか、金子遣るだけならば五分ぐらゐで濟むべきに、酒を出したが第一氣懸りな。いつまで捨て措くとも際限無ければ、自宅から使が來たと言うて、お才の方を歸すが上分別。居て損のゆかぬ菊住が、夜になるとも立つことではあるまじ。さりとて其手ではお才が歸るまじ、最一度慍られる覺悟にて、下へ呼んで言うてやろ、言ふは善けれど肯く子にもあらざれば、其も無駄か、と親の心は闇にあらねど、途方に暮れて、立ちつ坐りつ、みし〳〵と椽踏鳴らして二階を驚かし、或は梯子を昇りゆく音を立つれば、何ぞ用かと聲を懸けられ、こそ〳〵と逃歸りても心は休まらず。辛氣臭さに燗冷を飲めば、

三杯で酡くなり、又更に切無き思えて、やうやく醒むる頃に梯子を下りくる足音は、まだ男の歸るにはあらで、午飯いひつけにお才が下りて來て、風呂を焚いてくれとは、やれも〳〵。

蕃椒々々の聲絕えて、町は片蔭になる頃、菊住は名殘惜げなる顏して、裏口より歸行く。迹は大方阿母の御意見、聞されては此暑熱にいとゞ頭痛、とお才は直に籠枕引寄せて、午睡えて了ひけり。是ではどうもならず、母は獨り行末を案じて、覺めたらば一言と念ひけるに、夕暮の歸去を急ぐに紛らされて、何の事は無しに窘しぬ。

一匹の男としては齒應の無き菊住が、末の望のあるにあらず、衣類は簞笥に、食物は戸棚にある中のみの對手なれば、鑑札受けぬ俳優買ふも同じく、一時の慰みにする氣にも忘られぬ可愛き處ありて、其の後は主ある身の人目を忍び、大川端なる揷花の師匠の奥座敷に逢引えて、此樂供につれらるゝお仲も知らず。一六は弟子の來る日と避けて、月に四回の

出會。御前は紅梅方へなりとも、お艶の許へなりとも御出次第、此方へは可成遠々しきを奇貨にして、挿花は定めて上手になるべき執心、腕ばかりで目鼻は利かぬ大谷先生、左樣なる義の有るべしとは、なか／＼存寄らざるなりき。

昔愚なる智者ありて、二臼の米を一つの杵にて一度に舂かむことを考へ、上に置かではならぬ一つの臼は、倒に梁より釣下げむとして、米を入るゝ工夫に盡き、折角の仕掛も空になりぬ。思ふ女を自由にして、樂みながら金を獲むことの難き、正に此發明に同じきに、菊住の仕合は、人の眞似はなるまじきことなり。昨日に變る紳士の打扮、女にして貰うたと思へば、身錢で衣たるよりは十倍の天狗、色男には誰がなる。疾風のごとく過行く馬車の中は、威風凜々、相貌堂々、内閣には我一人がる某の大臣、彼奴才藏を惡口說して、面撲られし意氣地無し。それも此專樣がある故、と恁る身の上も羨まれず、但我に於て男子の能事畢ぬる心意氣の

お才を扱うては外に手に取るべき女子も無く、今は見るも可厭なる吾妻の嚊の方は斷緣にして、今度斷れては二度目の覆水盆に復るまじきお才樣の大切さに、一切餘所の浮氣を斷ちて、口にこそ出さね、心には大事の〳〵旦那樣と崇め、自から其樣なる待遇もして、ひたぶるに御奉公を勵めば、お才も憎からず、身の毒とは知りつゝ夜半の茶漬の罷められぬ哉。

(六) 一段半の艶種 上

白髯なる妾宅の隱目附、實は北辰一刀流の達人大谷傳內、金五兩の扶持の手前、役目に懈怠ありては不相濟譯、と油斷無くお才の坐臥行住に眼を配るといへども、更に怪むべき廉は見えず、空しく夜番の老漢にて過ぎぬ。夜は晩く寢ても、朝は眞先に目覺め、起きた處が用は無けれど、用か無くても耿々と臥て居られぬ性分は、昔把りたる竹刀柄、やつとう鍛への習慣、血氣の壯なること今の二才が及ぶ所にあらず。東の空の白むを合圖に勃と起きて、座敷の戸を開け、掃除仕舞へば、折から鈴の音勇ましく新聞の來るを例とす、墨の香高く印刷の濕氣しつとりとしたるを、封切に見るを午前の娛樂にして、午後の樂は晩の一合にあり。待構へたる小說、德川の其頃は如何樣かうであつたものをと、兩刀帶したる挿繪から見始めて、今日の滿潮、昨日の寒暖計まで、一字遺さず丹念に讀む

目は逸さぬ三頁に、一段半の艶種、標題は歸咲隅田櫻、人の名は朧に霞めたれど、知る人には歷々と綴りたる妾の色事は、奥に寢てござるお才樣の噂。

思ひも寄らぬ記事に直と呆れ、これはと驚かれて、もしや似たる餘所の人の身の上か、と繰返して見るほど動ぎの取れぬ筆の跡、耐らず汗の出る處あるに、律義の老漢烈火の如く腹立て、賣女に貞女無し、御前が傳内を附置るゝ用意も今ぞ知られたる。猫とはいへど四足にもあらず、恩といふことは知るべき人の心を持ちながら、さりとは謂はうやう無き不所存者。武士にていへば敵に通じて主君を賣る奴、倒磔に忘てもなほ慊らぬ人非人、免さぬと鼻息暴かに拳を握りて、一刻も捨置き難し、直に注進と心は躁れど、今から飛出されぬは、人非人でも主に持てば、許可なくして我儘に成難し。暇もらうて出ぬ事はあるまじけれど、かゝる早朝に何のやうな用事と問れて、親類といふものなければ、親き友も持た

ぬ事は、能く知る彼に拙き嘘吐きて、胡亂におもはれむは拙し。今朝にも限らぬことなれば午後に玄て、まづ此の新聞は彼に見せぬが肝要と、小く折りて紙入に捻込み、此處置は什麼御前の付けらるゝ事か、我ならば其分には置かじ、唯一刀に首打落し、生首挈げて男の家へ躍込み、此奴も眞兩斷に玄て、と三十年前の了簡勃々と起りて、今明治の法律は變りたれど、奸夫姦婦を討つに何の仔細かあるべき。私に成敗せし罪は兇れ難きかは知らざれど、討果すべき情實ありて手に懸けしを、咎むる法はあらざるべし。さるをも罪科は命に及ぶとあらば、何否むに足らぬ皺腹一つ、裁判所の門を早桶で出るまでなり、と末の末まで考ふるほど、胸は彌よ沸ゆる如く、壁に倚懸けたる鐵鍔の大刀を睨みて、切味は覺ある土佐の爲遠、薩摩の三一を打斫った水道橋の闇の喧嘩も憶出されて、生けては措れぬ奴等。

寤て婢も起出で、それより一時も過ぎてお仲の聲も聞えぬ。主婦の枕頭

へ煙草火と新聞持行くが例なれば、寢亂髪も梳かず、頸筋に白粉の斑々なるまゝ大谷の居間に新聞取りに來るを、今日は如何にせしか未だ來らずと答ふれば、格別疑ひもせずして出で行きぬ。

二人の婢輩は傳内の浮かぬ顏して、多く物言はず、食も毎のやうには無くて、今朝の人並を訝り、氣分を問はれて、こは口惜し、色に出でゝは覺らるゝ因、と輕き事に紛らし、廣小路まで買物のつもりにて暇貰ひ、車を飛して餘五郎を商社に訪ぬれば、久しく我の打絶えたるを、呼寄せむとて事ありげに此老漢を遣せしか、と高を括りて何用ぞと問へば、傳内懷中を探りながら、容易ならざる儀の出來致し、至急密々に申上げた

　と彼新聞を差出し、眞僞は確實ならざれども、お才樣の醜行恁の通りと指せし記事を、餘五郎篤と見訖りて、幾度か頭を傾け、かくあるべしと想はるゝ擧止も見ゆるか。一向さる御樣子は無けれど、挿花の御稽古とて、近頃仲を伴れて折々出らるゝことあり。其外には文一通參らぬ

ば、私も油斷いたしたるが不調法。いかにとも御指圖次第心を碎きて探索仕るべしと恐入れば、左も右も挿花の稽古とやらの行先を調べ見よ。此方も手を廻すべし、と落着きたる面色常に變ること無し。よく／＼思ふ女なればこそ、高金出して圍ひ置くものを、人に奪れて吝くも口惜くもないといふ理窟は無さゝうなるものを、婉しさ過ぎて手鈍い穿鑿、平素の短氣に似合はぬことゝ、餘五郎が怫然ともしてくれぬに拍子拔け、他の腑效無さを我心に慣れて、淫婦なほ憎く、いかゞ遊ばさるゝ御思召と青脈出せば、餘五郎莞爾として、其方ならば何とする、と聞くより傳內可恐しき眼色になりて、唯一刀と言ひかけ、過言を心着きて、御恩を知らぬと申すものでござりまする と濁せども、氣毒なる顏して控へけるが、間入りては都合よろしからねば、御用無くば御暇と立上る。早速の注進大儀なり。此後とも隨分油斷無く。委細畏りて、歸途は大川端へ廻る、かねてお仲より住所姓名を聞きたる挿花の師匠の門を通り、近所の

ものに樣子を尋ねむとも思ひしが、時刻の移るを氣遣ひ、今日は此儘に
と白鬚に還る。

（七）一段半の艶種　下

萬般に如在なきお才も、浮名の新聞紙に唱はれしことは知らねば、露顯の端緒となりたる事はなほ思も懸けずして、今日は挿花にと、午後よりいつもの婢を連れて、大川端へ出懸けたれば、傳内は浴にとて、爨婢のお槙に留守を囑みて、直にお才の跡を追ひぬ。

挿花の師匠の門に來て見れば、主從の人力車二臺門外に待つこそ、必定不義ものゝ此内にと、睨むことは睨みたれど、無用の輩入る可らざる他人の門へ踏込みかねて、傳内も之には當惑せり。裏口へなりとも廻らば證據を見屆けむ手蔓もあらむかと、此土地不案内ながら、唯有横町を入りて裏町に出で、此處等と想ふ邊の露地に入ること三個所にして、一向分らず。老舗らしき酒家のあるに心着きて、袖岡といふ挿花の師匠の裏口を尋ぬれば。店前に水撒く御用の格別丁寧に敎へけるは、傳内の所思

に違はず、袖岡は此酒家の花客なり。

傳內大いに喜びて、敎へられし露地を入れば、衝當りに板塀高く、何の樹やら木末五寸ばかり見えて、木戸に袖岡裏口と表札打ちたれば、此處だわえと鷺歩に忍び寄りて、內を覗くべき木眼もがなと探せば、處々に節はあれども、孔は無き極上檜の厚板、之には幾と當惑して、爲樣事無しに片耳塀に附けて、話聲の碎片も泄るゝ事もや、と息を遏めて聽けば、內にはしやきり〳〵と花鋏の音のみして、人の聲はせざりけり。

目的が違うて、かういふ筈ではなかつたにと、氣の脫けたる顏して四邊を眴し、邪魔物の高塀を面憎さうに眺めて、花鋏の音はしても內の樣子が見えねば、何爲てゐるも知れ難し。然れば輕々しくしやきり〳〵も信ずべからず。よし今は實に挿花の稽古にしても、これから後が何とも知れざれば、是少し氣を長う待たむと、始終塀を離れずして、立つこと良一時間に渉れども、格別變りたる樣子は無く、更に人の聲は聞えずして、

唾壺撃く音と、折々えへんといふは、聞馴れたるお才の咳拂ひなり。扨こそお在なさるわえ、と傳内は一念に耳を欹て〻、今や證據の上る事と、夏の日影に背中をあぶら汗、額際より流る〻を拭き〳〵張番する後に偸むが如く露地を入來る紳士は、お才の情夫菊住專三、木にも茅にも心を置くは、落武者に駈落者、盗人、臆病、忍夫、人目を憚れば裏より通ふ身の上に、袖岡の家を覗ふ男を見るより、愕然として、何物と見分けむ分別も無く、見尤められては一大事、と窄めて傘を卒に推開き、後姿を藏して露地を駈出でけるを、傳内は家の内に氣を奪はれて更に識らざりけり。

頓て年寄れる女の聲の近く聞ゆると思ふ間に、庭下駄の音して、木戸の錠を外す響に吃驚、身を退く爾時、戸内より剪髪の老女顏を出して、何の御用と尋ぬるに、傳内うんと辭塞りて、此裏に銀行へ出らる〻山田といふ家はござりませぬかと問へば、其樣な家はござりませぬと、けんも

ほろゝの挨拶。それで引込むかと想へば、動かざること釘付の如し。傳內も野面に居たゝまらず、然樣でございましたかと、逃ぐるが如く露地を出際に、もう居まいと振還れば、剪髪の首は木戸に生へたり。此期に及びて手を空しく還るべきか、是からが大事の處と、少焉經ちて又忍び行かむと、氷水屋に腰懸けて時刻を量りぬ。

簷に菊住は內を覗ふ男あるに驚き、引返して袖岡の正門に廻り、玄關より立派に案內を乞ひ、主婦を呼出して裏の樣子を知せ、彼男を逐拂ひし跡より入らむと囁けば、主婦は傳內を旦那殿からの間諜とは氣も着かず、今夜を覘ふ竊盜の類にやあらむと、扨は裏木戸開けて誰何せしなり。風體は竊盜などのやうにも見えざれば、いとゞ氣味惡く、此事をお才に告ぐれば、少しも氣に留めぬ顏色。彼奴の又入り來らむかと、主婦は木戸を細目に開けて露地を覘へば、果して人影は、來たかと熟視れば、盜人なれど、戀にきく住。

戸には內より錠掛けて、お二方とも御二階へと、主婦は獨り此座敷に番して、鶍越を固むるとは、更に知らざる大谷傳內。もう好時分と、氷の塊を頰張りながら、濡手拭を頭顱に載せ、そろり〳〵と忍び寄れば、塀に物の觸るゝ音を、主婦は來たとは心着かず、犬かと聞捨にせしに、犬にはあらぬ人の跫音と聽定め、又うせたかと腹立しさに、手水盤の水を柄杓に掬ひ、塀の外を目懸けて十杯ほど立續けに浴せければ、傳內も之には避易𛀁て、蝸牛のごとく塀に取付き、頭の上越す水を眺め、頭を縮めて居たりしが、裾袂の纔に濡れたるのみ、やれ有難やと塀を離るゝ拍子惡く、最後に不意の一杯、然しつたりと身を開く隙もあらせず、橫面にざぶりと沃ぎて、頸より胸に流れ、胸より落つる水は懷に溜りて川を成せば、赫と怒を作して、あはや木戸打叩きて捻込まむと𛀁たりしに、內には更に手桶の水を取寄せ、銅柄杓は面倒なりと、片手桶に汲替へ汲替へ、火事や夕立と撒く水は、先刻よりは功者になりて、塀に取着きて

も遁るゝ處無く、眞向より二杯浴せられて、傳内鼻端よりほた／＼と雫を灑し、五七間も逃延び、恁まで根強く惡戯するは、内の者め我が樣子を覺りたるに極れり。長居せば不覺を取らむ、と遺恨の胸を摩り、水だらけの顏を撫で、露地を出るより早く俥に乘りて白髭に戻れば、時間の長さといひ、濡れたる容體といひ、一々嬰婢の詰問を受けて、ちと窮りしが左右言脱け、部屋に入りて、此後の手段は何と爲たものであらう、と拱く腕の解けぬ間に、車轔々、お歸り！

（八）安請合

餘五郎は我手にて別に探偵せむ、と媒灼分の山瀨を招き、彼新聞を見せて、此不始末實說ならば捨置き難し。此新聞社に知人あらば、事實を確めたきものなるが什麼とあれば、山瀨は朱點打ちたる雜報を一讀して、如何樣々々々、此文面は白鬚のに相違無く、對手は菊住に紛れなし。白鬚のは普通の藝者と心性同じからず、勤せし頃より浮きたる事はあらざりし女なれど、菊住との中は心から譯ありて切れしにあらず、謂はゞ此方が苦肉の計に陷れしなれば、いつか此內證を相互に識りて、燒木杭に火の付きたるか。是非無き事に及びたりといへば、餘五郎不興なる顏して、設ひ計を以て陷れしとも、我が妾になりたるからは、守るべき男は我一人ならずや。我は外面だけにて、內實は菊住と樂め、と其樣な粹立せし覺なし。昔より女には好れぬ葛城が、お才に惚れよと無理なる註文はせ

ざれども、妾に為たるからは我妻も同然なるに、名も無き奴に心を運びて、我を踏付けたるが了簡為がたし。あの女一人吝むに足らざれば、此廉立てたる後は、欲しき犬に投げて遣らう、と暴かなる辭氣に、山瀬も返さむやう無く、一々御尤なれども、暴立てなば御顔にも關る事なれば、不肖に委せて穩便に濟せたまへと宥むれば、餘五郎呵々と笑ひ、此等の事に腹立つ餘五郎にもあらず、隨分穩便に濟すべし。左も右も實否を衝留むるが肝要なれば、新聞社へ手を廻して、確なる處を探らせたまへ。何というても媒妁なれば、迷惑ながら頼むとありければ、私媒妁とは申すものゝ、婿君の御鑒識にて、切て彼をとの御意なればと言出せば、もう言ふな〳〵、媒妁に過失は無いとて、其話は罷みけり。

山瀬は再び新聞を取上げ、此社の記者には通傳あれば、少許握らすれば、雜報外の詳報をも齎すべし。小新聞の記者といふもの羽二重破落戸の一種にして、文字を讀得る無頼漢なり。二三十圓の給金は人力車と花牌こ

の代にも足らねど、小人錢無くして不善を爲すの譬、陰事を訐き、脅迫を働き、芝居に出入りて三階座主に諛ひ、茶屋、待合、女郎屋、藝者屋に往來して、弱き家業を妝るなど、彼等が内職の本職なれば、麝香臭き紙の些と大判なるを一枚も見せたらば、善き事は知らず、惡事といふ惡事は、草を分け、土を掘りても捉へ來らざる事はあるまじ。賴めば中には妾の世話する男もあるよしと語りけり。

牛込の奥のさる差配は、陸軍士官と新聞記者とに限りて、五圓の店を十圓にても貸さず。此譯を問へども語らずして、性來好かぬゆゑとのみ謂へり。之を餘所の大屋に尋ねしに、軍人は夜中二階より屋根へ潛する由さる國家の干城あるをおもへば、山瀨がいひし如き新聞記者もあらむかし。

山瀨は配下の伴頭を使ひて、彼新聞社の雜報主筆なる某に賄ひ、(歸咲閑田櫻)の虛實を糺せしに、御菓子料の多分なる効驗は、餘聞までも悉う

探りて聞かせぬ。山瀬は此儘を註進するに忍びず。即刻白髪へ車を飛してお才を訪ねければ、思ひ懸けぬお方の御入来。と奥の客間に請じ、今日はいづれへ御成の御道筋といへば、山瀬は勿體臭く、内々お話し申度事ありて、態々参りたるが、此座敷にては不都合なれば、二階へとの註文。お才は其事とは思ひ着かねども、内談といふに何とやら心穏からず、ちと合點のゆかぬ顔するを、もう口說くことではないと舊時を言出せば、お才も一度そんな覺のある男の、改まりたる用ありげに、きつい生眞面目が遽に可笑うなりて、そのやうに愛相盡さずとも、最一度お試しなさいまし、と連立ちて二階に昇れば、東の軒に萩簾を巻きて、見ゆる限りは青田漠々として睡も覺むべき心地。南窓には梧桐柳櫻の緑涼しく、風は自在に吹きぬきの團扇入らずの夏座敷、蟬の聲の喧しきと、日中にも蚊の鳴くが可厭にしても、洒落に住みては見たき處なり。

主客座に着きて茶の出づる頃、お風呂が沸きましたれば、ざつと一杯と

いふにまかせ、御前の浴衣を拜借して湯殿へ行けば、お才が湯好とありて、總御影石の格別なる結構。お仲といふ婢の薄化粧して、新しき紺縮の中形の浴衣着たるが流しに出で、髮洗ふとて玉子持て來るまで、行屆かざる處もなし。浴衣のまゝ少焉二階に凉む間に盃盤出でゝ、まづお一盃あなたがお酌では痛入る。痛入らぬお方を呼びに遣はしませうか、とはや話説の和ぎかゝれば、眞面目の説法今の内と、山瀬は時ならぬに、時にと口を切りて、近頃の浮氣筋御前の耳に入りて、と半ば聞くよりお才は有繫に心躍りぬ。

此密會のいつかは露はるゝ時もあるべしと、其時の了簡も大方は附けて、度胸を据ゑて懸りしものゝ、未だ人は知らじと賴みたる陰事を訐かれて、半は惑ひ、半は愧ぢ、合はせかねたる面のおのづから背きて言無ければ、山瀬は膝を進めて、袖岡にて逢ふ事、對手は舊時の菊住なる事、歌舞伎座が再會の始の事より、おのれと菊住との外には、神も知る筈は無き細

き事まで一々陳述つるに、お才は唯呆れて、何處より係る種は上りしか、とすゞろ可懼しさに身毛も彌立ちぬ。

勤の身の舊時なれば、祝儀をもらひ、御酒を戴き、初の客の座敷にて怪しからず謡けても、人にも心にも咎らるゝ事はあらざる習なれど、今は主ある身の淫行を、道ならぬ事と識れる心には、山瀬の文句ひし〳〵と銜りて、聞ゆる耳ぞ愁かりける。種は十分に上げられて、遁るゝ所無く、菊住との舊時の情實を知れる山瀬に、家暮らしく今更何をか裹むべき、とお才は其通りを潔く白狀してのけたり。

山瀬は猪口を手にして、飲みもせず、措きもせず、頻に耳を傾けて逐一聽聞し、はて其までに打明けらるゝ此方に冗な言はいはず。唯一言承はりたきは、まことと菊住と切れて、以後を神妙にせらるゝ氣か。但しは手鍋提げても添遂げむ了簡か。御返事次第いづれにても、御身の爲必ず惡くは計らふまじければ、遠慮無く思ふまゝをとあれば、お才は少しく

口籠りて、あのやうな譯になりながら、謂ふはどうやら異なものなれど、亭主に持ちて始終の覺束なきは、目に見えたる菊住を、何として御前に見換ふべき。今度の不始末は若氣のと謂はむも可恥し、一時の出來心と謂はむも面無し。重々私の過失とのみ、外にいふべき樣も無ければ、御前のお腹立はさら〱無理ならず。かゝる不埒の女なれど、心を悛めなば一度は釋してやるとの思召ならば、末永く御前のお側を離るまじき身の願、と前非を悔いて執成を頼めば、山瀬も恪ては忠告の効あるを喜び、其の心意氣ならば、御前へは私より好きに申上ぐべし。若又今日の言を反古に爲たまはゞ、佛の顏は三度、人は二度目に用捨はあらじと屹と言へば、この上御心配を懸くることにはあらず、ふつつり思ひきりましたと、然りとは安請合の斷れ方に、山瀬は得心爲かねて念を推せば、お才は打笑ひ、此前も那ほどの間なりし菊住と、甘々手を斷らせし怖い軍師の山瀬樣、今度も斷られいでか、と舊き恨を巽に言はれて、山瀬は苦笑。

それまでにして我物にしたる御前の執心を思ひたまへ。彼時の計略は御前の爲、今日の忠告は貴方の爲、主といふ字に二つは御座らぬ。實にも山瀬はお家の忠臣、と仇口交りに歸支度すれば、まだ時刻も早きに、御意見の爲立ではどうやら心濟まず。是から寛いで久しぶりにて昔語と留むれば、御守殿のやうに男珍しく、我等へ然までに仰せらるゝは、近頃御前の御入來の遠々しきゆゑか。早速明日にも御越あるやう取計はむほどに、私はこれにて御暇と起上れば、浮氣も畢竟は其が原。　これは御挨拶と笑うて歸る。

口では何樣にいうても、肚には仍專の字を思ひ斷らず。此頃になりて始めて聞けば、升屋の小〆が菊住を横奪せしも、自分が一圖の心から葛城に身を委せしも、巧の罠に罹りしにて、いはゞ此方の不覺なれど、憎い仕方に腹も立ちて、當座に心の着かざりし無念さ、恨は今も遺れり。今度の事も其爲返と思はゞ、御前も強いことはいはれぬ義理、此方も格別

過り入るには及ばぬ理窟。此處を山瀬に一問答して、散々言うて遣つても可かつたものを、否々、舊時の情夫も今は姦夫、その言分は通らぬ身ぞかし。

(九) いとしい貌

新聞社にて探りし事實を明白に葛城の耳に入れなば、一鐵短慮の假借無く、什麼なる椿事を爲出でむも知れざれば、彼記事こそは、お才に棄てられし遺恨霽しに菊住の口より出でし虛說と繕ひ置きて、左右はお才に意見を加へ、向後身を愼まば、世間の噂も七十五日、行水に流るゝ芥の返ることなしとは、山瀨の最初の了簡なりしが、爰に一つ拙きは、白鬚を訪ねし事なり。後に此の事傳內より知れなば、我は可笑きものになりて、お才の講中に入れられむも心苦し。さりとて用事のあるまじき身にして、李下に冠を正せし辯疏の立つべきにあらざれば、此事明かに言はでは克ふまじ、千慮の一失、はて困つたれど、是非無く葛城に逐一報道せり。

但し虛僞は少しも言はぬかはり、事實も半分は掩して、罪の重からぬ廉

廉を拾ひ、まづ〳〵勘辨のやるやうに言上して、此事直にも申上げむとは存せしが、例の御氣性なれば御了簡丈かねて、又々（隅田櫻）の後日譚の材料を蒔くやうなる事にも及ばむかと、それが氣遣しさに差出がましけれど、昨日白鬚へ參り、御前には內證の分にて、段々意見を申せしに悔悟の樣子確に見屆けましたれば、此度の不埒は媒妁に免じて御容し下さるべく、お才殿の浮氣の原も御前が深川へのみ凝られて、自然外をば疎まるゝ態のあるゆゑなれば、此後は何方へも滿遍なく御越ありて然るべしといへば、餘五郎も笑出して、媒妁が折角の賴なれば、此度は知らぬ分にて何も言ふまじ。菊住は今何して居る。某省の雇とやりて、さる若後家の男妾を稼ぎをる由と答ふれば、あのやうな意氣地無き男を忘れかぬるとは、那奴の氣性にも似合はぬことなれど、此道の格別といふは其處なるべし。

お才は事の露れしより、有繫に心樂まず。淺ましき夢など見るにつけて、

いとゞ結ぼるゝ氣を紛らさむと、一銚子つけて見れば、手酌の酒は呷飲になりて、大分過して微に醉ひ、これから午睡して暑熱を忘ればやと、獨り二階の風に寢轉びて、うと〳〵となりける耳元に、お仲が慌忙しく、御前樣の御入來といふに驚き、玄やら解の帶引緊め、寢亂れの裙婆娑婆娑と、二三段階子を降行く下より、餘五郎お才を仰ぎて、無事かと機嫌好き言を懸くる。

お才は嬉しげに、何方樣か、失禮ながらお見それ申しました。主へ御用ならば深川の別莊へ御訪ね下されまし。此家へは足懸け十年も見えませぬ、と憎いほど可愛き餘所〳〵しさ。否、主人には用無し、御内儀にちと逢ひたさに。これは〳〵櫻色の御機嫌、どなた樣のお合をなされたことか。此方も早速肖りたいと、劈頭から和かに出懸けて、何事も知れる氣色を見せず。急に逢ひたうなりて、出て來たやうな顏でゐれば、お才は一昨日の山瀨の忠告は、御前へ内々と口には言へど、確に諜合はせし

ことゝ想はるゝに、遠き親類ほど音信なかりし餘五郎の、珍しくも今日見えたるは彌よ怪しく、樣子見に來られて樣子見らるゝお才にはあらず。先方がその氣ならば此方も負けず、御前一人が眞箇に婉しい貌。下には傳内が、隙もあらば御前に近づき、先達て袖岡の塀の外に千辛萬苦して、探得たる仔細を申上げむものをと、部屋の口に面差出して、階子の足音を氣にしてぞゐたりける。

此夜餘五郎は一泊して、酒も旨く、お才も美しく、月も良く、風も涼しく、何事も御意に稱ひて、此家の座敷開きせし爾日のやうなる機嫌にて歸りけり。

（十）姙娠劑

お艶は姙りて早や五月になりぬ。殘暑過ぎて九月に入り、其の二十一日は亡母の命日、彼岸にあたれば厚く佛前に供養して、墓參のならぬ身の不孝を詫びけるが、今更の恥にはあらねど、今日の一入身に徹へて、在るにも在られぬ思ひするは、このやうなお腹を抱へて母樣に會ふことぞかし。言うても復らぬ事なれど、馬場夫婦に紿かれ、余五郎に誘拐され無理往生の妾になりて、穢れたる身上とは首から知りながら、金澤へも還られぬ義理より、恥を忍びて心ならぬ月日を過す中に、いつか性根腐りて、明日は此家を出でむとも思はず、馴染めば可厭な男の情にも絆されて、今は了簡から立派なる妾になりぬ。

人の妻は初産を一生の手柄にして、親にも歡ばるゝ例を思ふほど、我身の重うなれるは、不孝の罪の重りたるかと、物堅き兩親の面影胸に浮び

て、佛檀の前も過ぐるに慼く、それより三七日は此事のみ思ひ出されて、餘五郎が來ては嬉さの戯言も情無く、このやうな思せうよりは、琴の指南の微なる世渡も氣安きが勝しかとも考へけるが、善き心懸のつい忘れ易く、いつか今の身上を勘辨して、はや宮參りの衣服の心支度。象ほどの狗張子を夢に見て、覺めて獨り笑ふなど、氣散じなる此頃。

女子にてもあれ、子一人と明暮思續くる紅梅には其沙汰無くて、さまでに願はぬ方に出來たりと聞く妬さ。これよりは此の身の寵の衰へぬまでも、子の愛ゆゑに御前の心自からお艶に移らば、始終は口惜き事あらむ、と紅梅は卒に騷ぎて、知るゝ限りの妊娠劑を持藥の如く試みても、一向驗無きに可悶く。何樣と聞く神々に信心を凝し、或は種々可笑き咒詛も利かず。いかなる石女も請合孕む秘傳の按腹、名譽の筋揉兩國に在りと聞きて、其へも通ひしが、何の事も無く、それでも諦めかねて仍心役は息まず、餘所目も氣の毒に憂身を窶しけり。

鼻涕垂してびい／＼哭く兒を見れば、世話燒けぬ人形に縮緬の衣服着せて床間に飾り、親はいつまでも若くと願ひしは嘘にて、千金にも換へられぬ寶とは今思ひ當りて、爰に一人の子だにあらば、紅葉のやうなる手中に、十千萬圓の掌握もなるべきに、餘所に出來たる妬さの已む方無く、此の上はお艶を本家へ不首尾にして、母子もろとも邪魔拂せば、我念の通らぬまでも、他に好事さるゝ無念はあるまじと、此魂膽あれば、前よりは本家への出入を繁くして、お麻の前に根強く取入り、其心を左右することも幾と思ふがまゝになりぬ。

お才はそのやうなる妾根性も無く、お艶の目出たき音信を聞きて、格別羨むにもあらず。子無く苦勞なく、華美に、氣樂に、世を面白く渡りたいが願。その面白き浮氣が露はれて、どうかと想ひしに先は無事に濟みて、加之御前の御機嫌に變ることなき仕合に安堵したれど、餘熱の冷むるまでは堅氣の趣を竊に袖岡方へ文して遣れば、菊住は一日約束の日に殼を

踐されて、さる一大事のありしとは知らず、其次の六の日に、少しばかり無心する氣で行けば、袖岡の老嫗は力落ちたる顏色にて、寂しげにかの一通を出せば、近頃旦那殿の御越が激しいことゝ見えると、披けば案外なる文言。菊住は蒼くなりて、近き内に音信せむとあれば、其節は端書にて早速知らせたまへ、と餘の事は一口も言はず、怦々として立出でけり。

（十一）芝居茶屋

お才はそれより一月ばかりが間は、纔に兩三通の文書にて辛抱せしが、お艶の帶の祝などゝ、餘五郎も男子の沙汰の嬉さ珍しさに、自から紅梅にさへ疎くなりて、産婦の見舞に餘念無く、白髯などは酷いお見限り、寄りも着かざる此頃の首尾、そろ〳〵好い頃と浮つく氣を鎭めかねて、花川戸へ母の機嫌伺ひに行く事にして家は出たれど、傳内といふ見張あれば、それだけの格の身にて、供をも伴れず出る事は協はず。盜みする闇に提灯挈げて行くやうなるお仲を、邪魔さうな顏もせずに伴れて、花川戸の隱宅を訪ね、これから市村座へと母親を誘へば、幾歳になりても此道の所好は、歴々の後室にもある例、中には名題役者の手拭を集めて、今から經帷子に拵へおくなど、後生善き年寄のことを思へば、喜ぶも其筈の母親は、何よりの孝行と、無理なる筝よりは寒夜の饂飩を望むも、

子に甘き親心なり。お仲は其と聞くより、噫氣の口に牡丹餅の落ちたより、まだ旨い仕合に胸轟き、小陰に懐中鏡取出して、鬢撫つける、襟正す。十時の開場といふに半も過ぎたり、と母親は年効も無く、支度しながら騒ぎ立て、悪落付に落付くお才の前なる煙草盆を片附けて、川留ではないよと促きたてゝ、猿若町へぞ飛ばせける。

お才の樂屋は愕くべし。かねて合圖の文を送りて、指名の茶屋に菊住を忍ばせ、幕開の囃子に二人はそゞろ心になるを、おのれは茶屋の女房とゆる〳〵話しながら、一足先に場所へ逐遣りて、人氣無き裏座敷に、其幕の半分ほど菊住と忙なく物語りてから出て行き、又もや長き幕の始め頃より拔出して、思ふまゝの首尾してけり。

世界を變へて此處に樂むことゝは、思ひ寄らざる傳内は、また出をつたな。大川端に三十四五の男の母親はない筈。今度露はれたら首は臺を飛んで了ふぞ、とまた袖岡まで探りに出懸けしに、門外に車も無ければ、

内に然る氣勢はなほあらず。何處へ陰れたか、車夫を糺せば直に知れることゝ、歸宅は夜に入りたるほどいよ／＼怪しきに、先お仲を素引けども、芝居のことは弗と言はず。車夫に尋ぬれば摑ませられし物の義理に、花川戸へとばかり。傳内大いに憤り、そんな譯は無いと獨り力めども、手證あるにあらねば奈何もならず。此度に限りて見逭すとも、いつまでか其分に措くべきと、袖岡事件破裂以來、嚴しき用心おのづから目顏に表はれて、此人非人の淫婦め、憎し／＼の念内に在れば、主として仕ふるも屑からず。それにつれて行儀も舊時ほどにはあらざる端々の、此方には油斷せぬお才の目に着きて、あの事ありてより格別に御前の嚴命ありて新關を玄つらへ、警固をするも役目なれば、憎むべきにはあらねど、以前に變りて無禮すぎたる仕打は、夜番の分を知らぬ利いた風の老爺めが。

お才の不始末のあらざりし前は、陰目附とはいふものゝ、此家に扶持さ

れて用人格でゐれば、舊は藝者でも今は旦那樣、只管御主人と仰ぎ、忠義を盡して仕へければ、面貌こそ怖けれ、憎氣無き老爺の酒だに飲ませてやれば、昔話の兵法自慢、人は聞いても、聞かいでも、面白さうに喋るを一藝にして、不器用でこそあれ、賴む用は何なりともする處が可愛さに、お才も隨分目を懸けしが、近頃は貰ふものに獨り極めたる折々の寢酒もくれず、ついした事に口ぎたなく小言いふなど、今までに打つて變りて、稜々しく遇はるゝより、傳内はいよ〳〵面白からず、何かにつけて抗へば、お才は腹立つほど傳内は癪に障り、此間三を以て一を除するに同じ。

我見露はして手柄にせむと、傳内少しも油斷せざれど、お才の擧動に是ぞと稜立ちて胡亂なる處も無く、十月は月の初に一度花川戸へ、半過に一度、中村樓に宇治の名弘會ありて、舊時の師匠の義理に顏出しせしのみ。此の二度の中に遣繰ありしかと、疑はゞ疑ふまでの事にて、先は別

係無しと見ゆる摯實に、傳內も稍心を弛せど、固より油斷のならぬ女と、一圖に念ひこみたる志は鐵石のごとく、今の處は無事なれど、氣は常に滿ちて旺ならざれば、虛に乘られて思はぬ不覺を取ること、劍道に於ても、是第一の心得なり。敵は豈獨刄を交へて切結ぶ時のみ在りと謂ふ可からず、可恐可愼。一藝一道の達人たる心懸はいや又格別のものと、允可の傳書は一々胸に疊みて、今度こそ不意擊は吃はぬ氣でゐながら、疾に二度やられしことは夢にも知らず。之が木劍の仕合ならば、手裏劍に袴の裾を縫はるゝ人なるべし。

御前の御出あれば、お才は全く前非のあらざらむ人のごとく、前に倍して狎々しく、我儘も常談もいふ中に、自から男心の蕩然となる旨い仕向を出來るだけ爲て見すれば、固より憎うて圍うたる女ならねば、餘五郎も味に氣が乘りて、菊住とはまだ〳〵脈の通うてゐる事は、十分に疑ひながらも、慿うされて見れば惡い心地はせぬかして、以前よりは思召の

ちと深いやうに見えけり。
お才は此機を外さず、久しう無沙汰にせられし見舞としてなど、勝手の好いこと言ひて、溜めておきたる品々の強請。御機嫌麗しき折は、餐餘の桃さへ王に旨がらるゝ例ありて、憎い時に物もらふよりも、可愛き時に遣る嬉しさ。どのやうな事を望まるゝとも、有餘る金錢の幾百萬分の一の、其の百萬分の一ほどの無心は、何の譯もないことゝ、言るゝまゝに投出せし額は、何の彼のと三百圓許。其内百圓餘は買物して、殘額は小簞笥の抽斗に袱紗包にして、ちび／＼と情夫が不時の需を須つ氣。然りとは知らずか、近頃御前の多愛なさ。間男するほどの女に未練遺して、醜き彼態は賢き御方には似合はしからぬ事とは思へど、茲に元祿の昔を鑒みれば、祇園の花に醉どれの犬武士、醒めての後の大忠臣、大石內藏助良雄が胸中、その始には測るべからず。霎時御前の爲むやうを見ばやと控へをれば、お才は旭日の昇る勢にて、日下の身を以て之に逆ふ

は、目子勘定にしても大きな損なれど、傳内は唯管忠義張の魂を固めて、そんな事は更に意と爲ず、剛情我慢に四角張るほど、いよ〳〵お才の眼前を煩がられ、一向寢酒の御沙汰も無くて寂しく部屋に閉籠る時は、壁に向ひて木太刀を拈くり、居合を拔きて慰みけり。

お才は二度まで芝居茶屋にて首尾せしが、袖岡の奥二階とは世界變りて、火事場で碁を打つやうな倥偬、逢ふといふは名のみにて、鏡に映る影を見るも同じ事。これでは危き思して、忍合ふ効無ければ、何とか外に巧い工夫を、二人の智惠にて案ずれど、出るには供を伴るゝ身なれば、何事も面倒なるに、内には傳内といふ敵役の我張れば、其手前も氣儘には出行き難く、八方に人目ありて晦き事はならぬやうに、其處は忽らぬ葛城の方寸、迚も一人の味方無しにては奈何なることに非ず、と菊住も煎じつめたる處をいへば、お才も考は同じく其事にて、今までは他の口の脆きを氣遣ひ、自分は獨りどれほど苦みても、人は頼まぬ了簡なりしが、

此上は是非無し、お仲を手懐けて、曠れて逢ふのも悪くはない話。

(十二) 義理と慾

お仲は十九といへど晩稲にて、不愛相のかはりには口數きかず、陰忍と温しき女なれば、味方に附けて、容易に事を泄すべしとも想はれねば、否應いはせず曳入るゝ責道具には恩と義理と、お才は胸に一物あれば、爾來とても相應にせしを、一入心着けて、給金の外に何とか名をつけては餘分の物を與へ、此家に不用の品は人知れず宿元へ運ばせ、此年頃の喜ぶ物を氣毒がるほど取らせて、何事も仲や〳〵と御意に入らるゝは、此上無き奉公人の面目と、肚裏では一方ならず喜びながら、輕く口の頭に器用な言のいはれぬ氣には、此恩を懷ふこと格別に深く、なほ否のいはれぬやうに、辛抱して我方に長年せば、嫁入道具の一式は私が祝うてやるなど、狡猾なる男も瞞さるゝ旨い舌頭で、氣の茫然とするほど結構なる話を、如何にも眞にして聞かせらるれば、堂〳〵たる國會議員どの

さへ悪くない話には、世の譏言も身の恥辱も棄つる氣になるものを、お仲は悪事の加擔せよと唆かさるゝにもあらず、奉公に精出して落度なく長年せばやと道理に愜へることなれば、其氣になれるは理なり。

最早藥の十分に循りたる頃と、お才はお仲の樣子を篤と見澄し、菊住との事情を一條作して、遁れぬ義理から此方の御前の世話にはなれども、菊住にも緣は切られぬ因を、知らずに聞けば如何にも理にて哀に、氣毒に話されて、生なるお仲と毛筋ほども疑はず、折々の密會を知らむものは、二人の外にはお前ばかり。私を主人と思ひ、大事と思ひ、此身上を不便と思はゞ、忘れても口外してくれるな。其代りには私も行末長くお前の力となりて、及ばずながら世話せうと、內證の底を見せられて、そのやうな事をも、色に染まらぬ娘氣に吃驚せしが、お才の思はく通り恩に絡まれ、慾に牽されて、自分に悪い事せうといふではなし、何も知らぬ顏して口にさへ出さずは、其にて濟む事と了簡して、おとなしき返事す

れば、お才は痛く喜びて、其夜竊に縮緬の羽織に三圓添へて、何も言はずに與れぬ。此格で行けば、一年の内に立派に嫁入の支度は出來て、其上に道具は祝うて下さること、、嬉しさの始の羽織が氣になりて、睡られぬまゝに葛籠から出して最一度見れば、裏の墨繪の秋草が、もう〳〵もう好くて〳〵。

又這麼事をと思ふ慾と、二つには義理ゆゑ味方となりけるが、まだ一度も其場には臨まぬ前から、今まで然もあらざりし傳内の癖なる上竄が、遙に薄氣味惡く、お槇の擧止までがどうやら今までとは違ふやうに思はれて、謂はむ方なく心苦しきに、お才はいつも綽々として、苦勞も憂慮も後悔き事もないやうな、あゝ無くては那ほどの事は出來ぬ筈と驚かれぬ。其後餘五郎の來にける時は、浸々可恐しく、二階へ膳を運び、銚子の更りに通ふにも、先づ階子の口にて一度悸々、座敷へ入る前に二度目の胸を轟かせけるに、お才は餘五郎の側にゐて、樂しげに笑ふ聲の聞ゆ

るには愈よ驚かれけり。

お才はお仲を手に入れてより、戸外の首尾は思ひのまゝに、少くとも月に一度は出合ひけるが、先度に懲りて山瀬も絶えず探索を入るゝこと嚴しけれど、お才の用心も疎かならざれば、一向種は上らざりき。

十一月の末に菊住は小袖二枚、羽織二枚、其外に向上なる携帯品三品ばかり出來て、仕送らるゝもの饒に、金時計も買ひ、春衣も調ひて此年は暮れけり。

紅梅は不相變いつ麻に取入り、お艶は明暮身を大切にして、梅咲く頃を樂み、葛城商社は益々好景氣にて行年を送りぬ。

（十三）　染井の寮

一月の二十二日の朝、椽の日影に列べたる二盆の梅は、枝頭に開かぬ花も無く、垣根の霜柱消えて、鳥の囀は春めけども、寒風の空に大凧の凮弓遠く響きて、九時頃と覺しきに、お才は未だ閨を出でず、先刻新聞を取寄せけるが、讀みてから又睡りぬ。

●傳内は爲す事も無き閑の身に、無性ものも朝湯にと門の出合頭、馬車を飛して來たるは、本家の執事の一人永田某なり。傳内は見るより恭しく一禮すれば、永田は帽を取りて、旦那樣は最早お目覺か。急の御用ありて參りたれば、此由を取次がれよとあれば、傳内畏みて客間に請じ、お仲は慌くとお才に告ぐれば、本家より執事の使とは、如何なる事か。更に心當りはあらざれど、もしや御前が急の思付にて、正月の催でもある事か、薄々はそんな話もありしが、と手早くしても嗽手水から衣服着更

ふるまで、小一時間も待たせてやう／＼立出づれば、永田は煙草吸はに男、手爐を抱へて肩を聳かし、寒さうに退屈さうなる顔して控へけるが、褶を下りて慇懃なる挨拶了り、御前は今朝ほど染井の御別莊へ御越ありて、後より貴方をお伴れ申せとの御用を、私承はりて罷出でましたれば、直樣御支度をとは、はて何の用やら合點行かず。御用の趣はと問へば、私も一向存じませぬが、獵銃を御持參あそばしたれば、大方小鳥狩の御慰と聞けども、まだ腑に落ちずして思案するを、永田は傍より、御存じの通り短氣の御前なれば、時刻晩はらば、私がお譴責を受けまする。馬車も待たせたれば直樣御供と促き立てられ、今日は午後菊住と逢ふ約束を飛だ御用に邪魔されて、腹は立てども美しく衣飾りて、わざと素顏に結び髮、徐々と玄關に出でたる姿には、敵傳内の心も和ぐ。纏て馬車は染井なる別莊の門に着きぬ。お才はかねて話に聞きたる此家の、別莊といふからには、音羽ほどにはあらずとも然るべき構造と思の

外、昔はいかにも然るべき構造なりけむ、垣の朽つるまでに古びたる、幾歳雨晒の門の處々損じて黴のごとき苔のつきたる、今は宛然相馬の古御所。植籠竹藪は千日苅らぬ頭髮の如き茂みに、百鳥の囀姦しく、なるほど小鳥狩には屈竟の場。まだ始めぬか、轟然といふ音もせぬと、永田に案内させて門を入れば、門外から見しよりはなほ驚かるゝ、荒庭の景色野中の如し。雜司谷の鬼子母神に詣る道に、此の樣な處あり、と後よりお才が話しかくれば、もとは染井に二つとはなき庭なりしが、と永田は立停りて、此の自然石の燈籠が價値にいたせば五百圓ほどの名物でござります、其も今は惡寂に寂びたる庭の奥に、書院がゝりの廣間の椽高く、障子の紙の新しく白きが際立ちて見えぬ。

此方の跫音を聞きて、出迎に見はれたるは、山瀨の番頭清浦某。此前會ひし折の縞の羽織の打扮と變りて、今日は獨逸仕立の黑綾の朝服。赭黑き頸に眞白き襟を突張らせ、髭まで生して、月給にすれば十五圓方も男

を上げたれど、變らぬは調子と腰の低さ、之で商賣を上手にする人と聞けり。

過ぐる二間の模樣を見るに、普請の始には手を竭せし造作も、長らく人の住まざりしにや、散々に損じ古びて、疊五六疊履む間に足袋の裏は鼠色になりぬ。御前は何處にと問へば、清浦は曖昧なる返事して、左も右も那へと、書院へ案內すれど、森として何處の隅にも人は居ざる氣勢にて、送り來りし永田はあのまゝに歸りけるか、姿を見せざるも訝しく、どうやら一狂言ありげに思ひつゝ、書院の襖の外に來にける時、內にとんと唾壺擊つ音、扨は御前は此內にかとおもへば、唯一人山瀨が控へたり。

お才は慄然して、扨は露はれたるかと思へど、わざと落着きて、まづ初春の御慶から、舊冬の無沙汰の挨拶まで式の如く、何に驚きたる氣色も見せず。餘五郎の來ぬことは見拔きながら、御前は何方にと尋ぬれば、

山瀨は吃々と笑出し、家暮な、それほどの事が知れぬかと銜返せば、お才は言はるゝまゝの家暮になりて、占者ではないものを、其の樣な事が私に知れますものぞ、貴方が御前の御名代とならば、御用の次第を聞かせたまへと畏れば、山瀨はいよ〳〵笑ひて、金佛の口頭に餡を塗りつけても、知らぬ顏では通らぬ譯。かの一件が又破裂たぞ、と會釋無しに言飛ばされ、餘人ならぬ山瀨には、お才も冷たき汗を搔きて默然として俯けば、山瀨は力を入れたる聲にて、それほどにも那の男が好いものか、と呆れて感心さるゝにいとゞ赤面して、此間の御心切を無にするではなけれども、腐れ緣の二度の不埒、貴方には面目もござんせぬ、と有繫に萎れてぞゐたりける。

山瀨へは左も右も、御前へ面目無しとは思はずか。其方を御前の落籍されしも、始を謂へば好かれぬ男の無理取と、それに免じて一度の浮氣は辛抱せられしは、中本にでもありさうな粹なる捌。其方も諸譯を知らぬ

娘にはあらず、其處を買ふ肚の無くては協はぬに、可厭な男を甘く見過ぎて、好いた男に實過ぎた爲方は、餘りといへば義理を餘所にして、念の入りたる蹂躪やう。それでは佛でも堪忍したまふまじ。思へば由無き媒妁を頼まれて、去年は家暮な意見番、今日は時次郎に憎まれさうな役廻。女の前で酒飲めば、意氣な事の一つ二つはいうて見たき男なれど、これも君の嚴命是非無く、上意を承けて如件。

お才は徐に面を擡げ、おほせらるゝ一々胸に徹へて、身の不埒は今更言解くべき樣もなし。向後心を悛めむと、二度までいはむも冗ければ、御前の思召すまゝに此身を如何やうとも遊さるべし。昔なれば首は無き女ぞ、と色稍蒼ざめたれど聲朗に、少しも惡びれず。

山瀨は此體を見て、恩を忘れ、義理を棄てたる不埒は憎き女なれど、其覺悟の殊勝さが氣に入りて、念無き女に用無ければ、何處へなりと往きて、好いた男に添へと放して遣りたけれど、葛城餘五郎が一旦念を懸け

て召使ひしものを、世間に出して恥曝さすは、女の外聞よりも葛城の名折ぞかし。當分此寮に窮命させ、篤と思案の後、改めて其方の了簡をも聽きての上に處置すべし。今から其方の住居は此處ぞ。花川戸の母方へは、今まで通りに月々扶持せむとの思召疎かに思ふべからず。白髪の家財は明日中に運ばせむ、夜具其外當用の道具は今にも持來るべしと言渡す。

それは眞か、夢よりも思ひの外なる爲方に呆れ、いかなる憂目も覺悟の上のお才も有繫に思ひ亂れて、身は早無宿の淺ましさを悲しく、半日も居られぬ此廢屋に、幾年を押籠められて、生効の樂み無きを心細く、遙に今朝までの身を懷ひ出せば、我にもあらで涙ば胸裏に流るゝなり。

山瀬は手を打鳴して清浦を呼び、老爺をこれへとあれば、直に座敷の外に現はれて、手を支へたるは、今日からの爨奴。山瀬はお才に引合はせて、臺所は此老爺に委せらるべし。此方は旦那樣なるぞとあれば、老爺

は諄々挨拶して立ちけり。
身上を聽かば憐れなるべく見すぼらしき老夫を見るに、お才は憂を累ぬる心地して、罪人には過分なる午餉の膳立、一銚子付きしを、飲めども醉ひはせず。二時頃になりて、玄關に二三人の聲するを、誰か來にけると思ひしに、頓て引合はさるれば、我を張番の夫婦もの、玄關側の一間に世帶道具舁込みて、犇く折から又人の來りぬ。挨拶に出づるを見れば又これに附絡はるゝ大谷傳內、御寢道具其外持參いたして、お次間に差置きましたといふ。仲は如何せしと尋ぬれば、御本家よりの御指圖にて今朝ほどお暇が出まして、槇も同樣にござりまする。私めは御緣がござりまして、又此方に參りましたれば、爾來通りお目をお懸け下されまするやうにとは、底意ありげに聞えて悔しかりき。
山瀨は淸浦を卒れて、三時頃に歸りける迹は、廣間に道具少く、洞然とお才一人、寂さ心細さに堪へかねて、心を慰めむよしもがなと椽に出づ

れば、落日風急にして椿寒く。兩三聲は何といふ鳥の啼音やら。

（十四）龜井戸の梅

二月の初月滿ちて、お艶の產は玉の如き男子なり。母は肥立輕く、子はいと健かに餘之助と名づけて、親父どのは每日顏見に行かるゝに忙しく、半月ばかりも遠退れたる紅梅は、嗔恚の焰に胸を焦して、其の子の生長つほどお艶に箔が貼くばかり、うか〳〵倖してはゐられぬ身と、思ひつめたる心には種々可恐しき詭計も浮べど、そのやうな事も出來ぬと了簡は玄ながらも、妬さ悔しさに蒸蘊して、餘五郎も見えねばいとゞ紛れかねて、垂籠めてのみゐたりけり。今朝は此頃に無き長閑なる日和、庭には散際の梅もありて、我が名なればと軒近く栽ゑたる古木の紅梅、物の實ほどに麗しき莟脹れて、珊瑚珠を綴りたらむごとく、好もしく眺むる内に、一枝謂はれぬ優しき振に花を着けたるを見出して、手活の慰みにもと剪取る折から、椽に人の氣勢するは侍婢の立てると、其枝をこれ見

よと差出して振向けば、お麻なるに吃驚して、いつの間にと呆れ顔。凡そ二時間ほど前に來りしが、梅の木下に佇む姿の、いづれ花やら美しきに見取れて、聲も懸けざりしと笑へば、そのやうな事をと椽に上り、座敷に入りてから主從の挨拶。茶よ手爐と騒ぐを止めて　これから龜井戸へ梅見にと支度を急がせ、連立ちて門外に出づれば、横附にしたる華車製造の小馬車は、お麻の乘料に昨日出來上りて、今日乘初に紅梅を誘ひたるなり。

烏羽玉と名づけたる紫騮に、白革製の馬具を裝ひ、小意氣なる車を飛ぶがごとく走らせければ、道行く衆の目を着けざるは無きに、內には貴族とも見ゆる婦人の同乘せる、其の一人の美形さながら天女と拜みて、見るもの魂を奪はれけり。

紅梅は車の中にて、お才の籠押られたる不始末をお麻に聽きて、手をも下さで心快く讐討ちたるを、爲濟したりと思へど、わざと打驚き、其樣

な人とは思はざりしに、大反れた淫樂の應報は覿面、幽閉とはまだ〳〵御前樣のお慈悲とはいふもの丶、草深き田舍に人訪はぬ宿の詫住居の、其心の裏は如何ならむ。度々泣かされし恐恨あるお才樣なれど、昨日に引變へて然した身の上になられたるを思へば、おいとしやと心底から氣の毒さうに言へば、それもお才の身から出た鏽なれば、少しは窮命するも藥なるべし。聞けば情夫の菊住といふは能無き男のよし。何の見所ありてその樣な爛死蛇には腐れ合ひけるか、利根なる女に似合はぬ愚さ。人の妻は云ふに及ばず、妾とても、女は操正しからでは、爲べき出世をも爲外して、身の破滅も其よりぞと、老人の話の末はいつも爲になる事ばかりを、紅梅は氣障がりながら、いかにも難有さうに聽きて、旋て龜井戸に着けば　梅を見るより人に見らる丶鬱陶しさに、ぐるりと唯一周立て橋本に憩み、歸路は田舍めきたる路を物珍しく步みて。人家の立續く邊より再び馬車にて歸りぬ。樂は見に行きし臥龍梅よりは、車の中の

話なりき。

喧嘩仕掛に突懸りて、口頭小面の憎かりしお才は獨自片附きて、殘るはお艶ばかり。容貌は取立てゝ美きにもあらず、然ればとて男蕩しの手管も無く、旦那樣の仰せならば、無理でも唯々と溫順をのみ取柄の女なれば、彼一人は可恐しき敵にはあらねど、子を生れたが百人のお艶より油斷のならぬ行末と、懸念は其のみなれど、手剛のお才が無き者になりしは、我念の通る前表吉と、私に歡喜の眉を開けり。

世に米の飯と阿諛を好かぬ人無く、彼御前が一日置くほどありて、體中智惠かとも思はるゝ奥方も、今は此方の物になりて、我言ふことの何か通らぬは無く、御前夫婦の惚競。然れば其の紅梅の口頭にてお艶を逐出させんは、易きに似て易からぬは、彼女のおとなしやかなるが御意に入りて、折節は奥方も褒めらるゝに、お艶が又熟と審みて穴を出懸けぬ無難の女なれば、何を捉へて口實にせむ廉もあらねば、左右は落度を拵へ

て、それからの事。

(十五) 我目の曇

二月晦にお艷は枕直しして、まだ兒の血服を明けねど、本家へ伴れゆきしは、女兒末子の雛祭る日なりければ、紅梅も來會せて、お麻と更互に懷抱へ、我兒のやうにそこら自慢顏に持行きて、爲だら無く襁褓の世話などして喜ぶを、お艷は狂言と知らねば、親心の嬉しさに打解けて、語合ひする一日の馴染も深く、然も紅梅は人の氣を察て、それ／＼に仕向け、辯口は男殺しの上手にお艷は滾りと遣られて、いつか一日氣樂に遊ぶ約束も、此日の中に出來ぬ、四五日後に紅梅はお艷の方へ出向きて、手土產には餘之助へ數々の玩具、東西識らぬ子よりは外に喜ばせたき人のあるべし。午前十時頃より日沒までゆる／＼遊びて、二三日の中に是非深川までと固く約して歸る、其頃にお艷も行く、先方からも來る、又訪ねる。數累るほど他人行儀の稜磨れて、二月ばかりの間に、餘所目に

は同胞のやうなる間になりぬ。
お艶が本家へ出入して、お麻に親まれては、樂屋を見られ、色々機關の邪魔と、紅梅は左右お艶の奥方へ疎音にする工夫して、何かの話の次手には、お麻の世の常ならず嫉妬深き事を語り、今までは然もあらざりしが、お前樣にお子樣の出來てより、男のお子ほど憎惡強く、葛城の身代相續は覺束無き、御病身なるお末樣の行末を案じたまひ、さる事のあらざらむやう、折々御前へ慨かせらるゝよし。其につけて自からお前樣を讐敵のやうに怨みたまへと、顏にも口にも弗とも出したまはざるほど、いかなる事を巧まるゝやら、底の知れぬほどなほ可恐し。障らぬ神に祟無しとやら、近寄りたまはぬに越したることはあらじ。嘘か知らねど、お才樣に男ありとて幽閉にしたも、內證は奥方の差金と聞けり。係る身にて謂ふは異なものなれど、我家は舊お麻樣の主筋なりければ、其報恩に世話するとて、親しう訪ねらるゝ義理あれば、氣味惡けれど折

折は御機嫌伺ひに顏出して、今まで格別の憎惡受けぬも、何の慾も考も無く、子供らしうしてゐる所以ぞかし。明日にも妊ることなどあらば、怖や、本家の門をも通るまじ。事ありて招ばるゝとも、三度に一度の外は出入したまふな、もとが賤く育ちける女なれば、隨分無法なる事を爲かねまじと、まづ十分に威して後、折に觸れ、例を引き、念入れてお麻の恐るべき氣性を噂して聞せければ、心善きお艶は一圖に之を信とし、弱き氣に痛く怖れて、我から好みもせぬに子など設けて、因果なる身を或時は悔みぬ。紅梅は本家に行きて、近頃お艶の訪ね來ることの度々なるよしを語れど、明白に讒訴いふことは無く、まづは善き廉を擧げて褒めておくは、慭ひ惡樣に言告げなば、嫉妬からの毀言、と覺られもやせむと思へばなり。然れど些細なる事までも語るに、心ありて言ふとは見せずして、聽きて味へば、其言も此樣子も、生みたる男子を手柄に、身の程を忘れて人も無げに振舞へるやうに、其處は例の辯口。お麻は紅梅

のいふ言なれば、萬更の虚言にもあらじと思へど、確に然した女にはあらずと、見拔きたる我目に曇は無き筈と疑ひけるに、お艶は紅梅の罠に掛りて、本家へ呼ばるゝこともあれば、彼此假託けて出入を嫌ふ樣子は、紅梅の言ひしに思ひあたる節あり、とお麻も少しは念に懸けしが、それが何の事にもあらずと、大きく思ひ棄てゝ居たり。

（十六）　蓄音器無きこそ

六月の半ば神戸の分廛に紛擾起りて、餘五郎は其地へ赴きぬ。此夏は家族を引率れて興津の海水浴に避暑の心期なりしに、肝心の人が留守になりて、其話は立消になりけるが、お末は例年の暑負、別けて今年の劇しさに、御歸京を待つまでも無し、卒に思立ちて明日の發足と定り、幸ひ紅梅も閑なる身なれば、と、御意に入の徳は、是非に隨從を仰せ付けられぬ。

此春から樂みにせし効も無う、御前樣のお留守になりたるに、力落して鬱いでばかりをりました。明日は二番滊車でござりまするか。暗い内の一番滊車でも、今夜の終滊車でも、一刻も早う參りたう存じます。興津といへば鯛の名所、お庭から垂綸してなどゝ　十三になる女兒のお末よりも勇み立ちて、二三百里もある所へ徒歩で道中するやうな、事々しき

・支度話してお麻に笑はれ、それでも聞かず、種々支度もあれば心急かれてと暇乞して、眞直に歸るかと思へば、迂廻してお艶の家に立寄りたり。

思ひ懸けぬ御出とお艶は歡べば、思ひ懸けぬ事起りて、と紅梅は氣の無き顔。今朝本家より使にて、直來いといふは何事かと、行きて御用を伺ひしに、此頃御前樣の御留守を好機に、奥方は興津の別莊へ御保養にとて、私をも伴れて下さる難有迷惑。否をいへば直に御立腹、其報が可恐しさに、有難う存じますと、明日の朝お供して興津へ行くことになりたるが、貴方とは十日會はずにゐられぬ御馴染を捨て、始終繼子のやうに睨まれて、大きな聲して言ふことも、迂濶と笑ふこともならぬ氣險しやの御機嫌執りて、窮屈の思ひするは、保養よりは壽命の毒になれど、見込まれたか不運と諦めて、一月二月の辛抱はなるべきも、其間お目に懸られぬが何より愁く、行きたうもなきは山々なれど、遁れられぬ義理に責めらるゝ切なさを想ひやりたまへ。

我身の事は左も右も、若や奥津より遊びに來て見よなど〻、奥方の態々迎を寄來さる〻事あらむとも、日頃讐のやうに思うてゐらる〻人の、何がな思はく無しに招くべき。義理も遠慮も無ければ、其時は必ず〳〵お出懸は御無用にあそばゑまし、御前樣の御留守も長き事にはあらざるよしなれば、其間は格別油斷したまふな。今日も今日とて奥方の貴方の噂ゑて、聢と明けては言はれざりしが、左右に餘之樣が邪魔になりて、貴方まで憎いやうな言の端々。今始りたる事ではなけれど、心着きしま〻此事をお知らせ申したさに上りました、と聞いた所は涙も零るべき實意ぞ、鍼を韞める眞綿なりける。

お艶は浸々嬉しく、よう言うて下さりました。知らる〻通り私には兎毫の頭の露ほども惡き心はあらざれど、此子ゆゑに思ひも寄らぬ疑受けて、奥方の憎惡繋る心苦さ。儘になるものならば、割つて御目に懸けたき私の胸の中。艶をばそのやうな女と思召してか、何と爲ば此身の證明立つ

べき。情なきことぞと歎けば、設ひ奥方のどのやうに憎まるゝとも、御前樣だに御機嫌好くば、心遣したまふことはあらず。されども此事は御前樣へも仰せられな。一徹の御氣性なれば、其通りを用捨無く奥方へお小言あらば、いとゞ御身の不爲になるばかり。其内折を見合せ、私から篤と奥方の御合點ゆくやうに御話し申して、御苦勞の無いやうにして進ぜましよ。それまでは憖ひ毛を吹いて疵を求むるやうなる事せうより、今まで通り手を着けず、そつとして措いたが勝と、お爲轉しにされてお艶は深く喜び、何分貴方をお賴みまをしました。御辭に從うて、もし奥津からお人など遣はさるゝとも、好きやうに御斷り申して、忘れても出て行くことではござりませぬ。隨分御機嫌よう。一日も早く御歸を樂に待ちまする。奥方の手前遠慮あれば、わざと此方からお手紙はあげませねど、貴方からは折々のお音信を聞かせたまへ。可羨しうて言ふではなけれど、不束な私と違ひ、奥方にお娩しがられて、何處へ行かるゝにも

誘はるゝ貴方のお身に、一日なりともなつて見たらば樂かるべしと言へば、紅梅は呆れ顏、お望みならば此株何方へでもお讓り申しまする。聞いて極樂、其身の地獄。他の氣も知らで那樣事を、とは聞かせたき人あり、こゝに蓄音機の無きこそ恨なれ。

（十七）興津の文

興津に着きて一週間ばかりは、所變りたる珍しさに、晝起から海よ濱よと黑くなりて騷ぎぬ。田舍蕎麥の味は好けれど、醬に恐るゝ都人は、食物ゆゑに風景佳きところにも長くは居たゝまらず、いつも戀しきは紅塵萬丈の俗境、日本橋通りに過ぎたるはなし、と旅から歸りたる人は必ず言ふなり。若夫鯛の捕れる沖を前にして、茸、蕨生ふ山を後に、柿、栗の林、桔梗、女郎花の野邊近く、冬暖に夏は涼しき所に淸き居宅を構へて、金錢の不自由無く、我欲しと思ふ品は何にてもあれ、半日の中に臺所に山を成さば、これぞ東京の醬に田舍の生蕎麥、お麻一家の興津に於ける境涯は正に是ぞかし。扨は此處を一生の住所とすとも、倦むの、他くのといふ事はあるまじきに、其身になりては他の想ふやうにはあらで、淸見潟も日慣れては手水盥の水、三保の松原も尋常の松原、富士山とて

高いばかり、根から可笑からず。唯涼しきを取柄に辛抱して二十日ばかりにもなりぬ。

此方に御別莊の建ちし頃より、お艷樣も此夏は是非行きたきものと、常々言はれしに、私のお供したる事を聞かれなば、さぞや可羨う思はるべし。一人も人の多きを面白き折からなれば、お差支無くばお招び申して下さりまし。然らば私の氣も休まり、お艷樣のお喜は如何ばかり、と聞けば成程お艷を伴れざりしは面當がましう、隔意したりとて恨にや懷はむ。喜ぶとあれば喜ばせて心不快き事はあらず。大分飽きたるところへ新手が來らば、又冴返りて興あらむ。

此次の上り滊車にて迎を遣れと、從者の岩田といふが庭の亭にて晝寢するを喚起し、口上言含めて證ばかりの書狀を持たせ、待つてゐてお伴れ申せとあれば、岩田は委細畏りて出發し、明くる朝まだきにお艷の家を訪れ、此趣を傳へてお麻の書狀を差出せり。お艷は今更心轟き、紅梅の

深切にもわざ〳〵出懸に心着けてくれしは愛ぞ。おもへば何が憎うて奧方は箇程までにして此身を苦めむとはしたまふぞ。折角の御意を掊くは失禮なれど、生憎二三日前より若樣の御氣分宜しからず。朝夕醫者に來診うてもらひまする仕儀なれば、よろしう奧樣へ申上げて下さりませ。若樣の御樣子次第にて上りまするか知れませぬが、何日まで御逗留遊ばします。まだお長いとは樂みな、定めて好い地でござりましよ。此暑さに遠途のところを御苦勞でござりました。委くは此裏にと返書を渡せば、岩田は受取りて、其日の中に奧津に還りぬ。
心から招びたうて迎を出せしお艶ならねど、來るといふものは待たれて、お麻も氣に懸けてゐたりしに、迎のものは素戻して、寂しげに書狀のみ持ちて還りけるが、徐之助の病氣とあれば是非無し。私とは性が合はぬかして、いつ呼びにやりても、何か事ありて來られぬ人。迎まで出せしからは、此方の念は通じて、お前もこれで氣が濟んだといふもの、とお

艶の書状を紅梅に渡せば、一通讀みて、何やら思案の體は、何を考ふるぞとお麻に問はれて、眞實若樣の御病氣か、それが可疑しくてと、岩田を呼びて樣子を聞けば、早朝ゆゑ御寢なりてゐらせられしにやあらむ、若樣のお姿はお見受申さゞりしとばかり。外に糺すべき手懸りもあらざれば、紅梅は其儘口を噤みけれど、仍可疑しげに其書を見返し〳〵、わざと思案してぞゐたりける。

餘之助の病氣といふは虛僞と知れど、此處に居ながら知るべき謂なければ、東京へ歸りてから樣子を探りたる顏して、此事を言告けむ、と紅梅は何も言はで其場を濟しぬ。

お麻は餘之助の加減惡しと聞けば、お艶の來られぬも無理ならずとは思ふもの丶、近頃は何時招きても、何とか假託けて左右顏出さぬは、味な仕打と思はる丶矢先、此謝絕も如何やらと氣が廻りて。紅梅一人伴れたる無念さに、拗ねて我志を無にせしか。但しは御前のお供はすとも、我

に喚ばれて驅着けて來るやうな、安い身分ではないとの了簡か。東京の内から迎をやりてさへ來ぬものを、富士山の下からでは、來ぬも有理。然ういふ氣の女とは見ざりしが、男兒生みたる手柄から、自と心に驕慢附きて、今までとは打つて變る例もあるぞかし。高が婢妾の分でありながら、那様眞似して奥方に睨まれたら大きな損とは心着かず、御前ばかりを恃にして、月の光も入用の世とは知らずや。憎みはせねども、それではどうも可愛うは思はれぬと、白き物と並ぶほど黑きものは目立ちて、いとゞ紅梅は御意に稱ひぬ。

お艶はうまく紅梅に計られながら、危くも難を遁れし想して、何に就けても御前の御不在中の心細さ、一日も早く御歸京あれかしと、無事を祈りて待ちける念の通じてや、東京に急用ありて、本廳より直ぐ歸れの電報。神戸も大方處置の附きたる跡を支配人に委せ、又出て來ることにして、一先東京に歸りけり。

用濟みて歸來には、奥津に寄る約束なりしが、東京へ急ぎの身は素通りにして歸廛し、商用も三日にて果てたれば、取つて還して奥津へと思ひしが、お艶の獨り遺されてゐるを尋ね、餘之助の顏も見たさに行けば、お艶は折から風呂に入りて、湯上りの餘之助を乳母の抱へて出で來るに廊下にて會ひぬ。

直に抱取りて奥へ入れば、床間に我が寫眞を飾りて陰膳据ゑたるを、古風にしをらしき事する奴と思ひつゝ居れば、御前のお歸京と聞くより、お艶は得々浴衣着にて出來り、歸京の思ひしよりは早く、旅中の恙無かりしを歡び、此處は風も通らず、蚊も多ければ、彼方のお座敷へと端近く席を設けて、月は未なれば庭の燈籠に灯を入れ、蟲の音の聞え初むるに、心涼しく頃日の暑熱を語りて、待つ間程無く、唐木の卓のいづれも氣に入りたる肴核を排べ、兒はお艶の膝に機嫌好く、樂しさは夕顏棚の下涼、これも飮める、と杯の數重りて、明日は奥津へ伴れむといへば、

二三日前奥方よりわざ〳〵のお迎なりしを、氣分惡かりければ、若樣の御病氣とてお斷りせしものを、今更お供申しては奥方に義理が濟みませぬゆゑと、進まぬ氣色なりければ、然らば方角を變へて日光見物にせうと言ふ。

何處にしても奥方へ義理の濟まぬは同一なれば、其も願はくは最少し先へ寄りての事にと斷れど、今度は肯かず、明日の朝早く立つぞと力むも醉の上。明日にならば忘れむことを望みしに、早くこそ目は覺さゞれ、起出づれば直ぐに是からと急立てられ、今更否は言はれず、主從五人にて。

（十八）日光見物

日光は外國人の目を驚かす我國自慢の名所、一つ見てさへ日暮しの門あり。ゆるりと見物せば、半月かゝりても見盡すべきにあらず。一遍巡覽〆て直歸も興なしと、七八日逗留〆て、まづは遠慮無しに結構といはるゝ身になりました、と供のものまで大喜びにて歸りぬ。

紅梅は興津より歸りて、取敢へずお艶を訪へば、御前に伴れられて日光へとは、今年は南瓜の豐年か。不思議さに呆れしが、不便や飛んで火に入る夏の蛾、是ぞお艶が運の盡にて、奥方を焚きつけむには誂向の上首尾と、歸りの車の上にて言告口の梗概腹案〆て、翌日何氣無き風〆て本家へ行けば、お麻は餘五郎の日光へ出掛けしことは早や識りたれど、紅梅が語る其處までは知らず、おや〳〵と歌骨牌の鼻毛ぬかれたる心地。お艶にしては出來過ぎたと笑へば、紅梅は怫然とせる氣色にて、お艶樣

も餘りなお方。興津へ行て見たいと常々有仰るゆゑ、お願ひ申して、彼處からお迎まで出していたゞいた他の深切を無にして、然りとは義理を知らぬ我儘な。日を繰りて見れば、御前樣と日光へ行かれしは、此方からお迎が行きし其日の翌日、朝夕お醫者が見舞はるゝほどの若樣の御病氣が、唯一夜の中にそのやうに快うならるゝものぞ。若又快うなられて、日光までも出らるゝものなら、何爲興津へはお出なされぬぞ。御前樣も神戸からのお歸來には寄ると仰せられしからは、興津へお出の思召はありけむものを、思ひ懸けぬ日光とは、えゝ聞えた、私への見てくれか。奥樣への面當か。田舍では義理といふこと知らでも濟むか、とお麻への見せつけに口惜がれば、そのやうなる事は言はぬもの。御前が伴れて行くと仰せられしや知れざるに、と言ひも果てぬに紅梅は面を赤めて、設ひ御前から有仰らうとも、興津から態々と呼ひに上げたお話を申上げたらば、御前樣とて否は仰せられまじきに、日光とはお艶樣から言出した

…………もう言やるな。何處へ行かうと銘々の好々、可厭なものを無理に興津に來てもらうて、後で彼此愚痴言はれうより、好いた處へお供して喜ばるれば、伴れて行きたる効のあると謂うもの。お艶はお艶、其方は其方、何せうとも構はぬが可いと、語和に、心に稜も立ぬやうには見ゆれど、今度は藥の利いたやうの加減と、紅梅は肚裏に雀躍して、手始めの此峠一つ越してから、後は車の坂落し、手を着けずとも思ふ坪に落ちてゆくは知れた事。これからは又精々お麻の氣に障る種をこしらへて、絶えず突撞かば、其内には堪忍袋も孔あきて破るべし。爲すましたりと思ふを色にも表はさで、お言はお道理なれどそれては濟まぬ筈の人情、と仍心解けざらむ如く、お麻の分までも引承けて、獨りくど／＼呟きけり。

お艶は留守に紅梅の訪ね來しと聞くより、互に積る話ある身の會ひたさに、歸りし次日深川へ訪ね返せば、お麻の前に出づる紅梅とは宛然別人

の應待。案の定興津から迎を出されしは十分苛まむ奥方の肚なりしを、お心着け申して置いたばかりに、お出の無かりしは何より重疊。お房お縫などゝいふ御側去らずの婢たちに、何やら言含めて手筈までせられし樣子に、餘所ながら可恐く、眞に危いことでござりました、と根據も無い事を恩に被せて、御前と日光御見物の事も、奥方は夢にも御存じ無ければ、いよ〳〵貴方のお仕合。かういふ事は御前の奥方へ一々お話ある例無ければ、知るゝ氣遣はござりませぬ、と散々瞞して後は、海と山との土産話を取易へて、睦しう笑ひ興じ、なほ末は皆仇となる深切を盡して、お艶を當座に歡ばせ、擧句はお麻の肚黑きことを虛說して聞かせけるを、お艶は一々信にして、末を思へば身の措所あるまじく怖れて、何分にも紅梅を頼に思ふ危さは、火を風下に避くるにも似たらむかし。設ひ此身を苛まむとのお意なりとも、表面は御深切に興津からお人を下されし事なれば、一寸なりともお禮に上らでは濟むまじけれど、色々樣

子をも承はれば、行きたうも無けれど、思ひ切りて、近い内に一日御本家へ伺はねばならぬ、此樣な可恐い事はござりませぬ。御迷惑でも其の日には貴方も御一處にお出なされて下さりまし。せめて貴方お一人でも側にゐて下さらば、それぞ私には百人の味方、どれほど氣強いことか知れませぬ。賴みますると思入りたる氣色に、十五六の少女でも、是ほどに意氣地無きは鮮きに、二十四五の曉まで、女一人で世帶張つてゐたといふ人にも似ず、然りとは世間慣れぬ根性、米屋の言譯は何の口で爲た事やら、と紅梅は心に可笑く、御迷惑の、賴むのと、これしきの事に他人がましく何を有仰るやら、御一處に上るはいと易ければ、何日なりとも御都合の好い日を有仰りまし。然れども、奥方が例の御了簡ならば、何として私をお側に置る丶ものぞ、乾度何とか言はれて、先へ私を還さる丶やうに爲たまふべし。

跡にて貴方の御難儀とは知りながら、還さる丶ものを剛情に還らずにも

居難ければ、それから後はお一人にて何と遊ばす御心ぞや。よしや責殺されむほど苛まれても、逭るゝ路はあるまじく、其憂目を見らるゝが可い厭さに、遠き處からわざ〳〵人まで寄來されて呼ばれしをも、陳謝言うて逃げられしに、呼ばれもせぬに此方から出懸けて行かれうとは、如何なる御了簡か、私にはちと解りかねました。義理の、濟まぬのとは今有仰ることではござりませぬ。今日になりて御本家へ御挨拶にお出なさるゝほどならば、興津へお出のことを何としてお止め申しませう。毛筋ほども罪無き貴方を、仂なき嫉妬から讐のやうに疾まるゝ、那樣方に要らぬ義理立、打遣つて措いたが可うござります。強ひて張合ふも由なき事なれば、此方からは手出しを爲ず、一向取合はぬが何より。繼母が子を憎むも、善くさるれば善くさるゝにて、其が氣に障ると同じやうに、今は貴方が何の樣に盡さるゝとも、效無きのみか、皆身の仇となるべきに、左右は遠避きて忘られむやうにしたまふに越したる事はあらじ。御挨拶

になりとも、奥方に會ひになどゝは滅相な。義理も折にこそ依れ、と紅梅は顏色變へて仕むれば、お艶も遽に可恐うなりて、固より行くを好むにはあらず、奥方の興津へ招れしも、底巧ありてのことなれば、其に何の禮も挨拶も要ることではなけれど、顏一つ出さぬは、此上憎惡の種ともならむと、其が氣遣はしさに何も覺悟して行かむとは思ひしが、言はれて見れば、なるほどゝ思ひ止りけるが、又考へ直して、否々、先方は然した了簡なりとも、氣候涼しく、眺望も好き處なれば、暑凌ぎに來て見よ、と言ひ來されし書狀に對爲ても、知らぬ顏では濟されぬ譯なれば、いかに責め苛まれうとも、死ぬるほどの事はあるまじければ、一寸なりとも。行かるゝとか。お身の爲を思へばこそ、惡い事は言はぬものを、聞入れては下さりませぬか、と紅梅の怫然と爲たるに驚き、何の〳〵、お言を反古にするではなけれど、どうも其では私の氣が濟みませぬゆゑと、義理は兩箇に心一つを定めかねたるお艶の樣子を、紅梅は見て取り

て、此通り心弱き女なれば、強くだに言はゞ何れへなりとも靡るべしと、辭巧みに今まで竭せしことを陳述たて、其を枷に納得させ、お艶自身に行くは罷めに定て、餘之助の全快に引續きて氣分の惡き由を言立に、不取敢書状にて挨拶することになりぬ。

お艶は心進まざりしが、されぱとて顔出すも愁きに、紅梅には逭れむやう無く促付かれて、我筆の書きける書面ながら。

(十九) 御不在

口光くだりまで遊山に出掛けしほど達者にてありながら。氣分惡しとは果報の罰に中りたるか。つい鼻の前に居ながら顏出しもせず、手紙の挨拶とは、何處まで增長る氣か、身の分知らぬ女め、とお麻は最早堪忍えかねて、今度ばかりは腹立つるを、紅梅は奚ぞと、今までは控へて言はざりし讒訴の惣まくり、然うおつしやれば、實はかういふ事もございました、と陳べ立つる當意の虛僞も信しやかに、思ふさま煽り立つれば、油浸にせる紙の火移り好く、聞けば聞くほど腹の立つことばかり。今に見よと、肉繡の蜘蛛も炙の下に蠢くべきお麻の氣色なりき。此樣子にては近き内に事起りて、お麻は噪ぐ、お艷は哭く、餘五郎は狼狽つく、轟は愕く、三方四方の亂痴戲を高見で見物して、獨り面白き目を見ることぞと、紅梅は樂みて待てども／＼、其後お麻は絶えてお艷の噂もせず、

どんと思切りたる事するらしき様子も無く、此間あれほど憤つておきながら、消炭のやうな他愛なさ。何日何と爲うとの了簡か、烈しい氣の女とばかり思うてゐたに、此齒痒さはと呆れて了ひぬ。

お艶は書面にて挨拶せしことの不躾なりしを悔めど、今更及ばざるほど念に繋りて、然ぞや奥方のお腹立。何とか謝罪せむと思へど、頼にせる紅梅の、本家へは行かぬが身の爲と言うてくれるものを、推して行かむは心ならず。然りとて此儘放棄にしては措かれぬ氣に、いとゞ胸を痛めけるが、書狀を出せしは當座の間に合せ、いつまで氣分惡ければとて通るべくもあらず、とても一度は挨拶に行かねばならぬものを、一日でも早く行くが萬分が一のお詫と、やう／＼心を定めて、一應紅梅に此旨を語れば、又何の彼のと仕立するを、お艶は左右聞かずして、其事の絶えず心に懸る由を話して、氣の休まるやうに是非一度はと思ひ入りたる氣色に、紅梅も所爲無さに得心すれば、御一處にお伴れなされてと、是も

行懸りで否がいへず。私からお宅へお寄り申しませうと、其日の土産物の相談まで爲て還しければ、お艶は喜び勇みて、約束の日も今朝となりて、今や時刻といふ頃、深川より人は來たれど、紅梅にはあらで老漢の長澤、文も持たず口上にて、今日の明方御隱居樣御急病の御報知にて、お里方へお越ありけるが、急にはお歸來のほども覺束なければ、失禮ながらお約束の事はと、思懸けぬ故障にお艶は力を落し、今日に限りたることにはあらねど、大病の介抱せらるゝ人の手の虛くを待れもせねば、已む無く一人して行くに定めけるが、遊山に出づるに爲ても、契りし友を失へるは心快からぬものなるを、お艶は杖と頼みし紅梅に外されて、是非行く氣ながら進みかねて、被かへたる衣服のまゝ座敷の眞中に端然と坐り、空く烟草燻して、何考ふるともなく遲ふ間に、はや一時過ぎて十時の鳴るに心着き、卒に立上りて乳母を呼べば、待草臥れて餘之助を抱きて何處へ行きけむ見えざるを、仲働が探出して來て、お外出といへ

ば、お外出かえと不思議さうなる顔、二時間前に點けし口紅は剝げて、用意惡き小鬢の亂髮を、玄關に立ちながら搔いてもらひ、待ちし時間の半分もかゝらで、直に車は本家の門に着きぬ。

お艶は門構を見るから心怯れて、どのやうな言いはるゝやら、何と詫ぶて可からうやら、木履も重く十間の敷石傳ひ、玄關にかゝりて案内を乞へば、いつもの用人出でゝ、今日は奥方は御不在にござりまするが。

此期に迨びては會はで還るも本意無く、直にお歸來とならばお待ち申してと言入るれば、用人氣毒さうに、お歸來のほどは知れませねば、と玄關に幅して通さず。爲む方無さに口上遺して、お艶は悄々立還りけり。

紅梅の母親大病とあるに、相識にはあらぬ人なれど、見舞ふは紅梅への誼、と隱居所の番地を訊ねむとて、次日深川を訪へば、留守居は下女一人にて何も知れず。此儘歸るも口惜ければ、微覺えに聞きしを目的に其町へ尋ね行きて、知れず仕舞にて亦悄々と還りぬ。

一日隔きて再び本家へ行けば、今日も朝からお他出にて、お歸來のほどは知れませぬと、板で摺りたるやうの口上。ちと胡亂には念へど、然る顏もせず、二三日の中にまた上りますれば、奥樣へ宜しうお取次を願ひまするとて還りけるが、二日も留守のことの可訝く、大方は奥方の御不興強く、それゆゑ會ひたまはぬかと思ふほど心細き夕餘五郎の來にければ、其とはなしに樣子を聞けば、一昨日も今日もお麻の不在といふは虛らしきに、いとゞ苦勞を增して、我胸一つに持餘し、忍ぶれど色に出でたるを餘五郎に尤められ、込入りたる事は故と語らず、只我身の不調法を陳べて、お麻への謝罪を囑めば、それしきの事に心配すな。我が好き樣に言うておけば、何時なりと遊びに行け、と口には言へど例の無貪着、請合ふことの七分はお流れになる、男の氣は尾を結ばぬ絲も同じく、また放棄にされむかと。乾度明日奥樣へ有仰つて下さりましと言へば、微醉の機嫌にて、今し方言うておいたから、安心なものだなどゝ洒落ばか

り言うて取合はず。念を推して幾度も囑めば、承知々々。氣の無い顏して鬱いでゐるゆゑ、どれほどの心配があるかとおもへば其だけの事か、はて氣の狹い、奥方が如何に腹立てたりとて、鬼にもあらねば取つて喫ひもせまい。我が附いてゐるからは、泥濘を蒸滊船で渡る氣で丈夫に思へ、と髯を撫で〳〵高笑す。お艶はそれなりに默りて、獨り悒々物を思ひけるが、我手一つにて事の始末の着くべくもあらず、頼むは左も右も御前の外に人はあらじ、と明る朝になりて又此事を言出せば、餘五郎も其心根を不便に思ひ、酒氣無ければ眞面目に請合うて還りぬ。

お艶は其を頼に、二日經ちて後、今日こそは會ふ氣で行けば、亦お留守と、有繫に用人も極り惡き顏色。一度ならず二度ならず、三度までも足を運び、御前の御言さへ懸りけむものを、仍ほお心の解けぬとあれば、此の上に爲むやう無し、とお艶も怫然とせしが、噫人の妾などすればこそ、此樣な口惜き目にも遇へ。誰を恨むべきにもあらず、皆自ら招きし

事と勘辨して、此子あるゆゑの奥方の憎惡と聞けば、どのやうに御機嫌取るとも其効はあるまじきを、何と思ひ違へてか、よしなき事に氣を揉みける、我ながら鈍ましかりき。度々上りまして然ぞかし御迷惑の事、と用人にも淑かに會釋して立出でぬ。いつでも留守に乳母は呆れて、御本家へ行くも可けれど、御玄關の立往生は恐れるよと、歸りて仲働に語りけるは、道理せめて可笑かりけり。

其後紅梅より絶えて音信のあらざるは、病人の容體難しく、夜をも睡らぬ看病の、身一つにては足らぬ忙しさに取り紛れての事か。身も覺えある、二人無き親を喪す思はと、お艶は棄ておかれず、また深川を訪ねて、今日は長澤の居るを幸ひ隱居所を問はむとせしに、旦那樣は御內に、と思ひ懸けぬ言に不審ながら奥へ通れば、更に羸れたる氣色も見えず、髮も結立に薄化粧して、美しき例の紅梅が是から午睡のところ。一年ばかりもお目に懸らざりしが、お變りもなくてなどゝ、餘り苦勞の無さ過

ぎたる挨拶に、お艶は張合拔して、どうなされました、と段々樣子を聞けば、病人も今は恢復したる模樣なれば、二三日休息に昨夜晩く歸りて明日はお訪ね申さうと思うて居りましたに。

これ皆頭から虛僞にて、母親病氣にはあらず、お艶と伴れ立ちて本家へ行きては、ちと面倒なる事あるゆゑ、餘所に虛病を拵へて、迯げて其實は本家に匿れ、お艶の訪ね來て門前拂になりし始終をも善く識れり。

然れども今始めて聞いた貌して、一々吃驚して、それぞ奧方の留守つかはれしに疑無き。かねて然る事もあるべしと知れば、あれほどお止め申せしを、露ばかりも用ゐたまはず、わざ／＼辱められにお出なされしも同じ事。一度憑うと思込んでは、可恐く執念深き奧方なれば、御前のお聲が懸らうとて、それで我を折る方にはあらず。之に懲りて此後は必ず必ずお構ひあそばしますな。三度まで玄關から逐還されしとか、聞いても腹の立つ。私ならば悄々と

唯歸りはせざりしものを。乞兒ではあるまいし、玄關から逐還すとは、えゝ貴方はそれで口惜とも無念とも思したまはぬか。おとなしう爲てゐらるゝにも程のあつたもの、御前へまで申上げたが可うござります。餘りも蔑んだ待遇が氣に入らぬ。惣體奥方といふ人は、目上を笠に被て爲たいまゝの無理我儘、其身の外のものは皆犬か猫かのやうに思うて、增長したる爲方は是々と、自分も悔しき目に遭ひしことを數へ立てゝ、それも皆虚なり。

性善きお艶も有繫にお麻の爲方を快からず、これまでにさへ可怨き事はありけるを、三度の居留守以來無念さの稍胸に徹へたるを、紅梅が散々にお麻の非を擧げ、我には少しも罪無き身の可哀を說かるゝにぞ、今までは曾て聞かざりし、奥樣も餘りなお方などゝいへる言の幾句か、今日に限りてお艶の口より出でけり。

佞辯利口は甘きこと蜜のごとく、明主も刑部典膳に惑はさるゝ例、賢く

ても女ぞかし。紅梅が顔見るたびの讒言を、お麻は始めのほどは一々心にも留めざりしが、お艶との間疎くなりて、悪き事を聞くのみにて、善き事を睹ることなければ、氣性やさしき女との初念は次第に薄ぎて、中頃は可愛うなくなり、末は遂に憎うなりて、此分ではお艶の片附くも長いことにはあらじ、と紅梅は獨り頸を縮めて懽ぶなりけり。

（二十）つれなき人や

秋過ぎ冬となりて、人は節季師走と、明日にも地球の破裂せむやうに騒ぐ中を、葛城夫婦は熱海に冬籠して、やう〳〵明る年の一月末に歸京せし當座、餘五郎はお艶を訪ねしまゝにて、二週間餘も姿を見せず。若樣の出來ぬ前までは、一月に唯一度のお越の事もありけるが、お子の可愛さに、此頃では一週間に一度は缺されぬ、其の心慣に待るゝを、何とした事やら、案じられて紅梅に訊ぬれば、私へも弗とお出の無ければ、御同樣に案じ切つてをりまする。直に樣子を探りまして、知れ次第お話を致しましよ。どうもお浮氣筋ではあるまいか、多分は其と鑑定いたしました、と當推慮の噂のみにて別れけるが、二三日經ちて、探りあてたりとて紅梅はわざ〳〵來りて、鑑定に違はず、新橋での大浮れ、新聞にまで出たる始末と聞けば、又お才樣の二代目が出來やうも知れませぬ。追

迫お年も取らるゝに、浮れ過ぎはお身の毒でも、こればかりは御意見がならず、と狐色に燒く。

お艶は妬しき顔もせず、餘之助の愛らしさに慰められて、三月にもなれど更に音信はあらざりけり。いかに餘所に面白き處ありとて、遊ばるゝに念の入り過ぎた、此のお子の初の誕生日をも忘れて、今日までも便したまはぬは、難面き人や。我身は左も右も、血を分けたる餘之助樣を娩しとは思ひたまはぬか。會には顔見たう思はるゝこともあるべきに、ようも辛抱のなることぞ、と有繫に怨みながら逢ひには行かれず。書面など出さむも憚りありて、思ひ結るゝ折の友の欲しきに、紅梅は道を忘れたるやうに絶えて訪ひ來ぬは、如何にしけむと、此方より訪ぬれば、不思議にいつも留守にて、また母親の病氣の重りたるにや、氣遣はれて訊ぬるに、然にもあらざる由。

何事も打明けて語合ふ中に、彼人の出先も大方知らぬことは無きに、怎

く頻繁何處へは出らるゝぞ、と疑念は霽れず。折好くも會へる日、餘五郎の近頃の樣子を問へば、其後は知らねど、相變らず新橋と、もう穿鑿も爲飽倦みて、構はず放つて置きまする。此方で何のやうに氣を揉みましても、降るだけ降らねば歇まぬ雨、時節を待つに覺悟して、聞いて下さんせ、此頃は慰みがてら、和歌の稽古を始めまして、出次手に煎茶をも習ひまする。そんなことに忙しうて、存じながら酷い御無沙汰をいたしました。必ず惡う思うて下さりますな、と事情を聞けば疑ふところも無く、其日はゆる／＼物語して、別れて後のお艶の寂しさ、仍餘五郎は見えず、紅梅は訪ひ來ず、庭に花咲きて麗かなる日も、心は秋の暮に似て、譯も無く物思はるゝ。

今日は朝から鳥影の映すこと繁く、御前の御越ありでも好頃、と儚き事に賴の繫けらるゝも、心弱き折ぞかし。玄關に客來の氣勢は、御前かと嬉しく立出づる居間の紙門を外からも開けて婢が、轟樣の御新造樣のお

出と取次ぐ。鳥影もさせし筈、珍しきお客、と座敷に出でゝ待請くれば、轟の内儀淑かに入來りて、挨拶一通り了れば、早速ながらと膝を進ませ今日上りましたは外の事でもござりませぬが、貴方は御前樣の御病氣をば御存じござりませぬか、と藪から棒にお艶は吃驚。御前の御病氣とはと、はや目色を變へて逼寄れば、なるほど御存じの無いさうな。どうなされた事でござりまする、とお艶の顏を熟と眺めて、呆れたる樣子。卒然に意の解らぬ言いふ內儀の顏を、お艶はそろ〳〵視て、何うした事でござりまする、と夢見る心地してゐたり。

內儀は言を改めて、先月の半頃から御前樣の御氣分優れず、十日ばかりは常に變れる御容體にてもあらざりければ、御自分にも假初の事と、お心にも懸けさせられず、他からも然してはお氣遣ひ申上げざりしに、今月になりて暴に御樣子惡く、此頃は御療養の最中とて、紅梅樣も御看病に上られ、お奧は騷動と云ふに、いつか日にも貴方の見えられぬは何云

ふ事、とお小間使に上げたる姪の信から私への手紙。餘人ならば知らぬこと、貴方が御存じ無いことはあるまじきにとは想ひながら、左も右もお話し申上げうとて飛んで參りましたが、さては少しも御存じはございませぬか、と息をも繼がず語るを聞きて、お艶は呆るゝのみなり。

私の口から、少しも知らぬことゝは言はれぬ理ながら、然ういふ事とは思ひも懸けず、今が今まで一月ばかりもお音信あらぬは、いかゞ遊ばされたことゝ案じ拔いてをりましたに、お音信も無い理、御大病とか、而して何云ふ御病氣でございまする。胃病とやら承はりました、胃病といへば輕い病症のやうに衆は思へど、其中にも種々類ありて、隨分命を取るもあり、又命を取らぬまでも、其から餘病を呼ぶとの事なれば、一口に胃病というて安心は出來ぬとの事。幸ひに御前樣のは然まで難しき症にてはあらぬ由なれば、憂の中の喜とはいふものゝ、油斷はなりませぬ。

それにしても不思議なは、御本家から此方へ其の御報知はござりませなんだか。然も無くては貴方の御存じ無い理はあるまじきに、と内儀は首を拈るも、樣子知らねば有理なり。其の御不審はお道理にて、之には段段深き仔細あれば、其内委しうお話申して、種々御囑み申したき事あれど、心急けば今日は故と申しませぬ。御深切にも好うお知せ下さりました、お蔭樣にて大きに面皮を缺くところを、これ程で濟みましたは私の仕合。一刻も猶豫のならぬ大事の時なれば、是から直樣お見舞にお出で遊しまし。私は此にてお暇申しまする。紅梅樣に負けぬやう、しっかり御看病遊ばしまし、と轟の内儀の歸るや否や、お艷は衣更に立たむとするを、始終を立聽せし乳母が、御本家へお出でござりまするか、那の用人めが又お留守などゝ申したなら、と言ふを半聞きて、今日は御前樣の御病氣見舞、誰がお留守といふことぞと、口には言へど、心に懸る奥方の意地惡。今日ばかりは無理にも奥へ通りて、お見舞申さでは歸らぬ覺

悟。車は未だか、何してゐる、と常には聞かぬ腹立聲ぞかし。

（廿一）高嶺の松

門を入來るお艶の姿を見るより、例の用人迷惑さゝうに其へ出て、恭しく一禮すれば、お艶は衣紋正しく、殿樣の御病氣見舞に伺ひました、とお取次ぎ下さりましと言入るれば、はつと畏り、暫時此にてお控へあそばされまして、と應接室に案内して用人は出でゝ行きぬ。

今日ばかりは玄關拂にも遭はで、首尾好くお奥へ通さるゝこと、とお艶は心に懽びて、待つに程無く入來るは、四十餘の仔細らしき用人、志村とかいふ人とお艶も記憶あり。皺嗄れ聲の口上馴れたる調子にて、お艶樣でござりましたか。お見舞の趣申上げましたれば、殿樣にも御滿足に思召されまして、御會になるべきなれど、何人に限らず御面會の儀は、當分醫者より禁ぜられたる次第なれば、今日はこれにてお引取あるやうとの御意にござりまする。尤も御病氣は然せる事にはあらで、大概今日

中には御全快の御模様なれば御安心遊ばしまし、と述ぶれば直に椅子を離れて、折角お越のところをお氣毒樣でございました、と早立せ支度すれど、お艶は悠然として、これまでお見舞に出まして、殿樣の御容體を伺ひませぬも本意無ければ、お次の間よりなりとも蔭ながらお目通りいたしたく、御病氣のお障になるやうお話など申上ぐるにあらねば、推して此儀をお願申しまする、と聞きて、御尤なる仰せ、然やう申上げて御意を伺ひまする、と志村は室を出でしが、良ありて返り來り、殿樣の御允あらねば、是非もございませぬ。今日のところは此儘お歸り遊ばしましてと言へど、お艶は仍坐を立たず、又何やら言はむとして室の戸の開くに口を噤めば、玄關番入來りて、篠田樣お出にて急に御面會願ひたき由。御玄關にお待たせ申しましたればと聞きて、甚だ失禮ではございまするが、霎時と言捨てゝ、志村は立去りけり。

是皆奥方の所業に外ならず。人に會ふを禁められたりとて、其は他人の

事。現在紅梅樣とても奥に居らるゝは知れてあるに、此身とて御看病をせうものを、寄着けられぬは例の意地惡。又陰ながらお目通りせむといふを御允の無きとは、底の見えたる虚僞。御前樣の然うしたお方ならぬことは、お側に仕ふる身の善く識れり。奥方の此樣なる子供瞞しを言はるゝは、邪魔立するを覺れがしの御意か。大家の奥方ともあるべき御身に、然りとては相應しからぬ大人氣無き爲され方、日頃男勝りの噂あるお麻樣とは誰の事。上る度每お艶を撞返して、どれほどの御慰になることやらむ。今日は此儘にては歸らじと覺悟して、自から玄關より用人を伴來り、折角上りたれどもお目通り愜はぬとの事なれば、もはやお暇いたしまする。奥にお在の紅梅樣に、ちとお話申したき事あれば、此處まで一寸お顏をお貸し下さるやう、度々御苦勞ながら、然やう有仰つて下さりましとあるを、委細承知して、奥へは直に行かれぬ格の玄關番、之を又取次役の婢ありて、それから腰元に傳ふれば、腰元から本人へ取次

ぎぬ。

一時間ほど前に歸りしとか、何とか好きやうに言うてくれと、紅梅は惱慍がりて取合はず。右の趣を答ふれば、然やうでござりましたかと、お艶は無理に笑を含めり。

最早これにて御用濟のこと、と用人の退らむとするを、お艶はなほ志村に話ありとて歸るべき氣色なければ、客來と言立てゝ迯げたる志村は喚返されて、殿樣の御看病申上げたき悃願、お聞屆け下さるやう奧方へお執成を、賴まれて其はと迷惑せしが、御允の出るか出ぬかはお請合いたしかぬれど、お取次は申上ぐべしとて奧へ行きしが、やがて返來て、お奧には人手多ければ、折角なれどお謝絶申上げまする、乳兒を持たるゝ御身なれば、御家內にてもお手の入るべきに、其の御心配御無用になさるべく、御辭のみにて十分に思召さるゝとの御意なれば、今は何をも思ひ遺されず、お還り遊ばされよと言ふなり。

如何に唯は歸らぬ覺悟にても、此上に爲むやう無く、男ならば隨分お奥へ踏込み、御前の御枕頭へも行くべきなれど、女の身の悲しさは、中間に邪魔するものありて、何事も御前のお耳へは入れず、氣儘に取計ふを知りながら、手出しもならでおめ〳〵還さるゝか、と胸の中は沸くが如く、用人から玄關番までが可厭な顏して、早く歸れがしの待遇するに、勃々となるを熟と怺へて、長居すれば爲るほど腹の立たるゝに、何時まで此處に待てばとて、敵の中なる女一人、恥搔されて笑はれものになるばかり、今日は歸りて、又好き分別もあらむ、と志村にも玄關番にも無念ながら厚く禮を述べて、門を出でたるは長き春の日も暮合の空、應接室に在りし間を數ふれば五時間に餘れり。

夕飯頃の時刻惡けれど、此儘には歸られぬ口惜さに、今日の次第を轟夫婦に語り、前からの成行をも委う話して、不便の身を慨き、向後の力と頼まばや、と其の家を訪るれば、內儀は聲を聞くより駈出でゝ、今がお

見舞のお歸途か。お首尾は如何、唯今も良人とお噂いたしてお案じ申してをりました。首尾は、樣子はと夫婦に問はれて、お艶は面目無さに差俯けば、ほろりと墮つる涙を內儀は見尤め、お艶樣どう遊ばしました。事情をお聞かせ下されと轟も逼寄りて、尋常ならぬお艶の氣色に、夫婦の不審は霽れざりけり。

お艶はうたゝ涙を催して、面を掩ふ手帕の縫は薄に露を置きて、泣かるゝは何故ぞや、憂きも悲しきも夫婦のものに語りたまへ、及ばずながらお力ともなるべし、と可恃しき轟の辭に縋り、悔しい目に遭ひました、と身を顫はして忍泣するを、なほ慰めて訊ぬれば、今日の始末を遺無く語れども、夫婦は驚くのみにて信とせず、それより三度の居留守の事、與津から迎の事までも語れば、いよ〳〵信とせず。

那の奧樣に限りては、其の樣に御了簡狹きお方にあらず、何その事の行違からと、段々樣子を聞くに、同胞も同じやうにせる紅梅の擧動に、近

頭合點のゆかぬ廉を見出したりと言ふを、それぞ聞事と糺せば、御前の御病氣は疾より知れたる筈なるに、久しくお便の無かりしを、新橋にて遊ばるゝ故と我を欺き、己のみ日毎本家へ行きしに疑無けれど、何と思うて然迄は此身の仇となることを巧みけるやら。血をこそ分けね、紅梅とは他人ならぬ間なれば、戯にも爲べしとは想はれぬ事を、是が又合點のゆかぬ上の合點のゆかぬこと、とお艶の言ふことをこそ、轟夫婦は何とも合點ゆかざるなりけれ。

お艶は今が身の大事と思ふにぞ、これまで有りし事實を一々打明せば、それで何も彼も了然と讀めた、と夫婦は思はず顔を見合せ、憎いは紅梅め、おのれ其分にして措くべきや。我に了簡あれば萬事委せたまへ、と獨り引承けて轟が悍立てば、内儀も腹に据ゑかねて、然りとはお艶樣もお性が善過ぎる。其の樣な底の底まで透いて見えた淺い姦計に懸りて、今までもお目が覺めず、血をこそ分けね同胞とは、何處まで嘯さるゝお

意か知らねど、紅梅めは獅子身中の蟲とやらにて、貴方のお身は七分通りまではや喰れて了うたにもお心は着かざるか、よしなき人に親まれしばかりにて、情無きお身上になりたまひたるが、御不便や、口惜や。あの奥樣が假初にも、隣姫がましき事などなさるゝ方にはあらざるを、皆紅梅めが仲口から、罪無き貴方を此樣に疎まるゝとは、愚痴ながら、利發なるお方にも似合しからず。それにつけても紅梅の可憎は、思出しても腹が立つ〳〵。 お艶樣、貴方も貴方でござります、いかにお性を善くせらるればとて、長の月日其の樣なる惡婆をば、毛筋ほども疑はれず、思のまゝに計られて、今頃やう〳〵お氣が着いても、殘念なは今更手遲れ、と遠慮を忘れて詰り掛れば、轟は睨めつけて、控へてをらぬか、失禮なと窘められ、內儀へはっと心着きて、遽に悄げ返る手持無沙汰を紛らしかねて、煙草ふか〳〵。

お艶は段々と說れて、漸く巧の穽に懸りけりと覺れば、紅梅の憎さは謂

ふに及ばねど、實をいへば、我が身の外に怨むべき人はあらず。身の不束が事の起因。今から其時の事を懐へば、一つとして分別ある仕打はあらで、皆紅梅が言ふなりに、盲人の我が杖を賴まずして、路傍の狂童に手引されて、街渠の中へ陷められたるも同じやうの愚さ。他には聽せられぬ身の恥を、心着けられし面目無さと、有繋に計られし悔しさとに思ひ亂れて、涙も出でざれば物をも言はず、折々俯きては太息も力無く、此の様子を見るに夫婦はいとゞ不便を催し、實意を籠めて百方慰めければ、お艶は稍愁の眉を開きて、今は世に便といふは御夫婦ばかり、何分にもお二方の御骨折を。賴まれては退かぬ江戸氣性、此の轟が方寸に在ることとなれば、必ずお氣遣ひあそばされな、二三日中に吉左右お聞かせ申すべし。今に見よ、紅梅め、乞食にしてくれるわと力めば、眞にそれで末の吉ことはござりませぬ。やがて奥方のお疑だに霽れなば、餘之助様といふ後楯ある、貴方のお身は末長く御安泰。これが地を固むる雨

かも知れませぬ。　おゝ目出たいな。

（廿二）髄様癌

夜深まで語りてお艶の歸りし迹に、夫婦は枕に就けども、其人の身の案じられて睡られぬまゝに、此の無實の罪を雪ぎて、紅梅の化の皮を引剝かむ手段を談合し、明れば轟は常の如く第二商社に出勤せるに、餘五郎の病勢此二日ばかりに募りて、昨夜は咯血劇しく、いよ／＼危篤のやうに噂するものあり。胃癌の中にも死を來すことの速きは髄様癌とて、餘五郎の病めるは此の症、と可賴しからぬ事の耳に入るより、轟は膽を冷して、萬一不慮の事などあらむには、お艶の身はいとゞ始末着き難かるべし。然れども今は後事をいふべきにあらず、左右は御存生中に半時なりとも御看病申上げさせ、お遺恨の無からむやうお名殘を惜ませ申さたし、と尻も据らず三時の退社を晩しと待ちて、かねて此の人に縋らばやと賴みたる第三商社の支配人なる藤崎といふは、今こそ高下の身分差へ

ど、竹馬の友なりしを縁にして、少しは筋違の無理も聞いてもらへば、今度の一件も此人の力を藉らむと、當込みて駈着けゝるに、今日聞きし噂に差はず、餘五郎の命旦夕に逼りて、昨日から本家へ行きて未だ還らずとの事に、がっかり力を落せしが、何處までも會はでは濟まぬ仕儀なればと、蹤を追ひて本家を訪ぬれば、今朝ほど御用ありて出られたるまゝ今に歸られずといふ。

咲お艶樣の御運の盡、我も頼まれ効無しと、足摺して口惜がりしが、まだ見放すべき時にあらねばと、弱る心を取直して、何時頃お歸りかと問へば、其から其へ廻らるゝ事なれば、其程は測難しとあるに是非無く、低徊門を出でゝふと思出し、引返して、殿樣の御容體はと聞けば、御快方にはあらねど、其後格別變らせらるゝ事も無ければとは、何より重疊なれど、商社にての噂と藤崎の家にて聞きし話とは、餘り相違過ぎて信しからず。取次のものなどは何言ふか知れたものにあらず、大方然う言

へと吩咐けられたる通を喋るなるべし。
藤崎樣の歸られなば、此者が火急の用事ありて、お訪ね申したとお傳へ下さるやうにと、名刺を渡して歸來れば、正午後からお艶は詰懸けて、樣子如何にと待ちに待ちたる處なるに、拙い話を聽せかねて、明日は吉左右あるやう、首尾好く運びを着けたればと、藤崎に會うて吞込せしやうに物語れば、お艶は歡ぶこと限り無く、手を合はさぬばかりに禮言はれて、轟は冷き汗搔きながら附元氣をして、もう御安心でござりまするなど〻、嬉しがらせて還せし後、改めて內儀に樣子を問はれ、遽に萎れ返りて不問の始末を白狀し、御前の殆しき噂を語れば、內儀は氣を揉みて、さあ〳〵一大事、さう安閑としてお在なさる處ではござりませぬ。今夜最一度藤崎樣をお訪ねなされて、是非ともお會ひなさらずば。ええ〻、其を他に習はうか、隣から火事が出やうとも行かずにはゐぬわ。餘計な世話燒かずとも、飯の支度を早くと憤れて、七時頃に又車を飛して藤

崎を訪れけり。

本家に近づけば、其の方角を指して走る馬車人力車の數夥しきに、若やと胸躁ぎ、我車の提燈の闇くなりて、今にも消えむとするさへ氣に繋けらるゝに、不圖見れば、何時の間にか、羽織の紐は片方乳を斷りたり。時に取りては可忌く、前表といふ事も無きにあらず。頓て本家の門に着けば、前後になりし車は大方我が停る處にて停るなり。問ふまでも無し、不幸の事と、足は踏心無く、ひよろ〳〵と玄關へ走込めば、客は式臺に群り、取次二人周章まはりて、急には受付けぬ混雜紛れ、應接室の前まで入込みて、我側を往來する用人等を一々引住めて取次を頼めど、いづれも血眼になりて耳の聞ゆるはあらず。日暮に御前の暴に息を引取られしことだけは確に聞きて、想ひ設けし事なれど今更愕然して、寤めながら夢をも見る心地なり。

やう〳〵正氣ありげなる人を見出して頼めば、承知して奥へ馳入りける

が、待てども〳〵本人は愚か、其人もいづれへか消えて再び姿を見せず。

躍起つ胸を鎮めかねつゝ、二時間も經ちて後、漸く藤崎を喚出して、手短にお艶の一條を語りも終らざるに、奥より人來りて、捥放すやうにして伴れゆきければ、轟は掌中の珠を失ひたらむ想して、其後二度まで呼べども出で來ず。時經つほど玄關は群集して、應接室には椅子盡き、五人の受附皆逆上去て、後には挨拶も四途亂になりぬる有樣。

奥の騷動は然ぞかしと想へば、藤崎の隙無きも道理とは識れど、此方も是非頼む事を頼までは、歸られぬ身と辛抱強く、奥へ行く人毎に取次を頼みて、十二時頃に又藤崎を喚出し、かゝる場合なれば冗き事は畧して、否でも應でも引承けて貰はねばならぬといふは、お艶樣をお枕頭までお通し申さむとなり。御迷惑でも爰は諾と呑込んで下さらずば、私の一分が棄たる。以來は如何なる事起りて、轟が首を縊らむまでも、構へて頼みの、願ひのと御迷惑は持込むまじければ、之を一生の頼まれ仕舞と諦

如何にも玄てと聞く轟は雀躍玄て、これから直に御本人を御同道申せば、今宵のやうに待されては、お艶樣が御迷惑なさるれば、お喚び申したら可成直に此までお出下さるやうにと、聢と請合せて深川へ飛行けば、お艶は約束通り午後から轟方に出向きて久しく待ちたりしが、餘り便の晩さに十時頃歸りて、其の沙汰聞かぬ間は夜明までも寐ぬ意。待れし効あり。これより直に御本家へと、事情も話さで轟の急立つるを、樣子はと訊ぬれば、それは後でも解ること丶、無性に支度を急がせられ、お艶は何が何やら解らねど、御前に會はるゝ事と心嬉しく、乳母を起して餘之助を抱かせ、轟の註文のまゝ車は綱引に後推つけて、空を飛して日本橋まで着きたる頃は午前二時なり。

（廿三）　可懐の面影

やう〳〵玄關の混雜鎮りて、燈火の光白く、取次の面睡げに、來客の全く絕えたるを折好しと、轟はお艶主從を應接室に案內して、藤崎を喚出せば、三晩續けの徹夜に憊れたる顏の色蒼く、眼血走りて、筋も骨も綿のごとく、躓きて僵れなば、處嫌はず其儘に正體無かるべき態にて出で來れり。

轟はお艶を紹介して、少時三鐵輪の內談あり。藤崎はお艶の身上の槪畧を知りて、聞けば成程氣毒なる事情に心動きて、一廉引承くる氣から深切なる辭を、お艶は今の身に之に勝る寶はあるまじう歡びぬ。

藤崎はお艶を奥へ案內せむとて起上りつゝ、返らぬ繰言なれど、御存生中に一目お會せ申たかりしに、口惜きことを爲たりと言ふに、扨は御前はとお艶の氣色變れば、其驚愕は御尤と轟は進寄りて、昨日御不幸あ

りしことを、知りつゝお褒み申せしは、お奥へ行かるゝお許の出ぬ前なれば、お話し申したりとて御心配を增すのみにて、何の効無き後の祭。却つてお力を落されて、如何なる事にも及ばむかと、御斟酌申せしが、今となりては面目も無き仕合。何もお身を案じての事なれば、お腹も立たうなれど御勘辨なされまして、左も右もお奥へお越ありて、殿樣のお顔をとばかり、後は得言はで目を連瞬く。お艶は卓子の上に打俯してありけるが、良ありて面を擧げ、何の〳〵、假令儚きお姿になりとも、お目見え愜ふやうになりたるは、皆貴方の御深切、お嬉しう思ひますればとて、腹立つなどゝは勿體無い、必ずお心に懸けては下さりまするな。唯遺憾は我身の等閑から係る御大病とも心着かず、お命ありける束の間を、お側に居て御看病はおろかなこと、一度のお見舞さへ申し上げざりし不念さ。御臨終の際までも、恩を知らぬ不實の女め、と殿樣の御立腹をおもへば愁し情無し。屑ならぬ艶などには、會はでお歿りあそばして

も、餘之助樣には定めて會ひたう思召されて、一度や二度は此の御子樣を呼べとの御意はありけむものを、大方例の人が邪魔して、お人も遣されず、憂に重ぬる歎の數々、此口惜さは轟樣、藤崎樣、乳母も推量してくれと、睡れる餘之助を抱緊めて、人目も愧ぢず哭出せば、居合す男女も理に責められて、何と慰めむ言も無く、打濕りてぞ居たりける。

過ぎにし事は今更歎きても復るべきにあらず、是も定る因緣と諦め給ひて、此世を名殘のお姿なりとも拜まれなば、せめてものお自寛にもなりなむかし。御存生中にお目見の愜はざりし御無念は然る事ながら、此度藤崎樣の御骨折り下さらずば、歎も悲も係る事にては止まざりけむを、御不足がましう慨ちたまふは、御志を無にせらるゝに當るべしと、轟は態と不興なる顏して勵ませば、藤崎は辭氣を和げて、假令殿樣御病中に一度のお見舞をもせられざりしとて、其には事情ありて、まこと不實からの等閑ならねば、人知らぬ處まで見通しの神となられたる殿樣は何を

か腹立ちたまふべき。不便のものと草葉の陰にて泪を流され、正道に稱へるお身の末を護らせたまふべし。
罪無きものを罪に陷して、不義の榮利を計るもの丶長く榮ゆる例あらず。積不善の身は忽ち天罰の報ありて、小氣味好き成の果を見むこと眼前に在り。何事も轟と藤崎とに委せ給へ、男二匹が肌脱ぎて、貴女上りの小女郎一人をと冷笑へば、轟はぞく／＼勇立ち、悔しいも悲しいも爰一時の御辛抱、お氣を丈夫にして、大手を振つて早々お奧へ、餘之助樣を眞先に乘込め、と遽に元氣附けば、お艶は仍消やらぬ歎の中にも稍心強く、折から一番鷄の鳴聲に、最早夜明と促されて、やう／＼應接室を立出で、藤崎の跡より力無げに餘之助を抱へて奧に入れば、燈明の影淸しく、正座に餘五郎の遺骸を祀りて、奧方麻子、娘末子、紅梅を始として腰元十餘人、髪は一樣に草束にして、二所に聚りて、泣くもあり、俯くもあり。重役二十三人枕に近く圓居して、忍び音に語ふ聲の高く響きぬ。

藤崎は麻子の前に進みて、小聲に何やら言ふを、麻子は聽きながら遥に控へたるお艶の方を見遣れば、慇懃に額付くを纔に目禮して、其後はまた見向かず。霎時物語ありて藤崎は座を立ち、お艶の身近く來りて、忍びやかに言ふやうは、此場に長居は無用なれど、殿樣に名殘の一見は枉げて允さむとの仰せなれば、今日の處は其にて辛抱して還りたまへ。此方も言ひたき事は數あれど、靈前なれば遠慮して、何事も胸に納めたり我等に委せられたる御身ならば左も右も此場はおとなしう我言に從はれよとあれば、何事も御意に背くまじければ、何分好樣にと、憎からぬ挨拶。ようぞ聞分けて下された。殿樣も然ぞやお待兼、早くお側へと言はるゝに悲しく、泣顏を衆に見られじと俯きつゝ、餘之助を搔抱きて寢臺に近づけば、藤崎は先づ進みて、遺骸の面を掩ふ白絹を取除けぬ。可懷の面影や、鬚髯のみは舊時の儘に、變り果てたまひたる……………これが殿樣かと、一日見るより堪へかねて、急來る涙を飲こみ飲こみ、東西

分かぬ餘之助にも、二人とは無き親御ぞや。稚心にも見覺えよと、謂はぬばかりに抱上げて死顏に差寄すれば、喜びて髯を攫まむとするを、扢窘むれば哭き立つるに乳房を啣ませ、涙に眩む目に遺骸を打眺めて、立ちかねたるを藤崎は目授に制すれば、お艶も亦目授して猶豫を賴む色なるに、心の中を思ひ遣れば、然こそと藤崎も憐に覺ゆれど、長居はいよ〳〵歎の種と、氣強く死顏に絹打懸けて、はや彼方へと言へば、お艶は岸破と打俯して泣沈むを、扶起して次間に控へたる轟と乳母とに引渡しぬ。此座に泣かぬものゝ二人なるべし。

(廿四) 雨後の月

お艶は二人に扶けられて、泣く〳〵玄關に出づれば、跡より藤崎追來りて、今日の首尾は本意無かるべきも、此混雜の最中なれば、遠慮ありて奥方へ冗うも言はざりしが、一先片附き次第重ねて公然に申上げむ所存なれば、今日は之にて還らるべしと言へば、轟は內心不滿にて、唯一目死顏に會せしのみは、賴效無き執成と思へど、身勝手ばかりも言はれず、是とても偏に藤崎の骨折ゆゑと、喜ばしげに禮を述ぶる側に、お艶は歔欷げて居たりけり。

夜も明けたれば、人出入繁くならぬ間を歸時。係る體を人目に露さむは殿樣の御恥辱、と轟は無理にお艶を連出して車に乘せ、同じ道なれば途中まで送りて我家に還りけるが、慰むるもの無く、獨り歎に沈ませむことを氣毒に念ひて、直に女房を遣しぬ。

お艶の歸りける跡に、入更りて國許の父親駈着け、事切れたる後を悔むこと限無し。これほどの身代にても命は買はれぬものならば、三十餘年が間他人のやうに別れ〳〵に暮さでも、在所の荒屋で孝行〳〵してもらうたが勝なりしを、と遺骸に執付きて放れず。家内の歎もそれ〴〵にて、誰か惜まぬは無けれども、いつか盡くべき名殘にあらず。明る日谷中天王寺に葬れり。會葬するもの一萬七千餘人、手向の花は三町餘を秋の野にして、見物路傍に山の如く、其式の盛なりしを想ふべし。

お艶は仍奥方の不興を蒙れば、公然には此送葬に立ち難きを悲しみ、我は衆の跡より御供申上げむも苦しからねど、餘之助樣を出入の輩の下などに置かむことは勿體なく、馬車に駕りて立派に會葬のなるべき身を、見物の群集に紛れて餘所ながら見送り、一先家に還りて、人去りし後私に天王寺に詣で、墓標の前に新なる悲の涙を濺ぎぬ。

此日より朝々墓參を懈らず、歸路には轟方に立寄りて彼の沙汰を待ちけ

るに、はや一月を過れども、藤崎より何等の便も無きは、商社の改革に遑無き身と知れど、お艶の心をも酌みて、轟は幾度か會ひに行けども掛違ひ、書狀を送れども返事は來ず、四月の末になりて、やう／＼藤崎より奥方の心解けて、明日はお艶に會はむとの事なれば同道せよとの文面に、轟夫婦は無上に喜びて、內儀は他へ行かねばならぬ用事を差措き、これからお艶樣へお知せ申しにと飛んで行けば、お艶は一目見るから、內儀の氣色に其と察して、藤崎樣からお便がござりましたかと問へば、彼の御方の御心配にて漸く奥樣の御機嫌直り、明日は會はうから午前にお伴れ申せとの事でござりまする。祈らずとても神や護らむとやらで、何と謂うても正直に勝つものはござりませぬ。貴方のお身のお疑が霽れますれば、紅梅めは尻尾を出して吼面かくは知れたこと、え丶、もう此樣な嬉しい事はござりませぬ。昨夜からの頭痛が脱然と癒つて、胸までが爽然と致しました。まあ／＼お喜び遊ばしまし、と聞くよりお艶は思は

す乘出して、其は本の事でござりまするか。何より證據は、と帶の間を探りて、藤崎の書狀を取出せば、お艶は嬉しく手にして、おや、お手紙は、と封筒ばかりなるに、暫しは吾も珍しう笑榮ゆるなりけり。

（大團圓）

紅梅の奸計漸く露れたれど、お麻は何も謂はず、涙金千圓にて暇を出しけるに、十日と經たぬ間に、雪村素六の馬車に同乘せるを見懸けしものあり。

●よもや其は那の女ではあるまい、
　女神の石像に魂入りて、
　　むかしの男の夢に通ふ。

久しく、染井に窮命せし女も放生會に遭ひけるが、仍無能にても可愛男に情立てゝ、菊住と世帶持ちて柳橋に待合を始めぬ。

◐川だちは川で果つるとやら、
　今挨拶に出たのがの、
　　葛城家の愛妾お才の方。

お艶は誰も然もあるべしと想設けし身となりて、餘之助成人の上は葛城の財産五分の一を讓受くべき約束を、今より證書にして之を餘五郎の形見と、大氣なる後家の措置。本家に引取られて主婦の妹分に遇はれ、每月の墓參には雨の日も車に乘らぬ志を、妾にせしは惜き女の鑑、と衆の噂するなりけり。

●然りとては有髮の尼のしをらしや。

戀の闇に折られし花も、

盗人の袂にかをる。

（二十五年十二月）

俠黒兒（少年文學第拾九編）

（一）

西印度ジャメイカ島に殖民せる、ジフヱリイ、エドウアヽドなる二名の英人ありけり。ジフヱリイは奴隷の黒人を見ること劣等動物の如く、牛馬に等しく驅役しつ、尙未だ彼等の全力を盡さゞるを責めぬ。此虐待の態を見るに、黒人は遂に其血を涸し、其骨を虀くにあらずむば、ジフヱリイは到底滿足せざらむとするに似たり。

ジフヱリイは其性かく酷薄なるにはあらざれども、支配人なるチユラントが、氷の如く冷かなる心と、鐵の如き堅き手とをもて、專ら彼等を然は待ふにぞありける。

然りながら、若ジフヱリイに露ばかりも情の心ありたらむには、爭かヂ

ニラントの非道を餘所に見るべき。唯彼が爲すまゝに放任せて知らず顔なるを、憎まぬものもなかりけり。

齊しく同郷の黒人に生れ、齊しく異域の奴隷に賣られながら、エドウアヽドが家に養はるゝ彼等を視よ。想ふに彼等は苦といふものを知らざるべし。憂とても悲とても知らざるべし。奚ぞ屈辱と怨惡とを知らむや、とジフエリイが奴隷は常に隣を羨みぬ。

エドウアヽドは天性至仁にして、不具なる子に親の慈愛の深きが如く、天賦の權を伸ぶるによし無くして、強者の食となりぬる、箇蒙昧暗愚の民を憐む志衆に超えたり。

然れば我家の奴隷を待ふこと、病めるを劬るに異らず。勞役の時間を減じて俸給を増し、罰を輕くし、賞を重くし、及ばむ限は規律を寛かにして、彼等を樂ませむことを勗めけり。

支配人のベイレイも主人に劣らぬ君子なりければ、此意を體して、些の

非道も無かりけるほどに、ジフエリイが奴隷の美みけるも理哉、エドウアヽドの園は黑人の嘗て夢想せざりし樂園なりけり。

一日の天早エドウアヽドは獨り果園を巡覽りて、垣根境に來れる頃は、太陽纔に海を出でゝ、樹下はまだ微晦く、地上のやう〳〵白きのみ。エドウアヽドは梢の露を仰ぎつゝ、風ならぬ微凉を喜びて佇む折から、ジフエリイの園の彼方に當りて、罵る聲泣入る聲の劇しく聞えければ、尋常ならじと、忍寄りて、木間隱れに闚へば、奴隷の小屋の外方に人の影ありて、但見れば、軒下に佇みて手を拱きつ首を俛れたるは、ジフエリイが奴隷の中に最も心賢く、兼て謹勉の噂ある黑人のシイザアなり。傍に怒れる面色鬼よりも可恐しげに、シイザアを睨めつけたるは、支配人のデユラントにて、そが前に跪きて、涙ながらに物言ふは、黑人の美しき乙女なり。

「こんな野郎を何もそんなに大騷ぎすることはねえぢやねえか。外に掯

替への好のが許多もあらあ。」
ジユラントは呵々と嗤ひぬ。乙女は胸に堰來る怒氣を忍びて、
「そんな事をおつしやらずと、今度の所はどうぞ御勘辨を。」
「ならねえよ。五月蠅い女だ。泣いたつて笑つたつて賣るものは賣るのだ。」
はや乙女は繼ぐべき言葉無く、ヂユラントは大方罵る種も竭して、茲に霎時聲の歛まる時、
「ヂユラント樣、どういふ事でございますか。」
垣の此方より聲を懸くれば、乙女はエドウアヽドの姿を見るより、衝と立ちて小屋の蔭に忍びぬ。
シイザアは首を傴れて、身動きだにも爲ざりけり。
ヂユラントは卒に笑顏を爲りて、垣の外なる客を迎へ、
「いや、是は、お隣の旦那樣でございますか。何、お耳へ入れますほどの事ではございません。」

「一體どういふ事で。」

「へえ、此奴が近頃ふて腐れまして、からもうどうも仕樣がございませんから、いつそ他へ賣つてしまはうと存じましてな、左樣申しますると、彼に居りますのは此の女房見たやうなものでございます。別れるのが悲いなんぞと申しまして、はゝはゝ、泣いて噪ぎまするので。」

「はあ、それではシイザアをお賣なさるのですか。シイザア、お前は賣られるのか。こんなに丹精して建てた小屋や、あんなに折角培養げた芭蕉を遺いて、可愛い女房まで打遣つて、お前は何處へ往かうといふのだ。デユラント樣、而して何方へ若干でお賣なさるので。」

「何方へでも價のよろしい處へ。」

今までは聲も出さず、身動きもせざりしシイザアは、此時纔に面を擧げ、偸むが如くエドウアヽドの顏を眺めて、其の心を讀まむとするに似たり。讀み得たるか、つか〳〵と進寄りて、

「旦那様、お願ひでございます。どうぞ私をお買ひなすつて下さいまし。彼女めも一所にお買ひなすつてやつて下さいまし。其代りには、二人の命は旦那様に差上げました了簡で、どんなにも御奉公いたしまする。」

乙女のクラヽは小屋の陰より走出でゝ、エドウアヽドが前に跪き、「旦那様、私達はどんな辛い御奉公でも厭ひませんから、お慈悲でございます。」

なほ言はむとして咽び入りぬ。

エドウアヽドは答無く、二人の姿を見返りつゝ、徐に歩を移して、ジフニリイが母家の方へ行かむとすれば、クラヽは絶望の號泣を揚げて、横様に地上に僵れぬ。

情深きエドウアヽドは、不便なる二人を見捨てゝ何處へか往かむ。直にジフニリイを訪れて、ありし次第を物語り、

「いかにも不便でなりませんから、兩人のものを私にお讓り下さいまし。

「不便といへば不便のやうでもございますけれど、此島には毎日のやうにある事ぢやございませんか。これしきの事を一々氣に立てゐたら、到底黑人のやうな奴は、役ひこなせる譯のものぢやございません。然し、切角さういふ思召でございますれば、私も是非貴下へお讓り申したうございます。萬事はジュラントが心得てをりますから、彼へ御相談下さいまし。」

更に冷かなる口氣にて、

「彼等は仕合ものでございます。」

「一向仕合なことはございません、人間と生れながら、畜生同樣に賣買されるといふのは、因果な事ぢやございませんか。其を思ふと出來るだけは、どうか劬つてやりたうございます。人間が愚鈍だけに、一入可哀さうでなりません。」

「結構なお心懸で、私などは及びも無いことでございます。無給で役は

うといふのではなし、相應の給金をくれて、どうで奴隷といふ役廻りの事ですから、樂の出來ないのは知れ切つた話で、それは彼等も覺悟の上でせう。犬に食はせるのは舐りからしの骨か、腐つた物が相當なので、彼等は彼で澤山なのです。まあ私はさう思ひますけれど、貴下は貴下、銘々の好々で、別にどうも仕樣はございません。」

「其はさうでもありませうけれど、其では餘り非道……………。」

「否、非道くつても何でも、私は其に極めてをるのでございますから。」

「なんぼ極めてゐるとおつしやつたつて。」

「それでも斷然之に極めてをるのですから、設ひ人樣が何とおつしやらうとも、私は私で了簡があつていたすのですから。」

ジフエリイの慳貪にして固陋なる、エドウアヽドは其説くべからざるを知れり。かゝる人と席を同うするも快からざればと、去りて再びチユラントの許に趣き、彼がいふまゝの價高きを厭はず、シイザア夫婦を贖ひ

て、我家に伴ひ歸りけり。
夫婦の歡喜は幾何ぞや。破鏡散せずして、早く再び圓なる嬉しさを語合ひ、事あらむ日は命二つはなか〳〵に、恩人の爲に吝まじものと、心の内に誓ひけり。
果敢なき根無草には似たれども、昔さる醫師の、山路にて狼に出遭ひけるに、人を噛まむともせで草叢に臥したるを、熟視れば、口を開きて、呻き苦むは、何をか喰ひけん、吭に骨を立てたりと知りて、難無く抜きて取らせけるに、此狼數日を經て、一口の劍を啣へ來り、恩人の庭に留めて報酬とせしを、後までも狼の劍とて、其家に傳へしとかや。
情を知らざる人の性を、虎狼ともいふなる惡獸さへ、恩を懷ふ事の淺からざる如斯。彼等野蠻なりといへども、非情の木石に同じからざれば、憂きにも、愁きにも、泣くことゝてはあらざりし、剛勇不敵のシイザアも、此事を語り出でゝは、常に涙を流しけり。

況んや恩惠日々に加はりて、待遇の厚き、勞役の輕き、身は殆ど奴隷の境涯に似ざるをや。天地の間唯エドウアヽドあるを知りて身あるを知らず。(主)の一字は骨に鏤み(奉公)の影は夢寐を離れず、妻のクラヽと心を合せ、斃れて後は已むべきも、力のあらむ限りをぞ働きける。

（二）

却說ジフエリイの暴虐日增に募りて、今は得堪ふまじき極度に達せむと爲たりければ、忍びに忍びし奴隷も、命を呑むは樂のあればなるに、死も及ばざる苦艱に遭ひて、生を貪ることの淺ましさよ。死ねや同胞！此世の思出には、怨恨重なる白人等を、片端から鏖殺に爲て、黑人の妄執を霽せやと、一人の聲の呼はれば、我も死なむと聲々に、全島忽ち一致せり。

抑も此暴動の頭領は、ジフエリイが奴隷なる、ヘクトルといふ黑人にして、シイザアとは故鄉を同うし、賣られし時を同うし、載れし船を同うし、今又勞役を同うすれば、其交は自から骨肉の親みに踰えたり。ヘクトルは慓悍にして亂を好み、シイザアは深沈にして壯武なり。ジヤメイカ島に服役せる黑人は、此二人を推して畏敬すること、士卒の將を

見むがごとし。

ヘクトルは絲髪の小怨といへども、必ず之を報せざれば心を安んせず。敵を追はゞ火にも水にも飛入るべく、憤血多量の勇夫なれば、争か永くジフエリーの虐待に忍び得む。倶不戴天の白人種、彼等が肉を膾にして、髑髏の盃に飲まざれば饜らじと、率先して今度の暴動をぞ企てける。

エドウアヽドが奴隷は、各業を樂みて、心長閑に暮しぬれば、叛を勸むるとも其効無く、反て大事を破らむも測られずと、暴徒は固く秘して此企を通せざりければ、全島の黒人は毒を醸し、小刀を研ぎ、忍び〳〵に用意を急ぎ、夜間も多くは睡らずして、閙きあへる騒動に、替へて實にこそ樂園には、笑語の聲のみ聞えけり。

（三二）

人知らずとも、天之を知り、地之を知り、我亦知れる三つの知は、陰事忽ち人に知らるゝ原ならずや。

シイザアは仄かに此謀ありと聞くより、驚破一大事ぞ。微塵も黑人に怨は無き、我等夫婦の大恩人、エドウアヽド一家の身上も心元無し。事の未だ起らざるこそ幸なれ、首領ヘクトルに利害を說き、彼一人の心だに挫きなば、自餘の輩は元を失ひて、自から潰ゆべし。我先づ行きてヘクトルを諭さむ、と一度は思ひけるが、熟彼が人と爲りを察ふるに、思ひ立ちては梓弓、引復すべくもあらざれば、若し聽かざらば聽かざるにて、又其上の分別もあるべし、と獨問ひ獨答へて我家を出で、ジフエリイの園の片陰なる、ヘクトルの小屋を訪れたるは、黑白も分かぬ闇の夜の二更に近き頃なりけり。

ヘクトルは前後を知らぬ熟睡の、夢に忘れぬ怨の一念。はた／＼と床を蹴りて、絞るがごとき聲を揚げ、

「逭すな、斫れ／＼！」

と喚びけるに、シイザアは愕然として、瞬もせで渠が寐顔を眺めてゐたりけるに、ヘクトルは又もや身悶して、

「勝つた、勝つた、勝つた！」

と再び凱歌を揚げて後、寂然として鎮りぬ。

シイザアは徐に進寄りて、

「ヘクトル、ヘクトル、起きねえか。」

肩の邊を搖動かせば、岸破と蹶起き、きよろ／＼と見廻して、夢に驚く面色なり。

「ヘクトル、夢を見てゐたな。」

「おう。」と眼を摩りて、

「珍しい、シイザアか。我は何か囈語でもいつたか。」
シイザアは意ありげにヘクトルを見遣りて、
「壁に耳ありだ。氣を着けねえ。」
今見し夢にシイザアの言葉を思合せて、ヘクトルは大事を口外せしことを曉れり。扨は彼は我企を知りたるよな。此上は裹むも益無し。打明してシイザアを一味に加へむ術もあらむと、ヘクトルは床の上にむづと坐して、
「寝ても覺めても忘れられねえ事があるのだ。噫夢ながら快心だつた。」
「一人殘らず斫殺したか。」
「えゝ！」
「實は今度の一件は、精しく聞いて知つてゐるのだ。其に就て、ちつとお前に話してえ事があつて、今夜態々來たのだが、お前我の内の旦那を識つてゐるか。」

「エドウアヽドぢやねえか。支配人がべイレイだらう。」
「名ぢやねえやな。どんな人物だかよ。」
「そんな番は我は忘ねえ。」
「皮肉なことをいふない。誰も番を忘たらうとは、聞きはしねえ。」
「でも我は知らねえからよ。」
「それは、眞箇に慈悲深え、善人だっちやねえ。我の大恩人だ。人ぢやねえ、神様だな。」
「神様だ？　えヽ、おい、シイザア、神様とは誰の事だ？　エドウアヽドの事か。毛唐人の事か。大概に忘ておけ。」
「ヘクトル、さういふな。お前はな、毛唐といへば此處のジフエリイの様なのばかりだと思つてゐるだらうが、それは大きな了簡違だ。世の中には鬼もあれば、佛もある。自慢ぢやねえが、我の所の旦那を見せてえや。それは實に涙の滴れるほど情深え、行屆いた、心切なものだ。お前

だつて、あんな主人を持つて見な。毛唐人は皆神様か佛様かと想ふせ。ジフェリィの様な、あんな因業な、酷薄の畜生を模型にとつて、毛唐は皆あゝしたものだ。憎い奴だ、と飛でもねえ短氣な事を仕出來して、怨恨も何も無えものまで、やつつけて仕舞はうといふのは、そりやお前餘り殺生といふものだぜ。」

「好加減にしろ！　そんな甘手な氣休め文句で、へい左様でございますかと、指を啣へて退込むやうな、そんな卑怯な男だとおもふのか。見損なやがるな、誰だとおもふ、コロマンチンのヘクトルだ。汝は何だ、毛唐人は七生の讐だ。骨が舍利になるまでも、屹と此怨は霽さには舍かねえ、と口惜涙を滴したことを忘れやがつて、今更毛唐に諛りこむで、旦那様だの、大恩人だの、神様だのと、汝はどの舌でそんな言を吐きやがるのだ。腰拔、意氣地なし、汝のやうな奴の御諾を聽かされるほど、未だ耄碌はしやしねえ。汝見たやうな野郎があるから、毛唐等に黒人が畜

生同然の取扱をされるのだ。

恥知らず！　業曝し！　奴等、黒人の面汚し！　腰拔野郎の大癡漢！」

と、シイザアが胸邊を礑と蹴りて、大字狀に打仆れ、空鼾をかいてぞ居たりける。

シイザアは怒れる氣色も無く、益言葉を和げて、

「なるほど、お前の理屈も至當だ。至當には違ねえが、我のいふ言だつて、萬更無理でもあるめえぢやねえか。毛唐人に裏斬をしたと、當人でねえお前だから、それはさうも想はうけれど、我はまさかに其位の甘口に乘せられるほど、脆い男でもねえ積りだ。然し此處で今更愚痴をいつた所が、始まらねえ話だから、もう〳〵言ふめえ。ヘクトル、おいヘクトル、狸寢入は無情過ぎやうぜ。もう何も言ひはしねえから、此方を向いてくれ、よ、ヘクトル。何もそんなに腹を立てねえでも好ぢやねえか。これさ、どう爲たものだ。」

寄添ひて扶起さむとする、シイザアの手を振拂ひて、ヘクトルはなほ心強く睡を裝ひぬ。

「我は腰拔といはれやうが、卑怯ものといはれやうが構はねえ。恩を知らなければ畜生だ。我は畜生にはなりたくねえから、何處が何處までも旦那組だ。ヘクトル、お前だつて此島中の黑人には、親分株と立てられて、物を知らねえ男でもねえ癖に、ちつとは我の身にもなつてくれたが好い。一杯の水を乞つたつて恩はやつぱり恩ぢやねえか。こんな事をいつたら、又お前に怒られるか知らねえが、我は眞箇に旦那の爲には命を捨てる氣だから、事が起れば、今までは兄弟分でも敵同士。品に依つちや命の與奪をしめえとも限らねえ。然し我も義理づくで旦那の味方には附くもの丶、仲間の者を敵にして、斬つ撲つはしたくねえから、ヘクトル、無理な事は賴まねえ、我を殺して旦那の一家だけを助けてくれ。不承だらうが身換にシイザアの首を取つてくんねえ。どうで今度の騷ぎち

や、命は無えと覺悟したから、同じ死ぬなら、兄弟分の手に懸るのが本望だ。さあ、すつぱりとやつてくれ。お前達には讐敵の毛唐人へ義理を立てゝ、死なうといふのは憎い奴と、腹も立たうが、他人でねえシイザアの事と勘辨して、愚痴のやうだが、今までの友誼をおもつて、我が一生のお願だから、どうぞエドウアヽド一家の命ばかりは助けてくれ。此處でお前の手に懸れば、旦那への恩報じは出來、お前方への義理も立ち、こんな嬉しい事はありやしねえ。さあ突くなりと、斬るなりと、好きなやうにして殺してくれ。」

ヘクトルはなほ睡を裝ひて應ぜざれば、

「此世の永訣だ。機嫌を直して此方を向いてくれといふのに。」

「えゝ枕頭で喧しい。」

ヘクトルはやう／＼身を起しぬ。

「首か、胸か、さあ何處でも勝手に。」

「喧しいやい。そんな首は欲かねえ。大事の小刀の汚にならあ。」
「何だと。」
「何がどうした。汝の體の腐つた血が粘くと、小刀の汚になるといふのだ。」
「小刀の汚になるといふなら、刄物入らずに搏殺せ。」
「ヘクトル様の腕の汚だ。」
「それぢやどうでも我の體を、ニドウアヽドの身替りにすることは出來ねえのだな。」
「知れた事だ。どつちも活けちやおかれねえ。一人宛片附けるのは面倒だから、二人一所に殺してやるから、少しの間辛抱しろ。」
シイザアは彼の心の動かすべからざるを知りて、再會を刀刄の間に期せむことの已むを得ざるを覺悟せり。乃ち冷然として笑ひ、
「シイザアの骨は硬えぞ。」

ヘクトルも冷笑を以て之に應じ、
「ヘクトルの小刀は業物だぞ。」
枕の下を掻探りて、研清したる小刀を取出し、燈火に翳して鋭利をシイザアに示せば、シイザアは項を丁と搏ち、呵々と高笑して戸外へ奔出でけり。

（四）

始めヘクトルはシイザアを見ば、義を說きて味方に加へむものと念ひしに、シイザアが餘りに白人の恩を稱ふるより、一旦の怒氣に耐へかねて、散々に辱しめけるが、我とシイザアとは、奴隷の中に双壁の譽ありといへども、彼は我に缺けたる才と德とを備へて、名望の高きこと我に數倍せり。此度の企に彼一人を泄しつる、千百人を失へるにも勝りて、味方の英氣を挫きたり。

前に我の彼を罵りける如く、今は彼の我を憤ること太甚しかるべければ、容易に彼心を解きて、味方に附けむこと覺束なからむ。さりとてエドウアヽドの楯となりて、黑人の小刀に斃さむは、惜みてもなほ餘りある豪傑なれば、彼を引入れむ好手段もがな、と頻りに工夫を費しけるが、稍ありて思はず礑と横手を拍ち、是なりけり、是なりけり。

黑人の中にオピア(魔術師)と稱ふるは、人の禍福死生を司りて、其與奪の自在力は、全く彼等の掌中に在りと、深く黑人は妄信して、若此法を施さるゝと知るものは、立どころに或は病み、或は殪れ、唯是オピアが命のまゝならずといふことなし。賢きシイザアもオビイ(魔法)を疑はず、猛きヘクトルも之を畏れぬ。

爰にエスサアとて、能く魔法を修して、神通不思議の老媼あり。ヘクトルを唆して此度の暴動を勸め、おのれは指揮を掌りて、白人退治の元帥たり。

ヘクトルは此老媼に次第を語りて、修法の事を囑みければ、異議無く承引して、いでや魔法の功力を見むこと眼前にあらむ、と囊の物を探らむより、なほ手易げに言放てば、ヘクトルは深く喜びて、什麼なる功顯を見るにやあらむと、頸を延べて待ちけるに、奇なる哉、妙なる哉、昨夜までも今朝までも、神身健かなりけるシイザアの妻のクラヽは、片時の

間に容體變りて、病めるが如く、愁ふるが如く、惘然として自失せるが如く、半身は既に死の傾ともなりたらむ氣色に、シイザアの驚愕は譬ふべくもあらず、途方に暮れてぞゐたりける。

クラヽは夫の心を傷めむかと、始めの程は愼みしが、今は獨りに忍びかねて、

「お前さん、私の此病氣の因を知つておいでか。」

シイザアは心得かねたる面色にて、

「病氣の因とは？」

「其因をさ！」

「可笑なことをいふぢやねえか。何だ、因とは。話して聞かせねえな。」

クラヽは更に思ひ飜して、語らじとや心を定めけむ、物思はしげに頭を低れて默然たり。

「クラヽ、どう云たんだな。因といふのは何だよ。」

「實は因も何もありはしないのさ。」

「虚言をつけ。秘すには當らねえ。」

強ひて秘まば夫の怒にや觸れむ。さればとて語るに愁き心の中、いかゞはせむと猶豫ひけるに、シイザアは稍氣色を損じて、

「いはねえなら聽くめえ。勝手にしろ。」

鋭き語氣に驚かされて、クラゝは終に褁み得ず。身を背けたるシイザアの膝に縋りて、

「實はね、お前ゆゑなのだよ。」

思ひ寄らざるクラゝの言葉に、シイザアは眼を睜りて、妻は病の爲に心狂ひたるにはあらざるかと、呆れて霎時は物を得いはざる、夫の顏をクラゝは見遣りて、

「お前ゆゑだといふのに。」

「我ゆゑだ？」

シイザアの眼はなほ睜りぬ。

「そりや一體どういふ意だ。」

クラゝは言はむとして、眉を顰め、身を顫はせぬ。

「私は思ひ出しても、あゝ恐い。夜でも晝でも獨りで居るとね、オピアのエスサアが出て來てね、あゝ否だ。シイザアがどうあつても言ふことを聞かないなら、向後七日の中に夫婦の命を取る。其が否なら、シイザアを勸めて、私の言ふことを聞かせろといつてね、恐い顏をして齒を剝出して睨められると、慄然して、逃げやうと念つても身體が動かないぢやないか。一昨日の晩も昨夜も、一晩の中に二度も三度も出て來て、寢てゐると搖起して、未だかといつて睨められる氣味の惡さ。其顏が始終眼前にちらついて、どうしても放れないので、私は胸苦くつて〳〵、段段氣分が惡くなるばかり。此分では近い內に私は執殺されてしまふに違ない。私ばかりぢやない、お前の命も取るといふのだから、どんな事だ

か知らないけれど、エスサアの言ふことを、後生だから聞いてやつておくんなさいよ。あゝ可厭だ。私はもう／＼可恐しくつて。」

「エスサアが來るか。」

シイザアは頻りに頷きて、

「心配することはねえ。直に我が逐拂つてやる。」

シイザアは早くも識りぬ。是ぞヘクトルが我を一味に曳入れむ爲、エスサアの魔術を用てクラヽを惱ませ、我心を鈍らせむ詭計なりける。

オビイ何か有らむ、死亦何か有らむ。命は已にエドウアヽドに奉げたる我等夫婦が、義は金鐵に比してなほ堅きを、然りとは淺々しくも卑怯なる彼等が所爲かな。

自餘の黑人は知らず、此シイザアは、奚ぞ然ばかりの術中に陷りて、奸巫の玩弄となるべきや。然るにても罪無きクラヽの身を艱しむる、鼠輩の惡戲憎むべし。

ヘクトルが眞に義を知らば、我が敵となる志を憐みて、エスサアがかゝる左術を行はむといふとも、おのれ舌を爛らして彼を諭すべきに、然は無くて、我より計を勸めたるか、但しはオビアに同せしか、孰れにもせよ、積年の友誼を忘れ、我が義に奉げたる命を偸まむとするは何事ぞや。オビイ爾は妖なり、義、我は德なり。妖何爲ぞ德に勝たむや。小刀を以て來らむには、我等或は命を授くべきも、オビイは夫婦が骨を斫るべき斧鉞にあらずと、熱き涙を流しけり。

クラゝは見るより、こはシイザアも術盡きて、切なさに泣く涙かと、心細さは一入にて、

「エスサアの言ふことを聞かない時には、七日の中に二人の命は無いのだから、どんな言だか知らないけれど、どうか言ふことを聞いてやつて、お前も助かり、私も死なずに濟むやうに。」

と途方に暮れて泣俯しけり。

「お前エスサアに、其言ふことゝいふのは、どんな言だか聞かなかつたか。」

「それは私も聞いたけれど、シイザアに話せば知つてゐるからといつて、話さないよ。」

「それぢや知らねえのだな。」

クラゝは氣遣はしげに、

「お前知つてゐるのかい。」

シイザアは遽に容を正し、聲を勵して、

「クラゝ、死んでくれ！」

「何だえ？」

クラゝの聲は物凄く慄きぬ。

シイザアは平然として、

「我は死ぬ覺悟だ。」

クラヽの心の牢は死せり。

「お前それはどういふ事情で？」

「大恩のある旦那様は殺されねえ。」

「えヽ!!」

クラヽの瞳は畫きたらむごとく凝りて、夫の顔を瞻りぬ。

「それぢや、エスサアの言ふことヽいふのは、那のまあ、旦那様を……。」

「殺せばかりぢやねえ。ヘクトルが首領で、エスサアが後見をして、この廿日の晩に島中の黒人が一揆を起しての、白人を鏖殺しにしやうといふ、大變な企があるのだが、此家の奴隷は知る通り、皆旦那様の恩を懐つて、神妙にして働いてゐるから、到底味方はしめえと仲間外れにして、少しもそんな氣振を見せねえから、誰一人此話を知つてるものはねえけれど、我ばかりは味方に附けねえと、向ふに都合の惡いことがあるものだから、どうかして曳擦込まうと思つても、我が言ふことを聞かねえも

のだから、ヘクトルも女らしい奴ぢやねえか、エスサアに魔法をつかはせて、お前を苦めたら、我も我を折つて降參することゝ思やがつて、それでこんな卑怯な眞似をしやあがるのだ。」

クラヽは無念の切齒をなし、

「それぢや邪のヘクトルが………。」

「ヘクトル一人の了簡でもなからうけれど、エスサア一人の所爲ぢや決してねえ。」

「ヘクトルは兄弟分ぢやないか。あんなに中好くしてゐたものを、」

「今更愚痴をいつたつて始らねえ。」

「始らないといつたつて、餘りな仕方だから、私は行つて………。」

「騷ぐない。其よりは聞きてえのは、クラヽ、お前は命が惜いか、旦那樣が大事か。」

クラヽは過し方を憶出して、不覺の涙留め敢へず、

「いつぞや、デュラントに疾まれて、お前は人手に賣渡され、夫婦が永の訣別をしやうといふ所を、此方の旦那樣のお情で、」
「さうだ〳〵。」
「かうして夫婦一處に暮してゐる、御恩を私は忘れはしないよ。」
「好く言つた。」
「私はお前とならば死ぬよ。」
シイザアは滿足したる氣色にて、
「死んでくれるか。」
「立派に死ぬよ。」
「立派に！　立派にとは好く言つた。それでこそシイザアの女房だ。」
涙ながらに稱贊せば、クラヽはいとゞ悲しさに、泣きくづをれてゐたりけるが、朝の就業を告渡る、貝が音に驚かされ、夫婦は心を取直して、小屋の外に立出でけり。

(五)

エドウア、ドは奴隷の心を慰めて、樂く業を執らせむものと、徳を行ひ、恩を施し、小善といへども爲ざることゝてなかりけり。

今日はシイザアの小屋の處々破損したるを修繕せむとて、夫婦の留守に大工を率ゐ來り、躬ら指圖して居たりけるが、シイザアは正午の休憩に歸り來りて、此體を見るより、遽に大地へ跪きて、

「旦那樣どうも恐入りまする。私が繕ひませんければならないのでございますけれど、つひ〳〵忙がしいのに拘けまして、打遣放しにいたしておきましたので、旦那樣のお目に留りまして、何とも申譯もございません。」

「シイザア、何をいふのだ。私が修したつて、お前が修したつて同じ事だな。近頃お前が大層働いてくれるので、外のものまでが見樣見まねに

精を出すやうになつた。今頃は隣の旦那は、どんなにか後悔してゐるだらう。」

「飛でもない事をおつしやいます。畢竟旦那様やベイレイ様が、下のものを可愛がつてお遣はしになるものでございますから、萬が一どんな事でもあつた時には、一同命を捨てまして、日頃の御恩返しをいたさうと、へい、そんな事を楽みにえてをりまする。」

かく語りつゝシイザアが、頻りに涙を催すを、エドウアヽドは怪みて、

「何を泣くのだ。」

「へい、私等には過ぎました、旦那様のお取扱のお手厚さに、難有涙が溢れまして。」

「何の詰らない、これしきの事を、そんなに念はれては却て迷惑だ。シイザア、聞けばクラヽが悪いさうだが、仕事に出たのか。」

「へい、何大した事はございませんので。」

「大した事で無くっても、加減の悪いものを無理に仕事に出すのは善くない事だ。薬を飲ませなければいかない。病氣といふものは、輕いと思ふ油斷から大事になるのだ。第一クラ丶が可愛さうに苦しからう。遠慮無く休ませたがい丶。彼が五日や十日寢たからといつて、どれほど仕事が違ふものか。後に醫者を遣すから、薬を飲まして、早く治すやうにのう。」

シイザアは涙に咽びて地上に俯せり。稍ありて首を仰げ、エドウア丶ドの後影を目送りつ、軒下に遺散りたる、一片の鉋屑を推戴き、

「いよ〱活きてはゐられねえ。」

一足後れて歸り來りけるクラ丶に、有りし次第を物語れば、涙を浮べつ、命の外に酬ふる物のあらざるを悲みぬ。

シイザア熟く思ひけるは、我義によりて黒人の暴動に與さずといへども、秘密をエドウア丶ドに打明けなば、エドウア丶ドは必ず之を公にして、

同胞の白人を戒心せむ。さては全島の黒人計を破られて、再び白人の囚虜とならむには、我同胞は如何ならむ、其苦艱は死にもなか／＼優るべし。我恩に白人に酬ふる義ありとも、信を友に失ふべき怨無し。いかゞは爲まし、と人知らぬ苦勞に心を痛めけり。

暴徒の討入は、豫て廿日の夜半と定りたれど、人心未だ鞏く結ばずして、評議區々なりけるを、爰に俄に離心を鼓舞して、其期を早めたる事こそ起りたれ。

ジフエリイの奴隸は、一日砂糖を製すとて、火熱の爲に瞑眩し、多時前後不覺に僵れたる間に、守るもの無き鍋の中の、砂糖は忽ち煮つきて、煤の如くに焦げたりけり。

奴隸は我に復りて、こは何とせむ、と狂氣のごとく狼狽騒ぐを、人々憐と念へども、援くべき術無ければ、途方に暮れてありける處へ、チユラント入來りて、奴隸が過失を見るより、忽ち夜叉のやうなる憤怒をなし、

詫入る黒奴を引倒して、定法の五十棒處嫌はぬ亂打の下に、血は滾々として面を染め、肉は數所に劈けて、死すべき心地に堪り得ず、遠く聞ゆる悲鳴さへ、身毛彌立つばかりなり。

我に五十棒の科あれば、抗抵もならで忍べども、滿心の怨は焚ゆるごとく、デュラントが朱に染みたる鞭を提げ、優々として立出づる、後姿を屹と睨みて、跳上り〳〵、

「うぬ覺えてゐやがれ。此報恩は今にするから。」

聞かせむとにもあらで、叫びたる言葉は、端無くデュラントの耳に入りぬ。

傍に立てるヘクトルに、目語せたるさへ認めたるデュラントは、有無を謂せず、二人のものを、番小屋の庭に引据ゑて、嚴しく拷問ゑたりけり。

ジフエリイも折々は、デュラントが非道の眼に餘るを戒むること無きにはあらざれど、黒人の如き下等動物は、力を以て制せずむば、到底用を

爲すべからず。統御の術は唯鞭撻にありとて、固く執りて肯かざれば、ジフエリイも爲む方無く、好ましからぬ事なりとは、心の中に思ひつゝも、彼が爲すまゝにして啄を容れざるより。デユラントの惡虐は逾募りて、奴隷の肉の破れざる日も無かりけり。

ジフエリイは番小屋に事ありと知るより、來りて見るに、無慘なる哉二人の奴隷は、縛められたるまゝ血を被りて、氣息も奄々に僵れ俯したり。

ジフエリイはデユラントに向ひて、

「どういふ科だか知らんけれど、好加減に丟て釋してやるがいゝぢやないか。」

デユラントは不興なる顏して、

「好加減? まだなか／＼好加減どころではございません。此奴等は旦那樣、飛でもない太い奴でございます。」

先刻工場にてありける事どもを詳かに語りければ、ジフニリイは痛く驚

慍れて、

「我は又例の通り瑣細な妄想をしたことゝばかり想つてゐたのに、それは容易ならん大罪人だ。私も一つ吟味を爲やう。」

ジフエリイは判官の椅子に坐して、詭辯を以てさま〴〵に詰問すれども、二人のものは口を閉ぢて、知らずとのみ答ふる外は、更に一言も發せざれば、デユラントは頻りに苛立ちて、理非の辨無き彼等に問答は無益なり。望む所は是ならむ、と滅多打に振下す、笞の數ば知れざりけり。剛情我慢のヘクトルも、身は金鐵にあらざれば、皮破れ肉爛れて、劇痛に堪へざる創口を、再び三度撻るゝにぞ、忍ぶに餘る苦楚に、叫びつ呻きつ身悶えける。

奴隷の大勢は、交る〴〵垣の外に忍寄り、中の樣子を窺ひて、ヘクトルの命は危きぞ。白人の無道は極りたるぞ、と喚くもの、怒るもの、此處彼處に聚りて、ジフエリイ主從を、何日までか活けおくべき。此場を去

らせず進取込めて。唯一撃に搏殺せよやと閧きつ、已に小刀を閃かして、躍入らむと爲たりける壯士を抑留め、未だ時節にあらざれば、今日は此まゝ目を瞑りて、近きに、と制するものゝありけるより、一同は先づ怒を鎭めて、其日は事無く暮れけるが、ヘクトル等は夜に入りて、無罪なりとて釋されぬ。

次日の事なりける、ジフエリイの妻は籐編の寢椅子に横はりて、左右に册ける黒人の婢等に、團扇の風を送らせつゝ、獨り酒を酌みて居たりける折から、倫敦より荷物の着きたるは、かねて註文したる衣服を裁縫師の送り來れるなり。

此島の移住民多けれども、姿色はジフエリイの妻に勝れる女も無く、加ふるに富貴の身なりければ、好むがまゝの奢侈を窮め、身は西印度の孤島に住みながら、榮曜は倫敦に在るにも異らず。美人錦を衣て、人はジヤメイカ島の女皇と噂せり。

ジフエリイの之を懌ぶこと、幾ど我才識を賞めらるゝにも過ぎたれば、妻の口より出づる言は、神託の如く肝に銘じて、只管背かざらむことを勗めければ、ジユラントが鞭を染むる黒人の精血は、ジフエリイが財嚢の黄金となりて、三度化して妻の錦とぞなれりける。

ジフエリイの妻は待詫びし品の着きたりと聞くより、飛立つばかりに悦びて、捆のまゝ持ち來るべしとありければ、頓て（血染の衣）は寢椅子の前に舁据ゑられぬ。

婢等は立寄りて捆を解き、中なる衣を取出ださむとしたりけるに、一人の婢は、箱の縁に突出でたる釘先に、衣の裾の懸りたりとも心着かで曳きければ、輕羅はべり〳〵と裂けてけり。

婢は生きたる心地も無く、床の上に泣俯せば、ジフエリイの妻は何ぞ堪へむ、憤怒の餘りに聲も出でず、寄るよと見えしが土足を揚げて、婢の額を丁と蹋れば、仰樣に打僵れて、起きも上らで呻きけり。

かくても更に慊らず、散々に罵り辱めて、擧句はチユラントに引渡し、折檻せよと命じければ、然無きだに非道を喜ぶチユラントは、餓虎の羊を獲たらむ想ひして、例の番小屋に引立て行き、前の二人の男さへ、得忍ぶまじき折檻の、笞の下に苦めぬ。

此婢は是餘人ならず、暴徒の首領ヘクトルが最愛の妻なりけり。首領夫婦が憾る責苦に遭ひけるより、謀叛の氣燄百倍して、全島の奴隷一時に騒立ち、若此まゝに手を束ねて、廿日の夜半を待たむには、味方は幾斗の血をや減せむ。事を擧ぐるに定るからは、何ぞ數日の前後を謂はむや。番所の庭に流したる、首領夫婦の今日の血を、其まゝ軍神に奉りて、同胞今宵討入れや。かねての手筈は、八方より火を懸け、鬨を揚げ、狼狽騒ぐ毛唐輩を、片端から討つて取れと、一人呼べば十人應へ、殺氣忽ち全島に充滿ちて、今宵を逸さぬ氣色なり。

ヘクトルは今や時節と喜び勇みて、さらば今宵ぞ積年の怨も霽るゝ月影

を、プリユ山の頂に眺むべし、と四方に令を傳ふれば、悍立ちたる奴隷は、腕を鳴して待構へぬ。

シイザアは愒るべしとは知らざれば、廿日の日の來らむまでに、調和の策を回らして、雙方事無く納めむと、只管思ひ煩ひけり。

エドウアヽドは此夕奴隷に安息日を與へければ、家族と共に園に出でゝ、黒人の今日を曠しと衣飾りて、心々に楽む態を見ばやとて、緑濃かなる棕櫚葉の蔭に團欒せり。

海風冷かに袂を吹きて、日はや西の岳に沈めば、木立の彼方騒がしく〳〵、異様なる謠を唱ひつれ、手鼓拍鳴して、舞ひつ狂ひつ、可笑げに裝束ぎたる男女の、幾群となく現はれぬ。或は小屋の前に新しき手織の莚を鋪き、木盤、瓢の椀などを聯ね、大籃の中には自ら作りたる葡萄林檎の類を山の如く盛りて、糖水酒を酌むあり、茶を飲むあり。各十二分の歡を盡して、十時を過ぐる頃やう〳〵小屋に引取りぬ。

月は天上に白く冴えて、地は斑々として芭蕉の蔭に黯く、騒ぎ荒せし園の中はいとゞ寂寞増りけり。

シイザアは四隣の靜なるを覗ひて、竊に小屋を忍出で、一文字に林の中を横切れば、丸木の柵あるを躍超え、南を指して五六町、直走りに急ぎければ、夜目には遙に丘とも見ゆる、蓊鬱たる野中の森にぞ來りける。此森の奥に小かなる廬を結び、寂寞として獨棲める老媼あり。これぞオビアのニスサアにて、朽ちたる軒の下に死せる人の如く横はれるは、シイザアの妻のクラヽなり。

ニスサアは豫てよりクラヽの身に魔術を施して、シイザアを靡かせむとぞ謀りけるに、大事は今夜に逼るといへども、些の音信もあらざるより、惑はクラヽを曳寄せて、シイザアの心を囚にせむとせるにぞありける。クラヽは夢現の中に此處に來りけるが、オビアの前に在りと心着きて、遁げむとすればこは什麼、五體は痿えて綿のごとく、身動きだにもならざりけり。

老媼は眼前に可恐しき妖怪の姿を見せて、種々にクラヽを脅かし、夫の

心をだに飜させむとならば、立どころに此責苦を免さむのみならず、夫婦のものに願ふまゝの長壽と幸とを降すべし。さも無くば一寸も此場を去らせず、汝の命の有らむ限りは、永く苦艱を見せむといふ。

クラヽは苦しき息を吐き、支へかねたる身を纔に起して、

「切角のお言葉ではございますけれど、設ひ夫婦の命は取られましても、御存じの義理合で、どうもお頼みをお聞き申す譯には參りません。何程おつしやつても、又何樣にお責めなさいましても、無駄でございますから、もう〳〵何もおつしやつて下さいますな。剛情張な、憎い奴と思召すなら、さあ、一思に殺して下さいまし。」

エスサアは冷笑ひ、

「殺してしまふのは易い事。もう少し苦しい目を見せなければ、私の腹が癒えないから、どれ〳〵もう一責責めてやりませうか。」

クラヽは逃げむと心は促れど、身を起しかねて悶ふる膝の下に、背は青

く輝き、腹は火焔の如く赤くして、四足ある蛇の、其長五尺ばかりなるが、忽然として現はれぬ。

クラヽは見るに眼も眩れ、心も消えなむとして、あれよと叫びつゝ躍起れば、力無き足の支へかねて、蛇を枕に撞と顛るれば、長き蟲は尖のごとき舌を吐き、くる／＼とクラヽの細首を巻きて、二つ三つ尾を打掉れば、吭の緊るにやあらむ、クラヽは魂切る聲を立てぬ。

先刻より木蔭に窺ふシイザアは、此體を見るに堪へかねて、傲然と躍出で、矢庭に飛蒐りて、エスサアの首筋を無圖と捉み、唯一撃と拳を擧ぐれば、魔術師は更に騒がずして、

「殺せ、殺せ、殺せるなら殺して見ろ。我を殺せばクラヽも死ぬぞ。」

シイザアは艸叢に打僵れたる、妻の死骸を、瞻りて、

「クラヽも死ぬ？　一度死んだものが又死ぬか。汝は好くもおれの女房を責殺しやあがつたな。うぬ！　どうしてくれう。」

エスサアの白髪を捉りて、床の上に曳倒せば、
「待つしやい。クラヽは死んだと想ふのか。私の法力で假に殺したのだから、活さうとおもへば直に活きる。それ／＼見やつしやれ。」
老媼は手を擧げて麾けば、死去たりと見しクラヽは、草叢を匐出でゝ、再び軒の下に來りたれど、なほ死せるが如く俯して、前後不覺の態なり。
「あれじや。我を殺せば彼まゝクラヽも往生して去まう。それで好くば、私をどうとも存分にしたがいゝ。手暴いことでも去たら最期、クラヽは彼世の者にするぞ。豫て話した事が不承知なら、此儘にクラヽを殺すがどうだ。あの姿を見な、可哀さうではないか、不便とも思はないか。シイザア返事はどうだ。味方になるか。それとも敵に…………。」
「知れた事だ。どうで一度は死ぬ體だ。命や女房が惜くつて、恩を忘れるやうな男ぢやねえ。殺すものなら我の眼前で、見事にクラヽを殺して見ろ。」

老媼は徐に面を擡げ、大樹の木末に懸る月を仰ぎて、

「もうヘクトルを始として、大勢のものが見える時刻だ。」

シイザアは慄然として、

「今に大勢が此處に來る？」

老媼は遙に西の方を指して、

「あれ〱、丘の向ふに見える火の影は、ヘクトルの來るのであらう。卽時大勢が來たならは、夫婦の命は助るまい。分別するのは今の內だ。」

「討入は廿日の晩だと聞いてゐたのに。」

「はゝはゝ。今夜とはよもや知るまい。」

遙に西の丘を望めば、松明の光天を焦して、事ありげに見ゆるにぞ、シイザアは始めて今宵事あるを識りて、愕くこと大方ならず、焦眉の急を奈何せむと、悄然としてゐたりける。

エスサアはさりとは知らで、クラゝを思ひ、命を吝み、黒白孰れに與せ

むか、と案じ煩ふにやあらむずらむ。心を奪ふは此時なり、と膝を進めて、

「シイザア、お前が恩人の爲に命を捨てやうといふ志は天晴だが、どうで犬死になるのは知れた事だ。今にも大勢が寄せて來て、お前達二人の體は膾の樣に斫苛まれ、其上恩人の一家内も、非業の最期は免れない。こゝの理屈を考へたら、此方の味方に附かないのは、大きな不了簡といふものだ。若分別を出しなほして、味方になれば、クラゝは活きる。お前の助かるは、いふまでも無い事だ。辛い奉公も今宵限で、明日からは自由の身になつて、夫婦樂しく暮されるのだ。」

シイザアは今にも暴徒の推寄せ來らむかと、心も心ならざれば、再び松明の影を望むに、火は早間近に耀きて、仄かに人聲も聞えけり。

片時の猶豫も恩人の身上氣遣はしく、轟く胸を推鎭めて、

「なるほど、いはれて見れば有理だ。とても旦那が助からねえなら、犬

死するのはつまらねえ。すつぱり心を悛めて、我も仲間へ入らうよ。」決然として言放てば、エスサアは満面に喜悦の色を表はして、過を改めたる潔さを賞讃へ、いでや渝らぬ起請には、汝の佩びたる小刀をば、此中に浸すべしと、持出したる瓶の中には、數升の毒を湛へたり。

シイザアは小刀を小屋に遺れたれば、一走行きて取來らむ。今にもヘクトルの見えなば、シイザアが過を悔いて、同心云たるよしを告げ給へ。我は命を助かりたり、クラゝも死をば免れたり、と雀躍しつゝ走行く、其態まことに歡喜に堪へざらむやうに見えければ、エスサアは紿かるゝとは知らずして、猛虎を野にぞ放ちける。

シイザアは飛ぶがごとくに取つて返し、エドウアヽドが閨の牕の戸を、碎けむばかりに打叩き、

「旦那樣、旦那樣、」

と大聲に呼はれば、エドウアヽドは何事やらむと、蹶起きて、窓の內よ

り、
「誰だ、何だ。」
「シイザアでございます。大變がございます。早く此處をお開け下さいまし。」
促立つる聲遣ひの尋常ならざるに、エドウアヽドは、忙はしく扉を開きて、
「シイザアか。大變とは何だ。」
「旦那樣大變でございます。早く短銃をお持ちなさいまし。唯今此へ島中の奴隷が斫込むで參ります。私は內の奴隷を叩起して、支度をさせますから。御油斷は出來ません。」
といふかと思へば、シイザアの姿は忽ち樹蔭に入りて、起きろ〳〵と呼ぶ聲は、彼方此方に聞えけり。
エドウアヽドは六連發の拳銃を携へ、三尺餘の劍を帶び、身輕に打扮ち

て園の中を驅回り、奴隷を指揮して家の四方を嚴しく固め、必死となりて禦がむと、敵の寄するを晩しと待てば、シイザアは氷の如き小刀を手にして、再びエドウアヽドが前に馳來り、

「旦那樣、私と御一所にこれからオビアの森へ御出下さいまし。暴徒の首領はヘクトルと申して、私の極の友達でございますから、之に掛合ひまして、怪我の無い内に治めるやうにいたしませう。此處にかうして、敵の來るのを待ちまして、推寄せて來られた日には、先方は多勢の事でございますから、到底抗ひません。それよりは、此方から逆寄にして、圓く話を着けませう。」

シイザアは暴徒の首領ヘクトルが隷役を免さむことをもて、彼が兵を解かしめむとの計を出しければ、エドウアヽドも之に同じ、五七人の白人を率ゐ、シイザアを先に立てゝ、オビアの森に來りけるに、時なほ早くして、四邊には黒人の影も見えざりし。

エドウアヽドはオビアの廬の後に廻りて、壁の破れより裡の様子を窺へば、老媼は篝火の前に坐し、天地を拜して呪文を唱ふる傍には、ヘクトルを上座として、五人の逞しき黒人は手に〳〵鋭き小刀を把持ちて、祈禱訖らば一齊に毒藥の瓶に浸さむ、と肅然として控へたり。

ヘクトルは廬の後なる物音を聽咎めて、突如と躍出づれば、忽ち眼に入る白人種！

「おのれ！」

といひ樣小刀を閃かして、エドウアヽドに斬付けむとしたりけるを、

「ヘクトル、待て！」

と呼びかけたる、シイヂアの姿を見ると齊しく駈寄りて、

「思ひ知れ！」

と只一突に、心頭深く貫きぬ。

「ヘクトル騷ぐな。其方には暇をやる。」

エドウアヽドのかく叫びたるは、シイザアが僵れたると同時なりし。血は滾々と湧出づる、急所の重傷にシイザアは、纔に舌を動かして、

「旦那樣、これが御恩返し、」

クラヽ！と一聲叫びしが、敢無く息は絶えにけり。

最愛の夫が滿身の血を沃ぎ盡せし時、クラヽは忽然として蘇生りぬ。

オビアの森に義俠なる夫婦が死生を換へたりし間に、幾百人の奴隷は鬨を揚げて、ジフエリイが家に推寄せ、四方より火を懸けて、巨萬の資產を灰となし、煙の中にヂユラントを捉へて、いかに屠りしかは言ふに忍びざるなり。

エドウアヽドは四方に奔走して、辯を以て說き、德を以て懷け、暴動は纔にジフエリイ一家に止りて鎭ることを得たりけり。

ジフエリイ夫婦は命からがら本國に遁歸りて後は、見る影も無く貧窮して、人其終を知らずとなむ。

（二十六年六月）

男ごゝろ

（一）人でなしの鼬屋

横濱尾上町に鼬や瀬兵衛とて、強慾非道の高利貸ありけり。姓は安達といふを、生血を吸へばとて、衆は鼬と仇名して、人間の數に入れず。近火の節には喞筒の水も此家の家根は濡すまじき憎まれものながら、そんな事は苦にせず、結句錢無き世間には好れぬが身の仕合、義理の、首尾の、交際の、何の彼のは皆是若干金か減る種と、名聞を構はず、娯樂を餘所にして、一向に蓄財を心懸けし。

人は欲を節し、費を省きて、金は溜むるに如くこと無し。宵越の錢をつかはぬことは手柄にあらず。たま〱獲る錢を一日の酒食に換へ、年中の風車を見得にして、人の顔だに見れば、憑據もない太平樂を抒ぶるを、

奇なりと稱へ、高しと贊むるは、畸人傳などゝいふ愚書の不了簡。胸中に如何様の大經綸ありとも、懶惰漢では用ゐられぬ今の世なり。儉は德といへり。平生の心懸を大事にして、茶屋女に祝儀やらで嗤はるゝとも、名譽に關はることにはあらず。五十錢なりとも餘裕を製艦費に獻じて、國民たる義務の萬分が一を盡さば、寢心の好きこととなるべし。然れども理窟は無しに金錢溜むることに齷齪して、非義を働き、人を害め、體の好き盜みを働く輩は、國法之を罰せざれども、天地の容れざる大罪惡人なり。

更に思へば、かゝる人の不便さや。金銀の鎖に繫がれて、寶石の獄に投込まれ、心は闇となりて、身の血は氷の如く、始終鼻梁に皺ばかり寄せて、花が咲いても面白いとも謂はず。然ればとて終には土となる身に、さまでにして蓄へたる財を何と爲むとか。米國シカゴに大博覽會の立つ由は聞けど、未だ極樂に然る沙汰はあらざらむやうに覺えぬ。

瀬兵衛も幼き折には、旨きものを悦び、奇麗なるものを欲がりしが、物心着きし頃兩親に別れ、邪慳なる親類に引取られて、死ねがしの虐待受くる、悲しさ悔しさの絶間無ければ、あまえ盛の年紀に早や氣兼することを覺えて、高き聲も出さず、暴き足音も立てず、日向よりは薄闇き處に蹲りて、指の爪を咬みながら側目づかひして、人の氣勢に膽を冷し、誰を見ても皆我養親の如く、物言へば罵り、動けば蹴るものと思ふにつけて、世間の可恐さ、人の可忌さ、軟かき骨に浸みて、おのれから隔てゝ疎くするほど、此餓鬼を憐むものなくなりければ、恃となるべき友を求めけるに、阿彌陀も光る金の威光や、これだに多く有たば、笑はぬ面はあらじと、錢勘定覺えし比より心着きて、これを瀬兵衛一生の目的、高利貸に備はりたる殘心酷薄は養親の躾なり。

然れば其始二十圓足らずを資本に、貧乏人へ貸附けし十錢二十錢の烏金に羽が生へて、飛ぶやら躍るやら、僅二年が間に四五百圓もこしらへ、

それより日增に爲出して、四十何歳といふ頃には、三萬圓の內證になりすましても、慾には限無き生身の弗箱、入る事を願ひて已まざりけり。

緣といふものゝ不思議は、このやうの男にも添ふ女ありて、夜叉にもあらず、鬼神にもあらず、見るから氣質やさしげに、心貞しく、瀨兵衞の第一惚れたところは、家計を上手にして、骨身を吝まぬ勞役。濫費が嫌ひ、華美が好かぬまで、何處に一つの不足は無けれど、無上に人を不便がるが良からぬ癖、と口小言は絕えざりしが、有繫に心では大分好いてゐた驗は、我五萬圓の身代とならば、其方が長年神妙の褒美に、小使とゑて百圓くれてやると寢物語の睦しき間に、二人の子を設けて、長男は信助といひ、末はお類とて、心性は母に肖たれど、容色は誰の型やら、水際立ちて美しう生れつきぬ。

惣領の信助は、父親に智惠を奪られてか、凡庸よりは鈍く、靑瓢簞見るやうな顏して、ぐづ〳〵と海鼠の急ぐやうな氣質、烈しき親の眼からは

格別薄鈍の愚太郎、到底行末の見留は無い奴、と瀨兵衞は深く之を悔みて、獅子ならば谷底に突墮し、それなりにしてしまふ可き忰なれども、生血を吸ひとる鼬屋も、親子の情は不具ほどが最愛しく、口汚く罵るほどには思はざりけり。

お類が十七の秋、母親は病の枕重く、樂みにせし約束の褒美も受取らず。やがて二人の子等に配けてとらせたまへ。また兼ての望通り、五萬圓の身代になりたまはゞ、此家業はふつつり罷めて、信助には正路の商賣させて、此方は隱居役に後見して、老後を安く暮したまへと、後來に幾千度謂はむとしては謂ひかねし、此一言を臨終に遺し、瀨兵衞が頷く顏を視て、眠るがごとく往生せり。

金錢だにあらば、天地は顚倒になりても、一向苦にせぬ氣の瀨兵衞も、長年世話してもらひし女房の、憎うなければ飽きもせぬに、別れたる心は面白からず。それも日子の立つにつけて、去るものは疎く、當座ほど

の物思はなけれど、煮物の鹽加減から、在りし時とは勝手違ひて、我氣性を呑込みし女房ならでは、痒き處に手が行かず、一から十まで不自由なる事ばかり。其度々に懷出さるゝ亡人の、生きてゐたならばと、金錢の顏見ても奈何やら此愁は霽しかねて、少しは子等も便に思はるゝやうなりぬ。

お類は今を十九の嫁盛。容貌なら、性情なら、身代なら、言分無しと、八方から手の出るほど欲しがる人のあるべきに、母親の在りし頃より、此方から樣々に緣を求めけるに、然るべき人は合手にならず。彼娘は可けれど、親父がと逡巡して、此分では我家の閾から嫁入る先方の門口まで、十里が二十里でも、紙幣の道をつけうと謂はゞ知らぬ事、五荷ばかりの荷で諾といふものはあるまじく見えし。

瀬兵衛がまた何として、噓にも然る事を爲うと謂はゞこそ、十九年が間毎日三度米の飯を食はせて、缺けたるところも無く一人前に育てあげ、

加之容色は御覽の通り百人に勝れて、心まで賢く、もらふ方では後來何十年の重寶になる品なり。丸裸でも千圓以上の價値ものに、相應の荷物まで添へて、無料で遣らうとは、古來からの風習とは謂ひながら、理窟を謂へば、世中にこれほど勘定に合はぬ話のあるものにあらず。家内に入れて火鉢の前に坐らせたらば、猫ほどの益にも立たぬ切店の女郎請出すにも、若干か身代は拂ふべし。本來ならば婿の方より、相當の代金出して、一言は禮いひて、戴いてゆくべき理なるに、途方も無いこと、持參金など附けて過り入つて、嫁にえてもらふやうな不具の娘にあらず。それは穢多などもらふ時の相談と、合手無しに瀨兵衞は腹立てども、穢多で無いことか、世間では穢多より否がりてゐるものを。それゆゑに母樣も諄々の御遺言を、何と聽れてか父樣の御了簡は今に悛らず。赤兒の手を撚るやうな無慈悲の事して、應報といふはある世ぞ、とお類は其のみを苦にして、人に面を見らるゝも慾さに、母の墓參さへ忍びやかにし

て、四坪ばかりの庭に土を蹈みて、わざと世間を知らず。窓の外に往來の話聲高く聞ゆるにも、我親の讒訴かと心を轟かし、思寢の夢とはいへど、海岸通の闇に、父親が二人の男に斬りさいなまれし淺ましさを、まざ〳〵と見るなど、絶間無き物案じに、孱弱身は瘦せて、面色病人に違はず。呑氣なるは兄の信助、いつも澤庵の噯氣ばかりして、滋養の足らぬ脣に色無く、きよろりと為た眼をして、年中懷手せる姿の可笑さ。今年は廿一といふ男になりても、婦女などには眼もくれず、道樂は鷄肉屋の前を、湯歸りに往きつ復つして、小遣くれぬ家父の吝嗇を怨み、思ふ存分何か食つて見たい外に苦勞無ければ、長ばかり延びて筋の弛みたる相貌。お類は見る度に効無がりて、此兄が尋常であるならば、何かの相談合手になりて、倶々父樣へ意見も為やうものを。このやうな子の生るゝといふも、外ならぬ親の因果の報いたることゝ、おもへば可恐き高利貸の家業。年中の公事沙汰、毎日の裁判所通ひに、金錢の殖ゆるほど衆

の怨を累ねて、月無き夜の外出は油斷ならぬ身の、末は什麼ならむ。萬が一にも夢に似たる事などあらば。と女心に案じ過しても、父親の面と向ひて意見がましき言は謂ひかねつ、これのみ朝暮の苦に病みて、最愛き理の親の顏も、見るに心の痞となりて、此父の亡なりし母親と換らざりしことを常に悔みぬ。

(二)　呉竹の根岸の里に

お類は縁無くして二十一になれる年、瀬兵衛の資産は五萬圓になりぬ。人の心の冠るべき笠はあらざれば、さまで慾張らぬ根性にも、最一息辛抱して、十萬圓とも云て見たき人情なるに、大慾の瀬兵衛が此にて合點することにあらず。いよ〳〵乘地になりて、鼻息暴く、眼血走りて、殘忍酷薄を募らせけれども、暇ある日は弗箱の前に煙草盆引寄せて、さま〴〵なる事の考へらるゝ次手に、十七圓を資本に今五萬圓の身代になりたることを思へば、我ながら好くも仕上げたりな。此上の上の慾はあれど、まづは人中に出て壓れはせぬ身になりて、紳士とやらの仲間へも入りたるが、唯一つの無念は、世間の奴等我を猜む餘りに、此財産家を穢多あつかひして、鼻洟をもかけぬ面の憎さ。お類は未に定まる縁無く、花の咲きたるものをむざと埋木にして、そんなものゝ娘は誰も貰ひての

無きを、小氣味好がる奴等に、何とかして一沫吐せ、それ見よと嗤うてやらねば、此心が治まらぬ、と瀨兵衞にしては味な處に力瘤を出して、今度ばかりは少々錢の入ることを懼れぬ意氣込。一つは何時までも不縁の娘の、有繋に不便なる親心もありて、我婿にして家名に箔の附くほどの合手を穿鑿せしに、瀨兵衞が鬼の隻臂と頼む手代の野川が、これならばといふ吉報を齎しけり。

東の京は吳竹の根岸の里に、東山公恒といふ公卿華族なむありける。父君のいまそかりし世の昔の樣は知らず。今は繪で見る吉野内裏に仕へまつる月卿雲客のごとく、賤の手業をも躬から志がなき家計。町家住居の身にしあれば、裝束の上に眞柴負ふまでの事はなけれど、それにも劣るまじき世の鹹の辛き中に、鄙しき市人に立交らひて、萬般に賢う、才ある殿にておはしましけるが、その小才覺の不了簡から、蹈めば怪我する蠣賣町に足を入れて、とん／＼拍子の間の惡さに、瞬く間や、ありも

相場師風の華美と蕩せぬ身代を塵も遺さず散き盡して、身に附けたは、一門に愛想盡かされて、門標に華族とも記かれぬ詫住居の身上を、心弱き夫人何子は苦に病みて、あるに効無き命、と絶えず歎きける辭を前表に、間も無く病ひつきて沒りけるが、跡には公恒卿唯獨り便無き身となりて、日中も木戸鎖して微闇き一間に垂籠め、徒然なるまゝ古新聞を披げて、まゝよ北海道へ移住せうか。布哇へ出稼は奈何なものであらう。願はくは最少し樂を玄て金になる仕事は無いものか知らぬ、と煎じつめたる境涯を、人傳に聞きし野川も嘗て米相場に手出ゑせし事ありて、公恒とは識らぬ間にもあらざるより、これこそ華族といふ肩書ありて、何處へ出しても從五位がものはある人品。加之心利きたる男なれば、瀬兵衛が誂への寸方通り。但二番煎じの花婿にて、今年三十八といふが、恐らくお類の御意には入るまじけれど、何は措きても、假初ならぬ華族といふところが身上と、此趣を瀬兵衛に

語れば、はて索せば古道具には妙なのがあるものと膝を進めて、それから先の根問。

信用せる野川の言葉なれば、瀬兵衛も媒人口とは聽かず。七分までは其氣になりて、兎も角も手を廻して、念の爲此方にても調べてから、媒妁は其方に頼むと、それから半月餘かゝりて百方探らせけるに、野川の謂ひしに違ふところ無く、贅澤を謂はゞ、かうもありたく、あゝ無くて欲しき稜々はあれど、華族といふが好もしさに、瀬兵衛は善と小膝を搏ちて。此方ばかりが善くても、未だ先方は何も知らねば、東山の了簡を素引いて見てくれぬかと頼めば、それは無論二つ返事、と野川は獨合點して、根岸に所用ありて門口を通りかゝり、料らず表札を見て、今は此方にお住ひでござりましたか、と思ひ懸けざる面色にて公恒を訪ね、蠣殼町以來の經歷を語り合へば、公恒は漫に愁を催して、貴公は其樣に結城紬の小袖に黑魚子の羽織、帶げてゐるのは金時計さうな。あつぱれ當世

紳士の扮裝。可羨いと謂ふは女々しけれど、不肖の此態を見られよ。華族がこんなものだと、垢光りの衿を見せて、笑へども悲しげなる眼色。野川は急に憶出したる顔にて、時にかういふ話がござりまするが、と、明白に瀬兵衛とは謂はず、朧氣にお類の様子、五千圓の持參の事を語りて、奥方におもらひなさるゝ御意は無きかと問へば、公恒は冷笑ひ、昨夜もそんな相談を夢に見たと取合はねば、野川は挨拶聞かぬ内から、もう此の相談は出來たと心に頷きて、噓で無い證據は、この野川が早や媒妁に頼まれてゐる始末。其方に御意のあることならば、精しきところをお話し申しまするが、奈何なものでござりまする、と聞くより公恒心を躍らせ、御意のある段では無い。精しいところを早く、と急立つほど野川は落着拂ひ、先方は商人でござりまする。商人は結構。我等仲間の金貸渡世。金貸結構。身代は五萬圓餘。なほ結構。その金貸美しき娘を持てゐるが、何程の財を山に積むとても、四民の上には立てぬ町人にて、果てな

むことの口惜けれど、鳶は鳶に生れたれば、詮無きことゝ自分は諦めたれど、せめては其娘を歴々方に嫁入らせ、繋がる縁を先祖への面目にしたき存念にて、諸方より縁談降る如き娘を、今年二十一まで箱入にして、望みの縁を待つ人なり。

然れば歴々の合手は望めども、固より富貴に意あるにあらねば、華族方などにてあらば、如何ほど資産無き方にても苦しからず。然る方へならば五千圓の持參添へてもと謂ふ。

思召あらば隨分お世話申すべしとあれば、公恒ぞく／＼勇み立ちて、此お世話只管頼み入る。誇一つ持たぬ不肖なれど、華族の段は紛ひ無き所持の系圖の一巻を證に、先方さへ承知ならば此方は望む所。而て／＼其金貸は。實は私主人の安達瀬兵衛と名乘れば、かね／＼噂に聞及ぶ横濱に有名の金貸、結構々々。

彼川は立還りて、上々首尾の次第を語れば、瀬兵衛の始終窺める眉も少

しく開きて、早速娘に此事を聞かせけるに、何も御父様の思召すまゝに、と否さうな氣色も見えざれば、善は急げと吉日を擇ぶまでもなく、天氣の好き日池上の光明館に出合ひ、二度目なれども公恒は仔細ありて嬉しく、お類は唯可羞き見合の席にて、どうした拍子やら、世間の奴等は誰を見ても嫌ひの瀬兵衞が、此婿殿には惚れて〳〵、本尊のお類が惚れる餘地も無い程の始末。

愚ならぬ公恒なれば、此縁纏まらでは一大事と、瀬兵衞の氣を呑込みて、それとは無しに合槌撃ちて、少しも反らさぬ話振。大様で、如在無くて、世智にも長けたる御方と頼もしがられけるより、後とも謂はず縁談は其場に纏まりて、酌みかはす盃に内祝言の意籠めたる瀬兵衞が了簡。

扨此上はお互様に内證の陰蔽はさらりと廢めて、何かの都合も好きことなれば、打明けた所を御懇談いたしまするが當世と、お類は下女を附けて姑く下座敷へ遣り、跡は婿舅媒妁三鐵輪になりて、何もかも蔽さぬ所

の相談ありしが、結極持參の五千圓は正金にて渡さず、預證文にして其利子を月々に仕送り、我亡後には應分の遺財分は若干金、と有繋に瀬兵衞なればこそ、かゝる折から危いところまで話して、惡くはない事なれば公恒はいよ〳〵滿足して、結納の交換は勿論、當日の式とても成るべく簡略に、然無きだに眼にも立たぬ散財のある折なれば、お互に費を省きて、此方よりの荷物などは、汽車便にてお送り申す筈なれば、車に積みて手輕に運ぶべきなれど、娘が一生に一度の晴、私が近所への見得もあれば、七荷にして油單掛けて、華々しく停車場まで乘込ませましよ。東京に着きてからは、知る人無ければ、眼立たぬやうに萬事を執行ひたまふ方然る可し、と瀬兵衞が指圖通り公恒はいさゝか異存無く、やれそれで濟みました。目出度々々々々とお類を呼寄せ、又酒を行らせて、點燈頃にやう〳〵袂を分ちけり。

瀬兵衞は此緣組の世間に知れて、鼻蠢めかしたき了簡なれば、此度は類

をさる華族方へ縁づける、と出入のものに風聽すれば、噂は忽ち濱中に擴がりて、華族と聞けども驚くもの無く、新平民の間違では無いか。されば華族にも色々等ありて、詐欺取財云て苦役に遭ひしもあれば、鐵道馬車の車掌してござあらせらるゝもあり。否、華族方へ行くは行くなれど、小間使に行くのではあるまいか。そこらも見當なれど、あの父親のことなれば、お部屋樣かも知れぬ。と取々に沙汰す。

瀨兵衞は苦笑して、奴等今に見をれ。卿寧の節には御前樣を拜まして、眼球を潰してくれるわ、と驕て七荷の荷物整々として練行けば、はてなと衆は思懸けず。今日はいよ〳〵花嫁の乘込といふ日、五時の汽車と聞知りたる近所のものは、あの鼬屋めが歴々へ嫁入らせる姫君に、大方金紙の貼附紋したる黑金巾の裾模樣着せて、緞帳のお輕見るやうに裝りて、耻辱曝すを見て嗤つてやれ、と町の兩側に立並びて、それ最出ると動搖めく間に、曳出す車の幌の中、桃の花のごとく上氣せる面を俯向たるお

類の姿は、艶麗と謂ふも愚なり。白無垢の二枚襲に黒縮緬の紋服、裾の模樣は膝懸に掩れて見えず。說を爲すものあり、あの父親なれば、後來の爲を思ひて裾模樣かも知れず。其はともあれ、繻珍の帶も大分の金目、頭の具も相應に飾立てたる美形を見るにつけて、彼ならば嫁にもらつたものを、と今更悔む息子株もありし。

（二）　茶箱に詰めて海の中

婿君は謝辭いふばかり、當日の雜用は一切瀨兵衞が持にて、約束の通り簡略なる祝言の式あり。

花嫁は明くる朝より襷懸になりて、とつぱくさと勝手を働くこと、家に在りしに違はず。公恒は美人を體無しにすることゝ傷めど、人手無ければ几帳の蔭に端然としておくこともならず。其代りには舐めるやうに可愛がりて、類や〳〵と喚ぶ聲朝夕の絕間無く、首たけ惚れて大事がれば、お類も最愛さは勝る初めての殿御。男といふものは父親のやうに、邪慳なものとばかり覺えしに、かういふお方もあるもの哉、と夫婦相愛の家內安全に、公恒は始め五千圓といふに惚れてもらひたる女なれど、慾はいつしか其方退けになりて、やゝ懷中は溫まれど、浮氣せうといふ了簡も出ず、お蔭にて安き月日を送らるゝ今の身上を樂しく、神妙に家にの

み引籠りてありけるが、明くる年の暮には京といふ女子を設けぬ。
瀬兵衛は初孫と喜びし間も無く、其年の秋家督の信助、氣も無く見えし脚氣を踏出して、醫者に診てもらふも待たず、卒に衝心して、母親の傍へ逝く身となりぬ。
借財ゆゑに身代限させられし可怨さに、わざ〳〵我檐下に來て首縊るものありとも、不便の不の字も思はぬ瀬兵衛なれども、是には力落して、なるほど行末の慮はれし信助ながら、あれまでに育てあげてから、取られたる殘念さ。
曩には女房を亡くし、今は息子を殺して、生存る娘は他家の人になりたれば、思はしう便にはならず。謂はゞ煢獨も同然の老夫、金錢あれども此世の味氣なさと、最五年若き比には、これしきの事には屈げざりし瀬兵衛も、老年には負けて心弱く、金貸しつくる時の氣分は格別、こゝの情合だけはどうやら普通の老夫じみて、哀悼に來りしお類に向ひ、涙を

流して復らぬ事を繰返しけるを、娘は心の中に驚きて、年寄ればかうもならるゝものか。然りとは舊時とは別の人のやうな。これほどに弱られては、春秋も長うは思はれぬに、相も變らず、氣を役ふ金貸渡世などは、きつう御身の毒になれば、母樣の御遺言通り樂隱居になりて、花など栽ゑて心安く暮したまへ、と辭を盡して意見せしが、瀬兵衞はいかな肯かず。強情は舊時のまゝに、白髪頭を掉りて、隱居するならば死んだが勝。人間は筋骨の利く間は、稼がねばならぬ理窟に出來たものを、可惜隱居して、見す〳〵儲かる金錢を他人に占めらるゝが口惜い。隱居ならば我は極樂へ行つてする。

このやうな氣で無うては、誰も緊と握りて放さじとする金が、我手中に來るものぞ。世中に貧乏人の多いといふも、畢竟は皆其方が今謂うたやうな了簡なればなり。

仇には聽くな。公恒殿にも此話爲てお聞かせ申せ、と風が障りて此方が

意見さるゝ番に廻り、お類は次ぐべき言葉無くて已みけり。瀨兵衛はそれより次第弱りに氣力薄らぎ、遽に皺も殖ゑて、骨は細り。肉は黒み、哀れの姿となりて、咳も痰もしからず切なげに聞えけるが、何處に爰と病む所も無くて、霜に遭へらむ芭蕉の如く、ぐた〳〵と衰へ果てゝ、遠からず此世を(さらば)の塲にぞなりける。

この二三日は氣分快れず、身軀も太儀なればとて、假初に敷かせし床を其儘に、枕も重き日數積れば、何十年にも藥の臭嗅がざりし身が、此度の仕合に瀨兵衛も心細く、遽に東京なるお類を呼寄せ、やさしき看病に子といふものゝ賴もしさを今ぞ知りて、此嬉しさを思へば、命と釣換の大事の財を置土產にしても、格別浮ばれぬほどの恨は遺らず。心の確なる折、有金の額、地面、株券、それ〴〵の所有を巨細に語り、聞かせ、その始末方まで懇に囑きて、さて命は何程ありても否にはあらねど、人の命數に定もあれば、此上に思ひおくことなし。心閑に臨終を待たむ、

と苦しき息を吐きて、覺悟の體を娘は悲しく、させる疾病にもあらぬものを、不養生して好むで壽命を縮むるにも當らねば、と公恒も倶々口を酸くして、誰彼と聞ゆる名醫を薦むれど、瀨兵衞は首を掉りて、無き命は藥の及ぶことにあらず。今更高金出して醫者呼ぶは、盜人に追錢も同じ事。構へて、無駄に錢をつかひて、病人の氣を傷むるな。我はかくまで大事に思ふ金錢を、いかに我物になりたればとて、滅多には費すまじきぞ。兎角は二代目にて潰るゝ身上、と可恐き面色して公恒を睨めば、夫婦は口を揃へて、何の〳〵今までとは格別氣を緊めて、隨分儉約に、又近き内には官員の口のある理なれば、少くともその月給だけにて月々の家計を立て、讓られたる金額は一錢たりとも減すまじき所存と應ふれば、暮々も山事相場などに手出はせらるゝな。此老夫が命に關はる病人でありながら、切角溜めたる金の減るが否さに、診察料の高い醫者に懸るを控へて死ぬことを忘れまいぞ。然れば葬禮とても其心にて、僉末の

段は棺桶の代りに茶箱に詰めて海の中へ投げこむとも、不孝の子とは思はぬぞよ。合點が行つたか、公恒殿、返事の無いは不得心か。其了簡にては瀬兵衞はいつまでも死なれぬと苛立てば、何事も御言葉次第、成るべく質素に取計らひ申すべしと謂へば、その(成るべく)が氣に入らぬ。思切つて麁末にと呼吸苦しくなりて、それより二日目の夜の未明に歸らぬ旅に赴きけり。

ある金錢なれば、思のまゝに追善營みたき子の心なれど、二度とはあらぬ臨終の言は背き難く、葬禮も式ばかりに濟せ、遺言なれば横濱の住居は有形のまゝ野川に讓りて、東山夫婦は東京に引取りぬ。往時の氣の公恒ならば、新に御殿を造へ、二頭立の馬車も誂へ、華族の館に妾といふ奴の無いのは寂しいなどゝ、俄分限の大氣を出して、三日天下の後は、また其頃の廐ほどの借家住居に引込みて、面白き夢や覺めて詫しき身ともなるべかりしを、熟々世間の有様を觀、近くは瀬兵衞が心意氣に發明

して、金錢といふものゝ獲難きに、我身の僥倖は、首斬らるべきを助かりしほど、肝に徹へて有難く、それにつけても此身分に爲てくれたる人の志は麁末にならず。錢持ちながら儉約する心持は、奇術を知れる勇士の弱き敵と立合ふごとく、金も無きに好きな眞似するは、病人の毒を飲むにも勝したる危さ、と悟を開きてよりの吝嗇加減は、瀬兵衛に見せざりしが悔しきばかり。それも其理か、今年は四十三になりて、愚なる人さへ分別の盛。

（四）幽靈の出る賣家

淸兵衞が遺産は彼持參の五千圓と丶もに銀行に預けて、その利子にて生計は裕なるを、公恒はなか〳〵裕にせず。月々其內の幾分を餘して元金に加へ、十年の後には何萬圓になるといふことまで算用して見れば、一錢も仇には費へぬ理と、おもしろくも無きことを常に聞かさる丶お類は、それほどに爲ずともと思ふ折もあれど、父親が丹精せし身上を、むざむざ散盡さうよりは善き事と、其金を我物の顏もせず、公恒が爲すま丶に、四五年の間に演劇一場見るでも無く、米の小買する苦勞の無きを仕合に、憂も愁もお京の愛に慰められて暮せしが、一年寒氣の例ならず嚴しかりし冬の半より、日毎に暮方の心地惡く、夜は盜汗をか丶ぬこと無しと言出せしが、日を逐ひて顏色蒼く、身は羸瘦りて、紅きもの丶痰に交りけるを、然せる事にもあらじと等閑に過ぎしが、次第に胸の痛の募るに堪

へかね、やう〳〵醫者に診すれば、患者より驚きて。こは肺勞とて忽せになるまじき病症なるに、然りとは今まで放棄にして過されたる不念さ。今日服藥して明日は快癒なる輕症にもあらざれば、其意にて緩々治療を受けたまへ。望むらくは、暖かき處へ轉地して療養せられたしと勸めけるが、費用を厭ふにはあらねど、家内無人の上に子まである身の、兎角に東京を踏出しかね、家にゐても養生居かず、藥は飲めども容體は變らぬに、公恒はあの醫者めは大の藪だと見限りて、噂高き專門醫の診察を乞ひしに、大分の手後れと眉を顰められて、さてはと公恒は卒に騷出し、今は猶豫すべき所にあらず。早速轉地療養と思立ちて、明日はと語り合ひし其夜なりし、お類は夥しく咯血して、九死に一生も覺束なく見えければ、公恒は前後不覺に取亂して、哭かぬばかりに騷げども、此期に及びては名醫奇藥も其効あるべからず。譬へば道に迷へる旅人の山に入日を惜まむがごとし。

醫者も駈着けたれど、はや脈搏は有るか無きかに虚脱したるに、式ばかりの施術は生きたる人への心寛め、醫者は愁然として首を掉れば、見る間に患者は昏々として眼を閉ぢてけり。

憐むべし、お類は生年二十七歳を一期に、安達の血統は全く茲に絶えぬ。此事横濱に知れて、あの娘には罪無く、今死なすは不便なれど、それも父親が一生に非道なる事を働き、幾千人の累なる怨念安達の家に祟りける、因果の報ほど世に可恐きものなし。

之を念ふにつけても、人は善根を施すべし。釦屋一家の末路こそ、非義の渡世する輩の好き懲惡と言囃して、お類の亡なりけるを皆人憐みけり。

公恒はいとゞ歎に沈みて、我家に取りては大事の妻が後世の償なればと、思ひのまゝ手篤く供養しても、可懐き面影は眼前を去らず。復らぬ事を思ひつゞくる側に、頑是なきお京が久しく見えぬ母を慕ひて、父には抱かれず啼泣ぶに、手も着けかねて困じ果てつゝ、その心根を思へば、我

さへ涙は出づるものを。

お京は乳母に預けて、其身は一室に閉籠り、氣は屈しても、襖開けて茶を持て來る妻亡き後の、萬につけて物足らぬ勝の詫しく、然ればとて女はお類の外にとも思はれねば、不自由はしながら、左右の用勤めさする妾をといふ元氣も出ず、鬱々として長大息吐きてのみゐたりしが、果は物騒がしき都の住居は懊惱く、近在に思はしき隱家もがな。海か山か青田などを見晴して、長閑に一生を送らばや、と然るべき所を求めけるに、相州片瀨村に、前には海を眺めて高臺に別莊造の建物あり。之を地面附にて賣るよしを知らする人ありて、價を聞けば、風呂場から車の置場まで附きて、九間もある家の地所共に、格外の廉價が氣に入りて、早速内見に出向きけるに、建物は良古びたれど念入の普請堅く、こゝぞと修繕せねばならぬ所も見えず。庭も相應に出來て、荒れたれども舊時の幽しさ。

買ふ身は蹈倒しの豫算より、まだ〳〵低廉に驚きて、よくも今まで買手の附かざりしを怪み、近所の掛茶屋に入りて、知らぬ顏して樣子を尋ぬれば、無料でも皆樣が否とおつしやりまする、と亭主の苦笑するは、いかさま深き仔細のありさうなと、よく〳〵聞けば、幽靈が出まする。

さては誰の買はぬも道理、と公恒は調子を合せて立出でしが、其足にて直樣持主の家を訪ね、不思議のある家といふに難を附けて、思ふまゝ安く買取り、根岸は四五日中に引拂ひて、荒れたる庭の垣も結ひなほさず、門の口の草を少しばかり挘らして、片瀬に住居を移せしは、お類が沒りて半年ばかりになりぬる頃。

誰が傳へける虚說なりけむ、此家に幽靈の影も見えず、寸燐ほどの陰火だに焚えしことなく、年古る大鼠の一疋出でたりけるを捉へし後は、睡を驚かす音もあらず。

當座は梢を吹く風、荒磯の浪に寢られぬ宵もありしが、それも馴染めば

朝夕の友となりて、かばかり住心好き家の、安く手に入りたるを歡びて、今は捨賣にしても倍がものと、買うた日から賣つて儲けることを考へて、公恒は切りに得意なり。

かねて備へる乳母は、金持の華族と聞きて喜びて來りしに、案の外なる公恒の吝嗇に舌を卷きて、月に一二枚は姬樣のお垢着を頂戴する下心の的が外れて、戶外へ出ておむづかる折々は、召上り物を買うてあげるなど、我が巾着の口が弛むばかりなるに末を見限り、今度片瀨へ引籠むを、好機會に無理暇取るを、彼地へ着きて代あるまでと唯管賴まれて、有繫に振切り難く、この地まで隨從して來りけるが、東京とは違ふ邊鄙なれば、小女置くとても、今といひて直の間には合はず。藤澤に奉公望みの女あれば、四五日の中に御目見につれましよ、と世話するものゝ辭なりしが、いさゝか差支ありとて、十日たてども沙汰無く、廿日ばかりになりて、やう〳〵明後日は確にとの挨拶ありける朝、東京の乳母は、我家

に幽霊の現はるゝといふことを、始めて近所のものに聞きて身毛を竪て、怨念の遺れる顛末を話されて、其女の身投せし井戸は、我居間の真後に當るに冷汗かきて、あれ恐やと一散に走歸れば、晝さへ昏き廊下の物凄く、睡れるお京をそのまゝ床に入れて、心も空に荷拵を急ぎ、主人は奥の間に音もせぬを幸ひ、裏口より忍出で、足駄置忘れて逃亡せけり。

（五）　氏より育の田舎娘

公恒は片瀬に引籠りて、浮世の事は忘れ顔に、歌書なむどを繙きて、詠めもせぬ、けるかな、ぞる、こそれに慰めど、兎角に氣は腐り、心は冷かなる灰の如くなりて、何時死ぬるとも惜からぬ身の、行末はおろか明日の希望だに無く、夜は眠て朝は起きて、三度食事するばかりの人となりて、折々は濱に出でゝ散歩することあれど、格別景色を樂むにもあらず、浪の音を聞きて俯きながら往きつ來りつ、幾度か長大息して、目的も無く沖の方を睨みつけ、やうく脚の疲るゝ頃、悄々家に歸りて、誰に言葉を懸くるにもあらず、奥の一間に衝と入りて、紙門を立てゝ後は、起きてゐるのやら、寢てゐるのやら、闃寂閑として音も無し。

最愛盛のお京は、藤澤から傭へる乳母に預けたるまゝ、何が日にも我手に抱きしことなく、割るゝほど泣きても、泣かすなとは謂はず。一日磐

の聞ゆること無くても、何處に何してとも問ひもせず。一切我居間に人の入ることを禁じて、獨り机に凭れて閑寂に考ふることあり。或は紙を展べて何やら物書くこともあり。

一日も之に異れる擧動無く、いかに物思ふ御身かは知らねど、繪にでも書きたるやうに、毎日あのやうにしてゐられて、好くも御辛抱のなること、と乳母は驚きて人に語りぬ。

公恒も辛抱せうとて、かくするにはあらねど、机の前に坐れば、一日が二日でも立つは懶く、其儘が氣が向きて、今となりては然までに金錢蓄むる念も無ければ、費ひて樂まむことも思はず。唯人間の身が懊惱くなりて、これぞといふ苦勞は無けれど、心あれば物の思はるゝが煩はしく、その鬱陶しさに堪へかぬれば、我子も自から邪魔になりて、無くても可きものを、生れてからは所爲無ければ、唯そのまゝに生育つものならば生育て、と乳母まかせにして、幾日も顔見ることは無かりし。

乳母は張合抜けして、おのづから大事に懸くる念も薄らぎ、いかやうにも育てかしと、棄つる氣にはなりながら、側へも寄せぬ父親を他人のごとく、おのれを母と切りに慕ふ子の情に絆されて、麁畧にもせず健かに育て上げて、早くも七歳の春を迎へけり。

母の親に肖るとも父に肖るとも、いづれ外れはあらぬ眉目好き同士の間の子なれば、その美しさ玉とや謂まし。加之利發の天性なれば、乳母はいよ〳〵捨て難く慈しみて、親に代りて行末を賴もしがり、當今は女とて學問せねばならぬ世中、磨かざれば玉も光無しといへば、最早學校へ入るべき年紀なるに、殿様は少しも構ひたまはず、このまゝに生長たせたまひて、何と遊ばさるゝ御了簡ぞ、と可恨さの餘り此事を公恒に訴へければ、いと不興氣に、好きやうに計らへと、それでは親子の情といふものが無さ過ぎるおつしやりやうと、お京が可愛ければこそ腹も立てしが、兎も角も許可の出でしを喜びて、村立の學校へ通はせ參らする事に

はなりけるが、華族の姫樣ともあるべき御身が、絹にも木綿にも古びたる召物のみにて、なか〳〵人中へお出し申上ぐるほどの御服にあらねば、木綿にてもあれ、せめては新しうして、唐縮緬の被布なりともお着せ申上げたしと願へば、公恒は赫と怒りて、新しき衣物着て行かねばならぬ學校なれば、行くには及ばじ、と暴かに罵りたまひけり。

こゝら邊の兒女に交りて、墨と雪ほどには見えぬお京の服裝を、附添ふ乳母は世間に羞ぢて、獨り心を傷むれども、公恒は些少の月謝出すさへ澁々と、一粒種の實の娘を、居候子を遇ふやうに、萬につけて厄介がるを、乳母は見るに見かねて何程業を沸しても、奉公人の悲しさに容喙はならず。さうは思へど怺へかねて、幾度か申上げし事もありけるが、いつも木で鼻くゝる挨拶のみ。執冗いひて粉虀に呵りつけられしに手懲して、到底無駄なれば躍起勃起氣を揉むだけが損と諦め、やむごとなき御身分に生れながら、情無き御父樣を持たれたるが御不運と、不便はい

とゞお京に加はりて、やさしく、忠實に冊きまゐらせけり。
乳母が自慢は、御服裝こそかく貧窶しけれ、有繫に歷々の御胤は町人百姓と異りて、一を聞き十を知らるゝ御發明は、餘所の兒女が一年で覺ゆるほどの學問を、わづか半年にて御卒業なされ、試驗の度に褒狀やら御褒美やら、と懊惱がらるゝほど人に語りけるが、十三といふ齡には小學全科を卒業せしを、公恒は一向嬉しさうな顏もせず。讀書一通覺えたれば、女の學問は其で可矣。此上は家政とて、裁縫から水仕の業まで何彼となく、所帶の持方を習ふが肝要なれば、と味に理屈を附けて、最初は小間使代りに使役ひ、おひ〳〵に煮炊の手傳までさせて、給金無しの奉公人置かれたる御意か。然りとは餘りの爲され方、と乳母は淚を流して口惜がれど、お京は幼少より厄介者に遇はれたるが習慣になりて、衆にはお孃樣の姬樣のと呼ばるれど、人の娘は皆そのやうに呼ばるゝものと心得て、綺羅着飾りて大勢の侍女どもに冊かれ、一町の道を行くにも馬

車に召さるゝ人の身上あることを知らず。

都へは遠からねど、相模國の濱邊の小村は、色黒き男、裙褰げたる女の往來多く、何を可羨しと見聞くものゝあらざれば、臼から金の簪の欲しきこと無く、繻珍の帶の好もしきことを覺えず、海を見、船を見、在鄕唄を聞き、畑を見、馬を見、松風を聞馴れて、胤はやむごとなけれど心は田舍娘になりて、しかも他人のごとく餘所々々しき、父親の笑顏は元日にも見ることなければ、親の子を愛しむといふは、どれほどの事やら知らず。唯乳母一人を天にも地にも換へ難く最愛きものに思へば、その乳母の爲なる手業を、我も爲ることを厭ふ氣色は無くて、下々の如く襷懸になりて、勝手までも働くを、乳母は淺ましがりて、いかに殿樣のおほせつけなりとて、それほどまでに遊ばさいでも濟む事なれば、貴孃は薪の烟のかゝる所へ、お出なさるゝは御無用になされまし。私が好樣にいたしまするると、成るべくはお京を姬樣にして、野からず躾むものとは

心懸くれど、縮緬の細の上に踞りて、箸より重きものは側からお持たせ申さぬ境涯ならぬ、大根一把の直段までも、覺えじとすれど自から耳に入る身上につれて、心性次第に鄙しう、成下り、擧止もあら〳〵しく、言語に此邊の訛交りて、それは何程乳母が心着けて、日に幾度となく窘むれど、朱に交はれば紅くなるの諺。いつと無く田舍に染みて、油氣薄き髪の艶は消え、手足の指赤う太り、體に肉附きて、笑聲高く、なるほど鄙には希なる美人なれど、都へ持て行かば、然までは人の吃驚せぬ姿と變りぬ。

（六）裏から綿まで添へて老の手織

歳月流るゝこと迅速に、お京ははや十五になりぬ。親の愛も淺からず尋常に育てられなば、五萬圓といふ身代の娘ならでも、纖蘿蔔刻む術は得知るまじく、やう〳〵自身に化粧のなるべき年紀なるに、身分こそ姫樣なれ、幼少よりの躾に所帶染みて、覺束なくも家計を預るべくなりけるを、公恒は陰かに見て取りて、長く置くほど味方になりて、惡智惠附くるばかりが能の乳母に、高い米を食はれて給金やるは無益の至りと、一日一間に呼寄せて、娘もお蔭にてやう〳〵一人前の女になりたれば、最早乳母にも及ばねば、今日から暇取りてくれるやうに、と藪から棒の主人の言葉。

もとより傭人の身なれば、いつか暇の出るは承知の上なれど、今とは思ひがけなく、母御のあるお身ならば兎も角も、お京樣の外には家內に女

の切も無く。その唯お一人が、いかに御用に立てばとて、まだお十五は無心の子供衆に、今から所帯の御苦勞させまするがお慈はしや。せめては最二三年お側にお附き申上げて、御縁談のお噂などあらむ頃に、行末も大方は見屆けて安心して、お暇の出るものならばお暇を戴きたき願、と心には思へど、言過しては平生御呵蒙くる種と、口頭には唯姫樣のお可懷しく、今日や明日が日にはなか／＼お別れ申しあぐる心無ければ、御不用の乳母なれど、格別の御情にて、此一二年御奉公のなりまするやうにと、まだ別れぬ先から、やがて別れむことを想へば切りに悲しく、鼻聲になりて願へども、公恒は聽ばこそ、人の涙を葉末の露の落つるほどにも思はず、例の世間が懊惱く、人間の身が我ながら疎ましさの無頓着から、こんな言を聞かさるゝも可忌く、暇やると一度言うたら、遣る遣る。彼方へ行てくれ、最早用無しと謂ひざま、くるりと背後向けて机に倚りぬ。

それからは呼べども石佛のごとく、謂ひたい言だけ謂うてゑまへば、他の挨拶は聞かぬ平素の偏屈を知れば、乳母は悄々立起りて、お京の部屋へ入るよりわつと泣出せば、どうぞゑやつたかと驚きて、樣子を訊ぬるお京の手を把りて、涙ながらに有りける次第を語れば、聞く人の驚愕と悲歎は一層にて、お前に別れては何樂みのあるものぞ。また私の手一つにて、此家の始末のなるべきや。私の爲を思うても、家の爲を思うても、お前に暇は出されぬ理。誰が何と謂はうとも、お前は何處へも遣りはせぬ。何時までも私と一所に此處に居て、死ぬまで別れてたもるな、と乳母に縋りて泣入りしが、お前と私ばかりが別れたう無くても、父樣の承引無くては、到底往かねばならぬお前の身なれば、どのやうにも私が父樣にお願ひ申して、長くお前の居るやうに、これから行つて、と衝と立つ袖を乳母は捉へて、何と遊ばされます。父樣の御氣性は御存じでありながら、よしなき事をおつしやつて御機嫌を損ねたら、また御呵を承け

ますする。

今日限御別れ申上ぐればとて、また拜顔のならぬでは無し、遠き所へ參るでは無し、僅かの道の藤澤在、朝早う出ますれば、午後には參られまする近所なれば、これから月に三度も四度も、御機嫌伺ひに上りまする。念うて見ますれば何の悲しいこともござりませぬ。殿樣の御意に從ひまして、乳母はお暇を戴きますれば、姬樣もお思切りあそばして、お暇を遣はされて下さりまし、と立派に言へど眼にもつ涙に、哀ぞ更に勝りける。

お京は袂を拂ひ、他の思ふやうにも無く、お前は情無う暇取る意か。私に別るゝを悲しう思うてはくれぬのか、と怨じかくれば、乳母は再び袂に縋りて、勿體ない、このお訣別が悲しう無うて何と致しましよ。今は萎びて水だに出でぬ此の乳も、舊時はぼた／＼と肥えたりしを、紅葉のやうなる可愛ゆき御手に弄り給ひ、花の蕾のお口に入れて、朝夕此懷を

離れたまはざりし其比から、姫樣と申上ぐれば、片言に乳母まと馴染みまゐらせし、そのいとしい〳〵貴孃樣に、此乳母が鬼であれ、お別れ申すが何の嬉しかろ。父樣に願うてやるとの御言葉は、身に浸染と有難けれど、切角の芳志も通らぬことゝ能く知れてあれば、何もおつしやらでお暇を遣はされませ。せめて今宵は添寢して、久しうお耳へ入れざりし、舊時馴染のお伽噺をいたさまして、それをば乳母が置土産にと、聞くより袖に面を包めども、泣聲を洩しつゝ、お京は紙門の外に出でけるが、やゝ一時間近く過ぎて、廊下に聞ゆる足音に、乳母は涙を拭ひて、音信はいかにと、心騷がしつ待つ所へ、お京ればた〳〵と駆來り、岸破と俯してぞ聲を惜まず泣立てける。

我子が身に換へての哀願なれど、他の親とは違ふ公恒なれば、不用になりし傭人を置きて何にか爲む、と例の如く闇入るべくもあらざりければ、お京は居間に歸りて云々と乳母に語るも力無し。

申上げませぬ事か。それは疾より覺悟の上。貴孃樣がそのやうに思召して下さりまする御志をお土產に、私はお暇を戴きましよ。いつまで泣けばとて復らぬ事と、やう〳〵諦めて、これを名殘と終夜語りつゞけ、明くれば朝早く出でむと心組せし乳母も、今日となりて見れば惜まるゝ訣別に、最一時、半時とお京の側を離れかねて、正午も過ぎけり。

このやうにして居たらば、夜に入るとも明日になるとも、出でゝ行かるゝことにはあらず、と乳母は一思に立出づれば、お京は泣顏掩して、一里ばかりも送りて來りぬ。

何處までお見送り下されまするとも、此名殘の盡るにあらねば、これよりお歸りあそばしまして。私も來月の初旬には、何用を差措きましても、乾度お尋ね申上げますれば、其節には矢張乳母よと、從來のやうにお言葉を下されまし。

近き內に尋ねて來るを樂みにして、今から待つてゐるほどに、嘘言うた

らば怨むぞや、とお京は乳母の手を把りて、泣かむとすれど車夫等が見る目を愧ぢて涙を飲めば、乳母はなほさら悲しさに、吭は塞りて辭は無く、唯お京の顔を瞶る眼に、涙は湧き餘りて膝に散りぬ。

やがて乳母は心を取直して、左樣ならば、これにてお別れ申上げまする。隨分お身を大事に、病はぬやうに遊ばしませ。第一には御父樣に孝行を盡されて、あの御氣性も和らぎて、親御樣といふもお子樣といふも、唯お二人の間なれば、便となられ力となり、睦まじうお暮しあそばさでは。行末貴孃樣のお身の御損。御得心が參りましたか。平素から冗いほど申上げます言なれど、乳母が申遺しまするは此言ばかり。御機嫌よろしうお在なされまし。と待たせたる車に乘りて彼方向けば、お京は路傍の榛樹に倚りて、多時は車の影を見送りけるが、今は喚べども回らぬ乳母がことを思ひつゞけて、泣く／＼我家に還りけり。

乳母の下りける後は、飯炊老女の給金安きかはりには、用にも足らぬを

合手にして、戸外の奔走、庭の掃除、水汲、薪割の力業には一人の老僕あれど、孰れも尋常の益には立たぬを、それ〴〵に遇ひて、お京は身一個に所帶の世話を預り、結髮も自鬢の形を厭はず、化粧とては臙脂さすことも無く、かまはぬ姿は自から下女となりて、散々に働くばかりを毎日の務に、何の思出といふこともあらざりし。

在所に歸れば、想ひしよりは忙しき身なれど、乳母はお京の戀しさに、半年が間は毎月缺さず尋ね來りて、其度々に不自由の中を工面してお京への手土產。七十に餘れる母は、娘から姬樣の御慰はしさを聞きしとて、老が身に丹精して手織の絲織一反、裏から綿までも添へて、乳母が脊負ひて來りし比の樂みは、少時が間の夢となりて、其年の秋似合しき緣ありて、乳母は大磯の在なる正蓮寺といふ法華寺に片附きぬ。人の妻となりては我身も我の儘にはならず。逢ひたさは舊時に變らねど、思ふのみにて訪ねかぬればとて、相互に月々の音信にて、堪へがたき思

の十分(ぶ)が一を霽(はら)しけり。

（七）　盛りゆく女の十五六

晝さへ陰々として幽靈も出づべく、虚然としたる家の、數ある不用の間は雨戸を鎖ぢて、公恒の書齋、お京の部屋、玄關、勝手口の外は、日影の射入るも最稀に、廊下を人の行く音高く長く響くも凄じく、長閑に霽れたる朝も、此家の内は雨の徹下る日晡のごとく、大方の元氣なる人も半日此處に籠らば、自から心結ぼれて根も無き思に沈むべし。

親子二人睦じう一間に膝擡合はして、種々の事して慰むとも、一月の辛抱は難し。やう〳〵二月を忍びて、それからは入牢の身に同じく、逃げて出らるゝものならばと、長屋住居も都の可懷かるべきを、公恒父子は十日に一度物言ひかはすにもあらず、四間も隔てゝ往來もせず、舟無き島に住めらむごとく、互ひに寂しきも早十歳にぞ餘りぬる。

それを我から好みたる公恒は、憂くも愁くも念ふまじく、覺めたれども

眠れるごとく、生きながら死せる心の捨世人には、或は好もしき境涯なるべし。哀れはお京の身や。東西分かざりし頃を東京に送りけるのみにて、都の繁華の状は得も知らざれば、世中はかく味氣なきものと覺え、樂みは乳母の文見る外に何か一つあらざるに慣れて、明くれば起き、暮るれば寢て、父親の苦き顏見て、薄闇き處に住むを、誰も異らぬ人の身上と念へば、かゝる住居も辛抱する氣は無しに辛抱して、心の鬱ぐ折々に、南の窓を開きて遠く望めば、海は碧く滑かに、浪は白く躍りて、天の色は得も謂はれず麗しく澄めるに、萬狀なる雲のをかしさ。鳥は高く飛びて遂に行衞を知らず、舟は靜に行きて浪と雲との間に落ちぬ。

近くは何島、何の岬、木立の蔭より烟颺りて、干潟を人の豆のごとくなりて來往ふも見ゆ。豆州の岬、相州の山々、駿河の富士はいつ望めても飽かず、心淸しく身の輕うなる想ひして、お京が友無き孤獨を慰むるものとては、此窓前の風景を、そのまゝの錦畫の外はあらざりし。

盛りゆく女の十五六は、氷解くる春の川水温み初めて、若草の萌ゆる野邊に、花もやう〳〵待たるゝ節、老年の冬を識らず、苦勞の秋に遠く、只管心身の發育する勢は、薪の多きを恃みて火の將に熾ならむとするに似たり。

然れば冥々裡にお京の心も春に遇ひて、萌出でむとするを抑へられ、剗退けむとすれども力足らず、嚴霜枝頭の蕾を封じて、いつまでも暖氣の回らざるに、梅は遂に開かぬまゝに萎みて、未だ梢を落ちざれども、生氣は絶えて黑うなりぬる身は、花顏衰へて色を失ひ、柳眉顰みて常に開かず、心悶々として愁ひ、氣は盡きて冷かになりぬ。

陰性は母より享けたれど、更に其度を強めて、話聲の高き、足蹈の暴かなる、渾て形に見ゆる樣は舊時にも變らねど、齡一歳づゝ取るほど心は沈み勝になりて、今年は十七、山茶も出端の盛ながら、唯何處やら美しきばかりにて、姿は鄙び、心は硬りて、世間の娘のやうに、柳の風の面

を吹くがごとく、ふつくりと温染なるところは有らざりき。

（八）　いつをも知れぬ命

父は朝疾く起出づるを例とすれば、お京は日出と同じ頃に目覺まし、老女が朝餉の仕度の手助して、やがて書齋に呼鈴の鳴るを合圖に、戸を開けに行くが役なれば、今朝も今や〳〵と鈴の音を待ちて、毎日の時刻を過ぐるに一向音無ければ、もしや聞損せしか、それにしては、幾度も人の行くまで鳴らさるゝ理なるに、さてはまだお目は覺めぬ事か、ついぞ無きと可訝く、書齋へ忍び行きて徐に紙門を開くれば、いかにも內は闃寂にして、睡の濃かなる氣勢なり。

お京は竊と一枚の戸を半開けて、麗々と浪に照添ふ日影を導けば、夜衣の襟より差出でたる面は彼方向になりて、熟睡の姿は明かに見えければ、舊の如く鎖して、此一間は夜のまゝにして忍足に立出でけり。

されども不思議は、はや正午前になれども起出でざるのみか、目覺ませ

し様子も無く、書齋の庭の隅なる椿の梢に、二三羽の烏宿りて、可忌く鳴立つるに心噪ぎ、驅着けて見れば、父は今朝のまゝの寢姿、變ること無し。

よう寢らるゝことゝ呟きて、此音に目も覺めよと、わざと暴かに戸を繰れば、顏ふりむけて、騷がしと睨むべき父は、仍動きもやらざるに氣遣はしく、其方へ廻りて顏を覗けば、氣力の衰へたる面色、それは常に異らず。

然れども心に懸りて、熟と凝視むる間に、どうやら鼻息のせぬに氣着きて、手を當つれど、耳を澄せど、呼吸は全く有らざりけり。思はず頰に觸るゝ指頭に冷々と、肉は氷の如くなりて、命はいつか絶えたりし。

お京は仰天して、消魂しく老女を呼び、老僕の名を喚きて、何と爲む方を知らず、唯途方に暮れてゐたりけるを、場數覺の物馴れたる老人男女は、平素用に立たぬほどにもあらで、然までは狼狽へず、効々しく世話

して、やがて醫者も來りけれど、既に事切れて用うべき藥もあらず。弔詞いひて死亡屆を書きて、何の効もなかりし手鞄提げて悄々と歸りぬ。お京は何が何やら心確ならず、逆屏風よ、線香よ、机よ、花よ、殿樣を北枕に、と二人の立騷ぐを、柱に靠れて惘然と眺むるのみ。勵まされてやう／＼動けども、指圖無くては何も得爲ず。人の死ぬといふは此樣なものかと、思懸けなく珍しくもあり、呼べども起きず、聲も出さず、此まゝ土の中に埋まりて、またとは見えぬ姿と思へば、哀れに悲しくもあり、我身一つに遺されて明日からの行末を慮ふれば、漫に心細くもあり。千百の思に一つの心は亂れて、現とも夢とも分かず惑ひけるが、ふと書棚に飾れる手文匣に眼を着け、それよ、此裡には大事の書類を入れたれば、我不在の折などに事起りて、其方が思案に餘らむ時、開けて見よと謂はれしことを今思へば、不在の折とはかゝる不慮の事なりしか。思案に餘る今日ならでは、何日か此蓋を取るべき、とお京は遽

に勇み立ちて、その手文匣を取下せば、浮萍に水の流の蒔繪も、あゝ我身の上。

文匣を開けば、裡に二通の封書あり。

我に宛てたる一通の封を切れば、所有の資産を明細書にしたる、金額にして六萬餘圓がものなり。

其末に記したるは、かね〴〵語りける東京の我從妹に一子あれば、此身上を持參にして其者に緣付くべし。努々我遺言に背くまじく、早速春山を呼びて萬端の世話を賴み、我亡後の親と念ひて大事に仕へよ。委細は別札に認めたれば、春山好きに計らふべし云々。お京は半夢の覺めたらむ心地して、いかにも東京麴町三番町といふ處に、春山多賀とて父の從妹なる女、一人の男子を有ちて、今後家にて暮す由は豫ねて聞けり。近き親戚はこればかりといふに、一向音信もせざりしは、什麼なる仔細ありてか知らねど、遺言なれば此人を呼迎へて、兎も角も指圖を受けば

や、と遽に老僕を走らせて電報を送りぬ。

かゝる折から便になるは乳母ばかり、と大磯在へ急の使を遣りけるに、夕方歸り來りての返事に、五七日前より積氣にて床に就き、家の中を行くさへ覺束なければ、明日にもあれ、少しにても快氣なり次第伺ひても參るべし。お一人にて嘸かし途方に暮れておはす事と思へば、なか〳〵寢て居る空は無けれど、と枕に縋りて身悶せらるれば、劇しく差込みて御難義の體、と見て來ての物語。

折も折とて乳母が病氣とは、如何なる因果ぞや、とお京は力落して、重ね〴〵の不幸を悔みつゝ、此上は東京より人の來むまで何も此儘にしてと、老女を相手に通夜して、明くれば久しぶりにて客座敷の掃除して時刻を待てば、やがて門の人聲は車夫の物言ふと覺し。老僕驅來りて、御客樣の入來と告ぐるに、お京は老女と共に玄關に出迎へぬ。

先に立ちて入來るは從妹なるべし。年紀は五十路に近く、人品陋からぬ

切髮の後家姿、黑の紋縮緬の被布の上に、茶無地の肩懸を長く着て、後なるは一子の文之助、焦茶の高帽子を目深に冠り、洋服に二重外套着て、旅革包と手鞄の大形なるを左右に挈げて從へり。

お京は慇懃に一禮して、東京から御入來でござりまするかと問へば、春山でござりまする。御取次下されましと謂ふ。

主人は我身なるに、取次げとある客の言葉のをかしさに氣も着かず、さあ此方へと膝を立つるお京を見て、母子は眼と眼を見合はせつ、案内につれて設の座敷に通れば、お京は改めて初對面の口上を述ぶるに、春山母子もそれ〴〵に挨拶して、やがて佛前に導かれぬ。

噂に違はず公恒の吝嗇はかくまでか、と今更驚かるゝ家内の有樣。通りし幾間の座敷は塵埃に穢れたる、物置にせし間の道具を片附けて、卒に申譯の掃除したらむやうに、白足袋穿きて足踏入るゝも氣味惡く、諸道具何一つ滿足なるは無く、茶は色黑く、澁くて臭く、手爐の炭を見るに、

掛茶屋のものゝごとし。
家は曠く、造作も好く、眺望は更に好き結構の住居なれど、其外は皆吝嗇からの無頓着が附給ひたるものばかり。見る物毎に胸惡くなりて、此分にては到底食事は覺束なく、母子はそれと言はねど、互ひに知るゝ其らしき顔色。
之を思へば不思議は無けれど、特に驚かれたるは娘のお京なり。誰あらう東山家の息女ともある身が、下婢にも劣りたる風俗。平素はともあれ、今日は相應の修飾も爲てあるべきに、いかに世話するものゝ無ければとて、そこに氣の着かぬことはあるまじき娘盛の身に、さては着換も持たぬことか。當人もまた彼樣な服裝して、羞かしさうな顔もせぬ氣が知れぬ。
何が何やら解らぬ家と母が囁けば、文之助は打笑ひて、それだから化物屋敷。

（九）これが思初むるといふ事

春山の母は公恒の遺言狀を見るに、不束なる娘なれども、文之助の嫁にもらひうけてくれとの事。それに就きては云々の遺產の管督をも賴入るとの旨を認めたり。

母は是非の分別する間も無く、唯一應文面を見しまゝにて文之助に渡せば、これも同じく一應讀みけるのみ。お京の前なれば互ひに一言もいはず、座中に披げて、手持無沙汰に三人は姑く視めてゐたりけり。やがてお京は我に宛てたる一札を取出して、二人が前に置けば、之にて始めて悉しう知りたる東山家の財產に、母子が心の驚愕は大方ならず。これほどの金額が、このやうな態してゐる娘の持參とは、思も懸けられざるに二度吃驚して、二通の狀を彼方此方と見比べ、虛か實か、いづれを分きかねて、唯不思議に堪へざりしが、何にも爲よ、これは後日の相談。さ

しあたりては佛の始末、と式のごとく佛事を營み、公恒も果敢なく白木の位牌となりて、香花の手向の外には世話の無き手を空けて、打濕りたる一間に、母子二人限他聞を憚る忍音に、公恒殿が折角の遺言なれば、彼娘を嫁にもらうたが善い。お前さへ得心なれば私に異存は無い、と母の辭に文之助は手を拱きて、應とも否とも思案最中なれば、いづれ東京へ歸りて、篤と考へての上お話をいたさうましよ、と六萬圓は誰にしても否にはあらねど、都に數々美しいのを見た眼には、ちと本尊が御意に入らぬ樣子。それも道理、我家とて然せる身代にはあらねども、嫁の持參で卒に家買ひて入るほどの始末でも無ければ、望みとあらば世間に好いた嫁は幾許もあるべきに、と母も切てと思ふほど東山の息女に感心せるにもあらねば、此話はゆる〳〵といふ事に極りて、母子は內々お京の心の奧から足の指頭にまで眼を着けて、箸の上下にも油斷はせざりけり。尋常の娘ならば、客の前といふに格別取繕ひて、生れつきは是非無き大

口を窄め、襟脊も帶に工夫して陰すことに氣を揉み、寢像惡きには枕を縛りつけて闇のことまでも苦勞にすべし。ましてや我婿と假初にも謂ある男と、一家に起臥する氣遣は、其裏に自から嬉しきことの無かりせば、孱弱き身は忽ち命を縮むべし。

お京はその嬉しさを知らねば、わざと聲を細うして、可愛らしう笑ふ方も知らねど、今までは山中のやうに物寂しかりし家の、母子の客の見えてより、俄に賑はしう春めきたるに、例の物思ひ勝の心も開きて、兎角二人の席に出づることの好もしさに、款待さむ意も無けれど自からの愛想好く、何事も打明けて便におもふ氣色の見えけるに、これでも憎き人は無くて、あのやうなる父親のお蔭に何罪過あらぬ姫様の身を貶し、風呂焚くといへば、惜氣も無く裙引塞げて水も汲みかねまじく躾けられ、今六萬圓といふ身上を我物にしながら、それを好樣にと他に預けて、頭飾一つ買ひたい顏もせぬ事を思へば、貧しき家に生れて、木櫛買うてや

つても戴いて悦ぶ娘より不便は一層にて、言合はさねど母子共にやさしくして、物を辨へぬ田舍娘とて毫かも侮らず、何處までも公恒の娘に遇ひ、今までとは違ひて一切勝手業はさせず、俄に孃樣に仕立てゝ、長持の中より亡母が遺物の衣類の仕舞ひたりしを探出して、其外櫛簪指環まで、そのまゝお京に飾らせ、髮は春山の母が自慢に取上げて、化粧まで𢌞てやれば、手足の少し無骨なるを疵にして、匂ひこぼるゝ娘姿、昨日の面影は消えて、人も振向くほどの艷麗を、これでこそ姬樣と、當人よりは老僕老婦が拜みて、泣かぬばかりに喜びぬ。

世間に子は親に別るゝ程の不幸は無きに、お京ばかりは今日より運開きて、行末益頼もしく、瀨兵衛が五萬圓に貧りける衆の怨念も二代に霽れて、やう〳〵孫娘が安樂の種とやなるらし。

お京は春山母子を思ふこと、昏黑の谷底を出でゝ、始めて麗かなる日影に遭ひたらむごとく、氣は浮々と長閑に心霽れて、別の人に生れかはり

たるかと、我ながら疑はるゝばかりなりし。

世間を知らぬ身のお京は、從來曾て男といふものを見ざりし。老僕も男なれば、父の公恒も男なり、濱邊を走る船頭も、畑つくる百姓も、町の宿屋の手代も、學校の教師も、笠冠りて荷を擔げゆく旅商人も、いづれか男ならざるはなけれど、お京は曾て女に對する男を見しことあらざりし。

然れば女にあらぬものが男と合點して、女と女にあらぬものとが、どのやうなる關係のあるものやら、憎きものか、憎からぬものか、好きものか、惡きものか、例の乳母のみは忘られず可懷くも可愛くも戀しくも念ふ外には、一切の他人、男女の差別無く、庭の樹を見ると格別違ひたること無く、人を友としても、窓開けて海を眺むるほどの興は無く、世中に生れては、やがて命の盡くるまで、何も爲ずに坐つてもゐられねば、爲樣事無しに毎日動きまはりて紛らしてゐるものと、一向膏氣の無き了

衒にて、尋常勝れて美しき姿を、衆に見せて悦ばるゝが樂みの娘氣も無く、これで朝夕に經だに讀まば、髮は長しとても、そのまゝの比丘尼なりけらし。

露を承ねば苔もつかず、日は照らさねば溫氣無く、但寒風に乾び果てたる巖の如くなりしお京の心も、時到りて此頃はやう〳〵滑めきぬ。

お京が始めて文之助を見たりし日は、例の如く庭の樹に然までは異らざりしが、一日と馴れ、二日と親しむにつけて、嵐雪が梅一輪づゝの暖かさや、枯れて見えし冬木立も、次第に芽を持ち、葉を出して、綠の色濃く、やがて紅う蕾みて、遂には白く雪を亂して花の盛になれば、雨に裝ひ、月に飾り、風にもてなさるゝなど、種々の風情添ひて、果は文之助は今まで見たりし唯の男にはあらずなりて、女も多くあるが中に、乳母一人が身に換へて可愛き其やうに、父親も老僕もあるに、それは何とも思はれで、文之助のみは何とやら思はるゝ、その思は乳母の可懷きにも

似ず。文之助の側は心融々となりて身に浸む嬉しさは、今までに覺えざりしことゝて、何に比ふべきもあらざりし。
お京が心の裏はかくありけれども、片時も離れまじく文之助を慕へる樣は、幼兒が懷きたる人を追はむがごとく、一圖なるところはあれど、媚ける景色は見えざりき。
文之助はお京を厭ふにはあらざれど、然ればとて好くにもあらず。唯心に裏無く質樸にして、飾らざれども實意深きに絆れて、側にゐればとて否な顏もせず、優しく物いひかけて、柔和なる所作に、お京は酒に醉へらむごとく唯わく／＼と、先方には構はず此方からばかり無分別に思ひこみて、今は身にも命にも、可愛の乳母にも換難く、夢も文之助の事、現も文之助の面影、浪の音まで文之助と聞えて、夜は文之助の顏の見られぬに悶え、明くれば直に文之助の側。
かくまで内に思ひ、外に慕へども、野育ちのお京は生れたるまゝの無垢

にて、何の覺えたる事も無ければ、否らしく色を含みて、我思を知れかしに爲懸くるにもあらず。唯好いた人ゆゑに、顏を見るが嬉しく、話をするが嬉しく、他には構はず獨り嬉しがる氣色を、文之助は其と曉りて、もしもの事がありては迷惑と、寄らず觸らず、媚めきたることは洒落にもいはず、風の柳に受流して、餘り好かれてはちと困る方なりしが、母はお京の思はくも、文之助の了簡も大方は推したれど、知らぬ顏して心に思ひけるは、公恒が遺言といひ、また便無き娘の身といひ、兎にも角にも世話してやらねばならぬ義理あるに、遺産といふは六萬圓、口で言ふは易けれど、一錢の銅貨も滅多に遺ちてはゐぬ世に、手をだに出さば此が苦も無く我物になるといふ、このやうな幸福がまたと世間にあるものぞ。嫁にといふ娘とて、不具者にもあらねば、疵物にもあらず、容色は恐らく千人にも卓絕りて、氣性に否なる處も無く、層頭といひ、不作法といふも、それは父親が敎育せざりし落度にて、今から改めて躾けな

ば、随分家庭に由りては立派なる嫁に仕立てらるべし。親の罪を子に被せて、田舎娘と一概に棄てゝ了まふは不便なれば、東京へ伴れかへりて十分に教育し、旁都の風にあてたらば、いつか土の臭氣は脱けて、今こそ好いてをらぬ文之助の氣に入るやうにもならば、それこそ彼は兩手に花、と母は心に懽びて、陰ながら二人の様子に眼を着け、お京ばかりが片思ならで、我子の心も融けよと私に祈りけり。

文之助は銀行に勤務の身なれば、長く逗留すべくもあらず、初七日も昨日と過ぎければ、今日は午後歸京せむといふ。

母も氣の腐りかゝる田舎に長くは居たゝまらず、一日も早く歸りたさは飛立つばかりなれど、お京一人遺しても行かれず。到底此家の所帶を疊みて、お京を引取る都合なれば同じくは伴れて歸りたく、我等は當分遺りて後事の始末してからと、文之助は一足先へ立つことになりぬ。

お京は其朝始めて聞きて、それは虚とて笑ひて取合はず。やがて文之助

が鞄を出して、荷拵を始めたるに驚き、昨夜まで私に何とも言はず、今朝になりて急に歸ると、そのやうな事があるものではござんせぬ。何程歸りたうても私が歸しませぬ、と鞄を引取らむとするを文之助は支へて、毎日用事ある身が七日も此方に逗留して、其間疊まりた。用は誰が爲てくれまする。今日にも歸らねば上役から罰を受けまする。幸ひ明後日は休日なれば、早朝からまた來るほどに、今日は枉げて還したまへと謂へば、是非ともお歸りなさるゝならば、私も一所にお伴れなされて、とお京は文之助の手に縋りて、さあ參りましよ、こゝは放しませぬ、と頑是無き子のごとく纏るを、文之助は持餘して、母樣困りましたと頭を掻けば、母は面を正してお京に向ひ、そのやうな無理は謂はぬもの。四十九日が間は父樣の魂魄家棟を離れたまはず。お京は何してゐると始終瓢りてゐたまふに、その我儘は何事でござんすと窘められて、お京はやうやう身を退きたれど、可恨げに文之助の顏を視めて、聞えぬほどに何やら

呟きしが、果は手持無沙汰に堪へかねつ、紙門の破れに眼を着けて忸怩してゐたりけるを、有繫に文之助は氣毒に思ひて、聲を懸くれば此方向きて、また本意無げに內向きぬ。

(十)　色々御母様の骨折

お京は朝夕見ざれば物足らず思ふ友を失ひて、文之助の立ちし後は、また舊來の隱性に回復りたらむやうに、どうやら顏の澤も薄らぎて、十七年が間何とも思はず辛抱せし此住居の遽に否になりて、話には聞きしが、見たくも思はざりし東京の空可懷く、明日にも此地を引拂ひて三番町へ伴れよ、と頻に多賀子に逼れば、浪の音は耳に附き、海の景色も珍しからず、たゞ寂寥に堪へかねたる多賀子は、いとゞ我家の戀しけれど、纔に初七日の過ぎけるのみにて、亡人の魂魄は未だ迷ひてゐらるゝを、置去にしては濟まぬ義理と、お京を諭し、吾を宥めて、暮しける日一日の間に、東京へ送るべき家財の荷ごしらへして、早くも昨日馬にて積出し、いざと謂はゞ何時にても立たるゝ用意して、晩しと待ちける二七日も今日といふ朝、二人は告別をかねて墓に詣づれば、樒は蒼々と露に沾れて、

卒塔婆は白く、乾かぬ土饅頭に立てるを、ゆら〳〵と縈ふ線香の烟悲しげに匂ひて、在りて効なかりし父親も、お京は今更可懐しく、此下にいかに眠りたまふらむと想へば、怪しう心は塞がりぬ。

折からひいと啼く鳥の音に仰げば、木の間に見ゆる沖の景色、浪も白帆も遠山も、幼少馴染の友なるに、明日はいつものやうに窓を開けても、何も見えぬ事かと、心細く望めたりけるを、多賀子に促されて歸る道々も物思ひつゝ。

これから東京へ行きて、好いたる文之助と一所に暮さるゝ身となるかと思へば、故郷を離るゝに未練は無けれど、有繋に損じたる壁も、煤けたる天井も、切れたる疊も、住慣れたる身にはなか〳〵捨て難く、はや門外に車の待つと聞きながら、書齋から臺所まで間毎に見納めして、椽より庭に出合頭、多賀子に見着けられて、名殘は盡きぬに推載せらるゝ車は、生れて今日が始めての乘心、濟まぬ顔して見廻はす左右より、池

俤と老婢が別を惜むに悲しく、今日まで尋ねて見えぬ乳母の病氣の心元なさ。東京へ着き次第音信はせうけれど、もし今日にも來たならば、お前達から宜う事情を話してと、望めやる我家の棟の古瓦に、ひよろ〳〵と生ひたる草の風に領くも、意ありて我を見送るかと傷ましかりき。
車は走りて片瀨村を過ぎ行けば、次第に浪の音は微になりて、岡の陰より田畝に出で、田畝より茅屋の村を過ぎて、行けども〳〵同じやうなる路なりしが、やがて先途に遠く建てこみたる屋根の間に、旆の影煙の絲の見え初むるより、鈍かりし車夫の脚早くも藤澤停車場に着きぬ。
藤澤より汽車に乘りて新橋に着き、新橋より車にて三番町に着きけるまで、お京は夢に夢みる想ひして、全く心を喪ひたりし。
なほ春山の家に入りては、數寄を盡したるにはあらねど、中等以上に住做したる所帶の、主婦の綺麗好から、見好げに整ひたるが、お京の心を驚かして、此家の勝手口といふが、片瀨なる我家の玄關のやうには、荒

れたる狀の見えざるほどの差あるは、いかなる所以にかと切りに訝しかりき。

下女といふはおのれと乙甲の年紀にて、顏面の肥えたる女なるが、その服裝を見るに、片瀨に在りける頃の我に比べては、なか〳〵に召仕とは見ゆべくもあらず。

それらには限らず、眼に見ゆる物渾て片瀨に似たるは無く、彼處には塵埃に汚れて、新しきも見苦しからざるは無けれど、此には手を盡して磨きたるにあらざるは無し。

然れば男女とてもその如く、下女の末までが田舍の娘に立勝りたるを思へば、其上に立てる文之助が、姿から心まで清しとも美しとも謂はむやうなきは、不思議にもあらぬ道理ぞかし。

亡父も壯かりし比には、此東京に住給ひしと聞きしが、如何なればかく好もしき土地を捨てゝ、片瀨のやうなる忌はしき田舍に一生を了りたま

ひしやら。幼少より其處に育ちて、片瀬の外にはどのやうなる土地ありとも知らざりければ、十七年が間海ばかり眺めて、草の中に暮せし事の、是非も無けれど悔しき。その挽回には、これから思入れ樂むこと、獨り打笑まるゝ今の身上の仕合は、眼の樂には都の繁華、銀座通から上野淺草、其外の遊覽數ふるに盡きじ。身の樂には此居宅ありて、更に心の樂を謂はゞ、好きな〳〵文之助と一家にゐて、後には六萬圓といふ柱あり、左右前後に樂の數々。

曠き都なれば榮曜人の數知れざれど、恐らく此ほどの身分は多くは有らじ。如も今までの裏が表に換りて、苦の後の樂なれば、饑ゑての美食格別の味なるべし。思ひ過ごせば、然りながら、此曠き都に苦勞する人もあるが中に、寢覺も心細く行末の氣遣はしき、お京に似たるは寡かるべし。

年少くして世間を識らず、親に別れて便無き身に、その貴さも知らぬ六

萬圓の財を持てり。

意中の人なる文之助は、お京の我から慕ふのみにて、彼には露ばかりの情もあらざるに、其母は此持參に十二分の意あり。

もし文之助が露の情もあらざるに、親の言葉の背き難く、枉てお京を妻にせむか。噫、戀無き夫婦は一生不治の病を患はむごとし。一日生らへば一日の苦あり。

もし又母子とも〲利慾に迷ひなば、心に疎みながら好いた顔して、一旦は文之助も睦まじう連添ふとも、後來は不治の病より可恐しき非業の最期を遂げむに似たる不幸に陷るべし。

兎角は戀しき文之助に奩はりては、我身の不爲と分別して、今より心懸けて春山との關係を絶たむか。一度六萬圓を見たる多賀子が、容易に此鳥を籠より出すべき。財は捨てゝ身一つにあらざれば、お京は遂に春山の門を出でむこと難かるべく、扨は出でたりとてその効無く、いづれ不

幸は免れぬ不幸のお京なり。

此不幸の轉じて幸と爲るべき屬望は、有繫に木石ならぬ文之助の、つひにはお京の情に絆されて、打解くる事もあらむかと、それのみが唯一つ。然れどもお京は、多賀子が六萬圓を覘ふことも、文之助がおのれに意無き事も、さては我身の行末も、幸も不幸も、それらの分別は無く、唯文之助の戀しければ、慕ふに何の理屈も所思も無く、文之助が機嫌好く合手になりてゐれば、其にて湛納して、外には慾も願もあらず。

いかに親なればとて、當人が進まぬ嫁を無理に押附けて、否というたとて不孝者と呵られもせず。然ればとて、我子の嫁に爲ずば、六萬圓といふものが、やみ／＼人手に渡る口惜さ。財だけ嫁にもらひて娘は餘所へ片附くることもならねば、兎角は本人も否を謂はず、心から連添はむやう工夫するに越えたるはなし。

まづ文之助のお京を擇ばぬは、何が不足かといふに、あの姿色に言分の

あるべき理は無けれど、第一氣に入らぬが、一向の無教育。次には、誰も好ましからぬ田舍育。作法は識らず、藝は無く、薪は割るか知らねど針は利かず、讀書とても小學校の仕入。奥樣にして其らしく雅びたる處無き山出しを、私の妻とは衆の思はくも羞かしとて、文之助の好かぬらしう見ゆるは、なるほど道理と合點したれば、それを强ふるは此方が無理。

これから二三年が間係りきりに丹精して、挿花茶湯までも女の藝は普通仕込みて、心意氣なら擧止なら、天晴東山家の息女に躾け、これに持參が六萬圓というたなら、如何なむづかしやでも二返事は知れた事。其曉には文之助も母樣恐入りましたと頭を下げて、有難く嫁にするに違はあるまじ。

婦女は賢く温和にして操貞しく、遊藝の末まで萬の嗜ありても、眉目美からぬは販路の思はしからぬものなれば、お京のやうなるは何の事、あ

れにて見られぬ姿ならば、何を躾けう了簡も出まじけれど、天性の標致勝れて、手入もせざるに水際立ちたる佳麗さ、之に教育の光を添へなば、丸裸にても求婚者は腐るほどあるべし、と多賀子は疾より此事を思ひ立ちけれど、此內實は文之助にも打明けず、何事も一つの胸に收めて、末を見よかしと獨り頷きてゐたりけり。

折を見合せて一日お京に向ひ、凡そ女の身は相應に學問も爲ねばならず、禮儀作法も知らでは稱はず。其外にも心得無くては濟まぬ種々の嗜のことなど、噛みて含ませるやうに謂聞かせ、賤しき身分のものならばともあれ、東山家は華族といひて位高き家柄に生れ、田舍に引籠りて船頭百姓の下人どもと同じやうに、何を習ひて識らうでも無く、臺所にばかり驅使ひて、教へざりしは父樣の了簡違。それも片瀨のやうな田舍にて一生を暮すならば、躾も教も入らぬことなれど、此都に住むほどの人は、誰に限らず普通辨ふべき道を、今から習はせまするほどに、少しは

愁くとも辛抱して、宜う覺えねばなりませぬぞ。その普通の道を知らぬやうな女ならば、一所にゐるも否なれば、最早片瀬へ返して了まふ、と文之助も常に謂へば、東京にゐたくば隨分精出して習うたことを覺えたまへと賺されて、お京はおとなしう應答は爲ながら、何の爲に何のやうな事を覺えるのやら、其後も幾度か同じ事を聞かされても、いつも夢中にて、會得はせずに可煩がりぬ。

洗はぬ顏に白粉の如く、野育そのまゝの生地には敎育も乘ることにはあらず。宜程に東京の風にあてゝ、餘所ながら都の手振をも見習はしてからの事と、當分は三日に揚げずお京を遊山に同行きて、名所も大方は見盡し、其間に歌舞伎の見物、料理茶屋の中食、小間物呉服の店買、勸工場へ行く日、寄席に慰む夜、鐵道馬車にも乘れば、緣日の雜閙をも珍しく、凡そ東京といふはこのやうなものと、合點させるまでには日子の二月も費しぬ。

山中に住みては草木に見らるゝばかりなる、服裝にも風姿にも構ふ念は無かりしお京が眼にも、美しき物は美しきに異無ければ、それらを見るに就けて及ばぬ我身に可美しく、おのづから模倣の念出づるより、抑も人間は進化して、今一廉都がる紳士淑女も、大方は十年前に虚言たれし山猿ぞかし。

聖人の道は心を盡して說けども籠耳多く、肉體の樂、華奢風流の事は教へざれども覺ゆるに、格別賢不肖の論無く、師匠も一向骨は折れぬことなり。

お京は田舍にゐて三味線の遠音も聞かず、香水の追風も嗅がざりし比こそ、冬も足袋穿かず、正月も髮を亂して、一町も向ふにゐる老婢を椽から喚はりしこともありけれ、それから日も淺ければ、心は未だ／＼疎滑海藻干す磯臭けれど、兎も角も外部の上皮は剝けて、處斑に東京の女子らしうなりぬ。

少しは粧る氣にもなりたるを、側から多賀子が口を酸くして、帶の結方にも世話燒き、櫛の挿樣まで疎畧にはさせず、湯に入りては磨きやうまで懇に敎へけるに、それまでに爲ずともと、始めのほどは厭はしく思ひながら、慣るゝにつけて、毎日の務と、言はれぬに相應の身嗜もするほどになりければ、一層標致上りて、高島田に光を添へ、友禪の襟に風情つきて、見たるところは畫にもかきたし。

環瑾は、此姿に伴ふ行儀の半分も覺えず。立ちながら襖明けて、それなりに出て行くことの度々なるを、多賀子は聲も尖らせず根能く誨へて、大分動作の柔かになれる頃、此上は心の敎育をと思ひけるに、人の噂は赤坂に松崎とて、舊時は紀州家の奥向に女祐筆を勤めて、諸藝にも昧からず、分けて學問は男優の評ありし老女の、今は後家にて私塾を開き、敎育は日本風の女の道なれど、益にも立たぬ雲上なる事ばかり敎ふるにはあらで、家政の學科の中には薪の焚き方まで實踐を主として、明治の

良妻賢母は此門より出すべき師の覺悟とて、特に躾の嚴しきを娘の親たちは喜びて、入塾通學合せて三十餘名の弟子あり。一時束髮の女學生が醜聞世間に姦しかりし折にも、秋蘭幽谷の間に自ら保ちて、塵には染みざりしと聞くに頼もしく、學問は學問、裁縫は裁縫、琴は琴にて茶も花も、別々に師匠取させずばなるまじく、然りとは懊惱く、當人も一時の暇無く苦まむことを不便に思ひしに、それこそ願ひても無き處と、尙ほ松崎に娘を預けたる家に便を求めて、悉しう樣子を訊ねけるに、嘗ての噂に違はざるに安心して、いよ〳〵近き内に入學の事と、文之助にも異議無し。

（十一）　心高く姿雅びて

お京が松崎の塾に入學せしは、東京に移りてより三月ばかりの後なりき。文之助は塾に入れむと謂ひけるを、今まで野飼の身を籠に入れて、窮命させるは有繫に不便なりとて、多賀子は日々車にて通はせけり。お京も此頃は稍東京に馴れて、麵包賣の太鼓の音、電氣燈の獨り燃るにも駭かずなりけれども、通學の第一の日、何心無く玄關を入ると齊しく、一堂に机を聯ねたる數十人の女生の眼は、物珍しげに我姿に集まりたる時は、闇に狐の鳴音、風の浪立つ荒磯に噪がぬ心も轟きて、爲む方無きに立窘みたる、其思は何とも謂ふべきやうは無かりし。可恐しきに似て可恐しきにもあらず、單可羞しきにもあらず、物心つきて以來曾て實驗の無かりける、一種の快からぬ心地なりし。

此體を、取締の岡といふ老女が認けて、足疾に進來り、手を執らぬばか

りにして奥なる塾長の前に導きぬ。

お京は毒蛇の口を遁れたらむ想して、仍慄かるゝ身を、多賀子が嘗ての敎のごとく、行儀好く繕ひて、なるほど慇懃に挨拶すれば、松崎は大様に禮を返し、やがて從來に學びたりし事どもを言温かに訊ねけり。

お京は手を支へたるまゝ纔に面を仰げて、片瀨の小學校を卒業せし由を對へむとせしに、平素詞遣ひの野げなるを、多賀子に窘められけるに心憶して、かゝる晴の席に迂濶と物言ひて、麁想あらばと氣遣ふほど吭塞がりて、辭よりは先づ汗ぞ出でける。

かくて在るべきに非ざれば、覺束なくも口を開きて、言はむと思ひしことは辛くも得言ひけるが、強ひて求めしにはあらで、娘らしう小聲に物言ひけるは、生れて之が最初なりし。

塾長松崎は、女生を遇ふに愛憎無く、誰をも我子のごとく親しみて、過失ありて責むるに毫かも氣色を變へず、功ありて褒むる時は、宛然己ね

樂しげに見えぬ。
然れども女生の畏るゝことは神の如く、間を隔てゝも其の咳の聞ゆれば、坐居崩して囀りける女生も、ぴりゝと慄きて遽に容を正し、水を打ちたらむやうに一坐の鎭りかへるばかりなれば、其面前にては何れも息を凝して、人形よりも靜肅かりき。
絶えて鞭を揮ひ、舌を動かすことなくして、かばかり塾長の畏敬せらるゝは、其行の正しき事、言に信ある事、心に德ある事の、唯三事に由りてなり。虛か實か知らねど、敎育幻燈と名づけ、學術講談と言立て、夜中生徒を集めて、妙齡の娘の隣席を爭ふやうの了簡にて、修身科の敎員の勤まる理はあらず。かくては風紀も紊れずして何とか爲む。
近來寄席に出て漢語をつかふ落語家、演劇をして柔術取る俳優は、こゝらから墮落の果かも知れず。
松崎のやうにありてこそ人の師範ともなれ、學藝ばかり精くしたりとて、

品行の正しからざるは、特に女子敎育を預くべきにあらず。小人とゝもに養ひ難しとは、古へ聖人の愛想盡し、油斷のならぬ紙袋とは、今も謂ふなり。

お京は松崎の門に入りて、本科は讀書、習字、裁縫、別科には女禮式と茶湯を習ひぬ。

十三の歳小學を卒業して後は、所帶の世話にのみ拘らひて、其間には心の結ぼるゝに堪へかねつ、濱に出で、山に遊び、浪の色、草の花に慰められて、うか〳〵過しけるも四年になりければ、一度は修學に馴らされたりし惱も鈍になりて、今更机に向ふ辛さは、得堪ふべくもあらざりし。小野道風は六十にして手習に志して、遂に三蹟の一人となりける例を、衆は老いての學問に引けども、其は千年に一人有るか無しの希物にて、所帶の苦勞覺えてから、または生心附きたる頃よりの學問は、寒の內に壁を塗らむが如し。

手業の細工物にしても、骨の柔軟なる間を習ひとすれば、まして學の道は、思想の單純にして心の素き間に入らざれば、例の冬の壁にて、成らぬ事は無けれども無理あり。

お京は片瀬にて小學校に在りける頃は、かくまで會得し難き、煩はしきものとも念はざりしが、年齢取るほど魯鈍になりたるか、習ふ傍から忘るゝこと燒石に水のごとく、南天の字指も効無かりし。

其には引更へて、別科は何の事も無き遊戲、本科とても習字は樂にて、裁縫も苦にはならねど、但讀書には精も根も盡き果てゝ、僅一枚を三日續けて習へども呑込まれず。かくても師匠は愛想盡かさず、いよ〳〵深切に敎へらるゝほど、我と我身の腑効無さに腹立ちて、口惜涙に泣きつゝも、否は謂はれず通ひけるが、其よりは尙ほ辛きことあり。家に歸れば多賀子の前にて、其日の學課を復習させらるゝに、いつも忘れたる處多くして、覺えたるは三が一にも足らざれば、一字に支へて讀の下らぬ

面目無さに、顏赧めて考ふるを、多賀子は流眄に屹と視て、得讀まむまでは身動も爲せられぬ苦艱の日每なるより、今までは母かとばかり可懷しかりし多賀子も、松崎に次ぎて畏ろしく、心措かるゝ人になりぬ。文之助の側にゐて、日曜每に保養して、美しき服被て、旨き味食べて、結構なる東京に住むは可けれど、此二事の切なさ辛さを思へば、樂も爲ざりし代りには、苦も知らざりし片瀨の廢屋に埋もれて、乳母の音信に慰みし其頃こそ、今の身上よりは勝しならめ、と折々憶出でられぬ。書讀むことは下手なれども、書くことは相應に上達して、茶湯の手前も愍しからず。習ふにつけて慣るゝ座作進退、おのづから小笠原の足摺も見ゆるやうになりたるを、多賀子は深く懽びて、內心を謂へば物讀むことよりは此方の躾を第一に望みたりしに、それは稍願の通りになりて、此分ならば二年も彼塾の世話にならば、少しは學問の捗も行き、やがて庭の花が咲いたとて短冊出すやうにもなるべく、其間に諸藝も一般は仕

込みて、天晴のお孃樣にならむも今の間と賴もしきに、近頃お京が讀書に倦みて、心進まぬ氣色の見ゆるは、今中途にて挫けられては、これまでの丹精も水の泡となりて、さてはお京の不爲、此方の不爲、兎角は勵みをつけて、爲遂ぐるところまで爲遂げさせねばとの所思から、何もお京の言ふがまゝ爲るがまゝに、ほい〳〵と御意を背かず大事にして、只管機嫌とり〳〵の憂慮。

否々松崎へ通ひける日も積れば、始の程は田舍者よと袖を牽合ひ、變な人ねと目を側てし女生の、机隣より先づ親しくなりて、次第に物言ふ女の數も殖ゑ、其中より懇意の友も出來て塾の勝手も大概知れて見れば、想ひしほどは厭はしき處にもあらずなりぬ。

やがて言語の訛は消えて、雅馴なる東京辯を覺え、色粧ることは朋友を見倣ひて、衣服着るから化粧するまで、我身仕舞は我手一つにして、氣の入らぬ學問ながら、はや半年餘にもなりぬれば、日用には差支なき讀

者になりて、挿花も琴も初學は濟みし此頃を、藤澤にて汽車に呆れし其比に較べては、お孃樣と下婢ほどの相違に驚かるゝばかり、心高く姿雅びて、春山の嫁御とは、誰に見せても受取られたり。

多賀子が眼にも其の如く見ゆれば、文之助は嘸と想ひの外、渝らずお言の慕ふ半の半の、其半も愛しうは念はざりし。

然りとて明白に嫌ふ風情のあるにはあらず。母を餘所にして小座敷に何やら語らふ事あり。三人打連れて遊山に出づるに、睦まじう並びて行く事もあり。何に就けても袖にする樣子は見えざれど、母の雜談に縁組の噂出づれば、他家の事にも氣色變りて、苟且にも二人の行末を微見かせは、然あらぬ體に話を轉して、忍びても聽かむとはせざりけり。

平素は什麼なる面色してゐても、文之助が内心の爭はれぬ證據は是なるへし。母は之を今からの苦勞にして、なるほど舊時のまゝの田舍娘ならは、嫌ふに寸毫無理の無けれど、男よりは瑕瑾を能見る女の我目にも、

現時のお京の娘風には言分無きを、何處を不足に文之助の氣には入らぬやら。これほどの嫁に滿足せずは、世間は曠いやうでも拂底なものは、それ金錢と美人、到底是ならばと御意に稱ふ奥樣はあるまじ。それとも此方の推量違ひにて、内證は其氣でも、他に謂はるゝが可羞さに、あのやうな顔して見せるのかも知れず。いつかは十分に文之助の胸を聞かばやと思ひつゝ、急ぐ事にもあらねば其儘にして、陰ながら二人の樣子を候ひぬ。

お京は愈よ文之助を慕へども、仍ほ男の自己に意あるか無きかは、懸念せむやうにも見えざりしが、然りとて此頃は、幼兒の人を可懷しみて理無く戀はむやうの、無邪氣なりし愛情も、その潔よく素かりしを徹かに染めて、梅子や黄みて標る五月闇の、心は黒白無く迷へども、分明に覺り得たるは文之助と我身との關係にて、この關係の後來は益々密ならむことを、焚るばかりに望む外に、お京の心に念ふことゝてはあらざりけ

り。

此は實に避くべからざる事にて、人はいつまで幼かるべき。畢竟はお京の智識の進みたるが、かゝる思想も出來る源にて、學課には無き事の數數、書物には書かれぬ事の種々は、人の敎の外にて、皆之を親友から習ひ、其初は無識のお京なりしが、男はこのやうに慕ふものと、四邊の女生が例を擧げて、その耳端に囁かぬ日のあらぬまでなるに、心は自から其に染るほど、父の遺言の理もやう〳〵解れば、多賀子の折々の辭の端も胸に應へて、彌勝る文之助の戀しさは、昨日までの戀しさの其ならで、別に戀しき理のありて、かばかり戀しきと識りたるは十八の年紀、六歲違へば文之助は二十四歲。

(十二) 親の心子不知

春山の家内には、お京の思も、文之助の心も、多賀子の望も、變ること無くて此年は暮れにけり。はや公恒の三回忌も此春の末なれば、法事の濟み次第祝言の盃させて、それからは所帶構はぬ樂隱居、と多賀子は十が十まで此話の出來た氣なれど、懸念は片々の本人の所思。日も迫りたれば此上の猶豫はなりがたく、一日文之助を一間に呼びて、お前も最成人といふが紋切形の冒頭にて、お京は知る通りの身上なれば、格別不便に思ひて幾久しう連添ひまするやうに。公恒殿の遺言ばかりにはあらず、またお京の願のみにもあらず、此母も賴みまする、と、首からお京を娶ふことに極めて、獨り呑込顔の相談に、此返事なれば三年前から胸に在れど、聞かせ榮のせぬは知れたるに、其とは謂はぬ遁口上を構へて、まだ嫁娶ふには早ければ、最

一二年立ちましてからと、皆までは聞かず、母が宜きやうに分別してこそ勸むるを、お前の口から兎や角は謂はぬもの。年齢は同じく二十五でも、修業盛の身といふならば、又斟酌もあらうけれど、瘦せても枯れても一人前の勤人が、妻有たぬこそ不思議なれ、嫁を娶ふに早きことはあらじ。

それとても、これから縁を求め、媒妁を賴み、見合して祝言して、見識らぬ女子の來るにはあらず。三年前から持つてゐたも同じ事の彼お京と、唯式の盃すれば、其でつい埒は開く。面倒も迷惑も、早いも晩いも、否も應も、彼此いふほどの事は無く、嫁娶ふの婚禮のとは難しければ、家內の人と盃するばかりと手輕う思うたらば、何の事はあるまじと、それには相違無き理屈に、此上は本心を打明けむ外に、遁れむ路も。飾らむ辭もあらざりけり。

お京を我嫁にと、母の思立ちしは此頃の事にあらず。公恒の枕頭にて其

遺言狀を拔きし折より抑も心懸けて、あれほどの田舍娘を人がましう躾けたるも、我を悅ばさむとての丹精なり。

然ては辭しがたき母の志、お京の身も不便には思へども、仔細ありて心進まぬ此緣なれば、腹立たれむも呵られむも、此後永く不興を承けむも、何もかも覺悟にて、なか〳〵其等の辛さには換へられぬ無理添の後來を想へば、今決然と斷るが勝と、やう〳〵心を其に決めて、謂はむとすれば聽かむとて、我前に難かしげなる母の顏色。幼少より今に仍畏ろしき親の、辭には背かざりし心慣ひに、文之助は幾度か言怯れたりしが、母は待ちかねて促きたつるに勵まされ、お京は然るべき方へ緣あり次第片附けて、私はそれからの事にして下さりましと、火の中へも飛入らむ想ひにて、一生懸命に言つて退くれば、母は吃驚。

其始より或然の懸念無きにもあらざりしが、かくまでにとは些と案外なりし母親は、氣色を損じて姑くは無言なりしが、良有りて聲和かに、何

とも意得ぬお前の了簡。お京が氣に入らぬとならば、其理由を聽かしてもらひましよ。あれ迄に丹精したる私の慾目かは知らねど、春山の嫁といひて世間へ出して、頭られうとも嗤はるまじき了簡なるに、何處に不足があるのやら、少しも遠慮無く言つて見たがよい。

それ聽いた上にて、なるほどゝ合點が行つたなら、此後また推附けて嫁にとは謂ふまじ。

嗟乎長き月日の三年が間、明けても暮れても彼娘の躾ばかりに、氣を傷めたも大抵にてはあらざりしが、親の心は子不知とやら、折角の心竭も無効となりたるが口惜い、と眼にもつ涙を推拭ひて、氣に入らぬものならば是非無けれど、せめては母がこれまでの丹精を思はゞ、一ヶ所二ヶ所の不足を言ひて、其他の好いところを褒めてなりともらひましよ。隨分苦勞してあのやうにお京を躾けたも、公恒殿への義理のみか、他人に彼娘の嗤はれまい爲ばかりか、お前に手柄を褒められたさの願なりしに、

私のその願も愜はねば、お京の樂みにしたる願も愜はず、公恒殿への義理はなほ立たず。面目無いやら、氣毒やら、腹が立つやら、悔しいやら、子には泣かさるゝが親の例かと、また一時涙に咽へば、文之助はいよいよ途方に暮れて、穴へも入りたき想ひなり。

お京が氣に入らぬ廉を謂ひて聽かせよ、と切りに逼らるゝほど文之助は猶度を失ひて、苦しき汗を握るのみ。

折からお京の歸來る氣勢に、母は泣顔見せて氣取られじと、衝と身を起して次間へ立てば、文之助は、やれ嬉しや天の助と、之を好機に、我在間に駈入り、机の前に撻と坐りて、散々に膏取られし後のぐつたりと頰杖つきて、三つばかり續樣の太息に、硯の側なる飾鏡よりは、心ぞいとゞ曇りける。

かくとは知らず靜に襖推開けて、裙設閑雅に入來るお京は、文之助の濟まぬ顔を目早く認けて、御心持の優れぬのか、まあ〳〵お顔の色の惡さ、

お氣も重さうに見えまする。どうぞ遊ばしましてかと、優しう問はれて猶煩く、どうも致しませぬと魚膠なき辭も、お京は氣に障へず、どうも遊ばされぬものが、何としてその樣なお顏色の尋常ならぬ事がござりましよ。一寸之を御覽なされまし、と有合ふ鏡を把りて文之助の面に差向くるを、あらげなく拂ひ退くる力餘れば、鏡はお京の手を辷りて、火鉢に懸けたる鐵瓶の鉉に打たれ、四片ばかりに戞然と碎けて散りぬ。お京は興覺めて、文之助の常に似氣無き今日の振舞は、心に何の障る事ありてかと、可恐げなる横顏を遠くから眺めて、坐を立ちもせざりけるを、彼地へ行けと再三の辭に、悖はゞまた腹や立たれむと、鏡の碎片を拾聚め、手巾に裹みて悄々立行くを、文之助は見向きもやらで、わざとらしき太息。

其後多賀子は文之助の部屋に出向きて、曩日は其儘になりし挨拶を、今日は聽かむとて、煙草盆提げて來れるは、ゆる〳〵談じらるゝことゝ文

之助は恐入りて、路中ならねば逭も隱れもならず、今一足早かつたら出られたものを、新聞見てゐたばかりに憂目に遭ふ事かと、悄々席を正して控ふれば、母は執念くも、例のお京が氣に入らぬ廉を聽かむと謂ふ。なるほど氣には入らねども、此處をと指して否なる處あるにあらねば、文之助は此挨拶に當惑したれど、切りに責めらるゝ是非無さに、是ではなか〳〵母の得心せまじきを識りながら、有體を飾らず云々と告れば、果して大の不承知にて、そのやうの根も無き淺々しき事が、何の口實になるものにあらず、外に深き仔細やあるべき。あらば裹まず打明けよ。何事にてもあれ、腹も立たねば叱りもせじ。隱立せば其をこそ怨め、と辭を盡して段々糺せども、其外にはお京を嫁に嫌ふに仔細はあらずと、少しも詐無き樣子なるに、尙聢と念を推し、いよ〳〵外には何も無しと聞定めて、文之助それは我儘であらう、と聲の底に怒氣を含みて、母は小膝を進めたり。

また談じられむと文之助は、聞かぬ先から鬱悒顔色して、神妙に畏りてゐたりけるが、母は、おのれの氣儘から他の迷惑にも難儀にもなる事を構はぬ不了簡を、繰返し〳〵諭して、其は謂はれずとも能く解りたる理屈ほど、聞かさるゝ身は切なかりき。

お京を妻に有たねばならぬ段々の義理を說けども、文之助は仍ほ得心せぬやうの氣色を見て、多賀子は何思ひけむ衝と身を進め、徐に四邊を候ひすまして聲低く、かの遺產の六萬圓、彼を欲うは思はぬのか。我家の有金とては僅か四千圓に足らねども、世間は可羨しがる身分ぞかし。その十五倍の六萬圓ぞや。お前一代の手腕にて、此身代が見事十五倍になりまするか。よしや二十倍にならむとも、有りて邪魔にはならで、足にせば、其又倍の大身代になるものを、勤格にも似合はぬ無勘定な。お京を餘所へ緣付けたら、あの六萬圓は手も着けられず、荷物の先に立ちて、他の庫へ行てしまうが、口惜うは無いのか。私が躍起勃起氣を揉むも、

一には此事もあればなるに、氣に入らぬからなどゝは理も無い。そんな悠長の事いうてゐて、他の氣を知らぬといふにも、大抵程度のあつたもの。

世間には二三千の金で承知して、跛者の嫁もらひて大事に添ひてゐる人もあるに、内のお京は身分を謂へば四民の上の華族にて、容色は彼にて何處に言分がありまする、舊時と違ひて、今は教育も誰に慙しからず、氣性しをらしく、心賢く、此樣に三拍子も四拍子も揃うた上に、六萬圓の持參とは、夢で無くば嘘のやうな、亦とはあるまじき是唯一の結構盡しを、世間に腐るほど類でもあるやうに、氣に入らぬとは、親も呆るゝ愚の子や。

（十三）　六萬圓を振分髪

文之助の如此お京を否むは深秘の仔細ありてなり。此事は二三の朋友が臆測の裏に、朧なる俤のあるのみにて、天と地と本人との外に、知るものは絶えてあらざる事實なり。

吾妻銀行の副頭取小鹿田瑳一郎と謂ふは、文之助の父とは竹馬の友にて格別入魂の間なりければ、其縁によりて文之助は此銀行に入りたるなり。然れば文之助は父に伴れられて、折々小鹿田の家を訪ねける幼少よりの慣例を、今も其儘に往來して、玄關の案内も匆々に奥へ通り、時分時には家族と一つ卓子を圍みて、馳走の箸を採るまでに、舊來の懇意深かりければ、副頭取と役員との格の相違は、銀行にての表向のみにて、小鹿田の家に行きては、瑳一郎を大父と呼び慣はしたりき。

小鹿田の長女は妙子とて、今年十八になりぬ。文之助とは筒井筒振分髪

の幼少馴染なりければ、妙子は文之助の折々訪來るを、今も渝らず懌びて、朋の如く兄の如く、事情知らぬ餘所目には怪しう見ゆるばかりに親みぬ。

妙子は氏も賤しからざるに、教育も幽しく、加之稟れつきたる姿の匂やかさ。疳癪持を疵にしても、棄てられぬ氣風の好きところあり。眼端利きて如在なく、わざとならぬ愛嬌溺れて、見る人の心を醉はしむる娘風。自身も兄の如く朋の如く思ひなたりし文之助も、年毎に添ひまさる妙子の色香に泥みて、淺からず思ふ色の自から穗に出づるを、妙子も有繫に憎からず、四邊に人無き折の辭には、文之助の身に浸むほどの事もありけるが、互ひに行の謹深く、縁あらば末の契をと、言はねども双心に盟ひて、其とは無しに取交したる品もありけるに、圖らずも文之助の方にはお京といふ邪魔が入りて、此二人の間はやう〳〵一髮の繫ぎたらむ如く、果敢なくも賴少くなりぬ。

文之助が六萬圓にも心を動かさず、お京の情をも餘所にして、一向に母親の辭を拒くも、先入主なる妙子が事を懷へばなり。

然りながら此秘密を有繫に明しかねて、唯お京が氣に入らぬとばかり、外に事情はあらざらむやうに陳ずるを、一圖に母は信として、別に仔細とてもあらぬ其だけのことならば、兎角して納得させむものをと、扨こそ根仕事にして諭せども〳〵、想ひしよりに剛情に倦みて、此上は權柄づくに壓付けても、お京を嫁に有たせではと、遁げ廻る文之助を引据ゑて、お京の留守毎に意見やら、遞懷やら、腹立ちては脅し、泣いては賺し、唯此事にのみ懸念の餘、氣も狂はしく見ゆるばかりなるに、文之助はいとゞ思ひ亂れて、夜を悶へ晝を惱みて、思案に思案を重ぬれども、妙子が事は兎角に懷念を去らず、然ればとて母親には日毎のやうに責めらるゝ切なさに、裹みかねてや遂に思ふよしを語出しぬ。

母は文之助の面目無げに語出づる始終を聽了まし、心には深く驚きたれ

ど、さあらぬ體にて、それほどに執心ならば、好いた妙樣に添はせたけれど、彼方は名に負ふ吾妻銀行の副頭取、歷々方から所望の數あるを、彼も此も氣に入らぬとて、斥ねつけてゐらるゝほどの事情なれば、いづれ思はくは雲の上なる高家などにやあるべきを、私等の樣なものが、はて逮ばぬ事、提灯に釣鐘とやら、此緣は無きものと諦めよと謂へば、文之助は不服なる顏色にて、無き緣かは知らねども、心寬の爲なれば一應は先方へ話して下さりまし。お京が事は其上にて、と後へは退かぬ歎願に、到底も出來ぬ話と眼に見えてゐるものを、恥搔きに行くは愁し、と母親はわざと迷惑して見せぬ。

文之助は日頃妙子の否はいふまじき心の奧を洞察たるに、其兩親までが自己を子の如く懷へば、十に八九までは此緣談の纏まることゝ、母親が懸念とは正反對の胸算用して、今まで、諸方よりの言込を斷りけるも、我身の事に思ひ合されて、いとゞ賴もしく、進まぬ母親を只管賴みて、

明日はいよ〳〵小鹿田へ行くに定まりけるが、不圖心着けば、此使者の可危、可恐、纏まるべき話をも壞して來るは知れたるに、手を束ねて返事を待つべき所にあらず。先潜して敵の計の裏を掻かむと、銀行よりの歸途、我家は早五六町に近きたるを、卒に車を回して深川に向ひ、小鹿田の家を訪ぬれば、奥には折よく夫婦打揃ひて、小座敷に琴の調は聞馴れたる彼人の爪音なりけり。早くも文之助の來れるを知りてか、直に其音は止みて、急足の音廊下に聞えて、妙子は嬉々〳〵奥の間に入來りぬ。平素に異らぬ愛々しさも、今日は取分心嬉しく、例の事を言出でむ力ともなりて、好機のあれかし、と餘談は身に浸みず、波立つ心を鎮めかねて、今や〳〵と氣は逸れど、兎角怯れて辭の澁る間に、言出づべき機會は潮のごとく退去りて、又來るをも前のごとく取外して、もじ〳〵と二時間餘を徒に過せば、はや日の暮れかゝるに勵まされて、いよ〳〵言はむとすれば、瑳一郎は次の間へ立ちて衣服を更め、用事ありとて他出

してけり。
文之助は拍子抜けて、火鉢の側に悄然と物思ふを、妙子の母は怪みて訊ぬれば、やう〳〵其辭に縋りて、纔に口を開くや否や、妙子は火のごとく面を赧めて小座敷へ遁入りぬ。
跡は二人限のひそ〳〵話に時移りて、夜食の支度もしたればといふを、文之助は無理に暇乞して、常は歸際に妙子の見えぬ折は、捜出しても挨拶して行くを、今日に限りて小座敷にゐるを知りながら、聲をも懸けでこそ〳〵と歸行くを、妙子も其と知りながら、顏も出さねば音さへ立てず、闇きに藏れてゐたりけり。
妙子が母の挨拶は如何ありけむ、文之助は怏々として家に還りけるが、氣分惡しとて宵より臥戸に入りて、夜深まで寢もやらざりし。
母は翌日淺一郎の銀行より退けたる頃を計ひて、深川なる小鹿田を訪れぬ。多賀子の今日來る事は、昨日文之助より洩れたりければ、夫婦は、

午後妙子を餘所へ出しやりて、此客を心待にしてゐたりけり。

多賀子は小鹿田夫婦に事情を打明け、首尾好く聘定のお京と祝言せむやう、文之助への意見を頼まむ下心なり。

春山にはお京といふものゝある事は、小鹿田夫婦も嘗ねて能く知れば、いかに文之助の懇望なりとて、我女を妻はすべくもあらざるのみか、文之助如きは固より小鹿田の眼中に在らず。望む所はなほ數等高き人物なりければ、妙子の母も其意して、いと覺束なき挨拶を文之助に聞かせし後、之を瑳一郎に語りければ、勿論とばかり、事も無げに打哂ひぬ。

双親の心を動かすにも足らざりし此話は、竊に二人の間に消滅して、妙子の耳にまで來るべき力もあらざりければ、小座敷に忍びて聞えもせぬ談話に心を轟かせし娘は、やがて母親に呼ばれて、可羞しけれど嬉しき事を聞かされむと、娯みつゝ惧れつゝ行きたりしに、面を赧めて待ちしほどの事は無くて、平素よりも猶文之助の噂は出でざりし。

夜衣引被りて宵より臥せし文之助が失望に次ぎて、妙子は其夕の食事も進まず、灯火の下に物思はしく折々大息の聞ゆるを、母は其とも知らで氣遣ひしが、今朝になりては彌よ機嫌惡く、然もなき事に例の癇癪起して、わざ／＼焚かせたる風呂へも入らで、つんとして出で丶行きぬ。昨日文之助の來りしことは、母へは內證との本人の囑なれば、小鹿田夫婦は口を噤みて、多賀子が打明話を今始めて聞くやうの顏して耳を傾けたりしが、おほせまでにも逮ばず、妙は此程より餘所に緣談ありて、大槪其も纏まり口なり。且はお京殿のあることも心得たれば、必ず御心配を懸くることにはあらじ。早々文之助殿を遣はしたまへ。よう得心の參らる丶やう御意見申すべし、と恃もしき瑳一郎の辭を土産に、多賀子は家に還りけるが、日も薄暮／＼なるに文之助は未だ歸らずとて、お京は案じ顏なり。

もしや自暴を起して惡所へ立入りはせぬかなど、母親は思ひ過して心を

傷めたりしに、やがて酒氣を帶びて飄然と歸來り、直と我部屋に入りたるまゝ出來らざるに、親を親とも思はぬ擧動と、心猛しき母は勃然とせしが、今は腹立つべき所にあらずと、さり氣無く文之助を呼寄せけり。

文之助は妙子が母の挨拶にて、はや事の成らざるを知りたれば、まして首めから壞しに行きし母親の齎したるに、好き音信のあるべきやう無ければ、深く聞く程氣色に障る種、と不承々々に座に着けば、果して聞きたくもあらぬ言のみ。就中妙子が緣の餘所に定りたりといふは、根も無き事とは想へど、虛にしても心地の快からぬ噂。冗々謂はずとも知れたる事を、最澤山と思へど、謂ふだけ謂はねば承知せぬ母親は、肝にも骨にも徹へよとばかり聞かせけるを、文之助はむしやくしや肚に据ゑかねても、敵手は親なれば是非無かりき。

(十四) 六萬圓を戀女房

此夜も散々に意見されて、次日は叉銀行にて瑳一郎が、用談あれば歸路に立寄れといふ。問はでも例の談義と知れど、內情はいかに心易くても勤向は上役の辭は背くべくもあらず。年始にも此後小鹿田の閾は跨ぐまじき覺悟したるを、三日と立たぬに其門を入る忌々しさ。まことの留守か、隱したるか、妙子は顏も見せぬ奧の間に、ちやほやされし昨日に變りて、肩身も狹く遠慮勝に跽るを、左右より夫婦交々親身の意見に、文之助は手も足も出ず、一向恐入りて還りぬ。

よもや味方と恃みし小鹿田夫婦も敵にて、母親の囑までも無く、もとより妙子を我には妻はせまじき心なりければ、お京といふものゝ有無には拘はらず、いづれにしても此失望は免れぬ身なりけり。

妙子と我とは夫婦のごとく思合ひたる間なるに、かゝるをや實に惡緣と

も、添はれぬ縁とも謂ふならむ。然りとては諦められぬ、諦められぬ。盃こそせね心の妻を、他に奪られて手出しもならず、好きもせぬ女子に添はされて、末には何とならむ樂みのあるにもあらで、此儘遂に他人となりて、必ず二三年の後には、夢よりも跡無く忘らるゝ果敢さ。其折も其後までも、一生忘られず、片時離れず、妙子に添はむ男は、憎くも何處の何者ならむ。豫想なくも先頃の琴の調は一生の聞納なりしかと、味氣なく思ひまはせば、妙子の笑顏心に浮び、宛然と耳の邊に幽しき爪音の今も聞えて、迷ぞいとゞ遺りける。

幾日か晝と無く、夜と無く、此事をのみ念ひ續けたりし末に、妙子が事は無理にも斷念せむより外に方無し、と文之助はやう〳〵悟りぬ。悟らむ外には何とも爲む樣無けれど、戀慕の闇は道理の光も照さず、戀しさは當時に變らざるのみか、堰かるゝ水は勢增して、いとゞしく禁へがたかりき。

間がな隙がな母は文之助に向ひて、六萬圓の貴重を分つ口說きつゝ、頻に慾を唆かしければ、文之助も今は妙子の不緣を諦め際や、醉眼やうやく覺めたるが、始めて物象を明かに認めたらむごとく、我身代の十五倍といふは萬更憎からぬ氣にもなりたるに、お京を嫁にせでは得心すまじき、母の底意の根強きに我を折りて、祝言といへば直に妙子の懷ひ出さるゝを、無き緣無き緣と我を窘めても、諦めたるやら諦めぬやら、放心の何とも辨かぬ間に、文之助は一言、然りとは思ひ切りたることを誓ひぬ。

此一言には恐らく神も力は及ばざるべし。いはゞ人肉千斤生血百石も同じき、瀨兵衞傳來の六萬圓は、手を濡らすまでも無く、纔に舌一枚を動かせしばかりにて、忽ち文之助が掌中に轉び入りぬ。

多賀子が此時の想ひは什麼なりけむ、久しく結びたりし唇より、黑々と染めたる齒を顯はして、京や〳〵と高く喚立つる聲は、今ぞ霽れたる胸

より出でゝ、清朗に響きわたりけり。

側に文之助は悄々と頭を低れて、宛然宣告を受けたる罪人の半死したらむ風情なりし。

多賀子は歡喜單身に餘りて、お京も嘸やと思へば、分秒の間も早く聞かせたさに、急遽喚び立つれば、唯々と返事輕く入來りて、多賀子が此頃に珍しき機嫌顏と、文之助が相も變らぬ物案じの風情と、對坐に逢ひ過ぎたる二人の樣子を、不審ながら坐に着けば、多賀子は膝を推進めて、今改めて話さずとも、父樣御遺言の緣組の事、かねて文之助も承知なれど、都合ありて今日まで何の沙汰もせざりしが、近日御法事の濟次第、吉日を擇みて婚禮せうと、今も文之助と相談して、いよ〱それに定りたれば、其方もさう思うて、種々支度もあれば明日からは格別忙しいやら、又何やらで夜も碌には寐られまい。もう半月とは立たぬ間に御婚禮ぞや、と聞くよりお京は赫と上氣して、此話も近き内にはあることゝ、

常は待たれも覺悟も忘たりしに、今更心一杯の可羞さに、わな／＼と全身慄ひて、唯と一言も得言はざりし、額ばかりの見ゆるまでに俯きて、何とか思ふやらむ、先づ見たき文之助の樣子を、忍びやかに眺めやれども、心の噪ぐに紛れて熟視るべくもあらず。何とも挨拶しかねて手持無沙汰なるを、多賀子は其と推して、別段異存が無くば返事を聞くにも及ばず、委しき事は明日にもゆる／＼話さうほどに、彼方へ行きて、爲懸けたる裁縫もあらば、精出して早う形附けたまへ、と謂はるゝを機會に居間に還れば、抽斗開放したる鍼箱の側に、疊紙廣がりて小切の色々所狹く取散らし、裀の前には鋏量尺指貫絲卷など算を亂して、燈火の影闇く、嚮に出でゝ行きし其儘の光景も、今は見るに煩く、鍼も手には着かず、喜悅さのみが先に立てば、種々の思考も半から皆崩れて、心浮きうきと身に添はず。知らぬ間に時移りて、寢よと促さるゝに、引散らしたるを片附けて、枕に就けども睡らるればこそ、四邊の鎭るほど物思はる

る便となりて、東雲白く鷄の啼く頃までも瞑ます。そのまゝ起きて庭に出づれば、淺緑に萠初めたる垣の柳の梢靜に、桃花の色好く咲きたるが露を帶びて、匂はしく明けゆく天の色や、霞に籠る鶯の遠音さして、身は爰に融くべき春の朝に、眺むる人の心も似たるべし。

爰に全く妙子との緣は切れて、お京に添はねばならぬも定まる因緣かと、悔めども復らぬ事に未練ありて、文之助は悒々と浮かぬ顏を、母は忌はしがりて、到底添うてやるものならば、機嫌好くしてお京を歡ばせたが可さゝうなもの。男らしうも無く、まだ〳〵思切られぬのか。ちと元氣を出して會には笑うて見せぬか、と幾度か窘められて、弱る心を奮興し、辛くも人の見る眼を繕ひて、信實可愛きものゝやうにお京を遇ひぬ。然りとて文之助は毫かも己を欺きたるにはあらで、嚮に妙子に繫けたりし念を、いかにともしてお京に移さむと、今は千々に心を碎くなりけり。形は死せりし戀なれども、心は未だ呼吸を絶たずして、風來らば餘燄再

び焚ゆべき勢なるを、兎にも角にも文之助が妙子の縁を斷念したるは、纔に風の來るを拒ぎたるなり。風や來らずとも、火は自から消ゆる時の至らむまでは、此熱の遽に冷むべきにあらず。文之助は今風を拒ぎて熱の忽ち冷めむことを望めども、意の如くならざるに苦めり。

お京は然りとも知らず、文之助が打解けて見ゆるを、仇無き心に信に受けて、おのれも嬉しき此頃なれば、文之助とても思は變らず、晴れて夫婦となるべき日の近きたるに、自から親愛も增したるかと、此方よりも心にはいとゞ打解けながら、人無き折には側へも寄られず、顔合はすさへ何とやら憚られて、襖越の聲音、歸宅の足音、多賀子の前の流眄など、常には何とも思はざりし事までが、怪しくも身に染々と好く、頓て盃して、旅行して、歸れば最早旦那樣に奥樣。それからの快樂は想像も及ばず、此樣な事ではあるまいと、待たるゝ日も一日々々と過ぎて、公恒の誕事も滯無く濟みければ、千秋萬歳目出度當日は眼前に逼りぬ。

間取る中に故障など起りて、婚禮の遷延にならば、心から思切りたるにはあらぬ文之助の御意が變りて、またも否を言出さぬ間に、進まぬながらも今は其氣になれる拍子を外さず、手早く祝言さするが上分別と、多賀子は二人を前に据ゑて、いよ〳〵明後日を黄道吉日と定めけり。其聞きてお京は夜も二三時間よりは睡らず、三度の食も吭に塡りて、義理ばかりに箸を採れども口に味無く、寤に過ぎし四十八時、長きも短きもあらざりき。

明れば當日とて、朝寢の下女も味爽より起出でゝ、臺所の喧擾事ありげに、湯殿の烟突に颺りて、言合はさねど家内いづれも早起の物音。多賀子の今朝の氣持十年も長命すべく、漫に勇まるゝも六萬圓の慾のみにはあらず、種子から培てたる木の美しき花咲きて、見事に實を結ぶ今日の婚禮に、子を思はぬ親は無ければ、悔しくも亡夫の草葉の陰や、可懷しの涙零しつゝ、佛檀に燈明獻げて御厨子を開き、影も朧なる寫眞の姿を

伏拜みて、手向けばや庭に遺愛の海棠の、今を盛なるを露のまゝ一枝と、鋏持ちて椽に出づれば、折からお京の部屋を出づるに會ひぬ。

（十五）　怪、怪、怪！

何とか爲けむ、お京の面影は全く昨日に變りて、色蒼く頬の邊の羸れたるに、眉は愁に閉ぢて、眼には涙を含めり。寢亂髮は顔に懸りていとゞ凄く、力無げに歩み出でたるは病める人に似たり。

多賀子と顔を見合はせけるが、聲をも懸けで目禮のみして行過ぎぬ。餘りとや思ひ寄らざる事に、多賀子は氣を奪はれて辭も無く、我を忘れて後影を見送るのみ。

今朝は我さへかばかり嬉しきに、お京は奈何ばかりか、赧き顔して悦ぶが眼に見ゆるに、到底今のをお京とは思はれぬ不機嫌さ。もしや暴に昨夜から病などの發りて、胸の痛か、頭痛か知らねど、姿の華車なるにも似合はぬ丈夫さは從來二三度風引きし外に、否な顔せし事はあらざるに、卒にあのやうに羸るゝほど、病氣の起りたるといふも可訝しけれど、然

は無くて外に仔細のあるべきやう無く、理の解らぬほど心に繫りて、手向の花も其方退にお京の跡を追ひて、手水つかひてゐる後より樣子を訊ぬれば、否々どうもござりませぬ、と魚膠無くそれだけの挨拶。多賀子は益疑深く、尙推して問はむと思へども、他に構はず彼方向きて顏洗ふ不愛想に、取着端無く姑く佇みて、樣子を候ひてゐたりしが、憶ひ出したらむやうに鋏を取直して、忙がはしく庭の方へ回しけり。やがて文之助も起出で、奥の間に朝餉の膳も並べば、三人共に顏を合はせけるに、文之助は例の如く勗むるにやあらむ、念ひしよりは沈みたる氣色も見えず、內情知らぬ眼には擧動も平生に變らざりし。多賀子は喜色面に溢れて、今日は目出たきと口癖のやうに言ひ續けて、はや旅行の噂、汽車の時間、滯在の日限、二人が服裝の指圖などを喋々しく、獨り興がれど、お京の不機嫌は寢起の時に變らず、悄然と坐りて憂事の胸に餘れる風情なり。

嫁と思へば見るも氣が鬱ぐと謂ひし文之助さへ、昨日に打つて變りたるお京の體を、有繋に心元無く、始のほどはそゞろ〱と瞶めてゐたりしが、いかにしても合點しかねて訊ねけるに、無恙よしを言少なに答ふるだに懶げなりき。

堪りかねて多賀子は、其色の惡さ、氣力の薄さ、物思はしさまで、尋常にはあらざるを、無恙とは信しからず。病氣ならずは外に何ぞ深き事情やあらむに、陰蔽する水臭さ。平生から樂みにしたる今日の目出たきに、不吉の顔は繋念な。何なりとも氣に入らぬ事あらば、遠慮無く謂うて聞かせよ。もし又氣分惡くば、早う醫者に診て貰はねばならぬといふ側から、御母樣のおつしやる通り、それ其氣の無い顔はどうした事、と進寄る文之助が眼色にも知るゝ憂慮。

お京はほゝと打笑ひて、然りとは仰々しきお二人の御心配。先程も御母樣のお訊ね下されましたれど、餘りの可羞しさに得申さゞりしが、その

やうにお眼にとまりまするほど羸れましたか。此月の初から何とやら心そは〳〵と、夜も思ふやうには睡られず。就中此四五日は一晩とても睡た間は無く、昨夜は珍しく今朝まで一息に何も知らざりしが、目の覺むると等しく割るゝほど頭痛して、言ふに言はれぬ氣分の悪さに枕も擧らざりしは、久しく睡らざりし疲勞の一時に出でたると覺しく、然したる事はござりませぬ。最早頭痛も大方治まりましたれば、御安心なされて下さりまし、と面差げに答ふれば、多賀子も文之助も一度に眉を開きて、やれ其は目出たい。

傘無きに驟雨の一時、全濡になりて雷鳴に驚かされ、忽ち天霽れて涼しき蟬を聞きたらむは、多賀子が此時の想ひなるべし。

文之助も倶に胸を撫でゝ、三人睦まじげに食事を了れば、まづお京は風呂に入りぬ。其間に多賀子は夫婦が式の服を取揃へて、明窓に鏡臺を正し、化粧道具を用意して、お京の浴み果つるを待てば、文之助は部屋

に入りて、花織戎氈の手鞄に種々の物を塡めて、旅行の準備に忙しかりし。

奥座敷の八疊を式の席に定めて、昨日からの裝飾、床には島臺長熨斗を恭しく正して、軸は吳春が淡彩の日出に霞がくれの三羽鶴、近く畫ける千歲の松は、筆の痕より琴の調や聞ゆべく、掛花はお京の手前にて、頭巾籃に室咲の牡丹を麗しく入れたり。

上座の錦棚には、青州の古硯に配ひて唐物の銅印二顆、いづれも亡父が秘藏の品なり。かの寫眞の厨子に公恒の寫眞を並べて、青磁の香猊を供へ、下座には諸方よりの祝物を小山の如く積みたり。

今日はお京が一世に一度の祝儀なれば、正蓮寺なる乳母は前夜より泊懸にて、臺所の手傳に出でむと、かねて音信の度に此事をのみ書送りて樂みけるに、貧寺の無人なるに加へて、平生病身なる住持の、四五日前より熱を病みて、看病は手一つの足らぬ折から、かへす〴〵情無くも悔し

けれど、當日は罷出でむことの協はざればとて、その謝罪の文に添へて寸志の祝物を、わざ〳〵遠き所を人に持せて來りぬ。

程無く手傳の男女三四人推懸け、勝手の混雜始まりて、どさくさと正午も過ぐれば、はや裏口より御膳籠を舁入れ、臺所はいよ〳〵騷がしく、障子襖の開閉は絕間もあらず。

客座敷には袴の綷縩、唾壺擊つ音、談す聲、笑ふ聲。外は車の響、履の音、諸種の響は一つになり、別になりて、耳を貫き心に轟くを多賀子は屑ともせず、煙草吸ふ間もあらで指圖するやら挨拶するやら、烏鷺々々するやら躓くやら、忘るゝやら、考ふるやら、額に汗の露を置きて、足袋の紐の解けたるも識らず、人を追ひたり追はれたり、家の內を四面八角に驅けて廻りぬ。

文之助も忙しく、部屋の出入頻繁なりしが、お京は今日の大事の花嫁とて、濫りに一間を出づることを許されず、獨り寂しく居間に籠りて、咳

瞬もせず、手爐の前に端然としてゐたりけり。

高島田は鬘のごとく、化粧は多賀子が手を盡して、目覺むるばかりの佳麗。小袖は黒縮緬の三紋、干潟に貝盡の裾模樣、帶は水色地に扇流の繡珍の板の如きを太鼓に結び、上衣の黒きに白無垢の褄下を揃へて、容儀を正しく坐りたる姿は、何にか譬へむやうもあらざりき。

然れども唇は笹色の臙脂の下に色を失ひて、白粉も心の愁は粧ひ難く、何處とも無く憔悴して、嬉しき婚禮を羞らひつゝ、心待にせる氣色の影だにあらざるは、なほ頭痛の痊まらざるにやあらむ。

盃濟まば直に汽車にて箱根へ行くべきなれば、夜に入りても暮に及びても次手惡ければ、三時前に式を擧げむといふに、座敷の柱時計は高く二時半を鳴らしぬ。

花嫁の胸は逆卷く浪の如く覆へるべき時なり。今日の心に繫りて、四五日前より一夜も睡らざりしといへるお京は、恐らく思ひ逼めて悶絶やせ

むとも想はれしに、さるべき氣色はあらで、隣家へ輿入の嫁の今や來るといふを、女子などの打騒ぐ、其半だに騷がざるのみか、雨ふる日の徒然に爲す事も無く、獨り坐りてあらむやうに落着きて、襖の外の足音にも驚かされず、折々俯けし顏を擧げて、忍びやかに大息を泄しぬ。

表面上の媒妁に賴みたる親類の島根といふは、三十の歳より今年五十四まで媒妁せしこと二十九回、口所橋渡は其數知れずとの、緣起好き老人駈來りてさあ〳〵彼方へと急きたつるに、遽々立ちて席に臨めば、はや文之助は威儀を正して着席したるを、流眄に懸けて悠々上座に直りしまでは、何をか深く思案して、曠の場所ぞとも、心着かざりけむやうに見えたりしが、盃把る手は有繫に慄きつ、耳朶は紅色に染みて、始終面を得擧げざりし。

やがて此席を開き、色直して客への挨拶も式ばかりに、汽車の時間の都合あれば、是にてと會釋して退ると等しく、二人とも縞物に衣更へて、

文之助は彼手鞄を挈げ、お京は緋天鵞絨の手提を持ちて、母への挨拶も忙しく、待たせたる車に乗るよと見れば、健脚の車夫善く走ること疾風の如く、近所の衆人窓より首出して、過行く姿を見る間もあらせず、一散に飛ばして新橋停車場に着けば、待受の男二人萬の世話して、中等室に乗込みけり。

駈落者は一目に知るゝ、其とは違へど、結婚旅行の夫婦も自から動作に露はれて、同室の客は老たるも、若きも男も女も、目を側てざるはあらず。生憎此室には十餘人の客ありて、斜向ひには三人連の歐羅巴人、揃ひて眥の垂れたるが乘合はして、藤紫の頭巾に裹むお京の顔の美しさに、遽に鼻眼鏡取出して段鼻に挾むもあれば、狆頭の杖に銀色の産毛の生へたる手の甲を重ねて、帽子の眞庇の陰より覗くもあり。其中に一人年若く、獨活の大木のごとく間抜に育ちたるが、紅入友染の結下の衿飾したる、日本人ならば正是花風病と人や見るべき風體の男、お京を見るより人參

欲がる商飼の猿のやうに、きやつ〳〵と喜悦の叫喚を揚げて、何やら囁するは、勿論お京が品評と、文之助は勃然したれど、佛蘭西語らしくて通せざれば、敵手にも出來ず、但睨みつけて其不遜を憤るのみ。横濱に着きて此一連の下車せしまでは、文之助は此にのみ心を奪はれて、親しくお京と語を交すべき遑あらざりき。

お京は文之助と打背きて斜に腰懸け、多くは窓の方をのみ見向きたるが、強ち人に羞らひたるばかりにもあらず。物言ひかけられむを厭はしげに、獨り心に一事を思惱みたらむやうなりし。

横濱にて同室の客は大方下車して、此夫婦の外に三人を餘したるのみ。汽車は進行して市内を出づれば、窓に入來る風景は一瞬毎に鄙びて、程ケ谷も間近になりぬ。

此間お京は一語をも言はざりし。かゝる事は嘗て例無く、文之助とお京と會ふ時、先づ口を開くは必ず女の方よりなりし。十言謂はゞ五言に

男の應ふるも亦例なりしに、特に敵手欲しき汽車の中に、長き時間を隣にゐながら、お京は口を開かざるのみか、文之助を見むともせで、窓外の景色を意無く眺め入るを、文之助はやう／＼見咎めて、彼方向きたるお京の肩を輕く拊てば、驚きて振向く顔色は、暮れ行く空の如く哀れに寂しかりき。

緋天鵞絨の手提、寶石入の指環、羽織の紅裏、友禪の長襦袢、縫模樣の襟、蒔繪の櫛、いづれも華美に心の春を飾らざるは無きに、其効も無くお京の萎れたる態は、親しかりし人の歸らぬ旅に先立つを、獨り遺されたるも名殘惜げに、何處までもと送行かむに似たり。葬式の前に立てる手向の花の麗しきが、遺族の涙の露に濡れたるは更に悲しく、其紅も紫も、黄なるも緑なるも、誰かありて眼を怡ばすべき。靚裝せるお京の姿は、平生に倍していとゞしく艶麗なるも、飜りて其の愁はしさを助けて、一入傷はしかりき。

文之助は身を寄せて、人目あればや忍び音に、痛く顔の色惡く鬱ぎたるは、今朝の頭痛の又發りたるかなど、懇切に慰問むれば、お京は額を壓へつゝ、汽車に搖られてか、頭痛劇しくと嘆てば、さては愁かるべきも、せめては藤澤まで辛抱せよ、其間の驛には泊るべき好き旅籠もあらざればと宥むれば、お京は我慢して小田原まで行かむと謂ふ。頭痛に障らむと謂へど、憂慮はあらじとて肯かざれば、文之助は危みながら其意に任せて、病人を敵手に談話もならず、持來れる雜誌を友として、程ケ谷は過ぎ、戸塚も後に、大船に着きたるは五時頃なりき。

大磯にて停車中、春山々々と喚ぶもののあるを誰やらむと、文之助は窓の外を眴はせば、友なる藤代といふ代言人なり。

車室の内外より額を合せて、互ひに笑ましく打語らひけるが、談は盡きざれど發車といふに、別れを告げて席に復れば、お京の姿は見えざるに、車は搖ぎ出して次第に速力を加へぬ。

待てども〳〵便室の戸は開かず、何所へ行きけむと心も心ならねば、自ら立ちて隈無く室内を搜せども、形も影もあらざりけり。

顏色變へて文之助のきよとつくを、隣席の客は怪しみて、何をか失ひ給ひたると尋ぬるに、同行の女を見失ひてと面目無げに應ふれば、其人駭きて、其處に在られし女中なれば、先の程大磯にて下りられしが。

文之助の驚愕の前後に之に過ぎたるはあらず。見る間に唇の色は變りて、戰慄は全身を傳ひ、呼吸促迫しく、凝然と眼を瞬りて、姑くは生きながら死したりけり。

跡を追はむには、渠は疾に東の方に失せたるに、己は西に向ひて電光の如く、意無き車輪は速力を早めて、國府津も近しと疾走するに、文之助は惱亂して狂氣のごとくなりぬ。

お京を見失ひたる大變に氣は顚倒して、奈何はせむと當惑するのみ、何故お京が大磯にて失踪せしやらむ、麁想か、故意か、それらを分別すべ

き遑はあらず。一念に追跡せむことを思ひつめて、國府津に着くや否や、放生會の鳥のごとく車を飛出でけるが、日は早や全く暮れて、宵闇の空に星も疎に、よしや此驛にて唯の今見失ひたりとも、索むる便は悪かるべき不案内の夜の道。大磯に着きて搜索せむにも、西とも東とも行衞の確ならざるは、雲を捉まむよりなほ覺束なからむ、と心憶しながら前途も急がれて、上り列車は一時間の後ならでは來らざるに、手を束ねて待つべき空は無ければ、人力車を傭ひて宙を飛ばさむか。後より出でむ汽車も同刻に着くべし。

文之助は途方に暮れつゝ停車場前の掛茶屋に入りぬ。兎にも角にも今より直に出發すべくも非れば、汽車を待つに分別せむ、と纔に心を推鎭めて、不取敢東京へ電報を送らむと云たりしが、母の心配は如何ばかりかと念へば、あのやうに喜びてゐらるゝ處へ、かゝる凶事を知らせて驚かさむも忍び難く、側に附添ひながら辯疏無き我身の落度も面目無く、草

を分けても明日は探出し、無事なる顔を揃へて、此事は二人限の秘密に云て歸るに如くは無し、と通信は思止まりて、唯管捜索の方法に迷ひたりしが、良有りて思はず膝を搏ちて雀躍し、お京が生の母のやうに可懐がりて、常に音信の絶えせぬ乳母といふが、大磯在の正蓮寺に住めるを、嬉しや憶ひ出したるぞ。

遠く何處へか行かむ、乳母の方を志したるに定まれり。さては早掌中に在るも同じく、心を傷むるほどの事にはあらず。それにしても、如何なれば我眼を偸みて出奔せしにや。教育しても道理に昧き田舎女めと、首の驚愕は憂慮となり、終は立腹となりて、會ひ次第叱と謂うてやらねばと業を沸して、時刻の來るを悶かしく、食も吭へは入らぬ空腹を抱へて、漸う七時十七分の汽車に乘れば、二十分ばかりにして大磯に着きぬ。

其夜は此驛に一泊して、翌日未明に發足し、對曳の車なれども山越に捗取らず、散々に搖られて好程に憊れたる頃正蓮寺に着けば、聞きしより

は淸げに住なしたる古寺なり。

乳母に會ひて訊ぬれば、吃驚して、此方へは見えられませぬといふも疑はしく、種々根問すれども眞實面に顯はれて、家内に怪しき樣子も無く實にお京は此寺には來らざるなり。

（二十六年十月）

詩を作らむより田を作れと先祖の誡めおかれたるも詩文を作るは易きに似て所詮は人間業にあらされはなり茲に其名を知らされとも神在りて人の心に宿り給ふ時口動けは詩となり筆走れは章を成す滔々數百萬言神之を傳へて心之を語るのみ抑雕章麗辭の織絡は人工の末技にして雄深雅健の大文字は曾て手腕に由りて生せさるなり然れとも我等人間の身を以て安そ此靈妙の神を意のまゝにすへけむや幸ひに宿らせ給へるも折々は氣紛れたまひて斷無しについと立たせたまへは一氣呵成の筆その勢破竹の如きも忽ち千曳の磐と動かさるをあり是に於て作者血に泣き詩人腸を搒る其切なさは難産も及はしと既に古人も說けり男こゝろ四十回にして前篇極を結ひ後篇の腹稿六十四談これより佳境に入らむとするに際して哀哉忽焉神去らせ給ひぬもとより人間業にあらされはわれ作らむとて作得へくもあらすさては姑く思ひ絶ちて用捨箱に投入れたりしを春陽堂か例の美本にせむと乞ふまゝに與へて捨つる神あれは助くる紙ありと私に一笑す　（自序）

袖時雨

（二）

夫に飽かれたる女房の還無家まゝに、背抱かされながらなほ添ふは、世に憂事の極端なるべし。故郷長門の大津に一人の伯母はあれど、年寄に惡き耳を聞かせ、入らざる苦勞を懸けむも本意ならねば、辛抱のなる所までは辛抱して、最後〳〵といふ時仕樣もあるべしと、待つに事を缺きて不幸を待つ身の心細さ。下女の力といふが年齡は若けれど、實意深く賴もしきを對手にして、夫の留守は唯二人、情無き仕形のありし事どもを喞てば、日毎の事とて力も慰めむ言語に塞まり、面を背けて太息の外はなかりき。

過來し方を語れば長き事ながら、妾は長州萩に素生賤しからぬ士分の家

に生れ、旦那樣とは從弟同士、五歳の年より許嫁の頃は睦じく遊び暮して、十五の歳旦那樣は此地に御遊學、それより、去年かく世帶持つまでには、十二年の間別れて、御修業中折々御歸省の度、相互に姿の變れるに驚きしが、妾は旦那樣の歳々立派に生長たれたまふに驚くにつけても、旦那樣は此身のいよ〳〵土臭きに愛想盡かしたまひたるべし。
去年の夏御卒業と聞くより、國元の伯母に急立てられて出京せしが、旦那樣は長年都の美人に眼慣れて、田舍育の此身などにお心のなき事は疾に知りたれど、許嫁の緣といひ、伯母の勸告といひ、且は理學士の妻といはれむ事の嬉しさに勵まされて、來て見れば案のごとく旦那樣の情無さ。去年の秋の初から、添ひは添うても夫婦とは名ばかり、打解けしお言葉とてもなきのみか、日ましに募る邪見の所爲は、其方が眼にも餘り、妾が胸にも据ゑかね、恨みても及ばぬは人の心に立つ秋の風、緣も桐の一葉と落ちて何所へなりと行けがしに遇はるれど、去らるべき罪もなき

身は、去られましたとをめ〳〵國へは歸り難し。物堅き御氣性とて、一度も家を虛けられし事なければ、紅き顏して戻られしも見ず、日曜とても稀の御外出、決して〳〵餘所外に匿婦などのあるべき樣子もなくて如此嫌はるゝは、よく〳〵性が合はずして、心底此身がお可厭なるかと、想へば想ふほど味氣なき身上、之も身に應せぬ器量の夫を持つたる罰か果報燒か、田舍女は田舍女にて似合はしき土ほせりを見立て、此半分の氣兼もせずして睦じう暮さるべきに、身を知らざりし過失と今心着きて所爲なき事。雙親なりともなほ世に在るならば、恁までは嫌はれまじきに、旦那樣とて義理にもかくは嫌ひたまふまじきに、親のなき身は何に就けても無念なる事ばかりと歔欷ぐれば、力も同泣の淚を飮みて、お見受け申せば奥樣の御心懸、お日出から入夜まで、贋物に觸る柳の臭々のお從順ずくめ。其に無理腹立たるゝ旦那樣は、どれほどお氣むづかしい御方かと見れば、蟲一疋も殺しかねる御面貌。お心とても其に露ばかり

も異れる所なく、奉公人の私までを劬はられての御心着。其に何とて素直なる奥樣には、傍觀にも氣の痛むほどの御不興は、いかにしても合點の行き難き仕合なり、お嫌ひとて理も非も言はず、あの樣にまで情無く遊ばす理はなきにといふ。

賢き其方にも似あはぬ言かな、但しは妾への遠慮か。旦那樣のかくお嫌ひなさるゝは、見る通りの妾の不器量ゆゑなり。聞けばお役所にても容貌にて評判高き旦那樣の事なれば、世間の美しき孃樣達が、とやかうと騒ぐよしも聞及びたれば、其に就けても斯る女房さへなくばと、思ひたまふ絶間はあらざるべし。いかにむづかしき御機嫌にてもあれ、勉めて取れぬ事はあるまじく、臻らぬ身の不束ながら、また兎も角も心着けて、行屆くやうになる瀨のなしとも限るまじけれど、何をいうても持つて生れし不器量は、死ぬまで放れぬ影なれば、兩親を怨むの外はなけれど、是ばかりは怨みても悔みても所爲なき沙汰と、なほ悲しさは增りぬ。

力は强と打笑ひ、其樣に御器量の事を氣に懸けたまひて、さらばこの力などは世間に誰が世話の仕手があるものでござりまする。近い例は横町の安藤樣の奥樣、痘痕面の上に赤毛の縮毛、ゑかも薄いことは蜀黍の頭ほどにて、旦那樣といへば男子も顧視くほどの美男子。お子樣がお三人まで出來て、日曜毎に今日は藤見の、明日は芝居と車を並べての御遊山。人は美貌よりとてこの睦じきも、唯奥樣のお心懸一つと勵ませど、首を掉りて、なるほど安藤の奥樣は、あの通りの不器量なれど、其代りには英學、漢學、和歌やら抹茶やら、何一つとして缺けたる所なき御方なれば、其にて旦那樣も滿足なさるゝなるべし。及びもなき此身の無學無藝、實もならざればまた花もなき野末の草に、情の露はかゝらぬ道理と、萎れかへりて眼を拭ひぬ。力も今は返す言葉なくて、相互がはりの吐息に濕り勝なる門の口、車の音の止りてお歸りと喚ぶ聲に、二人ともとつかはと玄關に驅出でけり。

（二）

歸來れるは年輩二十七八の眞箇蒲容なる好男子。顏色は琢ける玉の白皙に、八字髭黑々と長き尾は渦を卷き、前齒に一枚金を塡めたるが、煙草に燻ぼりて褐色なる齒の中に際立ち、鼻隆く、屹として、眉の優しく彎りたるに、纎く睡氣を帶ぶる双眸には、一種溫和の氣あり。

投げたる荒布革の書類入の側に、禮帽形の高帽子を輕く脫捨て、上框に撻と腰懸けて靴を脫ぐ時、車夫はスコッチの蔽膝を下女に渡し、主人夫婦に挨拶して、車を牽きて歸行くは、徽章付の看板だけ四季施して抱へと見せる、此頃流行の常傭の車と見えたり。

妻の敏は慇懃に挨拶して、靜に書類入と帽子を抱へ、夫の後に跟て奥に入れば、簞笥の上なる銘仙の不斷衣に、白縮緬の兵兒帶取添へて持出し、今日の暑氣は最早春にはあらず、お車上ながら戸外は熱かるべしといへ

ど、夫は鼻頭にてふんとばかり、衿の飾釦の取れざるに焦れながら言葉忙しく、背中の汗に心着かざるか、拭け〱と睨着くれば、唯と手拭取りに行きもあへぬに、茶をくれ、咽喉が渇く、早くせぬか早く〱と急立つるに下女は臺所を驅出で、手拭持て行く妻と襖の陰にて眼を見合せぬ。火鉢の前なる常坐に胡坐掻きて、開放したる椽側より庭を眺め、眉を顰めながら煙草を薰らす側に妻の悸々と手を支へて、御食事はと尋ぬれば、見向きもせで邪慳に濟むだといふ、妻はおとなしく退出て、次の間の口より小聲にて力を喚べば、程なく膳椀の音して、さぞ空腹うござりませうと下女の聲、夫は後なる柱時計を仰げば一時半少し過ぎたり。我歸宅まで午餉を控へて待つたるを嬉しき心入とも思はぬか。尖聲にてまだ食はぬのかと喚かれ、茶漬も胸に痞へて匆々に了ふ頃、保科といふ無二の友尋來り、懇意の中とて不遠慮につか〱と庭口より座敷に通りながら、椽なる鉢栽の牡丹を見て、緣口かと笑うて火鉢の前に坐れば、緣口さと

心快く笑ふ。妻は小陰にて之を見るに、己に對する調子とは手裏返したる夫の機嫌、胸にむしやくしやの實際あるものならば、いかに人の異りたりとて白雨の霽るゝやうにかうはあられぬものを、所在ありて此身へ當る事といとゞ恨めしく、胸は塞りぬ。

保科は元氣なる男にて、夫人々々と高聲に喚べば、夫の不機嫌に孤獨心細き折から、他人ながら打解けたる言葉に力を得て可懷く挨拶に出づれば、保科も坐體を正して、先夜は大醉殆ど前後忘却、其節下駄を穿違へ、今日持參慥かに御受取下さるべしといふに、物言ひたけれど夫の手前を兼ね、口を噤みて唯笑むのみ。夫は退出といはぬばかりに妻の方を睨むを、保科は横眼に見て直に、また敏の方を見遣り、用事なくばまづ談したまへ。珍客の御入來なれば夫婦ともに心を竭して對遇て然るべし。まづ是へ〳〵と手を取らぬばかりに強ひらるれど、居らば此の男歸りて後の不興を豫想りて、居るには居かね、立つには立ちかねて逡巡と在たり

しが、急に心着きたる風して、何かお菓子をといふを機會に立上れば、菓子も可けれど其棚に蔭庇たる香竄葡萄が所望、一盃一盃と手を出せば、後は空瓶と可笑がりて退りぬ。

保科は主人の方を見向きて、その浮かぬ顏は何故ぞ。これに附きて意見聞きたき事あり。分別に餘るといひて妻を喚び、力ともに風呂に行けといふを怪しみて躊躇すれば、例の不興なる眼して早く行かぬかと叱られ、御寛緩となされましと保科に會釋して、いかにも不審の霽れやらぬ顏色。大事のお預りの品を赤坂などへ擔出す魂膽ならねば、安堵してゆるりと琢いて來たまへ。あんな言ばかりと口頭にはいへど思ひを遺し、力を伴つれて一町程ある玉の湯へ行く途上も當推慮の數限り、何にしても此身の爲に利はあるまじき相談と、思續けて顏を洗ふ折の嚔二つ！案に違はず夫が了簡の打明話、保科は片唾を呑むで耳を澄しぬ。

（三）

壁に耳はなし、外に聞人とて無けれど、主人は良心に憚る聲の低く、意見を聞きたしとは餘事にもあらず、薄々は豫て話せし妻の一條、いかにしても我慢しがたければ愈々此度は離縁と決心せり、となほ言繼がむとする横合より、其に就て此方が是非の意見か。否々その是非に就ては他人の意見を聞くまでもなく、無論斷行と心を決したれど、何程心に染まざればとて言分なき女房は去り難ければ。何とか完全なる口實のあれかしと、肝膽を碎く事頻りなれど未に好分別の出でざるに、智慧を貸して合川が眼上の瘤を拂うてくれ。否其瘤は拂ふまい。夫婦の事をいひ出せばいつも此方を獨身ものゝ味不知と一口に言消して、二の矢を次ぐべき言葉なけれど、女房は去らるゝ身の恥辱、去る身の恥辱といふ事、我も知れば君とても能く知るべし。三年添うて子なきは去れと昔はいへり。

妻はあながち世繼を設けむばかりの道具にもあらざれば、三年にして子を生まずとて用捨もなく去るべきにあらず、また情として去らるべきにもあらざるべし。唯此外に已むなくして去るべき條件は姦通第一たるべし、二には手癖の惡きなどは隨分分別の上にて去るべし。微塵言分なしとは、世間に比類稀なる良妻を心に染まずとは何事ぞ。一存の我儘なり、非道の譫語なり、心ある男子の幻にも勤むべき譫語ならずや。已に自家が口から言分なしとは、妻として不足なき女子といふに異らず。妻として不足なき女子を心に染まぬとは、妻として不足なりといふに異らず、譫語、譫語、大譫語！　尋常人間の心にてはとても考へ能はざる大逆理を、逆理と知つてか知らずか、孰れにしても推通さんとは極惡非道鬼畜の了簡なり。

我親しく出入して不斷見る所、夫人には一點の是ぞと指していふべき缺點もなし。朋友輩も寄れば噂に懸りて譽物となること、大體の心懸にて

はならざる事なり。賢女貞婦と三拜して可愛がるべきに、近頃君の對遇いらく〳〵と言葉に針を含み、所作に角立てゝ見るにさへ氣毒なる、其身其心になりたらば幾何ぞや。犬も尾を掉り足にからまれば撻つべき筈なし、まして此は連添ふ女房の、無理も理と服して從順に貞實に仕ふるものを、譯もなく心に染まぬ氣に入らぬとばかりにて去らむとは何たる了簡ぞ。雖然なるほど可厭な女房は片時も辛抱なるまじければ、次第に因らば我とても隨分應分の盡力はして、無二の親友の爲なれば惱き眼上の瘤も拂ふべし。其の心に染まぬ理由をなるほど腑に落つる樣に聞かせたまへ、もしまた理も非もいらずして唯心に染まざる所以とばかりの言草ならば、過失は其方にある事。其不心得の段々を十分合點の行くやう說明の勞を取るべし。哀れむべき夫人の爲めに身を犧牲に供して偕樂の調和を計るべしと、保科卓爾色を變じ疊を叩いて詰寄れば、合川理輔は道理に詰められて言句もなく、少時は下俯きてゐたりしが、保科が激昂したる見脈

に呑まれておのづから顏色和らぎ、當惑の手に頭髪を撫でゝ、其理と問れても唯、心に染まぬといふの外なし。先づ彼面體を見てくれぬか、絹類を着て居ずば適れ下女婢と見紛ふべきに、其の補缺となるべき才智でもある事か、學問でもある事か、客に對うて滿足なる挨拶一つ出來ずして、今年二十四といふにあらずや、彼面貌を見よ嘔氣が來ると舌皷して顏を顰むれば、保科は思案に沈みながら二つ三つ首を掉りて、今更容色の論は無益なり、女房美色を第一といふならば娼妓藝妓は此上もなき良妻なるべし、極端なる論かな。美しくはあらずもあれ、醜からぬは望ましからずや。

（四）

抑も女房は一生の荷厄介、前後爭死は定れる壽命づくとして、死水取るか取らるゝかの際まで引着て放れぬ身の影、之が出來合の靴にてもあらば、足に合ぬが最後椽下へ投込みて、犬も來て嚙へ猫も冠れ、一圓二圓の無駄は覺寢の思ともならで濟むべし。敏の如き心底好かぬ女房を持こたふる事、踵を擦壞す靴に日毎出歩行きて向來三四十年の辛抱、推慮へても見たまへ、なるべき事にあらず。言はるゝ通り申分なき女房を去る理はなしと、其を知らざる我ならねば、幾度も分別仕換へて添うてやらむとは思へど、因果は前世とやらの敵同士か、罪も過失もなき女房の可憎、顏を見るほど癪に障り、物言ひ懸けらるれば惣毛立ち、其を堪ふればむか／＼と心惡く頭重りて果は氣が苛立ち、何といふ理由もなき不平起りて噫此頭の浮世の厭はしさ。一日添へば二日の命を縮め、一年添は

ゝ二年の命。可愛くもなき女房に惜しき命を遣るは可厭な事なり。彼も性一杯の貞節を盡し、罪もなくして疎まるゝ事彼の不運といふべし縁なき夫に嫌はれながら纏着かむより世間は廣し、しつくりとしたる相性の男を見立て、思入れ可愛がられいとしがられて、世はおもしろく暮すが身の幸福といふものなり。我一人ばかりが男かはと、火鉢の縁に葉卷の灰を打落して、流眄に保科の方を見遣れば、首を傾けてしきりに大息を泄しぬ。

やがて保科は苦笑して、合川情婦でも出來たか。何と？外に何所ぞに惚れたる女子などありて、其に心を移しての薄情か。多年の讀書は空理の法螺吹く爲にあらざれば、物の道理は兎も角も辨へたるべし、彼の面體の此風采のと女房の姿色の難を言立て、氣質を二の次にして願を敵くは世間盲昧の下等動物がいふ事なり、妻は爾が獸慾の渴氣止にとて、給金なしに傭ひたる器械人形と思ふか、非なり。天地男女を生ずるにも尊卑

をなさず。婦人を――妻を閨中の玩弄物とは慚かしき心得かな。なるほど姿色の美は醜きには勝るべし、さりながら閨の伽ばかりなる妾と品變れば氣質を買ふ事第一なり、容色は當座の仇花、月に歳に色香失せて惜むに返らず、此所に獨火に焦げず水に溺れず、墓所の土も其光を蔽ふ事能はず、歳を累ね老の到るほど又色香の添ふは其心性なり。天に偏愛なく、一物に二利を與ふる事なければ、賢女に美人は稀なりと了簡して、我慾を挫ぎ、悟道染みたる言分なれど、心眼を開き夫人が性情の容色を熟と諦視めなば、骨も肉も蕩るばかり可愛き所あるを識るべし。また夫人が容顔とても、二言目には、不器量といへど、美しからぬばかりの事にて人類に似ざるといふにもあらざるに、辛抱のならずといふ事あるべきや、分別しかへて女一人助けたまへと、汗を流して意見に及びたれど、合川理輔はなほ不得心の色なりし。

聞かせともなき密談なればこそかく我等を遠けたれ、其を聞きたさに早

く還りたりと、卑怯がましく想はれむも口惜しければ、ゆるりとしてわざと暇取るが夫の心に逆はずして、憎まるゝ中にもしをらしく思はれたさに敏は長湯せむといふに、力は氣の立つたる女子とて、おのれらを邪魔にして逐出したるが腹立たしければ、平常よりも今日は早く戻りて二人の邪魔せむといへど、敏は肯かず、よしなき逆流立はいとゞ憎惡の種なればと、例の如くおとなしく出るに、我身の事ならねば強ひてとは言難き主の言葉と、獨齒痒がりて小桶の手觸暴きも、主を思ふ一筋の志ゆゑと、是につけても、夫の可恨しさ。

一時間餘も風呂に出つ入つ、顏も念入に二度まで洗うて、後の雁が前になりて衆の出浴ゆくに、番臺の女房が所思も可羞くてやう／＼立出で、さらぬだに女子の歩行は果敢どらぬに、なほ間取らむと繪草紙店の前に立留れば、誰書きしやら彩色麗しき當世女の面影、この半分、三分一の標致ならむには、かほどには疎まれまじきにと、筆の蹟ながら妬ましく

て直に此所をも退き、藥種舗の看板まで讀覺えて懷胎の妙藥と書いたるもうるさく、かくても密話はまだ盡きずして邪魔にもならむかと、恐る恐る歸つて見れば、夫も保科も無言にて、對坐の顏色の浮かぬを見るにつけて、噫心元なき我身上！

蒸菓子を買うて歸れば、保科は茶好とてまた賁初を所望し、むしや〳〵食うて湯沸一杯は大方一人にて虛にし、其一條は深く分別したまへ。此茶碗一箇造らんには、土よ竈よ火加減よ、繪具の吟味模樣の圖案と、なか〳〵一朝一夕の事にあらず、打壞さむには何の雜作もなくと、有合ふ茶碗取つて振翳し、敷石に投着けなば粉微塵、今直にてもなる事、反復してよく〳〵思案あるべし。近日ゆるりと參りてまた一議論。今日は此にてお告別と還らむ氣色に、敏は倉皇臺所へ走行き、何やら力に叫けば、呑込み貌にてとつかはと戸外へ走出でぬ。

敏いせはし氣に座敷に還りて、夫とゝもに玄關まで保科を見送れば、保科は格子を出ながら、合川！　風にも散らず雨にも怯げぬ花の色香の我有を指し、微笑を遺して行きぬ。行くこと六七間にして橫町の曲角に、

待受けたる下女の力が小腰を屈め、笑ひ懸けつゝ近寄りて、保科様無躾なるお尋問ながら、奥様お留守中に旦那様の御相談はどのやうなる事なりしか、苦しからずばお洩し下さりませ。奥様のお身上に就きましての事なるべしといふ。

保科は豫て此力といふ下女の敏に忠實なるよしを識れば、毛頭裹む所なく有りし次第を簡畧に語れば、聞く毎に眉を顰め眼を睜り、顔色まで變へての驚駭。當人の聞かば嘸と保科も不便を催し、慰撫の言葉を盡して、この通りをよく傳へよと別れむとすれば、實意に懐き易き女氣の名殘を惜み、かゝる男の一所に居るならば、旦那様の御機嫌も麗しく、奥様の御苦勞とてもあるまじきにと思へばや、近日にまた御入來なされまして、行末の覺束なさに面影の窶るゝ迄心細がらせたまふ奥様のお力となつて下さるやう、差出がましけれど私婢よりも偏に〳〵お願ひまをしまする。今日の御深切嘸や奥様のお喜、其御禮をも御自身に申上げたかるべきに、

暮々も近き内に御入來を待ちますると、喜悦のほどは口にも色にも見えけり。之につけても保科は離縁沙汰の消ゆるやう合川を說破せんと、なほ決心の臍を固めぬ。

力の話說によれば保科が懇々意見せしといふに、夫の心の更に融けたる模樣も見えず。家に在ればむづかしき顏して書見に凝り、其も飽む時は床柱に凭れて首を俛れ、思案に沈むは何の思案か、其も知れたる事なり。手も着けられず傍に觀る身の辛さ切なさ。折々は可恐しげなる眼してじろ／＼と睨廻はし、落度のあれかし、乘機りて思入れ小言を啖はせむと心を配る氣色なれど、敏は萬事に意をもちゐて振舞へば擊入るべき隙もなし。薄氷を履むとはかゝる境界かと、夜每の夢も穩からず、食事にも味を覺えず、四六時中恐怖の念の休む事なきに身を傷め、いつか色蒼ざめて骨立ち、眼は絕間なき暗淚に曇れるなど、いとゞ美艷からぬが淺ましき姿となりて、唯憂を重ぬるこそ憐れなれ。

合川は之にいよ〳〵愛想盡かし、一家に居ながら顔見る事も嫌ひ、家に在る日は六疊の小座敷に閉籠りて、用無ければ居間へ出づる事なし。餘儀なく顔を合せば氣色惡き顔色して、いふべき事も口には言はず、手模、顧頭、目授にて意を悟らせむとするを、悟らぬ時は忽ち憤怒をなして罵るか、罵らずして已めば其日一日は所爲にて辛く衝るなど、手を變へ品を變へて情無く遇しけり。

春も暮行く日の駘蕩、庭の垣根に躑躅の咲初めたるは色目覺しく、山吹は少し遲れて、去年種捨てたる花菖蒲の芽萌しが、式ばかりの花を持ちたるもしをらしく、隣の庭境には葉櫻若楓、梅は葉蔭に實を持ち、栗はまだ花に早く、榎槐葉の繁茂夏も近しと、袷に衣更て龜井戸の藤見んとてや、今日の日曜を人の出盛。車の音絶間なく耳を貫くに浮かれて出窓より戸外を見れば。數々過行く中にも、是は一際目立ちて新しき一人乘の並びて、車夫はいづれも達者を擢り、紺の法被に白木綿の猿胯、饅頭笠の褄折に紺木綿の蔽布して、前車には二十二三の半元服色白を自慢にわざと薄化粧して、女唐傘を莖短に翳し、後なる車には理輔と同じ樣なる高帽子を冠りて、黑の一樂の羽織着たる紳士の三十恰好なるが、家の前に葉卷の吸殼を投捨てゝ走らせけり。

俊は餘りの可羨しさに窓の格子に縋り、後影の見えずなるまでも爪立てゝ見送り、種々なる世間と呟きぬ。妾とてもあの樣に睦まじかるべき夫に疎まれ嫌はれ、取兼ぬる機嫌を取むとしては睨まれ詈られ、日夜の氣兼に健壯なりし體も斯は傷みぬ。苦を求むる爲にとて夫を持つ世の慣習ならば、女子と生れ出でたる身を果敢なみながらも亦思切る瀨はあるべしと、泣いても訴ふる所はなし。國元の兩親なほも在さば、かゝる時にはと追懷の淚を流しぬ。衣類も欲しからず、遊山も好もしからず。冬は氷に硬る釣瓶繩を手繰り、夏は晝炊の火前に膏汗を絞るとも、其等はなか〳〵苦からじ、其水にて心快く盥嗽もしたまひ、其飯をも甘しと喜びたまふならば、身は粉にもなれと捨つる身を拾ふ人なき因果を喞てど、喞つに滅する因果ならず。益なき事に氣を腐らすは畢竟所身の損なり。思ふまじ〳〵と奧へ行く出合頭、八百屋が參りましたと下女の通知に、何が有る。漬立の細根も召上らぬは最早飽かれてならむ。三河島の夜蒔

もあらば珍しく鹽漬にしてと水口に立出でゝ見れば、欲しき物はなくて細根に龜井戸大根、牛房に鶯菜、蓮根に蕗、根芋、子芋、蒟蒻、蕨、さがら麩、あとは鹽の好き鰯の魚貫と言立つる、力は障子の外に出でゝ荷の中を覗き、あの隅の竹皮包は何ぞと問へば、頭を掻きて、にや〳〵と笑ひ、彼は大事の品にて賣物にはあらずといふ。大事の品とは何ぞと尋ぬれば、唯今買うて參りたる鹿子餅。お前は下戸かと聞けば左と答ふ。さらば母親への土産か、子供へのか、滅相もないまだ子供はござりませぬ。此間女房を娶ひましたばかりと、喜悦さに相好崩れておもしろき面に見えぬ。なるほど今月の初二日ほど休みしは、御婚禮と其折聞きし。今一日程も休業たかりしが、親父の嚴酷にさうもならずして、直に仕事に出懸けました。扨は其菓子は花嫁御への土産よな。憎しと八百屋の背を撲はせけるに、尚にや〳〵と笑うて、嚊めが好じやといふゆゑ買うて遣りました。否、嚊の事は兎も角も今日は何も御用はござりませぬかといふを、敏は板間

の柱に倚りて物をも言はで聞居たりしが、やがて又願ひまするど、行かむとするを霎時と喚留め、奥へ行きて半紙に包める、藤色鹿子の（てがら）を持來り、下女の手より八百屋へ渡して、其は私が垢染なれど其方のお神さんの不斷懸にと取せければ、八百屋は兩手に載せて吃驚顏。之を嗅めにと幾度か推戴きて腹懸の（かくし）に收めぬ。女子親を離れては夫ばかりを依賴なれば、中好くして可愛がり、長き間には氣に入らぬ事など、隨分堪へてやるべし。平常嫁に新迎の心を忘れずば家内は安穩なるべしと、身に覺悟の一々を聞かすれば、聞居る力は主人の心を推慮りて眼中に涙を浮べ、おのれ女房を麁末にせば、私が唯は置かぬぞえと睨付けられ、八百屋は何の事とも分解らず、唯々とばかり立端を失ひ、解けもせぬ草鞋の紐を結べば。明日は屹度菜を。屹度持つて參じます。

(七)

鬼も角折る情に摧けぬ理輔は木佛か金佛か、それだに至誠信心の輩には利益を與ふる由、血も溫かく循環りて心臓の皷動も人に異る事なき理輔にして、敏が身の脂肪を絞りて薦むるばかりの信實を兎毛の露ほども感ぜず、梅花薔薇の芳芬に鼻を摘む。信に前世の敵同士と知らで結びたる緣の紛亂、解くか斷るか。解けとは保科卓爾が意見、其は局に當らざるものゝ口頭、解けぬ紛亂と見たればこそ、斷て相方の仕合ともなる事を。世間破鏡などゝ可忌き異名を附け、之をも恥辱の一條に數ふる慣習、合點の行かざる事なり。

離緣に就ては種々事情ありて、此方から離れと言難きは、第一に此身幼少して兩親を喪ひ、敏の兩親に引取られて養育敎育の世話を受け、これまでになりたるは皆彼が双親の恩なり。されば出世の曉には一身の全力を

捧げて恩に報ふべき夫婦の亡後は、子たる敏に其義務を致すべきの理なれば、彼は尋常の妻にあらず。二には許嫁の女房、其緣は松に蔦の同根生の相抱、格別堅き契なれば、孰れにしても容易とは離りも離られもすまじき夫婦なり。

敏が大方の落度にも目を瞑り、恩を憶ひ義理を思うて睦じうせでは、冥利にも愜はざる事と識りつゝも、什麼なる因果にやあの女子氣に染まず、枕も襖を隔てゝ並る別臥の夜毎、いさゝかの罪なく山海の恩ある妻に辛く衝るは、鬼畜に等しき所爲なり。濶き天地に所恃なかりし孤獨の理輔、もし敏が双親の慈惠なかりしならば今は何にか成りたらむ！　髭黑々としたる壯夫の燐枝さゝら賣りて、投げらるゝ一厘に頭下ぐるも多し。我は何にか成りたらむ！　學位を戴きて世に誇り、上流社會の末にも列なる事誰が恩と思ふ時は、枕を欹てゝ相隔の襖越に、拜みこそせね冥加は空可恐く覺えて、我不義不德の所業を悔い、彼が不幸不便の身上を憫み、

從來重ねたる不了簡の段々を臆起せば、我心我を責めて漸愧の冷汗背腋に流れ額に垂れ、思はず我胷を撲つて不義の奴を懲せど、なほ世間に可羞しく、罪を天地に償ひ難く、枕を嚙むで足搔の音に鼠驚き走るを見送れば、床間に懸る華山の鍾馗はいとゞ目を眩らせ、劍を揮つて此方を睨むに宛然生けるがごとし。實にもこの一幅は敏が亡父の秘藏とて坐臥朝暮の愛玩なりし。之に愈前非を悔ゆれば、萬感胸に湧きて更に睡眠を成さゞる間、考ふる事は吾身の不所存、敏の不幸。明日から、魂魄を入換へ、生れ換りたる氣になりて無理にも彼をいとしがりて、睦まじき夫婦と保科にも賞めらるゝやうに勉むべしと、催眠むまでは金輪奈落其氣なりしか。

明くるほどに目覺むるほどに、昨夜は昨夜の思想！大方夢ならむ、今朝はまた今朝の了簡。下女の樣な面體にておほげなくも合川理學士の令夫人頰、やれお早いのお手水のと懊惱い〳〵。懊惱く纏綿うて帶にも掛せぬ

棚臀を振廻し、あのゝものゝと深切擬すだけ小癪に障る田舎仕立の所爲。えゝ！　見るも可厭になりて例の苦い顔、小腹の立つまゝ罪なきものを散々に叱付け、役所へ急ぐ支度とて、靴下の隻足見えぬに熬れかゝれば、下女も出て探しけるに見當らず。　理輔いよ〳〵腹立て、何の爲の女房ぞ！　きよろりとして火鉢の側に居るばかりが役ならば猫でも用は足る。急に見當らずば靴下は之にも限るまじ、時刻が移る、新しきを出せ〳〵と罵れば、敏は簞笥の環に縋りてほろ〳〵泣くを、早く〳〵と急立てられて抽斗より新しき靴下を取出せば、倉皇に穿き、待てる人力車に飛乗りて出づるや否や、見送に出でたる敏は、奥へ驅入りてわつと泣く聲に、何事と力も續いて驅込み、奥樣何となされましたと、泣伏したる敏の背後へ廻りて氣遣へば、力や悔しいと體を慄はせて歔上げぬ、猫でも用は足ると、物もあらうに畜生に譬へられたが口惜い。譬へた理輔奴こそ恩を仇なる犬、猫、畜生！

夫婦にして夫婦の情なき、宛然他人の集合、其も心の合はゞ恃み恃まれて、可懐しき事も樂しき事もある世に、偕老同穴比翼連理と衆には唱はれながら、何の〳〵、夫には疎まれ、親には亡なられ、松も椎も頼む木蔭は雨泄る始末、濡るゝ袖の干しあへぬ涙ばかりを友として、覺束なくも行末を慮ふれば、分別迫りて死なむ事のみぞ浮びける。さりながら死ぬは今にも限らず、兎角は此世に生れ出でたる効に、おもしろき思をしてと又分別爲改へて見れば、如此情なき男に添うて、苛たらしう遇はれ、何の樂しき事ぞ。寢ても覺めてもはら〳〵と氣を傷めて、其も少しは榮ありて歡ばるゝ事か。爲る事成す事悉皆疎まれの種子となりて、さら〳〵女房とは此身を思はぬ男を、此方ばかり大事の夫と册く鈍さ。鐵を袖にて磨りて其鐵の丸とならん時にこそ、漸く此夫の心も和がめ。とてもと

ても辛抱して添うて結ばれぬ縁なれば、一思に斷るに增したるはなし。斷つて外に緣を求めなば、廣き世間には不束なる此身にも似合しき男ありて、兎も角もかほどの苦勞なしに、適には嬉しき事も亦樂しき事もありて、生効ある方あるべし。離緣は夫も望む所なれば、離緣に難なし。それ〳〵と好思案に思ひたるも、先々まで案じ迫めて見れば、年は二十四花も末方、再嫁の上に此姿色、其も兩親しかとしたる後楯となりて持參金といふものゝあるならば、娶はむといふものもあるべし。家は斷絕て行どころに迷ふたる女子と衆に賤まれ、碌な所へは得行くまじ。女子再嫁は疵物の不器量、實家も無きまぐれ女と侮られて、もし其緣も末遂げざる始末にてもあらば、此上の上の憂目を見るに極れり。理輔樣は親親の許嫁といひ、我兩親が實子同樣に幼稚より世話したまひし因緣もあれば、此男に添遂げむこと順當にて、又わが爲にも惡からぬ理のあるものを、一時の憂目を忍び兼て、捨つるは却て不爲なるべし。我兩親の恩

を思ひ出したまはむ日もあらば、かく疎みたまふ此身とて義理にも優しくしたまふ時は來るべし。其時を樂みに睨まれても罵られても、嫌はれても疎まれても、足はぬ身の修行と諦め、恨がましき貌もせず、喞ちがましき涕も出さず、石に嚙着く氣を勵まして辛抱し、夫は夫の情を加へずとも、妻は妻たる道を盡さむに、至誠は天をも貫きて夫の心もいつかは融くべし。才氣あるが上に人品優れ、學問も該博官位も卑からず、申分なき理輔ほどの男を夫に持つ身は應じて標致美しく心利きて、裁縫學問諸禮遊藝まで、一通の修練なくては稱はぬ事なるに、此身は草深き田舍の生育。なるほど下女婢の水仕業より外に能なき女子にして、かゝる男を夫に持つ事不釣合とはいひながら、冥加に餘れる仕合なれば、氣に入られずして數の憂目を見るも、恨むは此方の不心得なり。我親の幼稚より世話せし事情のあればこそ、お心に染まぬながらも如此不承して女房に持ちたまふなれ。さるを此上榮耀を想ひ、苦艱に堪へかねて離られ

うの餘所へ行かうのとは、身の程知らずといふものなり。此夫大事に只管眞心を盡しなば、軒の玉水力なくとも終には石の凹む事、眼前の例を好教誡と、なほ實意に仕へて千年も萬年も添ふ覺悟、理輔の迷惑これぞ長大息の種。

今日は役所から直に課長の許へ所用ありて廻りしと、廻らぬ舌の高調子、足下蹌踉に醉うて點燈頃に歸來りけるを、いつにも無き事とて敏も力も目を見合せて呆れけり。理輔水を喚びて硝子盃に二盃立續けに傾け、ほつと息を吐いて四邊を見廻し、今夜は敏に大分言ふ事あり、力にはちと聞かせともなき内證話。二三時間何所へなりと遠慮すべし。好所を敎へてやる、横町の寄席に姓は吉田名は國五郎とて、聞ゆる上手の人形操懸りて非常に大入の由。見て來い〳〵。敏小遣を澤山遣れと、座敷の眞中に上衣を脫捨て、椽側を窄袴を引摺りながら、あゝ醉うた〳〵と小座敷へ入りけり。

迹に敏は小首を傾け、何か知らねど今夜に限りていふ事ありとは氣遣ひな。力、お前と別るゝも近日ならむと聲は曇りぬ。力少時は默然として

やがて獨り頷き、その樣な事は構へてあるまじけれど、何に致せ氣懸りなれば何所へも妾は參るまじ。參らずとて何の用には立たざれど、お話の模樣が案じられまして、なか〳〵餘所に在る空はございませねば、門の格子に音立てゝ旦那樣には出ると見せ、部屋の燈火を消して好時分まで忍びましよ。家にお前がゐると思へば心強し。早く〳〵と左右に別れて小座敷に來て見れば、理輔は机前に大字に仆れたりしが、人の氣勢に心着きて水をといふ。注意は此時とレモナアドを入れて持行けば、一口含みてかつと吐出し、レモナアドくれとは誰がいうたと硝子盃を擊倒せば、水はさつと流れて敏が膝を浸せど、不平な貌もせずおとなしく手巾取出して疊を拭ふを流眄に懸け、入らざる眞似をせずともくれというた水を持て來いと、背向けてつんと寢轉りぬ。

えを〳〵と硝子盃を拾うて立上り、座敷の洋燈を片手に臺所へ行けば、物音に力がそつと障子を明けて顏を出し、お冷でございますかと敏の顏

を覗きて眼に持つ涙を見咎め、又何やらおつしやられましたのか。水とおつしやたにつひレモナアドを入れて上げたがお氣に入らず、飲まれた水まで吐出し、硝子盃を撃倒して此樣にと、濡れたる膝を力は見るより、無念さうな口狀して、えゝと言懸け、ぐつと呑込み、妾ならば了簡は致しませぬ。貴孃なればこそと目を拭き〳〵、汲置の水に滓などあらば又とやかうとお小言の種。一杯汲むでと手桶提げて、直に裏なる井戸より汲立の水を持行けど、理輔は彼方向いて寢たふり。枕上に置きて汲立でござります。召上りましと徐に搖覺せど、なほ寢たふりして聲も立てず。さりとは知らず、風など引かせじと三四度も喚べば、えゝ喧しいと起返る、お冷をと差出す硝子盃を取上げて洋燈に映し、此滓は！溝渠の水が飲まるゝか。見ればなるほど、蒸溜水ならねば曇なく淸むといふにはあらねど、溝渠の水とは何事ぞ、毎日の湯も茶も此水なるを、いかに難が言ひたければとて餘りといへば無理なる非難と、流石に呆れ

て物も言はれず。返答なければいよ〳〵憤悶こみ、如此水が飲まるゝかと、窓より庭へ硝子盃を投着くれば、敷石にからりと砕けぬ。

實意は微塵に壊され、これはと呆れて思はず理輪の顏を視れば、髭を捻りて天井を仰ぎ、何所を風が吹くかといはぬばかり。無念腸に染みてじつと視凝る眼中の涙溢れて膝に墮れば、これも非難の種と心着きてそつと拭ひぬ。

我を怨みの涙常に乾く間なく、一日もやすき思をさせざる事いかにも氣毒なり。少しは心を休めんと種々に思回せど、性が合はぬとやら星が惡しとやらいふ夫婦と見えていつも〱、不興な面ばかりして、其方の辛さはいふまでもな　此方とてもおもしろからぬ次第なれば、相互の爲に緣斷る心はなきか。かゝる事をいへば定めて我を義理も恩も辨へざる奴と思ふべし。其方が思ふまでもなく〱、我自身も自身の了簡に愛想が盡きたり。伯父伯母御夫婦には幼少より言葉に盡されぬ大恩を受けたれば、

縱令かく夫婦の縁は結ばずとも憂は共に憂ひ、喜びは倶に喜ぶべき義理のありながら、いかに心に染まざるとて、この樣に苛う遇ふ事良心にも愧しき始末と、立派に人間の分別はありながら、いかなる因果にや其方と百年の命を偕にする氣は更に無ければ、無理に添うて相互に味氣なき世を暮さむより、寧ろ緣斷つて末々の幸福を計らむと思立ち、言へぬ義理ながら言はでは置かれぬ事とて、面おし拭うて今宵其方の了簡を聞くなり。

義理も恩も知らざる奴と思はゞ思へ、言うたとて到底信實とはすまじけれど、其方が亡親の高恩は七生までも誓うて忘るゝ事なし。されば其愛娘なる其方に對し何とて疎略のあるべきや。恩を報すべき人は其方なり其方が爲とならば理輔は命をも捧ぐべし、命を捧げても其方が爲には厭ふまじ。さりながら愛情ばかりは言ふも氣毒なれど一滴も許し難し。許し難きにあらず、許す事の能はざるなり。天地神あらば神も照覽あれ。

伯父伯母御夫婦靈あらば靈も照覽あれ、理輔は深く心に其方を愛し、其方を憐れみ、其方の幸福を禱り、其方の快樂を願ふに毫毛も欺詐あるものならねど、奈何せむと稍口籠りしが、其方とは心合ずして、なるほど忠實に此身を思うて爲す事言ふ事と十分に識りながら、其が一々氣に入らず。濟まぬ事よ不便な事と知りつゝ、罵りもし、呵りもし、苛くも遇ふ傍から後悔の汗を流して良心に責めらるゝ切なさに、此後は固く心に誓を立てゝも、また其方が顏を見る時は、無情と恨まれ、恩知らずと思はるゝ擧動にも及ぶぞかし。其罪は今日改めて謝罪の驗に、心底其方を思ふ段々を自白し、此所存に詐譎なく、まこと其方が身の幸福を思ふ心から今宵限り緣切つて、一日も早く苛責の苦艱を免れしめむとの志を恨むなかれ。合川は義理ある妻を逐出したりと、人の口端にかゝる不名譽を身に負うても、其方が爲には命をも捧げむといひし、其不名譽をも辭せずして離緣せむとは、實に其方が身を思へばなり。

（十一）

縁は斷るとも他人とはならじ、萬事の後楯と頼まれて。此身の力の及ばむ制限は、自己を措いても其方が爲には勉めむほどに、行末は氣遣ふに及ばず、かうと思はしき所もあらば適くに極めたまへ。添うて和合むづかしき夫婦とならんよりは、斷れても信實ある兄弟となるには如かじ、我口から係る事をいへば、定めて飽いて離りたさのお爲ごかしとも想ふべし。さも想はるゝは一時の堪忍、始終は意志の識れて歡ばるゝ日を待つべし。雖然かへすぐも義理こそあれ、罪なき妻を難さへ得付けずして離る事、いふまでもなく罪科は全く此身に在りて、我ながらも面目なさに、飲まぬ酒の醉氣を假りて、縺るゝ舌に紛らはし、思ふ段々を我から言へば、酒に言はする意中を酌みなば、其方が想ふほどに鬼のやうなる理輔にもあらずと知るべし。これが餘所の色香に心移して、其方を疎

むといふにもあらず、又其方にしても離らるべき過失のありといふにもあらねば、いはゞ相互に潔白なる身にして、此離縁いさゝかも天地に愧る所なし。唯添ふべからざる縁の不圖結ばりたるを、今悪縁と心着き、解いて舊時の二條に返すと想はゞ、何の事はなかるべし。悔しきは社會の杓子定規に量されて、離縁を不名譽と辛抱して、苦い顔を見合せばこそ、此おもしろき世を不愉快に渡る事。とは言ふもの丶、其方も我も今此境界に浮沈の苦しさを思はざるか。

義理知らずよ畜生と侮蔑まれ、この離縁不名譽不面目と承知にて、離るといふも、斷るといふも、偶然なる事にはあらず。相互に此傷はしき境界を脱れ、夫婦といふもの丶幸福、愉快を享けむと思へばなるに、此所をも慮へで一概に此身を辛し情無しとばかり思ふは可恨しきぞ。

敏、返事を聞かせよ。否か、應か。其方が所思は？ と、泣入る敏の顔を見込みぬ。

煙草三服の間にも言葉を出さねば、理輔煙管を投げて腕を組み、柱に凭れて樣子を覗ふに、顏に物言はむ氣色も見えずして、涙とゞめかねたる風情なり。

疎まるゝとは豫ても知り、此分にては離縁も遠からずと、寢覺の覺悟も其のみなりしが、流石に期に臨みては怯るゝも女心は一入にて、とかうの返事の出ざるはとかうの分別のつかざればなり。

離らむといふに應とはいはれぬ仔細、まづ此家を出でゝ行所はなし。又離るに夫から可否を聞くといふも有る例ならねど、爰に有りて聞かるゝに、よしや添遂げまじき縁と知るとも、女子の口から應といはるべきや。唯その一語に今まで盡したる實も貞節も悉皆詐となり、餘義なく添うて居たになる事の口惜さ。さりとて否といふとも、根は放れ水は乾ける纔花活の一輪、何を恃に賞翫となるべき。身の此不幸さは、大方女人定規の數の外なる餘り物に生れ、かく添うたる人にも邪魔にされて、生きて

効のなき身を早く死ねとの事なるか。同じ死ぬものなれば一旦妻に坐りたる合川が家の靈と祀られ、名のみながらも夫の時々の回向にも預らば、彼世にて亡親に遭うても、離縁されずば呵らるゝ事もなかるべし。疎ましき女子、どうでも添はぬ、置かぬとあらば、其時生害と心決めて、やう〳〵涙を拂ひ、今宵あらためて斷れんとのおほせはなくとも、日頃の御樣子にて御心のほどは疾より其と知りました。尋常ならぬ足らはぬ性質なれば、お氣に召さぬは御無理ならねど、今此方樣に捨てられましては、大津の伯母とて骨肉の親ならねば、さしては依頼にもなり難く、ほかには參る所とてなき心細き身を不便と思召され、此まで通り此家にお置きなされまして、お氣に入らぬとならば思の霽るゝやう御存分になされまし。また妾の顏見るさへ御不機嫌の種とならば、婢女部屋の隅へなりとも引込みまして、蔭にてお世話を致したうござります。とても此不束の臻らぬ身にては、何所へ參らうとも所天の心に入らむ事は思も寄

らず。其所にてもまた辛き目を見るほどならば、此方に神妙にして、婦女の道を壊らぬだけも身の仕合と申すもの。おつしやる通り心の合はぬ夫婦は苦の基なれば、いつそ切れて良縁に結更へやうとは、此方様ならば外に立派な〱奥様は腐るほどもあるべし、哀を見るは敏一人。許嫁やら親の義理やら、枷に懸りてこそ餘儀なく此樣なものにも此方樣の添ひたまひたれ、誰が外に添ふものぞ。

命を捧げても此身の爲ならばといふ御心のあるぞならば、誰にも嫌はれもの丶情なき胸中を推慮して、去るの切ると其の樣な事をおつしやらで。いつまでも置いてやるとならば莖桶の傍も餘所の玉の臺よりは。

（十一）

常は臆したるやうに無口の敏も、身の大事とや精神籠めたる辯舌澁滯なきに、恁ばかりとは思懸けざりし理輔は稍驚きて、哀を訴ふる敏の顏を、しげ〳〵と凝視めたりしが、やがて言葉の了る時、眼を瞑りて徐に頭を掉り、いふ所一々理あれど、もとより理は捨てゝの相談なり。其方が胸裏は我能く知れど、此方とてもかく裹まず所存を明して、去られぬ妻に去れといふは、分別の上にも分別して、よく〳〵なる事と思へかし。心を決して一度口外せしからは、此上何ほど其方が言葉を費すとも、承引くべきにあらざれば思諦めよ。言ふがごとく、またと夫を持つ心なく、さまでに此家の戀しとならば、强ひて出よとはいはぬほどに、何時までも居るべし、構ひなしと、一歩も退くまじき裏に易々と一歩を讓りたる氣味惡さ。いかなる所存かとなほ可恐く、案ぜらるゝ夫婦の緣はと問へ

ば、無論斷ると膽太く言放たれ、犇と胸に徹へて堰上ぐる涙とゞめ敢へず、片袖に面を掩うてさし內向けば、理輔之を見て少しは心弱るを、弱らせじ、弱る、弱らせじに、胸むしやくしやと頭髮を搔廻し、えゝ泣いても所爲なし。斷るといふからは其方も屑く斷れよ、斷れたりとて其儘突放しはせぬ。此家は其方の家に與へ、家財諸道具はいふに及ばず、氣に入りの力まで添へて其方に遣れば、氣樂に一人して暮すべし。月々の扶持小遣は、我も取高の知れたる身なれば、餘るほど十分に附與ふ事はならずとも、日々に事缺くやうには計らふまじ。我は役所近に三間ばかりの小家を借り、傭婆を置きて萬事の世話を委せ、其方が緣付くまでは誓うて女房は持つまじ。若又其方が再緣を嫌うて、一生獨身に暮さむとならば、我も一生獨身にて暮して見すべし。我心中かくの通り。其方は嫌へども承けたる恩は思ひ、義理は忘れぬ驗迹に、其方が心を妻にして別居折々の往來、此家の庭に柹の實らば訪るべし、我宿の梅咲かば其方も

來るべし、兄弟とも亦もとの從弟同士ともなり、萬端に就けて扶助となりもなられもせん。かくても其方は我を情無し、人非人と怨むか。此上にもなほ怨むとならば、思ふまゝに怨むべし、怨まれても我は恨なし。此事は其方がいかに不承なりとも、最早我決心の上なれば必ず實行せんに、とやかく言葉を返すは無用なりと、其後は何を言うても應へず、やがて臂枕に仆れて、かくは大方空鼾。窓の梧桐に風噪ぎて、波立つ胸にとつおいつ。

（十三）

此頃の苦勞に紛れて、消息の硯塵埃に白く、久々無沙汰せる大津よりの書状、二度出す手紙に一通の返事も來るか來ぬほどなる筆不性の伯母から、何と思うてかと珍しきは氣遣はしく、封切れば、前文は變ることなく、

一昨日は赤坂の大野樣御歸國なされ早速御尋ね下され、そもじの身に一大事ありとの話、くはしく承はり唯々驚入り候。此程は理輔殿そもじを讐敵のやうに邪慳にいたし、出てゆけがしに扱ひ候由、いかにも不屆なる仕方と腹立たしさも悔しさも、例の氣性なればよろしく御察しなされ度候。今更申すまでもなく、理輔殿そもじには一通ならぬ義理の候へば、大抵の落度は目をねむりて隨分勘辨いたし候ても宜しき譯ある身上には候ものを、片口にては一概にさうとも申がたく候へども。

はなしの樣子にてはなか〳〵非道なる事いたし、餘所の見る目も氣毒とやされ候。見下げ果てたる恩知らずの人非人は理輔殿に御座候。大野樣の物語にても思はず無念の涙がこぼれ申候。色々と案じられ候てその晩も昨夜も臥せらず、食事も進まぬまでに苦勞いたし候。そのやうに辛き中をよくも辛抱いたし、殊勝なる心懸亡母親の善き質が肖て一入可愛くぞんじ候。さりながら罪もなきに左樣に苛き目に遭ひ候て、何ゆゑ默つて居られ候や、合點參り難く候。但しはいかなる目に遭うても口の利かれぬ仔細も候にや、今まで深く裹みて何とも此方へ御申越なされ候はぬは、この伯母のやうなものは相談合手にもならぬ役に立たずと棄てられ候てにや、亡後はそもじを賴むと落々の遺言なれば、此方にても我子のやうにも想ひ、風につけ雨につけて案じくらし居り候ものを、そでなき仕方と恨めしく存じ候。大野樣とて益なき虛言をいふ方ならねば、萬更形蹟もなきつくり事にはあるまじく、又理輔殿と

て物の道理は辨へ、人の頭にも立つほどの人なれば、此樣に人外なる事を働きし理は萬々あるまじく、いづれ嘘やら實やら迷ひ居り申候へど、嘘にいたし候ても寢覺よからぬ話なれば、一方ならず案じられ候、ともかくも此文御覽次第、委細の樣子おちなく御聞かせ被下度待入申候。もし又此話萬が一眞實にも候はゞ、持病のレウマチスにて不相變身動も心に任せず候へども、杖に縋りてなりと、十兵衛爺の肩へ倚りてなりと不取敢出京いたし、理輔殿に面會いたし、姉夫婦に代りて思入れ不心得の段々を責め可申、其にても後悔致さず彼此不理屈を申張り候はゞ、望の通り此方から離縁いたしてそもじを連歸り、いかにも身の立つやうには此の伯母が命に懸けて屹と取計らひ可申候まゝ、心丈夫に居らせられ度、申度事は山々なれど、此話にて氣もわく〳〵と逆上せ、思ふ半分も筆には寫しがたく數々申遺し候。かへす〴〵も大急ぎにて御返事被下度待入りまゐらせ候。

此文所天に見られてはと引裂かむとせしが、これほどの伯母の實情、我手に懸けて破るは勿體なしと、卷返してもとの封に入れ、そのまゝ火鉢の裏に煙としけり。

(十四)

伯母に苦勞を懸けじと思へば、從來幾度か思案の胸に餘る折々、書狀して智惠を借らむかと墨まで磨懸けて思回し、否々いうて遣るはよいけれど、老いても利かぬ氣の女なれば、一圖に理輔殿の所業を腹立ち、づかづかと冷汗の出るやうな言をいひ來らむは定の物、さありてはいとゞ憎惡を重ねこそすれ、所天の心飜りて睦まじうして下さらむ事思も寄らず。女風情の意見と輕しめて、非理なる言をいひ募らるゝ事ばしあらば、女子ながらも說理の伯母なれば、いよ〳〵爭論の火力強くなりて、擧句は緣切れ切らうの物別れ。切れて是ほどならば此樣の苦艱は疾にも免れたらむものを、何所までも圓滑納めて、不吉な事のなからむやうにと思へばこそ、內憂の外貌に知れ、面影の窶るゝまでも案ずるなれ。

さりながら緣切るが否ならば別居とは、體好く離緣されたる身に、此上

何の離縁のあるべき。長き中には此まゝ次第に遠ざけられ、捨てらるゝに極るからは、今の間に早く仔細を知らせ、兎も角も計らうてもらはゞ、また元の鞘に納まる事もあるべし。

伯母は一徹に腹立て、理のあるまゝに嵩に懸りて所天が非道の始終を責めもせば、理輔殿とて默つて理に服してはゐまじければ、藪を突いて蛇を出さむも氣遣ひなり。たゞ穩和に下手に出て、重々此身の不束を詫び不幸を訴へ、伯母が手を衝きて賴むやうにして口をきかば、流石に慚愧もしたまうて此身の仕合となる事あらむ。

書狀にもいふごとく、親亡き後は姉なる人の伯母が親、其親に水臭くも蔽し立せしは此方の誤なり。かく一人して案ずるよりは、一日も早く呼びて、骨折つてもらふが道と硯箱を取出し、南窓に小机を据ゑて卷紙を展べては見たれど、また繰返して伯母の文を見れば、(妹夫婦に代りて思ひ入れ不心得の段々を責め可申、それにても後悔不致かれこれ不理屈を

中張ればゞ」といふ所などは、蟀谷に癇癪筋を出してぐり〳〵と眼を釣上げ、齒切をしたる顏色の眼に睹るごとし。あの氣性にては委細の様子を聞かば火のやうに立腹して、今にも小兒のやうに想うてをらるゝ理輔殿なれば、舊時の恩誼をならべ立てゝ、頭ごかしに呵着くるは知れたる事なり。其箭先に、虫を殺して下手に出て、誤り入つて此身の事を賴みたまへなどゝいふならば、なほ腹に据ゑかねて激しく衝るべし。あれほどの恩誼を忘るゝほどの人非人、理に責めつけて一時は後悔さすとも行末が氣遣はしとて、緣を繋ぐなどゝは第一此方からして願はず、眞先に離緣の話を仕懸くべし、緣切るは易き事、これまでの辛抱ついでに最少し辛抱して、いよ〳〵心は飜らず、まこと結ばれぬ緣と見極めなば、其時こそ伯母も呼ばめ、緣も切らめ、逸るは怪我の基と、硯箱の蓋して机を片寄せけり。

公然離縁ならでも夫婦別居といへば離縁に同じ。之を所天の心に未練ありて、倦厭も當座の離別、末には縁を結ばむ了簡など、想ふは僻事なり。去るものは日々に疎しとて、逢うて居てさへ疎まるゝ身の、遠ざかりてはなほ他人となるべし。また別居と先方より言出せしも、目立たぬやうに縁を切らむとの心算に相違なければ、いはゞ今が盃覆へりて水の溢るゝ最中なり。

守る我心の誠だにいつか通ぜなば、所天の氣も折れ心も融けゝと、夢も縁も結ばらむとは淺はかなる豫想なり。

待つに海路の日和はありとも、是ばかりはいかな思も寄らず、無益の猶豫は萬事の手後れと、また机を直し、硯箱の蓋取りて手早に墨磨流し、さら／＼と前文をぞ認めける。

なほ未練ありて筆進まず、机に俯して思慮ふれば、伯母の耳へは入れずして、我胸一つにて捌くが、角立たぬ丈も納り易きかとも想はれ、此事に就ての相談對手は頼もしき下女の力と、呼寄せて分別聞けば、之も迷うて頓には返答もなかりしが、餘り好智惠ではございませねど、お實家へ御手紙の前に保科樣に御相談なされましたら、御兄弟同樣の友誼なれば却て事が暴立たで、思懸けず可賀話にならうも知れませぬ。無駄と思召してまづ保科樣にお賴みなされましたらばといふ。

心着かざりしがなるほど其分別も面白く、少時思案して連りに頷き、保科樣にて行かぬ時は……。外に手段もなければいよ〳〵お實家へ御手紙となされませ。之に心を定めて書懸けの書狀は裂いて丸めて又墨磨流して、保科樣へ行くは夜中と思へど、夜中は旦那樣お內なれば、午前出勤の後より直に出懸けて、お尋ね申したけれど彼方も午前は御不在なり。失禮なる事ながら一寸手紙を上げて明日にも御在宅を願はむと、書狀に

は用事の仔細を記さず、願ひたき事あれば手短に認め、上書する所へ車の音！　しなしたりと懐中に推陰し、あわてゝ出迎へしに知らぬが不運、其書状の端少し見えたるを理輔目早に認めぬ。事無き折ならば仔細もあるまじけれど、必然大津へ針をも棒ほどに文通せむとの想像あれば、是こそと見免さず矢庭に奪取るを、其はと懸るを左手に推隔てゝ、右手に手紙を差翳して宛名を見る、隙を覗ふ力が飛懸つて取還して敏に渡せば、確乎と帯の間に押籠みけり。

理輔赫と怒りて力を睨付け、おのれ主を主とも思はざる不作法免さぬぞ。即刻宿へ下れ、暇くれる。我に抵抗ふも吶吩くるものありてならむと、敏の方を熟と見遣りて衝と例の小座敷に入り、日本服に衣更へて煙草吸ふ間も慰ます、帽子を手にして玄關に出づるを、敏は追懸け、何方へと問へば、足の向く方へと冷笑うて格子ぴしやり。

敏は膽然と眼を睜りて玄關に佇む後に、力が顚聲になりて、奥様、旦那

樣の御機嫌を損𛁈てお暇が出ましたれば、今日にも宿へ下らねばなりませぬかといふに振返りて、ほんの一時の御腹立なれば氣遣ひには及ばずと、件の手紙を取出し、揉めたる皺を伸して、早く是をと渡せば、敏の顏を眺めてお出𛁈あそばしますか。知られし上はなほの事。

理輔は何所へ行きたるにや、夜に入りても歸らず、九時鳴りても歸らず、十時、十一時、十二時前に、やう〳〵歸り來りて、一言も交さず寢床に入りしが、此夜も亦酒氣芬々と下戸の鼻に堪らず。枕頭へ用意の醉醒の水を藥罐に持行き、燈影に見れば睡れる顏は紅のごとく、不絶寢轉の苦しげなり。何方にて、如何なる心にて、飲めもせぬ酒を此頃の無理飲、此心裏を想へば、とても〳〵此緣は……。

（十六）

浮かぬ顔にて理輔は卓爾の家に訪れ、今晩にも爰より此方へ手紙を送るべし。何の用事かは知らざれどいづれ例のに關したる事ならむ。申越の次第は何卒裹まず此方へ泄したまへ。若又この仲裁を賴むやうなる事ありとも、口を利きたまはむは必ず無用にしたまふべし。嚮にもいひしごとく、斷然心を決したれば、縱令誰が何といふとも、彼には添遂げまじけれぱと。一つ事を繰返し〳〵堅く賴めば、思ひも寄らざる手紙のこと、保科は稍驚きて、いかにして君は知りたまひたる、手紙の來らむ事を？それはしか〴〵と今家にて有りし事どもを語りて直に暇を告げぬ。

我とは無二の合口にて、來れば半日はゆるりとして行く理輔なるに、今日は得意なる馬乘の雜談もなく、疚しき所あるがごとく、深く沈みたるかと思へば、又そは〳〵として、胸に思案の餘れる氣色あるは、よくよ

く彼一條に心を勞すると見えたりと見れば、小火鉢の脇に秘藏がるパイプを遣れたり。彼は沈着にして、綿密氣の着く性なれば、親睦會の席上にても、他のハンケチ、煙管、鉛筆などまでも遺なく拾うて持歸り、わざ〳〵葉書を以て持主に通知するほどの男なるに、心こゝに在ぬかして身に應せぬ倉忽。此心の裏想へば不便なれど、其上の不便は添ふ女子に留めたり。

我に願ひとは例の悶着に就ての相談ならむ。いかにも夫人の心根の哀なれば、力の及ばむ限りは我も盡さむ所存なれど、何をいふにも合川の決心確としてとても動くべきにあらねば、夫人の憂目は免るゝ事難かるべし。さりながら人一人助くる業なればと、案じ煩うて一夜明の日十時頃、敏はカステラ一折を手土産にして來りぬ。

夫婦家内の恥辱は外へ褁むべきに、褁みかねたる身上の一通り御存じなれば今更申すは冗し。其後理輔の心の角は折れずして、離縁か否となら

ば別居といひ出し、此も否とはいはせぬ壓服の獨斷、薄々その用意の樣子も見ゆれば、風前の燈火よりなほ儚さを危ぶみたる我等の緣も、いよいよ此までなるかと及ばぬに覺悟はしながら、また未練もありて棄てらるゝかと思へば心も心ならず。大津に一人の伯母あれば今までは陰せしも、此期に及びてはと早速仔細をいひやり、此が出て來て口を利くならばとは想ふ中の心配は、女に似合はぬ一鉄ものなれば、善き方の話にならむは至難かるべしと差控へて貴下へのお願は、今一應篤と理輸の了簡を御聞き下され、兎も角も別居の沙汰の寢むやう御意見あそばされたらば、伯母が申さうより角立たで話も附易からむと、思付きましてお願に參りました。

身の不束より嫌はれましたを、人樣の所爲か何ぞのやうに、關係にもあらぬ貴下にかゝる御無理を願うて、御迷惑を懸けまするは濟まぬ事とは存じながら、推て願ふ心の中を御推量下されまし。世には金に詰り、情

に詰りて、命を捨つる人の數々を日毎の新聞に見て、いかなる狹き量見かと餘所の事を嗤ひし身が、今日此頃の命の捨てたさ、假初の思にては此世に飽きて死ぬといふ了簡の出るものではござりませぬと、人目を差づれば聲こそ得忍べ、忍びかねたる涕に顏を背けぬ。

（十七）

卓爾は傾聽の拱手を力なく解き、温和なる調子にて、昨日も一寸合川君の見えられたる折其の話の出たれば、夫とはなしに心を觀しに、別居の決心固くして解くべきにあらねば、再び言葉を費すは殆ど無益と慮ふれど、お賴みもあれば明日また意見はして見るべし。平常は柔和き人物にて、事々に我へ相談を懸け、自身に是と信して斷行せんと思ふ事ありても、理を盡して我の非といふ時には、必ず分別しかへて思ひ留まらざる例はなきに、此度の事ばかりは什麼しけむ一切他の言葉を用ゐず。先日も顏を赤めて劇しく意見せしに、十分自身に非を知れど是ばかりは容しくれと、只管詫入るのみにて初一念を曲げず、あの樣子にては何遍いふとも肯かざるは知れたる事なり、此上は國元なる伯母樣の力を藉るの外はなけれど、氣性雄々しくて破裂の相談にならむとは少しく思案のしど

ころなり。常々合川自身の物語に、此身の御兩親には尋常ならざる大恩を承けたれば、此方は深き義理ある妻なりと、其も此も承知しながらかゝる始末に及びたれば、意見にも說諭にも手の着け所なし。今一度最後の忠告を試み、其をも背かずして別居と言張らば、此所は一先先方の意に任せて、おとなしく別居したまへ、其上にてまた好分別もあるべし。及ばずながら我とても力を盡し、屹度もとの如く夫婦に納まらむやうに働くべければ、假にも短氣がましき事は愼みたまへ。心は大きく、氣は長く持つて、霎時の苦勞は我を行末の賴みにして忍びたまへかしと、眞情ある言葉にいよ／＼泣入るを、樣々に宥めて歸せし後、直に合川方へ葉書を飛せ、今晩閒暇ならば入來を待つ由をいひやりければ、理輔は敏が手紙の事と察して、役所より歸るや否や夜を待兼て來りぬ。

涕に哀憐を訴へて敏が直々の依賴に、卓爾は一入不便に覺えて義に勇む念高まり、理輔が了簡の非を鳴らし、不道を責むるに、或は憤りて罵り

或は泣いて訴へ、思ふほどの事は舌根の續くまで縷々と述立て說立てければ、道理にも義理にも詰りて返す一言もなし。扨は罪を詫びて心を飜すかと思へばさる氣色は見えず。是ばかりは命に懸けても容したまへ。凡夫神にあらず聖にあらざる限りは、いかなる罪か犯さゞるものは一人もなし。我今までに自にも他にも罪と思はるゝ事は決て爲さず、此後とも必ず其事の無からむを誓へば、一生に只一度の過失とも罪とも思做して、此事ばかりは切に見免しくれよと、罵れども怒らず、訴ふれども肯かずして、此言のみを繰返しぬ。

人に一つの罪はあるべき事と、罪によりては隨分見免しもすべし。見免すべきは小なる罪なり、恩に背き、義理を忘るゝは人の大罪ならずや。然かも其大罪の未だ犯さゞるに先つて、大罪とは自らも知り、他も大罪なりと意見して止めんとまでするを、強ひても犯さんとは大罪の二倍を犯すものといふべし。天地に俯仰して一點の愧づる所なき保科卓爾の親

友としては此罪を見免之難し。好んで罪を犯さんとならば、今日此場にて朋友の縁を切るべし。義絶すべし。我は親友なる合川理輔が、恁る大罪を犯すを傍観するに忍びず、恐らくは傍観する道もなけむ。我は天地の覆載せざる極悪非道の大罪人を友に持つべき不潔不浄の身にあらねば、合川、長年の友誼も今日限り、明日からは道で遇うても挨拶はせまいぞ。縁切つた、朋友の縁切つた、切つたからは朋友にもあらず。相識にもあらず。知らぬ大罪人に用はなし、歸れ、歸れ、えゝ歸らぬならば我から行くと、理輔を一人我部屋に遣てゝ、卓爾は何所へか出で行きけり。

（十八）

理輔はすご〳〵此家を立出で、半町も來りける頃、天氣雨の氣遣はしきに、傘を持合さねば辻待の車に乘りぬ。

罵られても、辱しめられても、擧句は義絶と言はれても、此方にそれほどの不德あれば腹は立ち難し。なるほどいはれし如く我は天地も覆載せざる大罪人なり。よし大罪人と言はゞ言へ、大罪人と言はるゝが可厭さに、七生嫌はしき女子に辛抱はならず。此辛抱のならぬが爲に無二の親友に棄てられたり。朋友一人が何かあらむ、此辛抱にはかへ難し。保科は頻りに大罪人と責むれど何所が大罪なる？　緣切つて放棄しにせむとにはあらず、外に緣あるまでは扶助して、緣付かむ時にはなほ力を入れて扶助し、緣付くが否とならば彼が一生安樂に扶助せむとの了簡なるに、何所を誰が大罪といふべき。恩あればとて義理あればとて、虫の

好かぬ女子を勉めて好きにならじ。保科は好かぬ女子にても恩誼あれば無理に好け、好かざる故に大罪人と、條理違の理屈を言立てゝ非難するこそ奇怪なれ。

察するに敏めが書狀を以て頼みしよな。曩夜も懇々言葉を盡して、此度の離縁は偏に我不實にあらずして相互の爲なればと、いかな魯鈍も合點の行くほど言聞かせ、剩へ十分の扶持して別居させむと、殘る方なき竭心を、情とも有難しとも思はざるのみか、親の恩誼を鼻に懸けて一々滿足せず、朋友に意見を頼むなどゝは、女子に似氣なくさしでたる所業。かへす〴〵も憎き奴と、舌を鳴らして足蹈すれば、車夫は梶棒を控へて停まりぬ。

四谷鹽町まで急いでやれと、我家の前を素通に走らせしが、流石に棲馴れたる家の可懐くも、又我なき後は如何に成行くやらむと、母衣の後の垂を撥げて見返れば、暗き夜ながら彼所は出窓と思ふ邊に細く燈火透き

て、黒塀に見越の一本柳風に戰ぐは誰を招くか、主人はかく徂きて還らぬものをと、降繁る雨を冒して八時頃鹽町に着き、さる小路に小綺麗なる避世屋造の家の前に車を下り、柿崎在家にかとおとなへば、三十六七の年増置洋燈を手にして玄關の障子を明け、理輔の顔を見るより高調子に、是はまあと笑ひ懸け、貴下々々と急遽く呼立つれば、奥の方より、瘠せて長高く、眞額赤禿げて三寸ばかりなる胡麻鹽の天神髭を生し、口濶く段鼻突出でゝ、豺目鳶肩の中老漢、華美なる縞フラネルに茶絹紬の袷を重ね、胸毛の繁茂顯はに、寛く白色唐縮緬の三重帶前結にして、鰐足の大跨、のつさ〳〵と歩み出で、理輔を見てはつと平伏し、これはこれは夜中の御入來とは存じも寄らざりし、併し奥座敷は掃除萬端疾より行屆きて、一日も早く御來寓を待ちたるところ。まづ彼へ〳〵と口を揃へ、夫婦して手を取らぬばかりに奥なる座敷へ請じ、燈火をといふ聲の下、磨硝子の球火屋覆けたる環心の置洋燈を、女房眼八分に捧出でゝ、

庭向の小窓の前なる、唐木机の上にやをら据ゑたり。續いて現はるゝ物は紅革の圓裀、時代なる桐火桶、南京揃の抹茶器、鎌倉彫の菊の食籠に羊羹五片。やがて紫泥の急須より、青く黄にして苦く甘き茶を、猪口のやうなる茶椀の底へぽた〱と滴らし、之を薦めて髯を撫で〱、此雨にようこそ。

（十九）

家には敏の十二時を過ぐるまで、寢もやらで待てども理輔は歸來らず。不機嫌高じて去るの斷るのといふ折からなれば、かゝる事もあるべしと思ひながら、添うて爾來一時までも歸らざるは無き例とて、理輔の身の案じられ、枕に就けど得睡らで一夜をあかしけり。

竈下は代りて焚付くべし、其方はこれから一走保科樣方へ行て旦那樣の安否を尋ねよと、顏も洗はぬ前から早く〳〵と急促かれ、力は晨起のまゝ飛出して、程遠からぬ保科の門に到れば、老人ある家は金錢あるにも優れり、五時といふに早格子には雜巾の迹見えて、塵一片も留めぬ門口には箒目の浪清く、二階の窓の戶は明きて新しき紙障子に曉の日影。保科樣も最早お目覺かとおとなへば、奧より五十餘なる老女の襷懸にて出で來れるは母親なり。

卓爾はまだ〳〵宵の口と元氣好く笑うて、少時此方へといふまゝに、玄關に昇りて待てば、二十分ばかり經て卓爾顰面の眼を摩り〳〵寢衣のまゝ下來り、力が話を聞くよりはつとはじめて睡氣を覺し、俄に四角に坐り直して當惑の眉を寄せ、夕景までには屹度在所を探してお知せ申すべし。十が九までは其に相違なしと想はるゝ心當ありとの言葉に、力も喜びて歸りぬ。

平素ならば今一寢入といふ所なれど、其まゝ盥嗽して六時半の朝飯は二年ぶりと母親に笑はれぬ。

其日の四時頃保科車を飛して合川が舊宅に來り、彼は四谷鹽町の玄か玄かなる所に柿崎權四郎といふ下役の家に居る由、たしかに探索てたれど、自身に尋ねむは努々愼まるべし。御身がはしたなく見ゆるも心苦しく、先方の心を損せむも惡からむ。なほ此上は恨みがましき所爲を愼み、以前に倍して貞實を盡さむ事を心懸けたまへ。一二ケ月の中には必ず目出

度き話の着くやう取計らふべしといへば、敏は涙を押へて、有難きお心添、かならず〳〵慎みて、はしたなき事はいたすまじければ、此上ともお骨折を願ひます。

着のまゝにて行かれたれば、役所へ勤めらるゝにも不自由したまふべし。今日にも衣類手道具取纏めて鹽町へ送り遣はしたき念慮、これは如何あらむと眞實溢れたる言葉に保科感じ入りて、其こそ屈竟の所爲、早速屆けらるべし。荷物の宰領にはお力どの然るべく、さりながら格別添文にも及ぶまじければ、只口上にて、奧樣の案じ過されて一方ならず御心配の樣子なれば、折々は御巡見がてら御入來下さるやうにと、お力どのゝ言葉にて傳ふべし。行屆かざれど用もあらば何に寄らず遠慮なく申越したまへ。内に年寄あれば、話相手にもなるまじけれど、女はともかくも女同士、いつなりとも遊びにお出なされ。母親もとも〴〵御心配申して居りまする。なほゆるりと御相談致したき事もあれど此頃の繁多、こ

れにて御免。いづれ明日にもと忽々に歸りぬ。
日の暮れぬ間にと荷づくろひに懸れば、簞笥一重大骨柳一個は和服洋服、
外に一車は手道具其外座敷の裝飾品。目欲き品は一點も遺さず荷にして、
我預りの金子二百圓、此中より家の會計見積りて三十圓と減き、殘金は
紙入のまゝ風呂敷包にして力が內懷にしかと結付け、お留守ならば持歸
るべし、御在宅ならば三十圓此方に頂きたる仔細を申せと吩咐け、荷物
二車を宰領して、力は內懷を押へて出で行きけり。

やがて力は百圓懐中にして歸り來り、是だけ當座の入用にとてお持たせなされまして、盡きたらば何時にても申越せとの御意なりといふ。其は扨置旦那樣の御樣子は、また其宿の樣子は什麼、聞かせよと急促つれば、旦那樣の御機嫌は變る事なし。平素のフラネルの御浴衣に縮緬の兵兒帶、髮をお刈なされてゞございました。其宿といふは格子戸造にていかにも蕭洒したる構造。入口の直脇が竹垣にて太分潤さうなる庭の樣子。樹木蓊鬱と生茂りて、中にも槙木の高いが目印。玄關前の土敲などは洗うたる樣に綺麗にて、正面の長押には、むかしの家柄是見よがしな手鎗二筋懸けて、横手には環に洲濱の紋付けたる提灯箱が三個。昇堂ませねば奥の樣子は知れませねど、たしかに內福さうに見えました。御新造といふは色淺黑く眼のぱつちりとした、世辭の好き擧止の好き、垢拔のした中

年増でござります。　臨歸に旦那樣に保科樣がおほせられました通り、巡見がてら折々はお入來あそばしますやうにと申しましたれば、近日行くとおほせられましたゆゑ、是非お近い内に一寸なりとも御入來のあるやう暮々もお願ひ申して參りましたと手柄顏に語れど、敏はさしては喜ぶ色なく、よくぞいうてくれました。臨歸といへば奥樣疑はしい事がござりまするといへば、內向けたる顏を擧げて、疑はしいとは？　臨歸に十九か廿歳ばかりの白粉を塗腐つた新造が入來り、馴々しき調子にて宿の女房に挨拶して、合川樣の御荷物か抔と、樣子萬事を心得顏に、つと奥へ入りしは、何とも仔細のありさうな女子。　もしや其ではござりますまいか。」

髮は上品がりて鬢尾の高島田に突出髱。　一輪牡丹の高彫したる金環の根懸、鶸色の打紐を膝折に結びて、後挿は洋銀足に九谷燒の五分玉、前挿には小さき菖蒲の花簪、蒔繪の櫛は鼈甲と見せても木なるべし。

繻袢の半衿は薄柹縮緬にぼつ〳〵紫と白の見えて、上州御召の縞は意氣なる單衣に、帶は黑繻子と縮緬の腹合せ、淺黄の御所鹿子に飛々紅き散紅葉。アルミの指環の二つも箝めて、玉は硝子かぴか〳〵光らせ、据腰內鰐しやなら〳〵と色氣たつぷり。それは〳〵氣障な〳〵氣障な風俗、假令其にはあらぬにせよ、彼樣な可厭な女子の出入する家の、旦那樣のお爲に好事はござりませぬ。明日にも保科樣にお目に懸らば、右の事をお話申し、手を廻して探索して戴き、私もなほ近日用事を拵へて、また行つて樣子を詳しく見屆けて參りまするど、獨り逸るを欽は推留め、その事は保科樣などへ必ずいうてくれまいぞ。

(二十二)

現に力が見しといふ怪しき女子の出入するに心を傷むるさへあるに、虚か實からく耳に入るは理輔の緣談。何條とやらいふ華族の姫君に見初められ、持參は近郊の別莊に地面二ケ所、志かも標致は優れて美。今一つは或會社の副長の次女にて、之も標致に少しの難なき上に學問男子に恥ぢず。この持參金二萬圓とは、兩の手に桃と櫻に分別迷うて、未だいづれとも返事をせざる由。

別居はすれど夫婦の緣を切りたるにはあらず、妾獨身に暮さば其身も妻は持つまじと誓ひしは、一時息の欺詐なりしか。さる歷々の女子に比べられては、いふまでもなく棄てらるゝは知れたる事なり。所天の心はかねて誓ひしに變らずとも、彼の此のと其樣に好話を聞かせられなば、もとより此身に念殘れるにあらざれば、心の動くも無理ならねど、主なき

宿の朝顔の露の間命を哀とは思さぬか、此敏の身は何としたまふぞ。兎も角もまた保科樣と此事を語りて分別を叩けば、緣談などゝはとつても附かぬ、事實無根なれば安心あるべし。またお力どのが見しといふ女子は、宿の女房の姪にてお鐵といふものなり。彼は傳馬町邊に住みて家には歷としたる婿もある身なれば、氣遣ふほどの事は構へてあるまじく、合川が心は我能く知れど、此度の事も、恩に負き義理を知らざる所爲と自身に承知して、(其代りには)といふ言を口癖のやうに言出すは、良心のある證據といふべし。

よしや華族の息女にても、紳商の令孃にても、合川が眼中に再婚の妻なき事は、保科が命を賭けて保證すべし。疑心暗鬼の喩、萬事は疑ふに疑ひ生じて、疑はざるに疑ひはなきものなり。思過せばこそ聞流しても濟むべき風說の耳にも入れ。合川が身上に就ては保科が監督人とも保證人ともなれば、我言はざる事の外は一々取上げたまはむ事然るべからず。

保科が合川の朋友たる間は、また合川の妻たる女の朋友なれば、彼が惡に味方して此が善に敵するの不公平は、保科斷じてなさゞる覺悟なり。我かく主なき此家に入浸るは御身と情事ある故と、善惡なき人の口、もしもさる噂を立てられて、合川の信ずる事もあらば、御身はいかに爲たまふ了簡ぞや。御身と我にさる不義なき間は、合川も餘所外の女子を寵し、なほまた緣談などはなき事と知りたまふべしと、手強く無根に言消されけるに、もとより深く保科を信ずれば、此風說は無根に念斷ちて、其後弗と口には出さねど、痕迹もなくは忘られず、二日も三日も續けて可厭な夢ばかり、理輔がその華族の姫君と同乘の馬車に飛懸り、馬に脖腹を蹋られて血塗の容體、或は本國に立歸りて力諸共に山寺に駈入り、飾を落す處へ伯母も駈着けて、三人一時の比丘尼姿。夢ながらも此志に伯母の俄に可懷くなりて、其の朝大津なる伯母の許へ、書狀遣はして要急の出京を促しぬ。

(二十二)

伯母は書状に驚き、不敢取出京して合川が舊宅を尋ぬれば、主なき家の何となく寂寥に、いとゞ哀を添ふるは敏の面瘦、憂愁の數々は、語らぬ先に知られて、伯母は涙を催しぬ。

取急ぎしゆゑ何も心に任せず、皆有合せの物ばかり。珍しからねど舊時を憶ふ種にもと、小包解きて推並べたる名產の三品四品。敏は一禮して、變らぬは名物、變りたるは我身の上、伯母樣私は棄てられましたと泣俯せば、伯母も涙の眼を拭りて、無念は理輔を恨みの聲、棄てられましたとて唯棄てられて濟む事ならず。過失ありてならば姊樣夫婦に代り、幾重にも詫して進ずべし。理もなくてならば此伯母が其儘には差措かじ。委細の樣子を聞かせよと詰寄れば、去年お別れの折、やがて懷胎にもならば知らせよ、遠くとも介抱に行かむとのお言葉に引替へ、お召び申し

きしたは此樣な事とて、面目ないやら、口惜いやら、言はねども心の中は御推慮あれかし。概畧は書狀の通り、委細は語るに涙の種。國を出まする時も申せしごとく、理輔樣の此身に心なきは知れたれば、壓服に添うて後々の苦勞ともならむ事の可厭さに、許嫁の約束はあれども其は此方の心次第にて、すれば反古にもなる事、理輔樣も其は喜ばるべきに、釣合はぬは不緣の基と、此緣所望にあらねば適宜に斷りいうて、何所へなりと外へ適きたき心願を暮々も申せしは、理輔樣ほどの方を嫌ひしにはあらず、我儘をいひしにもあらず、此緣の釣合はざるを知りて、今の此苦勞のあらむことを想ひしゆゑなり。其を貴方に散々に叱られ、もとより否にあらねば添うたが苦勞の起源。伯母樣貴方にも御怨恨がござります。とはいふものゝ夫の對手は女房の、此身さへお氣に入らばかゝる悲歎はなしに、今日等は夫婦打揃うての待遇。明日は劇場、明後日は上野淺草と、貴方も肩身が廣く嬉しうもあらうものを、お來訪なさるゝか

ら泣顔見らるゝ貴方の辛さよりは、見する私の切なさこそ、言ふに言はれず胸には餘れど、袂を噛むで音を忍ぶ、涙の量は伯母も異らぬ思に咳入れば、女部屋には力も袖を絞りぬ。

（二十三）

仔細を聞けば聞くほど言語に絶えたる理輔の非理非道、虚らしきほど敏には一點の非なし、さる男にてはなき理と、頻に小首を傾くれば、其お疑念は御尤なれど、御親友なる保科卓爾樣とおつしやるは、始終を詳しゝ御存じにて、種々と御心配なされて下さる方なれば、所天の非を擧ぐるに似て心快からねど、疑はしく思さるゝならば其方にお會ひなされて篤とお聞きなされて下さりませ。何遺恨のありて我所天の非を擧ぐべき。去るべき過失は少しも無けれど、理輔樣自身の口からいはれしにても知りたまふべしと辯解けど、伯母の疑念は十分霽れざる樣子に、堪へかねて力は部屋を立出で、座敷の口に兩手を支へて、差出がましくはござりますれど、奧樣のお言葉に一々相違なき事は、お傍を去らぬ此力が證據人に立ちまする。はしたなしとてや奧樣のまだ〳〵お陰しあそばしま

する事に、賤妾どもまでが腹の立つ悔しい事が許多もござりますれど、奥様のお褒みあそばしまするを、私より申上ぐるも如何と差控へてをりますれど、餘りと申せば御無理なる旦那様、おいとしきは奥様と眞實は涙に陰れなかりき。

之に大方疑念解けて、聞けば其方も何かにつけて種々の心配、後には思ひませぬぞ。此後とも力になつて下されとは、私風情へ冥加に餘るお言葉。何卒此度は貴方樣の御盡力にて、奥様の御心の息まるやう、數ならぬ私よりも偏にお願申しまする。骨肉といふは是一人、實の子とも思うてゐるものを、其所に如在はなき心規。最早四時過ぎたれば理輔殿も在宅なるべし。御苦勞ながらお力どのを案内に頼み、これから鹽町とやらへ行て會ふべしと身繕ひするを推留め、明日もあれば今日は旅のお疲勞、湯へなとお出なされて……。御馳走は相談の纏まりてからゆる〳〵。心も急けば少しも早くと立上るを、人力車を待つ間と座に着かせて、か丶

る事を申すは異なものなれど、貴方の御氣性にては理輔様の言分氣に入らずとて御腹立の上、所望の通り縁切るなど、おつしやらずと、私の身の末々を思召さるゝならば、少しは曲つた理屈にも胸を摩り、何事も先方の氣に逆らはぬやうにじつと辛抱して、目出度き話を土産に歸つて來て下され。呉々も頼みまするといへば、伯母は打笑みて、短慮も疳癪も年壯うちの事なり。随分石にも噛着きかねざりし歯も衰へて、好なりし硬餅の味も思出さるゝ老年になりては、歯痒く思ひし堪辨も辛抱もする氣になりて、今は意氣地もなき婆になりたれば、其杞憂はと首を掉れど、舊時にかはらぬ元氣は口角眼先に著明しく、なほ氣遣はしさに幾度か念を推せば、懊惱がるほどいよ／＼心元なく、車の出る時また呼懸くれば、仔細も聞かで、承知々々。

（二十四）

折しも理輔在宅にて、お久しや伯母樣かと、面には强ひて喜色を粧へど、扨は敏めが告口して理屈いひに來りしかと、兎にも角にも一膏とらるゝ不快。年のゆかぬ敏は、夫の權もあり無理にも說服めても、其の手で行かぬは年長といひ氣丈ものといひ、取分け頭の上らぬは、惡戲の罰はこれぞと線香の香氣、灸に逼げてまはりし時はいつも詫びてもらひしなど、今鬚眉の男一匹となりたる身に、知られては威のきかぬ幼少の一通、自分よりも精細知る伯母なれば、之に責められてはと身に知る罪のいとゞ可恐く、いはれぬ前から冷汗脊を浸して、安き心はなかりき。

伯母は必定問罪使として來りたらむに、さる氣色は見せず、性質に異らぬ機嫌顏にて、只管出世を賞め、無事を喜ぶ言ばかり。わざとかと思へば責めらるゝより一入辛き所あり。

伯母樣は上戸まづ一盃と、嬉しがりさうな肴數品おしならべて侑めけるに、否其よりはまづ大事の用ありといふかと想ひの外、篤き志を殊外歡びて心快げに盃を取り、此樣に旨い物ばかり食べさせられては舊巣の山へ歸るが否になる。いふも異なものなれど、其方が兩親は若い時より不運を重ね、都は一度見た限田舍の茅屋に苦勞を仕續け、何一つおもしろき目にも遭はで死なれしに引替へ、其方が今の立身、もとより其身の勉强と器量ゆゑとはいひながら仕合の好き事、これも一つは養父母の恩惠とて、何に就けても其方の仕合は、亡なりたる兩親の分まで讓受けたるものならむと笑ひぬ。

此程御出京の御用はと問へば、打笑うて、年は寄らぬ寄らぬと思ひながら老いたる證據は、話すもおろかしき事なれど、敏が枕も上らぬほど煩ひつきけるに、人手なくて其方が當惑せる事を、あるが如く弗と考へしが寢覺の懸念りとなり、久しく會はぬがいかゞしたらむかと、理もなく

遙に可懷うなりて箭も楯も堪らず、會はむと思はゞ何時にても會はるゝ事ながら、追々に寄る年の出不性になるやら、又相應の用もあるやら、彼此と邪魔が入りて思ふ事の心に任せざれば、折角思立ちたるを幸と、何といふ事もなく唯ふら〳〵と二人が無事な顏を見に來ましたと、まだ然氣なき口氣。

問罪ならば問罪にて、早く一思に、言はるゝだけの事は言はれて始末を着け、奥齒に介まる物の取つて捨てたきに、さはなくていつまでも釣られて置かるゝ心苦しさ。

理輔對酌の酒に醉も來ずして、絲に繫げる大石の下に晝臥の氣味惡く、早く此苦を免れむと其話の口は切りたけれど、過失は此方に在る事、ぬけ〳〵とした貌して其も言出しにくゝ、盃を舍いては髯を捻り、髭を捻りては盃を取り、箸を持つたり、膝を撫でたり、頭を掻いたり。

（二十五）

伯母は心快く醉うたる風情。時に理輔殿、今日は伯母が謝罪に來ましたと心得ぬ挨拶に、謝罪とは？と眉を顰むれば、飲干して猪口を理輔に獻し、敏がどうやら此方の機嫌に逆らうたが立腹の因にて、今日で半月ばかりも家へ歸られざるよし。堪辨のなるまじき所も伯母が成代りて幾重にも詫びやうほどに、此度は不承して機嫌を直し、我と一所に還つては下さらぬか。折も折とて今日は六月三日、敏が母の命日なれば、母が言葉を添ふると想うて宥してやつて下されと、まことに敏に罪ある如く面色を和らげ、言葉を卑くし、眞綿で首の責上手に、慚愧膽に徹へて額に膏汗を浮へ、當惑の餘り頓に言葉も出でざれば、さし內向きて居たりけり。

飛ぶを見れば美しき蝶も、手に取り見れば羽に粉あり、面には髯あり

三百六十五日顔を突合はす夫婦の間、氣に入らぬ事もなくてか。さりながら平素やさしき此方が、恁ほどまでに腹立てらるゝは非常の事ならむとて、今も家にて十分敏の不心得を叱りて來りたれば、此後は隨分心着けて疎畧はあるまじければ、何をいうても今日は此方に尋常ならぬ義理ある母の命日なり、供養と思うて免して遣つて下されと、尚深く釘を貫れて血の出ぬほどなほ切なき思。合はすに辛き顔をやう／＼擡げて、伯母を一目見るよりはつと又下げて、罪は此方にある事、お免し下されましと手を支へて詫入れば、伯母は擦寄りて容を改め、扨は我に免じ、敏の罪を免して家へ還つて下さるか、やれ／＼嬉しや、敏の之を聞くならばいかばかり歡ぶやらむ。目出度々々々、祝に一獻と重ねを強ひ、自身も受けて扨いふやう、かく機嫌を直してくれたる上は此所に長居も無用なり。早く歸つて三人一所に寛ぎ、家にてゆるりと茶を飲むとも、かうした席の酒よりは、此所は是にて切揚げ、一刻も早く家へ／＼と促され、

理輔迷惑して躊躇するを、伯母は怪訝なる顏して、理輔殿支度は？　さゝ早く〳〵、老人は心が急くと、鞭を當つれど更に動かず、膝に手を置き頭を垂れて沈思の體に、伯母は立懸けし腰を据ゑて、一所に歸るを不承知か、不承知ならば敏が事をまだ腹立てゝか、免してやつてはくれぬのか、理輔殿返事はと、怒氣に聲を曇らせて、じり〳〵と詰寄れど、なほ首を垂れて言葉なければいよ〳〵苛立ち、いかにしても還らぬとならば、此伯母にも言分ありと、座に復りて理輔を流盻に懸け、此方はなといひさして口を噤み、思回してか稍語氣を和らげ、此度の別居の起因はしか〴〵と、敏が口上のみにては片口なれば判然それぞとは知り難し。此方の申分も聞きたければ、遠慮なくいうて下され。我も久しぶりに不圖出て來て、此中裁に立つといふも、姉夫婦が草葉の蔭よりの指圖にやあらむ。理輔どの此方の胸を聞かせて下され。

（二十六）

ならぬまでも辨解せむと、口まで出たる言葉も良心に引込まれ、此良心を壓服けむとする、壓服けられじと百掻く、胸裏の紛雜に氣を奪はれ、割膝に體を硬くして默然たりしが、とても一度は言はで愜はぬ事なり。言ふ苦切、言はるゝ苦切の一時を辛抱せば、後は青天白日の心に懸る雲もなく、天下霽れて好かぬ女子と緣切らば、腹も立たず疳も起らず、氣の合はぬといふ事なき獨身の生活は愉快ならむ、と冷えたる盃の酒を一息に干し、わざと咽せて二つ三つ咳き、今新めて申さずとも委細は敏が御話し申したるべし。

恩を知らざる犬畜生と、お憎惡のほども面目なけれど、理由は申しても理由にはならぬ我儘なる申分、大恩ある妻を好かぬ嫌ふのと申されたる義理にはあらねどゝ、言うては見たものゝ流石に我儘過ぎたる言草と心

着きてや、後は口籠りて背くる顔を、伯母はさこそと尾瞳に懸け、妾は何も識らぬ田舍婆、此方は日本で幾人といふ天晴の學士なれば、我等が理屈をいうたとて釋迦に說法、言ひともなければ此方はなほの事聞きともなかるべし。

物の道理は奥の奥まで熟知きたる此方にして、此度の所業は何とも心得難し。よしや敏に去るべき罪ありとも、去るといふに親とも媒妁ともある此伯母に一言もなくして氣儘に去るといふ理ありや。伯母までも輕蔑にしたる仕方といふべし。妾はもとより山中の猿同樣の人間なれば、輕蔑にされたりとて仔細もなけれど、物の條理といふものはまづそのやうなものならずや。

理輔殿、今は立派な日本の學士殿、此方は幼稚の舊時を覺えてか、忘れてか。もし覺えてならば此伯母に一言なりとも返す言葉はなき理、尚又敏は大事に〳〵せねばなるまじき仔細は……、いふには及ばず此方の胸

に聞きたまへ、もし又其舊時忘れたりとならば、此方が生れ落ちし藥の上の有樣から、去年卒業までの次第、亡なられたる妹夫婦の心遣ひ、一一話して見やうか。就中妹が臨終の際に此方の手を執り、淚を流しこの遺言など、肝に徹へて忘らるべきにあらねど、あれさへに忘れたりとならば、妾が此所でいうて聞かさうか。えゝ胸がむしや〳〵といひたきことは山ほどあれど、必ずいうてくれな、唯詫いうて此方の心の解くるやうにと、冗いほど敏の依囑ゆゑ、蟲を堪へて我慢はすれど、理輔殿、此方は〳〵と切齒をして睨めつけられ、何とも陳ずる申分なさに、理輔ははつとばかりに低頭して、只管不心得の段々を詫び、改めて緣を結び、末々永く目を懸けむは勿論の事。我罪より腹立の癒ゆるやう、いかにとも存分にならむとまで言ふに、よもや僞はあらじと伯母も心融けて、此上は善は急ぎて明日にも此家を引越し、目出度舊宅へ歸花聟。

（二十七）

伯母の歸りし跡に主人權四郎入來り、彼所にて御樣子は概畧承はりました。伯母御樣の御仲裁にて御機嫌なほり、破鏡の再び合はんとは、何より以て重疊の御事。さりながら、先日來の御話にては、大磐石動かぬ御心底と、御見受け申したるに、いや何かと申しても此道ばかりは又格別。權四郎かく年浪の寄れる身にさへ女房は可愛うござると、例の髯を掴みて高々と空笑ひすれば、理輔は眞貌にて、一旦飽きし妻の他の口にて遽に好にはなり難し。伯母に會うては一目も二目も置かねばならぬ義理もあり、言葉を返すは外にも亦不利ありと心着きたれば、觸らぬ神に祟なし、機嫌を損せぬやうにそつとして還せしが、伯母は長くは逗留のならざる身上、此訴の落着次第、精々四五日も居て歸國すべし。其上はまた御厄介にならむも知れず、其節はお賴み申すとあれば、權四郎其心中疾

に見貫きたりといはぬばかりに打笑みつゝ頷き／＼、それ承はりて某も安心、とは人の憂を喜ぶに似たれど、かねてより御話し申す例の縁談。先方は頻に取急げば、日文を以ての催促、此方にても麁略なく、先日より口を酸くしてお勸申せど、何のかのと一向取留めたる御挨拶もなく、先方からは切込まれる、貴下には受流さるゝ。進退谷るは老漢一人。成るとも成らぬとも望む所は確答と詰めれば、魚膠もない（御免）などゝは貴下にも似合しからぬ御挨拶、先方が餘りに執心さに、此方の樣子を分明に聞かせては、嘸や落膽のほども氣毒と、まづ／＼好方の話をして措きたるに、今爰で御夫婦の御中なほるやうな事などありては、某の狼狽、人こそ知らね、大抵の事にあらず。柿崎氏我を玩弄物になされたなど、強く一本參らせらるゝが最期、我家の浮沈おそらく其時なり。
先程より襖の蔭にて始終の樣子を立聽仕り、冷汗を流して相控へしが、只今御所存承はりて、いさゝか安堵致しました。

今と申すも異なものなれど、件の縁談はともかくも得心といふやうなる事を、(爪頭を見せて)是程なりとも是へ〳〵と耳に指せば、毎日縁談の拷問に殆ど身體疲れたり、白狀は昨日に異れる事なし、敏を去りても我には義理といふ妻の一生離れざれば、一夫兩妻はあらざる理。折角の厚意を無にするは氣毒なれど、縁談沙汰は平に御免といふ。折から宿の女房銚子を持來り、合川樣野暮も節に遊ばせまし。

（二十八）

翌朝伯母は力を連れて理輔の寢込に訪れ、午前には不殘形附け、荷物は舊宅へ送還さむほどに、役所より衝と彼方へ歸らるべしといへば、力は理輔の出勤を遲しと待懸けて、袂より新入しき襷を取出すに、理輔は飯も胸に支へ、牛乳をも飲まず新聞も讀まで飛出せば、力はそりやこそと立起つて簞笥に手を懸け、曳や〳〵と玄關へ牽行く物音に、默つても居られず宿の女房も手傳ひに出でけるを、旦那樣に惡い智惠附ける碌でなし奴、ぞべら〳〵と裾を引摺り、尻下に意氣地なき帶の結樣、その風で何の移轉の手傳ひがなるものか。なまじひ邪魔されて禮いふだけが損なりと、力は不興な貌して、其には及びませぬ、お構ひ下さりますな、お召が汚れますと刺を含める言葉に、女房も怫然として引籠みしが、煙草の火が消えても湯沸の湯がなくなりても、一向無頓着にて二度とは姿を

見せず。其と知らねば伯母は煙管を持つてまご〳〵して、奥に行きて火をと力に言へば、此如汚らはしい家の火などにて召上りますな、味惡とも是にて我慢遊ばせと、火鉢の抽斗より燐枝を探ゑ出して、あの女房が餘り小面の憎さに、只今中つてやりましたゆゑ、其を腹立てゝわざと無愛想するのでござります。こんな家に長居は無用、一刻も早く歸りましよと、顏を火のやうにして鼻頭に玉なす汗を拭ひもせず、前髮際から湯氣を立てゝ、男勝りの働ぶり。やがて車に積みたる荷を縛る手傳ひまでして、十時前に全く座敷は虛になりぬ。

こんな家はどうでもよけれど、一月にても旦那樣の住居なされし迹なればと、呟き〳〵天井の煤を拂ひ、疊の芥を掃きて雜巾掛の果つる頃、伯母は奥へ行きて女房に挨拶して、歸らむとするに見送にも出ざるは、かへす〴〵も小癪な女と、力は獨り打腹立つて、家鳴のするほど暴らかに格子を鎖め、荷物の宰領して少半町も來りけるに、何を思ひ出したるか、

くす〳〵と力の笑ふを、何が可笑くて其の様に笑ふのかと伯母が問へば、なほくす〳〵と笑ひ、御隠居様、私は實に〳〵快心持でなりませぬ。あの女め餘りの憎さに、箒の柄にて急須の底を拔き、湯沸しの中へは一杯芥を入れて來てやりました。次手に煙草盆の底を拔いて參ればよろしうござりましたと、腹を抱へてまた一時笑ひぬ。

(二十九)

理輔其日より舊宅に歸り、伯母の面前にて敏に向ひて段々の不心得を詫び、力には留守中奉公の神妙なりしを喜び、誰彼の差別もなければ、蔭陽もなく、心清かに對遇すこと、伯母への義理一遍とも見えずして、眞實心の角の折れたる氣色に、敏の喜悦は何に譬ふべくもあらず。唯嬉々と氣も空になりて、箸の轉がるにまで力と倶に笑ひぬ。

伯母は始めは理輔の意外にも容易く悔悟しけるを訝しみて、我を詐らむ心規と其に應ずべき心構までせしかど、此樣子ならばと安堵の胸を撫でゝ、逗留十日餘になりければ、國元には山ほどの用事あるを打捨てゝ出京したる始末なれば、東京見物はゆるりと來年の事として、一先歸國せむ所存を語れど、理輔合點せず、亦口には言へど、人は生涯用事の離るゝものにあらず、まして遠國の事なれば、念はありながら心に任せぬ

勝なれば、此度の出京は又とあるまじき好機會なり。遠き所は此次の日曜に私自身御案内申すべし、明日は敏を伴れて其所等を御遊覽なさるべし。是というて見るほどの所もなけれど、廣き土地なれば人力車にて推廻しても、四五日の遊山ともなるべければ、一順東京の見物濟まむ日を御發足の日と定め、敏を伴れて二三日御見物あるべし。淺草の凌雲閣、歌舞伎座の春日局、上野にも淺草にもパノラマとて、險危なしに女子供も戰爭の見らるゝ大油畫あり。又上野には大博覽會の跡に商品陳列所、自動鐵道とて、見るから目の廻る遊戲など、土産には屈竟なる話の種なり。芝公園の丸山、九段の招魂社、愛宕館の眺望、星岡茶寮の料理、紅葉館の別品も御目に懸けたし。其の外目の法樂に、勸工場巡覽は煉化通、小川町、九段下など、之も一日の保養なるべし。いかなる御用か知らねど用は是から先幾多もある事、かゝる機會は又というても得難ければ、是非一月ほどはゆるりと御逗留の上、御歸國下さるべし。さらでは我此度

の不始末に就きて、まだ御心の解けざるやうにて、寢覺も心快からねばと口を極めて、敏も力も倶々に留めけるに、志のほどは嬉しけれど、此度に限れるにもあらず、國には實に去り難き用事を捨てゝ來たれば、明日はいかにしても發足の了簡とあるを、此上に強ひてとは迷惑ならむ、さらば來春は屹度お出京を待ちますると、理輔が厚意を何よりの馳走と喜び、兎も角も明日は出立と定めて、今宵の惜まるゝ夜更しの物語。理輔には敏の身を暮々も賴み、敏には女の道を冗いほど諭し、力には此までの忠義の禮、此上の奉公の心懸、何や彼やこま〴〵と老人の心を着けて大津へ歸りぬ。

それより三日四日は、伯母の意見やら依囑やら耳に殘りて忘られねば、相も變らず疎ましき敏の顏を見るにつけて、身も世もあられず可厭なるをも忍びけるに、七日と過ぎ、十日と暮すほどに愈堪難く、最早と思ふ折大津より手紙來りて、繰返し〳〵敏の事を賴みたるに稍心挫けて、思

返しけれど之も長き事にはあらず、此家を出て柿崎に在りし頃は、恩ある妻を罪無きに去りたる我身の不德を、絶間なく良心に責めらるゝ苦艱の際限なけれど、今少時德義の制裁に屈して添うて見れば、其苦艱には換へられぬ不快の忍びかね、堪かね、保科が三度目の强意見も無理とは思はず、聞かぬ意にもあらざれど、ふらりと出て其儘還らず。

（三十）

敏は理輔の心底を知らざれば、一夜虚けたるを其とは想はざりしが、二日も三日も歸らざるより、もしやと柿崎方へ力を遣はしけるに、果して居たれど蔭れもせず立派に過うて、宅のいかにも暑ければ、暑中だけも此家に寄寓の覺悟なり。敏に心配せぬやう傳へてくれ。無斷にて家を出でしは此方の不念なれど、別に仔細のあるにあらねば、呉々もよく言うて、必ず苦勞などすなとの挨拶に、餘りとは思ひしかど、下女風情の言葉を返したりとて、天に向うて唾吐くも同じ事、なまじひ機嫌を損せむよりはと、沸立つ胸を撫でゝ立歸り、此次第を傳ふれば、敏は頷きて、更に騷ぐ色もなく、此上は……と唯一言、常には脆き涙も滴さず。思懸けぬ樣子に力は合点行かず、膝推進めて、奥樣貴孃は口惜うはござりませぬか。腑効なき御了簡と獨り堪かねて泣入れば、最早其事はいうてく

れな。よしなき事にて其方にまで、色々〳〵と苦勞を懸け、禮は言葉に盡さがたし。纔一年ばかりの馴染も薄き此身に徒ならぬ心竭。其嬉しさは忘るゝ間なく良縁を心懸け、此家を家郷に嫁入させむ折には、簞笥の一個も持せてとの心規は人知らず、神妙なる奉公は賞めもせで、主人風吹かせて朝から晩まで使役し、効なき主と心の裏には可恨かるべし。是までの禮といふも可笑けれど、嫁入の支度の足にもと、簞笥より取出したる品々〳〵は、利久茶縮緬の三枚襲、糸錦の丸帶、黑縮緬の羽織、更紗縮緬の下着、一樂の小袖、糸織の袷。夏物には絽の紋附、お召縮緬の單衣、京數寄屋、此外飾髮具はいづれも日頃秘藏の物ばかり五品、見るより力は仰天して、奥樣これは何事でござります。滅相もないと後退り、呆れて言葉も出でざりけり。

仔細を知らねば其驚愕は道理なり。四五日中に此家を引拂うて大津へ歸り、山中にて機など織りて、苦勞知らずに一生を送らん心規なれば、荷

物の始末してもらうて其さへ濟まば、何時にても其方の心任せに宿へ下るべし。是は置土産にとかの品々を推遣れば、えゝ其は奥様にも似合はぬ逸まり過ぎたる御分別。旦那様も仰せられし通り、四谷へお出なされたは貴孃をお嫌ひあそばしての何のといふ事ならねばと、言はせも果てず、いかに足らはぬ妾とても、其等を眞に受くべきや。無き縁と諦めたり、諦めたりと首を掉るに、力も其に相違なき始末と知る身は、己を欺きて諍ひかね、長大息つく／＼と思案の首を垂れたりしが、暑中だけとおほせられし口上もあれば、僞と思召して、兎も角も九月頃まで御辛抱あそばしての上、御思案なされましたればまた思懸なく好事にならうも知れませねば、せめては九月までの御堪忍。餘りと申せば人外なる旦那様のなされ方に、他人の私さへ無念で／＼堪りませねば、一圖のお心より御歸國とは、さら／＼御無理とは存じませねど、旦那様から御離縁とも仰せられざるに、奥様からお氣儘に御歸國なさるゝは、此方から縁切

る事になりて、今まで折角の御貞節が水の泡となりまする。これまでになされて遽急の御短慮は、御身の爲に宜しからず、些細の御辛抱なればと、精限り諫むれど肯入なく、飽れたる夫は此方も更に戀しとは思はず。理輔殿の來られて添はむというたとて、構へて添ふまじき覺悟なれば、其方の言葉にも從ひがたし。

伯母樣の嘸や待草臥れて居たまふべし。さあ〳〵歸る〳〵、大急ぎ〳〵と矢庭に起上り、裙高々と褰げて襷懸になる樣子の尋常ならぬに、力は驚き惑うて立騷ぐ敏の袂に縋り、貴孃がそのやうな事をあそばさずとも、私がいたしまするほどに、まづ〳〵お心を落着けてと、よく〳〵顏を見れば眼色常ならず。にた〳〵と笑ひかけてべたりと坐り、團扇を〳〵、大暑い〳〵。

（二十七年一月）

心の闇

（一）

日光山は野州花、石南花の盛とて、初夏の候より宇都宮停車場の混雑は、やがて紅葉の秋の末まで絶ゆることなし。

傳馬町に千束屋といふ旅籠屋は、此土地に第一と知られて、外に數ある客舍は然も無きに、獨り賑はゝしき夕暮の門を、撫肩の後姿悄然と入來る按摩あり。年齢は二十四五なるべし。剃立の頭顱は、鬘冠りたるかと見ゆるばかりに狀好く圓滑として、顏の色は精靈棚の白茄子の如く、兩眼ともに膠もて粘けたらむやうに直と盲ひたり。

仕立おろしと見ゆる手織木綿の袷に、やゝ古びたる鐵納戸の絹紬の羽織を、何急ぎてか襟も反さず。茶小倉の帶を胸高に結びて、毛繻子の襦袢

の襟を吭の扼るほど緊と合せ、洗晒しの白足袋に、似合はしくも穿馴らしたる日光下駄の行歩覺束なからず、杖さしのべて閾の内を攪探りつ、わざとらしく笑ひかけて、今晩はどうやらお寒いことでござりまする　と挨拶すれば、番頭は帳附けながら、佐の市樣か、と首を擧げて、今晩は大分早う見えられたな。まだ何のお座敷もお膳が下らねば、一服して待つしやれ。　はい〱、其間に一寸奥へ參しまして、御挨拶をいたしましよ、と勝手知りたる廊下傳ひに、中庭の噴水を聞きながら、右へ折れて正面は主人の居間と、入口に小腰を屈むれど、誰か言葉を懸くるものもあらず。　挨拶すれど應答は無くて、柱時計の軋る音のみ。

佐の市は苦笑して、これはお留守と、悄々還る後の方に、聞ゆる跫音は誰かと佇立れば、佐の市樣と媚めく呼聲。

佐の市は慌たゞしく會釋して、おやお久米樣でござりまするか。何方樣も皆お留守、と探手しつゝ佇めば、お久米は居間に入りながら、父樣も

母様もお座敷へ御挨拶に出ましたれど、もう今に還らるゝ筈。まあお茶一盌上げましよ。此方へお入りなさいまし、と愛想好くさるゝほど、佐の市は忸怩して、有難うぞんじまする。何方様もお留守なれば、また後刻に伺ひまする、と行かむとするを、そのやうに謂はずとも、私の入れるお茶一盌。上げやうと思うて取つておいたお菓子もある。さあ此方へと理なく勸められ、其れはや恐入りまする。左樣なれば思召に甘えまして、と佐の市はおづ／＼座敷と椽を半分づゝ、閾の上に踞りて、煙草吸はねば、かゝる折の手持無沙汰。

出もせぬ咳拂して霎時待つほどに、餅菓子四顆ばかりを紙に包みて、茶盌片手にお久米は佐の市の傍に進寄り、さあ此へ置きまするといふを、摸索に把りて戴き、一口飲むより皷舌して、今日のお茶は格別結構でござりまする。毎日このやうなお茶を戴いてをりましたらば、さぞやと謂懸けて飲盡せば、嗔や何でござんすとお久米は笑ひて、佐の市樣のお世

事の好さ。それでこそ誰にも可愛がらるゝ理と謂へば、佐の市は眞顔になりて、此様な身は人様に憎まれませねば其が幸甚、可愛がられうなどゝは。夢にも想ひよりませねど、何ぞいたして一生の中に、一度は可愛がられて死にたうござりまする、と洒落にもあらず思入りたる氣色なり。お久米はわざと口輕く、誰しも可愛う念ふ中に、格別憐がる人もありましよと笑へど、何の御冗談ばかり。このやうな廢人をば誰が何と思うてくれませう、と味氣無げに大息吐けば、お久米は無用ことを言ひ出して、物思はする氣毒さと、卒に説柄を反らせども、佐の市は尚その愚痴を賤の苧環、くりかへしてぞ哀を聞かせ貌なる。

お久米は獨り持餘したる、折から母親の歸來りて、忽ち繰言の寢みけるほども無く、二十九番樣のお療治、と喚立てらるゝ聲の下より、佐の市は匆々に暇乞して、裏階子を昇行く擦違ひに、聲を懸くるはお勝といふ婢なり。名高くも惡臭き口を佐の市の耳に寄せて、先刻はお樂みと言捨に遁ぐるを、何故と問へど應へず、崩るゝやうに高笑して走行きぬ。

佐の市は見えぬ眼にもお勝の方を見送りて、にた〳〵と笑ひ、先刻はお樂み、と口の內に繰返しては頷きつゝ、二十九番の座敷に入りぬ。

客の男は獨旅の徒然に、宵ながらはや床の上に腹這ひて、今日汽車にて買ひし新聞の、見殘したる處を拾讀にして居たりしが、佐の市を見るよりむく〳〵と起上り、胸毛顯はに寢衣の寬けたるは其まゝに帶締めなほして、やつこらさと胡坐かく。佐の市は脫ぎたる羽織を手早く袖疊にし

て、客の背後に居去寄れば、強くとの註文も此では道理なる體格、脊幅は廣く板のごとく、肩の肉は摑むに餘るを、力では揉まぬといふ貌して、手頭輕げにはた〳〵と鳴らしつゝ、佐の市は先づ口を開きて、旦那樣明日は日光へ御參詣でござりまするかと尋ぬれば、所用ありて足尾へ行くものなるが、此家に美しき娘ありと聞き、一目拜みたさに、わざ〳〵宿を取りたれど、未だそれぞと思ふ顏を見ず。どのやうな娘がゐる事かと、眞面目なる人も存外戲けたる言謂ひて、旅は氣散じ、恥は搔捨と問ひかくれば、其處が旦那樣、盲目の悲しさには、毎日會ひまする此家の娘の、聲は聞けども姿は見えず、思ふお方は時鳥でござりまする、と思も懸けず洒落のめされて、此奴が〳〵とばかり、客は二句も續かざりけり。

お客樣は十人が七人まで、何方も娘のお噂でござりまするが、いかさま此宇都宮中三萬四千人からの數の中に、二人より無い容色とて、此間も娘鏡といふものが出來まして、東の關は此二町ほど上の肥料問屋の娘。

西の關が此家のでござりまするさうな。お名はお久米樣と申して、年紀は十八でござりまする。細面の色のくつきり白い、眼のぱつちりとして淸やかな、色氣のある、口元のきりつとした、中肉中丈の、如何にも姿の好い、閑雅な、怜悧なお子だと申しまするが、第一性質がよろしうござりまする。眞に溫良な、情深い、それで誰にも調子が好くて、失禮ながら東京にも多度類はござりますまいと稱贊つれば、はてさう聞いて唯は舍かれぬ。客の座敷へは出まいかと、皆まで謂はせず佐の市は、首を掉り〳〵、滅相な、千束屋が一粒種の秘藏娘、大事の上にも大事にして、滅多に店口へも出すことではござりませぬ。吁儘になるものなれば、一目なりともお目に懸けたうござりまするを謂ふを、それでは竊に女中から聞いたとは倍の相違、按摩さん些と懸直があらう。

佐の市は屹となりて、えゝ何の、嘘の無いところでござりまする。女中達は主家來の辨別なく、女同士の猜忌から、お客樣方が兎角娘のことば

かりおつしやるを胸惡く、そのやうな證跡を申すのでござりまする、と痛い贔負を客は心可笑さに、こりやどうでも若干金か貰つたに違ひ無いと囃せば、佐の市は赫と急立ち、若干金か貰ひましたか、もらはぬかは、娘を御覽じたらば知れまする。見もなさらいで何を證據にお貶しなされまするど、聲も顫ひて詰りかゝれば、客はおもしろがりて、應さ、其方の謂ふ通り、未だ見ぬ女子なれば、惡いとは謂はねど好いとも謂はれぬ。それは我ばかりで無く、其方とても知つた顏して褒めはすれど、見た譯ではあるまいがと捩れば、佐の市はぐつと塞るほど焦心になりて、それはおつしやるまでも無く、見たいとても見えぬ盲人の悲しさは、確にかうと硬いことは申されませぬが、十三箇年の長の歳月、この千束屋には毎日出入いたしてをりまする私、設ひ姿は見ぬまでも、眼の見えませぬ代りには、尋常勝れて聞ゆる耳に、人の噂や取沙汰にて、大約どれほどの容色といふことは、はい憚りながら能存じてをりまする。また其氣質

やら行爲やら、眼のある方が一目見ては分らぬことも、毎日常浸にいたしてをりますゆゑ、自づと識るゝ理合のもの。そこで私が褒めましたのが無理か、但しは旦那のお貶しなさるゝが有理か。こりや一つ議論いたしたうござりまするど悍立つ。

客は有繋に返さむ辭無く、なるほど〳〵。此議論は私が敗として、いかにも其方が謂ふ通りに、此家の娘は顏色が頗るで、調子が好くて、氣質が優しくて、情深くて、お孃樣敎育の秘藏娘として措かうが、高い聲では謂はれぬが、聞けばこの土地は癩が大層行るとやら。勝れて美い女子には得てあるもの、と古來の傳說。もしやその類ではあるまいか。そのやうに美しいだけ氣味が惡い、と又弄りかゝれば、佐の市は益々腹立ち、えゝ何おつしやります。彼謂へば此謂ふと、此家の娘に限りては、そのやうな者ではござりませぬ。御執心でわざ〳〵お出なされたに、顏見られぬ口惜紛れから、根據も無い難附けて、犬糞で復讐とやら、さりとは

男らしうも無いお方、と空嘯きて哂へば、否、何程娘と懇意でも、病の出ぬ前に此ばかりは分るまい。此土地は癩の多い所と謂ふからには、隨分油斷はならぬ話。今度機會があつたらば、眉毛へ觸つて見るが早わかり。優曇華を撫でるやうに、ほや〳〵と薄いのが何よりの證據。百年の戀もそこで覺めうと、此處を禦げば彼處へ拔けて、散々に厭がらせければ、沸立つばかりに腹は立てど、口頭では抗はぬ敵手と、佐の市は匆々に腰を揉みて、こんな憎い奴には思入れ高賣しても冥利は盡きまじと、療治を端折るが上に、上下六錢の規定を十錢と謂へば、十錢かと妙な聲して澁々出す錢を、禮も良くは謂はず引手繰りて立出づれば、客は驚きて、此地は癩病と干瓢の外に、氣の強い按摩も名物かと呟きぬ。

佐の市は此面憎き客を口開に、都合五回の療治を仕舞へば、文珠堂の寢よとの鐘は十二時を告げぬ。

階下の奥座敷に酒飮む客の高話の響くと。折々店に聲する外は、何處も

鎭りて死せるが如く、廊下の燈火白く、物陰の晦きに居ぎたなき下女の臀横はりて。呪ひの社前に現はるゝといふ牛の姿にも似たりけり。行燈部屋の側を、佐の市が歸り際にいつも帶締め直し、錢の重りに崩る財布の始末しどころ。此處を立出でゝ主人の居間へ挨拶に行けば、銀藏は娘の酌に微醉の機嫌にて、いや佐の市樣か。よく精の出る事。まづ一杯といふところなれど、お前は之より苦い方が勝手である。久米や茶を入れて上げな、何か菓子も、と謂ふを抑へて、否々先刻もう十分御馳走になりましたれば、今晩は此にて御免を蒙りまする。左樣なれば何方樣もお寢みなされましと立起れば、そんなら佐の市樣之を持つてと、お久米は菓子の紙包を手渡しての別れ際に、氣を着けてお出なさいといふ一言を、何より有難く推戴きて店口に出づれば、未だ睡ぬ一人の宿引が、此處は關所だに何爲其手形を置いてゆかぬと聲を懸くる。魅入られたが最期、免れぬところと覺悟して、一つだよと出せば、宿引は旨さうのを

摘みながら、何處で貰つたと、問ふには應へず、ひゝと笑ひ、ごそ〳〵と潜戸を出でぬ。

戸外は月無き夜半の凄凉、おのづから見えぬ身にも浸みて、心寂しうなるほど念ふことのいとゞ深く念はるゝに任せて、往來の邪魔無きを幸ひと、後生大事に菓子を片手に杖撞鳴らして、大路を西へ二町ばかり行けば、住家は其より程無き堺町の端なり。

何思ひけむ佐の市は、

　　命懸けても添はねばおかぬ、
　　　添はにや生きてる効が無い。

と唱へば、高くもあらぬ聲の遠響くに驚きて、思はず頸を縮め、二三歩は鷺歩して、再び口の裏に同じ唄を唱ひては思案し、思案しては唄ひつつ、やう〳〵我家の門に來りぬ。

立寄りてこと〳〵と打叩けば、あいよと寢惚聲して、やがて戸を引開く

るば母親のお民なり。年紀は四十五六かとも見えて、相貌少しも肖たる處は無く、何の蔓に何が生りたりとや謂はむ。飯臺面の色赭黑く、額は鉢割れて、眼の間遠く、ほや〳〵眉毛、ちよつぴり鼻、艶やかに鐵漿つけたる齒は巨きなる口一杯に見えて、髮はお盥といふに結ひ、小肥りに肥りて脊低く、長屋の嚊といふ人品なり。

肩頭から乳の下まで寛けたる襟を搔合せ、覺めても睡たき眼を無理に睜きて、おやお歸りか。もう彼此一時だろ、と早口の頓狂聲。

佐の市は頷きて、一時は過ぎたかも知れぬ。御母樣お土産がある、と框を上れば、お民は戶鎖しながら、欠まじりに。おや〳〵其は有難いね。

（三）

鐵瓶の湯のから〳〵と沸立つ火鉢の側に、布帛懸けたる溜塗の八寸の膳は、宵の口より人待顔に出でたり。佐の市は其處に坐りて、何思ふらむ鬱乎と、傾く首の次第に俯くを識らざりし。

やがてお民は飯櫃を持來りて、さあ佐の市御膳と謂ふに、慌てゝ布帛取除け、茶碗を出して、飯を盛る間の少時も、また前の如く物思ふ風情なりしが、やう〳〵箸を執りて後も、仍空に一膳搔込み、二膳目の初めに御母樣、と卒然に聲を懸くれば、お民は土產の菓子を口の內の返事は、唯もぐ〳〵と聞ゆるのみ。

佐の市は其にも笑はず、その菓子は誰に貰つたと想ひなさる、と眞顏に問ひ懸くる。行年二十五歲の男の辭にはあらじ。

親は然りとも思はねば、同じ樣に調子を合せて、今晚のはお客樣からで

もあらうかと謂へば、佐の市は首を捻りながら、違ふ〳〵と微笑を含み
て、言はぬほど母親も乘地になりて、そんなら內儀樣かと謂へど、仍笑み
へば、そんなら旦那樣、あゝ女中衆からであらうと、此で直星中てた氣
の母親を冷笑ひ、實を謂へば、それはお久米樣が下すつたのさ。いつも
調子の好い、やさしい方、と心に浸みたる顏色なり。
また母親は譯も無く合槌擊ちて、其は今更の事では無い。容色といひ、
氣質といひ、さういつては濟ぬけれど、旅籠屋の娘には惜いもの。後來〳〵
は千束屋樣が左團扇の種なれども、金錢に不自由をせぬお店といひ、ま
た御夫婦が揃ひての堅氣なれば、他の思ふやうではあるまいと語るを、
聽澄して、なるほど、あのお店に限りては、妾同樣の嫁入させることは
あるまい。今晚もお客が噂に聞いたとて、お久米樣が見たさにわざ〳〵
宿を取つた、と冗談ながら私への話。其折も何いふ相貌と聞かれた故、
此眼では見たこともなけれど、常々人から聞いた樣子を、かう〳〵だと

詳う話したが、實は自分にも一向譯は分らず。眞の所は一體どういふ女である、と飯の後にはいつも二杯も飲む湯を忘れて、一心に訊ぬれど、母親は頻りに睡たき生欠して、どんなといつて、口で言つては分らねど、まづ東京にも彼くらゐの娘子は寡かろ。色の白い、細面の、眼の清しい、髮の濃い、すらりとした姿の好さ。女でも惚々するほどの標致さ、と謂ふかと思へば、飯櫃をがたつかして、お前もう御膳はお仕舞か。お湯をお飲みな。早くお寢と、匆々に膳片附けて寢衣を持來れば、佐の市は不ゝ承不承に着更へて、床には入れど、心に蟠まる塊ありて、寢附かれぬ耳元に、母親の無遠慮なる高鼾、石臼の響くに似たり。

佐の市は懊惱に堪へかねて、耳を塞ぎもし、夜衣をも冠りて試れど、睡を催さゞるに困じ果てゝ、右へごろり、左へごろり、俯になれば切無く、仰けば寢勝手ならず。圓き頭を枕から辷落し、兩手を長く差出して悶ふる間に、續け樣のはつ嚔、遽に鼻の詰りたる不快さ。

二時は疾くに鳴りて、戸外に二三頭の犬の遠吠心頭に響けば、いよ〳〵睡られぬに憤れて勃と起き、盲目は闇も晝に異らず、戸惑ひもせず手探りに、火鉢の傍に捨てたる菓子の包紙を拾ひ取りて床に歸り、臥ながら皺を伸して四つに疊みたるを、幾度か雨の類に推當て、臭を嗅ぎちらして、果は内懐に丞かと納め、肌身に添へて、三時過ぐる迄まじ〳〵。

お民は七時頃に起出で、狹き臺所を彼方向き此方向き、手捷く朝飯の拵へして、それからの拂拭掃除、涼臺ほどの椽に排べたる縁日もの丶盆栽に、水遣るが最後にて、やう〳〵火鉢の前に御腰をおろし、二三服ふかしてから、やいの〳〵と佐の市を曳起して、食事の濟み次第出て行くが例なり。

前垂懸に鮮潔したる半纏着。素足に日和下駄引懸けて、懷中には古びたる革財布の大きなるを捻込み、雨にも風にも毎日出るからは、何か商賣なるべし。折々は世帯道具の類を挈げて歸ることあり。風體良からぬ男

女の出入ることもあり。

佐の市は、此地に小勝とて餘り人には知られぬ藝者の父無子、三歳から里流れになりて、六歳にて眼病を患ひ、療治屆かずして今の盲目になりぬ。

お民が夫仙太郎といふは、車力の頭分にて、相應に實入ある株なりしが、常浸りに飲むと賭つとに、家内は火の粉の降る如く、寒の中も單衣着て凌ぐほどの七顛なりければ、里扶持も來ぬ不具の兒は邪魔になるべきを、夫婦心を揃へて甘やかし、そのまゝ子にして育てける十歳といふ年、仙太郎は酒毒の爲に命を果しけり。

お民は稼人を失ひて、身一つにあらぬ厄介は、不仕合にも盲目といふに、當座の難澁は謂ふべくもあらざりし。生きてゐる効には人の門に立ちて、猫も食はぬ腐飯乞ふも愁く、女子ながらも足腰の達者なるに、小器用に髪結ふより思着きて、島田、圓髷、銀杏返、手にまかせて結ひまはり、

巧く出來ぬかはりには、何でも一錢髮結と重寶されて、佐の市が一人前になるまでを繫ぎぬ。

盲目のことなれば商賣はいづれ揉療治と、十一の歲より杉山流を習はせ、十三から笛吹鳴らして往來を流させけるに、人々殊外不便がりて、彼を呼んでやれと、慈悲から最負附きて、色白く目鼻立も陋しからず、小綺麗なると、溫順が愛嬌になりて、想ひの外に繁昌し、幽かながらも小腕に活計を助けて、十五六の頃からは一廉の稼する身になれるも、千束屋のお蔭ぞかし。

覺束なくも佐の市が商賣始の日、慙かしさにや笛の音も亂雜に店頭を過ぐるを、哀れの小盲目、と先づ千束屋の奧へ呼込まれしが緣となりて、それより夜毎の出入を許され、まだ／＼客へは出されねばとて、長らく夫婦の肩に縋りて、利きもせぬ療治に尋常の賃錢くれて、萬般の世話になりて、今世間に佐の市といはるゝは、偏へに千束屋樣の御引立と、母

子は不斷此恩を忘れず。
然れば二十九番の客との口論にも、お久米の樣子は眼にこそ見ざれ、能く識ると、誇貌に謂ひしも宜なり。お民は女世帶を張りて我食ふ飯を我と稼ぐ身に、世渡といふことの難しきを知りて、夫といふもの在りし時のやうに、曳ずりてはゐられぬと分別着きて、一厘の錢も疎かにせず、始末を第一にして、茶漬の菜は一摘の鹽に極めてからは、紙幣を握りて晦日を越す事の氣安さを覺え、兎角樂みは是と、母子の稼高を合せて、其半分を月々遺して積みたる金の額になりければ、軈て佐の市の手一つにて二人が活計の立つやうになれるを見計らひ、一錢髮結は廢めて、お民は外の商賣を始めけり。
既往に較ぶれば今のお民は全く別人の如く、彼が仙太の嚊か、と識れる人を驚かしぬ。細帶一つにて鐵棒曳いて飛廻りし影は無く、今も善く辯じ、善く喚けど、服裝は常住衣やんとして、てきぱきしたる擧止、我勢

に効々しき女房風になりぬ。

相好の下作なるは今更治すべき名藥もあらず、天資ほど悲きは無し。貴人にも痘痕のあるあり、黑痣の顯はなるもあるべし。それも下樣の疵のやうに醜からざるは、あながち見る人の氣の所爲ばかりにもあらず、心は自から形に表はれて、貧相なるも金持てば福相に變り、惡相なるも發心して佛の道に入りたるは、尊くも見ゆるぞかし。

お民も飲拔の車力が嬶にて、年中不如意に暮せし頃と違ひて、今では善き仕事する佐の市のお袋にて、家賃も滯らさず、義理首尾も缺かず、長屋住居ながらちんまりと片附け、臺所の揚板を鏡のごとく光らせ、狂へども鳴りはする柱時計を掛けて、客には別に茶道具もあり。額は知らねど近頃は小金を貯めて、日毎に其が子を產むと聞けば、心裕に耳朶はおひ〳〵垂るゝばかり。彼が眞の寡婦に花が咲いたの、と專ら近所に噂せり。

國亡びて忠臣顯はれ、家貧くして孝子出づとはいへど、錢無くては親子の摑合も起る例多く、ましてや爲さぬ間は葛藤のあり勝なるに、お民は子を懷ひ、佐の市は親を念ふが上に、不自由は無き此頃の、日毎に運の開けゆくほど心は迭ひに和げば、折には氣まづき事の無きにもあらねど、腹には溜らず、溶けてしまひぬ。明朝の薪も無き家にては、世帶の苦勞のむしやくしや腹から、氣に障へでものことまでが氣に障りて、喧嘩の種の盡くることにはあらず。

佐の市母子は睦まじう倶稼して、齷齪一日も休まず。晦日には必ず蕎麥食ふ外に、無駄なる錢は費はず、何娛樂といふ事もあらざらむやうに見えながら、其身になりては無上の樂み、母子氣を揃へて金溜むる事なり。此樂みを敎へしは、十三歲の佐の市なりし。渠は其眼の見えぬ不自由を、子心にも深く感じたりけむ、金錢といふもの持たぬ心細さは、勝手知らぬ路に杖を奪られて、突放されたるも同じと謂へり。

其折お民は夫に別れて、假寡婦の年齡は若かりけれど、誰お多福に構ふもの無く、身は破鍋の碎けたる後に、果敢なく殘る綴蓋と、例の安髮結して二人口を過せる便無さに、かゝる時に欲しきは金錢なりと、其までとても欲しからざりしにはあらざる金錢の、いとゞ〳〵いとゞ欲しかりし心頭に、佐の市が一言拗と徹へて、早速その翌日より魂魄を入れかへ、買食も晝寢も斷物にして、精も根も續かむ限りは、と思立ちて見れば、世間誰一人袖手してゐるもの無く、木で出來たる水車も轉れば、稗食つてゐる高麗鼠も廻る。兎角は足手を働かすに定りたる世中に、こりやかうしてはゐられぬと襷懸けて、昧きより昏きまで駈回り、持つて來い二十でも三十でも、結はせる女のあるに任せて、二三年が間に、少しは安心の種をこしらへし頃には、やう〳〵佐の市も一人前になりて、それから今に雀百歲まで躍を忘れぬ心懸。

眼には不自由にても此に事缺かねば、眼明の貧乏よりは數等幸甚と、母

親に語りて常に佐の市は慰みけり。

然れども其胸裏には、五十年の命を半分に、三度の食を一度にしても、一双の眼をこそ、と望むなるべし。

有るべきことならねど、もし然もあらば、按摩は罷めて縣廳の役人とならむものを、と折に觸れては母に喞てば、天へ梯子掛けてお星樣を拾ふやうな、出來ない相談。用無いことを思はうより、お金錢を貯へるのが第一、とお民は一向取合ざりき。

取合れねばとて斷念もならず。思出しては堪へかねて、なほ執拗く同じ言を繰返すに、母も佐の市の情を酌めば、今更のやうに可憫は胸に逼りて、素氣無くも得言はず。任意になるならば、百圓が二百圓でも所持金總額でも、さら〱吝む事にはあらじ。お前ゆゑならばどのやうな事しても、其眼の見ゆるやうに爲たけれど、人手はおろか神や佛の力でも、迨ばぬ事ゆゑ諦めて、もう〱其樣な愚痴は謂はぬもの。先の世にて作

りし罪の應報は是非無き身と、今度の世には清やかな、お氣樣のやうな眼を持つて、美しう生れて來るやう、心懸くるより外は無い。未練は謂ふまい。お前も男では無いか、と曇れる聲に窘められては、返す辭もあらざりけり。

幾度か言出しつ、幾度か窘められつ、この眼が見えたらば、と例も言出せば、任意にならばとて例も慰めらるゝのみなるに、後には佐の市も弗と愚痴を謂はずなりけれど、未練の念の絶えたるにはあらず、謂ふも効なければとて纔に口外せざるのみ。

内の思はいよ／＼焚えて、心や炙らるゝ此頃の胸苦しさを、人に語られず、慰めらるゝ友も無ければ、果敢なくも我と歎ち、我と憐み、おのれと怨み、おのれと聞分けても、なか／＼に憂き身を獨り持餘しぬ。

佐の市が盲目になりしは六歳の折にて、それから十九年になりぬ。今更事新しう愚痴言ふまでもあらじ。物心着きし頃より早、不自由知らぬ人

など昨日からの盲目好程に斷念はせで、定めて氣遣はしくも訝るのやうに、さりとは苦に病むを母親の知らば、定めて氣遣はしくも訝るべく、衆は可笑くも異しむべし。佐の市も亦自ら訝しくも異しくも思ふべきに、我眞意を識らむものは、誰か至理とも可憐とも思はざるべき、と渠は獨り合點したりけり。

その至理とも可憐とも、他の思ふべしとの、佐の市が眞意を識る者とては、佐の市の外にあらざれど、宇都宮中に唯一人、朧氣ながら識れる人ありとは、佐の市が胸に絕えせぬ思なり。

但し、其人の識るといふも、確然ならざる佐の市が推量にて、眞僞は其人の外に識るものあらじ。

晝は母親の留守に眠たいほど眠て、覺めても眼の樂み無ければ、仍ごろごろと肱枕。多時は寂かに案じ入りて、頓て大息の後は小聲に節附けて、命懸けてもといふ例の都々一。

お民は晝飯前に小戻して箸を措くより駈出し、やう〳〵點燈頃に歸れば入替りて暮方から夜半までは、佐の市が仕事に出づるなり。

爲す事も無く一日垂籠めて、酒は飲まず、煙草は吸はず、茶ばかり飲めば偏徹も無く腹のだぶつくのみにて、氣の鬱ぐ留守番よりは仕事に出で、陽氣なる千束屋の座敷に、客の戯言聞きながら療治する間は、何事も忘らるゝに、些少の病氣などは推しても千束屋へ行かぬ日は無し。

夕暮を待ちかまへて我家を出づる毎に、闇路を迷ふ人の、山の端白く旭の影を認めたらむ想ひす。やがて千束屋の門を入れば、店も奥も二階もごた〳〵と騒がしき響は、我思ふ人の搔鳴らす琴の調の如く、聞くに心も融々となりぬ。

來と去には必ず主人の居間へ顔出しする爾時の、嬉しさ、懷しさには慄然として、何かあらぬ小半時の茶話も、身は此處に此まゝ裝置になれと冀ふばかりに、心酔の快樂を覺ゆるなり。

夜も更けたるに長居は邪魔と遠慮して、千束屋の潜戸を出づる、味氣無さ、忌はしさは、此一時に幾許か壽の縮む心地して、我宿ながら寂しき枕上に、蛙の鳴音を聞かされて、唯何と無く寢る身の果敢なさを思へば、枕も動かず、足も窘みて、其に就けても盲目は悲しく、按摩は可厭。醜うはあらぬ此顏に、唯一双の眼が明いてゐたらば、とまた例の天へ梯子掛けて星を拾ひたき慾、及ばぬことのなほ悔しかりき。

今日も亦一日さま〲の事を思ひつゞけ、果は異しう胸塞がりて氣分も快からず、紛れかねたる折好くも母親の歸來にけり。

程無く日暮れて、此から我物と、いつよりも嬉々く立出でゝ、千束屋に來て見れば、家内の混雜常に倍して、何とやら事ありげなるに、店口をうろつく床番の老漢に質ぬれば、東京の大臣方の直下のお役人樣。内海樣とおつしやるお方が今し方お到着にて、逐附け知事樣も光臨とて家中の大騷。お座敷は奧二階の上段の間と聞き。其は何にしても結構な事、お店

は益御繁昌の瑞相。時に私は下座敷のお客衆へ、療治に廻つても差支はと懸念すれば、何のひと、千束屋を御買切といふでは無し。さあ〳〵遠慮無しに上つたり、と驅入る老漢の後に踵きて、佐の市は例の通り奥へ挨拶に行けば、內儀はいつもほどに辭も懸けず、取込みたる氣勢なれど、直に立ちもやらで、まじ〳〵と樣子を覗へば、お久米は俄に化粧して、今衣服を着更ふると覺しく、褄が下着がといふ聲の間に、硬さうなる帶扱く音も聞えて、得ならぬ衣の香は芬々と鼻を襲ひぬ。

內儀は起居忙しく、呼吸促まして、お久米が服裝の世話するは、今頃何事の起りたる、と佐の市は合點行かず。何處へかお外出でござりまするかと、邪魔にならぬやう側の方から竊と訊ぬれば、今晩は知事樣からのお客を預りて、外ならぬ彼方が懇切の御所望に、久米をお給仕に出すとて此仕末、と內儀の辭に佐の市は頷きて、左樣でござりまするか。それはお大體ではござりませぬ。これまでに隨分御大身のお客樣方の光臨も

ございましたが、お久米様をお座敷へお出しなされたことはございませぬに、今度に限つて如此といふのは、よく〳〵立派なお方様と見えますると謂ふを、聞僻めてや内儀は勃然顏、知事様の御意なれば御辭退も申しかねて、御給仕には出すものゝ、此方から好むだ次第では無い、と思懸け無く振られて、佐の市は吃驚。へい〳〵左様でございまするとも、知事様の御所望では、此は如何も御道理でございまする。其につけてもお久米様の立派にお召更なされました姿を、一生の思出に唯一目拝見いたしたうございまする、と謂ふかと思へば狐鼠々々と遁出しぬ。

（四）

裏階子の下に立話する婢二人、宿下かと想はるゝばかりに着飾りて、捧銃の如く麥酒の罎を持てるは、内海秘書官の席に給仕なるべく、一人は茶代の請取を盆と共に摑みて片手に提げたり。

あら一寸見せたいよと足蹈するは麥酒を持てる婢なり。請取の方は鼠鳴して、そんなに肖てゐるかい、見たいね。後で行くから其節は何分お頼み申します、と故とらしく挨拶すれば、あゝお出よ。肖てゐるどころではない、彼の好いのさ。おや憚りさまと請取が拗れば、これは澤村君失敬。到底彼には抗ひませんが、それは餘程樣子が好いのだよ。而して大分お久米樣に氣在名古屋で、お久米樣の方でも同斷らしいから、お前油斷がならないよと、前後も知らず囀る横合から、飄然出たる人影に、二人は魂消て、わっと聲を立つれば、吃驚して退歩る青坊主。

おや可厭な佐の市樣だよ。晦いところから唐突に出て來てさ。あゝ吃驚したと胸を撫づれば、佐の市は苦笑して、私も吃驚致しました。何やら大相面白さうなお話、私にも聞かして下さいましと寄添へば、お福さん、お前佐の市樣におのろけよと謂捨に、麥酒持てる婢は一散に階子を駆昇りぬ。

お福は佐の市に逼らるゝまでも無く、合手は按摩樣でも耳があるからは、承けさせるに差異は無いといふ氣か、吐處に窮りし滿腔の惚話を、浴せるほどに散々聞かせぬ。

其概畧は、都座といふ小劇場に澤村玉之助なる立女形ありて、お福は此が大贔負大執心の舞臺面に、肖たとはおろか、それより美き男、内海の座敷に在りといふ筋なり。

承賃さへもらはぬ上に、お樂みと反對に一つ擲いて逃げられ、佐の市は憫然として霎時佇みたりしが、やがて嚮に現れし横合へ退込みて、何處

へか行きけむ、姿は見えずなりけり。

奥二階の上段の間は秘書官內海、屬僚三人、當縣知事の一座。酒は今禮に始りて、寛がぬ談話の間に折々世事らしき笑聲の起るのみ。各自窮屈の膝を正して、髭あるものは無性に捻り、無きものは專ら煙草を吹かして、嚴肅なる席に嫻はぬ婢等は、進退に手足顫ひ、坐れば燈火の前に照れて、片唾を呑むもあり、咳拂するもあり。お久米は淡紅に染めたる面色の、人を怯れて退込みがちなるに、辭を懸くればあながち素氣無くもあらず。意無く見る眼にも情を含みて、物言ふ每に自から微笑を帶ぶるなど、露の滴るばかりなる愛嬌、客の腸に浸みて、酒よりは先づ之に醉はされぬ。就中內海秘書官は思召尋常ならぬ御氣色にて、切りに御側へ引寄せむとしたまへり。

長官の御前なれば、君臣の禮を重じ、畏敬の意を表して、木像の如く端然と畏る屬官の中に、最も年齡若くして美男なるが、稻葉といふ娃を婢

等もいつか覺えて、是ぞ澤村玉之助に肖たりとて騷がるゝ人なりける。衆にもさほどに思はるゝ容貌なれば、本人內心の得意想ふべく、一度會ひし女に惚れられざりし例無し。へえん、桃李言ざれど、其下自から蹊を成す。此娘も今に先方からお酌と押懸けて、離れがたなくして見せむと　硝子盃を擧げて反身になる時、先生の意氣八荒を吞み、眼中秘書官も知事もあらざりけり。

人數ほども空壜の並ぶ此には、黑き顏も銅色に醺じて、主客ともにやうやう打解けたる語氣。公務の用談も片附きて、此からが酒も身に浸みる、今までは茶も同然、さあ一杯頂戴、と知事も愛想に席を立てば、お久米を中間に据ゑて、お前は幾歲になるかなど、內海秘書官膝の頽るゝを覺えず、ぢり／＼と寄詰せて、一杯飮まぬか。嫌ひだとて差した杯を承けぬとは情無いぞ。一口でも飮むでくれ。醉うたらば私が介抱するさ、と大分斫込るゝ樣子を見たる屬官たち、時や臻れりと氣を寬して飮みは

じめ、甚麼だ姉樣と、呂律を亂しかくるもあれど、いづれかお久米に所思のあらざるは無ければ、彼を見て此を見るに、前に侍る婢等は、殆ど牛肉に於ける葱の相違にて、牛肉は彼方へ引揚げられの、我等に殘るは葱ばかり。此では飲めぬと謂ひながら、飲むものは飲めども、深く嗜まぬ稻葉は惘然柱に凭れて、頻りにお久米の方を見遣れども、此美男が眼には入らぬか、お久米は始終秘書官の敵手にばかりなりて、此方を向きもせぬに、不興なる面色してゐるを、婢等は氣にして懊惱く彼此言ふを、左右の同僚に揄かれて、稻葉賴むよ、など丶持たせらる丶氣色の惡さ。折ることとも高嶺の花や、お久米はいつ迄も其處を立たず。立たむとしても秘書官が立たせず、頗る恐悅の體にて限無く飲むほどに、何時切揚ぐるとも見えざりけり。

思ふお酌は傍へも寄らず、飯もはや濟して席に在る効無く、稻葉は飄然と廊下に出づれば、此座敷の後なる物置やうな狹き一間の黑闇へ、ごそ

ごそと人の遁入る氣勢せしは、婢などの我に戯るゝかと、誰だと聲を懸くるに應なければ、薄氣味惡くなりて其よりは得進まず、兢々様子を候ひて暫時立てども、音もせざるに彌よ異しく、折からお悦といふ婢の階子を昇來るを手招けば、希有なる顏して忍び來り、何でございますると小聲を出しぬ。

稻葉も小聲になりて、今此室へ這入りたるものあれば、何物なるか燈火を早くと促立てられて、お悦は興覺め、大方店の男衆でも何か出しに來たのでござりましよ。そんなものにお構ひ無くお座敷へお出でなすつて最一杯召上れ、と袂取る手を拂ひのけて、兎も角も燈火をと眞顏になれば、ゑやうこと無しにお悦が持て來たる燭臺を、稻葉は請取りて高く翳しつ、富士の人穴もかくやと室の内へ踏入れば、屏風二双立掛けたる陰に、消えよとばかりに蹐まる人影あり。

そりやこそ曲者。何だ貴様はと喚けば、お悦はきやつと叫びて逃出す物

音を、何事ぞと座敷は騷立ちて、爛醉の屬官二人を眞先に、知事も秘書官もお久米も婢等も珠數繋に推寄すれば、稻葉は勇氣日頃に百倍して、曲者の領髮無圖と摑み、難無く曳出したる燈火の前。

曲者は戰々顫ひながら面を擧ぐれば、此奴按摩だと稻葉が喚ぶ後より、佐の市樣かとお久米は進出でゝ、どうしてこんな處へはと訊ぬれば、佐の市は嬉しいやら面目無いやら、おやお久米樣でござりまするか。好い所へお出で下さいました。何卒貴孃からお客樣へ、胡散なものでは無いと、好う辯疏をなされて下されまし。はいお客樣方、私は決して怪しいものではござりませぬ、と顏色土の如くなりて、唯管詫入れば、お久米は事も無げに、あゝ何の其やうに心配することはありませぬ。お客樣へは私からお詫をせうほどに、さあ〳〵早く彼方へ、と謂はるゝを機會に立たむとすれば、屬官の一人角田某、酒氣に乘じて聲も暴かに、やあ、ならぬぞ。怪しく無いものが何で用無き他の座敷を覗ひ、見咎められて

こんな處へ隱れたのだ。其理由聞かう、盲目坊主めと哮りかゝれば、佐の市は膽魂も身に添はず、額を疊に摺附けて、途方に暮れたる涙聲、詫入るのみにて辯疏を言はねば益疑はれ、今一人の屬官まで肩臂怒らして詰りかゝる。

氣毒なる佐の市の樣子を見るに見かねて、釋してやれと知事の聲懸に、醉漢輩の勢も挫けたる隙に、お久米は佐の市の手を執りて、さあ此方へと圍を突き、裏階子から奥へ伴れゆく途も、人の逐來るかと佐の市は心焦きて、走らむとするほど幾度か躓くを、お久米の纖弱き腕に縋りて、やう〳〵居間に入れば、兩親は驚きて、こは何事と問ふに、在りし仔細を辭簡に語りて、お久米は内海の座敷へ還しぬ。

はや一同も席に復りて、人待貌に寂しげなる秘書官は、お久米を見るより笑ひかけて、今按摩を引抱へて衝と走出た所は、宛然演劇であつた。歌舞伎座ですれば、福助のお久米に按摩は新藏かな。角田は猿之助であ

らうなと謂へば、稲葉は意ありげにお久米の顔を見て、新藏の按摩でござりますれば、どういたしましてもお久米と事情がありさうでござりまする、と異に言ひまはせば、秘書官は我意を得たりといはむやうの面色にて、無論の事さ。お久米、どうも左樣であらうと肩頭を推されて、それは何の事でござりまする。新藏とやら福助とやら。私は田舍者にて東京の芝居を見たことがござりませぬゆゑ、少しも事情が分りませぬ、と知らぬ顔する。

あれまあ可哀さうなことをおつしやいます、と信といふ年増の婢が助鐵砲の口を出せば、扨はお前だなと横合から稲葉に塗付けられて、可哀さうにと膨るゝ顔は、餘り可哀さうでもないやうだ、と稲葉は心に可笑かりき。

はや十二時といふに、知事は暇乞して立起れば、一座總立となりて店口まで見送り、還れば座敷の取亂したるに今更興覺め、もう寢るとせう、

と内海は厠へ立ちし跡に、お久米は次間に夜具展ぶる婢に何やら囁きて、此座敷を消えてしまひぬ。

(五)

お久米は内海の座敷より退れば、はや佐の市は歸りて在らざりし。何として佐の市は彼處の物置に忍入りしにや、少しも思ひあたる節はあらず。なるほど渠が性行を知らぬ人は、異しとも胡散とも思ひけらし。然りとて陋しき心などあるべき佐の市ならずと知れるほど、お久米はいとゞ異しく、とかうの推量だに附かざりければ、直々に事情を聞かばやと思ひしに、歸りし跡とて所爲無く、母親に訊ねければ、佐の市はかういうてゐたとて、聞きしまゝを語りけるは、二階の三十番の療治を濟して立出でけるに、上段の間の賑はしさに心牽されて、足の向くまゝに近寄りて、霎時内の景氣を立聽してゐたりしに、障子を開けて出で來る人あり。見咎められては極惡しと、慌てし故に度を失ひ、道ある方へ逃げはせで、つい物置へ這入しを、見着けられしが運の盡。怪しき奴と思ひ

こまれしほど、出るには出かねて竊みたりしを、いよ〳〵曲者にされて押へられ、どうなる事かと恐慌して、口も利かれず、顫ひあがりて、懼ろしかりし所へ、お前が折好う出たばかりに災難を免れたとて、大層な懽びやう。よろしく禮をいうてくれ、と暮々も言置いて歸つた、と聞いて見れば何の事も無く、それなりにお久米の疑念は霽れぬ。

明くる日の暮方には例の時刻を違へず、佐の市は千束屋の店に入來りぬ。昨夜の不出來を面目無く、隅の方から狐鼠々々と這上りて、店のものへは常より丁寧の會釋するなど、傷らしくも氣毒なる態度に、誰も遠慮して其事を言出さず。心易く關を通さむとせしに、佐の市は小聲にて、昨夜のお客様はもう御出發になりましたか、と心許無げに訊ねけり。

あのお客様は明朝の二番の御出發、と聞くより佐の市は慄然として、ええ未だ在つしやいますかと頭を撫で、それは〳〵と呟きながら奥へ入る後に、番頭を始め居合はす男等の、くす〳〵笑ふ聲耳に入れば、佐の市

は人も見ぬ處に顏を赧めて、此先の難所は口善惡なき婢等、また何とか謂ふであろ。

居間にはお久米の在ぬ樣子。聞けば今宵も上段の間へ給仕に出たりとの內儀の辭に、佐の市は昨夜の事や憶ひ出しけむ、浮かぬ顏してゐたりしが、雜談にも身が入らず、茶も碌に飲みもせず、また後刻にと、ふいと立ちて療治に行きぬ。

呼ばれたる座敷に松といふ小婢のゐたるに傳言を托みて、お久米樣に佐の市が昨夜はお世話樣になりました。今夜お目に懸りまして、よろしうお禮を申上げまする心算でござりましたが、今晩もお座敷といふことで、お目に懸る事も出來ますまいから、乍陰厚くお禮を申してをりまする。とかう謂うて下さりまし。もしお松樣忘れずに屹度賴みましたと謂へば、ひよとかすると忘れるかも知れません、と湯沸提げて蒼皇出て行くを覺束無く、お松樣〳〵と居去り出せば、客の老人は恐い顏して、お松樣は

不用から、我の肩を揉むでくれ。

此夜は例ならず療治立込みて、十二時過ぐるまで手の隙く間もあらざりしが、大方お久米も座敷から退りたる時分。暇乞ながら昨夜の禮を、と會ひに行けば、居間には內儀唯一人、そこら取片附けて寢支度せるところなり。

今お歸りか。今晚は大分忙しかつたと見える。商賣の繁昌なのは何より結構な事と、帶解きかけて寢衣を着更へむとするに、佐の市は有繫に閾より內へ入ることとならねば、障子の外から顏だけ出して、旦那樣は最お寢でございますか。お久米樣もお還りなさいましたか、と世事らしう尋ぬれば、今朝が些と蚤かつたゆゑ、皆もう臥りました。商賣とはいひながら、夜が更けてお前も睡かろと謂はれて、欲爲ことなしに、左樣なれば御機嫌好うと、望が外れて龍鍾立起る。

佐の市が無上の娯樂は、千束屋の奥に來去の茶話なり。何は措きても此

居間の疊の溫たまるほど坐りて、茶を飮むことは三杯以上、迭ひに快う一段雜談をせでは、奧歯に物の介まりたらむ心地して、その夜は歸るにも力無く、寢るにも張合無く、明朝起出づるに勵も無く、唯其事を果さざりしが、何とは無けれども心に懸りて、一日不愉快の種となりぬ。
昨夜は例の騷動に取紛れて、常の如く悠々茶も飮まず、旅人の懸茶屋に憩みたらむやうに、我と我心に逐立てられて歸りし賠償に、今宵こそと樂みしも空となりて、座敷へも入らず、內儀には懊惱がられ、二晩續の失望は、佐の市の心を激て丶、宿に還りても不興の面色、喧嘩せし後のごとく、母親が十言を一言に應答して、茶漬搔込むも手暴く、無雜作にごろりと寢たりしが、睡られぬま丶に熟く思ひかへせば、明夜も無きにはあらずと、其だけはやう〱慰めても、外にまだ一事如何しても慰められぬことありて、寢苦しき夜は命を縮められむ想ひなりかし。
次日は午刻から二時間ばかり暇ありとて、お民が內に居るより遽に思立

ちて、佐の市は月代剃に出でぬ。

町外れには刈込二錢、髭剃八厘といふ髮結床もあり。然りとて木鋏にて刈込み、竹篦にて剃るにもあらず。縮れたれども姿見あり、臭けれども香水を用ゐるなど、六錢取る店に異りたること無ければ、自家剃にても濟む按摩の頭顱を、安いが何より、分にも相應なれば、彼所へ行けと、お民は出る度に謂へど外聞が惡い。彼は車夫や土方の行く所とて、小泉町に小綺麗なる萬床といふを馴染にして通ひけり。

髮結床を遊場にして、半日も晝寢して歸るといふ人物、餝屋の吉といふ血氣壯の懶惰漢、壁側の腰懸に長々と臥そべりて、お先煙草をふかしながら、刈込に忙しき主人の萬吉を捉へて無駄話するを、椅子に倚れる店者風の男も折々嘴出して、三人寄りて彼一句此一句、或は笑ひ、或は眞面目、さうだ、かうだと喧しきは、宇都宮中の評判娘、千束屋のお久米が噂なり。

折から佐の市の入來るを見るより、萬吉は空鋏を鳴しながら吉を見向きて、論より證據は佐の市樣に聞いて見るがいゝ。そしたら大概樣子が知れやう、と謂ふを佐の市は聞着けて、親方何をと、火鉢の側に腰を懸くれば、吉は徐かに起返りて、さうさ、佐の市樣なら知つてゐるだろ、千束屋の娘の一件さ。　はて一件とはと佐の市が眉を顰むれば、親方此調子では無益らしいぜと吉は苦笑す。一件といふ語が聞流されず、佐の市はやゝ急心になりて、親方一件とは甚麼いふ事と頸を出せば、一けんは二間の半分さ、と吉が洒落、こんなのは宇都宮でも今は行らじ。萬吉は据腰になりて、客の頸足を摘撚へながら、佐の市樣御存じなしかい。其は不思議だといふ尾に附きて、吉は誰の假聲やら、知らざあ謂つて聞かせやう。彼店の娘のお久米ね、評判の箱入であつたが、いよ〳〵時節到來して、目出度御祝儀が濟むだといふ話さ。　それでは何の間にやら緣談が極つて、もう結納の交換が濟みましたかと、佐の市は仰天顔

萬吉は笑出して、佐の市様は正直者だ。吉様、符牒では通じないから、こりや正札附で話したが可らう。それぢや佐の市様、正札附だから直切事無しだよと謂へば、吉様、また冗を言ふよ。それだから商話説が分らなくなるのだ。吉様でも親方でも、早く話して聞かせて下さい、と佐の市は悶かしがる。

吉は額を撫きて、有難え〳〵。人情といふ奴は異なもので、按摩様でも婦女の話は好いと見える。そりや按摩だとて人間なりや、人情はありまする、と佐の市は勃然とする。

ありまするどころか、眼の無い人ほど有過ぎるといふが、佐の市様なども過ぎる方の口らしい。扨長らくの間打囃されましたれば、前口上な畧仕りまして、いよ〳〵千束屋の名代娘、お久米の色事一件に取懸らせます。あい來た、ちやんか〳〵、と手匣の中から張子の達磨を摘み出すやうな手模をすれば、佐の市には何の事やら解らねど、萬吉も客も一度に失笑

すに誘はれて、苦笑してゐたりけり。
扨はや佐の市樣や、と吉はまた妙な聲して他を笑はせ、やう〳〵眞面目になりて、先刻一件といつたのも、御祝儀と云つたのも、あれは皆色事の符牒さ。暴露していへば、あのお久米が客の枕上風月になつた事實と、後段は聞きもせず佐の市は擦寄りて、吉樣、それは眞の事ですかと、心元無げに問懸くれば、その眞か虛かゞ瞭然しないから、それで此方からお前樣に訊ねたのだが、そんな話はちつとも聞かずですか、と萬吉は合點の行かぬ氣色なり。
一體それは何頃の事、と佐の市が首を捻れば、何頃どころかい、出來たてのほや〳〵、一昨夜と昨夜と二晩續。それをお前樣が知らぬとは、ええ明盲といひかけて、本物だから仕方が無いがと呟きしが、佐の市にも聞えて、眼は見えずとも耳があれば、それくらゐの事は分りますが、而して其客といふのは。　東京の官員で、知事の朋友だとやら、今朝の二

番で立つたさうだと、吉が辭になるほど〻、佐の市は思はず小膝を搏て ば、何と思ひあたつたか。さあ〳〵いよ〳〵此は本物だよ。有難え有難え、と吉は無性に懽べば、何の有難えことがあるものか、自分でも出來はしまいし。熟考へても見な、面白くも無え、宇都宮の耻辱だわなと說破めど、吉は沮まず、それでも妙齡の娘をあゝして推籠めておいて、病でも出たら可愛さうだと思へば、我は腹も立たねえ。はて飛だ情深いお人だと萬吉が謂へば、立ちたくても立たれないのであらう、と客の店者は冷かす。佐の市は默然と腕を拱きて、思案に暮れたる風情なり。佐の市樣何をそんなに考へ込むでお在だ。思ひあたることでもありますかね、と萬吉に問はれて、重たげに顏を擧げ、吉樣のお話の通り、東京の身分ある官員とやらのお客はありました。娘も其座敷へ給仕に出たことは出ましたが、請合そんな事はありませぬ。大方其は世間の惡口。あの店に限つて、さうした醜猥なことは決して〳〵、と首を掉れど、吉は

なか〳〵承知せず。何の無いと極るものか、此方が幾許堅くしても、敵手が敵手だ。よしかい、先方には知事といふものが附いてゐるよ。此奴が鶴の一聲で媒介をした日には、鱩が物を食ひはすまいし、堅いも柔いもあるものか。それ能く言ふ奴だが、泣く子と地頭には勝たれぬだ。それも、無料で何しやうといふぢや無しさ、我達が口說くのとは大きに事情が違ふ。思召次第で四十や五十は前錢で並べて見せて、それで唯一度なら慾も出さずには居られめえ。そこへ知事樣の一睨、おつな言の一句も謂はれたら、否應無しに承知ものだ。箱入だの、堅いのと、評判は大したものだが、高家のお姫樣といふぢやなしよ、高が旅籠屋の娘子だ。何されたか知れたものぢやねえ、と辯舌瀧の如く滔々と驀しかくれば、佐の市は躍起となりて、苛立つほどなほ口籠り、何、高が旅籠屋の娘子だ。おゝ其は謂ふまでも無い、旅籠屋の娘子さ。その旅籠屋が、尋常の旅籠屋とは旅籠屋が違ふ。何だ四十や五十の端金、可憫按摩風情の私で

さへ、そればかりのことに驚愕するものか。まして千束屋は評判の內福者。毎晩の客の茶代でも、それしきが額はあるに、大事の秘藏娘を切賣させやう道理が無い。また知事樣のお聲懸があらうとも、ちつとも恐いことも、可怖しいことも無い。それは平に御免を蒙ります、と立派に拒絕をいつたとて、豈敢警察署へも揚げられまい。舊時は知らず今日開化の世中に、權柄盡で威しつけ、それでも言ふことを可かぬとて、罪も無いものに縄打つて責呵なむやうな、そんな役人があるものか。物を識らぬにも程度があると、平生にも似ず、直入と思切りたる物の言ひやう。此方は血氣の吉五郎、理屈で負けたら腕で來い、一鐵無法の我武捨良なれば、箇按摩鍼と謂ふより早く、がんと一擊頭を吃はして、驚くところを撞倒せば、不意を打れし佐の市は、腰懸にたまり得ず、呀といひながら仰樣に、づてんと撻と轉げ墮ちたり。
其と見るより萬吉は、吉五郎に飛着きて、なほ蹂躪さむと暴るゝを拏ふ

れば、女房は驅出で、客は立騒ぎて介抱する傍に、萬吉は口を尖らせ、眼を圓くして、頻りに吉の無法を責めながら、押出し押出し障子の外に突放せば、吉は膨面して、坊主め覺えてゐやがれと喚けば、佐の市も肯かぬ氣に、應、覺えてゐるからと立起るを、三人して、まあ〱まあ。

吉に撲れし處は然したる事なけれど、蹉れて地に打着けし後腦の疼痛に眩暈して、髮を剃る所にはあらず、頭抱へて佐の市はふら〱と歸りぬ。

母親は此體を見るに氣遣しく、仔細を問へば云々と、涙を流して無念がれば、今はともあれ其昔は、二日に一度づゝは亭主と喧嘩して、隨分負けぬ氣のお民は腹に据ゑかね、あの無法者の吉の野郎め。眼界の見えぬものを、よくもこんな目に遭はせやがつたな。うぬ何するか見ろ、と血相變へて立起れば、佐の市は裾に縋りて、母樣、腹の立つのは道理だ。私も悔しい、讐は復て貰ひたけれど、さうしたら此後彼奴に會つた時、またどんな目に遭はうも知れねば、何をいつても對手が惡い。私も勘辨

するから母様も。今日の所は勘辨して、短氣なことしておくれでない。あゝ頭痛がしてならぬ、と頭顱を撫でゝ、卽功紙は無かと聞けば、母親はなほ敎圄暴く、これから行つて卽功紙を買うて來ると、立出づるを引留めて、嘘だ〱。やつぱり吉の家へ何か言ひに行くお前の心。後來の災難を念つたら、何卒このまゝ了簡して、と手を放さぬに、悍立つ母親も我を折りて、えゝ腹が立つ。お前がそんなに留めぬなら、あの野郎唯措く奴では無い、と切齒をして悔しがる。佐の市も心の中の無念さを推隱して、撲れても毆かれても、千束屋樣の爲と思へば、少しも悔しいことは無い。武人ならば此も忠義の爲だ、と笑うて去まひぬ。

母親は醫者に診てもらうたらばと謂へど、然ほどの事にあらねばと、火鉢の抽斗に在合せの卽功紙を貼りつけ、直に癒ると、枕を出して横になりぬ。

お民は用ありて出ることは其方退にして、まめやかに介抱すれば、もと

より輕き怪我とて、日沒には頭痛も大方に薄らぎ、毆れし跡の瘤の疼痛も微になりけり。

はや仕事に出づる時刻になれば、佐の市は起上りて、千束屋へといふを母親は切に止めて、惰けて休むといふにあらねば、少しも義理の濟まぬことはあらじ。よう分疏いひに、一走行て來る間留守してと、醜からぬほどに着更へて、何か旨いものをお土産に買つて來てやろ、とお民は尻輕に出でゝ行きぬ。

佐の市は頭痛に惱まされて睡りも得ず、獨り寂しく待詫びたりしが、やがて門の戸のがたつくに嬉しく、母樣かと寢床を這出せば、お民は閾を跨ぎながら、大變に長話をして、十時の鳴つたのに吃驚して、大急ぎで歸つて來た。熱い〳〵と、佐の市の枕上に坐れば、おや何かお土産を買つて來たねと、風呂敷包を置く音にそれと曉れば、買つて來たのでは無い、千束屋樣からお前へのお見舞。それ〳〵かういふ物と、取出す重の

内は、品々の料理、一々何々と言聞かすれば、其隠見豆が少し食べたいと謂ふ。他は饗包が御菓子、二袋は干菓子に煎餅類。お久米様からは不目といふこと。

千束屋夫婦は話上手のお民に佐の市が災難の始末を聽されて、人の口は善惡なく、痕跡無き噂も、立ちたるからは是非無けれど、娘に傷つきては、と銀藏は腹立ち、女房は氣を揉めども、敵手無ければ面々むづかしき顏して、心々に他を恨むやら、我を悔むやら。お久米は露ほども身に覺のあるにはあらねど、餘の事ならぬ取沙汰。これ女にして慙づべきの第一と、濡衣ながら有繫に面目無くて、在るにもあられぬ想ひなり。店の者もしげ〳〵と顏見て通り、婢等は陰にて叩くなど、皆それゆゑにかと心に咎められて、用ありても居間の外へは出難く、一日垂籠めてのみゐたりし夕、はや怪我は癒りたるか、然れども何處やら平素よりは委れたる風情にて、佐の市の入來りぬ。

銀藏夫婦は見るよりの歡喜、殊に內儀が歡待ぶりの挨拶は、心から可懷

げなりし。奥間より嬉々お久米も出で來りて、待詫びたりし人に會ひたらむやうに、まあ佐の市樣と、後は語無くて面を瞶るのみ。

銀藏はまづ怪我はと訊ぬる。內儀は負傷を見せよと擦寄れば、同じやうにお久米も擦寄る。此でござりまするると見せ榮のする大怪我にもあらず。當座は割れむばかりに頭痛もせしが、今は紀念の瘤も退きかけて、否もう大概癒りまして、と佐の市は我と撫で〱頭顱を出せば、旋毛のあたりに小さき兀の、燈に照らさるゝ陰に隆起したるを、內儀に撫でられて顏を顰め、血の出ませぬ割には痛いものでござりますと嘲つを、皆に慰められて、それより髮結床の一條に話移りて後、烏滸がましいこと申すやうではござりまするが、此後どのやうな御方がお出でなされましても、お久米樣をお座敷へお出しあそばさぬが宜しうござりまする。世間といふものは、何の彼のと、いやもう懊惱いもので、どんな言をいひふらすか、知れたものではござりませぬ、と按摩風情に意見されて、口利の銀

藏も一言無く、外ならぬ知事樣が懇切の御所望と、其晩勃然とせし内儀はなほ可愧く、妙齢の娘持てる親は、何につけても苦勞の絶えぬものと、そんな話に紛らして去まひぬ。

佐の市はこれから仕事にといふを、銀藏は、最一晩今夜も保養するがよかろ。我は此から酒だ、鮨でも馳走せうから、ゆるりと話去て行きやれと謂へば、はや内儀は婢を呼びて、玉鮨へ走らせけり。

もとより否にあらねば、有難く禮を述べて座に着けば、内儀が彼をといふにお久米は立ちて、奥間より縫ひかけの浴衣地を持來れば、お見舞といふもお禮といふも異なものなれど、久米からお前へ此浴衣を上げうとて、今仕立最中。明後日は出來やうと、佐の市に持すれば、へい、あの此お浴衣を。どうもそれは恐入りまする、と先づ戴きて、撫でつ、摩りつ悦喜の顏色。

其は東京染で、白地に淺黄の籃目、ちと意氣過ぎるか知らねど、浴衣な

れば少しは意氣なのも可ろと、此にしたと内儀が謂へば、佐の市は意氣といふを無上に喜び、お久米が手づからの裁縫と聞きて、無上の上の喜悦に堪へぬ折から、鮨は好物の鮪澤山、これも喜びの一つぞかし。

（七）

人の噂も七十五日とやら、當座は珍しがりて、此處彼處に其沙汰もありしが、千束屋夫婦が心に懸けしほどにも無くて、一月も過ぎて後は、誰言ふものもあらずなりぬ。

之に懲りて、妙齢の娘を何日まで未婚おくべきにあらず。まして客商賣の家には井戸側に茶碗、危いことゝ、此頃より縁を急ぐ氣になりて、夫婦暇あればその事の内談のみ。

お久米は今の渡世を好ましからず、官員などの内方が心の望にて、かねて母親までかくと打明けたるを、いつか銀藏も承知にて、千束屋の家督には我婿を直して此家業を繼がせなば、其にて先祖への義理は立つといふもの。久米は性情向上に生れつきたれば、此商賣に肌の合はぬも道理なり。さりとて好聟あらばまた推附にする方もあれ、家の爲ともなるべ

き婿を望むは、日中に大金を拾はむとする如く、廻合にて手に入らぬには限らねど、まづは例の無きことに諦むるが無事なるべし。適れ家を興すべき器量あらむ人物、誰か我女房に一目置きて、寝酒も酔ふほどは飲まれぬ身上を有難がるべき。それも徴兵除の往時は知らぬ事何に掛けても一器量無き愚太郎、次男に生れたる身の置所に窮りて、人の家へ駈込み、ある金を珍しく、闇雲に費ひ捨て、やがて老舗も素封も潰るゝは、婿か但しは三代目の世に限れり。

それよりは當人の望もあれば、然るべき方を見立てゝ嫁にやるが上分別と、夫婦談合して、事は其に極まりぬ。

然れども宇都宮の千束屋が一人娘、誰方へ縁附きたりと謂はれて、可愧き合手へは遣りがたし。なるほど遣つた理、もらつた理と、何方も退けぬやうな處をと念懸くれば、あるは提灯に釣鐘、杖に杉箸、さりとは似合しき縁無く、秋も過ぎて時雨月、此月は出雲の大社に神々の會まり給

ひて、世間の縁を結ばるゝといへば、夫婦は心に頼もしく思ふなるべし愛に容色を望にて嫁を求むる方あり。縣會議員築居喜六の長男、喜一郎といひて今年二十六になりぬ。

父が立てたる肥料商會の支配するも名のみにはあらず。世間普通の素封家の悴の如く、家に在餘る金錢に心を縦して、自助の精神無く、一圓の稼の路の心得も無くて、百五十圓の金時計をさげ、人先に世留の單衣着て、新形の帽子を冠り、二十二三の頃から廢學して、無上に實業々々と惰けてゐる輩と違ひ、世事に賢く、學問もありて、商業は機敏にやつてのけ、交際も上手にして、かゝるを明治年間の息子氣質とも謂ひつべき爲人。父親は殊外頼みにして、萬般に次官といふところを勤めさせ、商會大方一手に委せて少しも懸念無く、この息子大當り、喜六樣の若き頃はあの半分、と親類一門の譽物なり。

かゝれば親も尋常の部屋住にして捨てゝは措かれず、此の程母屋から廊

下つゞきの別座舖を風雅に新築して、普請雜作に手を盡したること本宅に越えたり。

これ不日嫁もらふべき支度、と衆の噂せしに違はず、今年の内に良縁あらむことを願ひて、八方を搜せば、かの娘鑑に東の關にすわりたる肥料問屋伊豆定の娘、お村はと推擧するものあり。

彼ならばと、委しき樣子を搜らせしに、是は極々の秘密、未だ世間に知るものもあらず、店の治三郎と出來合ひて、はや疵物との注進なり。

外には千束屋のお久米、容色は少しく下れど、人の妻としては言分無き娘形なるが、惜きことには家督。聞合せるまでも無しと除物にして、其外宇都宮中の娘らしき娘の身元賤しからぬは、漏無く穿鑿せしに皆思はしからず。

此上は東京にてと取引先を首として、それ〴〵に手分、人賴、殘る方もあらざりしが、嫁を搜すは茸狩に同じく、大方鼻先に在るべきをも知ら

で過ぎながら、さて無いものと飽みたる折から、お久米が事を耳に入れて、彼はと喜一郎の思はくを聞けば、兎も角もといふ。念の爲いろ〳〵調べしに、露ばかりも否なる處無し。但疊といふは、人の噂の秘書官一條と、根掘り葉掘りて、確なる筋より其事は無根と知れ、此上に分別は入らず、善は急げと、然るべき人して言入るれば、千束屋方は願ひても無き仕合と、一も二も無く承知して、結ばる縁は捗ること早く、見合の日も粗定りて、媒妁は大町の材木問屋吉野屋與兵衛なれば、この縁組の立派さ。いよ〳〵其と極らば、土地の大評判なるべし。

結納の受與あるまでは、内證と伏せたる事も、何處よりか泄れけむ、はや世間に沙汰するものありて、お民は出先にて不圖聞込みしを、好土產のつもりにて佐の市に語りけるに、また例の風聞とて信にせず。毎日出入してゐる私の耳にさへ入らぬものが、緣も無い餘所から知るゝといふことはあるまい。それに又お久米樣は一人娘。あの人が他へ片附いたら、

千束屋樣の跡を誰が取る。考へても知れた虚聞、虚聞さ〳〵と獨り虚聞にしてしまへど、母親はいかな閉口まず。理屈を謂へばそんなものだが、千束屋樣に又どういふ了簡があつて、嫁にやるゝか知れぬものを、お前のやうに獨合點することも無い。私も極確な處から聞いて來たのゆゑ、萬更の虚聞とは思はれぬと謂へば、佐の市は不機嫌にて、それでも唯一人の娘を餘所へ遣つては、あの千束屋といふ立派な名跡を立てるものが無いではないか。理屈の分つたあの旦那が、そんな無法な事をなさらう道理が無い。お久米樣は家督娘だといふに、と疊を拍きて諭し貌に言へば、お民は口數多き女子、そのまゝに默りかねて、家督娘は私だとて知つてゐる。それゆゑ千束屋樣にどういふ了簡があつて、と後は言はせず。あるも無いもありはしない、と言はむとすれば母親は遮りて、あるか無いか分るものかね、お前が千束屋樣の旦那ではあるまいしと謂へば。それは大概理屈で分ります。其理屈々々が間違つてゐる。一人娘だから

嫁にはやられぬといふ御規則も無ければ、了簡次第で隨分嫁にもやりさうなもの。遣つたが奈何した、惡いかえと腹立聲。南無三、よしなき事を爭ひて、母の機嫌を傷ねたるかと、佐の市は遽に氣を變へて呵々と笑ひ、何の事だ、宛然内の娘でも嫁にやるやうな。母樣は眞面目になつて可笑い、と頻りに笑へば、お民も心着きて、眞個に馬鹿々々しい。嫁にやらうと、遣るまいとは先方の勝手、關繋無き他人が大きにお世話、お茶でも煎れて飲まうよと、粉炭淩ひこみて鐵瓶の下を吹立つれば、佐の市は濟まぬ顔して火鉢の縁を撫でゝ、時ならぬ時分に、はてなあと呻き出せば、母親ば驚きて覗むる佐の市の眉の、愁はしげに顰めるこそ、はてなあ！

お久米が嫁入とは佐の市の腑に落ちず。大方先頃の噂と同じく、例の人の口の出放題とも想ひしが、かの秘書官の伽せしとの取沙汰も、形ありての影とやら、なるほど邪推もされさうな事實はありしを思へば、今度

の噂とても、少しは臭きことのあらむも知れず。兎角は實否を糺さむと、其夜千束屋へ行きて、此度はお久米樣もお目出度事でござりまする、と然り氣無く祝儀を述ぶれば、內儀は不思議がりて、其を誰から聞かれたと、想の外の辭に佐の市は吃驚したる餘り、鉤をかけたることは忘れて、それでは眞實の事でござりましたか。他からちらと承はりましたといふ語の、甚麼なるゆゑにか銳く胸に徹へて、お久米は心の底に何とやらむ可怖かりき。なほ佐の市はお久米樣お樂みでござりまする、と冗談らしう謂ひながら世事笑せる顏色、平生見るとは變りて、その物凄さ、襟元に風の浸む心地して、お久米は思はず母親に寄添ひぬ。

なるほどさういふ話の無いでもなけれど、聢としたる事ならねば、まだ家內のものにも知らさぬに、他からとは何處からと訊ぬれば、佐の市は嘲むが如く打笑みて、何方から聞いて參りましたやら、先刻お袋が歸りまして、かういふ噂があるが、實の事であらうかと申しましたゆゑ、そ

れは不思議な。一向そんな御樣子も無ければ虚聞であろ。一人子のお久米樣なれば、他へおやりなさるゝことは無い理と、このやうに私は申しておきましたが、それでは矢張實の事でござりましたかと呆るれば、內儀は娘と面を見合せ、何處から漏れたかと、是も呆れたる氣色なりしが實は未だ行先も極らぬほどの事情なれば、と謂はせも果てず、佐の市はにや／＼と笑ひかけて、あれ未だ／＼お隱しなされまする。肥料商會の筑居樣の若旦那。御媒妁は大町の吉野樣と、それまで存じてをりまするにと、底を叩きて振ひて見せらるゝほどに謂れて、內儀も我を折り、よう其まで知つてゐると、呆れもえかねてお久米も共に笑へば、佐の市も義理ゆゑの苦笑して、お見合も御近日のやうに承はりましたが、何日頃でござりますると聞けば、それこそ未だ極らぬと謂へど、佐の市は氣を廻して、亦お隱しなされまするかと可怨げに謂ふ。

折から銀藏の還りければ、久米が緣談をはや佐の市が知つてゐて、どう

にも隠し畢せず、今も大笑のところと內儀が語れば、銀藏は頷きて、佐の市のお袋は宇都宮の地廻、警察の知らぬ事でも、彼に聞けば知らぬといふこと無ければ、その理の事。然し最早世間で噂してゐるか。これだもの、惡事は出來ぬ世界。今に佐の市、お前の情婦のあることも知れるであらうから、氣を着けたがいゝと一同哄と笑ふ間に佐の市は、私の情婦はなか〳〵知れることではござりませぬ、と眞面目なるを內儀は可笑がりて、おや感心な、お前も情婦があるのかと弄べば、ます〳〵眞顏になりて、これでも一人ござりますると謂ふ。ついぞ無く、今夜に限りて飄化た言をいふとて內儀は訝りぬ。お久米は始終佐の市の樣子を視てのみ、辭をも交さゞりき。

佐の市は茫然として千束屋を出でぬ。其態は大晦日に金還せし人の往所無く、生死二者の分別に彷徨ひたらむ如く、淚を出さぬ泣顏も哀れに、やう〳〵暇乞せし聲音の悲しさ、歸りて後までも耳の底に殘りて、お久

米は枕に就けども眠られず、心に懸る佐の市が變りし樣子を念ふに、その理由は少しも分らず、不審の積る間に、明白に其とも無く、我身に罪のあらむやうに覺えて、異しう心快からぬを、そんな理は無けれども、今夜に限りてどうしたものか、口も碌にきかなんだのは私が惡い。不具者といふものは直に僻見を出して、些少の事をも氣に懸けるとやら。其中にも明の失いものは不便も一入なれば、何かに就けて優しう劬つてやれ、と平素から父樣のおつしやりつけ。それゆゑに氣を惡くして、あんな顔色して歸つた理ではあるまいけれど、明日の晩は機嫌好く話して、平生のやうに嬉しがらせてやりませう。十何年のあひだ出入して、顔を見ぬ日は無い佐の市なれど、私も近々に片附いて了まへば、今までのやうに會ふこともあるまい。幼稚馴染は萬更の他人とも思はれぬに、稟性素直の上に格別の主思ひ。少しも憎いところはないものを、と思ひつゝ寢ればや夢に佐の市は、寢間の窻より覗きこみて、お久米樣おめでたう

ござります。へゝへと三聲の笑聲肝頭に徹へて凄じく、聲を立てむとすれば吭塞がり、夜衣引被がむとすれば釘附のごとく、顏に袖して俯けば、佐の市は窻より入らむとして、下駄の齒に蔀を踏辷らす音、がり〳〵と響くと思へば、參りましたよといふ聲耳を貫きて、はや枕上に坐りたり。お久米は在るにも在られず身を竦むれば、佐の市は詰寄せて、貴孃はいよ〳〵築居樣へお出でなさるのでござりまするか。もし、それではお久米樣、此起請が反古になりませう、と懷中より取出せしは、此夏やりし籃目の浴衣に血染の夫婦約束。これが反古にと眼前に突着けられ、今にも執殺されむかと、可怖きこと限無し。

佐の市は浴衣を抱緊めて、ほろ〳〵と涙を流し、怨言の數々搔口說きて、この約束が誠ならば、築居樣との緣は破談にして、この佐の市に添うて下され。返事をなさらぬは不得心か。それでは此起請を何として下さる。あゝこれほど謂うても緘默なのは、不承知に相違無い。貴孃に見捨てら

れては生効の無い、佐の市、長らへてゐれば、言替はした女の他へ適くに、祝の表を持て來ねばならぬ。いつそ死なう。死ぬと覺悟した。其代り此恨は忘れぬと、留むるを振放して、飛鳥の如く窓より躍出づるを、追蒐けむとする後より、お久米と呼ばれて振向けば、意氣なる洋服扮裝は築居喜一郎、慚かしやと思ひながら挨拶すれば、男も山高の帽子を脱るに剃立の坊主頭！　それはと見るに顔は佐の市。餘りの事に仰天して、僵るゝ拍子に夢は覺めけり。

盗汗は寢衣を浸して、心の動氣は今も止まず。大息吐きて四邊を見廻せば、そこより佐の市が入りし窓の戸に風觸れて、棚に鼠の物噬むも、節を辷らす下駄の音に通ひて、また來るかと可恐く、それなりに眼は冴えて、夢とは謂ひながら、さりとは痕跡も無き夫婦約束。血起請といふこそなほ愚かしく、否味らしき心は露無き佐の市が、あんな事を、と合點行かぬ首尾をさま〴〵考ふれど、固より夢、夢、實在には思ひ合さるゝ

事も無し。

昨夜の夢に窓より覗きし佐の市の面影、朝になりても眼前にちらつきて、憶ひ出せば今でも可怖き不思議を、お久米は母に語らむとせしが、外の事とは違ひて、夢とは雖ど、嫁入前の身に取りては、可忌き怪談と、心一つに納めて人には知らさゞりき。

今日も午後より媒妁來りて、奥座敷に二時間ばかり相談ありて、見合はいよ〳〵明後日、吉野屋の寮にてと定りたれば、彼此其日の事ども物語る間に、日もはや入相の鐘に、泊を急ぐ旅人、店は客足繁く、階子、廊下の轟、十二時頃まで少時も絶間はあらず。

神棚に燈明供へて、父親が晩酌の膳ごしらへ、この二つをお久米の役にして、今果てしところへ、障子の外より、へい今晩はお寒うござりまするといふ聲。お久米は悚然襟元寒く、折も折とて誰も居合さゞるに一入物凄く、遽に聲の出ぬまゝに返事もせざりければ、そろりと障子を開け

て、少しく羸れて蒼白たる顔を差入れ、内の樣子を窺ふ氣色は、唯其ままの夢の面影。昨夜は窻から、今夜は廊下から、今にも座敷へ踏入るかと、可怖さは、是も夢かと疑はしかりき。

返事するもの無かりければ、留守とおもひて内へは入らで行きぬ。お久米は胸を撫下して、竊と立ちて障子を開け、たしかに後影見送りて火鉢の前に復れば、其跡ながら氣味惡く、頻りに前後を見廻せば、格別氣の退ける北窻は、生憎風あたり絶えずして、外より人の推開けむとする音にも似たり。

心を鎭めて熟思へば、何が佐の市の可怖き。昨夜の事は夢にして、夢の不思議は羽翼もあらぬに天を翔るなど、さま〴〵想設けぬことを見れば、固より愚にもつかぬ夢と知りつゝ、其を根に持ちて、あれほど稟性良き佐の市を、理由無く、疎まむこと、然りとは我身ながら淺ましき。歸りに寄らば、例に變らず待遇して、歡ぶ顔を見るならば、此後またとはかう

いふ心も起るまいと、茶道具取揃へて、菓子鉢にカステラの山盛、殘餘は土産に持たせてとまで心構して、程無く親子巨燵の團居に、明後日の話出でゝ、それからづつと後の事まで。此縁はや取極りたらむやうに、夫婦は喜びの眉を開き、そのつもりで、どれ前祝、と銀藏の膳に向ふ折から、へい今晩は、と入來るは佐の市なり。

夫婦は不相變機嫌好くして遇へど、佐の市は玉火屋の洋燈の明るきに、寂き姿影の如く、見咎められて、大分色澤も惡く、何處とも無く羸れたる具合は病氣か、と銀藏に問はれて、何ともございませぬと想氣無き挨拶。然りとは健れぬ處ありげに見えぬ。

此處にかうしてゐるが第一の樂み、といふ佐の市の、今夜はさるべき樣子も無く、是といふほどの話もせずに暇乞するを、例より早いと留めても可かず、お久米は菓子を褁む間にはや立出づる。

喚べども聞えぬ風して行くを追懸け、廊下にて引住め、是を母樣にと、

紙に包みたるを出せば、惡遠慮して手にだに觸れず。強ひて取らせむとすれば、取らじと爭ふ却含にばったり墮し、これはと謂ひしまゝにて、構はず店口へ急ぎぬ。

これ遣ろと頭上に草履載せられても、千束屋親子の業ならば、有難うござりますと戴きもすべき、平素の佐の市に似ず、お久米が深切を無にして、わざ〳〵持て來てくれし菓子を墮して、拾ひもせぬのみか、詫一言謂はで、ついと出で行きし仕打のふてくされたるに、憎いとも、氣障とも、何とも此とも、お久米は唯呆れて、紙ばかり手に殘り、据眼になりて姑く佐の市の後姿を眺めたりしが、あゝ否だと眉を顰めて、菓子を拾ふより早く障子の内へ走りこみぬ。

佐の市は千束屋を出づれば、考事して疎かになれる足元、小石に躓きて僵れかゝり、突支へたる杖を其まゝ、大地に突立て〳〵、もう駄目だと繰返しては首を掉るさま、愜はぬ望に未練ある心を、我と窘めむとする

に似たり。

更行く夜風霜を含みて鼻に痛く、杖持つ手頭は性無く氷結きて、行潦の薄氷かさ／＼と踏割るゝ音。毛織羅紗の味噌漉に坊主頭を裹みて、白綿ネルを領に巻附け、此寒さの中を格別急ぐ氣色も無く、それでも好心地だつた、突返してやる拍子にカステラは悉皆墮ちてしまつた。誰があんな物を貰ふものか。否に人の機嫌なんぞを取りやがつて、と呟きて後は大息まじりに、駄目だ／＼と、また鬱勃肚に杖突立て、一昨日よりは昨夜、昨夜よりは今夜と、次第に亂れたる心になりて歸りぬ。

家に入れば母は介抱に睡きを厭はず、暖かき寢衣を着せて、安火したる床の内に入れ、そこまで持運ぶ膳の上には、好物とて鍋燒温飩の、あつき情を念ふにつけて、餘所での不興を内で腹立ちては、濟まぬことゝ知りながら、つい辭に稜も立つを、此頃疳の起りたることゝ、母親は寄らず觸らず、兎角は毒にならぬ雜談などしかけて、食事を濟して寢るまで

の御意を取りけるに、いつしか千束屋の噂になれば、佐の市は悔しげに舌鼓して、あのお久米樣のやうな人は無いと謂ふ。此七八年讀めとほせし人を、一夜の内に難しはじめたるも可笑く、それは又何故にと聞けば、今度築居へ嫁に適くとなつてから、我は歷とした奥樣だ。按摩風情に相識は無い、と謂はぬばかりの大威張が、鼻の頭にぶら〱と、小面の憎いほど高く宿つて、此三四日といふものは、相對に坐つてゐながら、挨拶も碌にせず。それは固より主人筋の娘なれば、朋友同樣にもなるまいから、言葉を懸けてくれぬのも可けれど、今迄さうもせずにゐて、急に人を眼下に見て、お大名が乞食にでも會つたやうに、仕打を變へてあのやうに爲れるのが口惜い。何もそれまでに爲ずとも可さゝうなものと思ふが、母樣は何と思ふと問れて、我子の言ふことながら腑に落ちず。あの方に限つて、そのやうな事は怪我にも無い理。それは全くお前の僻見であらう。氣分の惡い折には、お前だとて隨分物

を言はぬこともあれば、大方お久米樣もそんな事にて、冴々ならぬのを、お前が氣を廻したに違ひ無いといへど、他の辭は能くも聽かず、築居へ嫁くのが大自慢で、玉の輿へでも載つた氣であろ。好玉輿だ。築居の奥樣にお詞を懸けて貰はずとも、この佐の市は少しも窮りませぬと、鼻の頭でふゝと哂へば、そのやうな陰言いひて、もし先樣に聞えたら、大體の御腹立ではあるまいに、と母親は懸念すれど、疳の起りたる最中なれば、言過しては此上に機嫌を損ぜむと、加減して得心のなるやうに意見すれば、有繫に從順しう、固より此場ぎりの話、またとは口にも出すまい、千束屋樣へ行きても、そんな擧動は見せまいと謂ふ。口にも出さず、擧動にも見せぬだけでは濟まぬ、心にも念はぬがよい。十五の年から今にお世話になる大事の顧客樣のこと、疎かに思うたら罰があたらう、と段々謂聞かせければ、其をも合點したる樣子に、お民は安堵して眠に就きぬ。

母親は知らぬ事、佐の市が不興なる顔も、腹立てる様子も、お久米が疎に口もきかざりしゆゑにはあらず。其實は別に深き仔細あり。

譬へば吝嗇者の金銀貨を椽の下の土深く埋めおきて、人には言はず語らず、其上の疊に寢腹這ひて、錢無き顔はすれど、土中に何百圓と、取出しては見ねど心に樂しく、これぞ命から二番目と恃める寶。その後掘起せば、瓶はあれども實は虚になりたる、その驚駭と、失望と、悲歎と、憤恨も、なか〳〵逮ぶべくもあらざるは、佐の市が心の中なり。

眼に物見ねば、それほどは常人より樂みの缺けたる廢人が、之をと念懸けたる執着は幾許ぞや。

燈火の無き夜の座敷に起きてゐて、一時間も堪へらるゝものにはあらざるを、盲人は一生花の色を識らず、日の影を見ず、不便は最愛なる親の顔さへ知らず、罪無くして土牢の生埋。これに生れつきたればこそ、世界は闇く、音ばかりして、形のみあるものと覺えて、それなりに生きて

もをれ、人の所業にてかゝる目に遭ひ、一生を闇黒に送るに運極らば、いかに〔之〕の字嫌の人も、舌咬切りて自殺すべし。盲目になりとも此世に生れては、それ〴〵に心牽さるゝ絆ありて、我と縊れて死ぬ事もならず。一年向島の土手を若き盲人三人杖をならべて、花見の群集を分けゆくことありしに、人々嘲りて、按摩の花不見と口々に囃せしが、然りとは哀深く、心ある人醉を醒して、花の露ならぬ涙に袖を沾せし。

佐の市が面影の羸れたるも、色の蒼白たるも、憤れて辭氣に稜立つも、お久米が志を投出せしも、母に向ひて恩人を誣ひしも、饑ゑたるものゝ食の如く、其外には何の願も望もあらぬ、唯一の樂みを奪はれたる、失望と悲歎と憤恨とに攪亂されたる心の業なるべし。

晝間は兀然と壁に向ひ、首を俛れて一時思に沈み、忽ち心着きて勃起と面を擧げ、駄目だ〳〵と、やゝ大聲に呟くかと見れば俯きて、少焉あり

て横樣に撞と倒れ、疊を蹴りて苦しげに呻き、旋て鎮りてまた蹶起き、壁に靠れて前のごとく物思ふ。

日暮より千束屋へ仕事に出づることは平生に變らねど、主人の居間にては口數寡く、笑ふこと無く、辭など發揮とせず、始終思案したる樣子。今までとは違ひて、此頃は盲人染みて來たやうな、と内儀が陰言。佐の市はおとなしけれど陰氣ならず、年齢よりは若々しくて仇無く、苦勞無げなる所をこそ、人には好かれしが。

（八）

吉野屋の寮にての見合首尾好く、双方に些の異存無く、其月の末に結納の受授あり。

それと事極れば、祝賀の表人に後れてはならじと、紅白の眞綿一臺、出入の按摩からにしては分に過ぎたれど、小金貯めたるも、まさかの時の用意、義理は缺されぬ恩人への寸志と、お民は大奮發にて、此品持ちて不取敢千束屋へ出懸けぬ。

銀藏夫婦は氣毒がりて、眼下から過分の物貰ふこと少しも嬉しからず。志は松の葉でも、竹の端でも、愍い外見張りて血の出しことゝ思へば、迷惑して眉を顰むる本意を知らず、一番驚かしたのを、お民は腹の中で手柄にして、お久米も氣毒さの餘り、此品を嬉しき顏すれば、いよ〳〵鼻高にて、例の多辯の出るまゝに長物語して歸りぬ。

家には佐の市が、火の氣の薄き炬燵に身を埋めて、櫓を枕にうつら〱と、何爲るも懶き氣色にて、寢たるにもあらず、起きたるにもあらず。元氣無き聲して、今お歸りかと謂へば、お民は彼品を千束屋にて歡ばれし始末を語りて、お久米の樣子をも悉しう聞かせ、私の推量どほりお前の僻見に違ひ無い。私は始めから、あの娘子はそんな人では無いと謂はぬことか。七度搜して人を疑へとは、噫好く言つたものと、窘むるやうに謂はれて、佐の市は徐に顏を擧げ、祝賀の品をもらひながら、借金取が來たやうな顏も出來まい。それは誰にしても人情さ、と手も無く言放して、また俯きけり。

小面の憎き言草とは思へど、氣分の惡さに稜々〱してゐる故、とお民は堪忍して、何も言はで措きぬ。

佐の市は其夜千束屋へ行けば、夫婦を始めお久米にも祝もの〻禮を謂はれて、此方からも一通り祝儀の口上を謂はねばならず。改りて其由を抒

ぶれば、夫婦は紅白の眞綿よりも懽びて、おつつけお前の嫁は我が世話せうと、かねてお袋へも話しておいたれば、來年の春頃にはと銀藏が辭を、打消して、有難うござりますが、私は女房は入りませぬ。かうして獨身が却て氣樂ゆゑ、一生持ちませぬつもりでござりますと謂へば、それでも曩日お前は情婦があるといつたではないか。その女でも女房に持つ氣は無いのか、と内儀に笑はれて、これは思も懸けず、佐の市は苦笑して、彼いほんの冗談でござります。私のやうな不具者は、いくら此方で思ひましても、誰も嫁に來てくれる女はござりませぬ。いかに眼が見えませぬとて、隻眼だの鼻缺、痣のあるのや大痘痕は、やつぱり人並に嬉しうはござりませぬ。然ればと申して、大勢の騒ぐやうな美しいお方は、先樣が眞平でございましよ。生意氣なことを申すやうではござりまするが、それくらゐならば持たぬが勝と、一生獨身に極めました、と實は面に表はれて、不便の心根聞くに愁きはお久米なり。

いつぞやの夢に思合せて、今日は晝の程祝物を持來り、今また此愚痴、一々胸に徹へて、もしやと思ふほど可恐く、夢以後は佐の市の顏見る度に異な心地して、物言ふも厭はしければ、側に居るのも不氣味なれど、何故やら其理は少しも識れず、大方氣の迷からと思へば、佐の市の擧動に異しき廉の無きにもあらざらむやうに見えて、お久米が此頃の胸の裏は、嬉しさと、氣遣しさと、異しさと、可怖しさの、四つに惱みて、千筋に亂るゝ。

（九）

十二月十日、此日は吉日とて輿入に定まりぬ。兩家、諸親類、出入中昨夜の空を氣遣ひしに、拂曉よりの初雪、これも折から目出度、と緣起を祝ひて暮を待つ。やう〳〵時刻になれば、千束屋の店頭は送りのもの、提灯星の如く、番傘さしつらねて勢揃ひの景氣に、此嫁入見物と、傳馬町の賑ひ夜とも覺えず。道筋の兩側に群集して雪を蹴散らし、雨で無くて仕合と、頼まれもせぬに出て來て、然りとは迷惑さうな言草なり。

急げども手間取る嫁御寮の支度、土地の風俗とて、むかしながらの裲襠姿、島田に角帽子。介添に扶けられて車に乘れば、門外の俄に動搖めくに心躍りて、如何はせむと思ふ間に幌を下しければ、雲めが月を隱したと見物は名殘惜く、蹤からぞろ〳〵尾いて行く。

お久米が此途上の心の中は、何に譬へむやうもあらず。總身焚ゆらむ如

く、わく〳〵と上氣して、殆ど前後の辨へ無く、唯今宵の早く過ぎよと祈るばかりなりし。

池上橋を渡る比、第一銀行の角より按摩の流し笛の節悲しく聞えしに、氷などの走るらむやうに、全身忽ち冷えわたりて、今までの逆上も引下げられ、毛髪は彌竪ち、顏色も變りたらむ、と我と其思ありし。

築居方より相生町まで出迎の人數、定紋の提灯降積む雪を照して、景氣よく待受けたるに、此方の同勢合せて七十人ばかり、前後に附添ひて、花々しく築居の門に乘込みけり。

善美心を驚かす座敷の結構、其にも劣らず獻立の見事さ。萬事に心を盡したるに、お久米は我荷物の此等に合せて品下りたるを慙かしく、よしや我身までも、かゝる大家には應はぬか、と今更心元無さに、いとゞ身を縮めて、晝より眩き燈影を曠がましく、手持無沙汰に上席に坐れり。

人は見て然は思はじ。喜一郎と並べて今樣の雛は是。振袖の裲襠、空色

地に櫻と檜扇の總模様、下は朱鷺色縮緬の無垢に、白を二枚襲ねて、緋の紋縮緬の長襦袢、紅葉に置く霜の羽二重足袋、帶は金入の厚板、厚總に雪形の織紋。練絹の角帽子を懸けて、御守殿風に厚化粧したる、宛然繪にかける何姫の如く、面影常に變りて、又更に可愛くも妖艶なり。築居夫婦は一座の親類等へ内心大自慢にて、息子は喜一郎のやうなもの、嫁はまた此通り、と歡喜さに込上げられて、特に女親はきよと〳〵と、何も手には着かざりし。

席は一先十時に開きて、彼方にはなほ笑ひさゞめく聲聞きながら、離座敷に床盃の式も濟みて、窗打つ雪の寂しく、鐘は陰々として物凄き閨の中は、可羞ながら男を力草。話しかけられても捗々しう應答はならねど、互に今宵は睡りかねて、違棚の飾時計しをらしき音に一聲鳴る比、お久米は大名縞の絲織の寢卷に緋縮緬の扱帶して、肌寒げに起出で、枕頭なる手燭點して、素足に廊下を冷たく、用足して手水口の切戸を開くれば、

庭は雪明に築山の風情をかしく、竹は臥れ、梅は埋もれて、思の外なる雪になりぬ。

まだ歇むべき氣色は無くて、ちら〳〵顔に降りかゝるより、衿元に浸む風を寒く、戸を立てむとして、不圖聞着けたる塀外の人聲。不氣味ながら耳を澄せば、一方は聲高く、一方は低く、談柄は定かに聞取れざれど、此夜深に立話、何とも合點ゆかぬほど可怖く、音せぬやうに戸鎖して洞房に逃還り、云々と此由を喜一郎に告れば、勃起とおきて帶締めなほし、再び手水口を開けて、聽耳立つる後に、お久米は恐さと寒さに胴顫して佇みけり。

喜一郎は雪をも厭はず、首差出して聽けば、怪しき者を人の咎めて、推問答すると覺しけれど、隔りたれば能くも聞えず。

お久米は忍音に何でござりませうと問へば、喜一郎は半は戸外に氣を奪はれて、何だか、と仍少焉耳を傾けたりしが、見て來ると礑と戸を立つ

る。
あれ、およし遊ばせ、とお久米は危みて止めても可かず、頭から外套引被り、椽の戸推開けて庭に下立てば、雪は足首を沒めて路も見え分かず。お危うござりますと、お久米は戸の陰より顏を出して、風に消されし手燭を持てるまゝ、夫の足場を氣遣ひつゝ、奇體なる後姿を覵もりけるが、喜一郎はざく〳〵大股に踏込みて、勢好く築山の麓に着きたる比、木根に躓きて一辷、おっと來たと、手近の柳の枝に縋りしに、脆くも折れて横倒に、石燈籠を枕にすてんころり。
お久米は我を忘れて庭に飛下りけるを、喜一郎は起上りながら、來るなと手眞似に制して、何處も傷めず、のそ〳〵と植込の間に分入りて、塀際に身を寄すれば、外の問答は手に取るまでに聞えたり。
九州訛の濁聲嚴めしげに、今頃何用あるかと詰問すれば、問はるゝ方は、いかにも驚き戰ける聲音にて、つい此近邊まで召ばれまして、宅へ歸る

道が判らなくなりましたれど、尋ねたくも人は通らず、起きてゐる家はござりませず、途方に暮れてをりましたと答ふれど、訊ぬる方は執念く、先刻から彼にて見てゐれば、此家の塀の前ばかり徘徊して、一向路を求むる樣子の無きは、貴樣の申立と相違するぞ。警察署へ拘引すべきなれど、今申せし住所に詐無くば、これより同道すべしとあるに、嫌疑者は恐嬉しく、へいへい、少しも怪しいものではござりませぬ。左樣なれば恐入りまするが御伴れ下さいましと、はや立去らむ樣子なるに、一人は巡査、咎められたるは何奴かと、喜一郎はやう〳〵節孔を見着けて覗けば、黑き羽織に白き衿卷、杖突きてとぼ〳〵行くは盲人なり。

先立つ巡査は振返りて、何の市といつたかなと問へば、小腰を屈めて、へい佐の市と申しまする、と其まで聞屆けて、寒氣に堪らず、飛ぶが如くに駈戻れば、お久米は待ちかねて、何でござりました。もう何處へか參りましたかと訊ぬる。喜一郎は濡足を拭かせながら、按摩だ〳〵。

按摩と聞きて、お久米の顏色は變りぬ。ありし樣子を聞けば、然らぬだに其盲人の異しきに、名は佐の市といはれて、眼前に雷の落ちたらむやうに顫ひあがりて、其瞬時は殆ど吾を覺えぬばかり驚きつ、怖れつ。道に迷ひて此邊を彷徨ふといへるは信しからず。彼の感の良きことは知らぬ人無し。療治の歸途といへど、夜毎に我實家へ出入する外は、一切何方へも召ばれざるに、仕事仕舞ひてから夜更に出療治とは、いよ〳〵有るまじき事なり。

之を惟ふに、佐の市が此庭の塀外を彷徨ひしは、道に迷ひしにはあらで、外に所思ありてなるべし。その所思とは何ぞ。明白に知るべくもあらざれど、もしや夢に見しやうの心ありて、此處まで跟けしにはあらざるか。佐の市が我を念へる氣色は、我僻目にも、他の餘所目にも懸らざりければ、其か非ぬか、孰れとも知難し。但我ながら異しき此秋の夢は、影の如く心に添ひて、疑團は今に霽れず。

氣に懸れば、人に夢といふものを質ねしに、五臟の疲とて、種々の不思議を見れども、固より根の無き事にて、信とすべきにあらずと謂ふもあれば、一概に然りとも謂ひ難し。古來夢にて災難を知り、行末を見、知らぬ事を覺りし例も寡からず。十が七八までは當事も無けれど、中には信なるもありと謂ひし人もあり。もし彼夢の信ならば、今夜の事は我推量に違はじ。信ならずとせば、いとゞ異しく、寢覺も心快からぬ身上かな。

不具ほど執念深く、一度思ひこみては命を其に捨つると聞けば、萬が一にも佐の市が我身を念ふやうならば何と爲む。この夜深の雪をも厭はず、幾時間か塀の外に立盡して、内の樣子を覗はむとせし執念にて、何處までも附絡はれなば、設ひ此身は石壁の土藏の裡に潜み、多勢の人に外を固めさせむとも、其一念は鐵をも貫きて、終には執殺されてしまふべし。可恐き者に見込まれたる不仕合、かゝる良家に緣附きながら、是一つが

邪慳の姑持てるにも劣るまじき苦勞、と思ひ過せば胸塞がりて、憎き左の市と腹立しく、枕に近き喜一郎の顔を見れば、嬉しさ、羞しさ身に浸浸と、その一目に忽ち何事も忘られつ。

（十）

其後お久米は佐の市に會ふことあらざりし。然れども月に二三度づゝは夢に來ることあり。或時は死人の如く病耄けて、或時は怪物の如く可怖き顏して、怨みに來る夜あり。泣いて歸る時あり。面影は見る度毎に變れども、心は一つ、協はぬ戀を今に捨てかねてなり。

此苦惱譬ふべくもあらざれど、形無き夢にしあれば如何ともしがたく、なほ人に語ることもならで、我と心に責めらるゝのみ。

佐の市は今も折ふし、

命かけても添はねばおかぬ、
添はにや生きてる效が無い。

と人に聞かさず獨り唱へど、強ち死なむともせず、命あらむ限りは僕の

欲しげに、毎夜千束屋へ療治に行けば、之に負けじと、お民も汗水垂らして小金貸、親子の商賣いづれも繁昌せり。
かくて、外に苦勞のあるべきやう無きに、佐の市の一度蒼白たる顏色は昔に復らず、貌の羸れたるは其儘にて、常に愁然として物を思ひぬ。
命懸けてもと唱ふ戀人は誰にかあらむ。お久米は人の妻となりたれば、はや佐の市は生効のあらざらむ身なるを、なほ死なむともせざるを見れば、或はお久米は命懸けたる人にはあらざらむか。その誰なるを、佐の市は曾て人に明せしこと無ければ、自家の外に知るものも無し。お久米は異しき夢より、頻りに佐の市を疑へども、然りとは人傳にも聞きしにあらざれば、唯疑ふのみにて、眞僞を識らず。言はずして思ひ、疑ひて懼る。是も戀か、心の闇。

(廿七年四月)

紫

（一）夜半の嚏

「おや、まあ氣味が悪いねえ、何だか人の唸る聲がするよ。お隣だ、お隣の煙草屋樣の二階だ。」

と呟きながら、疑懼首を擡げて、寢床から聽耳を聳てる六十ばかりの老婦の萎びた横顔を、同じ樣に勢の無い煤行燈の光が、なるほど闇いよりは明るく、枕頭に朦朧と照してゐる。

此間は八疊唯一間の二階で、西と東に窗がある。西が櫺子格子の明窗で、鴨居一杯に釣つてある棚の上には、吸物膳十人前、藍染附繪皿、蒔繪重箱など丶書附のある箱が五つ六つと、菓子の古折、鷄卵の空箱、鐵葉の罐、銘酒の壜、其外總て禍も三年經てば、と謂ふやうな物が抛上げてゐ

る。

北側に欅造の一間の戸棚を取附けて、横手が階子の口で、その上の梁に用心籠が燻つてゐる。東の壁側には古葛籠に竹骨柳と重ねて、其傍に夜具の拔手綿が一組、麻風呂敷に包むで寄せてある。之と斜面に、昔仕入の溜塗の簞笥の上に、革文匣、針箱、用簞笥等を片附けて、行燈の側に小形の長火鉢、紀州ネルの座蒲團。見廻したところで、此二階は寢間だけに用つてゐるのでは無くて、此老婦の住居であらうと想はれる。と爲れば、この老婦は此家のお袋とは受取れぬ。或は姨様といふやうな格で、繋がる緣の有難迷惑、否の言はれぬ生涯の厄介？　まづは其邊であらう。

いかにも壁一重隣の二階に人の唸るかとも覺しい聲が聞える。老婦は少時凝然と聞澄してゐたが、其聲が益劇しくなるのでも無いが、いつまでも息まぬから。

如何爲たのだらう。どうも唸つてゐるやうだが、病人でもあるのか知ら

ぬ。誰だらう。病人のゐやう理は無いが。夫婦に小僧限で、今日も皆店に見えたし。それとも病人でも來たか知らぬ。一向そんな様子も無かつたが、異しい、何だらう。どうしても唸る聲に違無い。病人でも引取つて、あんなに唸るくらゐなら、誰か見舞に昇つて來さうなものだし。それとも小僧さんでも急にお腹が痛出したのか知らぬ。子供の聲のやうでも無いし。

と百端考へたが、さて解らぬ。解らぬほど猶氣味が惡い。安火は冷えかかる、襟元から風は入る。枕衾を頸に巻着けて、鼻の上まで夜衣を引被つても、未だに息まぬ唸聲が耳に附いて、睡りかねてゐると、階下の時計は二時を打つ。其鳴の鎮らぬ内に、こつん〳〵と唾壺を撃く音がする。

「おや!」と老婦はまた顔を出して、

「煙草を呑むでるよ。」と思はず呟く。

煙草を呑むでゐるから、病人の理は無い、病人で無ければ唸ることは無

い。さうすると唸るのでは無いのか。でも確に唸つてゐたのに違無いもの。唸つたり、煙草を呑むだり、餘程變だ。

と思案に餘じてゐると、又一つ唾壺の音がして、續いて前の如く唸る。

「おや、また唸出した。」

五分間も唸つてゐて、突然に地響のするほどの嚔をする。老婦は肝を潰して、「おや、まあ。」といふ後から、最一つ、「はつくさよい。」續けて、「はあつくさよい。」最後のは極めて大きく、「はあつくさや。」

（二）晝間の嚔

その夜も明けて朝飯の時、二階の嫁樣は階下の夫婦に昨夜の一件を物語つたが、思ふやうには取合つてくれぬ。尤も思ふやうに取合つた日には圖に乘つて際限無しの話好であるから、今朝には限らず、いつも取合はぬやうにしてゐるのである。

嫁樣は然とは氣が着かぬ。夫婦とも素氣の無い人たちだと信じてゐる。それならば始から合手にせぬが可いのであるが、御念佛を唱へるでは無し、壁と對坐で獨語も冴えぬから、そこで、顏さへ見れば、何の此のと煩く話をしかけたがる。

其上この嫁樣といふ人が、隨分分曉が惡くて、言ふことが冗くて、結果を聞いたら必ず原因を窮めなければ承知が出來ないので、（それは何いふ理で）と言ふのと、（それから奈何しました）と言ふのが癖で、話が始る

と、直に此二つの責道具を擔ぎ出すので、大概の敵は立どころに辣される。やつぱり兒雷也の蝦蟆の術のやうなものさ、と此家の女房が名言を云つたことがある。

取合はれぬからといつて、腑に落ちぬことを其儘にしては措かれぬ例の癖で、食事が濟むと、忽々勝手へ出て行つたが、水口の障子が啓いて、下駄の音がすると、火鉢に靠れてゐる女房は夫の顏を一寸見て、

「おや、嬸様は又お隣だよ。」

と半襟へ爪楊枝を挿して煙管を把つ。

「喋出すと執冗いから困るよ。何を言ふにも精細で、あんなに言はなくつたつて分るのだ。だから此方から話を爲るにも、子供に言聞かせるやうに爲なけりや得心しないのだから、憤れつたくて堪へられやしない。なぜ如彼だらうなあ。」

「老年の所爲ですかねえ。」

と女房は輕く合槌を撃つ。

「なに、若い時からよ。お袋が能く然いつたつけ、姨樣と話をするのは牛に牽れて善光寺へ詣るやうだつて。お袋は疳癪持の、宛然電光のやうな氣象だつたが、同胞でゐながらあんなにも違ふものかさ。」

「同胞といふと肖てゐるやうですけれど、却て然でないものですよ。」

「然かも知れない。お邸へ奉公してゐるお仙樣なんぞは、お前の妹とは見えないからな。」

「どうせお仙は好い女です。」

「ありや好い。年々好くなるよ。」

「どうせ好くなりますよ。」

「お前とは大違だ。」

「どうせ大違ですよ。」

「來月また來る、といつて寄來したぢやないか。」

「來たつて内へ入れるものか。」

とそろ〱鱗が逆立つて來るほど、亭主は面白半分に、
「なぜさ。」　と眞顏で尋ねる。
「なぜでも可ございますよ。」
「可哀さうに。そんな事を言ふなよ。折角お前に逢ひに來るのだ。」
「誰に逢ひに來るのか知れたもんぢやない。さういへば此間どうも變だと思つた。」
「なぜ〱。」　と顏を出すと、女房は口惜紛れに、孤憤煙草を喫して熱くなつてゐる煙管の雁首を亭主の横面へ推附ける。
「あつつ！　何を爲るんだい。」
と可恐い眼をして睨みつけると、女房は泰然として、
「お仙がよろしく申しましたよ。」

（三）話合手

隣の煙草屋の裏口を徐に啓けながら、
「御免なさいましよ。」
女房は火鉢の側から頸を延して、
「お隣の姨様、さあ此方へ。」
「お早うございます。」
と丹精した銘仙の半纏の袖を胸の邊に推重ねて、大寒、小寒、山から小僧が啼いて來たといふ態で入つて來て、
「今朝は又めつきりお寒いぢやございませんか。」
「お寒うございますね。さあ火の側へお寄なさいまし。」
と其邊の物を掻除けて、早速の愛想に酌むで出す番茶を、姨様は一寸戴いて、口を着けると、もう話の種を拵へる。

「結構なお茶だこと！　お初煎に限りますねえ。やっぱり川柳でございますか。へえ、宇治の出店の、それぢや正銘でございますもの、へえ、なるほど違ひますねえ、我家ぢや旦那殿が、もう〳〵漓熟かし拔いたのが好なんでございますから、お初煎の味美のは飲めやいたしません。お茶といふものは一つは煎法でございますとも。」

と背を圓くして、大きな黒子のある口の端を妙に尖して、そろ〳〵蓄しかける。

固より此家の女房も辯舌は爽かなる方であるから、他の想ふ程迷惑はせぬ段では無い、寧ろ或時は好むで合手にもなる。いつも此方から十言いへば、必ず七言ぐらゐには答へるのであるが、どういふものか、今朝は少しく氣の重い顏をしてゐる、一膳過ぎたかの如く。

姨様は階子傳ひにづいと二階を見上げて、急に憶出したやうに、

「妙な事でございますけれども、ねえ貴方、私は今朝伺はうと存じまし

てねえ。」
と茶椀を下に置いて、衣紋を一寸抜く。
「何でございます。」
「附かない事を何ですけれど、此方にお客様でもございますか。」
「客？」　と女房は首を傾ける。
「もしや御病人の。」
「病人の客？　いゝえ。」
「さうでございますか。」　と顔色が得心せぬ。
「あゝ！　客が、在ります〳〵。」
「ゐらつしやいますか。」　と靦然笑ひかける。
「病人ぢやございませんよ。」
「おや〳〵。それぢやお達者なの。」
「當分勉强に參つてゐる客がございますの。」

「へえゝ、勉强に！　まあ然でございますか。」
「どうして御存知で？」
「其が、あなた、可笑いことがあるのでございますよ。昨夜ふつと眼を覺しますとね、唸聲が聞えるぢやありませんか。其がね、あなた、此方樣のお二階なんですよ。」
と云ふのが前文で、それから長々と迂曲辯じる。やれ恐かつたの、咳が出たの、時計が鳴つたの、戸が動いたの、耳を澄したとか、目を刮つたとか、あんなに吃驚した事は近年無いとか、お邸に御奉公してゐる時分、お庭で狸が鼓の稽古をすると、猫が御錠口で舞を舞つたとか、可恐いと冷汗が出て、寒いと水洟が出るとか、愚にもつかぬ事やら、面白くも無い事やらを、疊懸け〳〵聞かせられるので、女房も請太刀の足許四途亂になつて、既にかうよと見えた時、やう〳〵隙を覘つて、曳と引外すかの如く、

「唸つてをりましたか。」

し矢庭に打込む唯一句で、姨様の長話は胴切になる。これで拍子抜がして、後段はぐつと簡畧に、

「私も耳が何でございますけれども、どうも唸つてゐらつしやるとしか聞えないのでございますよ。」

「唸る理はございませんがねえ。」

と女房は少時考へて、

「唸つたのぢやございません。」

と思はず頓狂に大きな聲をして、

「本を讀むでゐたのです。」

「あの唸つてゐらしつたのが。」

「唸つてたのぢやございません、口の内で本を讀むでたのですよ。」

「まあ奈何せう？　私はまた大病人のお客様でもあつて、お二階に寢て

ゐらつしやるのかとばかり想ひましたよ。御勉強と御病人とは、大抵の相違ぢやございませんね。」

と果は大笑になる。

「實は昨日から二階に參つてをるので、拙夫の親類筋のものでございますの。もう久しく日本橋の山路といふお醫者樣の弟子になつてをるのでございますが、この四月には醫者の試驗があるものですから、それでまあ勉強しに當分お暇をもらひましてね。當節ぢや往時と違つて、何になるのも大抵ぢやございませんよ。」

今まで氣の重さうに見えた内君も、段々と口輕になつて來る。

「へえゝ。」と姨樣は感心した樣なものゝ、その試驗といふ事が根から解らぬので、早速例の責道具の一種の（何いふ理で）を擔出す。

「その試驗といふことでございますか。其は貴方かうでございますよ。何商賣を始めるからつて、願ふのでございませう。ですから、お醫者樣

を始めるのでも、矢張政府から御免にならなければ可けないので、それには試驗といつて、醫者を爲るだけの腕が有るか無いか、その掛の役人が力量を試して見た上で、これなら可いといふことになつて、そこでまあ天下晴れて一人前のお醫者樣になれやうといふのですから、二階の人も今その試驗の下稽古を精々としてゐるのでございますよ。」

「そりやまあお大抵ぢやございませんねえ。それぢや其試驗とかいふことは、定めし難しいのでございませうねえ。」

と嬶樣はぐつと一つ首を捻つて、ふうと鼻の中で節を附けて唸る。是が所謂聞上手といふので、かう身を入れられると、話す方でも自づと張合が出て來る。

「それは難しいの何のといつて、お話ぢやないさうですよ。その試驗が又一度では濟まないので、前……前何とかに、後何とかと、都合二度あつて、而して前の試驗には三圓、後の試驗には五圓納めるので、それが

貴方首尾よく參ればねえ、試驗も二度で、お金子も八圓で濟みますけれど、運が惡かつたり、勉强が足りなかつたりして御覽なさい、試驗が好く參りますまい。」

「ふう、ふう。」　と姨樣は盆鼻を鳴らして乘出す。

「然すれば復た再試さなければなりませんわね。」

「こりやあ成程然でございませうね。」

「再試す日には、また勉强を爲直した上に、またお金子を取られるのですから、愁いぢやありませんか。」

「なぜ又其度にお金子を取つたものでせう。政府でもねえ貴方、そんなに取りたがらなくつても可いぢやございませんか。何かと云ふと稅々つて、德川樣時分にはとんと無かつたことで、これだけでも眞個世が惡くなつたのが分りますよ。」

と昏濁した眼にも自から憂憤の色が見はれる。

「姨様、税ぢやありませんよ。」
と宥めても、自體天朝と薩摩が大の嫌であるから、なか〳〵聞分けない。
「税でなくつても、下々から取りたがるのが惡いぢやございませんか。」
と彰義隊は鋭く突懸けて來る。勢ひ内君も錦切の肩印で駄荷袋を着かなければならぬ。
「それだつて、その試驗には何千人といふほど醫者にならうといふ書生樣が聚るのですし、掛りの役人には名高いお醫者樣達を大勢囑むのですから、手も掛れば、費も入る、畢竟その雜用を拂ふのでさあね。」
雜用の一言が氣に入つて、税で無いのは思召に叶つたか、但その取りたがるのが癪に障ると見えて、
「雜用なら雜用らしく取るが可いぢやございませんかね、馬鹿々々しい。なんぼ政府だつて餘り阿漕過ぎますわね。」
と段々解らなくなる。

そこで内君は話頭を一轉して、
「お金子は兎も角も、その勉強といふものが仇や疎かぢやございませんよ。夜も碌に寢るといふことは無し、第一あなた、まるで御飯なんぞは食べないと謂つても可いくらゐでございますの。夜も晝も机に靠かり通しで、本ばかり讀むでをるものですから、もう〳〵それは、顔の色なんぞはありは致しません。傍で見てゐましても、彼で能くまあ健康に障らないと思ひますよ。」
實に此說明は簡にして盡してある。有繋の姨樣も得心して、
「へえゝ。唯もう念力でございますねえ。」
「もう一生懸命。眼といつたら釣し昂つて、眞紅に血走つて…………。」
「然でございませうともね。」
「そのまあ勉強といふものは、眞に感心。」
と息むほど力を入れて、

「してしまひますよ。」

と獨りで感心して、眤と顏を視られるので、姨樣も爰は默つてはゐられないが、扨何とも言ひやうが無いから、

「結構でございます。」

と魚軒の交のやうな言を云つておく。

「それで貴方、極堅い、正直な、誠に其は素直な質でございますが、如何いふものですか、記臆が少し惡いので、その通り勉強は爲るのですけれど、度々試驗がまあ不出來で、それでも始の試驗は最う疾に濟むでをりますから、今度は後の五圓の方の試驗を受けやうといふのでございますが、自分もねえ、さう申してをるのでございますよ。今度また仕損つたら、餘り面目が無いから生きてはゐないつてねえ。」

裏の窻から早稲を拋りこまれたほど、(生きてはゐない)の一言に姨樣は悚然して、

「生きてはゐない?! 飛でもないことを。そんな短氣な。」

と半は人の無分別を誡め、半は己の恐怖を鎮めんとする。

「それはもう然ですけれど、在所には年取つた兩親が在りまして、幼稚の時分に引取つた許字が、最う廿歳にもならうといふのですから、さうさうは待たれないから、今年も遣損つたら、其娘には他から聟を納つて了まふ。そんな馬鹿者は子とは思はないから、親とも思ふな。家へも足踏をする事はならないつてねえ、父親のところから再三の手紙なので……。

「そりや貴方、何ぼ何だつて餘りぢやございませんか。そんな無理な、可哀さうに、そんな事といふものが……」

と姨様はもう顫聲になつて、眼の中を濕ましてゐる。

「ですから自分も貴方、涙を滴して悔しがつてねえ、親にまで見放されるやうな不束なものなら、生きてゐる効が無いからつてねえ、自分はもう死ぬ氣で、許字の娘の寫眞まで引裂いて了まつて……。」

と内君もほろ〳〵涙を滴し始めると、姨樣は袂から丸めた紙を出して、披げる間も無く眼を拭き〳〵、

「どんなにか、ねえ貴方……。」　と洟を啜る。

「而して其手紙を壁へ貼付けて、それを見い〳〵勉強してゐる心地は、どんなだらうと思ひますと、情無くて情無くて。」

と言ひながら又泣く。

みしり〳〵と階子を踏む音に、姨樣は顏を擧げると、怪げなる銘仙の綿入にフラネルのぼやけたのを重ねた裾と、薄汚い白足袋とが見える。やがて下りて來たのは二十五六の、ひよろ〳〵と高い、柔和相の男で、髮は蓬の如く、鬱陶しさうに額へ振被つて、口髭が疎に生へて、蒼白い肌に頸垢が際立つて、鼻孔が煤ぼけて、眼が吒然して、氣の無い顏で懷手をしながら、下りて來ると、火鉢の側に見慣れぬ老婦が在るので、一寸會釋をして、のそり〳〵と勝手へ行くのを、姨樣は珍しげに目迎へて

之を送り、

「あの方ですか。」　と極小聲で訊ねる。

「彼でございますよ。まるで病人でせう。」

「嘸まあ、ねえ。」　と姨様は大息を吐いてゐると、流元で水を覆ける音がざつざ〳〵。

「何でございますえ。」　と屹となる。

「水を浴びてるのでございますよ。」

「水を？」　と眼を圓くして、「ふう、」　と感じ入つて、

「水垢離？　然矣、もうかういふ時には、何でも信心の事でございますよ。」

「なに信心といふ譯ぢやございませんけれど、甚く勉强をされますと、逆上て頭痛がするさうで、日に二三度位あゝして冷すのでございます。」

「おや然で。私は又、行を爲さるのかと思ひましたよ。それでもまあ眞

箇に大抵ぢやございませんね。その試驗とやらの御勉强ばかりぢや無し、お國の事やら何や彼や、三方四方の御心配で、さぞ御體も傷むことでせうけれど、そこがお若いお方だから、まあ格別の事も無いのでございますが、あなたも折角御面倒を見ておあげなさいまし。段々世中が難しくなるほど、何に成らうと、生半熟なことぢや行きませんねえ。」

「さうで御坐いますとも。彼人も此四月が首尾好く參れば、そこで一肩拔けるやうなものですけれど、それから玄關を構へて、一流行らして、株にするまでが、又骨でございます。」

「この先は先で、又如何とも成るものですから、兎も角も此四月を、ねえ貴方、好くぽいと、何卒まあ。」

「眞箇に然でございますよ。」

「それでも勝負事は時の運でございますから、どういふ拍子で仕損じがあらうとも、ねえ貴方、決して短氣な了簡なんぞをお出しなすつちやい

けませんから、よく其事を、ねえ貴方。」

「それはもう、拙夫も私も、申してをる段ぢやございません。」

「若い內といふものは、後前見ずに隨分つまらない了簡を出すものでございますから、眞箇にお氣をお着けなさいましよ。」

と有繫老年だけに取越苦勞をして、萬一の事でもあつてはと、眞に番でもしてゐたいほどに思ふのに、內君は然して心配さうにも見えぬので、姨樣は氣が揉めて、氣が揉めて。

(四) 記憶力

この煙草屋の二階に勉強してゐる醫術開業後期受驗生は、埼玉縣平民味木長助の長男靜馬(二十六年)といふものである。

幼少の時から學問が所好だといふのが親父大の自慢で、此奴には鋤鍬は持たせたくねえものだと、十四の歳から東京に出して、日本橋で有名の小兒科山路朴卿の玄關に住込ました。

當分塾僕のやうなことを勤めてゐる間に、調合を覺えて、藥局の助手までになると、それからは勉強時間も自由に與へられて、假(藪)といふのが醫者の隱語であるならば、正是錦苞の穉龍地を抽いて、凌雲一寸の心を露し來れる靜馬は、美くも二十の歳から代診試補に擧げられ、傍ら藥局の取締を預つてゐたが、二年の後には一廉の代診生と成畢せたのも、一つは容貌の極めて溫和なるのと、氣質の至つて篤實なるのが、與りて

力を致したのである。
學理の方は少しく覺束ないが、施術はなるほど巧者なもので、長年實地で鍛へた匕頭は一寸侮難い、と先生も陰ながら頼もしく思うてゐらるゝ。病家から、是非味木樣にと言つて來るほどの馴染も大分あるのだから、舊時ならば山路朴卿先生出張所の看板を揭けて、一玄關構へて、可也に行れる業はあるのであるが、當今では開業試驗を經なければ、體を取つては瘤に唾を布けてやることもならぬ。そこで內務省の試驗を受けると云ふことになる。靜馬も其氣で粉骨碎身するのであるが、此人にして此病ありと謂はうか、其記臆力の鈍なことは太甚しい。であるが、全體の記臆力が遲鈍といふのでは無くて、單に其が學問上に止まるとは、なほさら因果である。
自分も然と知つてゐるから、衆の二倍も三倍も勉强する。けれども、衆の半分ほどよりは記臆めぬので、然も無くては、始終机に向つてゐるなが

ら、前期試驗を四度も取外さう理が無い。兎も角も五度目には及第したけれども、四度目の落第の其日は謂ふにも及ばぬ、當座は切りに考へた。自分は全く記憶力は無いのか。無いものならば勉強するのは無益の事だ。到底學問することの出來ない體だ。それに未練を出して、及ばぬ事に骨を折らうよりは、分相應の業に就くのが道であらう。而も孤獨といふのでは無し、國には兩親が自分の一人前になるのを待切つてゐるのだから、いつまでも呑氣に落第ばかりしては居られない。醫者は罷めやう？　學問は不適當だ！　百姓の子は矢張百姓か知らぬ。

とは念つたが、十何年も年季を入れて修行した醫者を今更罷めて、百姓なり商人なり、これから又新規に蒔直すのは、如何にも殘念でならぬ。なるほど記憶力は惡い、試驗には落第する、實に學生としては此程不面目の事は無い、既に學生たるの資格は無いのである。が醫術の方では如何だ？　先生にも折々賞められる、病家の方の受も好い。また隨分手重

い患者に處方の工夫をして、面白いほど思はく通りに行つた事も往々ある。其度に先生を驚かしたが、自分ながらも診斷は容易で、何となく病根が眼に見えるやうな心地がする。であるから藥も利かうし、病も治らうし、從つて信用も厚からうといふのである。

醫者といふものは一體如何いふ者であらう？　無論、病を治すのが醫者だ。病を上手に治しさへすれば、それで醫者は可いのだ。可いどころでは無い。名醫だ。世間には病理が精くて、施術の一向いかぬ人もあれば、また其反對のもある。去て見れば、學力があるから必ず治療を善くするとも限らなければ、學力が無いから治療が下手とも附かぬ。餅屋もあれば酒屋もあるのだ。自分は如何にも記臆が惡いから、試驗問題に十分の答案を與へることは下手だけれども、いつでも其問題が解らぬのではない、解つてはゐるが、思ふやうに書けないので、もし其問題を實地に應用するくらゐなら、嚢の物を探るやうなものだ。

自分は學術より實地の方が長けてゐるのだから、かうして代診生こそ爲てゐるけれど、其邊に開業してゐる學士連中と立並んでも、腕盡ならば決して敗は取らぬ。それに今更罷めるといふのは實に愚の至だ。わづか二度の試驗さへ濟して了まへば、それで可いのだから、爰で氣を腐らすのは慾だ。どんなにしても貫いて了まはう。

有繫に心配を爲たゞけの効が有つて、五度目には前期の免狀を取つたから、さあ此勢！　一擧直ちに拔く可しと、勇進して、翌年の後期試驗に懸ると、脆くも斥ねられた。續いて其翌年も何やら彼やら落第！

靜馬は、上は奥より下は臺所、車夫の末に到るまでが、味木樣々々々々と、ちやほや言ふほど人氣があるのであるから、始終落第ばかり爲てゐても、それを氣毒がられこそすれ、誰一人態を見ろと好氣味がる者が無いから、同じ面目無いながらも、居られるやうなものであるが、之が日頃憎まれてゐたものなら、尋常外れて某所その皮が厚くでも無ければ、をめ〳〵

と代診でござると、突袖で澄してはゐられぬのである。

然無くても、靜馬が心中の慈さは、實に言ふにも言はれぬ。先生の子供が及第ゑたの、賞品を貰つたの、と噂をされる度に、總身の肉がひく〱動く。

靜馬が此程落第して、其都度三圓なり五圓なり棄てさせられながら、先生は唯の一度(亦か)と言つたことも無ければ、不與な顔色を見せたことも無い。佯のやうに快潤な調子で、

「慢々やれ、大器は晩成だ。」と機嫌好く笑ふ。

奥樣は奥樣で、わざと手輕に、

「おや然でしたか。又この秋がありますわね。」と慰める。

それが實に肝に徹へる、毒舌の熱罵より肝に徹へる。

後期試驗も此春で三度目！　もう今度は逸すまい。逸すまいでは無い、斷然逸さない！　命に換へても逸さない、と靜馬は健氣にも覺悟した。

試驗には未だ七十日許も間があるので、受驗生の多數は、書燈を吹消して寄席へ出懸けるもあれば、机の上に書を伏せて花牌を始めるのもあるなど、用意をさ〳〵懈つて、光陰の流るゝを質ほどは驚かず。勉強と返金は間際で可いものさ、と落着いてゐるけれども、靜馬の身は然してはゐられぬから、暇を乞つて、從兄の煙草屋の二階に閉居して、はや試驗の準備に着手したのである。

國許でも每々心配してゐるのであるから、今度は屹度錦を衣て歸るから樂みにして待つてゐてくれ、と一通嬉がらしてやると、親父から以ての外の長返事。それは女房が隣の姨樣に話した通り、今度といふ今度落第したら、一も二も無く親子の緣を切る。而して許字のお政には婿を納つて、それで家の名跡は立てる、といふのである。

尤も、去年の秋、二度目の落第の時、既に此事は言來したのであるが、此度の手紙は、いかにも其と了簡を固めたらしく、特に嚴かに書いてあ

る。

親であり、子であれば、盗するやうな悪漢でも、可愛のが人情であるのに、常々勉強してゐるのをも知りながら、毎度落第するからと云つて、親子の縁を切るとは情無い。而してお政には婿を納る！　凡そ人の子としての不面目、一個の男子としての耻辱。なるほど我は親にまで見限られるやうな無能漢かは知らぬけれど、餘り口惜い。無理かは知らぬが腹が立つ。爰で如落第を去た曉には、まづ親には愛想を盡かされる、先生夫婦へは顔向が出來ぬ、朋友へ對しては面目無い。古風な言は道ふやうだが、實に生きてはゐられぬ體だ。世の中は四尺五寸になりにけりといふ歌があるが、それに違無い、天地濶しと雖も身を容るゝに所無しだ。死ぬのだ、潔く死ぬのだ！死ぬ覺悟なら天下に可恐いものも無ければ、苦しいことも無い。その精神で一つ勉強するだ。

靜馬は感激して狂せる如く、いでや死を以て及第を買はむと決心したの

である。

（五）　讀書禪

寢床は机の側に敷放で、靜馬は夜も碌に睡らずに勉強して、朝でも晝でも宵でも、堪らなく疲れて來ると、そのまゝ打僵れるのである。それほどであれば、三度の食も快く吭へは通らぬので、多くは生鷄子で凌いで、合間には食麵包を咬りながら書見をする。元來入浴が嫌ひといふのに、此始末であるから、何が口にも湯に入らぬのが、始終洋燈には燻らされる、着のまゝでは寢ると謂ふので、その不潔は夥しい。長い間の事であるから、鬱屈して病めるが如くなる。それに靜馬は散步に出やうとする氣色も無い。食事をするのも、入浴するのも、散步するのも、究竟は讀書の單調に與ふべき好變化で、之に因て眠れる如き精神を興奮し、死せるが如き氣力を復活する。いかに醫者の不養生とは謂ひながら、然らぬだに記臆力が無いと喞つ腦髓は、其が爲に益遲鈍になる

とは心着かぬのであるか。
否、靜馬は心着いてもゐれば、知つてもゐる。先生の常に忠告するのも此點であるから、無論十分に曉つてゐる、のみでは無い、實行せうとも心懸けて、忘るゝ事は無いのである。けれども靜馬には其が爲得ない。元來量の狹い質であるから、是と一事に拘らふと、寢ても寤めても其が心に繫つて、兎も角も片附けて了まふまでは、胸が安まらぬといふのである。

まして一身の浮沈に關するほどの大事！　それのみか、恥辱といひ、義理といひ、一旦事破れなば、命は捨てやうと、心に誓つたくらゐの今度の試驗は、實に幾分胆大疎豪の輩と雖も、顏色を失ふ可き一大難題であれば、小心の靜馬が身にしては、（肺結核も既に乾酪變生に陷りて、打診上には全肺濁音を呈し、聽診上には到る所水泡音を聽かざる無し。）と診斷された神經家の如く、可恐くも、悲しくも、愁くも、情無くもある。

この自覚には、勉強して記憶するより外は無いので、机に向つて書を披いてゐれば、其間は希望も、義理も、恥辱も、名利も、何も一切忘れ果てる。やがて疲労が出て少時休むか、或は用事にでも立つか、一分間でも書見してをらぬと、空間を容さぬ脳の裏に、忘れてゐた思想が忽ち群つて顕れる。是が心の鬼か、身を責めらるゝ苦悩に、静馬は少時も書と眼とを離しかねる。それが、膳に向つて、二千粒もある一椀の飯を、二本の箸で悶着してゐられやう理が無い。業に如此であるから、入浴、散歩は言ふまでも無い。

此上にまた静馬は寝るのを喜ばぬ。寐るのは喜ばぬでは無いが、夢を見るのを忌むのである。試験準備以来交睫めば必ず夢を見る、それが又盡く悪夢で、診察所の椅子の上で立腹を切損じたり、乞食姿で在所の我家の門に昼寝をしたり、試験官に斬りかけて捕縛されたり、國の許字が醫學博士と駈落したり。

(六) 正信偈

亭主はもう店に出て、跡には女房が火鉢の傍を離れがたなき風情で、寂しさうに香箱をつくつてゐると、時しも姨樣は煙草屋からちよこ〳〵と歸つて來る。

二階へ昇りながら一寸聲を懸けて、挨拶の樣子でも好からうものなら直に話しこまうといふのが病であるから、女房は適宜に遇ふ氣で構へてゐると、豈計らむや、姨樣は物をも言はず直と昇つてしまつたので、女房は利かない辛子を舐めたといふ見得で、けろんとして階子を瞻げてゐたが、

「珍しい事たよ。」と獨語つ。其が聞えたか、あらぬか、亭主は店から頸を振向けて、

「姨樣歸つたな。」

「あゝ歸りましたよ。何だか變ですよ、鬱いでるやう。」

「鬱いでる？」

「怫然と云てるやうでもあるし。」

「奈何したのだ。餘りお前がつんけんするから、御機嫌を損じたのだらう。」

「私は何もつんけん云や云ませんよ。お隣で口論でも云たのぢやありませんか。」

「口論なんどをするやうな氣の强い人ぢやない。」

「それとも氣分でも不快のか知らん。」

「さう、そんな事かも知れないよ。一寸お前二階へ行つて樣子を見て來な。」

「御容體何？」　と氣の無い聲をして立ちかねてゐる。

「行つて來なよ、早く。」　と急きこまれて、

「今行きますよ。」　とぶぶくりながら、千鈞の鼎を扛るが如く身を起して、

「行くのも可いけれど、又捉まつて話しこまれると困つちまふ。これから襦袢の袖を附けて、午餐の蓮根を茹て………。」

「早く行つて來なと云ふのに。」　と亭主は大憤に憤れて、今にも其邊の物を取つて投着けさうな見脈に、女房はやう／＼恐怖を爲して、

「ぢや行つて來ますよ。」　と階子の口まで行くか行かぬに、二階で鈴の音が二聲、續いて、

「歸命無量壽如來南無不可思議光法藏菩薩因位時在世自在王佛所………。」

女房は之を聞くと、ばた／＼と逃還つて、

「あれ、お經が始りましたよ。」

「うゝ、なるほど。南無不可思議光法藏だ。何だつて今頃始めたのだらう。今朝もうお勤行は濟む筈のぢやないか。」

「えゝ、もう一遍濟むだのですとも。」

「はてな、晩のゝ御取越といふ洒落でも無からうに。」

と亭主は少時首を傾けてゐたが、

「行つて見な行つて見な。」

女房は階子の口から首だけ出して、二階の樣子を窺ふと、姨樣は戸棚の佛壇の前に端坐して、一心一向に阿彌陀佛を深く賴みまゐらせてゐる。有繋に心無く聲も懸けかねて、女房は少時視てゐたが、別に變つたところも無いやうであるから、まづ安心して下りて行く。

輪燈の燿く處、香爐の薰ずる邊、姿見の火影に立たせ給ふ如來の尊像は、(夫人間の浮生なる相を倩觀ずるに)と今にも宣給ふ可く拜まれる。念佛の行者は心靜に唯可信斯高僧說と唱了して席を退くと、直に女房が又昇つて來て、前の如く階子段に立ちながら、

「姨樣、如何なすつたの？」

「如何とは？」
「否、如何かなすつたのぢや無いのですか。」
「如何かしたとは？」　と未だ解らぬ。これは解らぬ方が何やら道理らしい。けれども平生が解らない姨様であるから、之も無理に解らないにして了まつて、
「あれさ、氣分でも御不快のぢやありませんか。」
「否、如何も了ませんよ、　と煙に卷れて女房の顏を凝然と視てゐる。
「それでも先刻お隣からお歸んなすつた時、何だか鬱いでお在のやうでしたから、氣分でも御不快のかと思ひまして。それに、例に無く今頃勤行なんぞを爲すつたから……。」
「おや、然う。有難う　それで態々尋ねておくんなすつたの。何、さういふ事實ぢや無いのだから安心して下さいよ。まあお昇りな、よう、お茶でも煎れませう。」

と火箸を把つて鉄瓶の下を撥ける。そりやこそ一大事と女房は狼狽へて、

「否、また後刻ゆつくり。」　と片足下りる。

「でも、もうちん／＼いつてるから。」

と鐵瓶に觸つて、蓋を取つて、湯氣の立つところを見せて、

「時ならない時分に勤行をしたのは外の事では無いけれど、昨夜の、それ、唸聲が聞えたといふ話ね、あれが能く聽いて見ると、お隣の二階へ書生樣が來てゐるのさ。その書生樣の事に就いて、それは／＼涙の滴れる話が色々あつて。まあお昇りよ、此方へ。そこぢや話が出來ないから。

「今少し爲かけた用がありますから、後刻ゆつくり上ります。」　と言ひながら一段下りる。

「あれさ、もうお茶が煎るといふのに。」

「後刻ゆつくり。」　と又一段下りると、姨樣は立つて來さうなので、女房はもう堪らず、一散に驅下りると裾を踏へて、どた／＼と辷落ちる。

（七）隣は麪包

姨様の心願なるものは、實に現世當來の兩界に亘つて、唯二つよりは無かつたのである。玉露を煮て合口の友と顋の痛くなるほど話をして見たいのと、彌陀の報土に往生したいのと。其は昔。隣の內君から靜馬の身上を聽いてからといふものは、合口の友も極樂淨土も二の次になつて、一向に靜馬の及第を祈るばかりである。

隣家から歸つて來た時鬱いでゐたのも、來四月の安否が危はれるゆゑであつて、怫然と忿てゐたのは、かういふ勉强家で、かういふ氣毒な身上の人を、幾度も〳〵落第させる掛の役人の無慈悲を憤る餘でがなあらう。又時ならぬに正信偈を誦じて、如來様にお願ひ申上げたのも、我身の未來の事では無くて、あはれ靜馬の一命を助けさせ給へとお賴み申したのである。

後生を助けていたゞくのが御宗旨の本願で、塵一筋の慾も現世の事は願はれぬのである。と知りつゝ我身の後生を忘れて、縁無き他人の現世を願ふ心の中は、當流の開山聖人も照覽あれ、抑も十惡五逆の罪人をも助けたまはむとの大願を起しまし〳〵たる阿彌陀佛の慈悲にも劣るまじく、末法の世の女人には、いと〳〵有難くも尊さは、是ぞ即ち煩惱を斷せずして涅槃を得るもの乎。

かういふ話こそ、聞いて置いて益になるからと、姨様は折角女房にも聞かせやうと思つたのに、慌てゝ迯げてしまつた跡は、獨り徒然として物の寂しいにつけて、壁一重隣に苦學の肩を聳かす靜馬の事が懷ひ出される。

今度遣損つたら死ぬと言つた。それは餘り了簡が狹過ぎる。男は氣で持てと謂つて、そんな氣の小さなことでなるものか。一旦かうと念込むだ事は死ぬまで遣る、遣遂げなければ死なゝい、といふぐらゐの肚で無く

ちやいけない。短氣な了簡は出さないが善いのさ。私なんぞこそ、死ねばまあ〳〵有難いことには、阿彌陀樣の御側へ行かれるといふ樂みもあるけれども、若い身では信心もあるまいから、今死んだとて行所は無し、これからが全盛の體でもあることだから、何でも彼でも爰の所は勉强して、この四月には首尾好く遣つて、早く立派なお醫者樣におなんなさいよ。及ばずながら私も阿彌陀樣へお願ひ申して見るから、貴方もまあ精精遣つて下さいよ。他人の私でさへ色々考へると、嘸愁からうと思ふから、貴方の身になつたら、半時だつて心の休まることは有りますまいけれど、そこが修行で、愁いのが修行だから。」

と姨樣は肚の中で陰ながら慰めて、爰は戀ならば、正是灰に字を畵く物思の所なれど、安火に靠れて珠數を爪繰つて、時々思出したやうに念佛を唱へてゐる間、下から女房の聲で、

「姨樣、御膳！」

「おや、もう午餉かねえ。」と立起つて、

「お隣の人は麵包だ。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。」

（八）貧の一燈

冬の夜風の寒い橋の袂に、賣るほども無い燐枝を並べて、薄闇いカンテラの陰に四歳ばかりの兒が霜の蓆にすや〳〵と睡てゐる側に、干魚のやうな乳兒を抱へて、往來ふ人に泣顏を曝す女乞食を見懸けた時は、惘然に胸が一杯になつて、買物の錢と知りつゝ巾着に手が懸る。有餘る金子があるならば、かういふ者を引取つて世話してやつたらば、嘸功德にならうとまで考へるが、橋一つ越ゆれば直に忘れて了まつて、緣日の植木屋の前を通ると、欲しい鉢の梅が幾株もある。

猫が鼠を食べるのを見ても、噫可愛さうだと思へば、鳥屋の店頭に樽の中から鷄が黃色の足を出してゐるのを見ても、噫酷たらしいと、一寸した事が情無い代りには、直傍から忘れもする。忘れる傍から又情無くもなる。その後が御念佛！といふ次第になつてゐるのであるが、今度の靜

馬の件ばかりは、女乞食にも、鼠にも、鶏の足にも勝して惘らしいのが、姨様は浸潤と忘れられぬ。啻忘れられぬばかりでは無い、自分も味木静馬のやうな氣がして、此四月が懸念で〳〵、どうか好くやりたい念が鳩尾の邊で鬱勃してゐる。

贔屓の力士が取組む時には思はず力瘤が出て、後で肩が凝る。贔屓の俳優が手疵でも負はされると、もう〳〵情無くなつて、覩てゐる空は無い。静馬は實に姨様の贔屓である。力士は強いとか、愛嬌があるとか、俳優は藝とか顔とか、何處と無く好いたらしいとか、それ〳〵に贔屓の點がある。姨様が静馬を贔屓の點は、些と異つて、その身上の憫然に在るのである。人は其得意の點で愛されるよりは、失意の點で憐まれる方が寧ろ能く人の情を鍾める。

容易に感じる代りには容易に忘れる人が、容易に感じて容易に忘れられぬとあるからは、静馬の身上話は御門跡様の御一言の如く、深く姨様の

肺腑に入つたものと見える。

かほどに思ふ靜馬の事であれば、身に應つた事ならば、何なりともして今度は卒業させたいと、心は矢竹に逸るけれども、自分の力の最も及びかねる金の沙汰でも、是ばかりは行かぬのであるから、何ほど陰で思つても、手の着けやうが無い。譬はゞ褌の切齒と謂ひたいが、恐らく其より未だ覺束ぬ。

思案に餘つて、無理をば阿彌陀樣にお願ひ申したのであるが、それでも氣が休まらぬ、と謂つては勿體なけれど、寢る目も寢ずに勉強してゐることを思ふと、少しは其苦艱も助けたい。

燈が點くと間も無く、姨樣は（一寸買物に）と出懸けたが、稍半時も經つて、裏口が竊と啓いたと思ふと、水口の油障子をこそ〱と叩いて、

「お金さん〱。」と女房の名を呼ぶ聲がする。生憎お金は人知れず何やら頰張つて、茶を一口今嚥むだばかりのところを出拔かれて、周章

狼狽ながら、「姨様？」と問返したのが、口に物があるから、ウバラアといふやうに聞えたので、

「私だよ。今歸つたのだよ。」と姨様は頻に名乘る。

此時女房はやう／＼其（何やら）を嚥下して、

「其處は開きますよ。」と少しく慳貪に言ふ。

御隱居様ぢや無し。手があるのに勝手に啓けるがいゝ。御大相な、といふ肚で、女房は脹れてゐる。

「入るのぢや無いよ。一寸お隣へ行つて來るから。」

と出て行くと、女房は水口を横目に睨むで、

「よくお隣へ行くよ。何の用があるのだらう。あゝ胸に痞へた。」

と土瓶に手を懸ける時が、話次分頭姨様が煙草屋の裏口を入つた頃である。

「御免下さい、又上りました。」

と然も氣毒さうに躊躇ひながら、臺所へ上りは上つたが、居間の障子が啓きも爲なければ、內から何方とも言はぬ。眞を引込めた釣玻璃燈が不景氣に留守を爲てゐるかの如く、障子の硝子越に見える。姨樣は竊と板間を踐むで、居間の中を窺ひながら、

「お留守でございますか。」と訪ふと、矢庭に店から十一二の小僧が飛んで來て、奮然障子を開けて突走ると、闇い所に在る姨樣を通拔けて、水口まで行つて、

「へい、何方でございます。」と甲走る。

「內君はお留守ですか。」と背後から聲を懸けられて、小僧は慄然としたか、顫聲で、

「へい何方？」と團栗眼で見廻す。

「私ですよ。」と明るい處へ出ると、小僧は笑ひかけて、

「あ、お隣の姨樣！　吃驚した、吃驚爲ました。」

と獅嚙面をして洟を啜つて、それから横撫をして、

「内君ですか。お湯へ入らつしやいました。」

「おや、お湯へ？　然ですか。もう餘程前ですか。」

「えい、唯今。内君のお湯は長いのですよ。」

店番の旦那は臺所の問答を聞着けて、

「平太郎、何方だ？」　と喚はる。

「お隣の姨様でございます。」

と答へると、其限應とも諾とも挨拶が無いので、姨様も立往生、小僧も立往生。鼠が棚を駈ける。

姨様は袂の中に大事の物あるが如く窸々と搜つて見て、

「そんなら一寸旦那にお目に懸つて。」

と居間へ入ると、小僧は先に立つて、

「旦那、お隣の姨様が入らつしやいました。」

と通じると、可恐く睨みつけられた擧句が、
「店へ行つてろ！」　と噬付くやうに叱咤られて、蝸牛が角を斂めたやうな恰好をして、こそ〳〵店頭へ逃げて行く。何で呵られたのか、小僧は自分ながら一向解らぬ。姨様も傍に見てゐて「全然解らぬ。
旦那は一面は呶鳴り、一面は嫣然に、
「おや、姨様！」　と急作の機嫌顔。葱賣のお組もよろしくと謂ふ見得である。
少時照れてゐた姨様も、此一言に間を直して、
「今晩は。毎度もう上りましてお喧しうございます。」
と坐に着くと、旦那の面は忽ち苦々しくなる傍から然あらぬ體を粧つて、
「生憎唯今湯に參りましたが、歸途に一寸寄る家がありますから、晩くなるかも知れませんよ。女の湯といふ奴は長いものでなあ。」
はつはつはつ　と空々しく笑ふ。

「さうで御座いますともね。私のやうな老婦でも小一時間は懸りますから、お若くって在らつしやるのですもの、その理でございますよ。又男樣のお湯といつたら、眞箇に鴉の行水で、其と比較にはなりませんわね。未だ〳〵其でも素人のお湯は短いのでございますよ。茶屋女だとか、藝者、ま藝者のお湯と謂つたら、凡そ長湯の女の二人前よりは長うございませう。あれで湯錢が尋常ぢや湯屋が引合ひませんと。是は然でございませうよ。たしか宇都宮とか申しましたよ、あの、それ釣天井の騷動がございました、あのう大工は何とか申しましたね。あの、それ與……何とか、與、與四郎、與四郎、殺されましたね、可哀さうに、大事を他言するからとつて。さうすると又將軍樣を御駕籠へ入れて、一人で舁いだお侍がございます、彼は石川八左衞門。昔は隨分强い人があつたと見えますねえ。」

湯錢が一轉して釣天井の實錄となる。然ればこそ田鼠化して鶉となり、

雀海中に入つて蛤となる。默つて聽いてゐやうなら、昔の強い人物語が始つて、追ては宮本武勇傳、尼子の十勇士等を半解に辯じられるかも知れぬ。爰は神妙に承はつてゐる所で無いと、旦那は構はず横鎗を入れる、

「その宇都宮では湯が奈何かえましたか。」

「その宇都宮では、ねえ貴方、尋常の湯錢が八厘で、藝者といふと二錢五厘ださうでございますよ。これは成程好い規定ぢやございませんかね。東京でも早くそんな事に致せば可うございますのに、ねえ貴方。」

湯錢に就いては、旦那も持論無きにしもあらざるけれども、若し夫此婢樣に取合つたら、滔々たり、滾々たり數十萬言、車轄を炙るが如く、雷鈴の狂つた如く、息も繼がさず聞かされるのを恐縮して、物言へば唇寒し秋の風、見猿聞か猿言は猿がよしと、ほんの御挨拶までに、

「左樣々々。」　と受けてゐる。

(左樣々々)の魚膠無さぐらゐでは、婢樣更に撓まず、どうめつた、かう

めつたと、縱橫無盡に得意の長舌を弄する。旦那も之には閉口頓首の額を撕いて、此上は手短に引導を渡して了まふより外は無いと、急に不興な顔色をして、碌々返事もせずに、折々已むを得ざる場合には、鼻頭で（ふん／＼）とばかり、火災保險に加入してゐる人が一點鐘を聞いたほどの無頓着さ加減に遇つておくと、有繋の姨様も少しく氣の拔けた鹽梅。爰で最一息と、旦那は柱に懸けてある賣上帳を取つて、今日の附込を拔げて見い／＼、十露盤を彈いて見せる。姨様も之でぐんにやり。漸く桃尻になりかけて、忩々と袂の中から菓子袋を取出す。旦那は之を横眼で睨みながら、ぱちり／＼と忙しげに球音を立てゝゐる。

姨様は袂で揉めた袋の角を丹念に引立てゝ、敬々しく之を旦那の前に出して、

「あの、是は誠にお愧かしい品ではございますけれど、お二階の書生様にお上げなすつて。」

といふ口上の、餘り思寄らぬのに旦那は驚いて、

「二階にをります書生に、之を？」

と不取敢禮を言ふべき所を、姨様の面上に不思議があるかの如く、頸を延して、眼を圓くして、膝から十露盤が辷落ちる。

「何かと思ひましたけれど、私風情の事でございますから屆きません。ほんのもう志は松の葉で、こんなものはお口にもお合ひなさいますまいけれど、今朝ほど色々内君からお噂を伺つて、ねえ貴方、私のやうなものでも陰ながら御心配申して、何卒まあ此四月には首尾好く、ねえ貴方、そればつかり苦勞にいたして、他人でさへ這般に氣が揉めるのだから、彼方の身になつたら、それこそお大抵ぢや無からうつて、ねえ貴方。それに御飯も碌にあがらないさうで、それぢや何ぼ何でも御健康に障りますよ。何か精の附く、根のお藥になるやうなものをと思ひましたけれど、牛肉や鷄卵のやうなものは召上つてゐらつしやいませうし。これでも色

色と考へまして、これは越後の飴でございますが、大相脾胃の薬だと申しますから、御勉強なさりながら、お口へ入れて、なんと思ひまして、こんな物でも持つて上つたのでございます。未だ染々お目には懸りませんけれど、隣の婆が志だと、さうおつしやつて下さいましよ。」

高の知れたる飴の袋！　脾胃の薬も凄じい。これしきの物を貰つて、大の男が禮も言はれぬ、やうなものではあるが、唯其志！　尊さは長者の萬燈より貧の一燈。旦那は思はず頭を低げる。

「それは御深切樣に有難うございます。然し、どうもお氣毒樣でございますなあ。」

かういふ事になつて見ると、旦那も今更姨樣を振りつけたのが面目無くて、

「靜馬も幾許にか喜びませう。有難うございます。」

と太甚く痛入る。

旦那を敵手では談話が御舍まぬので、置く物を置くと、姨様は匆々に歸る。跡に旦那は飴の袋を取上げて、

「氣毒だなあ、無け無しの錢で這樣ものでも買つて來て。」

と呟きながら、袋の口を開けて覗いてゐるのを、小僧は又一心に眺めてゐる。

これでも心配して、靜馬にって持つて來てくれた所が有難い。その實が忝いよ。あゝいふ人だから、何が可からう、彼が可からうと、色々氣を揉むで、飴が可からうとなつたのだ。何か返禮を玄てやらざなるまい。海苔か、美羹か、雞卵かと、魂は戸棚へ入つて、到來物の中を掻搜してゐる間に、女房は蒸したての薩芋のやうになつて歸つて來る。

「おい、惜いことをした。今お客様がお歸りになつた所だ。」

と旦那は眞顔で言ふと、

「お客樣？誰？」　と女房は赤光に照らつく顏を引向ける。

「中てゝ見な。お前の好きなお方よ。珍客さ。」
と鐵楞仙人といふ見得で煙草を輪に吐く。
「誰さ、眞箇に。」　と女房は向になると、俄然店頭に聲ありて、げらげらと笑ふものは小僧平太郎なり。旦那は吃驚して、
「何だ、その聲は？　宛然化物が笑ふやうだ。」
「でも可笑うございますもの、内君は本當にしてゐるんですもの。」
「いゝから默つてろ！　鼻洟でも拭め、鼻洟でも。」
旦那が小僧を窘めてゐる間に、女房は飴の袋に眼を着けて、
「おや、其袋は何です。」
「これが其お客樣のお土産よ。」
「玄みつたれなお土産ぢやありませんか。本當に誰ですよ。」
「實は隣の姨樣よ。」
「へえゝ。」　と女房は笑ひかけて、

「なるほど姨様らしいお土産だ。」
「そんな事を言ふな。此には段々事情があるのだ。」
「何？　お煎餅ですか。麵包菓子らしい。」
「下司張つたことを言はずに、まあ事情を聞けてば。」
「でも、まあ何ですよう。」
「下司張つた奴だなあ。」
と言はせも果てず、ちよろり袋を攫ふ。
「これさ。」　と旦那が手を出す間には口を開けて、
「おや〳〵打切だ。」
「手を着けちや惡いよ、靜馬の所へ來たのだから。」
「靜馬樣の所へ、然う、姨様が？」
と袋を下に置くと、旦那は徐に其由來を語つて、
「憎くはない人さ。」　と珍しいことを言ふ。

「それでも煩くて嫌ひだ、とお前樣常住言つてる癖に。」
「それは、煩いことは煩いやな。煩いと憎くないとは別物だ。」
「でも嫌ひだと言ふぢやありませんか。」
「嫌ひなこともあれば、嫌ひでないこともあらあ。」
「勝手な！」
「何さ、姨樣は嫌ひぢやないけれど、但あの喋りつけられるのに閉口するのよ。今晩も弱らせられたぜ。」と顏を顰める。
「何を其樣に？」
「何をたつて、彼をたつて、可恐く虐られちやつた。あれを敵手に爲やうと謂ふのだから、お前も餘程饒舌には違ひ無い。第一、根が無くちや出來ない仕事だ。」
「なぜ根が無くちや？」
「根も入らうぢや無いかい。あの雜談を神妙に聽いてゐやうと謂ふのは、

なか〳〵の辛抱だぜ。あの病さへ無けりや、申分の無い好い姨様だけれど、人毎に一つの癖はあるものよとは、好く謂つたよ。」
「あれで又彼姨様は好いのですよ。」
「曾我兄弟も大石も敵討たねば尋常の士か。はつはつはつ。」
「でも、まあ深切に好くねえ………。」
と女房は飴の袋を横にしたり、竪にしたり、
「これだつて姨様の嚢中ぢや、なか〳〵大したことだ。」
と獨語のやうに言ふ。
「然とも。これで此飴は廉くないよ。十錢だらうか。」
「十錢はしませうよ。ほんとに氣毒な、姨様の十錢は我家あたりの壹圓より痛事でさあね。」
「我家あたりの壹圓なんぞ、と甚く大盡がるが、そんなに心得てゐるなら、ちつとばかり拜借したいものだ。」

女房は鼻でフン。

「貸せなら貸すまいものでも無いけれど、去年からの貸を一先お返しなさいな。」　と頤を突出す。

「飛でもねえ捏詞を云ふ！　憚んながら未だ嚊の臍繰を胡麻和すほど耄碌は為ねえ。」

「嚊の臍繰？」　と亭主の顔を見て、わざと失笑す。

「何を笑ふのだ。」

「體の好いことをお言ひなさんなよ、嚊の臍繰だなんて。お前様が他に臍繰らせる風か！」

「其中で臍繰るだらう。」

「大概におしなさいな。世間の女房はね、十人が九人までは臍繰つてゐる。それは、偶には芝居の一つも見たからうし、帯も欲しからうし、女房は女房の義理首尾もあらうと、そこは色々察して、大目にも見れば、

少しは餘計にも給つてくれるから、自然と臍繰れるやうなものだけれど

…………。」

「それから慥麼したい。」

「後は言はずとお前樣の惡口さ。」

（九）漂母の餐

互ひに冷一句、熱一句、少時は口説のやうな、戯言のやうな事を言合つて、結極が、

「早く之を二階へ持つて行きなよ。」

といふ旦那の被仰出。然るほどに女房は飴の袋を抱へて、階子を歴つて行くと、書燈耿々として一間張の机を照し、主は壁に靠れの縮小まつて、他愛無く睡てゐる。

女房は竊と火鉢の側へ行つて、

「靜馬樣、もし、お風を引きますよ。」

と鐵瓶の下を覗くと、火は消えて灰ばかり。

「おや、まあ、如何したのだらう。」

と烏府を引寄せる。見ると靜馬は未だ眼を覺まさぬ。

「もし、靜馬樣、靜馬樣！」
と猿臂を伸して靜馬の肩の邊を搖れば、愕然と夢覺めて、
「あゝ寒。」　と身顫して、眼を刮り〳〵欠をする。
「お風を引きますよ。」
「はあ、ついとろ〳〵と、あゝ睡かつた。」
と復た眼を刮つて、女房が火を熾してゐるのに心着いて、
「これは奈何も憚樣でございます。」
「貴方、火も何も消えてるのですもの。」
「消えましたかな。それぢや餘程睡たと見える。」　と生欠をして涙を浮べる。女房は火を吹いてゐた顏を擧げて、
「お睡うござんせう、碌にお寢みなさらないのだから。今直お湯が沸立ちますと、お眼醒にお茶を煮れて上げます。」
「有難うございます。どうも色々御厄介になりまして、お手の無い所を

濟みません。」
「何の、そんな遠慮が入るものですか。ちつともお構ひ申しは爲ないのですから、貴方も我儘にしてゐて下さいよ。私はかういふ不作法者ですから、お客樣も何もありはしないので、なか〳〵お世話どころぢやありません。」
とぶう〳〵火を吹立てる。
「否どういたしまして。お蔭樣で思ふやうに勉强が出來ます。」
自分から言出して、(勉强)と聞くと、忽ち心に浮ぶ四月の成績、其が案じられて鬱ぎこむ。
「私は今凶な夢を見ましてね…………。」
と靜馬は氣の無い顏をして話しかけると、
「もうお止なさいよう。貴方は苦勞性だから可けない。夢を見たからつて一々氣にした日には、際限は有りはしません。」

「それは何も、信じる譯ぢやありませんけれど、かういふ矢先だから餘り心地が快くないです。」

「貴方は男子にも似合はない。善いも惡いもあるものですか。夢ぐらゐ馬鹿〳〵しいものはありはしません。貴方が餘り苦勞に爲過ぎるから、それで凶な夢を見るのですよ。」

「無論自分でも然思つてるですけれど……。」

嗟乎と長吁をして、

「實に學問は否だ！」

「また其樣ことをお言ひなさるよ。」

「此苦艱をするくらゐなら、死んだ方が負勝だと思ふですよ。」

「それは貴方、及第さへすりや先生になるのですもの。苦しいのも愁いのも、なあに今に昔語ですよ。」

「早く昔語にして、此二階で一晩皆樣を御馳走したいものです。」

「家ぢや其日はお赤飯を炊きますよ。」

と女房は膝を進めると、何と思つたか、靜馬は首を俛れて、ほろ〳〵と涙を滴す。

「如何なすつたの？」

と女房は尋ねたものゝ、手持無沙汰に呆れてゐる。靜馬は鼻を塞らして、

「それほど迄に思つて下さるかと思ふと、私そう、う、嬉しくて……。」

と涙を拭く。

「それは、かうしてねえ、一家に在て貴方の勉強してゐらつしやる所を見て居るのですもの、拙夫だつて私だつて、どんなにか躍起勃起思つてるか知れやしません。ですから貴方が及第なすつたら、お赤飯を炊いて祝はうつて、さう申してをるのですよ。」

彼此話す間に火は熾る、鐵瓶に松風は聞える。

「おや、私はすつぱり忘れてゐた。かういふお茶菓子が。」

と例の飴の袋を女房が出すのを見て、
「何ですか、其はどうも。」　と靜馬は一寸頭を低げる。
「これはね、今朝ほど下に來てゐました隣の姨樣が、貴方へつて、先刻わざ〳〵持つて來たのですよ。飴か何かで、お美くは無いものでせうけれど、貴方の話を云たものですから、御勉强の御見舞だといつて、厄介になつてゐるその、其苦しい中で、心に懸けて寄來したのですから、一つまあ食べてお上げなさいよ。」　と手渡すと、靜馬は戴いて机に載せて、眤と眺めてゐたが、忽ち投げるやうに聲を放つて、
「噫、及第せずにはゐられない！」
「衆の念ばかりでも今度は及第ですよ。」
と女房は急須に湯を注す。
「皆樣は這般に念つて下さるけれど、本人の私が覺束んのだから………。
「何、そんな事があるものですか。まあお茶でも上つて氣を拔いて。そ

の飴を上つて御覧なさいな。」
「はい有難う。早速戴きませう。」
と袋の口を開けて、女房へ差向けながら、
「あなた一つ如何です。」
「まあ貴方。」　と推返す。
「それぢやお先へ。」　と一つ摘むで、袋を女房の前に置いて、
「召上つて下さいよ。よう召上つて。」
と強ひるので、女房も袋を取上げると、累々たる飴の中に唯一つ、確に辻占と見える紙片が入つてゐる。辻占入かと思へば、二つとは無い。兎も角も女房は摘出して、
「おや〳〵辻占がありましたよ。」　と珍しがる。静馬も顔を出して、
「へえ、辻占が入つてるのですか。」
「何、入つてるのぢやありませんけれど、入つてたので、迷子の辻占。」

「何といふ辻占です。」

と氣にして益顏を出す。女房は之に歸命頂禮して、南無乾元亨利、乾元亨利、

「さあ御覽なさい。」と火鉢の角に置く。靜馬は取つて披いて見ると、其文に曰く、

「たのもしいよ。」

此折からの辻占は、御夢想の神託よりも肝に銘じて、靜馬は心を轟かす傍に、女房は浪に推戴いて歡ぶ。靜馬は寂しく笑ひながら、

「好い辻占ですねえ。」

「好いの何のつて。貴方、今度はいよ〳〵及第に極りましたよ。」

と掲示を見て來たやうに女房は確に請合ふ。

「はゝはゝ、あなた一人で極めてゐる。」

「極めてる譯ちやありませんけれど、ちやんと如斯極つてるから仕方が

無いぢやありませんか。」

・(たのもしいよ)を掌上に載せて靜馬へ突附ける。靜馬は歡喜さを推隱すやうな風が見えて、机に片肱立てゝ頭を掻きながら、

「當にはならんけれど、惡い心地は爲ませんなあ。」

「當にならないやうなもので、なか〳〵是で馬鹿にできませんよ。物には前表といふ事が屹度有ります。それは爭はれないもの。」

何かゞ憑託つたやうに女房は力むだ顏をして、いと〳〵嚴かに說示すので、靜馬は已むを得ず謹聽の首を傾ける。

「この辻占がさ、貴方、此飴に入つてゐるものに極つてゐるなら、何でも有りは爲ませんわね。ですけれど、唯一つ、どうか間違つて紛れこむでゐたのですから、唯の辻占とは理が違ひますよ。」

「然ですねえ。」と靜馬は輕く應へると、

「然ですとも。」と女房は力を入れる。

未だ〳〵何か言はうとする所へ小僧が呼びに來る。

「唯よ。」　と中腰になつて、

「此辻占を少し貸して下さいまし。下へ行つて見せてやりますから。而して明日また姨様が來ませうから、來たら見せませうよ。嘸まあ、眞箇に、どんなに歡びますだらう。」

「明日姨様が來たら知らして下さいな。一寸挨拶に………。」

「あゝ、ようございます。まあ折角御勉强なさいまし。」

と階子の口まで行つたが、ちよこ〳〵と立戻つて、

「姨様といふ人はね、まことに話の冗い人ですから、その積で好加減に遇つておかないと可けませんからね。」

「あゝ然ですか。」　と飴の袋を取つて、

「之を何かに入れて下さいな。私は歯が悪いから、此様には食べられんのですから、半分ほど其方へ何卒。」

「でも折角姨様の…………。」と斷るのを、種々に言宥められて、女房はまた袋を抱へて下りて行く。跡は大風の凪いだやうと謂ふほどでも無いが、潮に退かれて汀に殘る流木の如く、獨り侘しく靜馬は懷手をして考へてゐたが、やがて心に問ひ、心に應ふる如く、

「此飴は丁度漂母の餐だ！」

汝長大にして、好むで劍を帶ぶると雖も、能く我を刺さむや。似てゐる、餘程似てゐる。この辻占はまた好い。妻君の說に從つて、物には前表が有るとすると、漂母の餐は非常に好い辻占だ。

「あゝ漂母の餐、漂母の餐！」と机に向直る。

（十）若松様

昨夜の留守も本意無ければ、靜馬の消息も聞きたくて、姨樣は朝の勤行をして、それから膳に向つて、箸を措くと、少時天昇してゐたが、やがて例の（おさすり）の銘仙の半纏を着して、徐々下りて來る。

女房は膳椀の後仕舞をして、今襷を外したといふ所で、まだ臺所に逍遙してゐる。

「姨樣、何方へ？」

「あの、一寸お隣へ。」

「然う。」　と苦り切つて横を向く。

「お隣へ日參だ。」　と捨言葉で、姨樣は倉皇出て行く。跡見送りて女房は、と芝居ならばチョボが入らうといふ見得で、

「またお隣！　ほんとに日參だよ。朝朗から出懸けて行つて、長々と話

込むのだらう。察しの無い人ぢやないか、何處の家だつて迷惑するあね。一體まあ何の用があるのだらう、毎日々々。」

女房は鼠不入の前に茫然突立つてゐる間に、はや隣家では話聲がする。煙草屋の内君は、先づ昨夜の飴の禮を述べる。次いで靜馬の大喜を話す。あれから直に歸つた趣を語る。扨其後が火鉢の小抽斗から恭しく（たのもしいよ）を取出して、その故事來歷を具に陳述る。

姨様は之を聞くと、前後に（おや、まあ）の二三十も並べて、ぞく〳〵歡ぶ。朝から晩まで鬱通してゐる靜馬も、此辻占を見た時ばかりは、不思笑つたなど〻話すと、姨様はころ〳〵歡ぶ。さうして見ると、此は凡の辻占では無い、如來樣の御示に違あるまいといふが發端で、昨日から阿彌陀樣に試驗及第の願を掛けて、四月の當日まで、御勤行の外に毎晩怠らず正信偈を唱へると打明ければ、女房は有繫に其程までとは思ひも寄らず、（まあ、どうも）とばかりで、少時は外に言葉が無かつたが、俄に

小僧を呼んで、靜馬へ知らせにやる。

程もあらせず、蓬頭垢面の人、昔は奉書紬の代診羽織、今は紋所の黄ばむで、袖口の傷むだのを、折目低に着做して、屠所の羊の怏々として下りて來る。姨樣は見るより、少しく席を讓つて待つと、靜馬はのつそり火鉢の側に坐つて、

「これは始めまして。」と慇懃に挨拶する。姨樣は竦むだやうに丸くなつて、首を低げながら、

「始めましてお目に懸ります。」

「昨夜はまた頂戴物をいた玄まして、有難う存じまする。」

「いゝえ貴方、まことにお愧かしい、失禮な物を差上げまして、御挨拶では婆が痛入ります。さあ貴方此方へ。」

と體を片寄せる。

女房は靜馬の前に辻占を出して、

「お大事な品を御返し申します。此は貴方の守本尊ですから、大事にしてお置きなさいましよ。」

と幾分か姨様に御馳走を言ふ。靜馬は受取りながら、

「ほんに守本尊です。」　と此も嬉しがらせると、姨様は忽ち顔の紐を弛まして、

「守本尊！」　と頷く。

「靜馬樣、それから未だ、貴方御禮をおつしやらなければ成らない事がありますよ。姨様がまあ御深切にねえ。」

といふ前文で、正信偈の始末を話す。靜馬は殊勝に耳を澄してゐたが、

「ほんとに有難いぢやありませんか。」

と局を結びつゝ女房は感歎すると、

「飛だ事を、あなた。」　と姨様は痛入る後から、俯いてゐた顔を擧げて、

「それは如何も御深切に。何ともお禮の申樣がございません。」

と兩手を支へて丁寧に禮をする。媄樣は慌てゝ、

「あれ、貴方勿體ない。何卒もうお手をお上げなすつて。私もお話を伺ひましてねえ、陰ながら御心配申してをるのでございますよ。這箇婆が幾許御心配を申したからとつて、何といふ事はございませんけれど、それでも氣は心で、ねえ貴方。と申した所で、私の力では及ばないことだと存じまして、昨日からまあ一心に如來樣にお願ひ申してをるのでございますよ。御文樣にも、(更に餘の方へ心を振らず、一心一向に佛助けたまへと申さむ衆生をば、設ひ罪業は深重なりとも、必ず彌陀如來は救ひまゐますべし。是則ち第十八の念佛往生の誓願の心なり。)と申ゐまして、かういふ御有難い如來樣でございますから……。え、何とおつしやいます、飴が結構だ？　まあ、あんな言をおつしやつて、年寄をお喜ばしなさいますよ。不斷お美いものを召上りつけて在らつゐやるから、どうせ

お口にはお合ひなさいますまいけれど、あれでも尋常の打切と違ひまして、越後の高田といふ所から參るので、脾胃を調へ、痰咳には妙藥[illegible]と申しますから。否、辻占なんぞが入つてをる理は無いのでございますよ。其は全く内君のお話の通り、えゝ然でございますとも、前表―前表でございますとも。文句が宜しいのぢやございませんか、（たのもしいよ）とは。あの辻占といふものが、當節は一向行りませんけれど、私輩の若い時分には……。」

と姨樣の談は之を譬ふるに若松樣の如く、見る〳〵枝も榮えて葉も茂る。話をするのも口が酸くなるが、之を受けるのも隨分肩が凝る。靜馬も良持餘した狀で、茶ばかり飮んで紛らしてゐるのを、女房は見かねて、

「さあ貴方、御免を蒙つて御勉强なさいまし。」

と幕を切ると、姨樣も心着いて、

「さあ何卒お構無く。」

「それぢや失禮いたします。」
と靜馬はお辭儀無しに中座する。姨樣は恍惚と後影を見送つて、
「好い御人品だ。今に立派な御方にお成なさいますよ。」

（十一）生死の界

却説に昨日と過ぎ、今日と暮し、寒い〳〵といふ間に蒲田の梅が開く、上野の彼岸櫻が咲初める、それ白酒を賣出す、蝶々が飛ぶ。三月もやうやう盡きなむとするほどに、味木靜馬が生死の界は波の寄するが如く、一歩は一歩より逼來る。此間には格別變つた事も無かつた。姨様が毎晩正信偈を唱へる事、煙草屋へ日參の事、夫婦は其事情を聞いて、大きにお世話だと憚ばぬ事、繁〳〵の御出には内君も有繋に待ひかぬる事、靜馬は苦學に苦學を積み、憂慮に憂慮を重ぬる事、韓信と漂母と馴染になる事、山路から折〳〵見舞が來る事。まづは這箇もので、もし強ひて別條は無いかとならば、變果てたのは靜馬の容貌である。

蓬髮垢面、其は始めて姨様が見た時の味木靜馬であつたが、二月の後の今日の靜馬は、之を喪家の犬と謂はうが。地獄變相の圖にあると謂はう

か、旦夕も危き患者と謂はうか、長く土牢に埋もるゝ身と謂はうか、見る影は無い！

もう二三箇月此儘に措くならば、今將半死の身は竟に机の下に僵れて、肉塊氷の如く、喚べども起きず、六親眷屬聚りて、歎くに其効無く、壁隣には涙ながらの白骨の文、夜窓の雨の寂しくも、花は散りて野外の土となるを、悲むやうの事にならうも知れぬ。

幸ひにして試驗は四月の一日！ 及落の結果は左にも右にも、かほどの志を齎し、恨を遺して、歸らぬ身ともならず、之を最期の思出に、七生までの怨敵に一矢射て、鎧の札が貫るか、鏃が鈍るか、運を天に任せ、勝負を一擧に決して、事の成らざる曉には、命一つを捨つるまでの覺悟‥ 其上ならば、死も更に憾無き靜馬が、世間は花に游ぶ春の日を、試驗前の心の中は、凡そ如何なるものであらう。惟ふに無實の罪に陷ちて救ふ人無く、助くる神無く、手を束ねて死を待つ人の心！ 其が靜馬の

心である。

渠が此二月餘を如何に苦しみも、氣遣ひも爲たかは、更めて爰には說かぬ。見る影も無いとばかりで、頷く首は頷く。噫、至誠は天を貫くと聞けば、靜馬は及第するに違無い。とは謂ふものゝ、倶不戴天の讐の爲に、果敢なくも返討に遭つた孝子の例もあれば、及第か、落第か、笑ふか、泣くか。泣いても笑つても、生死の界はや其處に。

(十二) 唐茄子

朴卿先生は奥の小座敷に晩酌の卓を控へて、側に娘のお香は結立の島田に、浴後の薄化粧、十七の花の姿は匂ひこぼるゝばかりで、端然として給仕を爲てゐる。

先生は臺附の玻璃盃を大樣に取り擧げて、飛絣の頤髯を撫で〳〵、

「羹は未だかい。早く爲てくれんと、二合ばかりの御扶持は無くなつて爲まふよ。まことに心細い。」

「まあ慢々お上んなさいよ。今玄關の人が御膳で、臺所が混雜してゐるのですから。」

と娘は勝手の方を窺ひながら宥める。

「是許の酒を慢々飲まされては、鯨が溝へ放されたやうなものだ。」

「あれ、あんな事を。今直に出來ますよ。」

「氣休を言ふな。使者に立て。使者に立て。御祝儀を貰ふばかりが能ぢや無い、お茶屋の姉様は姉様らしく働くのだ。」
「まあ、否な。いつ御祝儀を下すつた？」
と立ちかけたが復た坐り、父親の顏を覗込むで、
「あの、父樣、此間の彼ね、それぢや買つて下さいな、ねえ。」
「此間の彼？　妙な物だな、此間の彼とは。其は食べるものか。」
お香は恨めしさうな顏をして、
「否、もう。わざと知らない風なんぞを爲すつて。此間の、そら、かの字の持つて來たゆの字のちの字。」
と梧かしげに卓の上を敲く。
「さあ、いよ〳〵解らなくなつて來た。かの字のゆの字のちの字？」
「解つたでせう。」　と眤と視る。朴卿は莞爾々々して、
「それぢや私の方でも、今の謎見たやうな言で挨拶をするから、判じな

ければ可けんよ。」
「はあ、はあ。」とべつたり坐つて、唯嬉しさうに父親の言葉を待つてゐる。朴卿は舐唇をして、
「可いかい。」
「あゝ、可うございます。」
「それは、ごの字に、めの字に、んの字さ。」
「ごの字、めの字、ごめ、ん………否、私は！」
とお香は拗て立上る。所へ夫人は木地塗の盃に羹の椀を載せて持つて來る。
「お香お前お酌をしないのかえ。」
「でも、父様が種々な事を………。」
と父親の顔を見て、また母親の顔を見て、澁々坐る。
「自分が種々な事を言ひながら。ごの字にめの字だなんて。」

「あら、其は父様がおつしやつたのぢやありませんか。」
「お前も、何だか、そんなやうな言を云つたよ。まあ何しろ、焦れてゐた羹が來た、有難い。ほゝう、潮煮か。これは妙だ。そこで一盃注いでもらはう。」
と玻璃盃を出す。お香は故と少許注いで、澄して德利を置くと、
「仇を爲る喃。」　と父親は醉眼朦朧と睨める。
「ちやんとお酌をなさい。」
と母親に窘められて、
「でも父様は。私はもう悔しくつて。」
「如何したのさ。」
「私は言はないけれど、お肚の中ぢや大變に恨むでる。」
と手巾を指に卷付けて、ぐい〳〵引張る。
兩親は一度に笑出して、

「お肚の中で恨むでゐるなら、何も斷るには及ばんのに。」
と朴卿は頭を撫でゝ可笑がる。
「お前に恨まれても、父樣は恐いことは無いとさ。」
とまた母親に冷かされて、お香は益大變に恨むで、
「私は覺えてます。忘れやしない。」
と食指で卓の上に棒を引いたり、輪を書いたり。獨りしよげてゐる。
爾時先生は箸を持つ手に礑と小膝を拊つて、
「おゝ、明日、明後日は朔日、味木の試驗が始る。久しう見えんが、如何したらうな。」
「半月ばかりも參りませんが、何でも一心に勉強して在るに違ありません。何卒今度は好く參つてくれゝば宜しうございますが……。」
と夫人は熟と考へこむ。
「間際に餘り勉強するのは却て良くない。些と氣を拔きに來れば可いに

なあ。人間は惡く度胸の据つた奴も困るが、如彼また神經質でも可かんよ。試驗前などゝ來たら酒に限る。微醉機嫌でな、太平樂を抒べてゐる間は、泰山前に崩るゝと雖も懼れず、勇氣が充滿してな、まづ此程の興奮劑は無い。其を味木などは一滴も飲めんとは情無いことだ。」

「貴方は又試驗前でも無いのに毎日。」

と母親は笑ふ。お香は其尾に附いて、

「父樣が試驗をお受けなさらうものなら、肝心の日に宿醒で缺席でせう。」

先生は傲然と髯を掀げて、

「いくら醉つても五斗兵衛のやうなものだ。今擊ちし鐵砲は。」

と御自分の假聲を遣ひ、

「なんて、勇士は酒の爲に事を過るなどゝいふことは無いのさ。その證據には、我は醉つてもついに物に躓いた例が無い。」

「何とおつしやつたつて、貴方の勇士は信にはなりませんけれど、味木

様のやうな人は少しは御酒を飲んだ方が可いので。」
「待て〳〵。味木様のやうな人は？　やうな人はが甚く耳立つ。それぢや私のやうな人は甚麼ものだらう。」
と詰寄せるといふ見得で、身を横に肩を聳かす。
「さあ、お香甚麼だらうねえ。」
と夫人は嫣然娘を顧る。作眼をして睨めてゐる父親の顔を、お香は（柳に風）といふ見やうをして、
「今に中風になるのが可いなら、多度お上んなさいましな。」
と母親と相見て笑ふ。
「中風？　酒を飲むで中風になつたものが何所の國に在る？」
「其邊中に在るぢやございませんか。」　と夫人は息巻く。
「馬鹿な？　彼はな、渾是唐茄子で飲むからだ。」
此洒落大出來といふ氣味で、先生自ら大に笑ふ。お香は躍起となつて、

「唐茄子で中風になるといふのは嘘ですよ、ねえ母様。」

「唐茄子の肩を持つのは可笑い。あれは蔕を摑むで、裏返して尻を見るものだ。」

「そんな事は知つてゐますよ。」とお香は眞面目に應へる。

「野暮で困るな、今のは洒落だ。洒落の解らんやうなものと論をするのは、總菜で酒を飮むが如しさ。」

（十三）別の盃

折から無作法に疊觸の足音がして、襖が啓けば、十六ばかりの取次兼務の藥局生が顏を出す。

「味木樣が入らつしやいました。」と案內して立つと、入違ひに味本は徐々と入つて來て、ぴたりと端近に坐る。

「今晚は。御機嫌よろしう。大變御無沙汰をいたしました。」

と袂からピンヘッドを取出すと、一所に摑出した紙屑を落して、慌て丶拾ひこむ。

「火鉢の傍へお寄なさい。」

と夫人は、お香と共に左右に開いて、手爐の前に席を拵へる。先生は靜馬を進まして、

「久しく見えなかつたが、相不變勉強か。」

「はい、勉強だけは十分にいたしたつもりでございますが。」
と下を向いて煙草を燻ける。其横顔をお香は凝然と視てゐたが、
「味木樣は又痩せてねえ。」　と驚いたかの如く眉を顰める。
「ほんにねえ、宛然病後といふ鹽梅。此手の細減けたこと。而して眼がまた大變陷落ましたね。」
と夫人も氣毒さうに唯眺めてゐる。
「そんなに痩せましたか。」　と靜馬は顏を撫でる。
「痩せたとも。まだ此から痩せる喃。」
と先生は卓に倚懸つて、酌冷しの一盃をぐいと飲むで、
「まづ明後日の首途の餞を獻じやう。」
と靜馬へ差す。お香は德利を持つたが、冷えてゐるので燗直しに立つ。
「どうだ、樣子は。今度は好く行きさうかな。」
「左樣、どうも……。」　と頭を搔く。

「どうもでは可かんよ。どうでもと、でを一字入れて欲しいものだ。」
「無論自分では其決心でございますけれど。」
「自分で澤山。己より外に天下に恃むべきものは無い。一つ目覺しく行つてくれ。」
「はい。」　と靜馬は俯いてゐる。爰へお香は燗をして來て、
「はい味木樣。」　と銚子を持つ。靜馬は會釋をして、
「どうぞ少々。」　と半分許受けたのを、蚊の嘗めるほど一口附けて下に置く。夫人は察して、
「味木樣に御酒は可哀さうですよ。お茶で甘味がいゝ。お香、戸棚にワッフルがある。それから羊羹が食籠に。」
「これ／＼、戰の首途をお茶に羊羹で祝ふ？　そんな故實があるものか。」
と先生は兩手を擧げて恐慌する。
「ですから貴方は御酒、此方はお茶で。」

「酒と茶では甚だ親睦せんね。それは下戸なら下戸で可いけれど、羊羹だの、餅菓子だのと、見苦しい物を陳列するのは少し遠慮してもらはうか。」

と推問答の間に、はやお香は茶器を排べる。食籠、菓子折を取擴げる。

先生は喟然として、

「吁、とう／＼開店だ。香は又茶となると惡く輕捷に周旋するよ。その心意氣で我の酌をしたり、また量などを良くさへすれば、實に其筋から御沙汰もあるべき孝女だけれど、嗟呼あつぱれ不孝なものだ。天唐茄子をして汝を中風に爲らしめる。恐る可し、恐る可し。」

「羊羹では中風にはなりませんから。」

とお香は澄したもので茶を煮る。

「先生は一口召上ると御機嫌で、結構でございます。」

と靜馬は愛想を言ふ。夫人は首を掉つて、

「結構なことはありませんよ、もう〳〵手ばかり懸つて。貴方なんぞこそ實に仕合。何でも人間は下戸に限るの。」

と聞えよがしに述懐する。先生は呵々と笑つて、

「羊羹安ぞ猩々の志を知らむや。味木！」　と呼びかける。

「はい。」　と靜馬は畏ると、

「お前は茶ばかり飮むでるから落第するのだ。」

醉中の漫言とは謂ひながら、折からの靜馬が胸には緊と徹へたか、返す言葉も無くて萎々と首を俛れる。先生は何處までも洒落の氣で、

「お前の落第は皆茶の爲す業さ。だから今度及第しやうと念ふなら、是非之を一盃飮まんければ可かん。如何？　及第する氣は無いか。」

と卓の角に丁と玻璃盃を置いて、其を靜馬に指す。夫人は此惡洒落を見るに堪へかねて、

「貴方何ですねえ。味木樣が迷惑ですよ。やつとの思で御返盃をしたば

かりぢやございませんか。そんな殺生な事を爲さるものぢやございません。」

と膝を進めて諫める。先生は笑つて應へぬ。靜馬は擡げる面に底寂しい微笑を含むで、

「屹度及第いたしますなら戴きませう。」

「勿論及第！　さあ及第すべし。」

と親ら銚子を取つて切りに迫る。

「緣起でございますから、そんなら盈々と頂戴いたします。」

と靜馬は惡怯れず玻璃盃を取擧げる。

「盈々！　此は壯哉だ、面白い。待て〳〵、さういふ覺悟なら、我も一つ天地に誓ふよ。やあ〳〵、遠からむものは音にも聞け、近くは寄つて眼にも見よ。我こそは小兒科に然る醫者ありと聞えたる、日本橋區檜物町の住人山路朴卿なり。此度代診太夫味木靜馬守後期試驗及第祈禱の爲

とあつて……其から何と言はうなあ。」
と夫人を顧ると、
「まあ早くお酌をなさい、味木様が草臥れますわね。」
「我だつて草臥れる。」　と盈々注ぐ。
「味木様、無理にお飲みなさんなよ、毒ですから。」
と夫人は案じる。
「はい。なに、一盃ぐらゐは。先生、では戴きます。」
と口の端へ玻璃盃を引附けると見る間に、忽ち仰いで唯一息に傾けた見事さ。夫人もお香も眼を瞪つて驚く。
「見事、見事！　及第疑無しだ。」
と先生は、扇を颯と開いて高く麾かぬばかりの氣色で、且呆れ、且力むでゐる。靜馬は盃を先生へ差しながら、面を背けて涙を忍ぶ聲の斷續に、
「な、な、永々御、御高……恩を、う、うけま……して。」

先生はぎろりと靜馬の樣子を見て、

「縁があつて、師匠となり、弟子となれば、親子も同然さ。今更他人がましく、恩の何のと斷ることは無い。何を泣いてる？　景氣の惡い。一曲御舞ひ候へといふ所ぢやないか。」

「こ、今夜、い、いたゞきましたお盃が、……………或は一生の。」

と堰敢へぬ涙に咽ぶ。夫人は目授でお香を次の間へ立たして、

「味木樣、なぜ又今夜に限つて、そんな否なことをお言ひなさるの？」

「奥樣、私はもう今度落第いたしましたら、面目がございませんから、もう二度とお目には懸りません。それで、今夜餘所ながら御暇乞に上りましたのですが、十四の年から御恩に預りまして、今年でもう十二年、朝晩お顏を見てをりますので、今では親よりもお可懷う思ひまする先生や奥樣に、此限りお別れ申すのかと思ひますと、情無くなりまして、つい／＼涙が。」

と膝に手を置いて俯きながら歔欷をしてゐる。

「お前様が幾許此限別れるとおいひでも、先生が別れさせはしませんわね。もう〳〵、そんな氣の弱いことをおつしやんなよ。」

と夫人は温和に慰める。

「面目無いから二度とはお目に懸らん？　而して如何するのだ。國へ歸つて百姓でも爲る氣か。」

と先生は笑ひながら詰る。

「國へも歸られませんので。」

と靜馬は唇を噛むで涙を呑む。

「國へも歸られん。それぢや往所が無いぢやないか。」

「はい、往所がございません。」

「往所がございません！　甚く落着いてゐるな。まあ、そんな言を云はずに、最一度此家へ歸つて來るさ。お前は面目無いといふけれど、男は

氣で持てだ。肚の中では面目無くても、其を一々外へ表はして、面目無がつて騒ぐやうでは、到底事を成すには足らんよ。お前が他の世話になつてゐながら、平生怠つて落第する。さうしたら面目無からう。けれども一心不亂に勉强してゐて蹶くのだから、我は實に傍から氣毒でならんけれども味木、勝負は時の運だ！　楠正成ほどの智勇兼備の大將でも湊川で討死をしたよ。それから見れば、お前は何だ。十善の天子に賴まれ奉り、御國の爲に一命をなどゝいふわけでも無い、高が一個人の私の爲の開業試驗で、十度や二十度落第するのは、更に憾とするには足らんと我は思ふ。面目無いなどゝいふのは婦人女子の言さ。お前も男なら、殘念だと言ふが可い。」

「無論殘念でござります。」

「殘念！　殘念と言つたね。よし、殘念ならば斃れるまでやれ。唯殘念でお仕舞では不得心だ。死ぬまでやつてもらはう、死ぬまで喃。今年は

お前二十六か。人間の定命五十年とすると、まだ二十四年あるな。年に二度宛の試驗だから四十八度、隨分ある！　其中一度ぐらゐは中るだらう。米相場でも、二三萬圓持つて始終掛つてる中には、一度は言ふ目が出るさうだ。試驗はまさか蠣殼町のやうなものでも無からう。其氣で力を落さずに幾度でもやつて見るさ。お前は一體氣が小さい。度胸が無いから困るよ。鮟鱇と男は膽で買ふのだ。何でも楠正成を忘れては可かん。嗚呼忠臣楠氏墓さ。あゝ醉つた。醉つた。お香、香や、枕をくれ。」
と先生は肱を枕に、ごろりと仰向に倒れる。
靜馬は手爐の緣に兩手を纔に掛けて、目を閉ぢて俯いてゐる。
「幾度落第しても構はない、と謂ふわけぢやありませんけれど、試驗は拍子物だともいふし、お前樣が又不斷怠けてゐるといふのでも無いのだから、面目無いの、此限會はないのと、そんな事はありませんよ。國でもお父樣がねえ、如何なにか待つてお在でせうから、今度は何卒憤發し

て、一つ喝采とやつて下さい。」

と夫人の劬る傍に、先生は無頓着の高鼾。

(十四) おもひ／＼の贐

靜馬は思ふまゝ泣いて、夫人は辭の有らむ限慰めて、力は落すまい、短氣は出すまい、辛抱しますと固く約束して、もうお暇と膝を立てる。夫人は醉倒れてゐる先生を搖起す。

「もう何卒其儘に。」と靜馬は掩遏めて、

「左樣ならば御機嫌よろしう。」

「それぢや、まあ隨分お大事に。眞箇に氣を大きく持つてねえ、而して好い便を聞かして下さいよ。」

「はい、成可好い便をお聞かせ申します。左樣ならば、お孃樣。」

「もうお歸り。そんなら折角まあ。近い內に又入らつしやいな。」

この挨拶の間に先生は夫人に起されて、黃八丈の臥被を勃起々々擡げて、目を剌りながら卓の前に胡坐を搔く。まづ四邊を見廻して、

「歸るのか。」と寢惚聲、靜馬は優し〳〵兩手を支へて、

「はい、もうお暇をいたします。」

「あゝ然か。何だか甚く北の方が辯じてゐたやうだつた、寤に聞いてゐたが、長談義だつたな。」

「はい、色々御深切におつしやつて下さいまして。」

「忽ち夢の覺むるが如しか。」

「はい

―此方は夢と共に醉が覺めて、あゝ薄寒い。何でも先刻言つた通り。楠正成を忘れちや可かんぜ。十二年間我の世話になつたのを、恩……………とも行くまいが、有難いぐらゐには思つてゐるかい。」

「其は毎々親父からも申して參りますが、先生の御恩は生の親より……。」

「よろしい。而して其報恩は何時爲てくれる？」

先生は未だ醉つてゐられる、と靜馬は思つたが、

「何れ私か一人前になりました上は。」
「うむ、一人前といふのは、一人前の醫者になつてからといふ意だらうなあ。」
「左樣でございます。」
父樣は寢惚けてゐるのだらうと、お香は獨り氣を揉んで、一寸〳〵母親の顏を見る。
「其前に報恩は出來まいかな。」
「いたしたいと存じましても、今尙お世話になつてをる身分でございますから。」
「なるほど、夫では一人前になつてから、屹度十二年間の報恩は爲てそらはんければ成らん。恩を知らざるものは畜生だ。」
「はい。」と靜馬は忸怩してゐる。
「あゝ、其を聞いたら宜しい。試驗はいよ〳〵明後日からだな。畜生の

試驗を受けるのは、武士の戰場へ出るも同じ事だ。私が首途を一つ祝はう。先刻の盃の嚏は大分迷惑のやうだつた。」

「否、どう致えまして。」

「改めて嚏をな。香や、私の紙入を。」

お香は立つて、納戸の小簞笥から絽刺繡の紙入を持つて來る。先生は其中から若干金か紙に包むで、

「これで一盃景氣を附けて……一盃ぢや無かつた、一膳か。それぢや景氣が附かずに、停滯れるだらうなあ。」

と底の拔けたやうに笑ふ。それに釣られて三人も笑ふ。

爾時お香は母親の肩へ笑顏を差寄せて、何を叩くのか、喃ばかりが兩三聞える。母親は頷いて、

「あゝ、持つてお出な、折角拵へたものを。」

「でも巧く出來てないでねえ。」とお香は躊躇してゐる。

「何だ。拵へたの、うまくないのと。御馳走なら早く持つて來な。」
と先生の早合點。
「あら、父樣、食物ぢやありません。」
(好い物)といはぬばかりに、お香は獨りで承知してゐるのを、
「香がね、貴方。」　と母親に話しかけられて、
「あら母樣。」　と慌てゝ目顏で遮る。
「香が如何したと?」
「香からも贐がございますと。」
突如に秘密を發かれて、お香は餘りの事に何も言はず、籠る思は千萬無量とも謂ふべき横眼で、母樣の顏をゑろり。
「感心々々。持つて來な、早く持つて來なよ。何だ、お前からの贐は。元結か、洗粉か。」
「もつと上等の品ださうで。」

と母様は益裏切る。お香は怫然として、

「嘘！　何も有りは爲ないのですよ。」

「折角出來てゐるものを。否な人だよ。早く持つてお出なさいな。」

と吁母様は竟に敵となる。

「持つて來なよ、洗粉でも何でも可いから。どうでお前の寄贈ぢや、大出來で手巾が二枚、それとも更紗の風呂敷か――玉轉へ行つたやうだ。」

と先生は獨りで　つて獨りで笑ふ。

「玉轉だつて。あんな憎いことを。玉轉でも可うございますよ。」

とお香は益拗て、もう持つて來ないと決心する。其間に靜馬は起ちかける、兩親からは逼られる。懲ひ贐など〻言出されたからは、靜馬の手前品物を出さねばならず、出せば口の惡い父様が何とか冷かすに極つてゐる。出さうか、出すまいか、德、福、貧乏と襟を數ふる遑も無く、急立てられてお香は竟に取つて來る。

洗粉か、手巾二枚か、但しは風呂敷か、何やら知れぬやうに袖の下に掩して、母様の陰で竊と静馬へ渡してしまふ。
先生は故と脊延をして、覗きながら、
「何だ〳〵。金米糖の箱だな。」
「好物！　味木様、此處で出しちや否ですよ。」
「はい、有難う存じます。先生、かういふ物を頂戴いたし……。」
と律義に明るい處へ持出すのを、
「味木様、可けま……。」
とお香が奪取らむとするより早く、母様が攫つて父様の御目に懸ける。
「何だ。本式だな、恭しく水引なんぞを懸けこむで。」
と包紙の端を排つて見る。
「何かと思つたら肱褥か。ほう、紫縮緬！　どうして〳〵、半襟の御古を綴合して、一錢が紫粉のお手染とは見えない。これは結構な物だ。」

と例の皮肉を言ひ〳〵拈くる。
「可哀さうに。それでも新しいんですよ。」
と有繋に母様は肩を持つ。
「一體肱褥とは如何いふ着想だらう。」
「その紫が、貴方趣向なんですわね。」
「紫が？　うむ、紫！」　と先生は肱褥を靜馬に見せる。
「なるほど、紫！」　と靜馬は飛立つほど喜ぶ。
醫術開業試驗所から及第を通知する郵便端書は蒟蒻版摺、紫は其色である！
重ね〳〵の吉兆！　第一には漂母の餐の越後の飴、其中に辻占の（たのもしいよ）、今生の暇乞に來れば、思懸無く紫の肱褥。心細い折からは果敢ない事も便に慰められて、靜馬は機嫌を復して煙草屋に歸ると、二階は留守間に掃除をして、始終取散してある机の上迄が、歌人でも坐りさ

うに秩然と片附いてゐる。

白毛布を上敷にした綿天の褥に靜馬は撻乎と座して、物思はしげに巻莨を喫し始めたが、忽ち座右に積むである書物を突崩して、抽出した彪氏の外科通論を慌しく披いて、半頁ほども見ると、直に丁と伏せて、舊の所へ放り出す。

其莨を喫つてしまふと、茶を煮れて、茶を飲むでしまふと、机の上に頰杖を支いて、惘然考へてゐる。其考へてゐた間は、煙草を喫つて茶を煎れて二杯飲むだ時間の、凡二倍よりも長かつたが、やがて實用產科學の一冊を取出して四五頁讀むと、直に取替へたのが內科類症鑑別。それも氣が乘らぬか、吁と虹のやうな大息を吐いて、熊谷次郎に睨まれたるかの如く、仰向にどつさりと倒れる。

「寢やうか知らん。」と復た起上つたもの丶、其邊に書物の在るのを見れば、有繫に思切つて寢られもせぬかして、寒さうに懷手をしながら

貧乏頭をして、何を見るでも無く、恐い眼を爲てゐる。

間際に勉強するのは可かん！　先生も言つたし、實際また可くない。折角今まで記臆したのを無茶苦茶にして了まふ。三個月も勉強して、それで行かんければ到底行かんのだ。心の進まんのを無理にやつたところで實に成るもんでは無い。それよりは、今迄の疲勞休に精神を養つて、試驗に臨むで勇氣の出るやうにするのが肝腎だ。明日も最う書は見まい、朝から一つ保養に出掛けて、思ふさま一日遊んでやらう。先刻先生から五圓戴いたし、自分のが十圓許あるから、好きな眞似が出來る。吁、もうもう試驗の事は忘れやう。幾許思つたつて、奈何なるといふのぢや無し、詰らん事を考へて氣を傷めるのは馬鹿々々しい。一體なぜ我はかう氣が小さからう？　まるで女子だと、能く先生に言はれるけれど、自分ながら實に物事を苦勞に爲過ぎる。苦勞にしても、爲なくても、成る事は成るし、成らんことは成らんのだ。然う考へれば、苦勞にするのは詰らん。

忘れやう〳〵。明日はいよ〳〵一日出遊だ。今晩も寢るとせう。今晩早寢で明日は出遊か。結構な身分だ。靜馬は豁然と大悟して、俄に火鉢の火を埋ける、灯を消す、急いで夜具の中へ潜込む。

間も無く昇つて來たのは女房、思ひも寄らぬ眞の闇に吃驚して、

「呀、もう御寢！」と階子の口で立往生。靜馬は夜衣から顏を出して、

「今晩は早寢で、明日は出遊です。」

（十五）今日は出遊

日影は煦々と、輕暖い風が吹くでも無く、吹かぬでも無く、店前は衣香、傘影、車の轟、人の聲。是が或人の生死の界の前日、三月晦日の日和である。

否でも應でも今日は出遊と觀念して、焦茶の山高帽子に金縁の眼鏡、靜馬は凛と扮へて二階を下りると、

「あれ、まあ、眞箇にお出掛なさるの？」

と內君は夢かとばかり驚く。

「眞箇ですよ。これから一寸行つて來ます。」

「眞箇ですか。」と內君は彌よ呆れる。

「眞箇に！」と靜馬は屹と言ふ。

「然う？　可いんですか。明日ぢやありませんか、試驗は。」

「あゝもう試験の事は謂つて下さんな。否だ、否だ。」
と戰慄をして見せる。
「然う？　貴方さへ可ければ、それは保養してお出なさる方が可いけれど、眞箇に可いんですか。」
念を推れると、靜馬も內に疚しきところ無きにしもあらざれば、突立つたまゝ挨拶に窮つてゐる。
「貴方さへ可ければ行つてお出なさいな。」
靜馬は良久く考へてゐたが、
「行つて來ませう。」
「然う、行つてゐらしやるの？」　と內君は餘り氣の無い聲。之が爲に又迷はされて、自分ながら不安心の靜馬は、
「行つちや可けませんかね。」
と危さうに訊ねる。

「私には解りませんわね。」
「然ですね。それぢや一寸行つて來ませうか。」
「而して何方？　やつぱりお花見？」
「まあ、そんな積で淺草から向島の方でも浮浪々々。」
「然う、ぢや早くお歸んなさいよ。姨樣も大變心配してゐますから。」
姨樣と聞くと靜馬は忽ち悽然として、
「他が心配してゐるのに、氣樂らしく花見でも無い。止しませうか。」
「折角御靚裝が出來たのだから、一寸まあ行つてお出なさいな。隨分今迄勉强が過ぎましたからねえ。」
と內君も有繫に折れる。
「それぢや行つて來ませうか、思切つて。」
と話してゐると、亭主は店から聲を懸ける。
「いよ〳〵お出掛？」

「えゝ、まあ出掛けて見やうかと思ひます。」
「元日から稼いで大晦日には遊ぶのだ。可からう、まあ精々愉快を盡しておいでなさい。」
「おや味方が殖ゑて、貴方も氣丈夫だ。」と内君は笑ふ。
「姨樣が來ても、私が遊娛に出たことは秘しておいて下さいよ。」
「なぜ。可いぢやありませんか。」と内君は假意と言ふ。
「でも、餘り氣毒ですからさ。」
「私は言ひますよ、今朝女の所から手紙が來て、どうも一所にお花見にでも行つたらしいつて。」
「困りますよ、そんな事を。」
「これで何とも知れないのさ、急に思立つてお花見なんぞは。」
と亭主は挾擊にする。
何の彼のと弄られた揚句は、土產を買つて歸ることになつて、靜馬は後

髮を引かれながら出懸ける。

其留守に姨様が來て、凡そ二時間も、明日が苦勞になる話ばかりで待切つて、午砲前に歸る。内君は晝飯の後片附をして、裏へ水を汲みに出ると、靜馬は惘然露路を入つて來る。

見れば櫻餅の籃を提げるでも無く、思案投首憔悴して、算段が出來なかつたといふ恰好で、此處に内君の在るとも知らず、摩違ふと、

「おや、もうお歸り。」と聲を掛けられて、屹と顏を擧げて、

「歸つて來ました。」と本意無げに訴へる。

「大層お早いぢやありませんかね。花は如何でした。」

「詰りません！」と吐出すやうに言捨てゝ、匇々と木戸を入つてしまふ。内君は鳩に於る豆鐵砲の如く呆れて、釣瓶竿に手を掛けたまゝ、入りにけりを見送つてゐたが、やがて水を汲むで歸ると、はや靜馬は二階に引揚げた跡。旦那は待兼ねて、

「おい、二階の人は歸つて來たが、滅法早いぢやないか。」
「何だか、甚く鬱いでね。今井戸端で會つたら、詰らないつて。」
「其はどうで詰らなからうさ。けれども折角出懸たものだから、思入れ遊んで來れば可いのに。といつた所が病人に鰻飯を食へといふのは無理だ。」
「やつぱり其は試驗が胸に痞へてゐちやあ。」
「浮かないのよ。其理よ。然ゑたものよ。」
と旦那は獨りで呑込む。
店に客の來たのを機會に、内君は爰を捨てゝ二階を見舞ふと、唯の今花を看て歸つた人は、もう机に向つて書見をゑてゐる。座敷の眞中には、脱放した儘の曠衣が、聹耳の藥を生で見るやうに蹲つてゐれは、不體裁帶が蜷局を卷いてゐる内と外とに、埃塗れの高帽子と、藍に汚れた白足袋とが追放り出してある。内君は見るより駈寄つて、片端から始末をゑ

ながら、御膳は？　と聞けば、濟むだ。奢は何方と訊ねれば、苦笑。花は咲きましたかと問へば、うるさく人が出る。お歸宅か早過るぢやありませんかと謂へば、一向詰りません！　何と話しかけやうが、思はしい挨拶も爲ず、机の上に氣を奪られてゐるので、內君はこそ〳〵と下りてしまふ。

早三時が鳴る、四時を打つ。もう明日には僅十五時間、勉強も今日一日、之が名殘と、讀むでも讀むでも、丁數の進むばかりで、何が一つ記憶に留るでも無く、靜馬の心は妄想の爲に麻醉して、不思議の夢を見てゐる。夜に入るほど雜念は益す增長して、知らぬ間に、書物の上に紫の袱紗と紅摺の辻占が現はれて、折々は壁上の手紙に眼も動く。例刻と見えて、隣の二階では正信偈を唱へ始める。今宵限と姨樣も心を籠めての祈誓は、其聲に悲しく、節に哀に、何よりも殊勝さが身に浸みて、何事とも覺えず靜馬は頻に涙を誘はれる。

(十六) 御機嫌よう

折から戸を敲いて、頻に女の聲で訪ふのが、我の裏口のやうに聞えるのに、下では鎭りかへつてゐる。今から寢るといふことはあるまいに、我家では無いのか知らぬと、なほ耳を澄せば、益す敲いて益す訪ふ。其を又何家でも取合ぬので、(御免なさい)といふ聲は次第に泣出しさうになる。

忍びかねて、靜馬は裏窓の戸を竊と啓けて、聲のする方を覗すと、月影の朧ながら裏口に佇むは誰やら、呢と視てゐる窓に向つて、忽ち辭を懸ける。

「芳澤樣とおつしやる煙草屋樣は此方でございますか。」

其聲の艶は十七八とも想はれる。

「はい、手前でございますが……。」

と、直に内君を呼んだが、寝てか、留守か、返事が無い、門外には立つてゐる、靜馬は氣忙しく階子を下りれば、眞黑闇の臺所、蹴躓いたり、衝突つたり、がたぴし取急いで、木戸を啓けると、頭巾を冠つた女が從容に會釋をする。

「何方でございますか。」

と靜馬は何氣無く顏を出せば、女は一目見るより。

「あれ靜樣！」　と思はず寄添つて又退る。靜馬は荒膽を挫がれて胸は悸々、聲まで顫へて、

「誰？」　と頭巾の中を覗く。

「私！　綱ですよ。」

「綱だ！　え丶、綱？」

と靜馬はきよと〱女の顏を覗く。手早く頭巾を脫げば、島田が仇に少し亂れて、薄化粧の顏が櫻色に上氣してゐる。熟覗れば、なるほど在所

の許字！
「おゝお綱だ！」
「まあ御機嫌好う。」　と小腰を屈めて、羞含みながら木戸を入る。
「どうして來た。」
と尋ねれば默つて笑つてゐる。
「能く此家が知れたな。」「先刻から敲いてゐたぢやないか。」「今頃どうして來たのだ。」　など〻云ひ〳〵靜馬は戸締をして、二階へ伴れて昇る。
お綱は何と無く悒怩して、薄闇い處に居たがるのを、やう〳〵火鉢の前に坐らして、
「久しく見ない間にもう大人に成つて了まつた。何年だつけか、此前國へ行つたのは。」
靜馬も嬉しいは胸一杯、其中に三分五厘ばかり羞かしい所もあつて、顏

を見るやうな、見ぬやうな、變に紛らしながら切りに炭を加へる。

お綱は玻璃燈の火影を眩しさうに横を向いて、

「あれから五年になりますよ。」

「五年になる？　お前は幾歳になつたのだい。」

「あなたは二十六、ねえ。」　と一寸顏を見て笑ふ。

「お前の年齢さ。」

「私？　もうお婆樣。」

「國ぢやお婆樣が島田に結つて、白粉を傅けるのが行るのかい。」

「そんな事は行りは爲ませんけれど、今日は、あの………。」

と片腭を出して、

「止さう。」　と仇氣無く顏を掩す。

「何だよ、今日は何だと謂ふのに。」

とお綱の手頭を捉へると、銀の指環を嵌めてゐる。

「銀の指環はお三殿のやうで見とも無いよ。」

「どうせ私はお三殿、どうせ山路樣のお孃樣のやうには參りません。だから私は來るのは否だと謂つたのに、家父が是非行け〳〵つて。」

「何を謂つてるのだか、些とも判らないな。」

「私はちやんと判つてますから、可うございますよ。」

可愛い憎いと謂ふ眼で、お綱は可恐々々睨める。

「お前には判つても私には判らんもの。一體如何して來たのだよ。家父と一所かい。」

「否、私單身。あゝ、悉皆忘れてゐた。まあ眞箇にお目出度うございます。家父もね、大變喜んで、もう人の顏さへ見れば自慢をして、可笑いやう。」

とお綱は嬉々。全然事情の解らぬのは靜馬。

「何がお目出度いので、何を家父が喜ぶのさ。」

「あら、隠したつて可けませんよ。あんな眞面目な顔をして。ちやんと知つてゐますよ。」

「これは彌よ解らないな。眞箇に何だよ。」

「何でも可うございますから、さあ早く御盃を乞ませうよ。よう、靜樣。」

「御盃？」　と靜馬は不審の眉を顰める。

「御盃よ。あれ、もう此人は。御夫婦の御盃でさあね。」

と膝を搖つて悶かしがる。

「夫婦の盃？　それは及第えてからの事さ。」

「あれ、未だあんな事を言つて、幾許隠したつて私は知つてますよ。昨日立派に及第をなすつた癖に。免狀も最見ましたよ。だからお目出度うございます。」

と息も繼がずに驀しかける。靜馬は頭から袋を冠せられて、尻からは撲かれるやうな想ひで、

「何を言ふのだ！　明日からが試験なのだよ。」

「嘘、嘘。隠したつて可けませんよ。家父がね、ちやんと私に免状を見せて、今度は此通り立派に及第を爲たんだから、一日も早く東京へ行つてお盃を爲て來い。我も直後から行くからつて。だからお目出度うございます。だから、よう靜樣、お盃を爲て下さいつてば。」

膝は次第に進むで、いつか男にひつたりと寄添ふ途端、

「私と御盃をするのは否なの。」

「否な事は無いけれど、眞箇は明日からが試驗なのだから、及第さへ爲れば御盃をするのさ。一體如何間違つたのだらう？　及第爲たの、免狀を見たのと、此方は少しも覺が無い事だ。」

と靜馬はどうやら途方に暮れる。唯見ると、お綱は彼方を向いて、是見よがしに忍泣を爲てゐる。

「何を泣くのだよ。えゝ、お綱。」　と抱起せば、靠れかゝりながら顔

を背けて、
「私はもう歸ります。」と益す泣く。
「歸ることは無いけれど。」
「否、私は歸ります。」と羽織の袖をびり〳〵咬裂く。
「これさ、何を爲るのだよ。」と力一杯に抱窘めるほど、お綱は身を顫はして、
「どうせお否でせうから、私は歸ります。」
と云ふより早く振捥つて駈出す。靜馬は轉るやうに逐懸ける。階子の口で無圖と抱留める。袖で隱してゐる泣顏の中へ、頰を推込むやうに覗きながら、
「お綱、何だな、折角來て歸るなんて。こんな夜深に歸られるものか。」
「歸られなくつても私は歸ります。」とお綱は身を悶えながら、聲を立てゝ泣く。

「あれ、又泣く、窮るなあ。ぢや御盃でも何でも爲るよ。見とも無いやな、そんな大きな聲を出して。」

盃をするといふのに賺されて、お綱は不承々々に手を牽れて、坐に復つても、まだ歔欷。

「いつまでも泣いてゐるなら、御盃はお止だ。」

「あゝ、もう泣きませんよ。」と涙の眼元で忙しなく笑ふ。

「盃を爲るつたつて、酒も無ければ、道具も無し。」

「在りますよ。」とお綱は右の袂から、朱塗の盞臺に同塗の金蒔繪の三組盞、左から女蝶男蝶まで附けてある銀の銚子を取出せば、

「やあ揃つてる、揃つてる。」と靜馬は頭を掻いて呆れる。

「さあ御盃ですよ。」とお綱はそは／＼の大恐悦で、はや盞に手を掛ける。

「まア、待つた。いくら内祝言でも媒妁が無くちや。」

「媒妁、可いぢやありませんか、そんなもの。」
「媒妁をそんなものとは、暴いお嫁様だ。」
と言ふ聲の下、
「はい〳〵。御媒妁は是非私！」
と皺嗄聲を振立てゝ、階子を昇つて來る隣の姨様！　見慣れし縞の半纏に、變る姿の不思議にも、何處で工面を白襟や、昨日の婆も京染の、黑縮緬の紋服は、串下刻か六時過ぎて、宵の內なる媒妁に、備はる威儀は有繫にも、昔幽しく見えにけり。
「おや、姨様、好い所へ。それぢや早速お媒妁を願ひます。御挨拶は後にして、お綱、さあ御盞を。」
と夫婦は開直れば、今まで在りける姨様の姿は消えて、金色の光明赫奕たる阿彌陀佛が、銚子を御手にえて在しますので、靜馬は呀と驚くと、轉寢の夢は覺めて、折から隣の正信偈がぱつたり歇む。

やがて五月廿日の夕、吉事殆ど此夢の如く、今築地一丁目に正信醫院といふのが其である。

（二十七年八月）

紅葉全集巻之參終

遺弟　泉斜汀校

明治卅七年四月廿五日印刷
明治卅七年四月廿八日發行
明治卅八年二月再版發行
大正二年十月十版發行
大正七年四月十一版發行
大正九年一月十二版發行
大正十一年一月十三版發行
大正十三年十二月十四版發行
昭和二年三月二十日十五版發行

(紅葉全集第三卷)奥付

正價金四圓



著者　尾崎德太郎
東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

發行者　株式會社博文館
右代表者取締役社長　大橋勇吉
東京市小石川區戸崎町十三番地

印刷者　多木壽一
東京市小石川區戸崎町十三番地

印刷所　多木印刷所

十千萬堂藏版

發行所
東京市日本橋區本石町
振替口座東京二四〇番
株式會社博文館

齋藤綠雨遺著
（池田永治裝幀）

縮刷 綠雨全集

全一冊

三六判八百八十餘頁
著者小照コロタイプ挿入
布表紙木版刷函入美本

綠雨の作品は　その氣魄に於て明治文壇に獨歩の槪あり、炬眼克く世情の弊所を看破し、辛辣の警句、習俗を罵倒して餘すところなく、その文、或は勁銳利刄の如く、或は澄透秋月の如く、或は華麗萬朶の花の如く、行くとして可ならざるはなし

今氏が晩年會心の作を選みて、こゝに縮刷綠雨全集を發行す。切に江湖の愛讀を賜はらむことを…………

正價金貳圓五拾錢……郵稅十八錢

尾崎紅葉著

紅葉全集

全六册菊判洋裝
天金函入美本

麗、春日の如く。清、秋月の如きもの吾紅葉山人の文章なり、山人一生を文章に托し奇思縱横字々鏗快を極めざるなし。曾つて文壇革新の急先鋒となりし硯友社を創め俊群英を養うて藻社の名一世を壓す。山人が明治文壇に寄與するの勞天下の齊しく知る所にして仰いで以つて泰斗となすは之が爲めなり。今や山人逝いて文壇頓に寂々たり山人の逝くや命なり、而して山人の精神は萬古常に新なり。

蓋し山人の文章の如きは傳へて以つて後代に貽し長く河嶽に藏すべし則ち親朋同人相謀りて十千萬堂を勞み凡そ山人が述作に係るものは其長を短を問はず悉く之を網羅して完璧と爲し、名けて紅葉全集といふ。思ふに七寶の散りて點綴せるは聯れて一環と爲すの美に若かず全集分ちて六、其の作年の順を逐うて之を次め編みて江湖の文を愛し才を憐むの淑女紳士諸君に薦む。

（一巻）色懺悔、戀の蛻、猿枕、風雅娘、此ぬし、新桃花扇、拈華微笑、新色懺悔、文ながし、巴波川、夏痩、二人むく助、二人女房、南無阿彌陀佛、關東五郎、わかれ蚊帳、命の安賣

（二巻）伽羅枕、紙きぬた、おぼろ舟
夏小袖、むき玉子、戀の病

（三巻）三人妻、袖時雨、侠黒兒
心の闇、男ごころ、紫

（四巻）隣の女、三箇條、青葡萄
不言不語、冷熱、八重襷
鷹料理、浮木丸

（五巻）多情多恨、寒牡丹
安知歇貌林、千箱の玉章

（六巻）金色夜叉（前編）、金色夜叉（中編）
金色夜叉（後編）、續金色夜叉
續々金色夜叉、新續金色夜叉
煙霞療養、紅葉山人傳
紅葉著作年表、

正價各金四圓……郵税各十八錢

1810